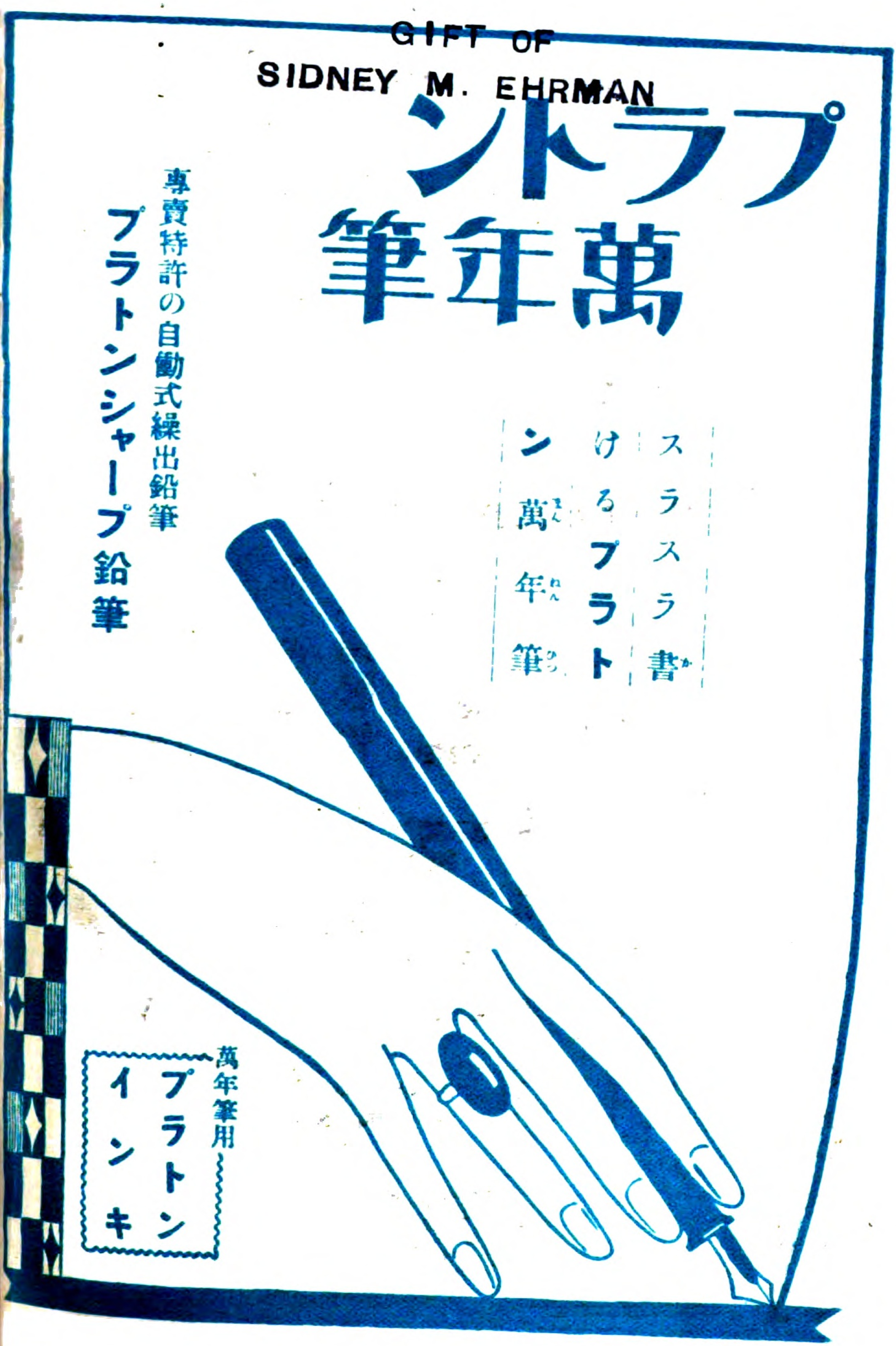
KAIZO

改造

秋季特別號

1925


プラトン
萬年筆
スラスラ書ける
プラトン萬年筆
専賣特許の自動式繰出鉛筆
プラトンシャープ鉛筆
萬年筆用
プラトンインキ

ハーデー原著

新刊

定價參圓十錢

◇松江高等學校教授 高橋敬視著◇（古代より現代まで盡く叙述す）

新刊發賣

西洋哲學史講義

哲學を知るには是非とも哲學史を讀まなければならぬ最新刊で而も內容の簡潔平明なる本書は初學者に好適の入門書である。

本書は古代哲學から最近の新カント學派プラグマチズム新實在論に至る迄組織的に叙述したものである邦語で書かれた西洋哲學史も已に數種あるがその中難解の難を聞かないものは殆どない。本書の著者は玆に見る所あり簡潔平明を旨として初學の人にも容易に了解が出來る樣に書いたのが本書である一體哲學を知るには是非哲學史を讀まなければならない如何なる哲學說でもそれのみ單獨に讀んで了解が出來るものではない讀者は幸に本書による時には容易に一切の思想の源泉を汲み取ることが出來るであらう。

菊判最上製美本 全壹冊五百餘頁

正價金參圓八拾錢 送料十八錢

忽三版

現代文學新選

（石川誠彌）

四六判上製美本 千二百頁箱入 金四圓八拾錢 送料金十八錢

本書は現文壇の中心作家芥川龍之介：有島武郎：江口渙：菊池寛：北原白秋：久米正雄：厨川白村：倉田百三：相馬御風：佐藤春夫：志賀直哉：島崎藤村：田山花袋：中村吉藏：長與善郎：武者小路實篤：吉田絃二郎：若山牧水等十八氏の代表的作品長短篇約七十篇を收め頭註を施し各篇毎に鑑賞的な著者獨特の批評を加へ猶作家の閲歷作風を叙述せるものである現文壇の大勢を知るに最も要を得たる絶好の新著なり文檢受驗者高等學校入學志望者中學上級生必讀の良書なり。

和歌俳句自習讀本

（森山右一著）

四六判最上製 金貳圓 送料金十二錢

和歌俳句入門 唯一の手引書

本書は「和歌が作つてみたい」「俳句はどうしたら作れるだらうか」「和歌俳句を研究して」と望む人々の爲に親切な入門書として生れしものである特色とする所は「作り方」の爲に例歌例句を多く挿入した事と「解釋」の篇で新しい歌句數百首を選載せる事である行文平淡にして水の如く一讀の初學者には無二の指導たるべくすでに入れる人には必ずや有益な參考書たるべし。

東京市神田區表神保町七番地 大同館發行 振替貯金口座東京八七貳番

永年難治の習慣も忽ち改まる

簡易な禁煙方法

驚くべき『カロット』の効力

三月五日の讀賣新聞はポー型の天才富ノ澤麟太郎氏の死を報じてゐるが、その後に『彼の生命を奪つたものはバットではないかと思はれる。彼は一日に十三箱も吸つてゐたからだ』とある。バットの十三箱とは聞くだに物凄い。兎に角煙草の害は過度に用ふるに依つて起ることは事實だが、吸つてゐる中に段々多量に吸ふ様になるので不知不識の間に身體を惡くしてゆくものである。

煙草を止めると云ふ言葉はよく聞くが、絶對に禁煙したと云ふ人は餘り多くない。それは如何に禁煙が困難であるかを物語つてゐるもので永年の習慣は容易に改まるものではない。

所が茲に面白い一つの禁煙方法がある。『カロット』を口にすれば煙草を用ふるに少しも異ならないから手持無沙汰でないばかりでなく、適量の朝鮮人蔘の精氣を含んで居るから、根氣をよくすると同時に溫雅な香氣と忘れ難き精涼な甘味は輕い刺戟と快感を長く口中に殘して之れを口にすれば煙草に對する永年の嗜好を忘れて煙草を吸ふ氣にはなれない。殊に口中の惡臭又は食後や夜中に口の中がねばる時に用ゆれば忽ち爽快になり、暫く常用すれば永年のニコチン中毒も完治する效力がある。但しこれは眞劍に煙草をやめようとする人でなければお勸め出來ない何故なら、再び煙草がまづくて吸ふ氣になれないからである。これは實業之日本社あたりでも實驗してこの效力に驚いてゐるのでもわかる。煙草の害を知りつゝ永年禁煙出來なかつた人、神經衰弱、慢性胃腸病、消化不良その他禁煙したら屹度治り肥つて來ると感じてゐる方は是非之のカロットを試みられるが良い。大倉男爵と大阪朝日の村山社長との禁煙の約束なども面白い一例である。

カロット（凡百日分）

金貳圓五十錢（ベークライト製パイプ付）

金參圓五十錢（サック入象牙製パイプ付）

（送料内地十八錢 臺朝樺四十五錢
代金引換内地卅錢 臺朝樺五十五錢）

發賣元 東京大森不入斗四五一 榮川堂

代理店 東京市京橋區瀧山町十三 天下堂

經濟學博士　永井亨著　（最新刊）

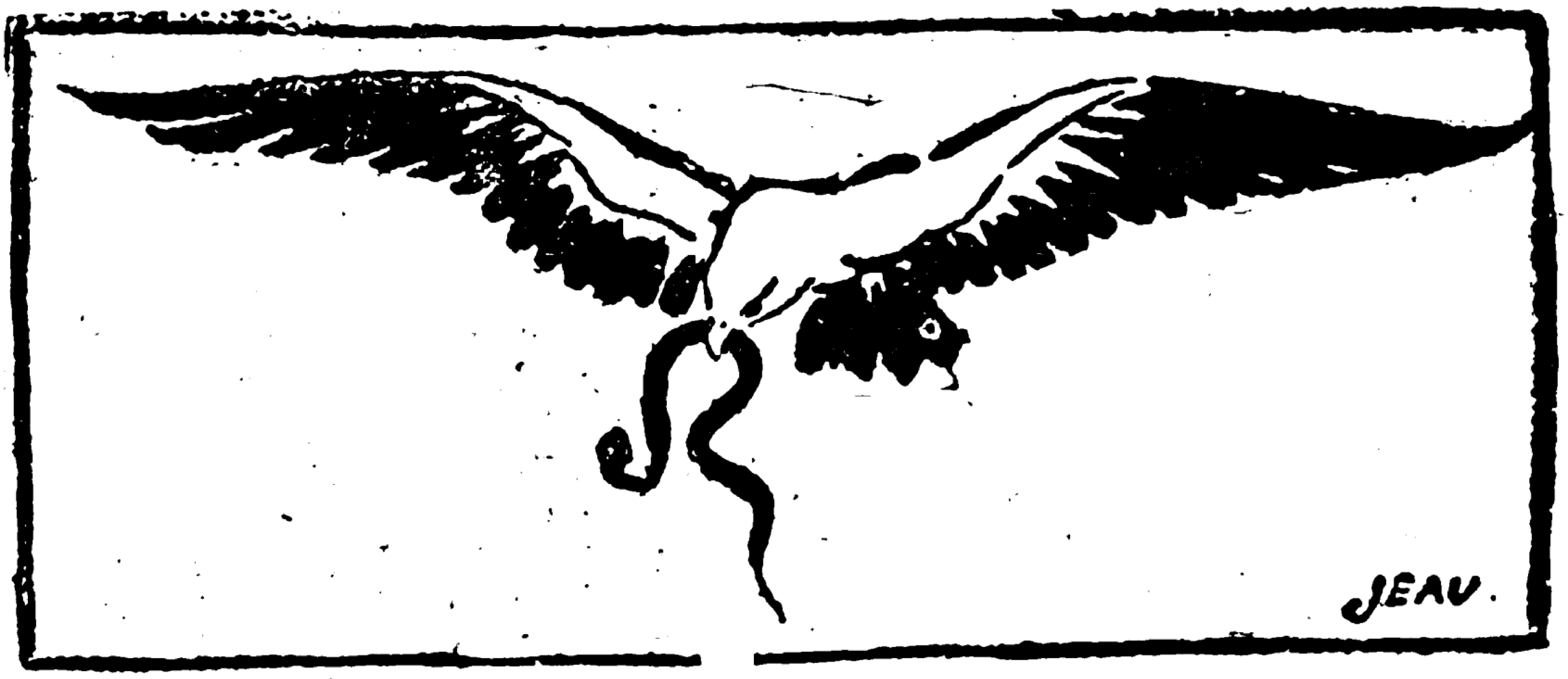
婦人問題研究

菊判五五六頁
總布表裝函入
定價參圓貳拾錢
送料書留廿七錢

從來婦人問題に關する內外の文獻枚擧に遑ないが、その多くは問題の一局部を捉へて一方面の觀察に偏し、婦人問題の眞相を詳かにするもの甚だ稀である。著者こゝに鑑みて婦人の社會的地位に史的考察を與へ、女性の性的特徵に科學的研究を試み、新舊婦人論にその思想的背景を尋ね、一般婦人問題に社會的批判を下したもの卽ち本書である。その間自ら社會思想乃至社會問題に關する著者最近の研究は書中到るところに發表されてある。若し夫れこの種の婦人問題研究が現代各國を通じて類例なかるべきものであることは一度本書を繙くものゝ何人も首肯する所であらう。

目次

發兌　東京神田南神保町　岩波書店　振替東京二六二四〇　電話四谷五八七〇番



（九月號）

裁判と階級闘爭

我々は決して裁判の神聖と公正とを疑ふものではない。しかし裁判官もただの人である以上、刑の適用に錯誤があり、片執があるのは免れないことである。我々は決して判官が神の如く正しく確かであらうことは期待せない、そして要求もせないが、ただ思想上の見解を異にするによりて片執となることのみが深い恐れを懐かせる。

殊にそれが古陋なる帝國主義より民衆政治に轉換するのとき、社會主義的國家が隣邦に儼乎たる勢威を振ふのとき、そこにいろ〳〵の社會的闘爭が必然的に生ずる。我國でも近來は社會主義者と軍國主義者との間に激甚なる反目闘爭を見つつある。殊にそれが大學内に於てさへ著しく分野を劃明して來たことはいかに思想的暗闘の劇甚なるかを證明している。

かかる時代に裁判官が不知不知、時の勢ひに彈壓され、政權をもてる政府の思想に思惑するのは自然の行き方である。——意氣地ないことと思ふが——我々は現時の裁判官の剛毅不屈を或點まで信ずる。しかし裁判官が一般官僚の如く頑冥なる帝國主義者の多いことを聞き及ぶごとに我々は暗然たらざるを得ない。果してそうであるならばその裁判も左翼の闘士には同情がなく、右翼の人々には好意がもてる筈だ。そうした傳統的な先入主を有ちながら裁判に携はることが、どれほど法の威信と、國家の權威を失墜するかに氣づいて貰ひたい。

我々は社會主義者の犯罪と、反動主義者との犯罪が均しく國法を紊るものであ

ることを痛言する。そして國法を犯し、國家の威信を損傷する點に於て輕重なきを知る、それから此等の斷罪は正確に、輕重なく行はれなくてはならぬものと信ずる。世の一面に尚ほ斷罪が適當に行はるることを信ぜぬものがあるならばそれは非常に悲しむべきことで、爲政者も國民も大に注意すべき緊急事だ。法は全國民の信頼によつてその威信が保たれ、法の威信によつて國内の安寧が保維さるるのであるから、背法者の處罰に差等あるべきものではない。軍國主義者も、無政府主義者も、共産主義者も均しく貴重なる國家の一分子であり、同じく國家の負擔に任じそして我國法が均しく生命財産を保障している人々だ。その人々の罪科を政策の御都合で甲乙と差等して處斷するは憲法違反であり、國法蹂躙であり、陛下の赤子に對する反逆である。

　我々は國粹主義者の内閣が出來してもそれは止むを得ぬものと思つている、そして反動思想の領袖が時の法相となつても、國家の權威の前には社會主義者と國粹主義者との裁斷に差等を附すべきものでは斷じてない。それ丈けの氣魄は判官にあつて欲しい。——だが一面に——地位ある人の娘が墮胎すれば執行猶豫、高官のもので詐欺を働いても退官によりて一切を解決し、國粹主義者の殺人罪と、社會主義者の殺人罪とを比較して——といふやうな思想をかりにも或る人々が懐くとしたら國法の威信はどうして保たれる。

　現代の社會運動に携はる人々も、反動團體に加盟する人々も、その心情にして純眞であるかぎり、これ等の人々はよりよき社會に進め、よりよき國家を求めているのであつて見れば、均しく善良なる社會人であり、忠直なる國家人である。それを時の政府の把持信奉する傾向思想により、或は時の司直の傳統的思想によりて處斷したならば必ず一面には怨嗟の聲が擧つていることを思はねばならぬ。無産階級政黨の組織を見んとする今日、我國にも階級的闘爭が劇甚を加ふることは火を観るより明瞭である。かかる險惡な兆候を展望しながら司法官の頭腦にして依然硬化を繼續するならば、そこに恐ろしき階級闘爭を激成するだろうことが思はれる。重ねて云ふが、我々は裁判官にまつはるいろ〳〵の批評は信ずるものではないが、左翼と右翼との思想的闘爭は一日は一日と劇しくなろうと思ふとき司直の責任が一層重大であることを考へさせられる。ささやかなる想片だがこの事は我々が尤も關心するところだ。



社會科學の階級性

森戸辰男

一

最近米國で全土を騷がせた珍らしい裁判事件があつた。

新聞紙の記述によると、話はかうだ。米國のテネシイ州のデイトンといふ小村に於けるハイ・スクールの博物學の先生のジョン・スコープスなる人が、學校で生徒に進化論の話を聞かせたといふかどで、告訴され、罰金百弗に處せられた。それは、同州の法律が、公立學校で進化論を敎へることを禁止してゐるからである。

件の先生はもちろんこの判決に承服せず、控訴を提起して、進化論禁止法反對のキャムペインを始めた。すると忽ち全國的の注意を呼び、新聞雜誌はもちろん政界、宗教界、敎育界に議論が沸騰し、全米の進化論がどしどし押寄せて、此の一寒村は旅舍の不足をさへ感じたといふ有樣であつた。さうして、州法擁護の側には過日病沒した前國務卿で、大

のファダメンタリストであるブライヤン氏が起ち、進化論辯護の側には同じく前國務卿たるコルビイ氏が出るといふ具合で、それは大變な人氣を湧き立たせたものだといふ。進化論が、人間と猿との關係であるところから、世人は之を『猿裁判』と呼んでゐるとか。

新聞紙は更に書いてゐる。「我々日本人は今時進化論が學校の問題になるのはおかしいと思ふであらうが、驚くべし、米國ではさうでない。進化論は斷じて學校では敎へてはならぬ、進化論を信ずる先生は斷じて傭つてはならぬ、といふ法律を有する州にはオクラマホ、テンネシイ、フロリダ、ケンタッキイがあり、又さういふ法律を州議會に持出さうとしてゐる州には、ミスシツピイ、イリノイス其他の十州がある。中には、圖書館に進化論の書があるといふ理由で、圖書館維持費を公費から削除せよと提案した議員さへある」云々（大每七月廿三、五日）

『猿裁判』といふ示唆的な名前が此の事件に適切な批評を下してゐるやうに、今日學界の公理定說ともなつてゐると考へられる生物進化の學說の普及を、法律の力で禁厭し去らうとするのは、寔に滑稽な沙汰だ。殊に、それが大平洋の彼方において、主としてキリスト敎のドグマと生物進化論との角力であつて見れば、我國の支配階級者は、茶番狂言にでも對するやうな、氣輕な冷笑を以つて此の全事件を眺め得るであらう。併し、此の猿裁判に似た深刻な滑稽が、太平洋の此方において、果して公演されないと何人が斷言し得るであらうか。

二

人類はどうして出來たか。創世紀が物語るやうに、エホバの神が、萬物の靈長として特別に創造したものであるか。それとも微生物から長い〳〵道程を經て今日の狀態に辿りついたものであるか。此の問題は、前世紀の後半、生物進化

論の提唱によつて、既に解決されたのである。もちろん、それはラマルク、ダアインを始め諸多の卓拔なる學者たちの眞摯なる研究と權力並に輿論に對する不撓の鬪爭との結果ではあつたが。今日と雖も、生物進化の行はれる機構については、未だ決して學說の一致があるわけではない。が、生物進化の事實については、最早、それは動かし難き學界の定說となつてゐると考へて差支へない。

生物進化の問題と列んで、前世紀が吾々に屬した他の一つの重要問題がある。それは社會進化の問題であり、さうしてそれは實質的には、現代社會、即ち資本主義社會の運命に係つてゐる。併し、この場合には、生物進化の場合とは少しく趣が違ふ。といのが、生物進化の場合には、進化の機構によりも進化の事實に、先づ學問的論證の社會的意義の重點が置かれてゐた。然るに、歷史學と人類學とが相當な進步を遂げた時代においては、何人と雖も社會進化の事實を否認することはできない。從つて、此の領域にあつては、學問的興味の重點をなすものは社會進化の事實ではなくて、社會進化の法則である。人類社會は如何なる法則に從つて進化し來つたか、さうして此の進化の法則の作用の下に、現代社會はどう變つて行かうとするか。社會科學の使命は此の問題の本質を把握し、之に適正なる答解を與へることに存する。

安定を毀うた現代社會は懊惱し狂亂してゐる。それは一體、どこにどう落ち着かうとしてゐるのか。吾々は此の人生の謎の解を社會進化の法則に求める。かくて、社會科學は、思考する現代人の中心的興味となりつつある。そして、それは特に知識慾の旺盛なる青年において著しい。專心學修に身を委ねる幸福を持ち得た若き學徒の注意が此の方向に力强く、求引されるのは、むしろ當然だ。それは次代が現代よりも一步を前に踏み出さうとする證據でさへある。私は近時學生の間に社會科學研究の興味が漸次旺盛になり來つたことを事物自然の成功と見るのみならず、更に、大に慶賀す

べきことであると信じてゐる。

然るに、我が文政當局は、無法にも、此の時代の趨勢であり、健全なる社會の徴候とも見らるべきであるところの、高等學校及專門學校における社會科學研究會の解散を斷行し、諸大學の同じ運動に直接間接の彈壓を加へ、更に彼等の聯合體たる『社會科學聯盟』の解散を計畫しつゝあるとさへ傳へられてゐる。大平洋の彼方の共和國は、時代遲れの法律によつて、生物進化の眞の法則を、來るべき世代に匿し、迷信の催眠—資本家社會の時代遲れの安全瓣——を妨げざらんとして、資本家新聞さへもの憫笑を買ひつゝあるが、大平洋の此方の帝國は、社會進化の眞の法則の研究を若き學徒に拒むことによつて、支配階級の獨裁的勢力を傷けさらんことに汲々としてゐる。『猿裁判』は海の彼方の茶番だけではない。形こそ違へ、海の此方においても、否、階級社會の到る處に繰返される深刻な意義を持つた人類文化史上の喜悲劇である。

三

學生の社會科學運動は何故に彈壓されなければならないか。これは一應不可解のことのやうでもある。殊に、それが教育の振興學術の進歩を大聲疾呼し來つた我が文政當局者の手によつて企てられたとすれば。

我國の爲政者は從來、教育に對しては相當の注意を拂うて來た。もちろん、軍備や殖産のことに比べては、とても問題にならぬが、その貧乏世帶の割合には、ともかく、教育の振興が努められたと考へられる。例へば、私は曾て、我が文政當局の或者が、我が國民教育の完備を誇示して、世界有數のものであると言うてゐるのを聞いたことがある。實際さうであるかも知れぬ。併し、我國の此の教育振興は、飽くまで外見上のことで、内容的には、斷じて左樣に口はばつ

たいことの云へるものではない。早い話が、私は我國の學校教育の現狀に關して、二つの重大な欠陥を指摘し得ると思ふ。

その一つは、我國在來の教育方針の根本的性質であるところの詰込み主義である。吾々の親しき經驗によれば、學校教育の眼目は、學生生徒の受容能力とは沒交渉に、將來生活の諸多の方面において必要であらうと想像される知識を、あれもこれもと、滅多やたらに揺すぶりこむことであるかに思はれる。それは教育上の溫情主義であり善政主義である。疑もなくそれは考へさせる教育ではなくて、覺えさせる教育だ、學問に對する興味を養ふ教育ではなくて、學問を倦惡させる教育だ、進歩的教育ではなくて、保守的教育だ、換言すれば、柔かな頭腦に、その消化力を超えて過去の經驗事實の大量を無批判に詰込むことだ。かくては、教へられる者は、教へる者以上に出ることはむづかしい。それは、此の盲的教育の石化が學生間に自助的反抗運動を喚起しない限り、必然に社會の固定、進歩の停頓を意味せざるを得ないであらう。

之に反して、眞の教育は進歩でなければならぬ。既に過ぎ去つたもの、又は方に過ぎ去らうとするもののためにするのではなく、將に來らんとするものに備へるものでなければならぬ。教育の使命はヨリよい次の世代を育て上げることにある。さうして、それがためには、――知的方面に關聯して言へば、――學生に對して、研究方法、即ちものの考へ方を教へると共に、學問研究に對する興味を養うて行くことを努めなければならぬ。かやうにしてこそ、學生は自ら獨立に考へる習慣が出來て、歷史的制約がその教師たちに入ることを許さなかつた學問上の新天地に突き進むことができるのだ。過去の記錄の無批判な注入とこれによる自發的攻學心の扼殺とは、正にその正反對である。

しかしながら、幸にも最近の教育界は漸く在來の教育方針に就いてその反省を深くするに至つた。さうして、覺えさ

せる教育でなくて考へさせる教育が、外的威力による教育ではなくて、內的發意による教育が、過去のための教育ではなくて未來のための教育が、重要視されようとする機運に際會しつゝある。と同時に、學生の試驗勉强や教授の講義よりも、――ラッセルは、今日の大學の講義は印刷機發明以前の、知識傳達の原始的方法だ、とどこかに書いてゐる――學生の自發的研究とその好學心の涵養とが重きを置かれるに至つたのである。

次に、私の指摘したいと思ふ我國の學校教育の欠陷は、社會科學の輕視若しくは無視である。云ふまでもなく、從來とても、高等學校や專門學校は勿論、中學校にも法制經濟の科目はあつた。併しそれは全然申譯け的の附加物で、學校側からも生徒側からも、決して重要視されはしなかつた。國民の大多數にとつて現在の社會科學的の知識が如何に不十分なものであるかは、政府自身が脈々ながらも、之を承認せざるを得なかつたことによつて明かに證明せられる。それはほかでもない。普選案の通過とともに、我が當路者はあはただしくも所謂公民教課や成人教育を熱心に提唱するやうになつた。この事實は、在來の社會科學的教育が、普選の實行にさへもなほかつ不十分なものであつたことを政府自ら承認してゐるものと解釋するほかないであらう。さうして政府は例の如く速成の官製社會學的知識の廉賣を行うて、此の急場を切り拔けやうとあせつてゐるのである。

四

ところが、ここに吾々の問題としてゐる學生の社會科學運動は最もよく上記の我國教育の欠陷を補正するものであると考へられる。

第一に、社會科學運動は學生間において稀に見られる學的知識に對する興味と自治的研究に對する熱意との表章であ

る。學的眞理に對する追求が、此の如き大規模な學生の組織的運動に導いたことは、我國においては曾て前例のないことだ。由來、學生といふものは、試驗のためでなければ、さうしてその結果たる點數のためでなければ、勉强せぬものだと保守的教育家によつて思ひ込まれ來てゐた。そして我國の學制は大體此の保守的教育家の思想を土臺としてその上に打ち建てられてゐるのだ。然るに、此處では、數多の學生は試驗や點數とは無關係に、否、屢々色々な威嚇や實害をも冒して、純眞なる動機から、眞理の探求に向つて驀進しつつあるのだ。しかも、彼等の多くは、學校當局からこれといふ好意や援助を受け得ないのはもちろん、却つて惡意を以て遇せられ、彈壓を以て對せられてゐるのだ。それにも拘らず、彼等は學的眞理のために雄々しくもその鬪爭を續けつつある。數多の迫害と困難とを蔑視して、益々繁昌しつつある學生間における自立的研究心の此の如き組織的表示は、學生を以て試驗奴隸の如く考へる保守的教育家にとつては、或は『不穩當』な行動であるかも知れないけれども、少くも目醒めたる教育家を以て自ら信ずる者にとつては、双手を擧げて歡迎さるべき筈のものだ。何となれば、それは漸くその欠陷が顯著になり來つた我國教育の保守的詰込主義に對する正當なる反抗であり、匡正であるのだから。

次に、此の學生間における研究心の組織的發現は、我國教育制度の他の大欠陷であるところの社會科學においてである。即ち、普選の實行に伴うて官邊其他の方面において泥縄的に提唱されるに至つたところの所謂公民教課、成人教育政治的知識普及の諸施設に先立つて、夙に學生たちは、彼等の自助的組織によつて我國教育のこの第二の欠陷をも補正し來つてゐるのである。

すなはち、學生の社會科學運動は我國の識者が、文政當局さへもが、漸く明瞭に又は漠然と、その欠陷に氣づき、漸次の矯正に向つて努力し始めたところの我國學校教育の二大欠陷を補完するところの學生の自主的自動組織だ。從つ

て、ものごとの普通の考へ方に随へば、彼等はさしづめ模範團體模範學生として當局によつて表彰さるべき筋合のものだ。ところが、どうしたことの間違か、我國の文政當局は社會科學の領域における學生たちの自發的研究心の組織的表現であるところの社會科學運動に對して、啻に好意的中立の態度を持し得ないのみならず、却つて、警察官權や憲兵隊と呼應して彼等に斷乎たる彈壓と迫害とを與へようとしてゐる。この外見上の不條理は何に原因してゐるか。吾々は進んでこの問題を考へて見なければならぬ。

五

學生の社會學的研究組織は何故に禁止若しくは壓迫されなければならないか。私の推側するところによれば、公然聲明され又は隱然腹に持たれてゐる反對理由が大體三通りあるやうに考へられる。その一は研究者の資格に關するものであり、その二は研究の方法組織に關するものであり、その三は、研究の結果に關するものである。

先づ第一の點に關して、岡田文相の言として新聞紙に傳へられてゐるところによれば「高等學校の學生はまだ學問も人物も完成の域に達してゐるとは言へない、これから哲學・經濟學・社會學等の學問の基礎となるべき學科を學ばうとする若人であるのに、その根本を顧みず直接六ケ敷い社會問題を研究するのは有害無益である。」併し、若し一般的に、世界に有數な我國の國民教育と更に中等教育とを終り、激烈なる競爭試驗によつて選拔された後、現に高等學校に籍を置く學生が、彼等の社會問題の研究が「有害無益」であるほど、社會科學研究の資格を欠いてゐるといふのは、文政當局の口からとしては頗るおかしな言草である。社會科學は屢々識者から無學無教育を以て輕侮されつゝある無產勞働民衆によつてさへも、熱心に討究され、美事に理解されつゝある。然るに、世界に有數な我國の普通・中等の教育課程を終

了した者が、夫の「無學者」によつてさへ益々廣く愈々深く理解されようとしてゐる社會科學の研究に未成熟であるとすれば、それは我國教育上の由々しき問題でなければならぬ。果してそれが事實であるとすれば、糺彈を受くべきものは、學生の社會科學運動ではなくて、我が文政の當局者でなければならぬ。

併し、それは幸にも杞憂である。家鴨の雛を孵化した牝雞の心配である。家鴨の雛は、牝雞のけたたましい悲鳴を聞き流して、悠々流の彼方へと泳ぎ去るのだ。我國の誤つた教育は、幸にも、未だ全く學生の研究心を壓殺し盡しはしなかつた。彼等學生の或者は、社會科學の研究において、先輩を驚歎せしめるやうな業績をさへ擧げつゝある。教育者たちは、若し彼等が支配階級に奉仕する調馬師でなく、眞實の教育者であるならば、彼等が育て上げた雛鳥の中に、彼等の制約を突破して、自由社會への水路を泳ぎ抜けることのできるものゝ存在することを悲歎するどころか、却つて之を慶賀すべき筈ではないか。

六

社會科學運動に對する第二の批難は、その研究の方法組織に關聯してゐる。

屢々吾々の耳にするところは、彼等學生の研究が餘りにラディカルであるといふことだ。がしかし、研究はラディカルであつてこそ、始めて學問的研究と呼ばれ得るのである。根本的でない研究は、それが何人によつてなされ、如何なる權威によつて提唱されやうと、それは斷じて學問の名に値しないものだ。私は一つの寓話を想ひ起す。或人が神の存在を說き聞かせようと思ふて次のやうに小兒に話した。家には之を建てた建築師がある、丁度そのやうにこの宇宙には之を造つた神樣がある筈だ、と。ところが無邪氣な小兒はすぐさまその先生に問ひ反した、「では、その神樣は誰が造つた

のですか」と。此の神様のところで行き詰らない根本的追求が眞の學問的精神である。威力の壓迫や、利益の誘惑や、情實の羈絆やのやうな一切の外的干渉を排して、研究其者の性質上認られなければならぬ前提の限界點まで、ヒシヒシの論理のメスを押し進めて行く處に、眞の學問的研究の要諦が存してゐる。研究は飽くまでラディカルでなければならぬ。支配階級の利益をその限界としてはならない。吾々は、かの寓話の無邪氣の小供のやうに、論理の中斷によつて神様の存在を論證しようとする先生がたの意向を思惑せずに、率直に、無遠慮に、論理的思索をつき進めて行くべきだ。これは學問研究に關する黃金律である。

研究のやり方については更に吾々の了解に苦しむことが言はれてゐる。新聞の報道によると、岡田文相は社會科學運動に關して次の如く言うてゐる。これらの學生のやることが「研究だけならまだよいが、…團體組織でやるのはよろしくない。聞けば之公園附近に全國學生社會科學聯盟なる本部を置き其處から各大學や高等學校へ通信を發し聯絡を取つてゐるといふが、之は明かに社會運動であつて研究を超越してゐる」と。なほ、二三高等學校長の言として世間に傳へられてゐるところによるも、社會科學の個人的研究を禁遏するわけではないが、團體的研究は之を許さぬといふことであるらしい。これらの意向を考へて見ると、社會科學は之を組織的團體的に研究することによつて危險化するが如くである。

しかし、團體教育、團體研究の方針の下に教育全般を施設してゐる我が文政の當局者から團體教育の危險を聞かされるのは、吾々にとつて此上もない皮肉である。ことに今日行はれてゐるやうな大量生産的な團體教育、教師が獨り専權者の如く自由勝手に振舞うて、學生たちが一群の土偶の如く默々として之を傍觀してゐる團體教育には、多大の危險が存してゐる。それは眞實の團體教育でもなければ、共同研究でもあり得ない。從つて、斯樣な團體教育が各方面から

その改革を要望せられつつあるのはさもあるべきことだ。ところで、この團體教育の欠陥を矯正すべく試みられた各種の企圖中、その最も拙劣なるものが、軍事當局によつて押賣せられた軍事教育施設であるに對し、その最も適切なるものが、學生の自發的要求から生れた社會科學運動である。何となれば、眞實の團體教育、共同研究は、凡ての參加者の積極的協働によつて、教育上、研究上の目的を達成しようと試みることだ。これが最も進歩した教育方法であり又研究方法であるのだ。さうしてそれはまた社會科學研究會の採擇しつつある研究のやり方にほかならぬ。故に、社會科學研究會は、その研究のやり方についても、最も進歩的なものとして賞讃にこそ値すれ、決して批難さるべき何物をも持たないのである。

特に、各高等學校各大學の研究會が聯盟を組織して本部を設け、其處から各學校の研究會へ「通信を發し聯絡を取つてゐる」が故に、「之は明かに社會運動であつて研究を超越してゐる」となすが如きは愚にもつかぬ言ひがかりである。通信や聯絡やがそれ自身研究でないことは云ふまでもないことだ。が同時に、それが多少でも廣い範圍に存してゐる研究團體の存立上に不可欠な要件であることも明瞭である。この「通信」と「聯絡」とによつて、それが「研究を超越した「社會運動」となるとは、またしても珍妙な論理である。東京でも京都でもの綜合大學には本部なるものがある、さうして此の本部が常に各學部と通信し聯絡を採つてゐることは周知の事實だ。ところで、この通信と聯絡とのために、政府の公認する研究團體である各綜合大學は研究を超越した社會運動をなすものとなるとでもいふのであるか。此の論理を推して行けば、我國に存在する大小の學會にして社會運動をやらぬものは殆んどないことになつて了ふであらう。

しかし、私は文相の發明にかかる研究プラス聯盟イクオール社會運動の公式を固執するつもりはない。恐らく、「社會運動」なる語によつては、前者と違つた或者が意味されてゐるかも知れない。併し、嘗て市電從業員の同盟罷業に際し

て某學校の當局者と學生が學業を廢してまでこのプロレタリアの生活鬪爭に對して組織的罷工破りの役割を演じて、識者の痛烈なる批評を受けたことがあつたが、その時、文部當局は初めに之を默認した。それが反動側である限り、學生の階級鬪爭への直接參加をも明かに承認し來つたところの文政當局は果して、大なる自家撞着に陷ることなしに、社會科學研究會の「社會運動」を彈壓を行ひ得るであらうか。

七

社會科學研究會は、その研究者の資格から見ても、その研究のやり方から見ても、現代の教育上、學問上の立場に立つ限り、特に之を不可とする何等の理由をも見出さない。しかもこれが彈壓を受けなければならぬのは何が故であるか。學生は決して社會科學研究の無資格者ではない、彼等の研究の方法組織が眞理を獲得するに不適當なものであるのでもない。併し、此の如き研究の結果到達される社會科學的眞理に可能的な危險が含まれてゐるかも知れない、それがよくないのだ、と反對者たちは考へる。—これが第三の點である——さうして恐らく社會科學運動の反對者はその腹のドン底でもこのことを憂ひてゐるのではなからうか。

若し、社會科學上の眞理が可能的危險を含んでゐるとすれば、その研究者が社會的僻見で固められてゐない純眞なる學問愛好者であればあるだけ、研究のやり方が舊套を脱した有效なものであればあるだけ、それだけ多くこの危險の可能性が現實化されるわけになる。故に、學生の社會科學運動に對する彈壓は、その研究者が未成熟であり、その研究のやり方が不合理であるからではなく、むしろその正反對に、その研究者が社會科學研究に鋭敏なる理解力を示し、その研究方法が官的教育方法を嘲笑するほどに、有效であるがためではなからうか。

そのことはそれとして、吾々は進んで考へて見たい、一體吾々は學問上の見地から、眞理の種別に安全眞理と危險眞理とがあり得るか。學問上には、眞理と誤謬との區別はある。しかし危險眞理と安全眞理の區別は存しない。強いて之を求めるならば、不徹底なる研究の結果を、意識的又は無意識的に外的勢力の壓迫の下に曲げられた研究の結果を、學問の名において不變の眞理であるかの如く、宣傳し教授することだ。これが存在し得る唯一の危險なる眞理である、否、精確に云へば、危險なる似而非眞理である。

併しながら、それ自身において、危險安全の區別も存じない眞理も、社會的には危險性を持つことができる。尤も、この場合には、常に「何人に」――現代の階級社會においては、多くの場合に、「どの階級に」――といふことが附隨してゐることを忘れてはならない。實生活に例を求むれば、夫の機械の發明とその產業界への移入は、それ自身決して危險なものと言ふことはできない。併し、今日の社會の仕組の下では、その機械によつて取つて代るべき運命の下に熟練勞働者にとつては、それはたしかに危險ではある。產業革命の進むにつれて、幾萬幾十萬の勞働者はその機械のためにその職を奪はれ、饑餓と絕望の闇い淵の中に投げ込まれた。彼等の單純なる頭腦は、此の戰慄すべき不幸の根源が當時の社會組織其者に存することを見極め得ないで、却つて之を機械その者に求めた。さうして絕望的な彼等は、屢々徒黨を組んでこの『鐵製の怪物』を退治しようと試みた。吾々はその時代からの『機械破壞者』に關する多くの物語を知つてゐるさうしてかゝる場合にはいつも、聰明なる資本家たちは、時勢の進展に逆行する此の無智なる「動物ども」を憫笑したものだ。彼等は屢々叫んだ、「機械に對して戰ふものは神聖な理性に對して戰ふんだぞ！」「諸君は……愚かにも此の善良なる神意に反抗しようといふのか」と。運命の車輪は廻ぐる。今や『鐵製の怪物』ではなくて、社會科學的眞理といふ無形の怪物が支配階級の眼前に立ち現はれた。そして此の怪物は薄氣味惡い語調で、彼等の前途の不祥なる

運命について豫言する。そこで支配階級者は、嘗て彼等が憫笑したところの「時勢の進展に逆行する無智なる動物ども」の故智に倣うて、無形なる『機械』破壞者、『眞理』破壞者の役割を演じつつあるのである。米國においては、キリスト教は支配階級の有力なる精神的統治手段の一つである。從つて、キリスト教に加へられた各々の打撃は――舊式な資本家から見れば――間接に支配階級に加へられたそれだけ多くの打撃である。かくて、彼等は財力と法律の煽動によつて、往々暴力によつてさへも、キリスト教の信仰と相容れざる科學上の眞理、生物進化の學説を『破壞』しようと試みつゝあるのだ。社會科學上の眞理についても全然同斷であることは、私は他の機會において述べて置いた。イギリスにおける社會科學上の自由に關して、嘗てラッセルは次のやうに書いてゐる。『勞働者階級が財産制度について自由に思想するつて？さうなると、吾々富者はどうなるといふのだ。青年男女が性について自由に思想するつて？さうなると道德はどうなるといふのだ。軍人が戰爭について自由に思想するつて？ さうなると軍紀は一體どうなるのだ。思想を撲滅しつちまへ。再び僻見の暗影の中へ後退するこった、さうでないと財産と道德と戰爭とが危うせられる。民衆は、彼等の思想が自由であるよりも、愚鈍で怠惰で、屈從的である方がましだ。だから、どのやうな犧牲を拂つても、思想の自由より生ずるこの不幸を囘避しなければならぬと。思想の反對者たちはこの靈の奥底でかう考へる。さうして彼等の教會において、彼等の學校において、そして彼等の大學において行動するのである」と。

洋の東西を分たず、少數なる支配階級は、社會科學上の眞理に對してこれと同樣の恐怖を感じ、これと同樣の考へ方と行動とを探りつつある。社會科學上の眞理は、その研究者たる青年學徒自身にとつて危險であるのではない。また人民の大衆――それは大體勞働人民であるのだが――にとつても危險であるのではない。ただ、それが少數支配階級者の利益に反する場合のあり得ることが豫想されるといふ意味において、危險なのだ。これが、所謂、社會科學研究の危險

の正體である。

我が文政の當局者は、もとよりはつきりした認識を持つてではないが、自由研究の結果たる社會科學的眞理が支配階級の利益に反するのあり得べきことに氣がついて來たのである。換言すれば、彼等におぼろげながらも、社會科學の階級性を認識するに至つたのだ。さうして、私の見る所を以てすれば、これは誤りなき認識である。吾々は、おぼろげながらではなく、明白なる意識を以つて、この社會科學の階級性を強調せんとするものである。

八

我が文政の當局者がその行動によつて漠然ながらにも表明しつつあるところの社會科學の階級性は、一般世人にとつては、極めて奇異な感を持つかも知れない。といふのが彼等は久しい間、科學が、さうして社會科學も亦、人間の黨爭や階級的利害を超越した中立的な唯一のものであると教へ込まれて來たからである。ところが、吾々には今社會科學に危險科學と安全科學の別のあることを告げられるのだ。人々の去就に迷ふのは當然である。

しかし、これは事物當然のなり行きである。支配階級的見地に立つ社會科學が、教育上獨占的な優位を占めてゐたときには、その科學は超階級的な唯一人間的なものとして敎へられるであらう。ところが、現實生活の方面において、社會の階級性が漸次明白に意識されて來、階級鬪爭が進展するに伴うて、思想、學問の領域においても、支配階級の見地に立つ社會科學に對して、被壓階級の見地に立つ社會科學が漸次擡頭し來る。さうして舊來の社會科學とこの新興の社會科學との間に生存鬪爭が始まる。思想の領域にて、教育の領域において、さしあたり二つの社會科學が相對立する。ここに至つて、科學の中立性、人間性、唯一性が支持し難くなる。この時に至つて、始めて安全科學――即ち支配階級

の利益を傷けざる科學――と危險科學――即ち、支配階級の利益に肉薄する科學――との區別が生ずるのだ。だから、今日この兩科學の區別が世間の注意を惹くに至つたことは、實社會における階級鬪爭の發展が一定の段階に發達したことの證據にほかならない。」

科學の、又は論理的思惟の發展は、恰も眞空管の中においてのやうに、行はれるものではない。それは絕えず論理を超越した外部よりの刺戟や妨害によつて色々に曲げられ歪められつつ發達して行くのだ。さうして此の外的事情の中、最も有力なるものが、當代の經濟的諸關係、就中、その社會の階級的構成である。人間は自分の現實の生活條件にかたどつて彼の地獄や極樂を構想するだけではない、彼等の所謂純粹思惟の世界も、彼等を圍む自然界の構想もともに、經濟諸條件の制約の外に立つことはできない。特に、科學の研究が古代にあつては、貴族富豪の餘技であり、中世にあつては、僧侶の宗敎的奉仕の一部門であり、近世に至つて、市民階級の生業の一部門となつたとすれば、單なる此の事實からも、在來の科學にそれぞれの支配階級の利益と僻見と傳說とが混入してゐるであらうことを容易く理解し得ると思ふ。斯樣にしてそれぞれの時代の學問は、自然科學や哲學においてさへも、多かれ少かれの階級的特質を帶び來つてゐるのであるが、それは社會科學において特に著しいのである。

何となれば、社會科學の核心は社會進化の法則を取扱ふことに存する。それは過去の經驗から現在の諸事實を說明するにとどまらず、社會進化の將來をも豫斷するものである。だから、その眞理は現代社會の運命の豫想に無關係であることはできない。しかも、この豫見されたる社會進化は、必然に、各人の社會における地位と利益とに何等かの變動を及ぼすものであると同時に、此の進化は自己の目標を設定し、之に從つて行動する人間の活動を通してのみ實現され得るのである。さすれば、各人は此の如き社會進化を豫示する社會科學的眞理に對して、一定の利益關係を感じ、一定の

態度を採らざるを得ない。ここに自然科學と社會科學との重要な區別が存するのである。

吾々は社會的利害とはほゞ無關係に、水は酸素と水素の化合物であるといふ科學上の眞理や三角形の内角の和は二直角に均しいといふ數學上の眞理を承認することができる。併し、一旦、その眞理が「資本家社會は、その内的矛盾によつて沒落する」といふ社會科學上のものである場合には、果してそれは前者同樣の社會的無關心を以て論議し又は承認されるのであらうか。否。社會進化の法則に關する學問上の眞理は、社會的利害關係を伴はざるを得ない。ところで今日のやうな階級社會においては、各人の社會的利害關係は、根本においては、階級別に沿ふて分たれる。之に應じて、社會科學の眞理は、さうしてまた社會科學は、階級性を帶びざるを得ないのである。

假りに社會科學の自由なる討究の結果が、社會の進化は階級爭鬪の發展によつて行はれ、結局、資本主義の沒落に終る、ことを指示したとする。この場合に方つて、その社會における諸階級は此の學說に對して、無關心であり得るか。否。彼等は之に對して、自己の階級地位に適應したそれぞれの態度を採るに違ひない。即ち、この豫示せられた社會進化によつて將來を約束された階級は、此の社會科學を歡迎し、その促進に努力するが、その反對に、將來の凋落を豫斷された階級は此の如き不祥な科學からその面を脊けるのであらう。のみならず、彼等は直接又は間接に、此の如き不都合な社會科學の存在を否認しようと企圖するであらう。階級對立の意識された社會においては、社會科學的眞理は、その階級性のために、もはや萬人一樣に受け容れられるやうな超階級的な中立的なものではあり得ない。その探求と支持とは、必然に、黨派的であり、階級的であるのである。

それ故にまた、社會科學は、自己の將來を社會的進化に期待するところある向上階級の見地においてのみ發展し得るといふことになり、之に反して、沒落階級の見地からしては、その促進的刺戟の缺乏のために、到底、停頓萎靡せざる

を得ないであらう。マルクスは古典經濟學に就いてこの事實を甘く說明してゐる。人も知る如く、十八世紀の終から十九世紀の初めにかけて、偉大なる進步を遂げた經濟學は、何が故に其後ぱつたりとその進步を停めたのであるか。マルクスは之に答へて次の如く云うてゐる。「ブルジョアは既にフランス及びイギリスにおいて政權を奪ひ取つた。その時以後、階級鬪爭は實際上にも理論上にも、益々露骨にして肉薄的な形を採るに至つた。それは科學的ブルジョア經濟學の弔鐘を鳴らした。かくて、も早いづれの定說が正しいか正しくないかといふことではなく、いづれの定說が資本に對して有利か有害か、便利か、不便か、また、警察令に違反するかしないかといふことが問題とされるに至つた。無私なる研究の代りに、金で買はれた筆戰が捉はれない科學的研究の代りに、辯疏の疚しい良心とさもしい意見とが現れた。」經濟學がブルジョアジイ自身に對する批判となるや、彼等は經濟學を發展させる能力を喪失して了つた。さうして一苟くも此の如き批評が一階級を代表する限り、それは資本生產方法の顚覆及び諸階級の終極的撤廢をその歷史的使命とする階級、即ちプロレタリアのみを代表し得るのである」。

嘗て、マルクスが古典經濟學について書いたところは、そのままに我が社會科學界にあてはまるやうに思はれる。文政當局の社會科學運動に對する彈壓は、既に不生產的になつたところのブルジョア社會科學の弔鐘であると共に、豐多なる學的創造力を約束するプロレタリヤ社會科學の抗し難き成長を告示する烽火である。

九

社會科學は現代のやうな階級社會においては必然に階級性を帶びさせられる。從つて、此の社會科學は向上階級、即ち——現代においては——プロレタリヤの見地に立つ場合においてのみ、學問的創造力を持ち得るのだ。さうして吾々

の問題としてゐるのはまさに此の意味の社會科學である。

ところで、此の如き社會科學の階級性は、社會科學運動に對して何事を教示するか。私は、この社會科學の階級性から、その運動が闘爭を免れないことと、その前途の頗る多望なることを推斷したいと思ふ。

社會科學運動は、それ自身が實社會における階級闘爭の發展の思想的表章であるやうに、決してこの闘爭の圏外に立つことはできない。むしろ、人類を稗益した多くの新學説と同じやうに、闘爭においてのみ發展し得るのだ。支配階級が社會科學の階級性に氣がつくやうになると、彼等はもはやこの運動を自由に放置しはしないであらう。さうして、支配階級の認識がおぼろげなものからはつきりしたものに變り行くに應じて、彼等の迫害と抑壓とは、階級的勢力關係の許す限り、益々その露骨と深刻とを増すであらう。

階級社會において、吾々の解する意味の社會科學運動が安全に平穩に行はれ得ると考へるのは、むしろ幻覺である。斯樣な空想から吾々は屢々最も手酷しい方法で以て、ぶきみな現實に目醒めさせられるのだ。かくて、小心なディレッタントや確信のない新しがり屋は、早晩、この戰線から落伍して了ふ。闘爭の決意の動かない少數者のみが、その陣營に殘る。さうして此の如き少數なる思想的闘士の手によつてのみ、この社會科學はその將來の發展を見るであらう。

併し、闘爭は、特に被壓者にとつては、決してなみたいていのことではない。あらゆる形の妨害と迫害と誘惑とが次から次へと襲ひ來るであらう。若し、吾々の擔うてゐる人類文化に對する重大なる使命と吾々の前途の多望なることに就いての確信が吾々を鞭打ち吾々を力付けるのでなかつたら、如何な强固なる意志の所有者も、よくこの陰慘なる闘爭的被壓者の運命を耐え得ないであらう。

一〇

社會科學運動が現代に負ふところの使命は頗る重大である。

現代社會は不安と矛盾と混亂とに惱んでゐる。現代社會の運命を脅かすやうな諸種の問題が相次いで勃發しつゝある。戰爭の問題、帝國主義の問題、恐慌の問題、失業の問題、其他我々が日日新聞紙上に送迎する諸般の問題はその遲滯なき解決の要を吾々に迫りつゝある。と同時に、最近十數年間に集められた新なる經驗の累積は、學問的見地よりする原理的概括を待ちあぐんでゐる。それにも拘らず、ブルジョア社會科學は此の新經驗の學的包容もできなければ、吾々の面前にヒシ／＼と押し寄せて來る諸問題の眞意を理解し、之が根本的解決の道を指示することもできない。かくて屢屢吾々は社會科學の破産なる叫びをさへ耳にするのである。

併し、この社會科學の破産は、ブルジョア社會科學の破産以外何者でもない。ブルジョア階級は發展階級から變じて保守階級沒落階級となつた。ブルジョアジイの此の階級的地位の變動に照應して、ブルジョア社會科學の見地も亦、自ら狹隘なる範圍に跼蹐せられ、從つて、此の如き見地からは、も早、吾々の周圍に起る諸事件を根本的に理解することもできねば、之を徹底的に解決することもできなくなつたのである。そこで、此の沒落階級は、或は宗敎に走り、或は哲學に趣いて、彼等の不安を慰め、彼等の科學上の無能力を糊塗しようと企てる。さうでなければ彼等は自ら暴力を用ゐて新興社會科學の抑壓を企圖するのである。これら凡ての事實は、支配階級的見地に立つ社會科學の時代が方に過ぎ去らうとしてゐることを示すものにほかならない。吾々はただプロレタリア的見地に立つ社會科學の使命の愈々重大なる所以を意識させられるばかりである。

嘗て、十八世紀の後半、ダラムベーア、ディドロオ其他一群の啓蒙哲學者たちは、夫の三十餘卷に上る大百科辭典を編纂して彼等の自然觀社會觀の大系を當代人に提供した。もちろん、私は、この啓蒙哲學の普及がフランス大革命の根本原因であると考へやうとするものではない。けれども、同時に、彼等の思想上に於ける此の業績が此の社會的大變革への機運を促進するに與つて力あつたことは、何人も亦之を疑ふことのできぬ事實である。現今、吾々は丁度彼等啓蒙哲學者たちと相似た事情の下に棲息してゐる。世界史的大變動の機運は吾々の周圍に迫りつつある。この轉化がヨリ多くの聰明と理性とを以て最小の犧牲を拂ふて行はれ得んことのためには、是非ともプロレタリア社會科學の建設と普及とが努められなければならぬのである。

吾々は吾々の使命の重大を意識してゐるだけではない。吾々の運動の前途の多望なることをも確信してゐる。社會科學運動はプロレタリアの見地に立つ。社會科學運動は實生活におけるプロレタリアの解放運動と相照應するものである。さうして前者はその結局の支持と後援とを後者に求める。階級鬪爭によつてその解放を追求しつつある此の新興階級との協働提携によつてこそ社會科學運動はその前途の照明を得るだけでなく、その窮極の使命をも充たし得るのである。何となれば、眞實の社會科學は單に世界を『直觀』し又は之を『いろいろに解釋』することにとどまるべきではなく、之を『改變』しなければならぬのだから。

（本稿、去る七月十八日及同二十日、大阪並に神戸に開かれた學生社會科學聯盟の社會科學普及講演會において、同一の演題の下に試みた講演に用ゐた手控えに加筆したものである）

森戸辰男著

思想と鬪爭

定價貳圓
送料廿一錢

新刊

思想混亂に脅えつゝ皮肉にも自ら其の種子を蒔く當局者、國家擁護の大旆を押立てつつ國家の正體に盲目なる反動團體、彼等近來の愚劣慘忍なる政策と運動に對し、奮然起つて熱烈なる言論に一世を覺醒しつつある吾が森戸氏の近著である。

【目次】一、震災と「主義者」と反動勢力。二、國粹主義者の政治的殺人。三、大杉榮君の追憶。四、關西に於ける「交通不安」の社會的意義。五、富田碎花君の印象を通じて。六、思想と鬪爭。七、治安維持法と社會主義。

森戸辰男著

社會科學研究の自由に關し

青年に訴ふ

（十二版）

定價參拾錢
送料七錢

發行所　東京市芝區愛宕下町　振替東京八四〇二一番　改造社

學徒の此上なき參考文献

社會科學

八月號目次

（定價五十錢 送料一錢五厘）

□社會科學に於ける方法二元論‥今中次麿□經濟的及び社會的反映としての社會主義‥ヴイルブラント□英國に於けるマーカンチリズムの興隆及び衰滅‥高橋誠一郎□官奴司考‥瀧川政次郎□Gemeinschaftに就いて‥高田保馬□シユタンムレル『法律哲學論文講演集』及び「法律哲學練習」に就いて‥田中耕太郎□ヴントの『所有權と民事的統制組織』‥平野義太郎□最近社會科學界主要論文及著書解題□質疑應答欄

七月號目次

（定價五十錢 送料一錢五厘）

□通貨の購買力と其測定‥土方成美□最大價値獲得の原則と規範法學‥中野登美雄□社會主義の「自由王國」‥新明正道□英國マーカンチリズムの興隆及衰亡‥高橋誠一郎□ライト氏の人口論‥竹村豐太郎□英國古典派の利潤論‥山口正太郎□最近社會科學界主要論文及著書解題□質疑應答欄

創刊號目次

（再版出來）

（定價八十錢 送料一錢五厘）

□結合の上位（四十二頁長大論）‥高田保馬□マックス・アドラー（唯物史觀に於けるテレオロギー」‥平野義太郎□三權分立の現代に於ける意義‥鈴木義男□社會的及び經濟的反映としての社會主義‥ヴヰルブラント□アインスタイン相對性原理と經濟法則の客觀性‥二木保幾□ロバートオーエンとシモンド・ド・シスモンデイの比較‥猪谷善一□我が國近世の農村問題‥本庄榮治郎□社會法學より見たる法律と道德との關係‥高柳賢三□中世英國都市研究資料‥野村兼太郎□最近社會科學界主要論文及び著書解題

東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

法律文化の新展望

鈴木義男

一

法律はもろ〳〵の社會現象と共に一の文化現象である。文化現象たる法律は一般文化の樣相と共に過去より現在に各文化時代の特徵を負荷しつゝ變遷し來りまた來るべき時代へと新しい傾向を取らうとして居るのである。法律は極めて保守的なものである。安定性と確實性とをそれ自身の生命としてゐるものであるからである。一つの文化時代から他の文化時代へと移り行く過渡期に際して法律は最も遲れて推移するものである。然し法律の保守性がいかに頑强に傳統的法理を維持しやうと努力しても、時代と社會生活の需要とはそれ自身の中に幾多の例外的法理をはぐくみ、新しい法理の構成を促し、やがては例外をして原則たらしめ、ここに新しい法律の文化時代を現出せしめずには置かぬものである。そのことを過去の法律史が證明する如く將來もまた然るであらう。法律がその保守性を維持しつゝ、しかも各文化時代の特性を豐かにそれ自身の中に包藏せざるを得ない所にわれ〳〵は興味を覺えるのである。そこに社會生活の事實と必要との論理に對する優先があり、事實の觀念に對する壓迫があるのである。

法制史今日の進步の程度が法律の各文化時代の特徵を一般化し抽象化し得る程に充分なるものであるかどうかと云ふ

ことは見る人によつて異見があり得るであらう。又余りに抽象化を急ぐために屢々架空的觀念論に陷るの弊あることも否定するものではない、しかし乍ら法律の各文化時代の法制史的事實は既に相當に多くの學者に依て闡明されて居る。この事實の上にある程度の歸納を加へて行くことは今日に於て決して冒險に近いものにのみ云ふことは出來ないのである。否只に冒險を以て目すべきものでないばかりか、與へられた材料を整理し法律の過去に總斷定をなすと共に當來の社會を司配する法律の姿を豫測することは不可缺の必要である。而してかくの如き企てが次第に數多きを加へつゝあることは喜ぶべきことである。或は實證的基礎に立てる法制史觀と云ふことが出來やうか。但し筆者自身はこの方面に於て研究甚だ未熟であるばかりでなく、いまだその出發點にすらも立つて居るものではない。今日は偏に先進の攻究の結果に依賴すべきの時代である。その典據として擧ぐべきもの二三にして止らないのであるが、ここには特に法制史の事實に通曉することに於ても、これを綜合し要約し批判することに於ても稀なる蘊蓄と聰明とを有するロスコーパウンドの法律發達史に依據しつゝ各時代の法治狀態の特徴を概見し、現代に於て法律の世界に擡頭しつゝある新法理と、その新法理を通じて豫見し得る當來時代の法律文化に就て若干の考察を加へて見度いと思ふのである。

二

古代より現代に至る迄、われ〳〵の生活に對する法律の司配、學者の所謂法治態樣は幾變遷した。しかし乍らあらゆる意味に於て現代は過去の遺産である。各法治時代に法治の基調をなしたる特徴はそのまゝわれ〳〵の時代に迄持ち越されて居るものが尠くないのである。それ故にこそわれ〳〵はいつでも過去をふり返つて見る必要があるのである。

人類が山野に野獸を狩り、天產物を採取したりして一定の土地に定住することなく、簡單な道具で生活資料を獲得し

て居た所謂狩獵民の原始社會に於ては未だ法律を以て目すべきものの發生せざりしは明である。最も未開な原始的社會に於ては一個の群の存在がある丈けであつてまだ家族の成立がない。又物や自然に對する所有關係も發生せず。幼稚な道具又は身體の裝飾品などが事實上個人的に使用されて居たに過ぎないと解されるのである。かゝる時代に於ては群の明瞭なる統制的權力の發生もまた無かつたであらう。しかしこの群生活にも何等の規律も無かつたと云ふわけではなく少くともおのづから最小限度に於ても社會生活を可能ならしむる規制は存在して居たと解される。性交や婚姻に就て一定の習慣が守られ近親結婚の如きはこの時代に於ても忌むべき所として自然に結婚等級などが定められて居たやうである。例へば舊約の記事や我が原始時代に信奉されて居た觀念の一つとして大祓の詞「己が母犯せる罪、己が子犯せる罪、母と子と犯せる罪、子と母と犯せる罪」等はこれを想像せしむるものである。又アニミズムの信仰もあり、それと關連して法律の原形たるタブーの信念が廣く行はれたであらうことも確かである。簡單乍ら犯罪者追放の手續の如きも存在して居たやうである。けれどもそれらは多く習慣に司配され、隨時的に行使され、まだ社會の自律的作用として有力なものと見ることは出來なかつた。轉々として定住することなき生活がまだその必要を感ぜしめなかつたものと云はなければならぬ。

法律の歷史はこれより一步を進めたる時代から出發するものと解される。先づ群生活の强固と云ふことが要求され、それと經濟的若干の進步とが相俟つて種族時代を導き出す。この時代に於て群の內部に於て又群と群との間に於て何等かの原因で法益の侵害が起り爭議が發生する。しかも群團、種族の統制權力が猶未だ充分に發達して居らぬのであるから人は自力救濟自力報復の擧に出づる外はない。また團結の强固を期待する原始社會の事情より見ればその構成員の侵害を座視することは許されない。復讐が只に是認されたのみならず美德として獎勵されたであらう。かくて進んでは一

員の侵害に對して團體全體が危害を感じ協力して報復の事に從ふに至つて個人的復讐は團體的復讐に迄進んだのである。しかし乍ら一方無制限なる復讐の盛行は又却て團體結合の度を緩うするの危險がある。そこで統制力の漸次的成長と共にこれに對して一定の制限が慣行的に設定されることゝなつたのである。その最初のものは復讐程度の制限である。Lex Talionis 反座法としてハムムラビ法典舊約聖書等に錄されて居るものがこれである。次で復讐の範圍、復讐の期間等の制限が相次で設けられた。復讐それ自身が制限されると共に、經濟狀態の發達、貨幣制度の發生と共に行はれ始めたものは財産の奪取を以て復讐と併行し又は代ゆるの方法である。これも最初はその何れに依るかは被害者の選擇に委したのであるが、統制權、公權力の確立と共に專ら社會の平和的秩序維持を念とするに至り、一定の法益侵害に對してはもはや自力制裁の方法を許さず、公權力が代つてこれをなすと共に被害者は財産的賠償を以て滿足せねばならぬことゝしたのである。一定の侵害に對して一定の賠償額を公定する Wergild の制度もかくして成立したのである。その自力制裁の一部が公權力制裁化せしめらるゝ過程に刑事制裁の起源があり、單純なる反撃が財産的賠償に轉化する所に吾人は民事責任の起源を見るのである。しかし相手方の財産の差押も原則として自力に依つたものと解さるゝのであつて、侵害又は債務不履行の程度に比してその差押が妥當なりや、否やを首長長老に對して訴へて爭ふことが民事訴訟の最初の形であつたのである。かくして法律の社會統制の最初の形態は成立するのであるがこの事は原始的國家の成立後に於ても長く變りない所であつた。

　これを約說すれば、原始社會にあつては被害者は自力救濟、時として神又はその代行者たる僧侶の助けにより、或は特別の事件にあつてはある訴訟の方式に準據して統制機關の助けによつて救濟を得るのであつた。血緣關係が社會の最も有力な紐帶であつた古代にあつては、第一は自身及び血緣者による救濟であつたからして、原始社會の主要な制度は

復讐、私闘及び團體復讐であつた。併しこれらの方法だけを以てしては一般の安定てふ社會的利益に反するので漸次救濟の請求が國家に對してなさるゝことゝなつたのである。かくてある程度迄法律が社會生活を規律するに及んで自力救濟や私闘は鎭壓され、殊に私闘は全然跡を絶ち自力救濟も漸次例外的となつたのである。かくて法律はこの時代に於てその最も原始的なしかし乍ら最後迄殘存する所の職能たる社會の平和的秩序維持の手段たることを確立したのである。しかしその法律たるや未だ決して明確なるものではなかつた。個人間の利益が相反せる場合にその衝突を避くるために方便として少許の規定、即ち專制君主の命令としての成文法はないでもなかつたが、大部分は慣習法であつた。又個人間の衝突を避けると云つても、近代法が損害賠償を許すのとは違つて、單に被害者の復讐觀念を宥めるのが主であつたことは注意されなければならぬのである。

又法律が宗教律道德則と分化してそれ自身獨立の社會統制の機能を營み出したのもこの時代の末期に於てであつた。この時代の初期の特徴として宗教道德法律の三者は渾然として分化する所なかつたのである。ハムラビ法典マヌー法典モーゼの戒律等を見るならばこの事は明かである。そこには神を畏れよと云ふ戒めと姦淫する勿れと云ふことゝそして法律的規範の原形たる盜む勿れと云ふ禁止とが雜然として並べられて居るのを見るのである。それが宗教や道德の外に立つて一般の安定てふ社會利益の確保作用を營むに至つたのは公權力の相當に發達して後のことである。併し乍らその區別は次第に意識に持ち來らされたとは云へ、その目的とする所は宗教や道德と同樣に社會的秩序の維持にあつたことも勿論である。法律の社會統制のこの性質、即ち社會の平和的秩序維持の手段たる此の性質は、法治狀態の發達と共に法律に他のいろ〳〵な目的が附加されたのではあるけれども最も原始的なものが常に然るが如く最後迄保存されることになつたのである。

三

原始法律時代が終ると共に次の長い時代が展開される。それはパウンドをしてこの時代の法律の特徴に因んで名づけしめた所の嚴格法時代 the stage of the strict law である。これは法制史の上には最も長い時代を劃するものである。上は古代法時代に接しギリシヤ・ローマの都市法國家法の時代を經て中世封建法の時代に至るものである。法治の此の時代に入れば法律は明かに社會の統制者として有力なものとなり、國家制度が社會統制の機關として有力なものとなるのである。又國家がその組織を次第に整ひ、その統制權力が强大となると共に、法律の他の社會生活の規範よりの分化、獨立の統制作用が顯著となる。前時代の終りに於て次第に意識され來つた刑事制裁と民事制裁との分化は確定され、自力救濟や自力報復は全く例外としてのみ存立することになるのである。その結果として此の時代に入れば不法行爲上の救濟は國家その他の公權力に對してのみ請求さるべきこととなつたのである。併しこの時代に於ては近世的意義の權利の觀念はまだ認められなかつた。事實上損害賠償は取計らはれたのであるけれども、それは權利を予定した上での制度ではなかつたのである。論理的には權利あつて後に之を保護するため損害賠償制度があるべき筈であるが、法制史上の事實は反對になつて居るのである。羅馬法に於てもその初期に於ては Actio 訴權のみが認められて近代的意義の權利に該當する觀念は長く發達を見なかつたとされて居る。併し兎も角國家に對する救濟の請求が認められることになり、その場合を規定する一群の法規が出來て來てそれが間接に法律上承認され保障せらるゝ利益を指定制限すると云ふことに役立つたわけである。しかし又一方には權利の觀念――相手方に對しては勿論國家に對しても主張し得る人民の意志の力としての――が發達して居なかつたから國家の權力は勢ひ濫用される傾向を持つて居たのである。そこで二

つの原因が相俟つて法律をば一の固定的體系に迄作り上げることになつたのである。一は法律行爲に依る個人のうけた損害に對する救濟のために用ふる國家權力の過度の行使に對する恐怖であり、他は聖典や慣習に對する意識的違反は不敬であつてかつ危險であるとする原始的法律觀念の復活これである。かくて法律は國家權力の濫用に對する防止手段として發達して來るのである。この時代の法律の特徴は嚴格と云ふことであり法律の目的とする所は確實性の維持と云ふことに外ならなかつた。國家が干渉する場合、國家が干渉する方法、干渉を請求する方法等が全く嚴格な方法で規定されることを要求したのである。從て法律規定には全然彈力がなく誠に融通の利かない形式的なものであつた。それは形式を超越したり、無視することは許されないのである。問題は特定の行爲は特定の形式が履まれたか否かと云ふことを標準としてのみ決せられるのである。かく法規に形式的に適合する行動や行爲ならば、その道徳的方面の價値には無頓着であつて、著しく個人主義の色彩を帶びざるを得ないのであつた。

誠に形式主義個人主義は法律發達のこの時代の特色である。例へば法律の形式を履んで約束された義務の正確なる履行を絶對に主張する。それは偶然の事故も斟酌しなければ過失者をも假借しない。誠にヴエニスの商人に於けるアントニオが約したる肉一ポンドはイエリングの指摘したるが如くこの時代の法律觀念に於てはシヤイロツクに於て要求するの正當なる權利があつたのである。十六世紀時代の債務者は債務辨濟の日に辨濟するために渡つて行かねばならぬ河の水が急に增したがために、重い沒收を課せられたのであつたが、當時の法律は單に債務者は該期日に辨濟を約したりや否や、及び債務の本旨に從て辨濟せしや否やを問ふに過ぎなかつたのである。債務者は不可抗力の危險をも負擔しなければならなかつたのである。此の時代に於ては法律行爲をなすに當り詐欺にかかり、又は强迫されたものでも直接には保護する所がなかつたのである。行はれた不法行爲に對して出訴することは許したが法律行爲を無效とすることは拒ん

たのである。人がもし自身で自己の利益を保護することが出來なかつたら、それを裁判所に於ても請求することは許されないのであつた。裁判所は單に平和を維持するに止まるものである。强迫や詐欺に對しては當時の法律は事實問題を審査して實際そのものは詐欺にかかつたか又は强迫されたかと云ふやうなことを審査することを拒んだのである。その代りに一般の通常人ならばその行爲に依つて詐欺にかかり又は强迫されたらうかと問ふたのである。換言すれば苟くも成年者は自分で自分の世話をせねばならぬと主張したのである。馬鹿げた契約をしたとしても、責むべきものは契約者その人より外にないから男らしく債務を履行せねばならぬとした。一旦行爲をなした以上は、行爲者は彼の危險に於て行爲したものとされた。嚴格法の强行する苛酷なる多くの法規に對する當套の辯護は、その法律上の地位は當事者の愚行に依て生ぜしめたものであるから、彼はそれに安住せねばならぬと云ふにある。かかる見解は殆んど原始社會のそれであつてゲルマン人の賭博の仕方に關するタキツスの記事を想起せしむるものがある。タキツスの誌す所によると、ゲルマン人は自身の自由すら賭けて賭博をした。そして若し負けると進んで奴隷となつて辛棒强くも自身を賣らせたものであると云ふことである。支那法及それを模倣した我が法律に於ても同樣の嚴格主義を見出すことが出來るやうである。我が上古の法に於ては私法關係に關する規定の見るべきもの尠ないのであるが、大寶令中には「家資盡クル者ハ身ヲ役シテ折酬セヨ」と云ふ規定が見ゆるのである。その極端の場合を想像するならば債務者の危險は同樣である。この嚴格法時代の精神は今日に於ても相互過失の法理や危險負擔の法理中に殘つて居るのを見るのである。

形式主義と嚴格主義とはあらゆる方面に行き渡つて居た。後に發達する所の契約自由の原則の意義を一層明かに理解し得るために、ここに契約の方面にあらはれたる嚴格主義形式主義を説明して置くのも無益ではなからう。概してこの時代に於ては、契約を存効とするには種々の形式を必要とし、その形式に從はない契約はこれを無効としたのである。

蓋し個人の信用も發達せず、又訴訟手續も不備なるため證明の困難を感ずる等の理由と相俟つて、法の不撓性を一層堅固にしたものであらう。例へば羅馬法に於ては法律の保護する契約の種類は極めて限定されたものであつて、僅かに五つの種類の契約のみが認められた。これは契約の形式に就てであるが、從つてその內容に就ても自らなる制限を受けたことと云ふ迄もなからう。羅馬法上認められた契約に五つの種類がある。(1)第一は口約Contractus verbis これは一定の言語(ラテン語たることを要した)を以て問答の形式で締結される契約であつて立會人を必要とした。例へば「汝は口ーマ法上余が所有する此の物を買ふや」「然り之を買ふべし」「汝は羅馬法上汝が所有する此の物を賣るや」「然り之を賣るべし」と云ふ風に問答を繰り返して成立するのであつて、二個の片務契約の對立に外ならない。(2)書約Contractus literis これは一定の帳簿に記入するを形式とする。今日の證書の作成とは等しくないものである。(3)物約Contractus re これは目的物を授受するに依て始めて法律の効力を生ずる契約である。近代語にて「要物契約」に該るものである。これには次の四種類の契約が屬する。(a)消費貸借(b)使用貸借(c)寄託(d)質、これらの契約は近世法と多く異る所ないが、羅馬法に於ては近世法に所謂これらの契約の豫約は認められざる所であつた。(4)無名約Contractus innominante これは約をたとひ前述の方式を履まざるも双務契約の一方當事者が履行をなした時はその履行を以て一種の方式と見做し、その契有効とするものであつて、物約の擴張である。近世の無名契約とは全く異ることを注意すべきである。(5)意約Contractus consensus これは最も進歩したるものであつて、當事者の合意のみを以て契約を成立せしむるに至つたのである。但しこの種類は賃貸借、賣買、合名會社、委任の四種に限られたものであることに注意しなければならぬ。又アングロサクソン古法に於ける契約も略同樣であつたのであつて、アングロサクソン古法にあつては、その始めは法益を保護するに用ゐられる訴訟手續は一定して居り、十三世紀の頃迄は契約に基く利益の保護を求むる訴訟の種類は僅かに三種あるに

止まりこの一に該當するものでなければ救濟の方法がなかつたのである。即ち(1)Covenantコベナントの訴、署名捺印したる證書Deedを以てせる契約を履行せざる相手方に對して損害賠償の訴を起すことを得るとされたものである。(2)Debtデットの訴、一定の金錢の支拂を請求する方法であつて、その義務の生ずる原因は問はない。ローマ法の物約とその趣意を等うするものであつた。(3)Detinueデチニューの訴、これは權利なくして他人の動產を占有するものに對してその返還を請求する方法である。物權上の訴ではあるが使用貸借により返さぬものも之に依つたのである。十三世紀頃迄契約保護の方法は以上の三種に限られたものであつた。それが時代の進步と共に不充分となつて一層契約保護の範圍が擴張されたのは十四世紀以後Quasi-trespass準トレスパスの訴やAssumpsitアサンプシットの訴等がこの目的のためにも用ゐられるに至つて後のことである。羅馬法に於ても英法に於ても時代を逐ふて次第に契約の種類は增加したが兩者に共通なることは契約は原則として無効とし、ある形式を履んだる特殊の契約のみこれを保護したることである。かくて後代契約の自由の原則が確立されるのは文化史的に重大な意義が存するのである。

ここに今一つ、この時代全體に通ずる特色ではあるが、殊にその後期封建時代に濃厚に存する特色として、記述して置くことを忘れたくないのは身分と云ふものが法律上に有した重要な意義に就てである。この時代に於て各人は一個の人間として自己の足の上に立つて愚痴を云はずに勝負せねばならぬと主張して居る一方にはこの時代に於ける重なる社會上、而して又法律上の制度である所の主人と奴隸、家長と家族、諸侯と臣下との關係、殊に諸侯と臣下との封建關係が人間をば全く別の方面から取扱つたのである。ここでは問題とする所は人は何を契約したか、又は何を行爲したかではなくして、如何なる地位身分にあるかと云ふことであつた。諸侯は臣下に對して權利を有し臣下も又諸侯に對して權利を有した。臣下は主君に對して、勤務、服從、又は忠誠の義務を負つたが、主君も亦臣下に對して、防禦、保護の義

務に任じた。そしてこれらの權利が存在し、義務が存在したのは一方は主君であり、一方は臣下であるからであつた。權利も義務もその身分關係に附屬したものであつた。その身分關係が一度人を諸侯の階級かまたは臣下の階級に置くときは權利義務は當然の法律的結果として發生するのである。それは權利義務及び責任と云ふやうな法律効果が明示の契約や行爲の條件や又は故意過失に基く行爲等から起るのではなくして、單純に身分關係の屬性として生ずるのである。歐洲の中世及び我國の封建時代の法律に於ける注目すべき特色は實に此の點に存するのである。その後身分より契約へと云ふ轉移を取つたとは云へ、官吏法等に於て現代も猶明かにこの時代の痕跡を保持して居るのである。

これを要するにこの時代の法律文化の特色として擧ぐべきは、その形式的にして且つ嚴格的なること、著しく個人主義的でありかつ道德的方面の無視であり而して身分關係の重要性と云ふことである。しかしこの時代の法律文化に對して永久的寄與をなしたものとして記憶されなければならない點は、確實と統一との屬性を賦與したこと、及び法規と形式とをこの確實と統一とを齎す手段となしたと云ふことである。

四

嚴格法時代を享けるものは衡平時代、又は自然法時代として呼ばれる法律自由化時代である。これはローマ法に於てはクラシック時代（ヂオクレチアン皇帝に至る帝國時代）によつて代表され、（ここに斷つて置かねばならぬことはローマ法の如く發達の長期に渡る法律文化は到底單一の文化時代に包含せしめ得るものではないと云ふことである、羅馬法それ自身が古代種族法の時代、都市國家法の時代を經、而して帝國時代に入つては近世個人主義法制の特徴を遺憾なく具備して居るのである。）英法に於ては衡平法裁判所の發生及び衡平法發達時代に依て代表され、歐洲大陸にあつては自

然法時代(十七、八世紀)に依て代表せられる時代である。法治狀態のこの時代に入ればここに法の自由化と云ふことが要求されるのである。前時代の基調は法の「確實」と云ふことであつたが、この時代に移つては從來のひたすらに法の嚴格劃一的適用を要求する以外に、事態の公平と成法外の天地の公道にその補充を求むるの餘裕を見出して來たのである。否社會生活の進展はかかる法外の原理の協力を必要ならしめたのである。これ成法の外に時代と場所とを超越して妥當する自然法なる思想が勃興し來つた所以であつて、この思想が法律の固定化を防止したるの功績は滅すべからざるものである。かくてこの時代に於ては法律の基調は「公平と誠實」Aequum et honum と云ふ觀念に要約することが出來るのである。嚴格法時代にあつては法律の規定又は行爲の形式が最も重要な事であつたのに反して、此の時代に於ては道義の觀念及び條理が重んぜらるゝことになつた。かくてこの時代に入つて始めて法律を司配するに至つた思想が四つあるとされる。其の一つは各人は兎も角も人である限り法律上一個の人格者として認めらるゝことになつた。かつては奴隷の如き非人の如き法律上人格者として扱はれなかつたものがあつたに反して、この時代に至つては凡て人は權利の主體として認めらるゝことになつたのである。その二は社會生活の統制者としての法律が內容を重んじて形式を輕んずるに至つたことである。法律關係を論ずるにもその精神を重んじて字句の末に拘泥せざるに至つた。意思表示も契約もその形式よりは眞意に重きを置くに至つたことは注目すべき變化である。その三は信義誠實の原則 good faith treu und glauben が法律關係を司配するに至つたことである。各人はその相當の理由の下に期待して居た所から失望せしめらるべきでないと云ふことや、信義と誠實との要求が法律關係に於ても文字通りの形式主義を貫くことを主張すべきでなく、そこに條理上自らなる限界があるものと考らるゝことになつたことである。かくてコーラーの指摘した如くヴエニスの商人に於けるポルチャの裁判は嚴格法主義の形式主義に照しては奇怪なものであらうとも、債權關係にも自ら

信義誠實の原則が存在し契約の文字通りの實行をば抑制するものがなければならないと云ふことを看破したことに於て、法律解釋の新時代の展望を示すものであると云ふことが一理あることゝして受取られるのである。その四は不當利得は正義に反するとする思想であつて、他人の損失に於て不正に自己を利するは許されざることとするの思想が行はれることになつたのである。

以上の如き新思想が發生して全法律體系の内容を豐富にしたことは沒すべからざる功績であるが又同時にこの時代は哲學的に走り過ぎた結果として、道德的要求を重んじ、ために道德法律合一論を招致し、道德的義務をば採つて直ちに法律的義務とするが如き傾向を生じ、感謝の義務 duty of gratitude の如きをも法律上の義務として採り入るるが如きことを敢てした。これ一つの弊害である。又自然の大法即ち道理を以て直ちに法律であると考へた結果法律の標準が極めて不明瞭なものとなつたことはこの時代の他の弊害である。又道德と法律とを合一的に考ふるの結果、爭議の倫理的解決が主とされ、司法上には餘りに廣汎な自由裁量が認められ、裁判が餘りに主觀的でかつ不確實なるを免れなかつたのである。これこの時代に於ける第三の弊害である。

歐洲にあつては十七、八世紀を以て略この自然法時代を通過するのであるが、文化史的に見れば畢竟この時代は先きの峻嚴なる外貌を以て人民に臨む所の國家主義個人無自覺の時代より將に來らんとする個人の權威絕對を主張する個人主義の時代への過渡期に外ならない。その前時代をうけて法律の形式主義を打破して軟化を計りつゝ來るべき時代への道を拓いたのである。かくて十八世紀末より十九世紀にかけての法律文化の最も特色ある時代に到達するのである。これ何人にも明かなる如く法律文化の華を咲かしめたる時代である。法制史家ヴイノグラドフをして全法律體系を彩る特色よりして個人主義的法制の時代として一括せしめ、パウンドをしてその法律體系を殆んと完成の域迄圓熟せしめたるの

故を以て法律成熟の時代 the stage of the maturity of law と呼ばしめたる時代である。ここに至つて法律組織法治狀態は驚くべき程度に完成されたのである。

前代に於ける自然法思想に基く自由裁量の擴大は法律生活を餘りに不確實にしたるが故に、漸次成文法、法典の編纂に依て法規を制定し組織化し法律を硬化することに依てこの弊を匡正すべく努めた。かくて各國に法典編纂と云ふことが行はれ、十九世紀文化の最も誇るべき收獲の一たる壯麗なる法律體系の完成を見たのである。この時代に入つて法律は又強く嚴格法時代の確實性を要求した。しかし又他面に於て前代の思想を一層展開し徹底することを怠らなかつた。殊に十九世紀文化の特徵たる個人の自覺自我の解放の思想を法律の世界にも導入しこれをその論理的歸結迄展開し盡すことを辭せなかつたのである。十九世紀の法律の基調を要約することは必ずしも容易でない。思ふに「平等と確實」てふ觀念に求むることが出來ようか。この時代に於ては衡平、平等と云ふことが高調されるのであるが、これは二つの思想的系統をうけて居るものである。一つは同一の救濟は常に同一の法律的條件に適用さるべきであると云ふ嚴格法時代の思想と、他は總ての人類を法律上の人格者として取扱ひ苟くも正常な心性と辨別能力を具ふる年齡にある凡ての人類に、完全な法的能力を認むべしとする自然法時代の思想である。各人の法の前の平等はこの思想の展開に外ならぬ。かくてこの時代に入つて各人を法の前に同一の單位として認むべきことが確認され、法律運用の平等、意思活動及び所有物使用に對する各人の機會の均等即ち法律生活に於ける意思の自治、各人の利益の保障等が強く要求されることとなつたのである。又この時代に於て重んぜらるゝ所の法の「確實性」の觀念は疑もなく嚴格法時代の遺産である。しかしこの觀念も決して嚴格法時代のものそのものではない。自然法時代を通過することに依て、法律効果は形式よりも寧ろ意思から生ずると云ふ觀念や、人は意思に依らず形式のみに依て他人から不當に利得してはならぬと云ふ觀念などに依て

影響され變更されて居ること勿論である。かくの如き法律生活の要求を現實にするためには權利觀念が異常に高調されることになつたのは當然であつて、各人の意思實現の手段として權利を與へこれを相鬪はしめ相牽制せしむることに依つて法律の目的を達せんとしたのである。この時代に於て何よりも特筆しなければならぬことはかくて權利が法律の單位となつたと云ふことである。

上に述ぶるが如き意味に於て衡平を確保するために十九世紀法律は強く再び確實を要求したのである而してこの確實を確保するために各人の自由の限界を確定しその自由の保障をなすのである。この意味に於て誠に十九世紀法律は——他の經濟的文化が同樣に然りし如く——自由主義をその根本基調とするものである。各人は法律の保障の下に意思及び行爲の自由を有する。即ち各個人は過失に依るか又は他人の權利を侵害したる彼自身の行爲に因るにあらずんば法律上責任がないと考らるゝのである。各人は法律が認むる法律効果を他人が欲する時に限り、而かもその範圍内に於てのみその他人から利益を獲得することが出來ると云ふのである。

この自由主義の要求の下にこの時代に於て確實されたる法律制度として最も注目すべきものは云ふ迄もなく財産の自由である。財産の自由とは所謂權利の不可侵と財産取得の自由とを意味する。財産が權利化することに依て公權力と雖も妄りにこれを侵すことを得ざるものとする所の神聖不可侵の原則が確立されたのである。財産取得の方法としては、契約があり得る。契約者に對する契約上の請求權は一の財産である。故に契約は有所權的性質を帶びるのである。法律は自由に契約を締結し得る能力、及び自由に締結した契約に依る履行請求權を出來得る限り廣く確保するために存在するものと認められるものである。此時代に於ては人格すらも財産的 性質を帶びるのである。自由に契約を締結する個人的權能は、主として財産の一種と考へられるのである。換言すれば身體の健全や身心の自由活動は我々の自然的所有

の一種と考へられるのである。即ち財産の安全と云ふことは次のことを包含する。⑴自然的財産、即ち自然が人に身心兩方面に與へた力の確保、⑵人が社會における地位に依り獲得したるものゝ安全、⑶人がその自然能力の自由活動に依て獲得したる者の確保等これである。この中ことに注目すべきは第二種の所有に就てである成熟法時代の思想に依れば人は第二種の所有を將來の爲めに大いに制限し又は消滅せしむることに同意し得る。けれども過去に於て獲得したるものを侵害するが如きは堪へ難いことに思はれるのである。

かくの如くにして十九世紀法律は個人主義的自由主義の基調の上に自由の保障、所有權の不可侵、財產取得の自由、そのコロラリーとしての契約の自由を確立して二十世紀への遺產としたのである。その光彩を誇る資本主義的商業文化、企業文化はかくしてこの礎石の上に建てられたものであること又今更呶々を要せざることである。

五

法律は何れの時代に於ても正義を生命とするものである。後代より見て笑ふべき衡平と嚴格との覩念であるとするもその時代に於ては正にその社會が正義として要求したる所少くとも許容したる所と云はなければならぬ。行法、裁判の任に當るその人の專斷と云ふことは出來ぬ。いかなる法治も全くその社會の支持なくしては存立し得るものではないからである。然るに時代が十九世紀より二十世紀へと轉同すると共に社會生活の事相は愈々復雜を極めて來た。機械文明の不斷の進步と人口の限りなき增加、各國とも內國生產のこれに對する不追隨、ある國々にとつては植民地獲得の困難、これらの原因が相俟つて二十世紀の人類をしていやが上にも生活苦を感得せしめずには置かぬことになつたのである。かくの如き生活苦は現代社會の以て正義とする所の內容に次第に變移を齎さずにはおかないのである。この新しき

正義意識を革命に依つて一擧にして法律化しやうと努めた國の發現及その功過はしばらく別論とするも、十九世紀法律の法理の薫陶をうけて人となつた行法家、裁判官が、その固有の正義或は具體的事實の上に實現しやうとする時にそこに一種の不自然と自己內心の壓迫とを感ぜざるを得なくなつたのである。新酒を古甕に盛るの感なきを得ない事態に逢着しつゝあるのである。そは自己の薫陶されたる正義のみを以て唯一の正義と信じ、それを現代に押賣りしやうとする頑迷なる立法家行法家裁判官すらも勿論、況んや充分に聰明なるこれらの人々の意識には既に上りつゝある所のものである。ここに舊法理の轉回を余儀なくされる兆候がある。そは何人の罪でもない。偏に社會生活の推移そのものの罪である。責むべくんば社會生活の推移を責むべきである。

從來の法理のさながらの適用を以てしては充分に事態の公正と現代人の正義觀念とを滿足せしめ難き現象の法律生活の上にあらはれつゝあるもの二三にして足らないのである。今その最も象徵的な意義あるものを指摘するならば次の如くである。

第一は所有權の行使不行使に關して起りつゝある問題である。從來の觀念に依れば所有權は自己の所有物を絶對かつ完全に使用收益處分し得るの權利とされるのである。自己の所有物である以上はこれを如何樣に行使するも又全然行使せざるも絶對に自由である。この自由を保障することこそ法律の任務であるとされた。併し乍らこれに就て若干の疑が提起された。權利は行使するが故に權利である。行使せざる權利と云ふのは吹かざる風と云ふのに等しい。舊時代の學者も行使することが權利の本質たることはこれを高調するに吝かでなかつたものである。權利の上に眠るものは法律の保護をうくるの資格がないとされた。しかし乍ら所有權についてはいかに永年の不行使もその權原が明瞭である以上はこれを沒收し、又は轉換すると云ふことは無かつたのである。これ行使を本質とするもその考方があく迄個人的であつ

たためである。現代人は權利を社會的背景の上に考へることになつて來た。即ち權利賦與の社會目的を顧慮するのである。權利は原則としては特定人に賦與される。けれども法律はこれをその特定人に賦與して置く丈けを以て滿足するものと云ふことは出來ない。社會公共の利益のために行使することを要求して居ると解せられる。所有者個人の利益と云ふものが全然沒却されてよいと云ふものではない。しかし乍ら同時に社會の利益、隣人の利益と云ふことを顧慮されなければならないとするのである。權利不行使の社會的影響の重大ならざる時代に於ては不行使も亦觀過せらるべき充分の理由があつた。しかし現代の思想に於ては權利者は常にその權利の社會目的を實現するの道德的義務を負擔させられて居るものと解せられるのである。獨逸新憲法はこれを明文の形にして、所有權は義務を伴ふ Eigentum verpflichtet と云つて居る。又所有權の行使は常に公共の福利のためにすることを要するとも規定して居る。誠に今日の如き世智辛き時代に於て、尺寸の土地と雖も極度迄能率よく利用されることを期待する時に於て所有權を楯として廣大なる土地を荒蕪に委して置いたり、住宅地域の拂底に苦しむ都會地の中央に廣大なる園庭を築造して樂しむと云ふが如きは一の道德的惡とさへ思惟さるゝに至つた。故に權利を長く行使せずして、社會目的の實現に寄與せざるものは國家がこれを收用し代つて行使するか、或はこれを行使する他の適當なるものに與へることを正當とする見解すら發達しつゝある。そが個人利益の保護者たると共に社會利益の保護者たる國家の責務であるとされて來たのである。かくて不行使の所有權を徵收し又は權利の收用を行ふ立法例はぼつ〱見え出して來た。我國に於ても鑛業法特許法等に於て一定年限行使せざる權利の收用を規定しその片鱗を示しつゝあるのである。

又權利の行使方法に就て顯著なる變化を示しつゝある。所有權は物を完全に使用收益するの權利であるとするも他人の迷惑になるやうな方法で行使することは果して許さるべきであらうか。如何に自己の所有權なりとするも隣人の迷惑

に於て惡臭を發し毒物を撒布し騷音を發するが如き方法に於て行使するは權利の正當なる行使ではあるまいとする見解が生じつゝある。屢々問題となるは自己の土地なるが故に如何に使用するも妨げなしとして大きな井戸を穿つことに依て他人の井戸を涸らすことが正當であるか。又自己の所有地內に汚水溜を造ることに依て他人の井水を汚濁する結果に至ることは正當であるか。又雨水その他の排水路を造ることに依て隣地が損害を蒙るも所有權の正當なる行使と云ひ得べきかと云ふやうなことである。從來の理論に依ればこれを是認する外はなかつたのであるが、民衆と判官との正義意識はこれを默認するに一種の不自然を感じて來たのである。近時漸くこれらを以て權利の濫用として法律はこれを禁止し或は制限するに傾きつゝある。獨逸民法八二六條、瑞西民法第二條は既に一般的に權利の濫用は法律はこれを保護せずと規定して居るのであり、又佛蘭西、英米、及び我國の判例も等しく權利の濫用はこれを保護せざることに決して居るのである。少くともこの點に於て從來の所有權の絕對主義は隣人に對する關係に於てもはやしかく絕對なるものと解することは許されないやうになりつゝある。

第二は十九世紀法律の確立したる大原則たる契約自由の原則が感じつゝある矛盾である。各人は自由意思に基いて如何なる契約も締結することは自由であり、又一旦締結したる以上は飽く迄その履行の責に任ぜねばならぬとされる。愚かなる契約を締結したるものも等しくこれが履行の責に任ぜねばならぬ。愚かなる契約を締結したと云ふことに於て自らを責むべきでこそあれ何人も責むべきでないとされる。これ殆んど嚴格法の主義である。自然法時代を通して信義の原則によつて調節せられたとは云へ、事態の實相はかくの如き原則が行はれ來つたのである。契約自由の原則はかくの如く要求し、かねて各人の法の前の平等を高調するとするも社會に於ける各人の事實上の不平等はこれを否定するわけには行かない。先づ契約の內容を理解しその惹起すべき結果に就て明かな認識なくして契約を締結するものがありとし

て、契約自由の原則を楯としてその完全なる履行を要求することは甚しく事態の公正を失する場合を生ずるのである。そこで少くも相手方の窮迫、輕卒、又は無經驗を濫用して不當に利得せんとする契約の如きはこれを保護すべき理由なしとしてこれを無効たらしむる方法が案出されたのである。獨逸民法一三八條第二項瑞西債務法二一條の如きは明かにこの事を規定し、その他の國々も判例を通してこれを實行しつゝある。

最も問題の焦點となりつゝあるものは勞働者と資本主との間に締結せらるゝ契約である。契約自由の原則に基いて干渉すべきものでないと云ふのが從來の見解であつた。併し乍ら契約の自由なるものは本來兩當事者が平等の基礎の上に立つて自由なる競技者として何等の勢力にも拘束されざる状況の下に於て行はれ得べきことである。然るに十九世紀文明の過程は大企業と富の集中を生じ資本家をして著しく優越なる地位に上せた。これに反して個々の勞働者はその日のパンを得るに忙はしくして終生賃金奴隷たるに甘んぜねばならず、又經濟界又は勞働市場の状況等に通ぜざる結果は著しく弱者たるの地位に立ち、只資本家の提出する條件に對して唯々諾々これに應ずるの外なきに至つた。かゝる状況に於て締結せらるゝ契約は既に契約本來の意義に遠かるものである。故に學者は或は既にこれを附從契約として本來の契約と別個のものとして觀念すべしと云ひ、或は契約にあらずして資本家の定むる規則に服從するの法律現象であると論じて居る位である。こゝに於てか契約自由の原則を貫くためには勞働者をして資本主と對等の地位に向上せしめて契約を締結せしむる外はないわけである。即ち團結の力が重要となつて來るのである。團結權は契約自由の原則のコロラリーとして當然認められざるを得ないと云ふことになるのであつて、これ既に諸國の立法に於て認められた所である。併し乍ら自由なる契約がその本來の精神に則つて行はれることになるのは一國の勞働者の團結組織が極度に發達して後のことである。今日猶何れの國に於てもかくの如き事實は實現されて居らない。そこに社會利益の保護者としての國家が

國家の最も大切なる資源の一たる勞働力の保護のために活動すべき責務ある所以である。かくて十九世紀の末期より各國を通じて社會立法勞働立法の時代に入つた。而して勞働者保護立法は多くは契約自由の例外たらざるなしである。大戰前に於て既に各國は勞働者の賃金を現金拂とするの規定、報酬前貸の制度、休暇を與ふるの義務、疾病に對するの設備等の規定を民法中に設けた。(ドイツ民法六一七條―六一九條、スエス債務法三三九―三四四條ドイツ商法五九條以下營業法、我商法五七六條以下同五九二條以下鐵道營業法六條等參照)又單行法を以て勞働保險法、婦女勞働保護法、少年勞働者保護法、最低賃金法、勞働時間法、工場法、勞働協約法、產業經營者會議法等雇傭關係に於ける契約自由の原則に對する制限を規定する所枚擧に遑あらざる有樣である。ここに至つて契約自由を原則として論ずることは殆んど困難となりつゝあるのであつて、契約強制の時代來るとさへ云ひ得るのである。俸給生活者と雇主との關係、店子と家主との關係、借地人と地主との關係小作人と地主との關係に於て又類似の關係を見出すのである。

次には債權の行使に關して起りつゝある注目すべき傾向である。債務者は債權者に對してその要求を滿足せしむるためには絕對的の義務を負ふとされる。嚴格法時代に於ては屢々その身を奴隸として猶債權の滿足を計ることを要求されたのであるが、現代に於てもこの要求は個人主義的法制の特色として同樣なる傾向を採るのである。所謂不誠意なる債務者に就てはしばらく措く。誠意を以て事に當り猶不幸にして辨濟すること能はざる立場に立つた場合に債務者はその生存を賭して迄も債權者の債權滿足の要求に應ぜねばならず、又かくせしむることが社會生活の圓滿なる進展のために望ましきことであるかと云ふことである。主として病者弱者等の生存保護と債權實現とに關するデリケートな、しかし象徵的意義の深い問題である。これら不幸なる戰場の殘敗者をその最後の線迄逐ひつめることが果して社會生活の目的を達せしむる上から望ましきことであるかどうかと云ふことになるのである。これを最後の線迄逐ひつめることに依て

窮鼠却て猫をかむと云ふやうなことになつて社會の波瀾を一層大にするといふことがありはしないかを虞れるわけである。そこで二十世紀の初頭より歐洲の立法には精神病者の損害賠償責任についてはその生活に必要なる資料を奪はざる限度に止めなければならぬとする制限が認められて來た。米國に於ては家産除外法 Homestead exemption statute なるものが數個の州に於て制定され、動産除外法 Personalty exemptions も多くの州に於て制定され、殊に二三の州に於ては家長に對しては價格五百弗迄の動産は差押の際除外せられることになつたのである。又一般に職人に對してその工具の差押を免除し、農業者にはその家畜と農具を、家長にはその給料の差押を免除することになつて居る。又學説としては破産者解放論が主張せられることになつて居る。要するに債務者は自己及びその家族の生存を賭しても尚凡ての場合に常に信義の原則を守らねばならぬと云ふのが從來の理論であるが、債權者も亦社會の一員たる以上は債務者と共同して、――時としては債務者に代つて、危險の負擔に任じなければならないのではないかと考へらるゝに至つたのである。

以上述ぶるが如き現象は明かに十九世紀法律の法理思想に對しては大きい例外を構成し、從來の法理からは演繹し難きものであることは明かである。學者はここに新らしき法理が芽生えつゝあるものと見る。例外がやがて原則化する法律の進化史の常套事を回顧するものは、誰かここにはぐくまれつゝある新法理がやがて二十世紀法律文化を特色づける所の基調にならないと斷言することが出來やう。そこで現代の學者は生存權の法理を現代法律の基礎として構成しやうと努力して居るのである。努力して居ると云ふのはまだ決してこの法理構成が完成されて居らないことを示し度いがためである。これを說くことは容易でない。只甚しく誤解されて居る一面丈けはこれをここに明かにして置くの必要があらうと思ふ。生存權が權利の名に於て呼ばるゝが故に屢々物權債權と同一の意義に於てある程の給付を國家又は社會に對

して要求し得るの權利と云ふやうに解せられる慮がある。それでは貧民救助法がある場合に扶助請求權ありとするのと異らない。生存權は決してかくの如きものではない。先づ現代の社會に於ける各人の生存が一個の義務として考らるゝが故に、これに對して國家と社會とは各人の生存を遂げしむるためにあらゆる努力を惜しまざるべき責務を生ずるのである。國家のこの責務に對照して是認せらるゝものが反射權としての生存權である。國家はこの責務遂行のためにあらゆる手段方法を盡すの義務がある。法律組織を通してなすこともとよりその一つである。そが法律の方面にあらはれて立法と解釋との基調となるとき學者は契約自由の法理に代へて生存權の法理ありとするのである。誠にカントに依て代表せられその後繼者に依つて主張さるゝ、個人人格の尊嚴を高調するにしても、或は社會倫理を基礎として社會構成員の連帶責任を高調するとしても、苟くも地上に生をうけたるものの何等かの意味に於けるレーゾン・デートルを是認せざるわけには行くまい。既に各人にレーゾン・デートルがあり、各人に社會生活に於ける持分ありとすれば生存することは自己に對するばかりでなく實に社會に對する義務である。古代に於ては素朴乍らかくの如き思想が存在した。團體の鞏固を期待するために各人の生存は團體に對する義務と考へられ、自殺をなすが如きは團體に對する反逆とされ自殺を犯罪とし、犯すものは死屍に鞭つことをしたと云はれて居る。中世キリスト教の世に於ては又別個の方面より自殺が罪惡視されたことは人の知る所である、しかるにフランス革命は著しく個人の自由意志を高調し自己の生命を自ら絶つは罪とせらるべき理由がないものと考へられたのである。かくて自殺が刑名より削られたのである。しかし自殺の濫行が社會生活の圓滿なる進行に對して一の大なる脅威であることは近代人も等しく認むる所であつて、他人の自殺に加工することは許すべからざる罪惡と考へられ、自殺幇助は處罰せらるることとなつたのである。自殺幇助が罪惡視せらると云ふことはやがて自殺そのものも現代思想に於て社會に對する反逆と考へらるべき前提に外ならぬと人々は觀察し

て居るのである。誠に各人はこの生れ出でた義務を果すべく社會に對して生存の義務を負ふ。生存が既に義務であるならば社會利益の保護者としての國家はその生を遂げしむるためにあらゆる手段方法を講ずることを辭すべきではないのである。ここに所有權の絶對性、契約自由の原則、債權者の完全請求權等に若干の制限が是認せらるべき根據がある。而してこの立場を推及するに於ては二十世紀法律が依て以て立つ所の基礎にある大きい轉回が齎されることを示唆されざるを得ないわけである。

六

更にこれを別個の數々の事例に照して考ふる時に、從來の個人主義の法理を以てしては到底說明し得べからざるものが發生しつゝあるのである。

第一には無過失損害賠償の責任が發生し確立されつゝある。團體を主として考へたる原始社會が無過失賠償の責任を廣く認めて居つたと解さるゝことは注目すべきことである。がローマ法以來過失なければ責任なしと云ふことが法律關係に於ける大原則となり、殊に自由意志を尊重するに至つて益これは動かすべからざる原則とされて居たのである。しかし當事者の双方に傳承的意義に於ての責むべき過失なくして、しかも現實に損害を發生する場合が近世社會生活に於ては可なり頻繁になりつゝある。例へば特別の過失なくして工場の機械にふれ、電力にふれて死傷するが如き場合である。この場合勞働者に過失を擬制して又は不可抗力を理由として何等救濟の道をも開かざることは甚しくわれ〲の公平の觀念に背くものである。そこでかかる場合に何等かの形式でその損失を塡補せしむべしとする要求が起つて、一九〇六年英國の勞働者補償法、一八九八年佛國の責任法、一八七一年獨逸の責任法等は何れも無過失賠償の場合を規定し

た。我が工場法一五條鑛業法八〇條等にも「職工又ハ鑛夫ガ自己ノ重大ナル過失ニ因ラズシテ業務上負傷シ又ハ疾病ニカカリ又ハ死亡シタトキハ事業主ハ一定ノ救濟ノ責ニ任ズベキモノトス」この規定を設けて雇主の責任を擴張したのである。併し乍らこれを例外的に擴張するだけではまだ充分でないので、危險なる事業を營むものが他人に危害を加へたる場合には常に被害者を保護すべしとする法理が發達し、一九〇九年の獨逸の自働車に關する立法の如きは「事業主（又ハ所有主）ハ一切ノ責任ヲ負フモノニシテ、被害者ハ相手方ノ過失ヲ證明スルコトナク、損害賠償ノ請求ヲ爲シ得ベキモノトス」に至つた位である。同樣立法は各國に行はるゝに至つた。即ち企業者又は雇主に何等の過失なき場合にも尙その企業より生ずる偶然の事實たる損害に對して企業たるものに辨濟の責任を負擔せしむると云ふ新形式が發達しつゝあるわけである。

かくの如き新現象に對しては從來の各人は自己の自由意志に基いて行動をなし自己の過失についてのみ責任を負ふの主義では說明が出來ないこと明かである。學者はその法理構成の根據を求めて、利益の歸する所に損も亦歸すと云ひ、危險なる事業を營むものはその危險に對して責任を負ふと云ふやうに云ふのであるが、當事者双方を取つて考へて見ればそこに責任の根據を見出すことは困難である。社會生活の圓滿なる進展と云ふことを顧慮することに依てここに利益主義危險主義も公平に要求に合し法律目的に副ふものと云はなければならぬ。事態の公平を求むることはやかて社會生活を進展せしむる所以である。故に事業の性質によつては再度この無過失賠償の要求は一定の制限に服さねばならぬのである。自働車の事故に就て無過失責任を認むるはよい、けれども飛行術の發達今日の程度に於て飛行機の事故に就ても無過失責任を認むることは飛行術の發達を充分ならしめ得ず、從て法律の社會目的を實現する所以でないと解さるるのであつて、立法例も亦等しくこれを顧慮して居る所である。要するにこの問題は社會生活の必要の見地から何人がそ

の損害を負擔するに最も好都合の地位にあるかを定むるを以て正當とされることになりつゝあるのである。

次に注目すべき現象に近時從來の公共物 res communes 及び無主物 res nullius と云ふやうなものが次第に公物 res publicae に變換されると云ふことである。流水、海水、土地その他の天然資源の如きローマ法以來公共物又は共有物と考られ、それらのものは何人によつても所有せらるべきものでなく、かつその使用は萬人に對して共通であるべきだとされて居たのであるが、實際は此等のものを使用する個人的權利が發生し又これら權利の保有者たる個人を考ざるを得なくなつたのである。法律はいつの間にかこれらの物の上に使用權を有する人を定め彼等に個人的所有權を與へた。又ある物は本來無主物であつた。何人も始めには所有して居ないのであるが、併し所有の意思を以て占有したものがその所有權を獲得することになつた。然るに兩者とも近時次第に國家の所有に歸せしむる傾向を取りつゝある。即ちこれらの物は「國民のために國家に信託されたる」ものと解せられるのである。そは社會全體のための自然資源であるこれらのものの保存及び使用は何人ともそのものゝ所有權者とせずに、國家をしてその保存及利用上に最適の方法を講ぜしむるに如かずとする考の發達した結果である。天然資源利用の社會化と云ふことが出來やう。

次に注目すべきは戸主に對する關係に於て家族の地位の上に起りつゝある變化である。羅馬法の家長權なるものは家長のために存するものであつて、家族のために存するものではなかつた。近世法に於ても、子に對する父母の自然權 Natural rights of parents と云ふものが認められて居たのである。我國舊時の家長權も略同樣のものであつたと解される。しかし近時の民法は親權は明かに子の保護のために認められて居るものと解せられる、而して更に一層その保護を完全にせんがために各國に於ける近時の少年法規は一方に於て不當なる親權の行使を禁じ時としてその失權を規定すると同時に、子を適當に國家の直接の保護の下に置かんとするものである。その最も代表的なものは一九〇八年の英國

の兒童條例である。かつては父母の利益が子の利益以上に重んぜられたが、今日では先づ子の利益及び社會の利益と云ふことが考られ、父母の個人的な利益は第二次に考へられるやうになつて來たのである。社會に於ける子の地位と云ふものが顧慮せられること〻なつたのである。

法律の世界に擡頭しつ〻あるかくの如き事例を列擧してゆくに於ては殆んど限りがないであらう。以上列擧する少數の事例もその象徴する意義を探りその赴くべき所を考ふるに於ては二十世紀法律文化の特徴を豫測するには既に充分であらう。かくの如き幾多の現象はやがて現代の法律體系が全體として社會主義的方向に特色づけられて居ることを示すものである。少くとも十九世紀の個人主義的權利の法理を貫かんするに於てはそこに甚しい矛盾と破綻とを生ぜしめずには置かないものである。社會生活の必然が權利の義務附帶權利行使の社會化を余儀なくせしむるのである。今日まで既にぼつ/\あらはれつ〻ある生存權の法理と云ひ、社會的正義の法理と云ひ協同體理念の法理と云ひ社會的連帶責任の法理と云ひ、皆これらの事象を省察しこれを統一的に合理化しやうとする試みに過ぎない。既にデュギーの如き先驅者は權利萬能の法律學を以て正當に法律現象を説明するに適せずとして相互依存、連帶責任の新法律學を企圖して居る位である。その全ては今日に於て未だ充分に成功せるものと云ふことは出來ないのであるが、しかし法律の單位が權利よりある他のものに移りゆく趨勢もこれを否定することは出來ないのである。二十世紀の法律が古代法、嚴格法、自然法、及十九世紀法律等に對照していかなる特色を有するかは後世史家の觀察に俟たねばならぬものであるが、十九世紀法律が個人主義の法律であつたと云ふことに對應しては二十世紀の法律が社會主義的ならんとして居ると云ふだけは確實に今日に於て豫言し得る所である。ヴイノグラドフが全世界の文化史的法制史を編んで各時代を先に述べた所に從て分類し現代を以て正に社會主義的法制時代の劈頭に地位を占むべき時代としてその大著の最後の卷をこれに捧げやうとして居ることは何人もその妥當を否定することは出來ないと思ふのである。

物價問題より見たる税制整理

土方成美

一

地震の豫言が當らなくて、人は地震學の實益を疑ふ。天氣豫報が當にならないで、氣象學の効果が問題にせられる。正確の程度の多い自然科學に於て尙然りである。社會科學になつて來ると益々其理論が實際生活にどれだけ役立つかと云ふことを問題にすると、隨分其實益が疑はれる場合が多い。理論が將來の政策の示針となるよりも、寧ろ實際の進展の跡を理論付けて見て行くに過ぎない場合が多い。併し少くとも人間が理論的な要求を持つて居る以上、何とか理論で基礎付けが出來ないと中々納らない。從つて正しき理論が積極的に何等の實益を社會に齎らさないとしても、誤つた理論の社會に及ぼす害毒は甚しいものがある。少くとも誤つた理論の誤れる所以だけを明にしなければならない。世上傳へられる所謂學問上の理論で、私の見る所よりすれば、隨分誤つたと考へられる議論が中々多い。而かも其所

調理論が一種の信條となつてしまつて、之に對する批評の如きには到底世人が耳を傾けないやうな種類のものも少くない。

例へば爲替相場の騰落による貿易の自然的均衡論の如き此例である。爲替相場が下ると輸入が不利になり輸出が有利になる。從つて輸出が促進せられ、輸入が沮止せられて貿易が自ら均衡がとられると云ふ議論である。此議論は我國の有力なる實際家理論家によつて支持せられてゐるやうであるが、概活的一般的に云ふならば此議論は誤りであると思ふ。何となれば、爲替相場の下落する結果は、成程相手國からの輸入が不利になるだらう。併し同時に此國から輸出品の原料を輸入してゐる、或は生活必需品を輸入してゐると云ふやうな場合には、輸出品の價が高くなつて必しも輸出に有利になるとは云へない。勿論我國に於て對米爲替が下落すると、生糸の米國への輸出が有利になり、米國からの輸入が不利になると云へるだらう。併し一方米棉の買入には不利となり、從つて對支爲替等が我國に對して不利にならない限り、棉糸の對支輸出はそれだけ不利になるわけである。其結果差引して尙輸入に不利輸出に有利と云ふ結果になるかも知れないが、何國に對して爲替相場が下落したか、又如何なる品物の輸出輸入が有利或は不利になるかと云ふことを明確に考へずして、爲替相場が自ら貿易の均衡を推持して呉れるなどと唱へるのは誤りも甚しいと思ふ。

何れの國も貿易外の債權のない限り永久に渡つて輸入超過を續け得ないのは見易き道理である。併し、爲替の所謂自然的調節作用に俟つて、自ら貿易の均衡がとれるなど〻考へるのはとんでもないことである。若しそうであつたら歐洲大戰以前の我國の引續いての入超は如何して說明するか。當時我國は今日の如く金兌換を停止し、又は金の輸出禁止等を實行してはゐない。論者の議論よりすれば金の「自然的」なる移動によつて自ら貿易のバランスを回復した筈である。又今後と雖も國民は如何に贅澤をしても怠けてゐても金の移動さへ自由にして置けば安心であると云ふ結論になる。そ

れでは歐洲大戰前の我國に於ける引續いての入超を如何に說明するか。未だ〳〵年月が不足である。もつと長く放任してゐたら歐洲戰爭がなくとも、貿易は自ら均衡を回復したと唱へるか、それならば何年かゝれば回復すると云ふのか。論者の金の自由なる移動による爲替の貿易調節作用の如き到底首肯し難き議論である。

二

近時我國に於てよく行はれる歐洲大戰時に於ける物價騰貴は、其原因通貨側にありと云ふ議論、又我國に於て不景氣にも拘はらず物價が下落しないのは其原因は通貨が多過ぎることにありなどの論も矢張り以上述べた如き種類の議論に屬すると思ふ。深く其內容を分析することなく、漫然たる通貨數量說なるものが人心に浸潤してゐるためにかくの如き議論が世上に行はれるに外ならない。

茲で少しく物價問題より見たる稅制整理を論ずる前に、物價問題の重點を捉へるために通貨數量說の主張其者を檢して見やうと思ふ。

通貨數量說と云へば明瞭なやうだが、所謂通貨數量說論者中に數へられる人々も殆ど人每に其主張を異にしてゐるやうであつて、其文獻の如きもミーゼスの云ふ如く一人の人間の一生には克服し切れない程ある。

從つて、通貨數量說の本體特徵的な主張其者も極めて明確であるとは云へない。若し通貨の數量と物價との間に何等かの關係を認めるのが數量說の特徵であるとすれば、殆ど總ての實際家經濟學者は數量說論者であると云はなければならない。

併し苟も通貨論上他の學說に對して特に數量說と云ふ以上は、以上の如き廣汎なるものでないと見なければなるま

い。

或は數量說の特徵は、通貨の購買力は通貨を構成する素材たる金屬の價値に基かずして、通貨の數量によつて變動すると云ふことにあると解釋することも不可能ではない。併しかく解すると、數量說とは通貨の購買力の基礎を地金に求める地金學說に對する名目說と云ふことになつて了ふ。玆にも通貨數量說の特色を求め難いと思ふ。

數量說をして特徵ある、一つの主張を有する學說と解するためには、どうしても以上のやうな點と違つた特色を見出さなければならない。カツセル教授は數量說の本質は、物價平準の變動原因を通貨の數量の變動に歸して行くにありと主張してゐるが、私も數量說の本質は、物價平準乃至平均物價の變動原因を通貨側に求める點にありとしなければならないと思ふ。(尤もカツセルは所謂財貨側に因する物價平準の變動も存在することを否定しないのであつて、此點カツセル教授の主張が私には不可解のものになつてゐる)。フイツシヤア教授も物價平準が流通貨の數量に比例して變動するとなす點が數量說であると主張し、他方物價平準は決して通貨數量變動の原因ではないと云ふこと等から見て、此點に於てはカツセル教授と同見解と見ることが出來やう。尤もカツセル教授の主張とフイツシヤア教授の主張とは著しく異つた點を有することは否定するを得ない。玆には代表的な數量說論者の主張を一々比較論評するの遑がない。之は他日の機會に讓り度いと思ふ。今は左に最も代表的なフイツシヤア教授の數量說を簡單に紹介して之を批評し本論に入らうと思ふ。

彼は物價平準が購買力を反映するものとして「小切手及手形を姑く除外すれば、物價平準は(一)流通貨幣の量(二)その支拂能力或は流通速度(三)取引の量によつて定る」とする。かくて彼は(二)及び(三)が一定であれば物價平準は(一)に依存するものであつて、此意味に於て數量說は正しいとするのである。

(一)交換方程式

彼は上述の關係を交換方程式によつて說明せんとする。交換方程式は一般に經濟生活に於ける物財の流と通貨の流との間の方程式である。交換方程式は一定の社會一定の時に行はるゝ全交易の數字的形式に於ける說明である。」即ち簡單に個々の取引の集積として考へられてゐる。併し、同一時に於て同一の貨幣によつて多くの（一つ以上の）取引が行はれるのが普通であるから、公式の通貨の側は流通場裡にある通貨の量よりも大である。」

各交易に於て、支拂はれる通貨と購はれる財貨とは其價値を均しくするから、其集積たる交換方程式の兩邊が價値を均しくすべきことは、フイツシャアの力說する所であつて、今M、V、P、T、を以て夫れ夫れ流通貨の平均量、その流通速度平均物價取引量を表はすものとすれば次の方程式を得る。

$$M \times V = P \times T$$

此方程式から彼は通貨量の變化の正常なる作用は、之に比例的な一般物價の昇騰を惹起するものであることを論證せんとする。以下彼の論ずる所を見る。

(二)通貨の量の邊

(イ)眞實の通貨

眞實の通貨には其素材が通貨以外の使用に於ても、通貨に於けると同樣の價値を有するprimary moneyと、其價値が、所有者がそれを他の財貨と交易し得ると云ふ信用に基礎を置く信用通貨 fiduciary money とがある。primary money が交易に使用せられる所以は種々である。併し就中、量的要素が決定的なるものであるとして、氏の數量說的作用の深き原因は通貨の本質より生ずるものであるとして之を說明する。彼自らの云ふ所に依ると、「如何なる方法によるも、邪の

數の增加は、之に相應する物價の昂騰を惹起する。量目でなくして數が決定的なるものであつて、數に依つて其價値を決定せらるゝ點が、通貨の特色である。之によつて其購買力の特質が表明せらるゝものである。或一定量目を有する百單位の通貨が他の量目を有する百單位に變ぜられても、各單位の價格は依然同一であらう。通貨數量說の論據は通貨のみが有する其本質的の特性、即ち人間の欲望を滿足せしめ得るにあらずして欲望充足の能力を有する財貨を購入する力を有することに存する。」

氏は又通貨の素材を構成する金屬の內在的價値（地金としての價値）を、通貨以上の性質と調和せしめんとする。金地金の外部からの流入は、通貨の增加を來し、從つて其購買力を減少せしめるものであるが、地金と通貨との關係は、地金と通貨との購買力の相違に依つて決定せられる。氏は斯くして如何にして地金と通貨とが同一の購買力を有し、又通貨の購買力が直接に其量により、間接に地金の價値と、その量とによつて決定せられるかを說く。

（ロ）通貨の流通速度、流通場裡にある通貨の量は、一定の期間內に於ける其流通速度を考察せらるゝによつて、而めて重要なる意義を有するものになる。氏は通貨の流通速度は、財貨に對して支拂はれたる總價格を、流通せる通貨の量を以て除したる場合に得られるとする。彼は流通速度は通貨の量とは獨立し、經濟狀態殊に個人の慣習によつて定まるものであつて通貨量の變化は流通速度に影響を及ぼし得ないと主張する。

（ハ）預金通貨、預金通貨とは之に對する小切手を振出しうる預金である。氏は預金通貨を交換方程式に誘入したために數量說が擴張せられて、其學說は新しき意義を有するやうになつた。舊き數量說は唯銀行券のみを考慮したに止る。

今預金通貨の量をM'その流通速度をV'とすれば上述の方程式は次の如く修正せられる。

$$M \times V + M' \times V' = P \times T$$

かくの如く交換方程式に預金通貨を導入することによつて、通貨量の一般物價平準に對する作用は何等弱められるものでなく反つて強められる。預金通貨の物價に及ぼす作用は通貨の物價に及ぼす作用と何等異る所がなく、其增加並に流通速度は通貨の增加並に其速度と同じく物價平準を高めるものである。然らば眞實の通貨と預金通貨との關係は如何であるか。

氏は預金通貨は本質的には眞實の通貨量と直接なる比例關係を有すると信じた。即ち彼は信用は無より生ずるものではないとして銀行平衡を論じ、銀行は一般に準備率を一定ならしめんと努力するものであり、かくして銀行の信用の背後には究極に於て眼に見ゆる、捕捉しうべき社會の富が存在すべきものであることを主張した。

茲に注意を要するは氏が信用を論ずるに當つて、唯銀行信用のみを論じたことであつて、彼にとつては信用と預金とは全然同一なもの、否后者はより高位なものと考へられた。氏によれば銀行預金が事實上本質的に支拂手段たるものであつて、小切手は單に銀行預金の移轉の證書である。「小切手は支拂手段にあらずして、之によつて代表せられる銀行預金が支拂の手段である。」

以上の信用に關する彼の所說は眞實の通貨量と信用量との間に存する正常狀態を論ずるに當つて其基礎となるものである。正常狀態に於ては、兩者の間に一定不變の關係が存在すべきことを立證するために、氏は二つの事をあげる。一は銀行政策の重要なる要求の一である眞貨の不足を避けんとする努力であつて、銀行はそのために充分なる眞貨の準備を必要とすることである。勿論各銀行により其關係が種々に異ふのは云ふ迄もないが、各銀行が預金と準備金との關係即ち準備金率を夫々一定ならしめんとする場合に、之を一國の全銀行に就いて見れば、平均せられた一定の關係が存すべきは必然の結果であると主張する。かくして氏は交換方程式に於ては眞貨と預金通貨との間に不變の關係が存在すべ

きことを主張し、信用を以て眞實の通貨量の函數、換言すれば物價變動を眞貨量の變動のみに歸せんとする。今一つの事實は各個人、各社會が其支拂に際して眞貨によるべきか、又は小切手を以てすべきかは其便宜乃至慣習によつて決定せられる事實である。之に關する云ふに足るが如き變化は、殊に長き期間に亘つて考察する場合には起り得ないものである。

交換方程式の通貨の例に就て云へば、氏の見解は、數量說を通貨の特質と結び付けたこと、預金通貨の量を眞實の通貨量に歸したること、並に流通速度を通貨量とは無關係なるそれ自體獨立の要素と看做したことを以て其特色とする。

（三）過渡時期

以上述べ來つた數量說は、正常狀態に於てのみ適用せらるべきものであつて、眞貨と銀行預金との間の一定關係を前提して甫めて通用し得る。この under normal condition なる語は氏にとつて特殊の意義を有する。

氏は transition period を記述するに當つて、通貨の量及其他の交換方程式の項の變化を惹起すべき一時的作用と、後述せんとする繼續的作用即ち究極の作用とを區別した。

「嚴密にMの增加の物價に對する比例的作用は、究極の正常作用であつて、過渡期の經過后のことである」

氏に依れば過渡期とは物價平準とは無關係に物價の上下する時期であつて、物價の上下は物價變動に對して金利が充分に適合しない、即ち物價が上つても直ちに金利が之に追隨しないことによつて起る。

（四）交換方程式に對する間接の影響

氏は物價平準に對しては交換方程式の五項のみが直接に作用するものであると主張し、物價平準を間接の原因から獨立せしめ、夫等の原因は唯五項を通じてのみ作用し得るものであると考へたのである。生產技術の進步、企業の發達、資本の集積等は先づ取引を增大せしめ、間接に物價平準を低下せしめることが出來、浪費、小切手の使用の增加は流通

速度を增大せしめることによつて、間接に物價平準を上昇せしめ得る。次いで氏は通貨に對する影響として（一）通貨の流出入（二）通貨の鑄造及鑄潰し（三）通貨金屬の產出及消費、（四）通貨及銀行制度の影響を評論してゐる。氏によると、鑄造せられた通貨と鑄造せられない地金の價値とが相異る場合には、鑄潰しは通貨の量を減じ、地金の量を增加せしめ、かくして地金としての價値は下落し、通貨としての價値は高められ、物價平準は下落し、地金と通貨との間の均等は恢復せられる。而し兩者共通に見れば、其價値は金の獲得によつて決せられる。即ち金鑛山の採掘し得る量に依るものであつて、其限界費用が、金弗貨より少なるときは產出が繼續せられる。

次に今日の國際交易の發達は通貨問題物價平準に國際的性質を賦與し、同一本位制によるときは物價平準は相互に影響し、かくして平均する傾向がある。而して金の流動は各國に於ける購買力によつて決定せられる。

要之、方程式の五つの原因はそれ自體、より深い原因の作用であつて、取引量は人間欲望の發化、產業の分化發達、運輸交通の改善によつて增大せられ、流通速度は浪費、信用の利用、交易の促進によつて高められ、通貨量は金の獲得即ち新鑛山の發見、技術の進步により、預金通貨は銀行組織の擴張信用の增大によつて高められる。而して之等唯五項を仲介として間接に物價平準に作用しうべしと云ふ。

（五）交換方程式の因果關係、

交換方程式は代數方程式ではなく因果方程式である。故に氏は之が如何なる範圍に於て因果關係に關するものであるかを論證した。彼の說く所によるとMの減少、M'の減少、從つてPの減少を意味し、更に正常狀態に於ては、M、M'が半減すればV及びQは變化せずしてPは半減するのである。Vは技術的條件及個人の慣習によつて定りMと直接の關係がないから、Mの倍化と共にVが半減した爲めに物價に何等の影響をも及ぼさないと云ふやうなことは不可能である。

又Tは欲望の變化乃至產業の發達等によつて決せられ、通貨の量に依存するものではない。

（六）物價平準と個々の物價、

氏は物價平準が他の項に對する原因たることを否定する。今假りにMM′VV′及びTの變化によらずして、物價が二倍になつたとする。物價の高き國へは通貨は流入しないから、通貨は鑄造せられず、從つてMは增加しないのみか、反つて通貨は物價の低い方向へ流出して、其量を減ずるだらう。從つてM′も增加せず他方VV′は變化しない。又高き收入を得て高き支拂をなすから、個々經濟の收支關係は從前と異らない。從つてTも變化しない。かくして物價平準は他の要素に作用しうるものでなく、正常の狀態の下に於ては、唯一の絕對的受動的なる要素であると云ふ。

三

以上のフイツシヤアの議論に對しては各種の批評が試みられてゐるが、一々之等を紹介する煩を避けて卒直に私の考へることを述べて見る。

先づフイツシヤアの交換方程式に於ける因果關係の說明から點檢を試みるに、通貨の數量の變動はそれ自身、流通速度や取引量を變化せしめないと主張する。流通速度は商業上の慣習によつて定まるものであつて、通貨が多くなつたからと云つて人が特に從來より多くの割合の手許金を持つたり、又は小切手取引による部分と現金取引による部分との割合を變更したりするものではないと主張するが、これは必しもさう云へないと思ふ。フイツシヤア自ら通貨が增加して物價が騰りつゝあるに際しては取引が活潑になつて、流通速度が增加することを認めてゐる。唯氏は此狀態を以て單に過渡時期に於ける現象とし、正常なる結果ではないとするが、此點は直ぐ後に論ずることゝする。

取引の量に就ても同樣である。生產狀況や交通設備が變化しない限り、通貨の變動の數量が夫れ自身取引の量に影響するものではないと云ふが、通貨の增減が物價を動かすならば夫れに從つて取引の量が動くことも常識上認めざるを得ない。通貨が增加し、物價が騰貴しつゝある時期に於て、取引量が增加することは常識上も認めざるを得ない。氏は此點に於ても亦之は單に過渡的時期に於ける現象であると云ふ

そこで氏の所謂過渡的時期が問題になる。氏は頻りに正常的な結果を云爲するが、抑々如何なる時點をとつて考へて見ても、一時點に於て取引せられる通貨の總計の價値と、之と交易せられる財貨の價格の總計とが等しくなることは當然自明である。抑々財貨は貨幣によつて計られたる價値に於て交易せられるものであるから此事あるは當然である。數量說が若しこんなことを單に主張してゐると云ふならばそれ迄であるが、之は特に主張するにはあまりに當然自明である。氏は當然自明なることが重要であると云ふが、之は又人間には足が二本あると云ふこと程當然自明である。數量說は少くとも通貨の增減が物價に如何なる變動を及ぼすかと云ふ動態論であつて、フイツシヤアの所謂過渡的時期こそ重要である。此點は通貨なるものが抑々動態に於て重要をなすものであることを知れば自ら明になる。抑々通貨なるものが此の世の中に行はれるのは財貨と財貨との物々交易がうまく合致しない。時間的に斷齬がある。財貨を未だ提供しない人間に、財貨を與へる代りにとつて置く符徵である。信用が發達しないしそれかと云つて何か現物を持つて來なければ、財貨を與へないと云ふのでは、双方にとつて不便である。こんな要求から通貨は成立したものと思ふ。通貨は本來動的なものである。(信用が一層發達して來て信用によつて此斷齬が調節せられるやうになると、通貨は其後から一定の時期毎に此斷齬を調節して行くやうになる。)ところが此交易の斷齬は動態、卑近に云へば經濟狀態の變轉期、即ち戰爭革命等の場合に最も多い。歐洲戰爭、我國の明治維新等に於て通貨が多く發行せられたことを見ても、此事は明瞭であ

る。靜的な同一狀態を繰返すやうな經濟狀態の下では、通貨も重要ではないし、數量說の如きも意味を失ふ。

氏は又物價平準が原因でないと云ふが、物價平準とは個々の財貨の價格の平均である。平均が原因でないことはもとよりである。併しそれだからと云つて、個々の財貨の價格が通貨の數量變動の原因たり得ないと云ふことは出來ない。後に述べる如く財貨の價格の騰貴、又は其豫想なくして通貨の增加が起る方が少いと見る方が正しいと思ふ。

更に細に內容に就て考へて見れば流通速度と云ふ觀念其測定も稍明確を欠く。フアイレンの云ふ如く、單に金屬通貨等が行はれた場合ならば、一定期間に通貨が所有者を代へる度數と云ふやうなことでよいかも知れないが、預金に對して小切手を振出すと云ふやうなことが行はれるやうになつて來ると、預金乃至小切手の流通速度と云ふことになると觀念上も明確を欠いて來る。殊に其測定は如何にするかと云ふことが困難な問題になる。フイツシヤアは小切手を振出し得る預金を以て通貨とし小切手は單に其移轉手段と見て、預金の流速速度を預金手形交換高との比率に求めんとしてゐるが、かくすれば、銀行劵の如きに於ても、銀行の發行能力と銀行劵流通額との比を以て銀行劵の流通速度と見るのが當を得たことゝも云へるだらう。殊に注意すべきは流通速度なるものは、キルマイヤアの云ふ如く通貨の屬性ではない。一度市場に出た通貨は一定期間內に必ず何回轉かをなすと云ふものではない。何回轉するかは市場の狀況、價格の有樣によつて違ふと信ずる。

其他正貨の量と預金通貨との間に正確な比例關係が存在するとなす見解も、到底承認するを得ない。準備率は景氣不景氣によつて伸縮するものたることは否定するを得ないだらう。

氏の統計的立證に到つては之亦證明たる價値を否定せざるを得ない。第一物價平準なるものはフイツシヤアの考ふる如く一定の計量し得べき量であるとは私は考へない。(此點は社會科學第二號參照)併し此事は暫く別問題とするも、物

價指數の採り方には色々あつて、採り方如何によつて結果を異にすることは世人の知るが如くである。流通貨に何を計上するかによつても結果が違つて來る。流通速度の計算に到つては、氏とケンメラーとの間に既に論爭の存するところである。

以上稍冗長の嫌ある程、フイツシャアの所論を批評したが、私の重點を置くのは更に以上の點よりも寧ろ次の點にある。フイツシャアと共に一般世人も、物價騰貴の原因に二様ありとし、一は通貨側に存する原因、他は財貨側に存する原因であるとする。之に對してはフアイレンが經濟社會に於て、通貨の流と、財貨の流との二つが存在してゐるとの見解は採用出來ない。經濟社會に於ては寧ろW—G—W商品—通貨—商品と云ふ一つの流があるのみである。故に通貨側、財貨側を云爲することは不可能であると云つてゐる。

私は通貨の本質から見て、所謂財貨側の原因通貨側の原因と對立して物價變動の原因を考へる考へ方を否定し度いと思ふ。抑々地金說を採つて通貨も亦一つの商品であつて、其價値は地金の價値に基くとなす見解を採用するならば少しく別論であるが、通貨を以て、社會產物の參加可能性と見やうと、交易手段と見やうと、兎に角通貨其物は夫れ自體目的ではなく、一種の手段であるとするからには、通貨其物に原因がありとはどうしても考へることが出來ない。寧ろ原因は總て財貨側にありと見る方が當を得てゐると思ふ。

世人が、一般に物價騰貴の原因通貨側にありとなす場合の最も著しい場合を考へて見ると、金鑛の發見による金貨の增加之に基く銀行券の膨張、財政上の目的よりする不換紙幣の發行等である。併し第一の場合金鑛が發見せられて金が、多く採掘せられ而かも之が金貨になるのは、要するに金の生產費が通貨としての購買力よりも少いためである。所が通貨の購買力は物價の反面であるから、此の場合に於ても原因地金としての金、並に其他の財貨側にありとも言へる。

財政上の目的から不換紙幣を發行する場合に於ても、何等かの財貨の獲得、分配變更を目的とせずして漫然不換紙幣を發行することは考へられないから原因は矢張り財貨側にありと主張し得られる。

フイツシヤアは交換方程式以外の通貨の數量に影響を及ぼす間接の原因を數へてゐるが、之を見ても通貨其者に原因ありと見るの困難なることは明瞭であらう。銀行が信用を擴張する場合に於ても漫然擴張するのではなく、財貨の價値の騰貴乃至其豫想（當れると否とを問はず）によつて企業を擴張せんとするものが生じ、之の要求に應じて信用を與へる場合が寧ろ普通である。

井上前日銀總裁は其近著戰後に於ける我國の經濟及金融（私は此著述によつて啓發せられる所が多かつた。かくの如き著述に對しこんな議論をするのは的外れであるが）に於て、大正四五年頃以來の我國の物價騰貴は之は輸入の杜絕、軍需品の不足等財貨側に原因があつたが、大正八年から恐慌に到る迄の物價騰貴は寧ろ通貨が膨張し過ぎたことが原因であると云ふ風なことを述べてゐられる。私は此場合に一方のみを通貨の膨張による物價騰貴とし他を財貨側に因する物價騰貴でありとすることは如何かと考へてゐる。成程大正八年以後經濟界は空景氣に支配せられて放慢であつた際、銀行が貸出を愼しんでゐたら物價騰貴の勢は或程度迄沮止し、恐慌の害惡も輕減出來たであらう。しかし銀行が此場合貸出を警戒しなかつたために物價騰貴が沮止せられなかつたからと云つて此場合の物價騰貴のみ其原因通貨側にありとなすことは困難である。大正四五年來の場合に於ても、銀行が輸出の杜絕を恐れず貸出を控へてゐたら物價騰貴の勢力は沮止出來たであらう。然るに貸出を行つたために物價騰貴を起した、此場合も物價騰貴に銀行政策が關與した點に於て大正八年と異らない。銀行の政策如何によつて物價の騰落を左右し得ることは明である。銀行政策が之に關與したと云ふ理由で物價騰落の原因を通貨側に歸して行かんとするならば、寧ろ總ての場合に於て物價の騰落は其原因通貨側にあ

りと云はなければなるまい。私は前者を以て銀行政策宜しきを得たる場合、後者は當を得ざる場合と名付けることは出來ると思ふが、一方に以て原因財貨側に根據ある場合、他方は單に通貨側に因する場合とするのは困難ではないかと考へてゐる。

以上を以て極めて粗雜ながら通貨數量說に對する批判を終つたつもりであるが更に附言すべきは、一般に通貨の全體としての數の增減、物價平準の高低と云ふことが問題にせられるが、物價に於て問題になるのは平準ではなくして高低關係である。物價が高くて困る。引き下げ度いと云ふ論者も自分の所得、即ち自分の販賣する財貨乃至勞働力の價格は引き下げないで他の財貨の價格を引き下げると云ふことを主張してゐるものと見なければならない。自分の販賣する物品の價格も他の財貨の價格も一樣に下つたら差引損得なしである。物價に於て問題になるのは、物價平準ではなくして、物價相互間の關係である。從つて通貨に就ても全體の數量の增減が問題ではなくして、其分配狀態の變動である。若し總ての人が今迄より一樣に二倍の金滿家になつたら、今迄と少しもかはりはない。然るに通貨が或所に增加して或財貨が價格が特に騰貴する。或は反對のことが起ると云ふ點に問題がある。所謂數量說論者は此點から見ても問題の重點を逸しつゝあるものではないかを疑ふるものである。

五

物價問題より見て重要なのは通貨の絕對的數量ではなく其分配狀態であることが明になつた。所で租稅は通貨の分配の變更である。物價問題より見て租稅の重要なるは云ふ迄もない。財貨の價格の相互關係は購買力の分配狀態如何によつて變動するのは見易い理屈である。酒呑みの手に通貨が多く這入れば酒の價格が高くなり、牡丹餅喰ひの手に通貨が

多く集中すれば牡丹餅の價が高くなると云ふ風である。而して此價格の變更がそれ自體反面から見ると分配の變動である。酒が高くなつたことは、普通の場合酒屋乃至酒製造者の所得の増加である。故に租税は當然價格に變動を齎すものである。

租税は價格を高めるか、低めるかと云ふに、租税は或場合に或財貨の價格を高め、或場合に或財貨の價格を低めると云ふの外はない。一般的に高めるとか、低めるとかを斷定することは出來ない。或物品に消費税をかけた場合には當該財貨の價格を高める傾向が著しい。例へば我國に於て酒造税は屢次増率せられたが共都度、價格を上騰せしめてゐる。酒に就ては原料たる米の價格が價格を動かすこと重大であるから、以下増率前後の酒の價格と米の價格との双方を見るに、

第一回二十九年十月一石三圓の増徴に際しての清酒の價格變動は次の如くである。

年次	清酒一石	米一石	税率(一石)
	圓	圓	圓
二十八年	一七、二三	八、二一	四、〇〇
三十年	二四、二〇	一一、八一	七、〇〇
増	六、九七	三、三〇	三、〇〇

第二回

年	清酒一石	米一石	税率
三十年	二四、二〇	一一、八一	七、〇〇
三十二年	二七、四四	九、八四	一二、〇〇
増△減	三、二四	△三、二四	五、〇〇

第三回　三十四年十月增徵

年次	淸酒一石	米一石	稅率
三十三年	三〇、六八	一一、三二	一二、〇〇
三十五年	三二、三八	一二、〇七	一五、〇〇
增△減	一、七〇	、七五	三、〇〇

第四回　四十一年三月增徵

年次	淸酒一石	米一石	稅率
四十年	四一、九〇	一六、〇二	一七、〇〇
四十二年	四三、四九	一二、五四	二〇、〇〇
增△減	二、四〇	△三、四八	三、〇〇

（淸酒は上一石、米は玄米上一石共に卸賣價格農商務統計表による）

第五回　大正七年四月增徵

年次	淸酒地廻上一石	玄米上一石	稅額
大正六年	五一、七七	一九、九七	二〇、〇〇〇
七年	六七、八〇	三二、八五	二三、〇〇〇
增△減	一六、一七	一二、八八	三、〇〇

第六回　大正九年八月增徵

年次	淸酒地廻上一石	玄米上一石	稅額
八年	九四、九〃	四六、八九	二三、〇〇
九年	九九、五〇	五五、八一	（二三、〇〇 三三、〇〇
十年	九九、五〇	六七、九三	三三、〇〇

(以上、主税局年報による。)

以上の數字によつて概略酒造税の増徴は大體に於て清酒の價格を高め乃至低落せしめたことが知られる。

理論上から云ふと所得税等を課すると、或人の購買力を減ずるから、其人の財貨の購入が減じ從つて或財貨の價格を下落せしめるわけである。併し所得税等を課せられた場合に購入を差控へる財貨は種々雑多であつて、到底之が如何なる品物の價格を低下せしめたかを明瞭に知ることは困難である。

のみならず、所得税を増徴するやうな場合は、又政府の支出も大なるを普通とするから、政府の需要する品物が騰貴する傾向を持つてゐて、或財貨の價格の相對的下落は、其價格の絶對的下落と云ふ形で表はれずに、相對的不騰貴、乃至騰貴の程度の少いことに現はれると思ふから所得税等の増徴によつて或財貨の價格が相對的に下落したことを數字上立證することは困難である。

兎に角租税は財貨の價格の相對的關係を變更することは否定するを得ない。物價問題より見れば如何に價格を動かす税制整理が望しいかと云ふことが問題になる。此點に於て、世上物價を騰貴せしめる税制整理が望しいと云ふ議論はあまり聞かないが、物價を引下げる税制改正が望しいとはよく聞く議論である。併し此點は上述したる所によつて知られると信ずる如く、物價が一率に引下げられたら何人も恩恵を受けない。米が高いのをコボす勞働者にとつて勞銀と米價とが一率に低下すれば一向有難くも何ともないわけである。企業生産費の高いのを嘆く企業家資本家にとつて原料の價格勞銀の低下と共に生産物の價も一様に下つたら何もならない。尤も輸出商人等の場合に於ても外國に於ける價格が舊の儘で原料の價格勞銀の低下を望むものである。物價に於て問題になるのは常に相對的關係であつて一率に高い、低いではない。矢張物價が下つたら企業は衰頽して不景氣が來るのみである。抽象的に云へば、社會に於ける農、商、

エ、企業家、勞働者等すべて夫れ夫れ適當な消費が出來、而かも國際關係から見ても、輸出を以て輸入品の代價が支拂へるやうな價格が出現すればよいわけである。國際競爭上から見れば成るだけ勞銀は安い方がよいやうであるが、勞働者惹いて一國全體の見地よりすれば無暗に勞銀の低いのは不當なことであり、又産業もやがて勞働能率を低めて衰頽するわけである。そこで物價は安いのがよい、高いのがよいと云ふ風な概括論は粗雜否むしろ誤であると見なければならない。税制整理に於ても漫然として、物價引下の税制整理が望しいなど丶叫ぶのは餘程愼しまなければならない。

今回の税制改正案が實施せられると價格に如何なる風に變動するであらうか。

先づ法人所得に於て從來の留保所得の累進をやめて、留保所得、配當所得を合して一率に百分の五の比例税を課する改正はどう云ふ影響を持つであらうか。此點は從來に比して若干の輕減であるが、其價格に及ぼす影響を豫測することは上述の理由によつて極めて困難である。先づ留保所得配當所得によつて税率が違はなくなつた結果は、配當を無理にする弊風をいくらか矯正する結果になるう。其結果は理論的に考へると、積立金の割合がいくらかよくなり、積立金等は普通消費財の購入に向はないで企業の擴張等に用ゐられるから、配當の多い場合よりも消費財の價格がいくらか低下する傾向があると云へるかも知れない。併し一方免税點を高めて此點から云へば少所得者の購買力を旺盛にするから、少所得者の需要する消費財の價格を高める傾向があるとも云へるだらう。要するに所得税改正の價格に及ぼす影響を考へることは至難である。

次は資本利子税の新設であるが、此税は一般に金利を高めて企業の生産費を大にし、企業を壓迫すると云つて一部から批難されてゐるが、茲に注意すべきは價格を高める傾向のある租税は必しも資本利子税には限らない。酒造税の如きも酒價を高める傾向がある。唯資本利子税は直接金利に影響し企業の生産費に及ぼす影響が一般的であるから、此點に

於て個々の財貨に課する消費税等とは一率に云へないが、併し穀物關税、生活必需品の課税の如きも、生活費惹いて勞銀を高めて企業の生産費を增す傾向があると云へる。資本利子税のみが企業の生産費を高めるとは云へない。又資本利子税が課せられたら金利が必ず高まると速斷することは出來ない。金融市場の狀況如何によつては、債權者が負擔して金利を高めないかも知れない。殊に税率が輕微であれば此事が云へると思ふ。此點から資本利子税のみを攻撃するのは如何かと思ふ。但しあまり重い資本利子税は金利を高め、又金利が高まらなければ、貯蓄するものが少くなつて資本財が減少する傾向があるだらう。あまり重いのはもとより不適當である。(其他第二種所得税との關係に就いて別に意見があるが、今は物價方面より税制整理を論ずるものであるから省略する。)

著しい增率を受け税收入に於ても巨額を示めるものは酒造税である。從來の經驗に徵して見て、之は遲かれ早かれ酒價を高くして、酒のみの生活費を高くすると云へるだらう。淸凉飲料税の課税も淸凉飲料の價格を高めるであらう。

一方綿織物消費税通行税醬油税の廢止等は果して綿織物等の價格を下落せしめてそれだけ生活費を低下すると見ることが出來やうか。勿論理論的に考へれば長い間には、租税の輕減はそれだけ、價格を低下するか乃至は騰貴の勢を緩くすると云へるだらう。併し減税の効果は少くとも直ちには價格の低下となつて表はれないであらう。

我國で嘗て第一種糖を、四十三年殘る他の物を、四十三年再び第一種糖を實質上減税してゐる。四十一年と現行税率とを比較して精細に見れば、

和蘭標本色相	四十一年二月	四十四年四月(百斤ニ付)
八號未滿	三、〇〇圓	一、〇〇圓 (二、五〇〇 (三、〇〇〇

十一號未滿　十五號未滿	五、五〇	五、〇〇
十八號未滿　二〇號未滿	八、五〇	七、〇〇　八、〇〇
二一號未滿　二一號以上	一〇、〇〇	九、〇〇
氷砂糖	一〇、〇〇	一〇、〇〇

當時價格は如何に變動したかを見るに、四十三年四月に減稅したが價格の變動は左の通りである。

都市 名物	和白砂糖 東京 製糖	洋白砂糖 神戸 瓜哇	和小砂糖 東京 台灣	洋小砂糖 神戸 マニラ二號
二月	一七、六六	一八、七〇	一二、九六	一〇、八〇
三月	一七、九七	一八、六〇	一三、〇一	一〇、七〇
四月	一八、九一	一八、五〇	一三、二二	一〇、六〇
五月	一八、四二	一八、五〇	一三、三〇	一〇、五〇

—減稅

勿論これ位の短期間の變動を見ても明確なことは云へないが少くとも減稅の後直ちに價格を低下せしめなかつたことだけは知ることが出來る。

長い間輕減乃至廢止せられた消費稅だけ之等の品物の價格が低下否寧ろ上騰を沮止せられて生活費を低めると云へるかも知れないが、一方酒の價格の騰貴によつて生活費が増加する此點から見れば今回の消費稅の改正案は下層階級の負擔を輕減するとは云へないと思ふ。綿織物を著し、電車に乘り、醬油を使用する階級と、酒を飲む階級とが別な階級であるとは云へまい。勿論酒を飲むことはわるいからやめさせたいと云ふのならば別論であるが、單に稅收入をあげると

云ふのならば、此改正によつて成程生活必需品の課税は輕減せられると云へるだらうが、下層階級の生活費全體から見れば必しも生活費の低下になるとは云へないだらう。人は所謂生活必需品のみにて生きるものにあらず、殊に生活必需、嗜好品等は程度の差異である。嗜好品と雖も税率の增加には程度がある。酒造税の如き少しく增徴の度を失しはしないか。

そうすれば、税收入補塡の道がないと云はれるかも知れないが、私は相續税の今一段の增率によつて酒造税の增徴は避け得るものと思ふ。相續税も企業を衰頽せしめるとか、企業の生産費を高める傾向があると云ふかも知れないが、成程此傾向絶對になしとは云へない。あまり高率の相續税は人々の營利心を衰頽せしめると云へるだらう。又相續税支拂のために屢々として財産の賣買が行はれることになれば此點からも生産能率を害する。併し之程の高率を徴收しないでも、今回の改正案による收入減の補塡は出來そうなものである。又相續税を課せられることを豫期して資本家が自分の財産を相續保險に附し之に支拂ふ保險料を企業の生産費中に包含せしめるやうなこと絶無とは云へないだらうが、そう多く行はれるとは考へられない。又よしんば此保險料を生産費に含ましめて、製造乃至販賣物品の價格を高めんとしても其努力に成功するとは限らない。相續税が企業の生産費を高める等の事は餘程可能性が少いと云へるだらう。此點よりして私は酒造税の增徴を避けて相續税の一層增率に訴へて然るべきものと思ふ。尤も之は到底議會を通過しないと云ふのならば別論であるが。

何じろ資源に乏しい我國で國民生活をたてゝ行こうといふのであるから人一倍働いて人一倍節約しなければ立ち行く筈はない。米國のやうな天與の資源の豐富な國に於けると同じやうな生活をして、而かも、同じやうな勞働條件乃至配當收入で生活しやうと云ふのは出來ない相談である。そこで勞働者も私は外國の天與の資源豐富な國の夫れに比して一倍働くことが必要であると同時に、企業家も少い配當、利子に甘じ、又其受取つた配當、利子も成るたけ我國の生産力を增すやうな方面に使はなければならない。税制に於ても働かないで獲得した部分から成るだけ多く（勿論程度問題である）徴收して下層乃至中流階級の生活費を高める租税を避けなければならないと思ふ。

藝術的創造と藝術的行動

長谷川如是閑

籠毛與。美籠母乳。布久思毛與。美夫君志持。此岳爾。菜採須兒。家吉閑。名告沙根。虚見津。山跡乃國者。押奈戸手。吾許曾居。師告名倍手。吾已曾座。我許者。背齒告目。家乎毛名雄母。

（雄略帝御製）

人間の生活は、創造からはじまつて享樂に終る一系の行動に外ならない。經濟的生活に於ては、それは生産から消費に至る過程であり、政治的生活に於てはそれは權力發生から階級的文化に終る過程であり、人の一生に於ては少壯期の活動から老後の安靜に至る過程である。而してこの創造から享樂に至る過程が集團的協同に於て進行するのが社會生活である。

社會生活に於ては、創造も、享樂も、悉く群的であつて、純個人的の創造、純個人的の享樂はあり得ない。人間が單獨で完成する事の出來る創造は考へられない。單獨で享樂し得る何物をも人間は有つてゐない。

食糧を得るにも、住居をつくるにも、單獨ではなし得ないと同じく、食糧を享樂し住居を享樂することも單獨ではな

し得ない。單獨では造り得ないが故に、單獨では享樂し得ないのでは無く、創造といふことそれ自體が群の現象であり、享樂といふことそれ自體が群の現象なのである。あらゆる創造、あらゆる享樂は純個人的行動としてはあり得ない。純粹個性といふ觀念は人間的生存の事實を無視してのみ成り立ち得る觀念である。

近代の自我の哲學は、この明かな生活事實を無視して、創造と享樂とを純粹に個的の現象と考へ、生物の群生活の經驗を超越した何ものかにその淵源を求めてゐるが、さういふ觀念は特殊の生活狀態に伴ふ特殊の生活意識であつて、原始社會の哲學が、總ての創造と享樂とを純粹に群的の現象と考へたのとは正反對であるが、然もその一定の生活狀態に伴ふ一定の生活意識であることに於て同一である。

原始社會の人々が、個性の意識を有たなかつたことは、人間進化の或る時期に於ける社會生活の構成がさういふ意識を生み出したに外ならない。神がその時代の凡ゆるものゝ淵源であつたが、神の個性は神的個性であつて、それが人間的個性を超越する事によつて、個性ではなく群性だつたのである。それは個の形を有つた全體であり、具體的形相を有つた抽象的觀念だつたのである。進化の次ぎの時期に於て、個性の活躍と共に人間の英雄が神に代つたのも、軍國國家が、權力を、社會的性質をより多く有つた神の手から、階級——軍國的——的性質をより多く持つた人間の手に移したのである。この英雄に神と同じく自己又は自己の階級の個性の絕對性、無限性を發揮する爲めに一般人の個性を壓迫したのである、從つてこの時代に於ては　自我は神又は半神——英雄——だけの自我であり從つて人間一般のそれではなかつた。

英雄の支配が人間の社會的生存條件——產業狀態——を壓迫して社會の生存を脅かすに至つて、人間的生存衝動は、背らなく英雄の築き上げた萬里の長城と阿房宮とを崩壞せしめ、前代的信仰の生活に代つて近代的科學が生活の機

構を築きあげるに至つた。英雄は分解されてそれを個々の社會人に於て見出すことゝなつた。信仰と腕力の組織の代りに科學と產業の組織が成立した。一人の英雄が信仰と腕力の組織を把持する代りに、科學と生產の組織を把持する多數の英雄が生れた。それが特殊の階級を構成するに至つて一般社會人は迷信と腕力の奴隷たることから解放されて、新らたな生產の組織に於ける機械的隷屬者となつた。神又は半神の自我は其處でその個的凝結をゆるめて經濟的優越階級の生活觀念の中に溶け込んだ。さうして近代的自我の哲學となつた。さうして凡ゆる創造と凡ゆる享樂とは、この階級生活に於ける文化的創造と文化的享樂とに終始するといふ哲學の構成となつたのである。

純粹個性だけが創造するといふ思想は、畢竟さういふ純粹個性の觀念を把持する階級生活者だけが眞の意味の享樂者であらねばならぬといふ特殊の階級的生活意識と關聯してゐる。それは元來創造が純個的であるといふ觀念を要求してゐるのではなく寧ろ純個的に享樂しやうといふ生活を欲求してゐることなのである。それは個的又は階級的享樂を意識づける爲めに創造を純個性の生活に終始せしめるのである。さうしてそれは生活の事實の上で個的又は階級的享樂が成り立つてから出來上つた觀念である。だから一般社會人の生存衝動がそれ等の個的階級的享樂の可能性を壓迫するに伴つてさういふ觀念も崩壞される。

藝術的衝動はこの崩壞の過程に於て起る處の人間的衝動である。

人間の生活が創造から享樂に至る一系の行動であるとするならば、藝術的生活も又創造と享樂との綜合體系であらねばならぬ。藝術は創造であると同時に享樂であり、享樂であると同時に創造である。他の意味に於ては創造することが享樂することであり、享樂することが創造することである。

生活は總て環境に於ける行動である。群的行動は只に人間相互の關係に於ける行動ではなく、それ等と環境との關係に於ける行動である。創造も享樂も只だその環境に於てのみ有り得る。從つて、環境の異なるに伴つて異なる創造と享樂とが有り得る。謂る人間的なるものとはこの環境の生活を超越した純粹人間といふものを發見するとではなく、その絶えざる變化に於て生存を働き出す行動の系統を發見するとである。藝術的創造と藝術的享樂とは時空を超越した、そして生活の具象性を捨象した純粹人間性を創造乃至享樂するのではなく、一定の環境に於て生きる具體的人間性の發見である。

藝術的生活は畢竟生存の衝動に基づく人間的行動である。藝術的心意はこの行動に伴ふ意識乃至無意識である。藝術的精神は藝術的行動に潜在してその神秘的淵源をなすものではなく、衝動的行動に伴ふ人間的心意として、それを意識づけるのである。

心も亦それ自體行動の初歩的段階に過ぎない。心的活動は畢竟行動的活動の人間的手續である。行動のない處に心はあり得ないが、心のない處にも行動は有り得る。否行動の第一次の動きに於ては心のないことが原則的である。行動の動きが二次的三次的となるに及んで心が發生しその行動の動きの進むに從つて、心の働きが鮮明になる。生活の進行に於て、行動と意識とが手を携えて進行してゐるがそして末に進むほど心の鮮明さが增して行動の動きが減るが、これに反して原に溯れば溯るほど心の鮮明さが減つて行動の動きが顯著となり、更に溯れば心は影を潜めて行動だけが顯著である。藝術的生活に於ても、斯様な生物學的過程をはづれることはない。藝術的生活の最初の動きは行動である。其處から藝術的精神が生れる。さうして行動がその强度を減ずるに反比例して藝術的心意が鮮明となる。

藝術の淵源を純粹人間性の先天的原理に求める思想は右に云つた過程に於ける末期に於て藝術的行動と反比例に藝術的

心意の發達した時に發生する錯誤的意識である。衝動的行動が衰えて心意作用だけが興奮した場合には必ず錯誤的意識が支配する。世紀末に於ける哲學の煩瑣的興奮はつまりその現象である。

藝術を行動の體系に於て觀察すればその創造と享樂の性質が極めて判明する。(無論その形而上學的動機は無視せねばならぬ。形而上學的動機は生活現象を信仰に於て理解する一種の態度であつて、行動の衰退期に於ける心的興奮に於て完成されねばならぬ仕事である)。この方法によれば藝術的創造を二つの行動に分解せねばならぬ。一つは通常藝術的創造といはれた場合に意味する處の藝術的作品の創造即ち創作である。他の一つは藝術的作品を創造せずにその創造を可能ならしめる過程に於てその過程を創作に於てゞなく行動で働いてゐるといふ態度である。これを假りに藝術的生活行動と名づける。創作は藝術的衝動が藝術品となつて現はれるのであるが、藝術的衝動がさういふ藝術的表現とならないで個人の實生活の行動として現はれるのが即ち藝術的生活行動である。前者は生活衝動が人間の想像的能力と結びついて再現の世界を造り上げるのであるが、後者は生活衝動が想像的に働かずに現實の生活行動の上に動き出すのである。藝術的創造は通常この生活行動を含んだ意味に解釋されてゐないから此處でもこれを創作を生み出す態度に限定して、創作を生み出さない然も衝動の性質が共通である行動を、甚だまづい用語であるが、藝術的生活行動と呼ぶのである。共處で藝術的態度は三種に分けられる藝術的創造と藝術的生活行動と藝術的享樂とである。この三つの態度は實は藝術的生活現象としては渾然一體となつて存在するのであつて、謂ゆる藝術的態度が斯樣な別口のものとなつて現はれるといふ意味ではない。

創造と享樂とは決して截然別れた行動ではあり得ない。行動としてはそれは一つであるが、生活現象を觀察する場合にそれを解析して異なる體系に概念的に組み立てるのである。例えば勞働は創造であり、ダンスは享樂であるといふの

は普通であるが、しかし勞働に於て享樂がありダンスに於て創造のあり得ることはいふまでもない。創造とは自我の自己發展であるといふ樣なことをいへば極端な個人的享樂も亦創造であるが――自我の哲學がさういふ實際的結論を生む――そんな形而上學的の意味ではなく、創造と云ふこと享樂といふことを分析された異なる行動の體系として見ても、具體的な勞働とかダンスとかいふものにこの異なる行動の體系が交錯して働いてゐることを發見するのである。田を作ることを誰れも享樂とは考えないがしかしその行動が創造的であるならばそれは必ず人間に享樂されるのである。

一體創造とはこの意味に於ては自然の生産過程に參加することである。人間が自然の物理的、化學的、生物學的過程に人間的努力を加えるのが創造の行動である。自然が造つてゐる果物を人間は作り出すことは出來ない。人間は只だ自然の生産過程に參加するのみである。それが生産行動である。さうしてそれが創造的行動である。享樂はこの人間的努力の結果が加はつた果實を消費するといふので生産勞働に伴ふ最後の行動なのである。けれどもこの米を作る勞働に於て米を食ふ享樂と同じ性質の行動體系が含まれてゐることは、食ふことがとに角も手を動かし口を動かし胃の腑を働かせる極めて簡單な勞働であると同時に、田を耕やす勞働にも食ふ時の勞働に伴つて起る味覺の快感と同じ樣な性質の感情の滿足があることによつて察しられる。創造と享樂とを分けるに創造は苦痛であり惱みであり、享樂は快感であり放念であるといふことになつてゐるが、さうしてそれは必ずしも誤つた考え方ではないが、しかしさういふ區別が絶對的のものでないことはいふまでもない。只だ量的區別であつて質的區別ではない。二つの行動の體系に於てその各々を精算した場合に苦痛の度が强いか快樂の度が强いかによつて假りにそれを區別するのである。それも數學的精算ではなく或る關係で苦痛と快感とが殘す印象の度合で決定するのである。遊戯と雖も猛烈な遊戯は優しい勞働よりも烈しい苦痛を與えるが、しかもその行動の決算期に於て與へる感情がその遊戯であるか勞働であるかといふことを決定するのであ

る。だから生活行動としては、創造的行動と享樂的行動との別々のものがあるといふことは決してない。人間が享樂を欲求して勞働を廻避するといふのは或る特定の場合の意識であつて、人間行動の歴史を通じて縱に普遍的の事實でもなければ全社會を通じて横に普遍的な事實でもない。

藝術的創造と、藝術的享樂とは具體的行動としては別れてはゐない。藝術家が創造生活を享樂してゐるものであると同時に、藝術の鑑賞家は鑑賞それ自體に於て藝術的創造を行動してゐるものである。元來藝術的創造は生存衝動の現はれである。生存衝動は、人間が生存することの極めて自然な狀態に於ては只だ還境に順應する生物學的從順の群的行動として現はれるに過ぎない。だから生物學的群の約束の極めて强固に動いてゐる社會――例へば昆蟲の社會――に於ては生存衝動は只だ社會的從順の行動として現はれるに過ぎない。しかし乍ら群の組織が生物學的單純を離るに從つて群生活が必ずしも生存組織の機構に依らない場合を生ずる、換言すれば、社會的生存を壓迫する組織に進むことがある。その場合には生存衝動はその組織に反抗する生存行動となつて現はれる「生存衝動」といふ特殊の行動の體系が概念的に構成されたのも畢竟生存を壓迫する群の組織に對して、右の樣に生存行動が働くといふ事實の認識に外ならないのである。群の組織が生存の過程に矛盾してゐない社會に於ては「生存衝動」といふ特別の行動の體系が顯著に現はれない爲めにそれが認識されることもあり得ないのである。

生存衝動は、還境に應じて個的に働くこともあり集團的に働くこともある。或る個體が特別の還境に置かれた時には、その行動は自から個的となる。その還境が或る個體に特別のものではなく、群的のそれであつた場合には、衝動は群的に働く。無論その場合でも行動するのは個體である、故に還境の存在から離れて行動だけを見つめれば、それは凡ゆる意味で個的行動であるとしか見えない。只だ同じ行動が群の各部に起るといふことでそれが群的であることを見得

るのである。原始人はこの一齊に起る現象を主に見て人間の單獨行動をさへも一齊に起るべき事情に歸したのである。之れに反して個の意識の發達した近代人は、行動が一齊に起つた場合にもそれを群的に見ないで個性の事情に歸するのである。原始人は或る個人が個的に反抗をした場合にも、決してそれをその個人の個性に基づくとは見ないで神なり惡魔なり即ち外圍の事情がその個人の上に働いたものと見た。神とか惡魔とか云ふことは間違であつたにしても、個人の反抗又は特異の行動を外圍の事情に基づけた考へ方は正しかつたのである。近代人がさういふ場合にそれを個人の心がけとか純粹自我の發展とかに基づけるのよりも科學的に正しい見方だつたのである。犯罪學が犯罪を純粹個性の問題と見ないで社會的環境の問題と見るのも同じ見地である。

それと同じ意味で、生存衝動は個々人の行動ではあるが、しかし個人が特殊の環境を持つた場合のそれの外は、それが社會的に一齊に働くのである。何んとなれば多くの場合に於て人間をして衝動的に行動せしめる事情は社會的に喚來するからである。食物の欠乏とか、暴風雨の喚來とか、寒暑の變化とか、地震とか、戰爭とか總て人間が生存衝動を働かすべき機會は、必ず社會的に一般的に喚來するのである。社會生活は、つまりこの一般的に喚來する外圍の事情に對する一般的行動に外ならないのである。それは群的に影響する事情に對し群的に反應する行動である。古代人は、この群的事情を見て、これに對する反應の一致性に着眼したのであるが、近代人はこれに反してこの一致に於て現はれる個々人の行動の個的特異性に眼をつけたのである。そして古代人が個的行動を群的に考ふる代りに、近代人は群的行動を個的に考へたのである。それにはそれ〴〵無理もない事情がある。古代に於ては、外圍の刺激に對する反應が、群的に非常に一致してゐたが、生活の復雜化するに從つて群的の刺激に對しても、個々人が頗る異つた反應を起す事情があるからである。生活が單純だと反應行動も反射的に單純であり從つて一致するが、復雜な生活では平生の環境の復雜さの爲

めに素質、性向等も復雜となり、同じ群的刺激に對して、個人が必ずしも全體に一致した反應を起さずに、其處に個性の特異が現はれるのである。近代人は、この特異性を所謂個性の自律性といふやうな個體自身に存在する先天性に基づけたのである。けれどもこの個的特異性も、生活の構成が複雜になつた爲めに、日常個人がそれ〴〵違つた生活態樣を反覆して居る結果、それが個性の氣質性向となつて特殊の傾向を個人々々に與へ、爲めに群的に襲つて來る刺激に對しても個人々々は、それ〴〵各自の傾向に從つて特殊の運動を起すのである。それは純粹自我の先天性ではなく、各自のおかれた環境の作用である。だから襲來する刺激の性質が非常に單純で且つ急激であつた時には、如何なる文明人も原始人と同じく一致した反應運動を起すのである。例へば大地震の襲來した場合には、學者の會合も野蠻人の會合と少しも違はない群的行動に陷るのである。それが生存衝動の本質である。個的に違つた行動をする場合でも各人はこの本質に從つて行動してゐるのである。

藝術的衝動も全く右の事情を離れない。藝術的創造を、生活の關心を超越した純粹心意の自己發展であると見るのは、總て藝術が社會的關心なしに起り得ないといふ事實を無視した獨斷である。それは倫理學者が、道德を純無關心の心意の自則であるとするのと同じ樣に、生活行動を離れて生存の組織を組み立てる階級的生活態度の所產である觀念である。生活を行動でなしに心意であると見る顚倒である。さういふ考へは、心意なしに運行してゐる一切の現象に對してまで、心意を假定して、心の絕對的支配を主張する。それは詩的空想としては私達に美しい夢を見せてくれるものであることを感謝しなければならないが、社會生活の意識としてさういふ信仰に終始するのは破滅的である。意識は畢竟行動の磁石である。然も機械的に一定の方向を保つそれではなく、生存過程に於ける反撥と吸引とに應じて、右を指して左を指す磁石である。心意に絕對的方向はないそれは時に神を肯定して北を指すかと思へば、時に神を否定して南を

指す。神によつて生存に向ふ時に神を指し、神に叛くことによつて生存に向ふ時にはその反對を指す。藝術を見出す心意も畢竟さういふ心である。

心の生んだものが、心を創造し決定すると考へるのは、國家學に於て主權はそれ自身を、それ自體に於て制限するといふ理論と同じく、實は外圍の事情で制限されてゐる事實を自律の觀念に一致する樣に理解するに過ぎない。一切の行動が環境に於て働くものであるやうに、一切の心意は環境に於て働く行動に依存するのである。藝術的心意の社會性は藝術的行動の社會性に依存せねばならぬ。

藝術が創造される時に、その創造の過程を産み出すものが何であるか知らうとすのは、彫刻家の刀、畫家の筆等が一定の運動をとる場合に、その運動のメカニズムを知らうとするのと同じで、現代の人知の企て及ぶ範圍ではない。其處で自我とか風格とか神韻とか神秘的の想像が唯一の理解の方法となる。この理解は、我々の常識に於て免るべからざる態度であり、又人間的情操に一致した理解である。我々はこの理解に於て一種の陶醉を感ずる。私達は事實藝術品に對しこの神秘的理解から拔け出すことは出來ない。この陶醉的氣分が藝術的創造と藝術的享樂との具體的心意である。その意味で、藝術に關する形而上學を私は藝術に對する陶醉的心意の所産と考へる。純粹哲學としての美學は、其處で藝術的陶醉に伴ふ特殊の心境として尊重に價する。

けれども藝術に對する理解は更にこの陶醉の因果を發見せねばならぬ。能樂といふ骨董的藝術にも現代人の間に陶醉がおこり現代式の表現派の藝術にも陶醉が起るとしても、藝術的心境の成立が單に時間空間を超越した先天的原理に依存するといふ外に、その作用を生活事實として認識する方法が要求される。人間はモルヒネに醉ふと同じ樣に劇に醉ひ、彫刻品に醉ひ、建築に醉ひ、特殊の人間的行動に醉はせられる。その陶醉のそれ〴〵の性質を、單に陶醉の心境そ

れ自證によつて理解したのみでは、モルヒネの陶醉と藝術品の陶醉とを見別けることが出來ない、モルヒネに醉つた者は、その心境の絶對性を藝術に醉つたものと同じ權威を持つて主張することが出來る。さうなれば人間は滅びる。藝術的心境の絶對性をいふものは、只だその言語を以つてモルヒネの心境の絶對性との區別を主張し得るのみであつて、行動に於ては全く同じ範疇をさまよつてゐるのである。言語が證據立てる藝術的心境の絶對性は、畢竟藝術的陶醉がいはしてゐる一種のフレーソロジーであつて、觀念としての莊嚴、言葉としての美しさは貪むべき形で出來上つてゐるが、生活行動の理解としては危險である。藝術はさういふ心境の自己發展、若しくは自己滿足ではなく、もつと生活に則した行動的現象である。

藝術的創造の社會性は、前述の如く、その發動が生存の何等かの意味の壓迫に對する行動的反抗としての衝動であるといふ點に存する。私は「人間性」といふものを或る絶對的存在としては認めないが、それを絶えざる運動の要求として動的に認識することは出來る。或る一定の固定した人間性を認めることは出來ないが、右に壓さゆれば左に動かうとし、左に抑ゆれば右に動かうとし、餘り動態に置かれれば靜態を求め、餘りに靜態に置かれれば動態を求め、無理に殺さうとすれば生きようとし、無理に生かさうとすれば死なうとし、長すぎれば短かくならうとし、短かすぎれば長くならうとする處の、生活狀態に伴ふ必然の傾向として考ゆることが出來る、その働きを認識することが出來るがその內容を認識することは出來ない。それは要するに行動の過程に於て發見さるゝ一定傾向に過ぎない。內容的に理解しようとすれば信仰的理解の道をとる外はない。藝術的衝動は斯樣な人間性の行動的現はれである。

それは群的生活が壓迫された時に、それに對する群的反應として起る衝動である。藝術的衝動は生存の過程が宗教、

法律、道徳、習慣等の約束的生活によつて石化した時に、それを突破する群的行動の一つの態様である。さういふ場合に起る衝動は、或は犯罪となり、或は暴動となり、或は科學的反抗となり、或は信仰破壞となり、或は特殊の軍事行動又は政治行動となる外、一般的に、部分的に種々なる社會的動搖となつて現はるゝが、藝術的衝動もその同じ機運から生れ同じ作用を還しうるものである。ある藝術家が何故に犯罪者とならず、暴動者とならずに、藝術家となつたかといふやうな歴史的因果關係を見出す研究は暫くおいて、その衝動の社會性はかくして始めて理解されるのである。

先きに、衝動が衰退した時に心意が活動するといつたが、個人の素質性格に於て行動性の人間と心意性——少し言葉はおかしいが——の人間とがある。群的刺激に對しても、其處で行動性の勝つた反應をおこすものと、心意性の勝つた反應をおこすものとがあり得る。前者が藝術的生活行動に出づるものであり、後者が藝術的創造に赴くものである。

藝術的生活行動は、生存衝動を生活の正常態に於て働き出す場合でなく、一種變態的に現はれるのであるが、それは組織が生存の衝動の正常の發展を妨げる形で存在するが故に、衝動は一定の約束の許に働き出すことが出來ない結果、變態的に現はれるのである。生存衝動は生産と生殖の行動に於て具象されるものであるから、之れが變態的に現はれる時にこの二つの要素的行動の組織の上に現はれる。即ち生産組織と生殖組織の動搖となつて現はれる。人間的勤勞が生存の衝動によつて却つて排避される。生殖の生活が生存の衝動によつて却つて否定され、然らざれば攪亂される。怠惰、淫蕩、乃至禁慾が變態に現はれた生存衝動の姿である。生きることを壓迫された時、生存の衝動は生存の約束を無視して逸奔する。それは或は傳統的性格の破綻となり、或は傳統的有形無形の權威の破壞となる。信仰と道徳とが法律と習慣と共に無視され、社會的生活の一切の拘束は、共通の變態的發揚によつて破壞の痛快味を味はせる對象となる。生きんとする衝動は斯くして破壞の痛快味を味はふその味覺的滿足に於て終了することゝなる。生きることは破壞する

ことであり、破壞することは生きることにある、壓迫された衝動がその樣に變態的に活躍するのが、此處にいふ藝術的生活行動である。

何故にそれが藝術的であるか、それは藝術的創造でもなければ藝術的享樂でもない。そのうちに何等「藝術的」なるものが見出されないのである。それにも拘らずそれを「藝術的」と呼ぶことの出來るのは、生存衝動がさういふ過程をとる場合は、群的に藝術的創造と藝術的享樂とを生み出す過程だからである。組織の壓迫が人間を右のやうな破壞的行動に導いた時には、その過程に於て、藝術的創造の發生する機運が含まれてゐるのである。社會は此の場合に、一方に藝術的行動者を産むと同時に他方に藝術的創造者を産むのである。

藝術的創造は要するに右に述べた衝動の變態的發揚と同じ動機を以て、同じ過程に於て異つた態樣に出たものに過ぎない、組織がさういふ過程をとつた時に、行動性の勝つたものは藝術的生活行動に出で、心意性の勝つたものは藝術的創造に出るのである。前者は行動による創作であり後者は創作による行動である。

無論所謂藝術といふものゝ中に、右の樣な社會的過程と交渉のないものもあり得る、即ち主として官能の發達に依存する藝術のすべてがそれである。生活經驗は一定の度合までは人間的官能を發達せしめる。形態に關する美感はそれと共に發達する。形に關する藝術的創作が其處から生れる。官能の發達に伴つて創造的心意が官能美の條件を以て發達する。言語思想等が只だ官能美的に組み立てらるゝことがあり得る。裝飾が視覺觸覺等に快感を與へる樣に發達する如く、言語が聽覺に快適する樣に發達する。同じ樣に、觀念が觀念作用の形式美に一致する樣に發達して、觀念が裝飾的に美化される。呪文、俗謠、小說、詩歌、經文、哲學等は裝飾的に構成され得る。それが又一種の藝術的創造であること

は拒まれない。併しそれは藝術が生活の動態に於て有つ意義とは異つて、生活の靜態に於て持つ處の意義である。總て靜的固定的の生活態様に於てこの藝術が生れる。斯様な藝術が生れた時には既に階級文化の固定が想像される。從つてそれが藝術的生活の一つの態様であることは拒まれないが、主として生活の動態に於て藝術的衝動の生活上の意義を發見すると認めることも亦可能である。靜的存在が破らるる時に藝術的衝動が特殊の形を出る。私は生存過程に於ける藝術の意義を寧ろその方に求める。藝術を官能美の完成に歸する見地とは正反對の態度である。

併し乍ら藝術的生活行動なしに藝術が起り得るものではなく、藝術的創造を藝術的生活行動と同じ行動的要素を持つものとしないで理解することは不可能である。純粹藝術的精神といふ様なものは、この意味の藝術を生み出す何等の動因を含んではゐない。

その意味で創作も矢張り一つの行動的態度である。前に、心が行動の内面的手續であるといつたが、社會的に創作を理解するならば、それは群行動の内面的手續に外ならない。創作が藝術それ自體の絶對的價値に於て獨自の存在を主張するといふ様なことは、一體誰れがそれを主張するのだかわからない。創作自體がそんなことを主張するわけはない。さればといつてその創作者がそれを主張するわけでもない。鑑賞家がそれを主張すれば藝術が鑑賞家を要するといふ點に於て已に矛盾である。藝術的創作が、獨自の絶對價値に於て自存するといふならば、出來上つた創作はそのまゝ儼然として上天してしまつても差し支へないわけである。創作は社會的行動の心的條件として、所謂社會的傾向の内面的統一を働いてゐるのである。社會的傾向とは行動の趨向性である。藝術的心意は、その趨向性の内面的に社會的であることをを告白する旗幟である、これは生存の衝動がどういふ傾向をとつてゐるかを生活行動で示す代りに、創作を以つて示すものである。

行動はそれが起るに當つては必ず一定の手續をとる。單純な反射行動は、この手續が最も短縮された時間に壓縮されるので無手續同樣であるが、多くの人間的行動は先づ知覺に初まつて複雜な精神過程、物理過程を經て行動に現はれる。其處で人間的行動の先決問題として正しい認識が要求される。環境を正確に知覺して行動をそれに順應せしむることが、人間の行動に秩序と組織とを與へた所以である。藝術的行動に於ても科學的行動に於ても認識が第一次的である。そしてその正確な知覺に基づいて環境が人間相に支配される。この點に於て藝術的と科學とが一致する。藝術的創作は科學的認識の具體的表現であり、科學的知識は藝術的認識の概念的表現である。

科學的認識は、科學的行動の先驅的條件であつて、積極的の構成的の生活行動を惹起せしむる性質のものであるが、之れに反して藝術的認識は、生活の概念を、いひ換へれば生活の法則を與へるものではないから、その認識に基づいて積極的の構成的の生活行動は起り得ない。それは同じく社會的診斷であるが、醫師の診斷の生理學的であるに對し藝術的診斷は病體の具象的再現に止まる。それはその直感に終始して判斷や反省やを作はない。それは藝術的刺激が一般社會を脅やかした場合にその病覺として全體を支配するに止まる。生存力のない人間はこの病覺を得ることによつて却つて勇氣阻喪し、全體的積廢を一層促進するであらう。一つの藝術品が惡影響を社會に及ぼすと見られるのは即ち此の事情である。

然し乍ら已に藝術的刺激に對して反應を起す社會は、その刺激なくとも內的にその藝術の內容に一致する過程をとつてゐるのである。藝術品の反應はその內的狀態を表示する發熱に過ぎない。ツベルクリン注射によつて發熱するものは、注射をせられない爲めに平熱を保つてゐても、も早や既に結核性患者なのである。

藝術的創造は生存行衝動に對する何等構成的な指導を含んでゐない。それは原理でもなければ約束でもない。組織の

總ての制度――宗教、道德、法律、習慣その他――に對し何者をも加へやうとするものではない。衝動が結局さういふ諸々の約束に從つて構成的に作用する過程に對して、藝術的創造は全く局外者である。啻に局外者であるのみならず多くの場合は妨害者である。藝術は消極的にのみ積極的であり得る。生存衝動が藝術的刺激によつてその力强さを加ふることはあるとも、その力强くなつた力は何等建設的行動の動力とはならぬ。それは力として人間を生存の方に押しやるが、殆んどそれは只だ無鐵砲に押しやるのである。生きろと命令するがどうして生きるべきかを敎へない。

藝術の社會的意義は、その破壞的なる性質に存する。藝術を個性を完成せしむる人間的行動と見るのは、前に云つた靜態に於ける藝術的衝動の意味としても當らない。藝術に於て特定の個人の個人的生活が完成されるといふことは決してない。社會生活は決して自己を絕對的存在として完成せしむるものではないが、殊に藝術的生活は、寧ろ自己を群に沒却して生活を群的に完成せしむるものである、希臘の藝術のやうに又希臘以前の原始的藝術の樣に、個性を沒却した藝術的創造を、藝術の本質に反くものであるといふことは出來ない。

今日藝術が個性的となつたのは、一般生活に於て個人的行動の優越が支配してゐるからである。斯樣な社會が更に進化して別の態樣をとれば、藝術は昔の沒個性的の性質を持つに至らないとは限らない。

一般の行動が、その組織を社會生活の進化に伴つて變化せしむる限り、藝術的行動の特徵も變化することは歷史の示す通りである。從つて藝術的行動の進行も理解もそれ／＼時代によつて異なる筈である。個人的自由主義の時代には個人的自由主義の藝術哲學の存在することは當然である。藝術的インスピレイションの思想も又右の事情によつて變化したのである。昔は或は「天來」乃至「神來」であつたが今日は「自我來」となつたのである。それが「社會來」とならぬとは誰れが斷言し得やう。

けれども已に云つた如く行動それ自體は個人が働くのである。殊に藝術的行動は、古來社會的傾向が先づ所謂「天啓」を受けた個人に現はれその個人の破天荒の行動乃至創作がその時代の一般的傾向の先驅をなすのである。一定の組織的崩壞は、必ず社會全體の動きによる外はないのであるが、その前に個人的崩壞が先驅するのである。「天啓」の實際上の意味は其處にある。それも古代に於ては、「謠言」といふ樣な個性を沒却した藝術的創造となつて現はれたが、兎に角それが天啓的先驅だつたのである。藝術を稍々もすれば個人的に見るのはかう云ふ事情もそれを助けて居る。

天啓は個人に現はれても、その動因も作用も要するに社會的である。天啓とは社會的といふことの別名である。で一人の藝術家の創造乃至行動は、決して個的現象として理解されずに、其處に社會的反應の起るのを包含せしめて始めてその藝術的行動の理解が成立するのである。一人の心はそれが藝術心である限り群的心意である。さうしてそれは必ず組織に對する破壞的反抗の形をとる。詩人がその詩的情操を表白した時には、その詩人の生きてゐる社會に同じ感情の支配してゐることを暗示する。

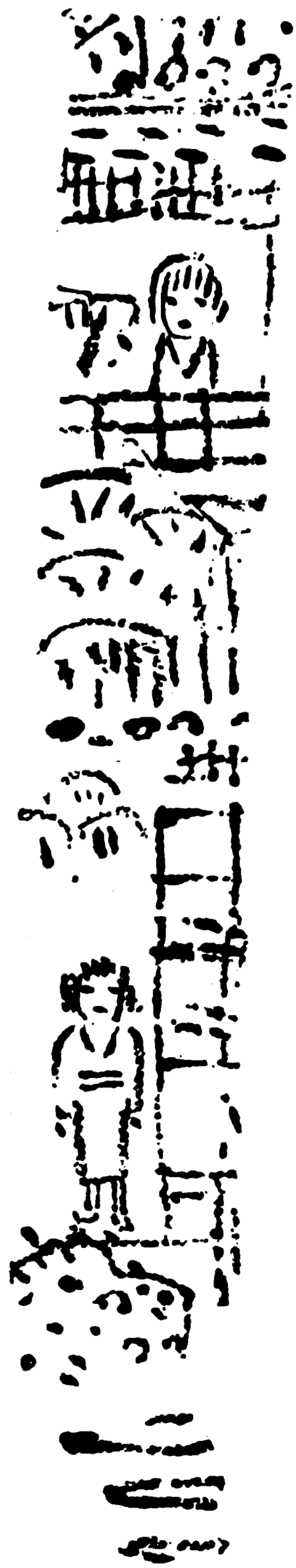
人間的心意は組織が生存の障碍を成した時に、それに對する反抗をいろ／＼の形で發揚せしむるが、藝術的發揚は、詩でも、劇でも、最も社會的反應性に富んだ所謂人心を支配する形に於てその反抗が表白されるのである。

本篇の冒頭に揭げたのは萬葉集の開卷第一に揭げられた有名な、雄略帝の御製であるが、右に云ふ制度的生活と人間的生活との撞着を藝術的創作として表現されたものであつて、それは最も平和な形に於て極めて力強い、制度に對する生存衝動の反抗を暗示して居るのである。嚴重なタブーを持つ古代の皇帝は斯樣な詩的表現に於ける外、人間的行動へのあこがれを平和に、反抗的でなしに、然も美的に表現する道はなかつたのである。田野に働いてゐる農家の妻女に對し、皇帝が假りてその夫となるべき人となつて親愛の名乘を求めようといふ樣なことを、若し藝術的表現によらずに生

活行動としてとつたならばどうであつただらう。それは全く近代貴族の崩壊的行動と同質のものであつたであらう。しかも此詩が藝術的創造であると同樣に、さういふ行動は藝術的生活行動である。

極めて危險な行動を極めて平和に、そして情操の極めて美的な動きとして表現し得るのが藝術的創造である。腕力による反抗や、言論による反抗が、全く不可能である場合にも藝術的創造は安々とより力強い反抗を投げ得るのである。その點は藝術的生活行動に於ても亦同じである。ある藝術的行動は創作と同じ作用に於て一般社會的反響をよび起すのである。そして社會一般は其處に感覺の一致を見出して、そこに湧起する一般的同情が藝術的行動の社會的目的を達成せしむるのである。

この藝術的行動の社會的目的を達成せしむる過程が即ち藝術的享樂の過程であるが、此處にはその問題に入らざるに筆を擱くことにする。



國家の永續性

高田保馬

一

一派の學者の見方からすれば、階級の廢止せらるゝに限り、國家は死滅して自由の王國は實現せらる。他の學者の見解によれば國家は階級分立の撤廢せらるゝことありとするも滅びず、人性にして顯著なる變化を見ざる限り、永久に存續する。私は今此問題に就いて多少の考察を加へむとするものである。豫め私見の落ち付く所を明にしよう。（一定の假定を認めたる上での議論ではあるが）私は此見解の何れをも採らず、强制の組織としての國家をよし廢し得ると假定したりとしても、組織の强制はなほ殘る、必然より自由への飛躍はない。然れども此組織の强制は必ずしも國家と同視しうべきに非ず、從ひてその是認は必ずしも國家の永久存續性の肯定を意味しない。かく見れば國家以後のもの、國家

の後繼者の何物なりやが問題となる。

二

私をして無用にして且つ煩瑣なる仕事を避けしめよ。エンゲルスが「家族私有財産及び國家の起原」に於て、レニンが「國家と革命」に於て說きたる所、それは餘りに屢引用せられてゐる。私はこれらの所說についてたゞ數言を附け加へたい。其主眼は次の如きものであらう。國家は階級支配の道具である。階級の區別を撤廢する時は國家も亦やむ。此撤廢の最初の階級に於ては「國家が國家として廢止せられる」が、その高き階級に於ては一切の强制がやみ國家は死滅する。勿論國家の死滅が强制の消滅を表裏するや否やについては社會主義學者中に種々なる意見はあらう、たゞ支配的見解の內容此の如きことは安じて斷言しうると思ふ。此際、國家として廢止せらるゝ國家は有産者的國家である、死滅する所の國家は强制組織そのものとしての國家であると解すべきものと信ずる。

此見解に對する反駁の最も代表的なるものとしてはハンス・ケルゼンのそれを擧ぐべきであらう。私謂ふに、ケルゼンの論難は決して獨自の、而して豐富なる獨創を含むものではない。マルクスの論敵であつた無政府主義學者はしばらく措いて云はず。近代科學の精神の上に立ちて同種の批評を試みたるものにハアバアト・スペンサアがある。私は決してスペンサアの實證的立場とケルゼンの法理論的（而して批判的）立場とを混同すべしと云ふのではないが、その直觀したる事象の聯絡に至りては自ら相共通してゐる。スペンサアは社會主義に於ける集中的組織が意識的協同、軍事型社會と密接なる親緣を有することを認め、それは强制を意味して自由を伴はずと云ふ。産業型社會と契約と自由とを思慕するその思案は遂に强制の故を以て社會主義に論難の鋒先をむくるに至つた。その後と雖も、自由と社會主義平等との

相容れざることを直視したる學者の數決して稀ならず、無政府主義學者中に其考の見出さるる事應なるは云ふまでもなく、梯愛を高唱する社會連帶主義者亦同一の見地に立つ、否進みて云へば、かの古き夜警的國家觀すら之に近き論調を帶びるものである。これら數多の論述あるに拘はらず、ケルゼンのそれは色彩最も鮮明、その說く所の理義の透徹せることは論敵アドラアの地位と相俟ちて、之を一派の代表的なる見解たらしむるに至つた。ケルゼンが論難の要點は次の如きものであらう。國家は强制的組織（强制的秩序と云ふ言葉を用ひてゐるが）に外ならぬ。階級的區別を撤廢し得たりとしても、此强制的組織が止むことはあり得まい、即ち國家は依然として存續しなければならぬ。共產主義の企圖するが如き產業組織の集中延いては產業以外の種々なる機能の集中は鞏固なる强制の組織なくして行はれ難きことである。かくてマルクス學說中に於ける二分子、即ち共產主義的傾向と無政府主義的傾向とは本來相容れ得ざるものである。共產主義の實現せられ階級の除去せられる曉には國家が存在の意義をこそ加ふれ、其消滅を期待すべきではない。

此理論の組立を分析し來れば、そこに三の要素の含まれてゐるのを見る。第一、國家は强制的組織又は强制秩序に外ならぬこと。第二、强制的組織なくしては少くとも廣汎の範圍に亙る產業の組織が維持せられ得ざること。第三、强制秩序そのものは即ち國家に外ならざること（强制秩序と强制的組織とを今こゝに同視する、此混同は必ずしも正確なりとは云ひ得ないが、今議論の範圍に於ては差支なしと信ずる）。

私はこれらの三の要素共に支持し得べきものに非ずと考へる。從ひてケルゼンの主張の中に何等の必然性をも認め得ざるものである。しかし、このことはエンゲルス、レニンの國家死滅說を肯定することを意味するのではない、その點は行論の間に自ら明にせらるゝ事と信ずるから今更めて說明を加へず、たゞ以上の三要素に關する私見を述ぶることによりて論陣を展開してみたい。

三

私の論述はこれから迂回の道を辿る。私は國家そのものゝ構成を吟味せむとするのである。

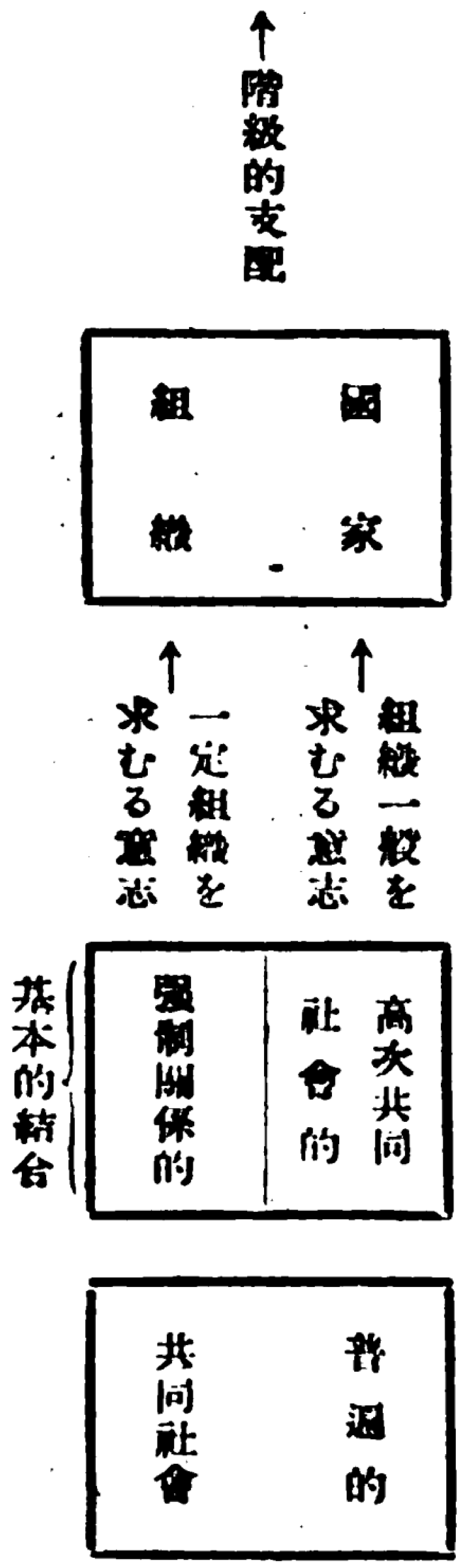
謂ふに、國家は一の組織のみ、之を以て一の團體又は、團結なりと云ふは寧ろ其派生的意義に着眼したるものである。かくて國家は一の Governmental machine なりと稱し又は一の統治機關なりと云はるゝこと、別に誤れりとは考へ得ない。然れども此組織は空中に浮遊するものに非ず、其依りて立つ所の基礎あるを見る。然らば此基礎とは何ものであるか。私は先づ第一に、一般的又は普遍的結合を認める。これは人類一般の間に存立する内的結合とも云ふべきものである。一派の考へ方から云へば、一體感の極小なる程度と相互の愛情とより成る。これは空氣の目に見えざれども吾人生存の根本條件をなすが如く、日常吾人の意識する所に非ざれども、一切の社會的制度と組織との缺くべからざる前提をなしてゐる。共同社會の最も深き底にあるもの、最も基礎的なるものは之に外ならぬ。かくて之を稱して、第一次的共同社會と云ふを妨げぬと思ふ。然れども國家と云ふ組織は此基礎の直ぐ上に建設せらるゝものに非ず、云はゞ第二の基礎工事を必要としてゐる。而してこれは二種のものに區分して考へることが出來る。其一は高次的又は副次的共同社會とも云ふべきもの、國家の成員たる人々の間に存する特殊の愛着より成る。所謂血は水よりも濃しと云ふ生理形態的類似に基く愛着、歴史と文化との共通、利害の共通に基く愛着等は其成分に外ならぬ。其二は成員間の强制的關係である。これは國家の不可缺の基礎であるとは稱し難いこと後に說く所の如くであらうが、少くも今までの國家に就いて見れば殆ど常に其支柱をなしてゐる。例へば結合を以て望まれたる共存にありとせよ、此强制の關係の存立する所、强者の意志要求によりて共存が持續けられる。此の如く一方に於ては副次的共同社會、他方に於ては强制的關係より成立する所

の基礎を稱して今國家の基本的結合と名づける。基本的結合はあらゆる場合に社會の組織の基礎をなすものであるが、國家の場合に於ても亦然り。共同社會的なる基本的結合が極めて緊密なる事あり、かゝる場合民族又は國民が國家の基礎をなすと云ふ。此種の結合が極度に減じて、共同社會的要素最も乏しく、從ひて成員間に分離の勢さへ認めらるゝことあり、かゝる場合にありては、階級關係又は階級に伴ふ强制が之に代りて基本的結合たる役目をすべて營むに至る。

此基本的結合の間に二のものが成立する、かく云はむよりも寧ろ、基本的結合が二のものを含むと述ぶべきであらう。一は何等かの組織に對する要求である、一派の學者の表現を借るならば何等かの組織を求むる意志である。但し此際意志の言葉は極度まで廣義に解せらるゝことを要しよう。二は一定の組織を實現せむとする要求である、組織の一定なる内容を追求せむとの意志である。英米の學者によりて一概に、組織を維持せむとの意志と稱せらるゝものは此二者を混同し總括したるもの、私はこれを區分して考ふることの極めて必要なることを信ずるものである。この中、何等かの組織を求むる意志何等かの組織を支持せむとの要求は共同社會的なる基本的結合の間に成立するを常とする。若し全然此要素を缺くとすれば、强制的なる基本も決して一定の組織を實現し得ない。然れども此要求は組織一般に對する要求にして決して、特定の組織内容を實現せむとする要求ではない。後者はたゞ前者を前提してのみ成立し得る。强制的關係の全く存せざる場合にありて、一定内容の組織を實現せむとの要求は、また共同社會的基本より生れ來る。然れども、現實に見る國家の殆どすべての場合にありて、此要求は强制的なる基本的結合に本きて生じて來る。適切に表明すれば强制者被壓迫者の意向が實現せらるべき組織の内容を定める、被强制者被壓迫者は此定められたる内容をたゞうけ容れ、之に服從するのみ。

此二の要求又は二の意志の區分はよく國家の作用を説明し得るものである。私は常に國家を以て一の城砦にたとへる。これは主なき城砦である。此城砦を占有するものはその設備その天險を利用して相手を强壓することが出來る。國

家は強壓的權力なりと云ふはまさに之をさすに外ならぬ。然れども一見奇怪たる此事實は如何にして生じ來るか。それはたゞ共同社會的なる基本的結合の故のみ、その中に成立する何等かの組織を求むる意志の故のみ。何等かの組織を求むる意志は、內容の如何を問はず成立し來る所の組織に對する服從を意味する。組織の內容はAよりBに來るまで著しき變化ありとするも、それは何等かの組織を支持せむとする用意である、現存の組織に對して服從せむとするのみ。組織の一定內容を求むる要求は成員の一部分のものに於てのみ生き生きと作用する。此要求に於て勝利を得たるもの、換言すれば自己の欲する組織內容の要求を以て、共社會の要求となし得たるものは組織一般に對する成員の服從を掌握する。國家が主なき城砦なりと云ふ所以は內容の如何を問はずある組織を求むる意志が組織の中心に服從する用意あるが故である。一定の組織定まり、特色の人が此組織の中心に位すればかの服從はすべて此人等に向ひて捧げらる、彼等は此空虛なる城砦を占有するのである。社會一部の階級がよく支配階級として全成員を壓迫しうるもの、一に組織一般に對する要求あるによる。



四

國家の組織をば組織を求むる意志に基けようとする以上の考方は直に契約說を聯想せしむるであらう。併しながらそ

の間の距離は看過するに餘り明白である。

社會に關する契約說即ち社會契約說と稱せらるゝものに約三種乃至四種の區別の存する事は學者の認むる所である。これらの一々を分析する事は私の當面の仕事でない。たゞ社會を以て契約の上に立てりとなす見解に限局して考へたい果して社會は契約を以て其基礎となすものなるか、其歷史的成立は如何ともあれ、現に存立する社會の根柢は一種の契約として見るべきものであるか。答へて曰く、否。契約にして成立せむが爲に、相手が必ずや一定の行爲をなす事を信賴することを要する、又自己も亦必ず一定の行爲をなすと云ふ信義を守ることを要する。此契約に於ける自己の信義、相手の信賴は更に以前の契約によりて成立することはありうる、然れども究局に於ては契約ならざるものに根ざす外はない。此根ざしあればこそ、以前の契約が此信義と信賴を成立せしめ得る。此契約ならざるものは何ぞや。それは內的結合、私の用語を以てすれば愛着の結合に外ならぬ、他の一派の學者の言葉を用ふれば共同社會的結合である。如何なる契約と雖も、其契約を有効ならしむるための信賴を創造することは出來ぬ、それは究局に於て、少くもさきに謂ふ所の普遍的共同社會を前提とする。獨逸の學者の所謂 Gemeinschaft 即ち利益社會、又は Anerkennungsverhältnis 即ち承認關係が嚴密に契約と同視せられ得るやは問題であらうが、少くも大體に於て相蔽ふ事は事實である。而して、共同社會なくしては利益社會なし、共同社會的分子を伴はざる利益社會と云ふものはあることなし、相手を一たび主觀と見ずしては客觀となしうることなしと云ふが如き主張はまさに如上の見解を裏書きするものである（マクス・セエラア、エデイト・シュタイン、フイイアカント、ライナツハ等の所見を參照すべし）。

社會契約說を認めざると等しく、私は國家に關する契約說即ち國家契約說をも認め得ざるものである。社會契約說の內容が區々なるが如く、國家契約說の內容も雜多であるが、茲には社會と國家とを區別し、社會は契約に基かずとする

も國家は契約の上に立つものなりと見る見解を目ざして論述を進めたい。私はかゝる見解の中最も明瞭なるものとしてマクイバアの所説を擧げる。それによればすべての結社は合意又は契約に基く、國家も亦結社の一として然り。結社の根柢をなす共同社會は契約に負はざれども、この事結社に就いては當らない。さて私は國家組織を以て組織を求むる意志に基くものとなした。個人單獨の意志が國家組織を支持し實現し得ざること明である、此意志は何等かの意義に於ける社會的意志でなければならぬ、然らばそれは成員間の契約に基いて生ずるものではないか。こゝに於て私見と國家契約説との關係が問題となる。

先づ私見を卒直に云ひ表はす。國家が契約に基く可能なきに非ず、然れども一般國家についてはそれが契約の上に立つと說き得らるべきものではない。かの國家に關して組織一般を求むる意志と云ふものを考へよ。なるほど、それは社會的なる意志であらう。併しながら、それは前述の如く、高次なる共同社會から生れる。原則的に云へば、共同社會の中から生れる共同的意志或は共同的要求と云ふものは相分立してゐる個人の意志の集積から成るのではない。個人意識の奥に住ふ所の「われわれの意識」假りにワルタアの表現を用ふれば、自體（ゼルプスト）の中に位する共同社會的自體から、共同的意志そのものとして生成する。從ひてそれは自己の意志他人の意志を前提となし、その綜合によりて形成せられたるものとは見難い。契約は人格の自他の對立分存を豫想する、各自の意志の合一する所にのみそれが成立する。本原的に共同意志として成立する所の組織を求むる意志はかくて契約を須たず、合意の結果でもない。進みて、組織の一定內容を求むる意志と云ふものを考へる。これとても、強制關係の極度までに減退し、從ひて此意志が專ら共同社會の間から生じ來る可能あることを否定しないけれども、今これを離れて考へる。かゝる意志の內容が既に傳說的となり、成員が強制の關係より來る壓迫を何等意識せざる場合にありては、それも同じく「われわれの意識」の中から自ら湧き出でる。從

ひてこれをかの契約の成果なりと見る事は不可能である。然らずして強制の關係が生き生きと意識せらるゝ場合を考へよ。如何なる專制君主と雖も臣民の合意（コンセント）なくしては其統治を行ふことは出來ないといふ見方がある。これは合意と云ふことを服從と云ふ意味にとれば當然に是認せられなければならぬ。然れどもこれを以て契約と解し、對立する意志の合致と見る限り成立し得ざる考であると思ふ。契約は分立せる對等の人格を前提とする、強制の存する所に契約なく從ひてこれより生ずる合意はない。一定の組織の內容にして、一部分の人々の階級意志によりて定められ、それが全成員に強制せらるゝ場合にありて、此組織內容を實現し支持せむとする意志はたゞ服從によりて社會的意志となり得るものである。然りとすれば、此意志決して契約により成るものに非ず。此の如く見來らむか。國家の組織一般を求めむとする意志が契約に基かざるはもとより、此組織をして一定のものたらしめむとする意志としてもまた、原則として契約に負ふと見難い。かくて國家は契約に基く、又は合意の上に立つと云ひ得べきものに非ずと思ふ。勿論私とても、前述の意志が全然契約に負ふ可能なしと云ふのではない。組織一般を求むる意志が高次なる共同社會的基本にもとづかずと見る事は困難なりとしても、此組織に合理的熟慮を加へ自他の合意によりて一定のものたらしむることは必ずしも不可能ではない。國家の成立が契約に負へる歷史的事實をすら有する。然れどもこの可能あるが故に、國家はすべて契約の上に立つと見るは明白なる誤謬でなければならぬ。

マクイバアの立場は結社（アソシエーション）を組織と見、組織をすべて契約又は合意の上に立つものと考へる。而して國家が結社なるが故に、それは合意の上に存すると認める。私は國家の組織のみならず組織一般について其がすべて契約に負ひ合意に基くと云ふ主張を否認したい。すべての社會組織は其根柢に基本的結合あることを要する。私は國家の場合にはかゝる結合として一方に高次的共同社會と強制的關係との二者を擧げた。それは事象の重要なるもののみを選びたるに外ならぬ。組織の

種類によりては、利益社會又は利益的結合(或る學者によりては承認關係又は權利關係と呼ばれる)が此基本をなす事もある。組織はすべて甲殼又は分泌物の如し。如何なる基本的結合からも分泌せられて之を支ふる外被となる。それが全然合意に基くと見得べき場合は利益社會が其基本的結合をなす場合のみ。其の他の基本よりして、組織の生ずる場合については組織が合意の上に立つと見る主張はすべて當らず、もとより、此基本と云ふ事は時間の先後に於ける關係を必ずしも意味せず。或は組織の內容既に定まりたる後に形成せらるゝこともあらう、たゞ結合によりて支持せられざる組織なしと云ふのみ。かくして組織は其基本の如何により共同社會的なるものあり、强制關係的なるもあり又利益社會的なるもある、

五

今まで私の明にし得たる所は國家の社會學的構成に外ならぬ。而して、此の構成の點に於て、それは他の結社又は社會組織と何等性質を異にするところはない。私はこれより進みて、國家を國家ならざる組織より區別するものは何ぞといふ問題に進む。因に云ふ。私は國家を一つの組織に外ならずと見る、たゞそれは派生的意味に於てのみ此組織によりて統一を保てる社會をさす。從來の學者、國家を論ずるもの此二義を混同すること稀なりとせず。從ひて、次に今までの學說の考察を試みる場合には、私自身も亦此混同を敢てし、國家を本原的派生的の兩義に用ふる。

私は嘗て、國家を國家ならざる社會より區別するものとして、三のものを擧げた。一、國家が地緣社會(地域團體)なること。二、國家は統治機關を有すること、三、國家は階級支配の組織なること。私は此三者に一樣の意義を與へたのではない。國家は此の三の內容のすべて、又は少くも初めの二を具ふべしと考へた。從つて地緣社會であるといふことは其不可缺の條件である。今日國家の營める如き機能を營む社會組織ありとしてもそれが地緣社會の要素を缺ぐに至

れば早や國家ならざるものとなると見た。これらの點について私見必ずしも舊の如くではない。國家は過去の事實として多くは地緣團體であつた。然れどもそれは必ずしも地緣團體ではなかつた、かゝる團體であることは國家の本質に屬するのではない。國家と土地との關係はたゞ、其組織又は秩序が一定の地域的妥當性を有すと云ふに過ぎない。地緣團體であるとするならば連接せざる住居地域の成員が同一國家をなすことあり得ざる譯である(例へば數多の屬領。)然れども、組織の妥當性と云ふこと、詳言すれば其地域內にあるものが此組織に從屬し支配せられると云ふことは決して國家の特性に非ず、從來地域團體と稱せられたるものゝ特性ですらもない。私共は同樣の性質を例へば同業組合に見得ざるか、例へば或る種の產業組合に看取し得ざるか。國家は空間性又は地域性の點に於て他の社會組織と餘りにかけ離れたる性質を有するものに非ずと思ふ。しかし、此の點は今私がさして重要なる問題とする所ではない。次に階級支配の要素を考へる。私はかつて國家の本質を以て利用的强制にありと說いた(社會學原理。)それは根本に於て階級支配をば國家の中心に置く社會主義的見地と相通じたるものである。然れども私は今、此階級支配を以て飽まで國家の本質に屬せず、一の偶然的要素に過ぎずと見る。これは論理の問題に非ず、直觀の事柄である。論者或は次の如くに說く。(一)嚴密なる階級支配と云ふことは今日に於ても存しない、然るに拘らず、今日既に國家がある。然る以上、國家の本質は階級支配の外にあるべき筈である。此立論に對して私は謂ふ。階級の峻嚴なる對抗支配は今日多くは認め難い。然れども、何等かの程度に於ける階級支配は否定し難き現在の事實である。從ひて階級支配の嚴密なる姿の認むべからざるが故に、國家の本質が階級支配に存せずと云ふ理論は成立しない。(二)國家は勞働者を壓迫する機關ともなり、反對に資本家を抑制する機關ともなる、かゝる特殊の目的は國家の本質と明瞭に區別せらるべきものであると云ふケルゼンの主張もある。然れども私は思ふ。階級支配と云ふことを廣義にとる時は、それは單に無產者に

はない。一階級に對する他の階級の支配である。然る以上、國家が何れの階級の抑壓に役立つとしても階級支配の機關たることに差異はない、抑壓に利用せらるゝ方向の異なる故を以て一概に國家が階級支配の手段たらず、之を以て本質となさずと云ふ論理は成立しない筈である。たゞ私は、階級支配の伴はずしてなほ國家の存立し得る場合を考へ得る。之よりして、國家の本質が階級支配以外に存することを直觀すると云ふに止めよう。それは到底理論を以て論證し得べき事柄ではないと信じてゐる。

果して然らば國家の本質は其統治機關に存するか。答へて云ふ、或る意味に於ては然り、或る意味に於ては然らず。これ統治機關と云ふ言葉の多義にして不明なるによる。若しこれを以て一般に考へらるゝが如く單に統制の機關として考へむか。宏大なる組織を有する所の社會にして、何れかかゝる機關を有せざるものありや。教會と雖も、勞働組合と雖も、皆之を具有する。かくて教會も勞働組合も共に國家として見らるべきである。玆に於て、國家の本質を表はすに統治機關を以てする考は甚だ不精確となる。然らば如何なる概念を以て之に取代るべきものであるか。私はこの點に就いて、むしろ從來の學者の見解を檢したい。

國家の本質は一定の組織の目的內容に存するか手段に存するか。階級支配を以て之に擬する如きは前者に存すと見るものゝ一例である。多くの學者の見解は之を認めずして後者に存すと見る。それらは種々なる點に多少の差異はあれ、皆强制を以て國家の本質をなすものなりと考へる。これは目的の考をとり入るゝや否やによりて二種に分つ事を得よう。一方には强制と云ふ手段によりて階級的支配即ち經濟的絞取を營む組織なりと云ふ見方、國家は多數に對する少數の支配なり（グムプロヴィッチ）と云ふが如きは常に背後に此意味を含むでゐる。他方にはたゞ國家を以て强制による組織なりと見て、その目的の如何を全然從たる事柄と見る見方、これは極めて普通なる考へ方の如くに思はれる。此區

別よりも私にとりて重要なるは此强制を事實的のものと見るか又はたゞ規範の内容として見るかの區別である。私は他まで國家を以て一定の事實性のものとして考ふるが故に、國家の本質に屬する强制をも亦事實的のものと見る立場を主にしらべたい。

國家は强制を以て手段とする組織であるか。此場合私は强制と云ふことを二種に分ちて考ふることを便なりと見る。一は武力による强制即ち物理的强制であり、他は武力によらざる强制即ち社會的强制（物理的强制とても或る意味には社會的强制であるが二を區別せるが爲にかく云ふ）である。社會はそれが組織を作り上げてゐる限り、常に何等かの程度に於ける權力を伴ふ。蓋し集合的意志の存するところ、個人はこれに從はざるを得ざるからである。社會組織はその如何なるものなるを問はず、此權力を有すとせむか、此權力の成員に對する關係は一種の强制でなければならぬ、少くも社會的强制でなければならぬ以上、組織の存する所必ず成員に對する强制ありと云ひ得ざるか。私は强制を以て必ずしも組織に伴ふとは考へないが組織に伴はざる强制については今論ずる必要がないと思ふ。勿論社會の組織の存する所、その意志は成員たる個人の意志を斥くるだけの力を有するにしても、個人の意志にして常に社會のそれと自發的に相合致する限り、そこに自由ありて强制なしとも見られようが、少くも二者の相反する場合に强制が作用し得る意味に於て、組織が强制を伴ふと云ひ得る。尤も私は此强制の程度と組織の背後に存する基本的組合との間に相關の關係ありと見るが此點にも、今立入り得ない。かくて、强制の中に武力によらざる强制をも含めてみる限り、組織が强制を以て手段とすることは國家の本質をなすものに非ず。殆どすべての社會組織に共通なる事柄である。次に强制を物理的强制と見る立場に轉ずる。一見すればなるほど國家のみが武力を行使して成員を强制するかに見える。然れども、我中世に於ける寺院山門の武力は何を意味するか。今日の俠客團體に於ける訓練はそこに武力が統制の手段たることを明示せさ

るか。更に進みて云へば物理的强制の强制たる所以は必ずしも現に武力の行使せらるゝ點に存せず、武力が背後に控へて必要なる場合に發動し得る可能ある點に存する。此點から云へば殆ど如何なる社會組織と雖も、武力强制を伴はざるものはない。其故如何。すべての社會組織にありて、社會は究極の場合其意志を貫き通すに成員の武力を借る可能を有してゐる。海運に關する一營利會社の總會の決議すら武力によりて左右せられたと云ふ事柄は記憶にさまで古くない。平素にありて多く此武力が容易に發動する狀態にあるとあらざるとの差異はあれ、物理的强制までが統制の最後の手段として含まるゝと云ふことは國家と他の社會組織とに共通の事であると思ふ。かく見來れば、强制による組織と云ふ點に就いて國家は他の社會と全然種類を異にするものに非ず、たゞ程度上の差異を有するのみ。

玆に於て問題は再轉する。物理的强制そのものが國家の本質をなさずとするも、その合法性又は合法的獨占性の要求(精確に云へば、合法的なる物理的强制の獨占の要求)が國家を國家ならざるものから區別するのではないか。例へばマクス・ヴェエバアは國家の特徵を說いて政治的なる Anstaltsbetrieb であること、合法的物理的强制の獨占の要求の二點をあげてゐる。Anstalt, Betrieb はそれぞれ國家といふ組織の合理性、持續性を示せるもの、今立入りて分析を加へず。後の點は頗る注目に値する。かゝる見方に就いて私は思ふ。(一)物理的强制の合法性と云ふことは國家の特徵をなすものとは見難い。合法性を如何に解釋するかゞ先決の問題であるが、之を如何に狹義に見ても、或る時期に於て家族團體や氏族が合法的なる物理的强制を營むでゐたと云ひ得る。(二)合法的なる物理的强制とは何ぞや。合法的と云ふことのヴェエバアの意味(Legitimitat"=Prestige der Vorbildlichkeit oder Verbindlichkeit)が私には必ずしも明ではない(Max weber, Wirtschaft nnd Gesellschaft, S, 29, 16, 19; ditto, Politische Schriften, S. 397 ff.z)。之を法と表裏するものと考へて見る。法を以て國家の意志又は國家の機關によりて garantieren せられたる秩序と見る

限り、合法性を以て國家を說くは、國家を以て國家を說くものである。又法によりて決定的なるものが强制機關の存在なると見る時（W.u.G.S.17）合法的と云ふことは一定の社會の機關の意志すると云ふことと等しくなる。從ひて合法的なる物理的强制と云ふは普通に、組織せられたる物理的强制と稱せらるるものと實質を異にしない。此等の點より見て今の場合、合法的なると云ふ規定に顧慮する必要を認めない（合法性を法と表裏すると云ふ以外の意味にとるも同樣であると思ふが、今それにまで說き及ばない）。さてかかる强制の獨占とは何ぞや、これをケルゼンの如く主權に對する經濟的表現のみと見るは當らず。主權は法的、規範的表現にして、强制の獨占は事實的社會學的表現である。此物理的强制の獨占を以て假に强制可能の獨占と見むか、それは明白に如何なる國家も有せざりし所のものであらう。一切の社會が成員を物理的に强制しうる可能を有するから。然らばこれを强制遂行の獨占と見るとしよう。勿論國家が完全なる此獨占を有したる事はない。家族氏族すらかゝる遂行の任に當りしは勿論、其他の社會の營む强制にして國家の强制遂行を妨害し威嚇せむとしたる事すらもある。思想に思ひ浮べ得る可能としては、敎會、又は勞働組合の如き他の社會が此物理的强制の獨占を其手中に收め得ることすらもある。これは如何なる社會も必要に應じては如何なる機能をもとり得べしと云ふ根本の原則（假に名けて機能集散の原則と云ふ）の當然の歸結である。要するに私から見れば、如何なる社會も其統制の手段として物理的强制に訴へ得る、國家のみが此手段を獨占するに非ず。たゞ他のものよりも頻繁に之を行使すと云ふに過ぎない。

勿論私は國家の本質に關する物理的强制說に他の狀態があることを忘れない。それは國家の本質を事實としての物理的强制に求めず、規範の內容としての物理的强制に求めるものである。詳言すれば、國家を以て事實性のものと見ず、規範の組織たる秩序の一と見る、而も國家の特徵をなすものはこの規範が强制的規範であることである。規範の示す條

件の下に一定の物理的強制の行はるべしと云ふことである。事實としての强制に非ずして、規範秩序の内容としての强制、これが國家を他の秩序より區別する。これはハンス・ケルゼンの見解であるが、私はすべて今まで社會學的見地の上から事實としての國家、他の表現を借れば文化としての國家を見た。而もケルゼンから見れば、國家はたゞ規範的概念である。自然と精神事實と規範とは、相對立して融通することなきものである。國家がたゞ規範性のものとして、從ひて法的規範の總體として認めらるゝ以上、はや、同時に國家を事實性のものとして考へることは許されない。然れども私は思ふ。ケルゼンが自然と精神との對立を直に事實と規範との對立と同視するのは其間に一段の飛躍を敢てしてゐるのではないか。國家の單なる自然に非ざることは私も勿論之を認める。然れども國家が自然に非ずと云ふことは直に之を規範と同一に見ることを許すのではあるまい。等しく事實性を帶びながら單なる自然に非ずして、而も有意味的なる、又は意味の或る程度に於ける實現として見らるべき事實があるのではないか。それは規範そのもの又は規範の總體そのものとは全然區別せらるべきである。私は國家を以て此自然に非ざる事實性そのもの、規範そのものと異なれる精神的事實に屬するものとして見る。今法的規範的なる國家概念の存立しうることを否認するのではない。たゞそれは飽まで規範性のものにして事實性のものに非ずと信ずる、而してこれあるが故に、事實性に於ける國家概念を否定し得べきものに非ずと見たい。私自身は法と國家とが同一實在の兩面をなすと信ずるのではない、國家にも法にも等しく規範的並びに事實的の兩概念が成立しうべしとする。それにしても、異なれる二方面より見らるゝものが如何にして同一の國家と云ふ實在たり得るやと云ふ疑問が投ぜられよう（Hans Kelsen, Der soz. u. jur. Staatsbegriff, S. 108.）。そこになれば我等が營みつゝある國家生活の體驗そのものに即する外はない、一方はこれを事實として見、他方は其中に働いてゐる要求を抽象して組み上げた概念である、二者の聯絡は規範と實在との結合してゐる體驗そのものに就いて知

らるべきである。かくて、私はケルゼンの國家概念が規範的のものであるだけ、之を事實性のものに飜譯してのみ私見と比較しうる。物理的强制を以て內容とする所の規範の妥當しつゝある姿、これが事實性に移されたる國家に外ならぬ。規範組織又は規範秩序は妥當しなければならぬ、而して此妥當が、物理的强制を以て保障せられてゐなければならぬ。此姿こそは規範性の國家を事實に轉化せしめたるものと思ふ。かゝる意味に於て、國家を强制秩序なりと見來れば、それは物理的强制を以て國家を國家ならざるものと區別するものなりと云ふ前述の見解に歸着する。これが是非については今まで吟味し來れる所、繰返して論及しない。

六

今までは國家の本質の何にあらざるかを說きたる積りである。次に此本質を如何に見るやを述べようと思ふ私は國家を國家ならざるものより區別するものを其機能に求める。之を手段に求めて、物理的强制そのもの、又は物理的强制の獨占にありとなす見解の根本的難點はかゝる統制の手段が少くも理論上、如何なる社會の組織にも共通なり得る點にあり。物理的强制そのものゝ殆ど如何なる組織にも伴ひ得ることは疑ひ難き事實である。從ひて國家のみが之を獨占的に行使するものなりとは認め難い。秩序の要求する所によれば國家のみが行使すると云ふことは一時の事象に捉はれ過ぎたる見解であるかに思ふ。國家以外の團體例へば家族、氏族、降りては都市又は職業團體が所謂合法的(秩序一般に合する意味に於て)に、武力を行使したる事は顯著なる過去の事實である。私は物理的强制について如何に評細なる規定を加ふるも、以て國家と他の組織との明確なる境界を劃するに足らずと信ずる。勿論、組織のそれぞれに異るに從ひて統制のために用ふる主要なる手段にそれぞれ差異はある。評言すれば此手段と組織の內容との間に或る程度

の平行又は相關はある。今日の株式會社は武力に訴ふることを稀に、社交團體は除名の道に出づることを多しとする。而も此聯絡は一義的ならず、たゞ國家が武力の強制を主要なる手段とする事は其組織の性質そのものに特有なる内容あるが故なりと思はしめる。かくて私は國家の本質を此内容即ち機能に於て求めむとする。ケルゼンは說いて云ふ。國家又は法的秩序と稱せらるゝ支配強制の機關は決して其社會的目的又は其内容の如何によりて特徵づけらるゝものではない。其目的内容は雜多なる可變的のものである。近代國家は或一階級による他の階級の經濟的絞取を目的とすると認められよう。而も經濟的絞取を敵視する國家組織をも認めうる。ヴエエバアまた謂へらく、政治團體一般從ひて國家の特徵は其特有なる武力的なる手段にある、單なる支配と云ふことは殆どすべての團體に共通なる事實であると。私見は正に之を反轉したるものである。而も此反轉によりて到達する所は極めて平凡なる常識的内容のものに過ぎない。

國家は統制のために統制を求むる組織であり、而もかゝる組織にして他の意志を排除せむとの要求を有するものである。統制のために統制を求むる組織を、今假に政治的（私は政治的と云ふことが實は更に範圍の廣いものであることを信ずるが）組織又は政治的團體と稱する。これが特徵は何等かの他の一定目的の爲に統制を營まざる點にある。すべての團體は支配團體であると稱せらるゝほどに、すべての組織は統制を營みつゝある。然れども、一般の組織即ち政治的組織以外の組織にありては、何等かの目的を達成せむが爲に、ある目的に向へる活動を助長せむが爲に統制が營まれる。統制が自己目的に非ずして、目的の爲の手段である、助長のための方便として行はれるに過ぎない。然るに、政治的組織にありては統制そのものが追求せられる。これは三の事情による。第一は形式的なる要求により。即ち一部の人人が支配そのものを求める要求とまた一部の人人が服從そのことに自己の充足を見出す要求とが作用して、統制を自己目的たらしめる。第二は生存の安固そのことを求むるがために。生存の安固、現在の生活の常規が何等新なる努力苦痛

無くしてそのまゝ持續せられむことを求むる時、統制そのことが特定の生活目的の内容から離れて要求せられる。第三には何等かの目的の共同なる達成、その目的の爲の活動の助長のために一定の統制を必要とする。不定なる然れども追求せられうべき共同目的に準備せむとする傾向よりして、統制そのことが自ら要求せられる。此の如き事情より統制そのことが目的と見られ之を營む爲に組織が必要とせられる。此組織を求むる意志に本けるもの、これを政治的組織と云ふ。此政治的組織は決して單一のものではない。而してそれらの中、他のもの即ち他の政治的組織の意志を排除せむとの要求、之を排除しても自己の意志を遂行せむとの要求を有するものがある。これが即ち國家に外ならぬ。かゝる要求は之を其規範性に於て見る時國家の主權と考へらるゝものである。事實として見たるこの要求は程度を有し得るもの、而してその程度は排除が「平均的に」「蓋然的に」どこまで行はれ得るかにかゝる。國家はもとより此統制のための統制の外に數多の機能を營むことが出來る。ことに近代の所謂文化國家、社會主義的の將來國家にありては其機能極めて復雜となる性質を有する。然れどもこれらの機能の遂行、それに必要なる方法としての統制は何等國家の本質をなすものに非ずして、その附隨の要素とのみ見るべきものであらう。而してこの統制のための統制は其遂行の爲に、他の一定目的のための統制にもたちまさりて强力なる手段を必要とする。蓋し一定目的の爲の統制は遂行不能なりとするもたゞ此一部分の目的の充足を見ざるのみ。然れども統制のための統制に至りては生存の安固そのことがその不能によりて危險に陷る。その爲に必要である限り、最後の手段即ち物理的强制の手段がこれに與へられねばならぬ。これ國家と物理的强制が必然ならざるまでも最も密接なる聯絡を有する所以である。因に云ふ。若し單に社會の機能又は目的の範圍によりて國家を他の社會より區別せむと試みるものあらば、それは事實の一面を見て止むの嫌なきに非ず。國家は其機能不定限的に廣きに亙り得べく、從ひて不定限なる目的を追求すと見られる、而して其他の社會（特に目的社會と稱せら

るゝもの）は一定の機能、一定の目的に關すと見られる。然れども、國家以外の社會とても、其營み得る機能、追求し得る目的は不定限に擴張せられ得る。（前掲、機能集散の原則を併せ考ふべきである）中世の教會を見よ、ギルドを見よ。

七

私は今問題の中心に立歸る。

共產主義の高度の段階に於ては分業の下に於ける個人の奴隸的從屬がなくなり、從ひてまた、精神的勞働と筋肉勞働との對立が廢せられたる後、勞働が生活の爲の單なる手段ではなくして、それ自體生活の第一要求となりたる後、其時はじめて狹隘なる有產者法律の限界を全くのりこえて、而して社會はその旗の上に各人の其能力に應じて各人には其必要に應じてと記し得るに至る（Neue Zeit,XI Faergang 1890—91,Programmbrief' s,567,）。共產主義の高き段階に於ては、人人は何等の法的規範なくして社會の爲に働きうる樣になり、彼等は自發的に其能力に於て働くであらうほど、社會的共同生活の原則を守る習慣がつけられ、彼等の勞働は生產的となり、有產者法律の狹隘なる限界はのりこえられ、消費手段の分配には、各人に歸すべき量を社會によりて限定すること不必要となり各人はその必要に應じて自由にとるであらう（L.nin Staat und Revolution.90.）。これは多くの若人の魂を躍らすほどの繪畫である。然れども現實の人人の作れる社會が如何して之を實現しうるか。階級分立の廢止が自ら此自由の境地に導き得るのであるか。マルクス的見地よりすれば、國家の特徴は階級的支配にある、然れども國家の消滅は決して階級的支配のみの廢止を意味するのではない。階級的支配は國家の機能又は目的であるが、これがための手段として强制による秩序又は强制組織がある。前者を內容と

すれば後者はまさに其形式に當る。從ひて階級分立を廢止し其間の支配をなくすることは、同時に强制組織そのもの丶消滅を意味しなければならぬ。問題はこ丶に於て內容と形式（私の勝手なる用語ではあるが）との聯絡がかく必然なりや如何と云ふことにある。

私は豫め云ふ、故に內在的批判を試みむとするのではない、私は自身の立場から判斷を下すに止める。

共產社會は廣大なる組織を必要とする。それは產業の集中的經營が極めて廣汎なる地域に亘りて行はるるのみではない、社會の其他の機能も亦集中的に經營せらる丶を要するからである。然るに此等の經營はたゞ統一的意志の遂行によりてのみ可能であり、此遂行は他の意志を排除しうる强制をまつものと思はれる。若しかゝる强制を缺ぐとせば、如何にして部分の雜多なる要求を壓迫し如何にして組織的活動を實行することを得べきか。此點より考へて、意識的協同は自由を束縛すと云ふスペンサアの古い批評も、共產主義の實行は强制をまつこと益多きに非ずやと云ふケルゼンの見方も相當の理由あるものと考へる。（階級の撤廢が力の慾望の上に作用することより、これに反對なる結果の生ずる可能については後に說明する）かくて階級支配と云ふ中味を取去ることは同時に强制組織と云ふ形式を取去ることではない。翻りて思ふ。階級分立の撤廢と云ふことはどこまで强制の組織上に變化を與へうるのであるか、國家を以て階級的抑壓の權力なりと云ふのは事實の一側面を見たるものとして、必ずしも誤謬ではない。然れどもそれが抑壓の權力たり得る根據如何。分裂せる階級がなほ同一の共同社會的基本を有し、此基本の上に組織を求める意志の成立し、此意志によりて組織に對する服從があり、此服從によりて組織の權力が空虛なる城砦の如く成立するが故である。抑壓者は少くも理論的分析上、抑壓に先ちて存する權力なくして抑壓的權力を有することを得ぬ、先行する權力を抑壓の爲に利用するのみ。階級的對立が明確であり、其間の分裂が强度であるほど、此權力の抑壓の爲にする利用は顯著ならざるを得ぬ。一

たび階級の分立が全然取去られ、階級支配の全く行はれざるに至るとせよ。其間の抑壓と云ふことはやまなければならぬ。云はゞ權力の階級的利用はやむ、而も權力そのものゝ消滅すべき理論は見出し難い。かの空虛なる城砦は階級支配の意志を有せざるものによりてなほ占有せらるゝはずである。蓋し階級支配と强制組織とを內容形式又は表裏の關係に立たしめて見る事に無理がある。强制組織は階級支配の內容をも盛るが、なほ外の內容をも盛る。否後者を盛るためにそれは作られてある。

かくて私は階級支配の撤廢からして、所謂自由の王國、社會的共同生活の諸規則が慣熟によりてのみ遵奉せらるゝ境地が實現せらるゝものとは考へ得ない。階級抑壓のための組織即ち强制のための組織は廢せられよう、しかし組織のための强制はどこまでも存續しなければならぬ。たゞ此强制の性質のみは問題となる。

階級支配の行はれざるに及びてなほそこに殘存する所の强制は例へばケルゼンによる時、明に物理的のものである。蓋しその所謂强制秩序と云ふものは常に物理的强制を內容とする秩序を含むものであるから。『人間を而も、社會主義の目標の示すが如く、非常に多數なる人間即ち全人類を、一の統一的計劃に從ひて指導することが、果して秩序を維持する手段としての外的强制を用ふることなくして行はれ得べきや否や。』『これは經濟問題ではなくして心理學の問題である。而して此問題は若し經驗的に、即ち既往の社會的經驗に基きて答ふべきものとすれば、否と答へなければならぬ。』『共產主義の社會が根本的の衝突を排除してたゞその實行方法についての意見の相違がありうるのみであると假定しても、なほ强制秩序の必要がなくなるとは考へ得ない。』然れども私は思ふ。此點に關して、物理的强制の消滅が單に人性の一變によりてのみ可能であり、前者を說くは後者を信ずるものなりと主張すべきに非ず。私は產業的經營に關する統一的意志の强行がたゞ武力的强制の手段によりてのみ可能であると云ふケルゼンの主張に何等積極的の論據を見出し得

ざるものである。エンゲルスが氏族制度を以て何等の强制（物理的）なき自由の組織であつたと見るのはもとより誤謬であらう。然れども、過去の時代に於て又低級の蠻民にありて、武力强制なき社會は存しなかつたか。又今日の社會にありて武力强制なき組織は存し得ないか。原始に近き段階にありて内部の秩序が物理的强制の手段をまつことなくして維持せられたる事實はある。社會が人類に於て、組織に於て複雜と廣汎さを加へたとは云へ、同樣なる可能が全然存することなしとは如何にして斷言しうるか。又國家以外の社會組織は武力的强制を缺いでなほ存續し作用してゐる、將來實現せらるべしと云ふ共產社會が何故に全然此可能性を缺ぐと見なければならぬか、何故にそれは今日の國家と同一でなければならぬと云ふのであるか。私は武力的强制の必然的消滅を論證し得ないにしても、其必然的存續の主張に對してこれらの論駁を加へ得ると思ふ。或は論ずるものがあらう。過去の時代に於て武力的强制を缺ぎたる時代ありとすれば、それは全然緊密なる共同社會的結合の故である。社會の範圍の廣大今日の如きに於て之を望むが如きは痴人の夢のみと。現代の社會主義學者の中には共同社會の復活を熱望し期待するもの少しとせず。今煩瑣なる引用をすべて省略するが、昔時の氏族共產體に於けるが如き共同的結合、共同的互助を全人類に亘りて復活せむとする考は種々なる文獻に散見する。この見解は例へばシュタウディンガアに於て最も明瞭に表明せられてゐると思ふ。然れども、私思ふに、此の如きは東より西に沈める日を復び西より昇らしむとするが如きのみ。共同社會より利益社會への進行は決して以前の共同社會にかへらむが爲に營まるゝものに非ず。よし例へば精神的共同社會、又は精神的總人格と云ふが如きものへの進行を認むるにしても、所謂下部建造の世界にありては依然たる利益社會の支配があるべきである。私は無階級的社會がよし實現するとしても、それは共同社會に復歸する事によりて武力强制の手段を不必要とするに非ず。寧ろ利益社會化の究極に到達することによりて外的强制を消滅せしめる。利益社會的に化することは合理主義の支配の下に從ふこと

である。「金持喧嘩せず。」人々が理知的打算に從ひて行動する所、武力に訴へて强制せざるべからずと云ふ必要は去る。資本主義的組織は此合理的主義を準備したるが、共產主義的組織來ることありとすれば、それは貴重なる遺產として發動をつゞけ、社會の各方面に亘りて、物的强制を豫防する油となるであらう。共產的社會そのものも決して共同社會への復歸としては生じまい、從はざるものに從はずと云ふ利益社會的原則の發現としてのみ成立するものと思ふ。

八

國家を以て物理的强制の秩序に過ぎずとなす人人にとりては私の問題は今まで述べ來れる所のみを以て答へ盡されたと見えるであらう。然れども私の論ぜむとする要點はむしろ、なほ說かむとする部分に存する。

支配と云ふ言葉は極めて複雜多樣の意義を有する。それは最狹義に於て、經濟的（又は其他の）利益の搾取を伴へる所の、强制による他人意志の決定を意味する。此の意味の支配は階級的分立、階級的對抗なき所に於て存在せず（例へばグムプロウイツチ、マクス・アドラア、數多の社會主義學者）。單なる管理、又は單なる行政と云ふ言葉はこれに對立するものとして用ひられる。第二の意義に於てそれは、階級的搾取を伴ふと伴はざるとを問はず、物理的强制の手段に訴へてもなほ單一の意志が多數の他の意志を決定することを示す。それは物理的强制を內容とする秩序と云ふものと範圍を一にするものである。第三の意義に於ては、武力强制の伴ふと否とを問はず、又搾取の伴ふと否とを問はず、何等かの强制によりて意志による意志の決定の行はるゝ所支配ありと見る。（例へばマクス・ヴエエバア）單なる管理、物の支配等の言葉は狹義に於てこの意味の支配より第二の意味の支配を引き去れる殘餘のみを含むと考へる。これは何等の强制なくして高き意志が他の意志を自巳に合致せしむること、即ち指導の概念に對立するものである。支配にこれらの雜多

なる意義あるが故に、或は國家を以て支配團體に外ならずと見、或は然らずして支配は一切の社會の組織に共通なる性質であると說く。

ケルゼンによる時、國家の特徵は第二の意義の支配に存する（これは嚴密なる意味に於て正しくはない。動機による決定としての支配は國家の特徵をなさずと明言してゐる。しかし茲には其强制秩序の概念を事實性のものに移してかく云ふ）。果して然りとすれば、共產主義社會の實現せらると假定したる時、それが國家をなすや否やは、そこに物理的强制の行はるゝや否やによりて定まる。而して私は此點に明確なる答解を與へ得ざるものゝ、此種の强制の消滅を理論的に否定することの不可能を述べたる積りである。而も私自身は決して强制そのものゝ消滅を信ずるものに非ず、武力强制なしとするもなほ他の形態の他の方法に於ける强制は疑もなく殘存する。然らばこれ國家の存立、永存を必然なるべしと說くものであるか、答へて云ふ、理論的には然らず。

私は共產社會に於ける强制が或は武力的又は外的ならざるを得ると云ふ意味に於て、國家の永續性を否定せむとするものに非ず。私は物理的なる强制手段の消滅可能を信ずるも、以下の論點はこれを信ずると否とに關係なきものである。

ケルゼンは次の如くに考へる。人の管理即ち或る人が他人の意志を規定することなくしては物の管理は存在せず、人の支配なくしては生產過程の指導もあり得ない。生產及び生產過程はそれ自身經濟的秩序に從ふものではない、經濟的秩序の目的物は人の意欲及び行爲である。此見方をつきすゝめて見むか。人の自然支配は人による人の支配、即ち人が人の秩序に服從することなくしては不可能である。勿論人の支配とは必ずしも榨取的隷屬たる事を要しない。たゞ問題は秩序を維持するための手段としての外的强制を問ふことなくして多數民衆を一の統一的計劃に從ひて導きうるかにある。——私の見解は物の管理と人の管理又は支配との關係を中心として旋回する。人の支配なくしては物の管理が行は

れずと云ふことは明である。一切の文化的事象が、社會的關係に於て營まるゝ限り、而して強制が如何なる意味に於ても不必要とならざる限り、經濟的經營、自然に對する支配は皆人の支配をまたずして行はれ難い。然れども、これがやがて國家の永久存續そのものを論證することに歸着すべきものであるか。人の支配を保ちてのみ物の管理が行はるゝにしても、此二者が平行して營まれ得るのに二の樣式がある。第一樣式。それにありては物の管理のために人の管理又は人の統制（私は此二を同義に用ふる）を求むるに非ず、人の統制の結果として物の管理が行はれる。第二樣式。物の管理のために人の統制が求められる。云はゞ物の管理を求むる結果として人の統制が行はれる。前者は主體の意志より人へ、人より事物へと進み、後者は主體の意志より事物へ、事物より人へとすゝむ（W―M―S、W―S―M）。第二樣式、云はゞ間接的なる人の管理にありては人が人そのものを管理又は支配せむとするに非ず、たゞ事物の管理を營まむとして、必要上之を行ふ。第一樣式、云はゞ直接的なる人の管理にありては、人が人そのものを他の目的の手段と云ふことから離れ（又は少くも具體的なる一定目的手段としてではなく）、たゞ統制そのことのために統制する。今、人に對する人の支配がやみ、物の管理が之に代ると云ふ主張の文獻的考證に至りては私の全然關知せざるところである。のみならず、人の統制が統制そのことの爲に行はれると云ふ事は、支配の內容を以て經濟的利益の搾取にありとなす經濟史觀の基調と相容れざるものとも見られる。然れども私をして自分の立場から之を解釋せしむれば、之を次の如くに考へたい。所謂人に對する人の支配は第一樣式による人の統制を意味し、物の管理は第二樣式による人の統制を意味する。階級分立の廢止と共に止むものは前者にして、之に代るものは即ち後者である。

國家とは何ぞや。それは物理的強制による組織ではない。一定の社會組織の本質は其統制の爲の手段に求むべきに非ず、結合そのものの性質に求むべきである。國家と云ふ組織は實に統制の爲の統制の組織たるにあり、國家の營む所の

統制の作用は前述の第二樣式に屬せずして第一樣式に屬する。この國家（並びに他の政治的團體）を他の社會より區別するものはたゞ此樣式の相違のみ、他の社會はすべて、第二樣式に屬する統制を營む、それは常に一定の目的を遂行せむための組織である。

本來此二の統制樣式が代替の性質を有することは疑ふべからざる事實ではないかと思ふ。一定の事物の管理と之に必要なる人の支配とが共に營まるゝ限り如何なる順序に於てこの二が要求せらるゝにせよ、それは社會の統制の上から見て同一の結果をもたらすものである。現に、軍國多事の日にありては國家以外の社會の機能が殆どすべて國家の手に吸收せられ得る。それはW—S—Mの第二樣式に代ふるにW—M—Sの第一樣式を以てしたるものである。之に反して國家の營む機能の中、一部分が脫落して部分社會の手に委ねらるゝことがある、これは第一樣式に代ふるに第二樣式を以てするものである。如何なる社會といへども、如何なる機能をも吸收し得る。此機能集散の認めらるゝ以上、國家が第一樣式を以て營みつゝあるだけの統制が如何にして他の社會により第二樣式を以て營み得られざるか。私は之を否定すべき何の論據をも有しない。かくて少くとも、物の管理が人の管理に代ると云ふことは國家的强制の存續を意味するものに非ず、而して此代替は少くとも理論上可能のことなりと見なければならぬ。

誠に共產社會が次の如き組織をとると想定せよ。それが何等統制の爲の統制を目的とせず、たゞ一定の經濟的經營そのものを目的とする（又はその他の實質的目的を追求するとしても同一であるが）。而もこの目的を遂行する必要の爲に又はその便宜上、成員の上に統制を加へるとする。勿論統制の爲の統制の組織を缺くが故に、それは今日の種々なる經濟的利益の結社、又は勞働組合などよりも廣汎なる强制を必要とするであらう。此點を看過するではないが兎に角、今の場合、統制は行はれてもそれは人による人の支配ではない、飽まで物の管理たるに止まる。卽ちかゝる社會組織にあり

ては第二樣式の統制のみありて、第一樣式の統制を缺ぐ，國家の要素はそこに認め得られない。」

然れどもかゝる社會的構造の實現と階級分立の撤廢との間に如何なる必要的聯絡ありや。私は二點を擧げる。第一、統制のための統制は支配そのものを求める要求（並びに服從の要求）に負ふ所甚だ多い。然るに階級的對抗の全然廢止せらるゝ曉にありては此要求の作用そのものが營まれ難い、社會そのものが自ら之を抑壓する傾向をもつ、第二、階級的懸隔の存する場合に於てのみ「社會的勢力の要求」即ち力の欲望一般が發動する、他人に卓越することの不能なる限り、力の欲望は作用し難い。而して、共産社會の特質としては、此優勝を著しく不可能ならしめる、勿論此優勝の可能なる範圍は殘存するが）。然るに人間の社會にありて統制を最も必要ならしむる事情は何ぞや、それはたゞ力のための爭鬪又は競爭のみ。成程經濟的經營の集中が事物の管理の必要上から强制を必要とする程度を加へると云ふ事はある。然れども統制そのことの爲に統制を求めしめる所以の生存の安固に對する危險は此際著しく去ると見る事を得る。從ひて、統制のために統制の營まるゝ必要は漸く乏しくなる。これらの二點は統制のための統制の組織をして影薄きものたらしめる事情であらうと思ふが更に進みて考ふべき事柄がある。それは社會生活の合理化的利益社會的傾向である（此二傾向は共根本に於て相共通するものがあるのみならず階級撤廢の要求そのものすらも、深く根ざせる所はこれにあると考へ得る）。成員相互の關係が利益社會的のものとなるほど、相互の生存の安固は自ら保障せられ、尊重せられてゐる、この安固を前提としてのみ利益社會は成立し得るものであるから。かゝる事情は統制のための統制をしてまた必要乏しからしむるであらう。加之、合理化的精神はすべてに對して其の理由を求める、此理由に應ずる限度に於てのみ奉仕し又服從する。從ひて統制を受くるに當りても、常に如何なる目的の到達の爲にするかを考へる。其結果は統制をすべて一定の目的の諸組織の間に分配し、單なる統制の爲の統制の組織を認めざる傾向を示すに至るであらう。不確定の目的の爲に、

又に統制そのことの爲に服從することはかくて合理化的大勢の赴くる所となるべき性質を有つ。人人は服從を無理由に前拂せず一定目的の達成の爲にのみ、又必要の限度に於てのみ、之を支拂ふ。第一樣式の統制は此傾向の究極するところ其影を沒するに至らなければならぬ。果して然りとせむか。殘存するものは第二樣式の統制のみ。勿論、組織の維持せらるゝ以上、強制は必然に存立する。然れども此強制あるが故に國家が必ずそこにあるとは云ひ難くなる。私は此際の社會の構造を以てジンメルの見るが如く錯綜化の無限に行はれてゐるものとするか、ギルド社會主義論者の云ふが如く、いくつかの機能的團體の對立せるものと考へるか、然らずして、數多の機能が一結社に集中せらるるものとするか、これらの點には今全く闡說しない。たゞ信ずる所は第二樣式の君臨がそこに行はれ得る可能ありと云ふことである。一意志の、強制を以てする排他的遂行ありとしてもそれは必ずしも國家あることを保障しない。

此小論一篇、炎熱の中匆忙の間に執筆して所論なほ頗る未熟なるを意識する。特に末尾意に充たざる點多し。後日此問題に關する考察を重ねて補正の日あることを期す（一九二五、七、三一佐世保客舍に於て）。

虚弱者を强健化す

ブルトーゼ

ブルトーゼは八大醫學博士の御推奨と且帝國大學病院、赤十字社病院其他各府縣立病院等に於て盛んに御採用を蒙りつゝある最も理想的補血强壯增進劑にして人體肝臟中に含まるゝ鐵白蛋酸と同性同態の人工集成したる液狀製劑なり併して左記特長を有す。

一、芳香美味にして我國民固有の嗜好に適し口に快く婦人子供も好愛す。

二、絕對に副作用なく能く造血機能を亢進し新陳代謝を旺盛ならしめ食慾を增進す。

三、速かに同化吸收され赤血球を增加し精力を旺盛ならしめ身體榮養上强力なる作用を呈す

故に急性慢性貧血病、萎黄病、腺病及結核其他諸疾患より來る榮養不良症に衰弱、神經衰弱、病後快復期姙婦、授乳婦、產後、虚弱高齡者等に顯著なる効を奏す。

種類及賣價

補血强壯 榮養增進劑	單味ブルトーゼ	小瓶 半月分 金二圓	大瓶 一月分 金三圓
神經性 疾患特効劑	アルゼンブルトーゼ	小瓶 半月分 金二圓三十錢	大瓶 一月分 金三圓六十錢
腺病質特効 補血强壯劑	ヨードブルトーゼ	小瓶 半月分 金二圓三十錢	大瓶 一月分 金三圓六十錢
健胃補血 强壯劑	キナブルトーゼ	小瓶 半月分 金二圓三十錢	大瓶 一月分 金三圓八十錢
呼吸器系 疾患特効劑	グアヤコールブルトーゼ	小瓶 半月分 金三圓五十錢	大瓶 一月分 金五圓五十錢

賣捌各地藥店

説明書進呈

發賣元

本舖 藤澤友吉商店

大阪市東區道修町二丁目（振替大阪一七四一番）

東京支店 東京日本橋區本町四丁目

京城支店 京城府西小門町四十二

フランス現代の文學と文學の將來

アンリ・バルビユッス

これまでにも屢々叫び來つたことであり、且益々その度を多くして說き來つたところであるが、今日われらの目前には藝術更新に關する非常に重大な問題が橫つて居るのであつて、しかもこの問題に關しては、かの目前の事實から超脫し得た人々が社會方面に於て觀察してゐるのと同じやうな、實に廣々とした前途が橫つてゐるのである。

ブルジョワ階級の左翼にあたつて、民衆を美しい藝術に參加せしめやうといふ問題が、如何に重ぜられるやうになつて來たかといふことは知る人ぞ知るである。

今日までのところ、藝術的享樂といふものは高尙にして得易からぬ快樂の部に屬し、ただ敎養に就ての特權階級、從つて支配階級の人々のみの領分であるかのやうに考へられて來たのであつた。

從つて貧しき者にとつては、かかる「選ばれたる人々」ばかりの向上と精神的快樂を目的とした聖卓の前にあつて、自らの席を見出すことが出來なかつたのだつた。そして民衆といふものは、高級な作品などは理解することの出來ないものだと考へつづけられて來たのだつた。

然るに前述のごとく、いまや多くの勝れたる人々はかうした詭辯を粉砕しやうと試みはじめたのであつた。そのため

彼等の力說するところは次の一點に存してゐる。すなはち「民衆は自體、深みもなければ趣きもないといふやな作品、平凡無雜な作品などは好まないものである。それといふのは、藝術作品こそは民衆のもつ唯一の糧であり、そして民衆はこれをよそにして他には何物をも持つて居ないからである。」と。かくして觀劇料の割引などといふ方法によつて、あまり惠まれてゐない民衆、すなはち人類の大部分、すなはち勞働階級にたいして、恰度年金生活者（ランチィエ）や裕福なブルジョワと同じやうに、有難い傑作上演のお芝居を見せてやらうといふ勇ましい計畫がその數多くあらはれて來たのだつた。それこそはたしかに、不正を匡さうといふ賞讃すべき尊き意思と同情に富んだ希望とを具へた計畫であると云はれやう。

然し手近に寄つてこの計畫を觀察するとき、かうした意味の努力のごときは、元々プロレタリアに向つて從來よりはいくらか廣く藝術の門戸を開け放つてやらうといふその目的の上から考へて、かなり巧智にながれたものであり、從つてかなり無意味なものに過ぎないやうに思はれる。そして問題はもつと廣やかな基礎のうへに打立てられなければならないもののやうに考へられる。

貧しい者たちにたいし、藝術的方面に於て慈善を施すなどゝいふことは全く問題にならないことである。慈善なぞといふものは一の緩和劑にすぎないもので、ただ、被搾取階級の考へ出したさまざまな施設がまだ良き結果を生み出し得なかつた時代、即ち專制と壓抑とにたいしてかうした氣まぐれな貴族的な「施し物」の方法よりほかには何等緩和劑のなかつた時代に於てのみ、はじめて存在の口實を見出し得るものなのである。

今日の勞働者階級又農民階級の情勢はこれとは全く面目を異にする。これらの階級は今日社會的に位置を占め來てゐるものであり、彼等の現實的位置といふものは否應なしに實際社會に劃然としてその姿をあらはし來つてゐるものであ

る。彼等の社會的意識が目覺めたとき、同時に彼等のうちにも生活にたいする大いなる權利の觀念が目ざめて來た。精神的歡樂にたいする權利、かの大ジョオレスの言葉を假りて云へば「美をもとむるの權利」(Le Droit A La Beaute)は何人にたいしても拒否することを得ない個人的所有權の一部を爲してゐるものである。貧しきものが物質的及精神的の生活資料を要求するものは、慈悲深き人々の好意に期待すべきものでもなければ、また充分滿されてゐる人々の寛大な心に訴へるのでもありはしない。貧しきものは世界の表面に於て、彼等の分布、彼等の數、彼等の重み、彼等の力がどれほどな價値をもつてゐるかを示すことによつて、之を堂々と要求してゐるものなのである。

語を換へていへばそこに「民衆全部のための藝術」といふものが生れて來なければならないやうに思はれる。そしてこのことは、何もさういふ目的のために催される心掛けのいい慈善家たちの觀劇會とかその他の計畫とかいふものとは全く性質を異にしてゐるものでなければならぬ。だがかうした總ての人々のための藝術などといふものも、要するにある時代の社會狀態から起つて來る單なる結果に外ならないものであつて、かうした第二次的の解放が惹起されるその原動力になつてゐるものは何ぞやといへば、それこそは實に解放を目ざしてすゝむ人類全體の大集團のその上昇的運動である。それは恰度一つの機械が自分の與へる動きによつて他の第二次の齒車までも廻轉させ、そして他の齒車の運動までも自らの運動に併せおはるのと全く同樣である。

然らば民衆藝術の復興は果して吾人の面前に可能且確實なものとしてあらはれ來つてゐるのであらうか。今日着々として社會的に諸種の理想實現に近きつゝある民衆は、果して藝術的方面に於ても一の新らしき藝術、すなはち從來のお大名的またはブルジョワ的貴族主義の古き作品を踏み越え、更に一歩を進めて自らの表現による藝術を創り出さなければならないことを意識してゐるのであらうか。

いまを去る二十年前であつたなら、かうした問題に答へることはかなり無謀なことであつたにちがひない。だが今日に於て吾人は大膽に答へきることが出來るのである。すなはち無産階級の人々はいまや幾人かの作家を通じて自分達の新らしい强烈な生活を文藝作品のなかに盛り上ることのみをもつて滿足せず、進んで根底的、絕對的に、文學藝術の過去現在に亘つての作品の貯藏總量(ストック)を變更させおはらないでは止まないと考へて居るのである。

これこそは單なる論議によつて何うともなつたり、または希望をもつて直ちに事實を取りちがへたりすることから起つてくるその日暮しの浮つ調子な想像の生み出した考へとはちがつてゐる。その證據として擧ぐべきは、今日吾人がみるごとく、文學その他凡ての藝術に亘つて見られてゐる、表現方法や體樣についての大いなる變化である。

歐洲諸國に於て今日文學とは如何なる意味を有してゐるか。

その主材といふ方面から見れば、この問題に答ふることは不可能ではないにしても甚だしく困難である。然しその形式に關する方面から見るとき、この問題はさまで困難とは云はれない。

吾人が今日文學の表現形式に於ける前代未聞の變革の時に際してゐることは爭はれぬ事實である。私は專ら自分が特によく知つてゐるフランセ文學の範圍についてのみ語らうとしてゐるのであるが、他の國々に於ても同樣に、かうした文學革新の現象がその程度の差こそあれ同じやうに行はれてゐることを否むことは出來ない。

文學史にあらはれた如何なる時代をとつて見ても、おそらく今日に於けるほど從來の表現や、文學や、描寫や、文體に關する習慣などを未練なくかなぐり捨てて顧みなかつた時代は他にまたとあるまい。一つの時代と、それを直接に生み出した前の時代とのあひだに、今日に於けるほど截然と嚴かな溝が堀られた例は未だ嘗て見ざるところである。

クラシツクの文體、わがフランスに於ける十八世紀の文體、ヴオルテールが完成し、近くはアナトール・フランスが

完成しすぎるほどに完成したあの文體の如きにしても、最早われわれを滿足させるものではない。さうした文體はいまやすつかり人望を失つてしまつて、古臭い そして物足りないものの如くに思はれ出して來た。

人々は急に氣がつき出したのである。すなはち新らしい時代にとつては新らしい文體が必要であり、現代生活に於ける複雜、鋭敏、活潑な豐かさをあらはすためには、古き時代の文學者の表現方法などによることなく、自分獨特の言語をもつて表現しなければならないといふことに氣がついたのであつた。

文體はずつと多樣になり、ずつと荒削りになり、ずつと複雜になつた。だがその文體を形作る要素はずつと直截簡明なものとなつて、かのクラシックの時代に於けるやうな蛇足だとか妙な凝り性とかいふものに煩はされることは全く無くなつてしまつた。

一體かうした變革は何人の手によつて口火をつけられたものであらうか。かうした表現形式のうへの變革、すなはち文章にたいしては無制限な獨立をあたへ、文字にたいしてはその各々に最大限度の意味を有たせて之を自由に驅使し、要するに文字を以てする豫想に、由來よりももつと豐かな浮彫りとより多くの豐潤と確實さとを與へたところの變革の主唱者は、果して何人にあつたのだらうか。

アルテュル・ランボーの作品はたしかにこれが口火をつけたものにちがひない。彼の作品は多く短かいものであつたに拘らず、そこにあらはれた異常な直觀は、たしかに將來の新らしき路を示唆したものと云はれやう。その他皮肉な先驅者の一群があつて世間の人々を驚倒させたことがあつた。そして彼等の思想のうちには同じく變革の胚種がたしかに存して居たのだつた。その人々といふのはすなはち未來派の人々やダダイストの人々を指すものである。あらゆる進歩は必然的に變革を意味し、あらゆる變革は必然的に慣習の打破、衝突、驚愕などを齎すものである。未來派の人達やダ

タイスト達は初手からして少し遣りすぎてゐる嫌ひはあつた。然し彼等の運動たるやその畫策宜しきを得て、そのために、たとひ彼等のうちのあるものは俗な言葉で云へば要するに「世間をアッと云はせる」ことを專らとする惡戯者やお調子者であつたにも拘らず、一方古き形式にたいして十分に一矢を放つことに成功したのであつた。さて一時は互に腕でこづき合つた末に、十分腕もあり覺えもあるといふやうな連中はすべて革命的運動に參加した。獨創的な新奇な事をやつてのければどうしても眠りこんでゐる批評などといふものを騒ぎ立たさないでは濟まぬものであるが、彼等は所謂「新らしさ」といふ要素を用ゆるにあたつて實際上いくらか手心を加へながら、到頭しまひに描寫といふ方面からみて從來お馴染だつたいくらか抽象的な美しい描寫に比べて、生氣あり色彩に富んだ一進境を示すに成功したのだつた。つまりこれこそはあの藝術史の一頁に於て、印象派の畫家たちが「光り」の表現について示した一進歩とくらぶべき性質のものなのだつた。

こんな風にして形式方面に於ての藝術革命はすでに行はれたものと考へていいと思ふ。かうした實際に新らしい文體によつて書いてゐる若い作家はその數あまりに多くして、いま一々その名を擧げるの煩に堪えないほどである。すなはち彼等は斷然としてクラシック及ロマンティックの時代に於ける金科玉條たる表現形式を廢棄し、アカデミイによつて定められ、批評壇の大家連が擧つてその肩をもつてゐるあの古臭いさまざまな法則といつたやうなものと悉く絶縁し去つてゐるのである。一方世間も、昔の文章にくらべては余程不整な、そして余程綜合的になつてゐる新らしい文體を段々に受け入れはじめてゐる。そして今日二十年まへの書物を手にするものあらんか、開卷直ちに陳腐の感じを免れないほどになつてしまつてゐるのだ。思ふに今後幾年を出でずして、微々たる一小作家さへも、今日の作家が一意改革の念に燃えて獲ち得たところのものに比して、より微妙な、より強靱な筆致をもつてして表現することとなるであらう。

たとひアカデミー、フランセーズが如何に躍氣となつたところで、最早血の枯れた古い手法や、十七世紀、八世紀の金玉の文章を救ひあげることは絶對に不可能なことにちがひない。そんなことをやつてみるところに、アカデミー・フランセーズの如何にも滑稽な役割りがうかがひ知られると云はう。かうした有害無益なアカデミー如きの執念ぶかい狂人染みた保守的主張が、今日に於ても全然滑稽なものとして葬り去られてゐないのを見うけるとき、私は實に怪訝の念に堪えないのである。それはさて置き、私は過日ポール・クロオデルが公にした實に興味あり、實に會心な宣言を讀む愉快を持つたものである。彼は決然としてこれら傳統に盲ひたアカデミーの腐儒等が說くところのこちたき主張を一蹴し去つてゐる。そして須らく、これら文學上の大司祭をもつて自任してゐるアカデミーの連中が嘗て破門し去つた、ある壯麗無比な古の言語聲調を擁護しなければならない旨を呼號してゐるのである。私はこれを機として私が何を措いても力說したい點、そして目下の場合にあたつて一番重大と思はれる點について一言したいと思ふ。それは從來の文體をあれほど手荒く、あれほど革命的に掻きみだしつくした新らしい一派が、なほかつ彼等のうちの確固たる點、持續的な點、そして事實如何にも富饒な點をば、正に各人の傳統のうち及び民衆藝術のうちに之を採り來つてゐるといふ點である。

然り、吾人は今日持て囃されてゐるかうした簡素勁拔な形式、時としては粗野にすぎ、時としてはあまりに光彩鋭きにすぎ、又は人をして惑はさしめる程の簡素化が見られてゐるかうした形式の模範をば、實にあの民衆藝術のうちに見出すものである。

俗語的な表現は、あらゆる國語のなかにその數多く見出される。殊にフランスに於てそれが著しい。歐州大戰の際塹濠のなかから生れて來た俗語の數々は、その後戰爭に關する書物のなかに用ゐられて、遂にかうした種類の言葉の使用

はその全盛期に達した。すなはち今日においては、民衆は意識してか意識せずしてか再び言語の全權を握つて、あらゆる方面から表現の方法を摑み來つてゐる。この情勢はまだ一般的には明かに看取されることが出來ないかも知れないが、もう少しすれば何人もこれに氣がつくにちがひない。

このことたるや現下フランスの若き作家の大部分を熱中させてゐる全然非民衆的な精神を見たものにとつては一見奇怪なことに思はれやう。すなはち今日われらが實際見るところの作家の多くは、民衆的の名によつて喚び醒された創造者といはんよりは、寧ろ伊達をきそふお調子者やデカダンの輩であると云ふに近いものがあるのである。

然るにこれには理由がある。現代文學の特徴の一は形式と主材とのあひだの絕對的な不一致にある。すなはち形式は獨創的、突發的で、目ざましいほどな荒々しさをもつてゐるに反して、主材の方は昔ながらの、助からない、平凡きはまるものである。これら思想並びに感情の上に於ける彼等のおどろくべき貧弱さについては後に之を論じたいと思ふが、かうした革新の情勢に知らず知らず唆かされた現代作家のお先走りの連中が、なほ且彼等の思想感情を粉飾するにプロレタリア的色彩などの武器を以てするやうになつて來てゐることは一寸注目に値ひする否めない事實であらうと思ふ。

かうしたやうなわけで、目下藝術復興の道程にあたつて私が指摘したやうな第一次の進步の跡のごとき、實は不十分きはまるものであると云はなければならない。何となればそれは要するに全く外面的な問題に過ぎないもので、結局、表現形式といふもの以上に出てゐないからである。形式は要するに形式である。形式に一味の健康さと大膽さとを吹き込んだといふことのみをもつてしては、文學革新の勝利といふ意味からいつては極く微々たるものを完了し得たに過ぎないのである。

私はかうした革新の勝利が必ず文學一般に及ぶべきことを信じて疑はない。そしてそれは先づ第一に所謂文體などと

普通に云はれてゐるものよりはもつと廣い意味に考へた文學上の形式、即ち「外框(カドル)」だとか「容器(コントナン)」とか呼ぶべきもののうへに現はれて來るであらうと思はれる。

例へて云へばかの「小説」の形式である。小説なる形式はあまり手摺れてしまつたため何だか表情のないものになつてしまつて、作家が如何に工みを凝らしても結局小説家はいつも同じ題材のみを繰返してゐるといふやうな感を禁じ得ない。

そこで吾人の考へるのは、かうした使ひ古された「容器(コントナン)」の限界をずつと押しひろめ、古の大叙事詩の境までも擴大して行かうといふのである。あの富贍奔放をきはめた古の英雄詩（シャンソン・ド・ジェスト）、またはかのダンテのごとき聖詩人がそのなかに自らの全思想體系を盛らうとしたやうな叙情的、宇宙的な大作品、あるひは中世に於てミステール劇と呼ばれ、思想、葛藤、情景をあふれるばかりに盛りあげたあの宇宙的の大演劇などの境までも押しひろめて行かうと云ふのである。

これだけには止まらぬ。私の心をいつも誘つて止まぬものは藝術作品に集團的生活の意味を吹き込まうといふたまらない欲望である。これこそはたしかに今日の作家並びに明日の作家が何うしても打越えて行かなければならない大いなる難關であり、大いなる一つの障碍でもある。藝術作品はその本質からみて、またその相手方といふ方面からみて個人的なものである。かうした藝術作品を個人から全體に高めるため、そして盛るに總體的なものを以てするといふためには、人間の智慧によつて、今日に於てはまだ見當もついてゐないそれ相應なある手段を見出してやらなければならない。そしてさうした手段が見出されるまでの間に於ても、藝術家は常に自分達のまへに打ちひらいた新らしい大きな責任から目を外らすことなく、自分の持つてゐる革新された文學形式を提げて、自分の内心のインスピレーションと人類

にかかはる重大問題とのあひだを調和させるやうにしなければならない。

から考へて來るとき、吾人が生きてゐるこの現在の時代といふものを益々考へて來なければならなくなつて來る。變則であり例外であるところのもの、孤立的意義しか持たないやうなものは、全體から觀ずるとき何等の意味も何等の興味も有つてゐないものである。

この點道德に於けると藝術に於けると何等の差異がない。但し集團的生活が藝術的作品のうちに取り入れられるといつても、それは一個抽象的な觀念として取入れられるのではなくして、潑剌たる生氣あるものとして取入れられるべきものであることを忘れてはならぬ。藝術作品といふものは語意と數字とをもつて滿足する科學書などとは斷じて異つてゐるものである。

他の方面に於てはさまざまな害毒を流して來てゐる現代文明の進歩によつて齎された色々な新感覺も、文學作品の創造にあたつてはわれわれにいろいろと寄與するところが多かつた。すなはち今日にあつて旅行をする者は、昔のやうに地上低く躄つてあるいて、曲り紆つた町々やいろいろな建物の蔭に路を見失つたりするやうな、慘めな徒歩(かちだち)のものとはちがふ。吾人は世界を高みから全體として見下す方法を知つたのである。航空機によつて空を飛ぶものは、一目にして大部隊の軍隊を識別し、多くの群衆、多くの都市、茫漠たる大陸の形狀などを一望のうちに看取するとこが出來るのである。そして、かうした新らしい物の視方にたいしては、あのロシアの民衆が大きな自然を背景として實現した野外劇、それから從來閉ぢ込められてゐた大演劇の領域を無限に押しひろげてしまつた活動寫眞といふやうなものを結びつけて考へられると思ふ。

社會的方面、道德的方面に於けると同じやうに、文學藝術の方面に於ても全體といふものが吾等の前に姿をあらはし

はじめて來て、さまざまな作品や傑作が生れ出やうとしてゐる。そして何れの方面に於ても同樣であるやうに、かうした大きな場面を生かし切るべき力は下から來る。下から來る力、それこそは今日見られるやうに、詩人達や藝術家達が君主や富豪の監視の下に寄り集つてこころみてゐるやうな、いくらか巧みなところもあり、且はいくらか天才的な閃めきもあるとはいへ、要するに特殊問題を取扱つてゐるに過ぎぬ現代の藝術作品を驅逐してしまふところの力なのである。民衆こそは今後、その憧憬なり、その煩悶なり、その葛藤なり、その心理なり、またはその理想なりを以てして、華々しく表面に打つて出やうとしてゐるのである。

かう考へて來るとき、吾人はこれをもつて新らしき時代の曙光なりとして敬畏しなければならない。そして吾人のうちの心あるものは、すでにそのために働きつつあるのである。世の中には一方に實際の事物によつて律せられた實現といふものがある。他方に於てはかうした事實の外に、想像や思念によつて組立てられた一つの組織的な觀念、それが人間の頭腦のなかにばかり存してゐて客觀的に存立してゐないといふことからして觀念上の眞理、抽象のなかに浮動してゐる理論上の眞理とでもいふべきところのものがある。ところで吾人が目標として進んで行くべき美しい綜合は何處にあるのであらう。それは世界の上に浮動してゐるさうした「眞理」のなかの氣まぐれと獨斷とを排け去つて、さうした眞理と現實とを大いなる諧調をもつて結びつけやうとするところにある。從つて藝術家の使命たるや從來よりも非常に嚴格な、非常に辛酸多き、非常に考慮を要するものとなり、と同時に從來よりは非常に向上したものとなつて來るのである。藝術家は最早その空想の美しい堀出し物をたゞ氣まぐれにひけらかすといふやうなものではなくなつてくる。「うまく云ひ廻しさへすれば何んなことを云つても差支ない」といふやうなものではなくなつてくる。否、藝術家こそは世界の二つの面、「理論上の眞」と「實際上の眞」とを結び合せることを以てその任となすところのものと云はねばならない。最早、偉大なもの、美しいものの前にあつて只忙然自失するのが藝術家たるものの本領ではなくなつた。藝術家にとつて、思想なり事實なりの鑑賞にあたつて錯誤に陷るといふことは、それ自身大いなる罪惡を構成するところのものといふべきなのだ。

税制整理案批判

堀　江　歸　一

一　整理案の大綱

税制整理案は加藤内閣をして重大なる危機に遭遇するに至らしめた。政友會出身の閣僚は税制整理案の全部に反對する意を表明すると共に、自ら内閣を退かず、斯くして首相をして内閣統督不能の故を以つて、辭職の意を決せしめ、遂いて總辭職の已むを得ざることゝ爲つた。一方に政友會と政友本黨との提携は遂に成立し、其勢力或は憲政會を凌ぐ狀勢と爲つた爲めに、今後政權の所在は如何に動くか、加藤子が内閣を改造するか、其れとも他に政權を獲得する者を生ずるか、前途の形勢は混沌として、吾人をして確乎たる斷案を下すを得ざらしめる趣きなしとしないのである。

然しながら斯る政界の推移、政權の移動と云ふが如き事柄を離れて、加藤内閣の財政當局者の立案した税制整理計畫なり、之に對して異論を唱へ出した政友會側の態度なりに就て、公正なる立場に居る國民は如何なる批判を下す可きであらうか。税制整理案は暫く秘密に付せられ、外間の窺知を許さなかつたのであるが、政憲兩派の決裂を機會として、政府は其概要を公表し、七月三十一日の朝刊諸新聞紙に掲載されて居る。之に依つて當局者の方針を見ると、以前から世間に風評されて居つたものと大同小異である。即ち

一、國稅體系としては、所得稅を直接稅の中樞とし、之に配するに地租營業稅を以つてし、外に資本利子稅を補完稅とする。

二、稅目の改正としては、所得稅法に於て、法人所得に關し、超過所得金額に對する累進稅率を改正輕減して、從來の重課を緩和し、保全會社其他の方法に依る逋脫に對して、嚴重なる制裁を設け、個人所得に於ける免稅點八百圓を千二百圓に引上げ、地租に於ては、賃貸料を課稅標準とし、稅率に一分減を施し、賃貸料二百圓以下のものに對しては、課稅を免除し營業稅に於ては、課稅標準を營業者の收益に改め、稅率を百分の三とし、收益三百圓以下のものには免稅とし、相續稅に於て、第一種最高率千分の六十五を千分の百二十に引上げ、酒造稅に於て、稅額七圓を麥酒稅に於て五圓を引上げ、三、創設する稅目としては、資本利子稅に於て、各種の利子、株式配當金等に對して、百分の二の課稅を爲し、清涼飲料稅に於て、一石に付き十圓の課稅を爲し、

四、廢止する稅目として、通行稅、自家用醬油稅、醬油稅、賣藥印紙稅、織物消費稅中の綿織物消費稅が擧げられることゝ爲り、減廢に依る收入の減少九千萬圓に對し、稅率の增徵、新稅の賦課に依る增收六千萬圓であるが、外に關稅の改正に依る增收三四千萬圓が加はつて、國庫の收入に何等の異動を生ぜざるを得ると云ふことである。

二　整理案と消極政策

右の如き稅制整理計畫に對して、第一に吾人の感ずる所は其規模の餘りに小であること、一方に減稅すれば、他方に增稅し、國民に對する負擔を輕減する實質の伴はざること、增率され、又新設される稅目の內に、不可なるものゝあることの諸點であつて、斯る計畫を目して、稅制整理と稱するが如き、甚だしく當を失するの嫌なきを得ないのである。本

來我國に於て、近年税制整理の議を生じ、民間に其要求の熾烈なるを致した原因は何れに在るかと云へば、個々の税目に幾多の缺點があり、又納税者に及ぼす徴税上の關係なり、負擔者に加へられる負擔の狀態なりの酷烈であることを以つて、之に充てることが出來ると同時に、租税負擔の全體が國民に取つて、過重であり、動もすれば國民の能力を傷け、國民の生活を脅かす弊の著しきことを擧げなければならなかつた。斯る事情を念頭に置いて、税制整理を行ふとすれば、其整理たる租税の減免を主とし、國民に對する負擔を輕うすることを眼目とするものである可きは勿論であつて、此一事を閑却した整理であつたならば、其事業は羊頭を懸けて、狗肉を賣るものと擇ぶ所ないのである。

然るに政府の税制整理計畫たる、當初から其出發點を誤まつて居つた。財政當局者は何を以つて其出發點としたかと云へば、在來の租税收入に減少を來さゞる範圍に於て、租税の整理を行はうと云ふ一事が即ち其れであつて、斯くて或る方面に於て減税を行へば、他の方面に於て增税を企てなければならず、其行ふ減税の方法も、急劇に收入に減少を生ずることを恐れるの餘り、勢、小なる規模と程度とに止まることゝ爲り、税法整理の眼目たる國民負擔の輕減を果さゞるは勿論、整理の目的を達する上に於ても、大なる違算を生じ、缺陷を呈するの已むを得ざるに至つたのである。然らば税制整理の出發點に於て、斯る間違を來した根本の理由は如何なる邊に存するかと云へば、要するに加藤内閣が其標榜する消極政策を實行するに不徹底であつて、經費の緊縮に充分の效果を收める能はざるの一事に基くのである。消極政策は在野時代に於ける憲政會の熱心に標榜した所であつて、一旦政權を把持した曉には、如何に此政策を實現するに熱心である可きかと云ふことに就て、世人をして深く期待する所あらしめたのである。歐洲戰爭中から戰後に亘る内外經濟上の變動に應して、政友會内閣が放漫なる積極政策を遂行した爲めに、我國の財政を紊亂し、經濟を不健全ならしめたことは、世間公知の事實であつて、斯る時弊を矯制し、經濟社會を堅實ならしめるには、何としても消極政策を以

つてしなければならないことが識者間の定論と爲つた。原敬氏の生前、全盛を極めた政友會の勢力が氏の横死を一轉期として、衰徴を生ずるに至つたのは、必ずしも原氏の生死を以つて、其原因とす可きではない。原氏以來政友會が積極政策を濫行して、經濟社會を混亂し、疲憊せしめたことに對する國民の怨恨が凝つて政友會をして不如意の地位に陥らしめた次第であつて、假令ひ原氏が今日まで天壽を享けたとした所で、政友會の衰運は之を如何ともするを得なかつたに相違ない。斯くて國民の消極政策に對する憧憬は次第に憲政會の爲めに、有利なる境地を展開し、昨年の總選擧に臨んで、多年逆境に沈淪した同會をして衆議院に於ける第一黨とし、內閣組織の中心的勢力たらしめるを得た次第である。故に加藤內閣が如何に徹底的に消極政策を實現するかは、內閣の死活問題であり、其信用を決定する標準を以つて、目され可き所であるに拘はらず、消極政策の實現甚だ不徹底であつた。即ち財政に於ては、纔に經費の膨脹する勢を抑止し、公債の市場に於ける公募を廢止し、經濟に於ては、取引所の濫設を制限したり、銀行の配當減率を慫慂したりした位が關の山であつて、此以外に行政に一大刷新を施して、經費に目覺しき削減を加へると云ふが如きことは、遂に實現されなかつた。彼の金輸出解禁に依つて、經濟社會を正常の狀態に導くが如き、消極政策の一要目であつて、其結果として內國の物價が低落したならば、以つて財政の緊縮、經費の節約をして容易ならしめるを得るの道理である。今日の如く爲替相場の低落著しき際に、即時解禁を爲すことに就ては、考へなければならない餘地があるとしても、解禁の行はれ得る道程に就き、手段を廻らすは、憲政會內閣の當然爲す可き所であるのに、組閣後に於ては、組閣前の言論は全然裏切られて、金輸出解禁問題の如き、今日に至るまで、未解決の儘に、殘されることゝ爲つて居るのである。

三　不徹底なる消極政策

消極政策の不徹底斯の如くである以上は、財政上に於て、大に國民の負擔を輕減するだけの減税を行ふ餘裕は得られないのは、當然であつて、斯くて一方に減税を行へば、一方に増税をしなければならず、其減税の規模の極めて狭小なるものと爲るのも、已むを得ざる所であると考へられる。斯く加藤内閣が消極政策の實現に不徹底であつたのは、積極政策を唯一無二の政綱とする政友會と聯繫し、最近に至るまで其關係を持續せしめようとして、政友會に氣兼ねした事情もあらうし、又消極政策の下に、在來の不景氣に上塗りするが如き不景氣を誘導することを恐れた事實もあらうが、消極政策の不徹底と云ふことが加藤内閣の經濟的經綸をして極めて姑息のものたらしめたことは、疑を容れざる所である。此點から見れば、政友會が加藤内閣の税制整理を目して、不徹底である、何故モツト徹底した所まで、整理しないのであるか、整理の範圍國税に限られて、地方税に及ばないのは、何故であるかと云ふ非難を試みるのは、机上の議論としては、一應の道理あるやに思はれるが、税制整理の不徹底が消極政策の不徹底に胚胎するものであるとすれば、由來積極政策を抱持する政友會こそ税制の整理を不徹底ならしむる責任を頒たなければならず、否之を負はざる可からさるに至るのであつて、税制整理の不徹底を呼號して、政憲兩派の決裂を招致した政友會は天上に向つて唾するの愚を敢てしたのではあるまいか。

四　税利整理と社會政策

政友會が加藤内閣の税制整理を不徹底であると云ふのは、片腹痛き次第であるが、吾人は國民としての自由の立場に於て、此點に就て加藤内閣に非難を加へるを得るのである。始め財政當局者は税制整理の方針として、社會政策を加味することを標榜した。我國の租税制度は其何れの方面から制度の全體を見ても、個々の税目に徹しても、徹頭徹尾資本

主義的思想に支配されたものであつて、一の社會政策的思想の認められるものを見出さない。政府が税制をして時代に順應せしめる爲めに、社會政策を加味することは、私の認めて可なりとする所であるが、其目的を達するには、政府に確たる覺悟がなければならない。我國の租税制度を律するに、社會政策的思潮を以つてする以上は、

第一、租税全體の負擔を輕減し所謂減税的整理を實行すること。

第二、直接税間接税の間に於ける負擔の不權衡を矯正し、間接税殊に消費税に偏倚する、我國税法上の缺陷を除却すること。

第三、所得税、營業税等に於ける免税點を引上げるは勿論、地租にも新に免税點を設けて、中流以下の階級に對する負擔を輕減緩和し、又所得税法に於ける人的狀況に依る斟酌を大にすること、

第四、通行税、木綿織物税、賣藥税、醬油税、の如きは、其細民に對して負擔を及ぼす點に於て、徴税に値する收入を國庫に與へざる點に於て、共に廢止するを要すること、

第五、所得税中、高額の財産所得や、相續税中、高額の相續財産に對しては、增率の餘地を存するが、他の方面に對する增税は當分之を差控へ、減廢税の財源は之を經費の節約に求めること、

の諸方針を確立しなければならないのである。

五　整理案中の可なる部分

以上の諸點から加藤内閣の財政當局者に依つて立案された税制整理案を批判すれば、第一立案の可なりと認められるもの、第二立案の不充分なりと考へられるもの、第三全然不可なりとして、排斥されるもの〻三點に分れるのであつて

一面に不徹底の嫌ひは免かれないとしても、政友會出身閣僚の云つた如くに、一應の審議にすら堪へないとする程のものでもないのである。財政當局者の税制整理案中、私の認めて可なりとするは

第一、通行税、醬油税、賣藥税綿織物税等を廢止し

第二、地租に免税點を設け、所得税營業税に於ける免税點を引上げ、

第三、相續税に増率を施し

たことの諸點である。第一項に掲げる諸税の如きは、何れも其收入寡小であつて、財政上に依賴するに値せざる一方に細民に對する負擔の苛重なるものがある。政府が税制整理の第一着手として其廢止を決行するのは、當然であると云へる。地租、營業税、所得税の如きは、其直接税たる本來の性質から云へば、其負擔を中流以下の階級に及ばさゞるの道理であるに拘はらず、我國現行制度に於ける是等の租税は其特質に反し、小地主、小規模の商工業者、小額の所得享有者が其れ〲の租税の負擔に苦むこと、少なしとしない。現に大正十二年度に於ける地租納額別人員を見ると、納税人員一百八十萬三千八十七人の內、其過半は年額二圓以下の納税者である。即ち

納税額	
二圓以下—一圓以上	一、四六五、七一四人
一圓以下—五十錢以上	一、二四〇、七二一人
五十錢以下—二十錢以上	一、一三七、〇一一人
二十錢以下	二、〇七九、〇七六人

と云ふ數字に接したならば、地租が如何に全國の小地主を苦しめて居るかゞ了解されるであらう。所得税亦同様であつ

て、大正十一年度に於ける第三種所得に對する納稅人員百七十四萬九千八十四人中、所得年額二千圓以下の納稅者が其四分の三を占めて居ることは、左の一表を以つて、之を知るを得るのである。

所得	人員
八百圓以下	四四八、二九九
千圓以下	五五七、二一一
千五百圓以下	二三三、三〇三
二千圓以下	一九八、六四〇

更に營業稅法に於ける個人營業者の大正十一年度納稅額別人員を見ると、納稅人員、八十五萬九千九百四十九人中、其三分の二以上は納稅額三十圓未滿の者であることは、左の如くである。

納稅額	人員
三十圓以下―二十圓以上	一六三、二七五
二十圓以下―十五圓以上	一二五、〇〇九
十五圓以下―十圓以上	一六五、七八八
十圓以下―五圓以上	九七、九三六
五圓以下―三圓未滿	六、二〇一
三圓未滿	六

負擔の狀況、斯の如くなる直接稅の我國に存するが如き、直接稅制度の效果を沒却するの甚だしきものであつて、稅

制にして整理される以上は、先づ地租に免税點を設け、所得税並に營業税の免税點の引上げらるゝことを以つて、當然の處置とする。此事は私が税制整理を論ずる幾多の機會に於て、述べた所であつて、地租に免税點を設けることに就ては當局者内に多少の異論の行はれたやに聞いたが、税率一分減と共に、整理案の一要項と上つたのは、私の可なりとする所である。

第三に相續税に增率を加へ、相續税を通じて、多額の收入を得ることは、近年歐米諸國に於ける一般の風潮であつて、歐洲戰爭中并に戰後に於て、特に其勢の盛なるを見るに至つた。畢竟不勞利得に屬する收入を個人の手に收めしめずして、社會公共の有に移し、依つて以つて富の分配に於ける正義を確立するの意に出ずるものと考へられる。我國が從來家族制度を無下に尊崇する保守的思想や、相續税に依つて、家産の安全の脅かされると云ふ恐怖心に左右されて、相續税を增徵しないのみならず、或る機會に於て、之に減率を加へて、以つて一部少數者の歡心を繫がうとしたことの如き、愚の甚だしきものであつて、財政當局者の整理案に於て、相續税增徵の一項の掲げられた如き時勢の然らしめる所とは云へ、私の贊成する所である。

六　整理案中の不滿足なる部分

斯の如く當局者の整理案中には、贊成す可き幾多の條項があるに相違ないが、更に一歩を進めて上記の諸改正が如何なる程度まで行はれるかと云ふ問題に爲ると、私は其程度の餘りに寡小であることを歎ぜざるを得ない。以下私が税制整理案に對して、不滿足とする點を擧げる。

第一綿織物税を始め三四の租税を廢止したことは、曩に述べた如く、私の贊成する所であるが、是等の租税と共に、

細民に苛酷の負擔を及ぼし、又或點に於て、産業に不利の影響を加へる鹽專賣法の全然不問に付せられたのは、何故であらうか。鹽專賣の收入の相當の金額に上ることは、當局者をして其廢止を思ひ止まらしめた有力なる理由であると考へられるが、收入の大小と云ふことを以つて、租税存廢の標準とするが如きは、財政家として、餘りに無經綸であり、無抱負であることを表白したものであつて、斯くては如何なる惡税であつても、收入の大なるものは何時までも存續して、國民を苦しめ、産業を傷けるの結果を生ずる。惡税である以上は、如何に收入の大なるものであつても、之に代る可き財源を工風して、廢止の擧に出づるのが財政家の知能力量の然らしめる所である。收入の大小に依つて、或る税目は廢止され、他の或る税目が存續すると云ふが如き奇怪なる事實に接するのは、私の不滿を感ずる所である。

第二、所得税法に於て、免税點の引上が僅に千二百圓に止まる一方に、少額所得殊に勤勞所得の享有者に對する税法上の斟酌に何等の加へらるゝものなきは、缺點の最も大なるものであつて、斯くは中流以下の階級に對する負擔の緩和は遂に之を望むを得ない。物價の騰貴の著しきこと、國民生活の程度の向上しつゝあることを考へ、又他の一方に於て税法上の規定に依つて、國民生活程度を上進せしめるの必要を念頭に置いたならば、所得税の免税點の如きは、之を二千圓に置くも或は足れりとするを得ないかも知れない次第であるのに、僅々千二百圓を免税點とするに於ては、企てゝ及ばざるものゝ遠きことを認めざるを得ない。

第三、地租の免税點が田畑の地價二百圓を以つて、限度としたのは從來の税率を以つてすれば一年納税額九圓以下の納税者に對して、課税を免除することゝ爲る。故に此點に就ては、私は必ずしも不足を唱へないが、營業税法に於て、課税標準を營業收益に收め、收益四百圓を以つて、課税の最低限としたのは、所得税の免税點に於ける引上と共に、私の頗る物足らず感ずる所であつて、斯くては小規模の商工業者に苦痛を及ぼすこと、從來に比較して、異なるものあり

とするを得ない。

或は從來の如き制限選擧の下に、直接國稅の納額を以つて、選擧權の分賦を決定した場合には、直接國稅の免稅點を引上げて、選擧法に於ける失權者を多數に作り出すことも、考へ可き所であつたかも知れないが、普通選擧の行はれるに至つた今日に於ては、斯の如きは何等考量す可き問題とは爲らない。當局者が收入を減ぜざる範圍內に於て、稅制を整理することに束縛されて、主義原則の上から見て、可なる施設を行ひながら、之を十分の程度に推擴げるを得ないのは、吾人の遺憾とする所である。

第四、相續稅法に於て、現在の課稅最低限が家督相續、遺產相續の双方に關して、共に引上げられた一方に、稅率共もの、引上げられたことは、私の贊成する所であるが、私は何故に當局者が相續稅に就て、斯る平凡の改正を行うに止まらず、更に一步を進めて民法相續編又は親族編に關する規定に改正を企て、養子女の制度を禁止して、財產相續の行はれる範圍を制限すると共に、相續者の存せざる財產は總て國家に於て襲用し、女子の財產相續に於ても、尙ほ金額の大なるものに對しては、累進稅率を五割六割の高きに上らしめるの擧に出でなかつたかを怪むのものであつて、斯の如くしてこそ、租稅をして社會政策上の要求に一致せしめるを得たりと稱するに憚らないのである。

七　整理案中不良なる部分

稅制整理案に對して、不滿足とする點の存すること、上記の如くであるが、一方に此案には稅法の現狀に比較して、之を惡化せしめる恐れある幾多の缺陷を藏されて居ることを知らなければならない。以下順次之を述べる。

第一、現行稅法には幾多の缺點の指摘す可きものがあるが、其一として特に著しきものは直接稅と間接稅（專賣益金

をも含む）との間に於ける均衡の失して居る一事である。往年の所得稅法改正以來所得稅の收入の激增した結果、右の弊は或る程度まで抑制されたやうなものゝ、弊害の存することは依然として異ならない。此事たる、畢竟直接稅の賦課增徵には、納稅者が團體的運動を試みて、反對を企て、貴衆兩院の政黨政派の多くは此種團體的運動に左右される爲め政府をして自然之に對抗して、直接稅に手を觸れることを回避せしめる一方に、間接稅の方に於ては、其負擔に當る消費者は社會の諸階級に散在し、特に團體として反對運動に從ふことを許されない。斯くて政府は徵收に難き所を避けて、其易き所に之を求める、而して廢減稅の行はれる際には、相續稅、營業稅、地租の如きに之を試みて、間接稅に行つたことの極めて稀れであつた結果、不知不識の間に、我國の稅制をして間接稅に偏倚せしめるに至つたのである。然らば租稅制度の全體から見ての利害は如何であるかと云へば、消費稅に偏倚する租稅制度に於ては收入の基礎確實ならず、景氣不景氣其他の變動に依つて、收入に動搖を來すの弊を免かれざる一方に、其負擔は中流以下の階級に對して、苛重であつて、何としても事の公正を期するを得ない。故に今日我國に於て、稅制を整理する以上は間接稅を加重することは、勉めて之を避けざる可からざる道理であるのに、今回の整理案が此要件を閑却し、酒造稅、麥酒稅の增率を企てたのは、徵收し易き所に於て徵稅すると云ふ從來の轍を踏んだものであつて、斯くては稅法整理の効果を抹消するものと考へられる。殊に酒造稅に於ける造石稅七圓の引上は必ず酒の品質を粗惡ならしめて、國民衞生上に不良の結果を齎すが如きは、吾人の一考す可き所である。

第二、資本利子稅の創設は右に述べた所と趣きを異にするものであつて、立案者の意は之に依つて、財產所得に對する負擔を重くし、前項に述べた間接稅偏重の弊を抑制するものと認められる。然しながら財產所得に對して、特に負擔を加重しようとするならば、所得稅法に於て、最も簡單に、又最も確實に之を爲すを得るの道がある。特に資本利子稅

の如きものを新設することを必要としないのみならず、現行所得税法に於ける第二種所得に對する課税を今日の儘にして、一方に資本利子税を起すが如きは、同一目的物に對して、二重の負擔を加へるの嫌なきを得ない。財産所得に對して負擔を加重することが如何に必要であるとしても、斯の如きは税法上に於て、可なりとするを得ない。

第三、清涼飲料水に課税するの議は先年來屢々世間に行はれた所であつて、其理由は麥酒に對して相當の課税の行はれつゝある今日、清涼飲料水を無税の儘に置いたならば、結局無税の物品を侵さしめ、後者の事業に衰微を招いて、租税の依つて支拂はれる源泉を亡ぼすに至るから、斯る代用的競爭品には互に均衡の保たれる標準の下に課税しなければならないと云ふことに存する。財政當局者の細心感嘆に値すとす可きか、抑も亦彼等に斯る用意の綿密なるものがなかつたならば、徴税上の技術を完備せしめるを得ざることとも、私の窃に信ずる所であるが凡そ社會上の事物には大小輕重の別がある。其大とし、重しとするものを取つて、其輕小なるものを棄るのが社會全般の利害に徴して、有利なる結果を生ずる場合の多にあることは、吾人の知らなければならない所である。麥酒と清涼飲料水とは決して對等の競爭品でもなければ、代用品でもない。前者はアルコールを含有するが、後者は之を含有せず、其需要される區域は上戸と下戸との間に截然たる別を存し、清酒と麥酒との間に於ける關係とは、全然趣きを異にする。一方を無税にした所で他方の有税品を侵すことの幾何であるか、殆ど數ふに足る可べきものであつて、若しも斯る關係に對して、何事かの工風を講じなければならないとしたならば、砂糖税に對する均衡上、飴に課税することを必要とする道理である。斯の如くして一國の税法を煩瑣にし、冗漫にして、何の益する所を得るであらうか。清涼飲料水税の新設は通行税其他の租税を廢止する整理案の効果を無意義に近からしめたものと云へるのである。

八　政友會の態度

故に財政當局者が立案し、憲政系閣僚の支持する税制整理案にも幾多議す可きものがある。即ち財政上に消極政策の徹底的に行はれなかつた爲めに、税制上に減税的整理の行はれないことの如き、或る税を增徵し、新設し、減廢するに就て、幾多の缺陷を示したことの如き、共に非難す可き所であるが、左ればと云つて、政友會系の閣僚が殊更に異を立てゝ、税制整理案の全部を否定し去つた行動は果して如何に見る可きであらうか。税制整理案にして、徹頭徹尾無價値のものであれば、斯る取扱を受けるのも、亦已むを得ないが、缺陷はあつても、補正し得るものであり、其徹底的であるを得ないと云ふのも、聯立內閣の病弊の然らしめるものであるとすれば、政友會系の閣僚が暗から暗に葬る態度に出でたのは、何としても故意に國務に澁滯を招いて、內閣の基礎を脅かす政治的野心の然らしめたものと云はざるを得ない。政治家なるものが政權の爲めには豺狼の慾を逞しうするのは、今に始めぬ所業であつて、私の平生快しとせざる所であるが、抑も政友會の側には、税制整理に就て、如何なる對策があるのであつて、其對策は如何なる點に於て、今吾人の眼前に在る整理案に勝れりとするを得るのであるか。政友會系閣僚の一人が閣議に於て、地方税整理や、地租委讓を云々し、又他の一人が財政當局の整理案編成に際して、政友會に於ける從來の議論を顧念しなかつたことを難じたと云ひ、又税制整理と次年度の豫算編成と不可分の關係を持つことを力說したと云ふ諸點から推せば、政友會の税制論は即ち地租の地方委讓を中心とするものであり、其財政論は積極政策に重きを置くものであると斷定されるが、斯の如きは公平なる見地から判斷して、果して正しきを得たと云へるであらうか。

九　政友會案の價値如何

元來地租にして地方に委讓される以上は、税種の關係上、營業税も亦地方に委讓されることを以つて、當然の道理とする。是等兩税は直接税として、或る意味に於て、所得税の兩翼と爲り、我國租税制度の根柢とも見られるものである今是等兩税を惜氣なく地方に委讓して、之に代る可き新財源が容易に求められるであらうか。財源の一部分は從來中央から地方に交付した補助金の類を削減することに求めるとした所で、結局兩税の地方委讓から、中央財政に生ずる缺陷を充すに、或る新税の賦課を以つてしなければならない、其新税が果して地租營業税に比較して、勝るものゝあることを何人か能く斷言するを得るであらうか。地租の如き數十年、營業税の如き三十年の久しきに亙る歴史を有し、國民の慣熟した税目に代つて、新なる税目を設けて、其施行に些の支障なきを得るかどうか、將た又地租營業税の運用を地方團體に託して、納税者に對する公正を保ち得るかどうか、何れも考慮す可き問題であつて、地租營業税の地方委讓を以つて、税制整理の萬能膏と見るが如き、大なる誤解としなければならない。政友會は此問題さへ擔ぎ出せば、以つて地方民心を繋ぎ得るやに考うるが如くであるが、其地方民心なるものは果して能く政友會の認める如きものであるか、私の信ずる能はざる所である。

一〇　積極政策の復活を排す

若し其れ政友會が積極政策の實行を仄かし、積極政策さへ實行したならば、以つて今日の不景氣を挽回し、經濟社會を有利なる狀勢に誘導し得るが如くに說くに至つては、國民を愚にするの甚だしきものである。抑も今日我國を襲ひつ

ゝある經濟社會の不景氣、商工業の沈衰は歐洲戰後に於ける歐米諸國の經濟的反動を以つて、一の原因となす可きであるが、更に他の有力なる原因としては原内閣時代に於ける經濟財政策の放漫に失したことが擧げられなければならない。歐米諸國に於ては、數年に亙る戰時經濟の後を承けて、其後の不景氣時代の誘致された如く、我國に於ては、數年間の積極政策に累されて、以つて今日の不景氣に陷つたとすれば、其餘殃の消滅せざる幾年の間、經濟上に、財政上に消極政策の行はれるのは、當然であつて、斯くありてこそ始めて經濟社會の整理恢復を期待し得るのである。現に原、高橋兩内閣の時代を通じて、日本銀行總裁の職を奉じた井上準之助氏の近業我國の經濟及金融を繙くと、其一節に

大正八年の如き不當なる程度まで、之を（經濟社會の景氣）持つて行きませずに、或る程度までゝ、之を止めて置いて、從て此經濟界を破壞するやうな反動を見るに至らしめずに濟むことが出來さうなものではなかつたか、即ち過去の事を顧みますれば、何かやる可き事で、やらない事があつたか、やつた事でやり損なつた事があつたか、斯う云ふ議論になります。私は其時斯う云ふ考を持つて居つたのであります。其時に絕對的に此景氣の上るのを止めることは出來ぬが、成る可く其程度を低くして、適當の程度で止めやうとするならば、總て緊縮方策を取らなくちやいかぬと、斯う云ふ議論であります。即ち私は其時に意見書を書いて、其節に出したことがありますが、（中略）何でも總て緊縮方針を取る、政府は財政の緊縮方針を取り、日本銀行は金利を引上げる。輸出も或る品目のものは停止し、又は制限す可し、總て手の屆く限り、引締る方針を採ることにして、總て此空景氣の非常に上りつゝある所を上らせぬやうにすると云ふ方針を施すより外ない。斯う云ふ考でありました。

とある。即ち當時の内閣が斯る日銀總裁の正當なる意見を排斥して、一意積極政策を濫行したことが大正九年の恐慌と爲り、其後不景氣と爲つた次第であつて、今日消極政策の行はれることは、事情の已むを得ざる所に屬する。今政友

會の主張する如く、我國の經濟財政策を一變して、積極政策に據らしめたとして、如何なる結果を來すかと云へば、左の如き三種の事相の生ずることを免かれない。

第一、積極政策の下に膨張する經費の財源としては、先づ公債が充てられるのであつて、積極政策と公債政策とは離る可からざる關係を待つ。公債が一般市場に公募され、預金部なり、日本銀行なりに依つて引受けられたならば 其發行高の多きに隨つて、價格の低落と市場に於ける遊資の回收とに依つて、金融を壓迫する。

第二、斯く金融市場に對する壓迫を除くには 公債政策に代つて、租税の收入に依頼することを必要とする結果、税制整理、國民負擔の輕減の如きは、全然閑却され、却つて增税の必要を生ずる

第三、積極政策の聲明なり 其實行なりは、一時經濟社會を賑はすかも知れない、然も之に依つて利益を受ける者は多く投機的事業に從事する輩に止まる。積極政策の影響する所次第に深きに至つて、經濟社會を混亂せしめたならば、何人も遂に之に依つて利益する能はざるに至る、

私は以上の如き信念から、大正七八年の當時積極政策の行はれたことに反對した如くに今日其行はれんとすることにも反對する。加藤内閣の財政當局者に依つて、立案された税制整理計畫は決して萬全のものではないが、他に之に勝る實行案の示されざる限り、姑く右の計畫を基礎とし、之に適當の修正を加へ、殊に其增税に係る部分は之を削除し、消極政策の勵行に依つて、減廢税に要する財源を求めて行きたいと思ふのである。(八月一日脫稿)

政局の推移と無産政黨運動

青野季吉

一

憲政會と政友會の提携が破れて、憲政會が單獨に內閣を組織し、それが機緣となつて、予期通りに政友會と政友本黨との合同の氣運が促進された――この最近の政爭は、要するにそれもまたブルジョアジーの陣營內の、權力鬪爭であつて、その內容に何等特殊なものを持つてゐない。よしその結果が、憲政會の手に政權が殘らなくて、政友會に、又は、政友會プラス政友本黨に政權が摑みとられたとしたところで、そのことは直接には無産階級にとつて問題ではない。

然しながら今日の狀態において、ブルジョアジーの陣營の內部にあつて、政爭がしげくあること、「政局の安定」のないことは、たしかに無産階級にとつて、利益である。政爭のなかから、政權を摑つて浮び上らうとする政黨、一度び摑み取つた政權を飽まで維持して行かうとする政黨が、單にそのためにのみ、民衆別けても無産階級の支持を當て込んだ、口實なり、政策なりを揭げることは、彼等の欲すると欲せざるとに關らず、爲さざるを得ないところである。たとへば今次の政策で政權を摑んで居据つた憲政會が、そのために、勞働立法を急いでゐるが、それが憲政會でなく、政友會乃至は政友會プラス政友本黨、謂はゆる官僚內閣でさへあつたとしても、やはりそのために同じことをやるに相違ない。さう云ふ意味からすれば「政局の安定」は、階級としてのブルジョアジーにとつて望ましいことであり、政爭の起るたびに常にそれが第三の立場にある支配階段から叫ばれるのであるが無産階級にとつては、政局が安定しない方が利益である。政局が安定しなくて、政爭がしげくなり、ブルジョアジーの陣營內にそれだけの混亂の來ることが、利益である。その政爭の結果として、常に予期されるものに、多かれ尠かれ、自由主義的の政策が實現せられると云ふことである。だから政爭によつて、政權が、何れの政黨に移つたとし

たところで、ブルジョアジーの諸政黨の本質が、今日の如く交錯的なものである以上、無產階級にとつてはそれは大した問題ではない。それよりも政爭をしげくする乃至は政爭がしげくなると云ふことが、無產階級にとつて重大な關係を持つてゐる。

特にこの度びの政爭の結果、政權を掴つて浮び上つた憲政會が、來る可き五十一議會において、解散をするやうなことがあれば――研究會との或る意味の妥協が最近成つて、そのことも幾分危しくなつて來たが――無產階級にとつては、有利な局面が展開されることになる。それは云ふまでもなく、普通選擧制による總選擧が、それだけ早く來ると云ふことである。

無產階級の政黨組織の運動の發展如何に關らず、普通選擧制による總選擧が早く來ると云ふことは、無產階級の政治勢力の伸長にとつて喜ばしいことに相違ない。それが最初の總選擧であつて、無產階級の大部分が、ブルジョアジーの政黨のために、切取られる惧が多分にあるとしても、ブルジョアジーの諸政黨が、相當なる時日を設けて無產階級を引つけ得る準備の成つた曉において、總選擧の行はれる場合を豫想して見れば、その準備のならない前において、政爭の止むなき結果として、總選擧が來ると云ふことは、無產階級にとつて有利なことでなければならない。

さればこそ、普通の解散を嫌忌する心理とはまた別個の心理で、來るべき五十一議會の解散が嫌忌されてゐるのである。要にも一寸觸れた如く、憲政會と研究會との一種の妥協の成立は、解散の可能を稀薄にする現象であるが、その成立の底には、普通選擧制による總選擧を嫌忌する心理、無產階級の政治勢力の伸長にたいする疑怖の心理が働いてゐると見なければならない。

また例へば、政友會と政友本黨の合同問題においてもさうである。單に從來の、政黨離合の傳統から見れば、且つその上、政友會と政友本黨の質實的關係から見れば、憲政會の單獨內閣といふ事實に對する、物理學的な勢力の均衡上から、兩黨の合同が何等の躊躇もなく行はれ得可き筈である。しかし憲政會內閣成立直後におけるが如く、兩黨の合同がヒステルカルに進行しないで、主として政友本黨側に、憲政會とも幾分の接觸を保たうとする傾向、ある場合には、提携しやうとさへする傾向が現はれ、そのために合同の進行が遲滯してゐるといふ事實の底には、やはり憲政會と研究會とを妥協させたところの、總選擧を嫌忌する心理、無產階級の政治勢力の伸長を疑怖する心理が、その當事者の意識するとしないとに關らす、力強く作用してゐると見なければならない。

その見地からすると、第五十一議會の解散はよほどその可能が薄らいで來ることになり、總選擧の關する限りにおいて、無産階級はこの度びの政爭によつて、何等得るところがないことになる。しかしいかにそれを嫌忌し、避けて通らうとしても、ブルジョアジーの諸政黨が、その特殊利益の衝突から、政爭を醸出することは、必然の事柄であつて、それが一方に憲政會を他方に政友會プラス政友本黨の二大勢力に分割されるまでに高潮した場合、解散にまで赴くことのある可きは、また必らず豫想されぬことではない。

たゞこの場合、無産階級の政黨運動にとつて重大な點は、第五十一議會が實際において解散となるか否ではなく、解散の可能をもつてゐるといふこと、したがつて普通選擧制による總選擧の期が非常に早められる可能があるといふこと、是である。この豫測とそれに伴ふ心理的急迫とは、無産階級の政黨運動にとつて、重大な關係を及ぼさずにはおかない。

二

無産階級の政黨運動は、最近、一つの重大なモーメントに立つてゐる。それの通過し方の如何は、尠くとも將來ある相當な期間、日本の無産階級の政治運動の性質を決定するものである。

無産階級の政治運動、無産政黨の組織が、日本の無産階級運動において、肯定的な態度をもつて迎へられたことは、この二三年來のことである。この二三年來のそれの推移發展を、區劃立てゝ見ると、大體において三つの期間に分けることが出る。第一は、政治運動の肯定、否定の論議のやかましかつた期間であつて、この期間に成された仕事は、主として理論的な闘爭、それもサンヂカリズム、トレードユニオニズムにたいするコンミユニズムの原則上の爭ひと云ふ現はれをとつてされたものであつた。それはたゞ原則上の爭ひであつたが故に、實際日本における無産階級の政治運動が、いかなる具體的方法によつて進む可きか、新らたに樹立さる可き無産政黨が、いかなる形態と内容を具へたものである可かといふ如き重要な點は、その期間には殆んど顧られなかつた乃至は論議されなかつたと云つてよい。さればその期間につゞいた第二期は自然、それらの實際問題にたいする「研究」と「準備」の期間であつた。この期間では最早、政治運動の肯定否定の論議は抛棄せられてしまつて、實際にそれを擔當する機關、例へば「政治研究會」の如きを設け、或は各有力な勞働組合の内部、政治委員會を設ける等の手段によつて、無産政黨の組織に關聯する一切の具體問題が考究

された。それと同時に、この期間に高調せられ、今日なほその増加的必要を高調されてゐるものは、無產階級の政治教育であつた。即ち無產階級の政治的關心を起させると共に、無產階級の政治的團結の必要を自覺させる運動であつた。

　その時期は飽までも「研究」と「準備」の時期であつて、まだ無產政黨樹立のため、積極的手段に出づる時期ではなかつたが故に、そのための何等の中心も、中心たる可き使命を帶ぶるものも、積極的に施設されることはなかつた。そこへ現在その初頭にあるところの、第三期が來たのである。これは第二期における「研究」や「準備」の結果、大體において輿論的に決定せられたところに從つて、實際に無產政黨の樹立の具體的階段に踏み込むことである。その中心たる可き機關を施設して、組織の大綱を定め、それによつて無產政黨の樹立を全ふすることである。日本農民組合の全國の組合を招致しての大阪會議は、正にそれに該當するものであつて、現在は實にその經過のうちにあるのである。それと同時に、この期間の到來すると共に、若干の地方的政黨が樹立されたことは、これを忘れてはならない。その事實は、やはりこの期間の特長的の事實であつて、日本の無產政黨運動が、いかなる階段をとる可く餘儀なくされてゐるかを、同様に語るものである。

無產政黨の運動の踏んで來た過程は、それを極めて輪廓的に見ると、右の通りである。そこでその過程のうちに、いかなる具體的な方向が示されて來たかを見る必要がある。無產政黨の運動において、具體的に重大な問題は、一、綱領の內容の問題。二、組織の問題、三、樹立過程の問題である。この三つの重大な具體問題において、極く大まかな一致にせよ、無產階級の內部に求められないならば、とうてい無產政黨は樹立されないのは明らかである。

　そこで今日までの過程を見ると、第一の綱領の內容問題に關しては、まだ一致した意見と目す可きものが醸し出されてゐない、と見るのが妥當である。綱領の內容問題に關する研究や討議は、正にその第一階段に入らうとしてゐると見て差支へない程度である。第二の組織の問題、第三の樹立過程の問題については、今日までの過程に、ほとんど一致したと言つてよい方向が現はれて來た。それは如何なる方向であるか？

　先づ第二の組織の問題で云へば、新らたに樹立さる可き無產政黨は、全國的な包括的な政黨でなければならぬ。即ち、勞働黨、小作人黨、水平社黨と云ふが如き、小黨分立乃至は小黨聯合的の政黨であつてはならぬ。又、地方の選擧地域乃至は組合範圍を基礎としての地方政黨とその聯合體であつてはならぬ。

といふのがそれに關する「一致した意見」「壓倒的な輿論」であつた。即ち勞働者と農民と無産階級の立場に立つた知識階級との、大衆的な、全國的な、政黨組織でなければならぬとの主張である。したがつて黨と黨員との關係について、一個人單位的な構成が、より多くの贊同を見出してゐた。

この主張が壓倒的な輿論であつたといふこの實證としては、たとへば「政治研究會」の歩んで來た道を擧示することが出來る。「政治研究會」は無産政黨運動の一つの促進團體たる使命を帶びて生れて來たものであるが、それに結付いた要素のうちには、「政治研究會」を一個の政黨たらしめ——當然一つの地方的小黨——やうと意志する者があつたことは爭へない。しかしながらその要素の意志は、遂に「政治研究會」の活動に反映することなくして、今日に到つてゐる。それには右の「一致した意見」が有力に働いてゐたからである。そしてまた「政治研究會」の大多數の意志が、その壓倒的な意志と一致してゐたからである。

第三の樹立過程の問題も、當然に第二の傾向から引出された。無産政黨の樹立には、先づ既成の無産階級團體のうちから、組織委員會乃至は組織會議を起し、その公の協議による決定的な方策を定め、それによつて政黨の樹立に着手する。と云ふのである。すなはち飽までも、包括的な政黨、全階級大衆的な政黨を目指して、それに到る最善の手續によつて進まふといふのである。而してこの壓倒的傾向を代表して現はれたものが、最に觸れておいたところの、而して現在それが經過中にあるところの、日本農民組合の主唱した大阪會議である。

三

日本の無産政黨運動は、第一、第二のうちに、だいたいに於て、右の如き傾向と輿論とをもつて進んで來た。そして現在それに入つたばかりの第三期においても、その傾向を追つた太い一線上の發展が見られてゐる。

然るにこの期間に入ると間も無く、右に述べた傾向と準備とに、一見相反するごとき現象が、無産政黨の運動のなかに現はれて來た。それは云ふまでもなく、地方政黨の運動である。一度び「九州民憲黨」が組織されると、矢繼早に「足尾公民黨」、「千葉民政黨」、「關西民政黨」といつた具合に組織された地方政黨の運動である。

この運動が、これまで述べた無産政黨の運動と、その方向——勘なくとも方策——を異にするものであることは、言ふを俟たない。たとへば、それは「政治研究會」が東京地方を中心とし

た一政黨と化した場合の如きものである、「政治研究會」内のその傾向が徹底的に排された事を思ふと、その行き方が、従來の無產政黨運動において、いかに邪道であるとせられたかゞ分るであらう。しかもそのことが、當然として起つて來たのである。地方政黨は續々として組織され、そしてまた組織せられつゝある。

その上最も注目す可きことは、日本勞働總同盟が、その地方政黨主義をオーソライズしたことである。總同盟は、日本における最大の闘爭的組合であると自稱してゐるに拘らず、これまで積極的に、無產政黨に關する意見を公にしたことはなかつた。しかしながら總同盟の中央部が、曾て「政治研究會」にたいして執つた態度によつて見ると、同じく全國的政黨主義であつたことは、事實を明白にするまでもなく明かなことである。その總同盟が、いま卒爾として、地方政黨主義をオーソライズしたのである。これは日本の無產政黨運動にとつて、重大なことでなければならぬ。

そこでいま地方政黨主義のよつて立つところの、理論的根據を調べて見なければならぬ段取となつた。その主張するところに依ると、一、地方的に小政黨を作つて行つた方が全國的政黨を組織するに便利である。二、既に地方によつては政治運動の必要に迫られてゐる。されば其の當面の必要に應ずるために、全國的政黨の組織の前に、先に地方的政黨を樹立せねばならぬ。三、日本においては組合の發達が、地方によつて極めてまちまちであつて、或る地方では組合が十分に發達してゐて、不景氣時代の資本家の攻擊に堪える力を持つてゐるが、他の地方ではその發達がなく、したがつて資本家の攻擊に堪え不十分な力を缺いでゐる。かゝる地方では、瞬時も早く、政治運動によつてその對抗力を作らねばならぬ。即ち地方政黨の必要な所以である。四、先づ全國的政黨の樹立に努力し、ついで地方的組織をつくることは、尠くとも、金力と人力との經濟ではない。常に金力と人力との不足してゐる無產階級運動は、その節約を目指して、先づ地方に無產政黨を建設し、次いで全國的組織に着手するのが便利である。

地方政黨主義の理論的根據とするところは、だいたいにおいて右の諸點である。いまその諸點を檢討して見て、全國的無產政黨の主張が、果してその理論によつて代らる可きものであるか否かを、考究しやう。

先づ第一の理由を見ると、地方政黨を組織をした方が全國的政黨の組織に便であると云ふのであるが、それは非常に疑問である。普選の實施と共に、自然發生的な地方政黨の續々出現す可きことは予測するに難くない。全國的政黨主義はその中にあ

つて、計畫的に全階級抱擁的な政黨を作らうとする。その際全國的政黨の成立を最も理想的とするならば、容易なる地方政黨の組織よりは、困難なる全國的政黨の組織に努力を傾く可きである。第二の應急手段說も確固たる根據がない。地方によつて例へば町村縣會議員の選擧の如きに面して、政治運動の必要に迫られてゐることは事實である。しかし當面にそれに應ずるものとしては、組合がある。日本の組合が、純粹の經濟活動のみでなく、必要に應じて政治活動を執つて來たことはこれまでの事實の示す通りである。第三の地方の組合發達不平均說も、全國的政黨主義に對抗す可き、何等の理論的基礎を持つてをらぬ。全國の組合が平均的に發達しては、反つて、地方主義の手段で行つても、全國的組織に便であるが、その發達が不平均であればこそ、先づ全國的の組織と體制を作つて、發達の遲れた地方へ、その進んだ地方の動力を傾ける必要がある。第四の理論は、主として技術上の問題であつて、理論的根據にも何もなるものでない。地方的小政黨を作つて、同じやうな機關を地方地方に先づ設け、全國的政黨の組織と共に、それを廢するが如きは、逆に、最も浪費的でなければならぬ。

總同盟によつてオーソライズされた地方政黨主義は、いづれの點から見ても、全國的政黨主義に取つて代る可き、理論的根據を持つてゐるものではない。しかしながら、一方に全國的政黨主義の主張に基いて、その行動を開始したところの、日本農民組合とそれの積極的支持組合があり、他方に地方政黨主義によつて成つた地方諸政黨とその支持組合があると云ふ事實は、その地方政黨が解黨を宣明してゐる事實あるに拘らず、無產政黨の運動にとつて、重大な事實である。曩にも述べた如く、普選の實施とともに、自然發生的に地方的の無產黨乃至はそれを標榜した地方政黨の出現す可きは、自然なことである。日本農民組合とその支持團體の計畫的努力が、何等かの障碍に逢着して、成果を見なかつたとすれば、地方政黨の樹立は、眞に櫛の齒をひくが如くなり、その小政黨の大部分は、既成政治家及びデマゴーグに率ひられゐることは明らかである。

日本の無產政黨の運動は、今や一つの重大なモーメントに立つてゐる。それは計畫的な道によつて進むか、自然放任的な道によつて進むかを決定するモーメントである。

四

日本に新らたに樹立さるゝ無產政黨は、全國的な組織でなければならず、階級大衆を抱擁する組織でなければならぬとの主張が、從來の日本の無產階級運動の如く、分裂を極めたものゝ

なかから生れたと云ふことは、注目に價する事實である。この主張を誘致した原因はどこにあるか？　それは日本の無産階級の置かれた客觀的地位の然らしめたところである、支配階級はその陣營內にあつて、抗爭をつゞけてゐるとは言へ、一度び階級的存立の脅かさるゝ場合には、一致した階級陣列を張ることは、最近の政治上の事實によつても明かであるしかも普選による總選擧と、その結果たる無産階級の政治的擡頭とは、支配階級の、いかなる部門においても、一種の豫感とそれに基く恐怖とを以つて、迎へられてゐるところである。その豫感とそれに基く恐怖とは、時々刻々に支配階級をして、階級陣列を敷く方に導いてゐる。それは政治的方面であるが、更に經濟的方面で見ると、半永久的不景氣は、一方に金融資本の支配を確立する。その結果、無産階級の被壓迫は益々その度を加へ、資本の決死的政勢が加はつて來る。

更にこの階段における支配階級は、外國の例において餘りに多く見るが如く、都市無産階級と農村無産階級との隔離政策、無産階級における上層—勞働貴族——と下層との分離政策を講じ、無産大衆のなかに、その支持軍を持つことに腐心する。しかもこの方法は、日本の支配階級が、漸く積極的に執らうとしてゐる道である。

日本の無産階級の置かれた客觀的地位は正にその如きものである。その客觀的地位の反映して代つたものが、今正に出發しやうとする無産政黨運動における全國主義に外ならぬ。その間の消息を、大山郁夫氏は他の言葉をもつて、最もよく傳へてゐる。「無産政黨が全國的に統一された無産政黨として組織されなければならないといふことも、そのこと自身、……無産階級の意識から來たものである。第五十議會に於ける治安維持法の制定にまつはる經緯を通じて最も明瞭に見られた通りに、ブルジョアジー側の諸集團が、無産階級を向ふに廻して、その全勢力を糾合して共同戰線を張つて來た今日に於て、無産階級側の政治的勢力が、勞働黨とか、小作人黨とか、幾多の地方政黨とかに分散されるやうなことは、絕對に禁物である。それ故に、無産政黨が斯樣に全國の無産大衆の政治的大同團結の表現であらねばならないといふことは、我國の無産階級の現實の必要から出たものであつて、そしてそのことの必然性を極度に强調するものは、究極において、無産階級的立場の意識に——もしくは無産階級意識そのものに—外ならないのである。」(「新人」一八月號)

日本の無産階級の置かれた客觀的位置を凝視すれば、無産政黨運動における全國的政黨の主張の妥當性は、一見して明瞭である。然らば、その全國的政黨主義を向ふに廻して、地方政黨

主義が出現したについては、何等かその爲に客觀的要素の變化があつたであらうか？　吾々はその間に、同じ客觀的要素が、刻々に重加されて行く事實こそ、これを見るが、無產政黨組織における全國主義を地方主義に代ふ可き、要素の發生さへこれを見ないのである。

それならば何故に、無產階級運動の一部に、全國的政黨主義の傾向を外れて、地方政黨主義を支持する者が生じ、その爲めに無產政黨の運動が一つの重大なモーメントに面接するに到つたか？　それを客觀的要素に求めることが出來ないとすれば、無產階級運動內部の主觀的要素に求めなければならぬ。そこに吾々がその原因を求める時、前述の第二期から第三期への途上に現はれたところの、日本勞働總同盟內部の分裂を想起しないわけにはゆかぬ。

分裂しない以前の總同盟は、旣に述べた如く、全國的政黨主義であつた。その舊總同盟が二つに割れて、新總同盟と勞働組合評議會となつた。この新らたな主觀的要素が作用して、無產政黨の樹立運動に、地方主義が現はれて來たと見るのは、決して無理な見方ではない。總同盟の中央部が、從來の、事實によつて示した傾向を一擲して、地方政黨をオーソライズしたその根柢の、最大の力は、實にこの主觀的要素にあると云つてよいのである。

そこで無產政黨の運動が、現在當面してゐるモーメントは、その運動が客觀的要素にしたがつて、決定せられるか、それとも組合運動部內の主觀的要素に率ひられて行くかの境ひ目である。それが客觀的要素によつて決定される限り、無產政黨の運動は從來のコースを踏んで、階級大衆的な組織の完成へと進展して行く約束を持つ。それが若し不幸にして、主觀的要素に左右されるやうなことがあれば、組合運動における分裂狀態は、そつくりそのまゝ、政治運動に反映して、そこに分裂と抗爭と反目と嫉妬の亂舞が演ぜられ、將來相當な期間、凡てを失ふものは實に無產階級であつて、凡てを得るものはブルジョアジーである。

無產政黨運動は、右の如き過去を持ち、右の如き現在に面接してゐるのである。

五

そこで來る可き第五十一議會が、解散を見るやうなことになり、普通選擧制による最初の選擧が行はれるとすれば、それは無產政治の運動にとつて、如何なる作用を及ぼすであらうか？

無產政黨運動が、現在當面してゐるモーメントを、主觀的要

業に引摺られて、通過するとすれば、その結果は更に繰返し述べた如く、地方的小政黨の續出、組合政黨の併立と云ふ形を、執るに異ひない。そこで總選擧の切迫は、更にその形勢を誘致するに相違ない。

そうでなく無産階級の客觀的必要といふ要素にしたがつて、そのモーメントが通過されるとすれば、無産階級の政治的表現は、最初の大きな一歩を踏み出すに相違ない、しかも總選擧が早く來るといふことに、ブルジョアジーの未準備といふ利益がある。確固たる一歩を踏み占める上に、好ましいことである。

たゞこゝに留意しておく必要のあるのは、そう云ふ全國的無産政黨が、よき條件の下に組織されたとしても、自然發生的な地方的の政黨の發生は、絶對にこれを防ぐことが出來ぬと云ふ事實がある。しかしこの場合、その如き地方的の政黨が出來たとしても、その間に組織された勞働者及び農民の大衆の主觀的政黨組織が存在することによつて、無産階級の政治運動の指導權をその手に收めることが出來る。それが何よりも大切なことである。

或人は云ふ。日本に於ける組織された無産者の數は極めて尠い。その中でも闘爭的組合に屬する者は、僅に三萬内外である。それを普通選擧によつて選擧權を得る無産者の數に比較したならば、問題とならぬほど少數である。その如き少數の支持をもつてする無産政黨の運動は、當分の間は議會内のアジテーション以外ではあり得ないと。例へば大原研究所の櫛田民藏氏の如き、その意見を公けにしたものゝ一人である。

その見地からすると、全國的無産政黨といつてもその量において、したがつて政治的勢力において、問題とならぬといふわけになる。しかしこの見方には重大な一つの缺陷がある。なるほど組織された勞働者の數は比較的に極めて僅少であり、そのゆえに、無産政黨に抱擁し得る無産者は、當分の間、比較的僅かであらう。しかしそのことゝ、その無産政黨が、無産者の政治的關心が興起してゐる場合に、無産大衆を率ひ得るか否か、と云ふこととは別問題である。組織された無産者の數が尠いが故に、無組織大衆を率い得ないとすれば、僅々三百四百の組合員しか介在しない大工場において、一萬二萬の大罷業が起り、それを少數の組織勞働者が率ひるといふが如きことは、あり得ることでないわけになる。しかしそれは事實に反してゐる。少數の組織勞働者が、未組織勞働者の爲に、經濟的關心の高まつた時に、何十倍の大衆を率ひて資本家に當ることが出來るやうに、「少數の闘爭的勞働者」しかもたぬ無産政黨も、無産大衆の間に政治的關心の高まつた場合、何十倍かの無産者を率いて、

支配階級に當ることが出來ねばならぬ。勿論それは、必らずしも、議會に送る無産者代表の數に正比例的に反映するものは作らない、それがそうであるとしても、又必ずしも、無産政黨は當分の間、アジテーションしか出來ぬとは限定されないであらう。

要は無産政黨が、無産大衆を抱擁し得、無産者の要求が直ちに表現される如き組織であり、常に統制が保たれる如き組織であることが、肝要であり、それが凡ての始りである。しかもそれを「極度に強調するもの」は大山氏の言ふが如く、「無産階級意識そのものに」外ならないのである。(八・一〇)

ドイツ勞働運動の歴史と日本勞働運動の將來

エミール・レーデラー

東京帝國大學に於ける二年間の講義を終つて、將に歸國の途に就かうとした時、私は雜誌『改造』の編輯者から、ヨーロツパ特にドイツに於ける勞働運動の經過を略述し、併せて普通選擧實施後の日本の勞働運動の將來についての私の見込をのべてはどうかと云はれた。いま私は、朝鮮、滿洲を經てシベリヤに向ふ旅中、この依囑を果さうとするとき、私が京都で過したあの最後の爽快な日の印象はなほ眼中に去來して、東洋とはその生活――ことにその社會生活の構成要素を著しく異にしてゐる故郷のヨーロツパからは、全くかけはなれてゐるやうな心地がするのである。

さて、ヨーロツパの勞働運動は、その端を工業に從事する大衆の自發的團結に發した。如何なる社會に於ても、その生産關係とその社會構造の間には、ある一定の照應關係がある。されば本來動的な資本主義の經濟形態の先驅者等が、將來の社會には利害關係を基礎とした鬪爭が發生しないで極めて平和な共同生活が行はれるであらうと考へたのは、甚しき誤謬であつたと云ふべきである。ことに工業資本主義の組織ほど大きい、且つ明らかに意識された社會的對立を包藏してゐる經濟組織は存しないのであるから、この誤謬は一入致命的であつたと云へよう。事實、資本主義經濟は組織な

くしては存立せず、組織がなければ、完全な無政府狀態に陷るに相違ない。かくて資本主義の制度に於いては、大衆は自然に組織化すること、吾々の目前に見るが如くである。マルクスは、夙に工場が團結を促進する作用をもつことを洞察したが、今日となつては、吾々は最早、個々の獨立した人間としての勞働者と云ふやうなものを發見し得ないのである。蓋し勞働者の團體的組織に存する凡ゆる特質——特にソリダリチーの思想——は、工場の內で培かはれるのであつて、この工場的團體こそその形態は色々であつても、勞農ロシアに現はれた最近のそれに至るまでの種々相の社會運動の把捨者であつたのである。極めて強い倫理的の色彩を帶びた社會主義も亦工場に於て發生したときに始めてその面目を發揮したのであつて、近代の社會主義と過去の社會主義的運動との相違はこの點に存するのである。之を要するに近代の社會主義は、プロレタリアーの發生ありて後始めて發生したものである。而して又逆に、プロレタリアーが發生すればその色彩に多少の差はあれ、そこに必ず社會主義思想の雰圍氣が釀成さるるのである。

ヨーロッパの勞働運動の發達には——それは決して社會主義の發達と同一物ではない——幾つかの段階があり、その各段階は國によつてその現れ方を異にしてゐる。然しドイツに就て之を云へば、勞働運動は、機械の破壞的作用に對する勞働者の自衛的組合として發足し、工業と步調を共にして發達し、遂にマルクスの思想體系をとり容れるに至つたのである。而して次の時代に於ては、この思想體系に存する革命的性質は、特別な法律（かの有名なビスマルクの社會主義鎭壓法）を作つて之を壓迫しようとした國家權力と强く衝突するに至つたのであつた。然しこの法律は豫期の効果を收め得なかつた。蓋し當時はあだかも工業が目ざましく發達した時代であつて、その新しい生產方法はプロレタリアーに新たな精神的訓練を與へ、新たに組織された大衆の社會的な意思は、一片の法律のよく支へ得るところではなかつたの

である。かくてこの社會主義鎭壓法の撤廢は、その法律の裏面に於て勞働組合運動が暗々裡に著大の發達を遂げてゐたことを示し、又その勢力のあなどるべきものでないことを明らかにした。選擧毎に於ける社會主義的投票の增加がそれを雄辯に物語つてゐるのである。かくして遂に勞働運動は、ドイツ政府が政策を遂行する場合必ず之を考慮に入れねばならぬ極めて重要な一要素となるに至つたのである。

之を一つの大きな社會的運動として觀察するに、ドイツの社會主義的勞働運動は、多くの機關をもち、その多くの機關は一様に、社會的權力手段を手中に收めると云ふ共通の目的のために動いてゐるものである。それらの機關の內、先づ最初にあぐべきは、政治上の黨派である。次には、之と同程度の重要さ——戰時中及び戰後は寧ろより以上の重要さ——を有する勞働組合がある。之とならんで、主として社會主義的政黨に屬する人々及び勞働組合員に物資を供給し、併せて經濟的目的を持つてゐる消費組合——即ち生產、商業、運輸等に至る經營の大組織——が存してゐる。之等三大組織の構造は、極めて複雜で、彼等は多數の新聞をもち、學校を所有し、演說會を催し、又各種の運動音樂、社交に關するクラブを有し、なほ次代の少年を訓練する爲の青年團も出來てゐる。

之を要するにドイツの勞働運動は、その最初及び今から約二十年前までは、主として經濟的運動であつたが、今日では各方面を包括してゐるところの階級組織となつてしまつてゐる。而して普通選擧の施行があつても、それによつて何等の實績を獲得し得なかつた大多數の民衆を自覺せしめたものは、實にこの組織であつたのである。即ちこの組織は民衆とドイツ文化との關聯を意識せしめ、政治的に、又實際的に、彼等をして職業の內外に於ける彼等の生活に組織を與へ、その內容を充實せしめたのである。以上のべたところ、再び之を要約すれば、次のやうに云へよう。即ち彼等は自分が進んでかうしたのではなく、彼等は工業に存する團結促進の力に促されて自然に發生してきた勞働運動のお蔭によ

つて、自覺を促され、それによつて、彼等は新たな存在形式を作り出したのであると。

そこで勞働運動がなかつたならば、吾々今日の社會は、どうなつてゐたであらうか？と云ふ質問は、よく繰り返へされる質問であるけれども恐らくは無意味な質問であらう。何となれば、今日のやうな大規模の勞働組織がある以上、同時にそれに伴ふ社會的集團の發生をさまたげることが不可能であるからである。尤も奴隷經濟、又は極めて愚昧な勞働者を考へるならば別であるが、さうなれば、複雜に分化した勞働力を必要とする技術、工業の急速なる發達などと云ふことも期待出來ぬ筈である。從つて工業資本は、——特に自然の條件貧弱にして、勞働の生産力の進歩し難い、從つてまた勞働者が企業家の地位に上ることが愈々絶望的な場合には——積極的な自覺した、國民全體の文化に至大の關係をもつ勞働者團結を發生せしめる。彼等はいろいろの點に於て農業者或は農業勞働者とは異る。即ち之等工業上の無産勞働者は、文化の中心地に密集して生活し、凡ての政治運動に參加するのみならず、彼等はその運轉してゐるところの工業設備を利用することによつて、一時國民生活を停止せしめる力をさへ發揮し得る。又彼等の精神的本質は、技術の進歩と關連して（農民とは異り）積極的であり、動的である。故に、彼等無産者にして、何等の組織と監視とがなければ、彼等はそれ自身社會組織一般に對して脅威であると云はねばならぬ。かくして彼等はそれ自身一勢力であるが、社會がそれを等閑視することを得ないことは、今次の戰爭中にいよいよ明らかとなつて來た。蓋し戰爭は工業戰爭である。その大きな仕事は、勞働運動による組織された國民の力を以てして始めて可能であつたからである。機械室、運輸設備等だけが工業ではない。そこに必ず組織された大衆がなければならない。而して今日の勞働運動こそは、政府とは無關係に、否云はばその背後にかくれて、この組織を作り上げたのである。

然しながらもう今日のヨーロッパでは、勞働運動は更に次の階段に進んでゐる。即ちそれは、工業的社會改造の最主

要の要素となつてゐることであつて、生産力の組織化、生産力の進步發達、政治的デモクラシイの完成などにつきその遠大なる社會改造の目的に向つて努力してゐる。蓋し社會主義、生産手段の公有などと云ふ思想は、工業勞働者にとつては工業制度自體の問題の中から『自然に發生』し——云はば『先方からひしひしと迫つてくる』ものであるからである。かくなれば勞働運動は、最早既存の社會的紐帶に、新にある一條の紐帶をつけ加へたと云ふ位のものではなく、凡ての社會組織の改造計畫の把握者として、正に政治的、社會的ディナミークの中心勢力となつてゐるのである。

私の解する所によれば、凡て之等の問題は日本に於ては、今漸く芽生の狀態にあらう。なる程日本に於ても、二三十年來大工業は發達したが、舊來の社會構造が今日にも尙存續してゐると云ふ事情のために、工業化の齎す社會的結果は、日本に於ては、或る程度に於て、まぎらされてゐるに相違ない。特に、鞏固な家族制度の結果、勞働者の原子化が妨げられる所は尠くないであらう。更に、大企業は今尙幾分封建的精神に支配されてゐることを見逃してはならない。即ち之が爲一方では勞働者、使用人の獨立的な鞏固な組織の發達が妨げられ、その代り、他方では、勞働關係の傳統的安固性が——恐慌の時にすら——若干存在することは事實である。勿論この封建制度の殘骸は、工業制度の有する社會的影響を排除し得るものではない。何となれば、封建制度に於て、企業の主長に絕對的權力の與へられてゐるものは、彼が之に値すること（例へば、勞働者、使用人に對する配慮、出産の場合の贈物、招宴、退職慰勞金等）をなすが爲であるに拘はらず、現代の如く企業が大きくなつて來ては企業主が勞働者に對してさう云ふことをすることはおいおい不可能となるからである。かくの如くして、企業が若し家族主義の上に立たないやうになり、客觀的な計算的な資本主義的な營利企業となるならば、それに伴ふ必然的現象であるところの社會問題はどうして解決出來るであらうか、それは

必ず社會組織の原則——社會集團の自然的發生の原則と衝突するに相違ない。今や普通選擧によつて、多數民衆が所有者階級と同じ政治的權力を享有するに至つた日本に於て、この問題は現實の生々しい問題である。

選擧權擴張後、直接起ることは、議會に勞働黨が發生することであらう。蓋し既成政黨が勞働者の投票を獲得することは、困難であるからである。又小農及び小作人の投票も既成政黨よりも寧ろ勞働者の政黨に行くであらうからである。

然らばかかる勞働者の政黨は社會主義的政黨となるであらうか。即ち始めから生産手段の公有をその政綱に掲げ、その他ヨーロッパの社會黨の政策をそのまま取り入れるであらうか。

『社會による生産力の支配』と云ふ社會主義の原理は、東洋流の社會組織に於ては、西洋に於けるそれとは全く別の意味をもつてゐる。蓋し、ヨーロッパに於ては、凡そ紀元千五百年來發達してきた工業資本主義の時代は、凡ての社會體を解體し原子化する傾向の最後の而して最も徹底的な歴史的時代に他ならなかつた。さうして社會主義はこの無政府狀態に對する反抗に過ぎない。かくの如くにして、西洋の工業資本主義は、ヨーロッパ人の本質に適應してゐるものであつて、これに反する社會主義は、却つて多くの點に於ける彼等の意識を轉化させねばならぬと云ふ極めて困難な事業を伴ふてゐた。それにも拘らず、この轉化が必然であり且つ可能である所以は、資本主義的經濟組織そのものが餘りに大きな矛盾を包藏し、又その内部から絶へず發生する社會的鬪爭を永久に忍んで行くことが社會的に不可能な事である爲に他ならない。

ところが、支那、日本等の極東に於ては『西洋風』の或は『アメリカ風』の資本主義がすらすらと發達することは、ヨーロッパに於けるよりは、更に遙かに大なる危險を包藏してゐる。蓋しヨーロッパの勞働者は、たとへ彼が如何程社會主義的思想を有するにせよ、まさしく個人主義的の世界に成長した人間である。即ち家族、企業からは殆んど或は全く何等の援助を期待せず、又祖先の故郷とは全然無關係であることが多い。即ち家族や、故郷と云つたやうな觀念は、彼の意識に於て

は、最少限度まで減却されてゐるのであつて、從つて資本主義による原子化と云ふも、實は資本主義發達の遙か以前から始まつてゐる社會の分解作用を存續し、或は强めたにすぎぬからである。然るに東洋に於ては――ロシヤに於けるとやや相等しく――生產の工業化は、社會心理的には、生活基調の破壞を意味してゐるからである。されば日本や支那にとつて、彼等の生活に對して內面的に關係のない資本主義的經營が、その內から自然に新らしい社會組織を作り出すに至るであらうと考へるのは、根據なき樂觀論と云はねばならぬ。云ふまでもなく工業上の技術問題は、さまで困難な問題ではない。日本の企業家、技師、勞働者等は、それぞれ彼等の任務を果すに足る能力は充分に之をもつてゐる。問題は舊來の社會組織を破壞することに存する。而して東洋の勞働者も、最早孤立した勞働者としては考へ得ないからして、この舊社會組織に對する破壞力は必ずや社會的に××××を惹起するであらう。ロシアに於ける事情は既にこのことを示してゐる。卽ち主義の上から見れば、さうではないが、その氣持や個々の行動――特にその最初の行爲に就て見ると、ロシアのボルシエヴヰズムが無政府主義と多くの類似を示してゐるのは、まさに之と同じ事情から起つたことであつた。

されば極東、殊に日本勞働運動の任務は、太平洋西岸の國々の文化のために、無用にして危險な工業化に伴ふ附屬現象をなるだけ避けるにある。そのことは、ギルドの思想を今新たに呼び起し、さうして產業民主主義の原理に基いてギルドを作り之を產業組織の中に挿入することによつてのみ可能であらう。東洋の傳統的生活に關係をもつてゐるこの原理は、資本主義經濟と社會主義經濟の中間に位する色々な經過的形態、混合的形態を作るにも充分役立つであらう。

何人も――徹底的な夢想家も亦――極東の諸國が直ちに嚴に合理的に組織された經濟に移りうるとは考へぬであらう。また東洋の國民が純アメリカ流の資本主義に堪へうるとも思はぬであらう。かくて日本の勞働運動にとつては、日本に適當した(恐らく支那にも)經濟組織を發達せしめると云ふ美はしい使命が提供されてゐる。故にそれは勞働組合運動と密接な關係を作りあげなければならぬ。それは之と緊密に聯合して始めて、極東に於ける社會の進化に、有力な影響を及ぼし得るものとなることが出來よう。

最近政變の事實と批判

馬場恒吾

七月三十一日の晝前に總理大臣加藤高明子が內閣總辭職の辭表を捧呈してから、八月一日午后五時第二次加藤內閣を組織せよと云ふ大命が降る迄、約三十時間、其間に政界各方面の大頭株の顏が赤くなつたり、青くなつたり、到る所に悲劇と喜劇がごつちやになつて起つた。其有樣は、はたで見てゐる目にも氣の毒だと思はれた。併しかうした混雜の中にも、いくらか時勢の勝利とでも云ふべきものが見られると同時に、其勝利と云ふものが、民衆の目から見ては、はなはだ物足らぬものである事が痛切に感ぜられた。

元老の出所進退

時代の勝利を最も適確に表現してゐると視られてゐたのは元老西園寺公の行動である。昨年の正月 西園寺公が內閣組織者として清浦奎吾子を推薦したときは、元老の名譽は奈落の底に落ちた。そして憲政擁護運動が起つて元老は全國到る所で罵倒せられた。然るに同じ元老が今回加藤子に再大命を降されるやう奏上したと判ると、流石元老は公平だと云ふ聲が聞へる。新聞でも之を以て西園寺公の進境だと云ふ。八十に近い老人に尙進境があるとすれば、吾々も大に意を強くして可なりであるが、事實は今迄間違い許りしてゐた人が、たまに間違はなかつたと云ふ迄である。西園寺公今度の奏上が世間の意志に合致したと云つて、元老でなくてはならぬやうに云ふ態度は輕游である。

卅一日に加藤子が總辭職をすると、其日の午后入江侍從長が後繼內閣に關する御下問の命を奉じて御殿場に西園寺公を訪問した。侍從長は其夜、歸京して攝政宮に御報告申上てから、彼は牧野內大臣、一木宮相を訪問した。新聞社仲間では其晩直ぐにも加藤子に大命再降下になりはせぬかと思つて、要所々々に人を派して事件の發展を警戒してゐた。然るに侍從長は自宅へ歸つて寢てしまう。どうも變だと思つてゐると翌一日の朝になつて牧野內大臣が何處にもゐないと云ふので益々不思議に

なる。色々探した揚句、内大臣は午前四時四十五分東京驛發で御殿場に行つたと云ふ事が分る。

一日の朝は各新聞共に加藤子に大命再降下になると書いた。中にさう書かなかつた新聞は、それ見た事かと云ふ風に、牧野西園寺を訪ふて形勢混沌だと云ふ號外を出す。其外の新聞も夕刊で形勢が判らなくなつたと書く。憲政會は心配さうな空氣を漂はし、政友會は緊張の色を見せる。午后二時過ぎに牧野内府が歸へり、五時には加藤子に大命が降り、憲政會ではビールを拔くと云ふ段取りになつた。書けば簡單であるが、其間に政客が心配さうな顏をして炎天の下を馳せ廻はつてゐる有樣は中々大變のものであつた。

心配の種は牧野が何しに西園寺の所に行つたかと云ふ事であつた。事件の最中では此事情がよく判らなかつた。牧野が自發的に行つたものか、西園寺に呼ばれたものか、それすら判らなかつた。大命再降下の後ですら、變んな噂が立つた。大命再降下の筋書は一木宮相と牧野内府が拵らへたものだ。其筋書を入江侍從長に托して西園寺の所に持つて行かしめた。それで西園寺は、御下問になるのは元老に御下問になつたので、宮内大臣や内大臣に御下問になつたのではあるまい。牧野に來て話しをするやうに云つて貰い度いと、大變な立腹であつたと噂してゐるものがあつた。併しそれは政敵の宣傳であつた。

事實は入江侍從長が西園寺公を訪ねたとき、西園寺公はいろいろ東京に於ける政界の事情に付いて質問した。入江侍從長は遠慮して何んにも云はなかつた。それのみならず、御下問の使者には元來牧野内大臣が行くべき筈であるが、牧野が行けば相當に意見を吐かなければならぬ。それでは元老に御下問になつた趣旨に反すると云ふので、牧野はわざと遠慮して入江に行つて貰つたのだと云ふ。そこで西園寺公は奉答を鄭重にする爲めに牧野の意見も聞き度いと云ふので、翌日牧野に御殿場まで來て貰ふ事にした。其結果が第二次加藤内閣となつた。

勝利の物足りなさ

かうして、西園寺公は内閣組織者を推薦するに當つて成るべく公平な判斷を下すべく、他人の意見を鄭重するやうになつた。公自身の語として傳へられる所によれば、元老が内閣組織者を決定すると云つても、それは山縣若くは伊藤の如き聲望のある人ならば、自己の意志通りの總理大臣を推薦することが出來るが、自分には其力はないと云つた。

過去の内閣を奏上する時の例を見るに、山本權兵衞伯は西園寺公自分の意中の人であつたらしく見へるが、其前の加藤友三

郎子を推薦したのは松方公の意見を尊重し、淸浦奎吾氏を推薦したのは死んだ平田内大臣の筋書を採用したものである。今度の加藤第二次內閣を推薦するに牧野內大臣の意見を求めた。少くとも、表面に現はれてゐる所では、西園寺公は自己專斷の形を避けんと努力する跡が見へる。或は之は表面のみでなく、彼れは心から政治に倦いてゐる結果かとも見られる。彼れの性情は政治よりも寧ろ花鳥風月を樂しみたいのであらう。殊に時々他人の拵へた筋書を採用する結果、妙な變態內閣を推薦して、世間非難の焦點となる時は、彼は心底から政治をいやなものと思ふであらう。

併し彼が好むにせよ、好まざるにせよ、彼が元老となつてゐて、內閣組織者を推薦する制度が行はれてゐる間は、政治は博奕の範圍を出でない。誰れが內閣總理大臣になるか、丁が出るか、半が出るか、蓋を開けて見る迄は判らないのである。其間首を長くして待つてゐる政黨首領の身になつても余り體裁のよいものでない。合理的に行はるべき立憲政治をして、博奕の形式に墮落せしめる所に、元老の責任が存在する。

例へば西園寺公にしても、何時迄も生きられるものでない。元老一人々々凋落して今は彼一人になつてゐる。其死後、內閣更迭は如何なる手續きによつて行はるべきか。今でさへ不合理の著しき元老制度が、永久に繼續さるとは誰にも想像出來ない。それ故に現在唯一の元老たる西園寺公の出所進退は公自身として速かに考へる必要がある。

時勢は勝つ。西園寺公一人の推薦で內閣總理の人選が決まる事は、如何に聰明な西公にしてもそれは國家の權力を余りに一個人に集中することになつて、空恐ろしくならざるを得ないであらう。だから彼は戰々兢々として周圍のものゝ意見を徵し、成るべく世論に反抗せざるやうに勉めてゐるらしい。護憲運動の後に加藤子を推薦し、今度再び大命再降下を奏上したのは、其處に抵抗すべからざる時勢の力が現はれたものである。併し將來の政權授受がさうした輿論と同じ方向に行くと云ふ保證のない所に、此勝利の物足らなさがある。

純理から云へば立憲的な政權受授は元老を煩はす迄もなく、政黨首領の間に圓滿に行はれるべき筈である。それは必ずしも二大政黨對立の場合に限つた事でない。例令小黨分立の場合でも、政黨首領に互讓の精神さへあらば、其中の一人を內閣組織者として推す事は出來べき筈である。さうすれば、元老の役目は只政黨首領の協定した結果を元首に取次ぐ手續上の役目だけになる。然るに日本の如く政黨首領が何れも俺れが內閣を組織するのだと頑張る國に於ては、首領會議で首相を選定する事は

不可能になる。矢張元老の投ずる骰子の目が丁と出るか、半と出るか、運を天に任かす外なくなる。元老の存在するは一つは政黨の罪である。

政友會の政權慾

政權奪取を以て社會運動家のみの標語と思ふのは間違つてゐる。既成政黨は政權奪取と云ふ言葉こそ使はぬが、其一擧一動皆政權奪取の手段でないものはない。社會運動家には民衆の力を糾合して力づくで政權を取らんとするに對し、政黨は元老の鼻息を窺つて、内閣組織者として推薦される事を冀ふ。只政權奪取の戰術が異るのみである。今回の政友會と憲政會の協調破裂、繼いで、内閣總辭職ある迄の經過を見れば殊に此感を深くする。

元來から云へば政友會が協調破裂に向つて突進し、憲政會が單獨内閣を夢みて内心之を歡迎してゐたのは共に護憲運動を忘れてゐたからである。昨年清浦氏が貴族院の研究會に擁立せられて、所謂特權内閣を組織した時、而して之を援護する傀儡的政黨として政友本黨が生れた時、其後護憲派が總選擧に勝つて加藤内閣が成立した時、憲政會及び政友會内部の心持は、かうして彼等が政權を握つてゐる間に、彼等は協力して政友本黨の地盤を切崩して、終ひには本黨それ自身を消滅せしむる。さうすれば日本にも憲政會、政友會の二大政黨が對立して、政權の授受は元老の手を借らなくても圓滿に行はれる事になる。それが日本の立憲制度を確立すると同時に、政權は此二黨で獨占する事が出來る。それまでは兩黨共に協調して行かうと、それは兩黨の領袖株が屢々口にしてゐた所であつた。

此協調の精神に尤も忠實であつたのは前の政友會總裁であつた高橋是清氏であらう。彼が護憲運動に參加する爲めに爵位を捨て、貴族院の議席を捨て、そして盛岡の選擧で惡戰苦鬪した事は人の知る通りである。彼は協調決裂の直ぐ前に田中總裁邸で開かれた政友會最高幹部會に出席して、寫眞まで取られてゐるが彼自身は最後迄協調決裂に反對であつた。政友會が其出身大臣をして加藤内閣と抱き合ひ心中をなさしむべく決心したとき、彼は一體何を云ふのか、譯が分らぬと云つて反對してゐたと傳へられる。其前に政友會が地租委讓を唱へ出して、内閣と衝突せんとしたとき、彼は政友會幹部に向つて、俺は協調を破壞せぬと加藤に約束したのである。地租委讓で内閣と衝突するならば、俺の顏を何うして呉れると駄々を捏ねた。其爲め政友會の地租委讓は煮へ切らなかつたと云ふ。

高橋氏は正直な人である。正直なればこそ一度思ひ込んだ事

は何時迄も忘れぬ。彼が護憲運動を以て政權奪取の方便とする以外に、尙幾分か主義主張の存在してゐるものとしてゐるのは今日の政界に於ては珍とするに足る。

政友會と憲政會の協調決裂の已むべからざる形勢を作つたのは政友會の新總裁田中義一男であらう。彼れ自身は軍人の單純さと、物に頓着せぬ人間味を有つてゐる。高橋老は田中男を批評して、彼は戰爭でなければ策略などを用ゆる人でないと云つた。蓋しそれが眞實の批評であらう。然し彼れが如何に策略を好まぬ人であつたにした所で已に政友會の總裁となつた以上は、彼れの周圍の者は彼を政權奪取の道具に使用せずには置かぬ。事實に於て政友會が彼を總裁にしたのは、高橋氏を戴くよりは、彼を戴く方が政權を取るに便利だからだと思つた事の外に何の理由もない。

田中男を政友會總裁に持つて來たのは死んだ横田千之助氏の案だと云はれてゐる。初め高橋總裁は自分は政友會總裁の任でない。だから後繼者を物色して呉れるやうに政友會幹部の二三の人に相談した。それで一時は床次現政友本黨總裁を後繼者にする事に內定してゐた。然るに政友會が分裂して、床次氏が本黨に行つた爲に、再び政友會總裁を物色せねばならぬ事になつて、高橋氏は總裁後繼者として横田氏を推さんとした。横田氏は暫らく熟考さして呉れと云つて其時は決定的の返事をしなかつた。其後になつて、横田氏は高橋總裁に向つて自分は政友會を率ゐて行きうると云ふ自信はある。併し自分が政友會總裁となれば政友會は小さくなる許りだ。それでは政友會の爲めにならぬ。それよりは他に有力者を迎へて總裁となす方がよいと云つた。此結果が田中陸軍大將を迎へる事になつた。

これは表面に現はれた事實である。横田氏が眞實內心から政友會を田中男に一任する意志を有つてゐたか、どうか。元より政友會を大ならしめる爲めに田中男の力を借りたであらう。併し本心は矢張自身で政友會を統率して行く決心ではなかつたかと云ふ者がある。それが事實であつたか否かは、横田氏が死んだ今日では、確かめる途がない。

田中男を總裁に迎へる前からして、政友會は憲政會內閣の廂借りたる事に不平滿々であつた。今春の議會開會中も、普選案討議の際に、政友會は衆議院に於て憲政會案よりは急進的な案を固執して、貴族院との妥協を不可能ならしめんとした。さうして世間に對しては政友會は進歩的であるとの好評を博すると同時に、實は普選案を不成立ならしめて內閣を倒さんとする計畫であつた。此計畫は後に入閣した岡崎氏の妥協承認の事際に依つて敗れたが、幹部數名は岡崎氏への面當てに總務辭職を申

出てゐるほど、それほど政權に憧れてゐたのである。

併し政友會が政權奪取の意志を露骨に表面に現はして來たのは何んと云つても、田中男を總裁に迎へた時を以て區切とせねばならぬ。前の總裁高橋氏は田中男を總裁に迎へる談判をするときに、田中男に向つて、三派協調を繼續して行く意志があるや、否やを問ふた。田中男は協調を繼續して行くと云つた。そこで高橋氏は喜んで總裁の椅子を讓る事にしたと云つてをる。

併し此處で田中男が自分は加藤內閣とは何の縁故もないから、協調なんか、破るか破るか破らないか、其時になつて見なければ判らぬと云つたらどうであらう。高橋を戴いてゐては天下は取れぬ。田中の方が可能性が多いと思つてゐる所の政友會策士は、矢張田中男を總裁に迎へたであらう。田中男にしてもさう出た方が男らしくてよかつたかもしれぬ。

加藤首相と田中男との間には協調繼續の公共聲明書が出來、內閣には政友會の協調派と云はれる野田、岡崎が入り、協調は繼續するかの如く表面は裝はれたが、田中男が政友會總裁に座はつて、閣外に居る以上、誰れが目にも虎視眈々としか見えぬ。實際協調が生きてゐるものとは誰れも思はぬやうになつた。

政治は眞劍でなければならぬ。眞劍でありさへすれば、少しは間違つてゐても世間は賢いからさうした熱心な同情者も出て來る。腹にない事をいくら口先きで上手に云つても國民から、馬鹿にされる許りだ。協調の假面など早く脫いで了ふ方がよいと云ふのが一般世間の意向であつた。

或人は田中男に向つて、閣下が政友會に入つた事の可否は云はぬ。已に入つた以上は陸軍大將らしく堂々とやるがよい。若し協調ならば閣下自から入閣して心からの協調をやるがよし、若し協調が厭ならば政友會出身大臣を奇麗に辭職さして、憲政會單獨內閣を作らすがよい。今のやうに中途半端の事をしては閣下の晩年を傷けるのみだと云ふ意味で忠告した。其忠告を容れたものか、何うかは分らぬが、彼は政治は公明正大でなければならぬ、自分は正々堂々とやると口癖のやうに云つた。西園寺公を訪問した時も此正々堂々を繰返へし、友人に向つては政友會大臣を引かして、總選擧に負けたら矢張り在野黨として何年間は隱忍する覺悟だと云つた。加藤首相の耳に入るべき筋に向つても、政友會大臣を奇麗に引かして、憲政會に單獨內閣を作らしめる積りだと云ふ事を二度も三度も言明した。それが矢張最後になつては政友會の策士に引づられて、內閣に無理心中を迫る醜態迄行つたのである。そして其策が旨く行つたかと云へば、無理心中はした。併し無理心中である事は誰れの目にも明白であるから、相手の加藤子丈けが浮び上がつて、憲政會單獨

内閣が出來たといふ有様である。政友會策士の拙づさ加減たらない。

政友會に禍してゐるものは、原内閣時代二百八十名の代議士を有つて、政友會の威勢隆々たる時代の記憶である。其時は政友會の黄金時代であつた。如何なる陣笠代議士でも、政友會だと云つて、地方に行けば知事が出迎へに來る。宿屋へは土地の名望家が御機嫌伺ひに押しかける。全く飛ぶ鳥も落す勢であつた。然るに憲政會内閣になつてからは、大臣たちは相當に威張れる。其他の代議士は所謂廂借りの陣笠だと云ふので、地方に出掛けても孤影寂寞、出迎へる知事もなく、押し懸ける有志家もない。彼等は我黨内閣の記憶を呼び起して、悲憤慷慨の涙に暮れる。其所で如何なる手段を回ぐらしても我黨内閣を作らねばならぬ。と決心した。無理心中の醜態を敢てした所以も其所にある。

政友本黨の立脚地

政憲二派の協調内閣が斃れる時、憲政の常道に依つて政權が反對黨である所の政友本黨の所に行くべき機會は充分に存在した。然るに政友會は七月二十九日、三十日の閣議に於て憲政會の税制整理案に反對して、協調を破裂せしむるや否や、本黨に向つて提携を申し込むで來た。之に對して本黨は直ちに提携すると云ふ氣勢を見せた。本黨の幹部は政友會の幹部と會合して提携に勉めると云ふ申し合せをした。それが爲めに、本黨は自己獨立の立場に據つて、次ぎの内閣を組織すると云ふ自信のない事を天下に發表すると共に、政府に無理心中を迫つた政友會の責任を分擔する事になり、從つて又内閣を組織すべき資格を失つたと、これは政變ゴタ〳〵の際の本黨の輕擧妄動を批評する世論であつた。之に對しては本黨も辯解の辭がなく、却つて本黨内の代議士の中にすら同じ議論をして、幹部を彈劾するものすら出て來た。併し今の黨略本位の既成政黨としては、本黨が政友會の提携申込みをむげに拒絶する譯に行かぬ理由があつた。

本黨總裁の床次氏は、政友會が田中男を總裁として迎へる事に、最も憤慨した一人である。其時は床次氏は社會運動家でも云ひそうな激越な言語を吐いたとすら傳へられる、彼は元と政友會の總裁になるべく内定してゐた人である。次ぎの内閣の總理となるべき順序になつてゐると見られてゐる人である。從つて田中男が政友會總裁となる事は彼れよりして汎て此甘き夢を奪ふ事になる。彼が憤慨するのは人情として已むを得ないだらう。

併し政治上に於ける彼が黨派の正面の敵は憲政會內閣でなければならぬ。彼が黨派は內閣倒壞を目標とせねばならぬ。そして內閣倒壞の手段は政友會と憲政會を引き離す事でなければならぬ。其所で政府に喧嘩を吹き懸けしむべく、政友會に對して相當好意を示す必要に迫まられた。政本合同の話しがあつた時、彼れは政友會が政府の與黨である間はそんな話しは出來るものでない。政府と緣を切つた時、相當に考量しやうと云つた。政本合同の爲めに奔走した貴族院の四人組（大木遠吉伯、山梨半造、水野錬太郎、鈴木喜三郎）の一人に向つては政友會が在野黨にならば、本黨は合同すると明言したとさへ傳へられる。現に其一人は床次が今になつて合同に躊躇するとは怪しからぬと云つて怒つてゐる。併し本黨の立場から云へば政友會をして政府に喧嘩をさせる。喧嘩分れになつた揚句は本黨はチツトして政權の來るのを待つと云ふ態度を採り度かつたのであらう。

然るに本黨內には政本合同を促進せしむる強い流れがつた。中橋氏は其頭目と見られてゐる。彼れは決して床次を見捨てゝ政友會に走る事はせぬと斷言したと云ふ、然し同時に彼れは床次の下風に立つを快しとせぬ。むしろ田中男の下に床次と同列になる事を喜ぶ。だから本黨內に於ける政本合同運動は中橋氏を中心としてかなり深刻に行はれた。殊に政憲協調が破れかかつた際は鳩山一郎氏など少壯代議士を狩り集めて、合同の強行運動を起した。若し本黨幹部が合同せざれば、自分等は脫黨して政友會に行くと迄云つた。且つ先きに政友會に對して、政府と緣を切つて來れば、合同問題を考量すると云つた言葉に對しても、公人として信義を守らねばならぬと云ふのが彼れ等の主張であつた。

此場合床次氏其他本黨の所謂自重派が、政友會に對して合同若しくは提携を絕對に拒絕するときは、本黨は分裂する危險があつた。玆に於て床次氏は本黨幹部と提携の申合せをするのを默認せざるを得なかつた。それは政友會との提携に贊成なるが爲めでなく、本黨を分裂させざるが爲めであつたと觀察すべきである。

かうした苦心の末に仕組まれた提携の狂言は狂言のまだ終らざる前に加藤子に對して大命再降下があつた爲めに、狂言をする目的物がなくなつた。政友會から云へば、本黨と提携して、衆議院に二百五十の議席を占むれば、次きの議會は解散せずして濟む。解散嫌ひの元老は必ず此多數を支配する田中男を內閣組織者として推薦するだらうと云ふ目算であつた。內閣總辭職の日、政友會は小泉策太郎氏を西園寺公の處に派して、政本提

携は出來る床次は田中の節度に伏すると云つたと報告せしめた。之を聞いた床次氏は先輩數氏の處へ人を派して、そんな事は嘘だ。提携はこれから考へる事だと辯明さして置いた。かうして政友會が折角仕組んだ提携は狂言としても極めて拙づい狂言になつた。

後に田中男と床次氏と會見して提携聲明書を出した。政治を公明にする、提携は中央に限る。政策は個々相談して決める。これ丈の申し合せならば實質に於て提携せざる言明とも見られる。床次氏が、今でも政友會とは獨立して、自分の手に政權を取らんと思つてゐる事は、此れに依つて明白になつたと云へる。併し其方針で進んで、果して本黨が分裂せずに濟むか、否乎。例令分裂せずとも床次氏が何時政權を取りうるか、それは將來の疑問として殘る。

憲政會と研究會の妥協

七月二十九日三十日の閣議で政友會出身の小川法相岡崎農相は他の閣僚全部と意見を異にして税制整理案を審議する事に反對し、そしてそれだからと云つて辭職する事も考へてゐないと云つた。前に田中總裁が奇麗に政友會大臣を引かしめるやうに云つたのを信じてゐた加藤首相は面喰はざるを得なかつた。尤も其事で田中男は後に友人連中に使者を出して正々堂々と政友會大臣を辭職させなかつた理由を辯解さした。其理由は憲政會の遣り方が挑戰的で奇麗に身を退く事が出來なかつた爲めだと云ふのである。事實としては政友會の幹部が初めから抱合心中の決心でかゝつた事は世間の知る通りである。

加藤首相は政友會が抱合心中をする作戰だと見て取ると、翌三十一日に臨時閣議を召集して否應なしに總辭職をして了つた。政友會は手を打つて喜んだが、世間の同情は憲政會に注がれた。翌二日に加藤子に大命再降下となつて、政友會はしよげる。憲政會ははしやぐ。此所迄は憲政會の行き方は汎べて堂々たるもので非難される點がなく、死線を越へで再生した事が少なからず世間を喜ばした。

然るに其直ぐ後になつて政務官を貴族院から擧げた事に依つて、同じ憲政會内閣は天下を擧げての非難の的になつて來た。祇王の詠つた如く、何れか秋にあはで果つべきである。

批難はからである。加藤首相は單獨内閣の組織を終ると直ちに、貴族院の有爵議員團と交渉して研究會から四名、公正會が一名の政務官を採用した。研究會の四名の中には其會の事實上の首領と云ふべき水野直子が居る。公正會から出る矢吹省三男は今春の議會に於て、選擧權は公民に限つてやるべきものだと

消陷して、普通選擧に反對した人である。それは敢て追窮するに及ばぬとしても、研究會は昨年の淸浦内閣の製造者である。護憲運動は研究會攻擊を中心として起つたものである。其結果として成立した護憲内閣が研究會に渡りを付けると云ふ事はない。一方研究會は昨年夏の臨時議會で全會一致で政務官設置に反對を試みた團體である。それが政務官に四人迄就任すると云ふは如何に萬年政府黨だと云つても餘りに無節操であると。

此批難に對して憲政會は平氣で居る。否寧ろ之を以て加藤首相の手腕を讃らんとする。彼等の云ふ所に依れば、實際の政治は貴族院を無視して行はれるものでない。だから貴族院の最大會派を憲政會内閣の藥籠に容れた事は、首相としての加藤子の大成功である。殊に研究會を通して、政友本黨との諒解が密切になれは、來るべき議會も解散せずして濟む、それこそ政局安定するのだと云ふのである。

第三者は又異つた觀方をしてゐる、曰く、今度の事は憲政會と政友會が、研究會の爭奪戰をやつて、憲政會が勝つたと見るべきである。由來研究會は政友會と仲が良かつたものだ。然るに近頃になつて、政友會が協調破裂の作戰に沒頭してゐる間に、憲政會が手を回はして研究會を手なづけたのである。これも一つ政友會策士の失敗の個條に加ふべきものだらうと。

成程政權を維持すると云ふ點から云へば、憲政會が研究會を懷柔し得た事は成功と云へる。併しそれは單なる政權維持の立場からである。時勢は動く。單なる政權奪取、若しくは政權維持が、どれ丈けの價値があるものか。吾等は今少しく根本に入つて考へる必要がある。

支配より創造へ

最近の政黨に現はれたる各政黨の行動は、汎べて政權を取る事と、有つて居る政權を放すまいとする事を目標としてゐる。それが成功であると云ひ、失敗したと云ふは皆んな政權爭奪が政治の全部であると云ふ事を前提としてゞある。主義主張の如きは問題でない。憲政會よりも急進的な意見を發表してゐた政友會は、政權を招き寄せる方便としては、保守主義を代表してゐる政友本黨と提携する事に熱中したではない乎。これは如何に強辯しても、政友會が政友本黨に降伏したものと見ねばならぬ。政友本黨と提携しなければ、政權に有り付き得ぬと考へた心持ちが、即ち本黨に對する精神的な降伏でなくして何であらう。政本提携が兼て以上に評價せられないのは其爲めではない乎。かうして政友會は益々不評判になる。之と同時に憲政會が研究會と妥協し、政友本黨と諒解を求めんとするは、矢張政友

命が不人氣になつたと同じ途をたどりつゝあるのではない乎。孰れか鳥の雌雄を知らんやで其政權を中心として動く點に於ては甲乙がない。

今日の社會に於て、政權が有難い物と思はれて居ればこそ、それに近づく事が成功と云はれ、それに遠ざかる事が失敗だと云はれる。他日若し時代が變化して、政權と云ふものが、げじ〳〵の如く忌み嫌はれる日が來たならば、今の成功は失敗であらう。今の失敗は成功であらう。現在でも吾々に採つては、誰れが政權を所有してゐるかと云ふ事は問題でない。如何なる政治が創造されるかと云ふ事のみが問題である。彼等は政治は所有する事であると思つてをる。吾等は政治は創造する事であると信じてゐる。そして如何にして創造性に富む政治を招來せせんかと思ふ。

私が玆で現代政治家に向つて注意したい事は、彼等が今日かくの如く苦心してゐる所の、政權を取る爲めの活動は、政治の本質的機能から遠ざかつてゐると云ふ事である。政權を取ると云ふ動機は何である乎。元より其中には權勢慾があらう、利權慾があらう。名譽慾があらう。併し其動機の根柢をなすものは、政權を所有して天下を支配せうと云ふ考へである。或は政策を斷行するとか、或は善政を布くとか云ふは、支配すると云ふ觀念を装ふ所の形容詞にすぎない。所で現代の人民は支配階級の政府に支配される事を承諾するものでない。支配階級の政府のみならず、如何なる政府であつても、其政府が吾々を支配する權利のあるものとは、苟くも自尊心のある國民の承諾する事の出來ない事柄である。普通選擧は人民自から治めると云ふ原則から出發してゐる。政府は人民の命ずる所を圖つて、それを行ひさへすればよい。政權を取つて、國民に向つて支配觀念を以て臨まんとする所の現代の政治思想には、根柢に誤謬がある。此誤謬は政權慾に驅られてゐる既成政黨と勞働者專制を唱へる最左翼の社會運動家が共通に陷る。誤謬である

權力を以て他人を支配せんと欲する觀念は其中に他人に對する優越感を發生せしめる。同時に專制を好む性情が生れる。其所には必ず權力崇拜と中央集權が伴う。護憲運動に參加した政治家が、元老西園寺公を崇拜する事がそれを證明する。西園寺公が例令時勢に順應する進境を示したとしても、彼が意志で內閣組織者を推擧されるといふ事實は中央集權の最も著しき例ではない乎。

美くしき花が王公の庭園にのみ咲くと限つた事でない如く、良き政治の芽は支配階級にのみ萌へ出るのではない。普通選擧が布かれて民衆が政治に參與するやうになつた事は、今迄の文

配階級のみでは、良き政治を行ふ智慧がないと云ふ所の、支配階級の降參のしるしである。此時代に中央集權的に、專制的に國民を支配せんとするはたとへ行はんとしても行はれうべき事柄でない。既成政黨は政權を握る事を目標として、或は成功したと云ひ、或は失敗したと云ふ。それは彼等の眼界が上は西園寺公と下は政務官迄で限られてゐるからである。若し新たに參政權を得た一般人民が誤魔化されさへせずば、即ち既成政黨に投票を與へさへしなければ、今日の政黨の勝敗は勝敗でなくなる。彼等は皆んな沒落して、民衆は民衆自身の新らしき政治を創造するのである。それこそ元老崇拜でなく、中央集權でなく、又權力の支配でなく、日本全國の津々浦々から、新らしき人と、新らしき智慧と、新らしき政治が芽生へる時代が來るのである。（十四、八、十）

社會運動と智識階級

麻生久

(一) 社會運動と智識階級

(1) 智識階級の參加

社會のどん底に虐げられ搾取せらるゝ無産民衆が、その兩足につながれた重い鐵の鎖を自ら解き放つて行く長い陰慘な階級鬪爭の歴史の中には、所謂智識階級を以て呼ばるゝ多くの社會運動者の名を見出すのである。そして夫れは曾て然りし如く今日も然りであり、而して又恐らくは明日も然るであらう。

彼等の或る者は萬民の平等なる幸福の社會(ユートピア)を胸に描いて、直ちに之れを此世に現實せんと試みた。彼等の或る者は又社會主義の科學的理論を闡明して、運動の上に思想的根據を與へ指導の地位についた。更に又彼等の多くの者は、慘澹たる反逆の鬪爭に身を投じて、實際運動の先頭に立つた。斯くの如くして彼等が其全生涯に此世から受け得た報酬は抑も何物であつたらう。曰く失敗、敗亡、貧窮、投獄、追放、死刑、××等々、一と口に之れを云ふならば、盡くさゞるなき支配階級からの迫害である。併しながら之等の迫害は尚ほ且つ忍び得るであらう。何となれば夫れ等のものは戰はんとする敵より來る必然の迫害だからである。けれ共、忍び得ざる深刻な心の痛手は、やゝもすれ

ばその味方から投げ與へられるのである。虐げ搾取しつゝある支配階級等の欺瞞は、民衆をして自己のために戰へる者に反かしめるであらう。彼等は往々にして民衆から嘲笑せられ危險視せられ、憎惡せられ、裏切られるのである。味方から投げ與へられる悲哀は只だに之れのみに限られない。夫れは同じく民衆解放の陣列に轡を並べて戰へる同志の間に卷き起される避けがたき反目である。人々は同志の心からなる寛大と理解と、而して水ももらさぬ結合とを斷ゆる時なく絶叫し心の底から欲してゐるのであるが、此激烈不安な身命を賭する運動は、何ものにも增して心に相抱かん事を欲せしめながら、現實に同志の心を相反かしめて分裂の宿命的悲哀に導くのである。萬民の等しき友愛と幸福とを胸に抱いて其身を運動の渦中に投ぜる者が、一度此思ひ設けざる殘酷なる現實に當面した時、彼等の精神は無殘に打ち碎かれて、幻滅の悲哀は彼等の胸を蔽ふであらう。

併しながら、我等の社會運動は、斯くの如き支配者等の迫害を其背に乘せ、訴へんとして訴へ得ざる苦るしき悲哀を胸に抱きながらも、長き必然の歩みを續けて其基礎を築いて來た。そして虐げられたるものゝ足につながれた鎖は次第に解き放たれて行きつゝあるのである。

サン・シモンの名がそこにある。フーリニ・ロバート・エンの名がそこにある。彼等はユートピアンソーシャリストと呼ばれる人々である。カール・マルクスやエンゲルスが科學的社會主義の創設者である事は云ふを要しない。ボルシエビズムのレーニン、リーブクネヒト、ルクセンブルグは未だに我等の眼前に生きてゐる。ゴドキン、プルードン、スチルネル、バクーニン、クロポトキンの名は、無政府主義の名と共に輝いてゐる。之等の運動者の名は、全世界を通じての社會運動の基礎的な名であるが、長い進行を續けて來た各國の社會運動史を繙くならば、あらゆる時代を通じて、所謂智識階級から出でゝ民衆の運動に身を投じた者の名を數多く見出すであらう。彼等は夫れ夫れの境遇と性格とに從つて、社會運動の全局面が要求する夫れ〳〵の場面の中に身を投じて、一の重要な役割を務めたのである。

(2) 智識階級とは何ぞ

社會運動の本體は畢竟するに無産者階級それ自身であるに相違ない。サンジカリズムは社會運動が勞働者階級のみに依つてなさるべき事を主張し、夫れのみが眞に勞働者階級を解放に導く所以なりとする。而してサンジカリズムは此主張の上に立つて、勞働運動の中に智識階級の參加を拒否するのである。

併しながら、サンジカリズムの理論と主張の當否はしばらく措くとするも、長い世界の社會運動の歴史は、事實の上に明白にサンジカリズムの理論と主張とに反いてゐる。而して過去に於て然りし如く、今日に於ても亦明日に於ても、愈々之れに反かんとする傾向を示してゐるのである。智識階級の多くの者は自から進んで社會運動の陣列に參ぜんと欲すると共に、社會運動夫れ自身の大局は又切實にその參加を要求してゐる。(日本に於ても暫らく以前までは、サンジカリズムの思想的影響に依つて、智識階級排斥の聲が盛んであつたが、最近に至つて漸次に退潮して來た。そして玆に注意すべき事は、佛蘭西に於ても然りし如く、日本に於ても、サンヂカリズムの運動の指導者が、等しく智識階級出身の社會運動者であつたことである。もし又智識階級出身の運動者に對して、運動上の墮落を云爲するならば、その非難は等しく勞働者階級出身者に對しても向けらるゝ事である。そして今日では日本に於ても既に斯くの如き事態に逢着してゐるのである)

然らば社會運動の上に斯くの如き意思を有し、斯くの如き運命を脊負はせられた所謂智識階級(Intelligentsia)とは抑も何ものゝ謂ひであらうか。

しばらく智識階級と云ふ言葉を社會運動から引き離して考へるならば、此言葉が示す意味は次の如く解すべきであらうか、即ち、文字ある階級、智識を以て生活の資料とする階級の謂ひであると。併しながら、之れに對して社會學的な解釋を嚴密に下すならば、智識階級と稱するも、夫れは貴族階級、勞働者階級、資本家階級と云ふ如き確然たる階級を構成してゐるのではない。その中には貴族階級に屬するもの、資本家階級に屬するもの地主階級に屬するものもあるのである。けれども亦今日普通所謂智識階級と一般的に呼ばるゝものゝ中には、貴族階級、資本家階級、勞働者階級、農民階級とは經濟的にも社會的にも異つた、共通した社會的生活が存してゐるのである。

併しながら社會運動と關聯して普通呼ぶところの智識階級と云ふ意味は、決して以上の全體を指すのではない。畢竟するに、所謂智識階級の中から身を脫して、無産者階級が主體たる社會運動の陣列に身を投じた個人を指して云ふのである。そこで、社會運動史上、智識階級と云ふ言葉が最も重要性を持つ露西亞では、其意味は極めて特殊づけられてゐるのである。一八八〇年代に活躍したラブロフ(一八二三年生一九〇〇年死、一八六六年カトコフのアレキサンダー二世狙擊事件の後投獄せられ、一八七〇年脫獄、爾來西歐に流浪、巴里の陋巷に窮死す。高潔なる人格者。)は智識階級を解釋して、『批判的思索家の集

團」なりとした。その意味は、現在の社會制度、政治組織を批判し、その不合理を指摘し、之れが革新を理想として古き權威と闘爭する集團の意である。

恐らく今日に於ても、社會運動と關聯して所謂社會運動者と呼ばるゝ智識階級なるものゝ一般的な意味は、大體に於てラブロフの解釋に新らしく加ふるところはないであらう。

(3) 參加の原因

然らば何故に、其經濟的な境遇に於ても、社會上の地位に於ても、勞働者階級と比較して優秀な位置に立てる彼等が、その特權を棄て、境遇を脱して、虐げられたる民衆に身を投じ、階級闘爭の陣列に加はるのであらうか。何ものゝ力が彼等をして富有と特權との代りに、貧窮と流浪と投獄と死刑とを其脊に負ふ反逆の生活に導くのであらうか。如何なる魔力が彼等をして、此危險と迫害の巷に、而も何ものにもたとへがたき情熱を以てその生涯を投げ出させるのであらうか。

私は其魔術的な力を、人間が其性質の中に本然的に有する二つのものに歸する事が出來ると思ふ。その一つは、眞理を求むる心であり、他の一つは、即ち、人道的な心である。而して此二つを合してこれを一つの言葉に表はすならば、それは正義を愛し求むる心と云ふ事が出來るであらう。

科學は社會制度を批判してその不合理を知らしめる力であり、人道的な心は、その不合理から惹起される、人間と人間との關係、即ち支配者と被支配者との關係に對して非人道を感ぜしめる力である。更に又科學は將來に對して社會的合理を示して、人間に一つの社會的理想を抱かしめる力であり、人道的な心は、現在の非人道を撲滅して將來人間の世界に人道を確立せんとする理想を抱かしむる力である。不合理な社會制度は原因であり非人道は結果である。社會制度の不合理を知らしめて、合理なる社會制度の建設を理想とせしむるものは、眞理を求むる心であり、不合理なる社會制度の上に立つて暴虐と富有とを恣まゝにする支配者を惡ましめ、その脚下に蹂躪せらるゝ民衆に味方して義憤を起さしむるものは、人道的な心である。

智識階級が社會運動に投ずる原因を主觀的に見るならば畢竟此二つの心の作用の結果である。或る者は先づ理論に教へられて然る後虐ぐる者虐げらるゝ者に對する義憤に熱情を呼びさますであらう。けれ共又或る者は、先づ虐ぐる者の暴虐と、虐げらるゝ者の悲慘とに義憤して、然る後社會制度の不合理に理智の眼を開くであらう。兩者は二つであつて而も離るゝ事の出來ない關係にある。若し之れを社會運動の實際の上から云ふなら

ば、理論は運動の骨組みであり、感情は骨組を生かす血と肉である。理論は運動の方法を示す針であり、人道的な心は示されたる方法を實際に押し進めて行く熱であり力である。私は科學的社會主義の運動も亦畢竟一個の人道的な運動と解するものであるが、社會主義が其目標とする人間が人間を搾取し支配する事なき平等な社會なるものは明かに人道の確立せる社會である。只だ從來稱へられた所謂人道主義なるものは、社會の不合理を解剖批評する上に、又社會を改革せんとする目標を定むる上に、更に又改革をなす方法に對して、全然科學的態度を欠如してゐるのである。

智識階級が民衆の反逆運動に投ずるのは、要するに人間が本然に有する此二つの性質、而も其二つの性質は、特に境遇上智識階級に屬するものに於て鋭どく磨ぎすまされ、それが社會の現實に觸れてその必然の光を放つが故であると思はれる。彼等は虐げられたる民衆に涙をそゝぎ支配者の極まりなき暴虐に義憤じ、社會制度の不合理に理智の眼を開いて社會運動の本流に身を投ずるのである。

(4) 智識階級の歴史的使命

勞働者階級、農民階級は社會運動即ち階級闘爭の本隊であるが、智識階級のそれはこれが補助役である。要するに參加するのである。前者の社會運動をなすのは、その社會的な地位境遇生活が必然に彼等をかつて階級闘爭をなさしめるのである。彼等は彼等の苦痛に滿てる生活から脱せんがために先づ起ち上るのである。若しも彼等の運動が人類の生活の進化の上に歴史的使命を有するものであるとしても、それは一個の偶然な符合である。彼等は恐らく、それが進化の歴史的使命を有すると否とに拘らず、又理論に合すると否とに拘らず、彼等の現實的な苦痛の生活それ自身の上から、彼等を搾取し虐ぐる者に對して反逆せざるを得ないであらう。彼等の戰ひは彼等の階級がその脊に負ふ必至の階級的運命である。併しながら智識階級の夫れは彼等の生活夫れ自體から來る必至の階級的運命からではない。彼等をして之れに加はらしむる原因は前に述べた如く、境遇上特に彼等の中に發達した理智と、純な感情とである。そこで智識階級は決して、勞働者の如く全階級を擧げて運動にたづさはる事はない。そして夫れは不可能な事である。只だ少數の選ばれた者が階級闘爭の陣列に身を投ずるのみである。殊にその階級闘爭が革命的色彩を帶びる場合、或ひは又その運動が智識階級個有の生活を棄てゝ勞働者階級と生活を共にせざるべからざる場合の如きは、之れに參加するものは愈々少數となるのであ

る。

併しながら此少數智識階級の參加は、社會運動の歴史の中に重大な使命を有するのである。そして夫れは過去に於ける社會運動史が事實の上に明かに示し、又今日に於ても、恐らくは明日に於ても然るであらう。彼等の或る者は勞働者階級が擧ぐる反逆の運動に鋭どく正しい理智の光りを投げて、社會組織の不合理と非人道とを指摘し、その運動に意義を與へ、目的の合理的使命を明かにした。彼等の或る者は又、鬪爭に方法と戰略とを與へて戰ひを最も有効なる勝利に導く事を敎へた。彼等の或る者は又、自から反逆の實際戰の陣頭に立つて、勞働者階級の先驅者となり、指導者となつた。そして運動を押し進め、革命を指揮した。而してこれ等の重要な事柄は智識階級が此の運動のために求められ、又なさねばならぬ必然の使命なのである。何故ならば、社會のどん底に壓しひしがれて、知識の光りを奪はれた勞働者階級にとつては、斯かる役割は殆んど不可能なことに屬するに反して、智識階級に執つては、その性質上最も適當な役割であるからである。そして恐らくは、斯かる役割を社會運動の上に果すことは、智識階級が人類に對してなさねばならぬ必然な義務と云ふべきであらう。そして夫れは又、智識階級が人類の社會生活の必然的進化に對する歴史的使命である。階級としてその全體が此運動に參加することの不可能な智識階級は、知られざる意志の力に依つて少數者を選み、夫れ等の者を渦中に投じて、脊負はされた歴史の役割りの義務を果すのである。

(5) 其長所と欠點

知識階級から出でゝ社會運動にたづさはる者の一般的な短所と長所とは、畢竟するに勞働者階級と異なる知識階級夫れ自身の特殊な境遇、生活から裏付けられた必然的な結果に外ならない。そして彼等の長所をなす原因はやがて又短所をなす原因となるのである。彼等の考へ方が往々にして觀念的であり又空想的である事は、總て彼等の出發點が理智の上にのみ立てる事を物語つてゐるのである。而して彼等の運動が所謂現實に溺れずして、眞直ぐな道を進み得るとするならば、それはやがて又、彼等の出發點が理智の上に立つてゐるからである。又彼等の運動が眞に犧牲の精神に燃えるとするならば、それはやがて、彼等の運動が純眞な人道的感情の上に立てるを物語るものであらう。けれ共、その反面に於て、容易に失望し幻滅し飽き果てて、戰ひの中から其姿を消すとするならば、それはやがて彼等の運動が生活そのものに根據してゐない事を物語るものであら

う。そして又彼等の或る者が徹底せる革命家となり、又或る者が徹底せる妥協者となるも等しく其境遇的な出發點に原因するのである。

(二) 日本に於ける智識階級の運動

(1) 其時代的區分

(A) 總説

現在までに經過した日本の智識階級の社會運動を、時代的に區分して見るならば、凡そ之れを五つに區分する事が出來るやうに思はれる。第一は先驅時代である。第二は黎明時代である第三は革命的突進時代である。第四は幻滅時代である。第五は科學的、現實的大衆運動の開始時代である。私は我國に新らしい意味の社會運動、即ち社會主義的な運動が勃興してから、未だ幾何の年月も經過してゐない事を知つてゐる。實際、幸德秋水、片山潜、堺利彦氏等に依つて代表さるゝ先驅時代はしばらく別として、大正七八年の頃を起點として日本をとづれた社會運動の黎明以來、大正十四年の今日に至るも、其間に經過した年月は僅かに七八年の事である。今、私は此短期間を四つの區分に分けたのであるが、恐らくは、今後十年二十年三十年の後に至つて新らしく我國の社會運動史に筆を染むる人は、之等の區分を總稱して黎明時代の一區分の中に入れるであらう。そして夫れは又至當な事であらう。併しながら又、此期間はしかく短かゝつたとは云へ、我が國の社會運動の背景をなす特殊の事情、例へば我國が後進國であるがために、又地理的に特異な事情にあるがために惹起された、特殊な壓縮された複雜な社會の進化は、その儘社會運動の上に反映して、之れを壓縮された複雜なものとなしてゐることは否みがたい事である。

實際我國は、經濟的發達の點、即ち資本主義發達の點に於ても、政治的發達の點に於ても、而して又思想的發達の點に於ても、之れを歐米の先進國が非常な長年月の間に、順序を追ふて經驗し來つた事を、極めて短日月の間に壓縮して經驗したのである。而して斯かる事實は社會運動の上に於ても異なるところはない。我々が過去十年足らずに經驗した事は、恐らくは夫れは幾分畸形的なものであつたらうとは云へ、過去に於ける歐米先進國の長年月の經驗の壓縮された模型であつたであらう。そしてその時間の壓縮されたところに無理が生れ、幾分の畸型が生ずるのは蓋し免がれ難いところなのである。

實際德川幕府が倒れてから後約半世紀の間に日本の社會が遭

過した變化は如何に複雜急激なものであつた事だらう。夫れは物質文明の點に於ても亦精神文明の點に於ても。そして此の短い期間に於て、全社會に深刻な影響を與へねば置かない外國との戰爭を四度びも繰り返してゐる。此間に資本主義は漸次に駸足を延ばして、日清日露の戰爭を經て、世界戰爭に逢着するに及んで最大急速の發達を遂げた。資本主義とは形と影の關係にある社會主義運動勞働運動も亦その思想上の點に於て、實際運動の點に於て之れと異なるところはないのである。自由民權の時代を經、日露戰爭を機緣にして萠芽した社會主義運動勞働運動は、更に世界大戰の開始後に至つて、好景氣に伴ふ資本主義の最大急激な發達と共に、俄然勃興して、一般的な大衆の現實運動となつて來た。而して世界の大戰が惹起した歐洲諸國の社會革命的氣運は、漸く大衆的に勃興し發芽し來つた黎明期の運動に夢を與へて、一個急激にして而も極めて幼稚な景氣のいゝ革命の行進曲をかなでしめたのである。歐米先進國に於て、長き期間の間に、それ〲の社會の事情に從つて發生し發達し來つた多くの社會思想は、算を亂し、勢を決して、一時に侵入し來り我我の前に目まぐるしい渦を卷いたのである。

社會主義、無政府主義、デモクラシイ、サンジカリズム、ボルシエビズム、ギルドソシアリズム、ニヒリズム、テロリズム、勞働組合主義、國家社會主義、社會民主黨、勞働黨、IWW、而して又、英吉利流、獨逸流、佛蘭西流、伊太利流、亞米利加流、露西亞流、曰く何、曰く何。

あゝ何たる百花の爛漫さだ。撰り取り見取り、我々はどれに飛びつき、どれを取つて自分の胸に飾つたらよかつたのだらう。日本の社會が、そして又自分の足が、今何處に立つてゐるか等と、そんな現實的な科學的な面倒臭い事は勿論考へる餘裕はない。たゞ之等一切の思想の表面の概念を頭の中でぐる〲と渦卷かせ、革命の夢を信じまれに醉ひながら、次ぎから次ぎへと、棄てたり拾つたりしながら、一散に景氣のいゝ方に驅け出せばよかつたのだ。當時に於ては我々の先輩の社會主義者の諸君にして尙ほ且つ然りであつたのだもの！

併しながら、之等社會運動の好景氣時代は時を待たずして沒落し去つた。世界は擧つて不景氣の襲來に逢着した。一時壓倒的勢力を以つて全歐洲を席捲すると思惟された社會革命の夢は、唯一つ露西亞を殘して破れ去り、反動勢力は再び其黑い頭を擡げ始めて運動にも幻滅時代が來たのである。足の地から浮き上つた、而して又自分の心の中にも、思想の上にも、確乎たる根據を有しなかつた智識階級の運動は概ね雲散霧消せざるを得なくなつたのである。けれども我々が茲に記しておくべき事は、

社會運動の世界的進展は、日本の幻滅時代を長く繼續せしめずして、其廢墟の上に直ちに次ぎの積極的時代を開始せしめつゝある事である。然らば此變轉極まりなかつた時代を經過して、今開始されんとしつゝある運動とは何を指して云ふのであらうか。夫れを一言にして云ふならば、現實に立脚せる科學的な運動である。思想の上に於ても、方法の上に於ても、何が正しくして、如何にすればその運動を成功に導く事が可能であるかを充分に考察して、その上に進行せんとする運動のことである。今はすべてのものが其本質を明かにせられ、統一せられて、それ〳〵の根據の上に確然たる進行が開始せられんとしつゝある秋である。

それにしても此僅かな歲月の間に　主として東京をその舞臺とする社會運動の線上に、如何に多くの智識階級がその華々しい姿を現はし、又消え去つた事よ！

私は以下、之等の變轉を各時代に區分して今少しく詳細に其有樣を解剖して見よう。けれ共　私が前に擧げた區分の中の一つである先驅時代の事は、直接私の關せざるところであるからして、こゝにはそれを略する事とする。本誌の讀者は、多分、その時代の事に就ては、本誌に連載しつゝある先輩堺氏の『堺利彥傳』の中に、その詳細を知る事が出來るであらう。

（B）黎明時代

一九一四年、即ち大正三年六月に勃發した世界大戰は、その進行に從ひ、社會上思想上、日本の社會に向つて種々重要な刺戟と影響とを及ぼした。社會上の影響は取りも直さず世界大戰に依つて惹起された最大急激な資本主義の發達であり、夫れに伴ふ勞働者階級の夥たゞしい出現である。思想上の點に於ては先づ第一に、獨逸の官僚的軍國主義侵略的帝國主義に對する聯合國の民主的反軍國主義平和主義人道主義の叫びであり、第二には、戰爭の終局に近づいて、現實の上に現はれ來つた社會主義の叫びである。そして之等の思想は、次第に高調して來た資本主義の社會狀態を背景にして、眞理を求め、純な理想に生きやうとする智識階級の青年に向つて、激しい刺戟を與へたのである。

當時の日本の青年智識階級は此日本を訪問れた新時代の潮に對し、如何に動かんとしつゝあつたであらうか。長い間、官僚の養成所を以て目せられて來た智識階級の淵源たる帝國大學は、此新時代に對し如何に動かんとしつゝあつたであらうか。多年軍閥と提携し並立して來た官僚萬能熱は、資本主義の發達と共に漸く所謂實業熱成功熱にその席を讓らんとする形勢とな

つてゐた。高等文官試驗に熱中した多くの學生青年は、今や自己の赴かんとする會社の品定めに浮身をやつすに至つたのである。併しながら斯かる社會的新現實は其反面必然的に青年の思想を新方面に導いた。夫れは取りも直さず官僚軍閥の專制的思想に對するデモクラシイの思想であり、自由主義人道主義平和主義の思想であつた。そして、此等の新らしい思想の叫びは帝國大學に於ては吉野博士を中心に、早稻田大學に於ては大山郁夫氏を中心にして、官僚的舊思想に猛烈な戰ひを挑みながら其勢力を急激に進展せしめて行つたのである。其生命を失ひながらも、長い間青年をその現實の上に引き摺つて來た官僚的軍閥的思想は　眞實を求め純な理想に燃ゆる青年學徒のために、弊履の如く棄て去られた。

併しながら此時日本を訪問れた新時代は、その新時代をしてたゞに、自由主義の思想デモクラシイの思想に移らしめるに止まらなかつた。既に歐羅巴に於ては爛熟期に達し、而も世界戰爭の進展に從つて次第に濃厚の度を增し、遂に露西亞に於てその最後的高調に達した社會主義革命の思想は、デモクラシイの思想にめざめた青年智識階級をして、まつしぐらに社會主義の思想とその運動とに投じ去つたのである。殊にレーニン等に依つて代表さるゝ露西亞革命の思想は　如何に大膽に率直に資本主義社會の罪惡と理想社會とに對して、明快なる解剖と目標とを現實の上に示した事であらう。彼等は勞働者階級の悲慘、罪惡極まる國際戰爭、今迄一個の絕對に置かれてゐた國家、總て之等資本主義に關する許すべからざる社會的罪惡、即ち人類生活の誤謬の依つて起る原因と、之れが絕滅の方法とを深刻なる現實的方法を以て人類の心に刻りつけたのである。帝國大學や早稻田大學を中心とする新時代にめざめた青年智識階級は　踵を接して來つた社會主義思想が代表する更に新らしき時代の精神に魅せられ、ひたすらに之れに向つて突進した。その狀は恰かも梅と桃と櫻とが相次いで、或ひは同時に開き來つた有樣である。

彼等の或る者は、曾て露西亞の青年智識階級がなした如く、勞働者階級の中に身を投じてそこに社會主義の運動を開始した。又彼等の或るものは智識階級それ自身の團體を組織して、筆に口に行動にその活動を開始した。

社會運動の扉が、青年智識階級の手に依つて新らしく全社會の中心から開かれたのである。世界大戰の開始を機緣として漸次擡頭して來たデモクラシイの新時代は、大正六年に勃發した露西亞革命を一轉期として更に躍進して社會主義の新時代へと突き進んだのである。

黎明！黎明！新時代の黎明！眞に夫れは若かい智識階級の痛烈な叫びに依つて呼びさまされた、社會運動の、そして又全社會の黎明時代であつた。既に世界大戰を機緣として高調して來たデモクラシイの叫びは、大正六年の露西亞革命を經て、大正七年八月の米暴動の突發するに及んで、愈々白熱化して行つた長谷川如是閑、大山郁夫、鳥井素川が大阪朝日に立てこもつて、官僚軍閥の保守思想に猛烈な戰ひを挑みながら、新時代の到來を告ぐる黎明の鐘をつきならしたのも其頃であつた。帝國大學を根據とする吉野博士が、彼の保守思想をかつぐ浪人會と戰つて彼等を擊破したのもその頃であつた。吉野博士對浪人會の衝突を機緣として、新思想を抱く多くの學者思想家が集つて、黎明會を組織したのも大正七年の暮れの事であつた。その以前、既に官僚養成の金城鐵壁を以て目せられてゐた帝國大學は、早くも内部的崩壞の機運に向つてゐたのであつたが、黎明會の出現は、更に此機運に油を注いで、大正八年に至つては、其劈頭に於て、帝國大學の若かき青年學徒の手に依つて社會運動の勇ましき第一聲が公然としてあげられた。そしてその中には先驅して早くも社會運動に其身を投ぜる幾多の若かき法學士等が來り投じたのである。長き年月、官僚思想の巣窟として固くその傲然たる鐵の扉を内に閉ざしてゐた帝國大學の門が、玆に初めて民衆に開かれたのである。(新人會創立以前、帝國大學の卒業者にして社會運動に身を投じてゐたのは殆んど全部、露西亞革命の勃發した大正六年度の卒業生であつた。例へば、佐野學、棚橋小虎、綱島正興、河井榮藏、麻生久の如き。そして私は最近に至つて布哇と上海とから同じく社會運動に身を投じてゐる未知の二人から手紙を受け取つたのであるが、此二人も期せずして大正六年度の卒業生であつた。これを見ても露西亞革命がその年の卒業生に如何に深刻な影響を與へてゐたかが窺かはれるのである)社會運動に向つて其扉を開いたのは只に帝國大學のみではなかつた。常に民衆運動に向つては其中心をなし來つた早稻田大學の學徒は、大山郁夫、北澤新次郎等を先導にして烽火を擧げ、大正八年五月に至つて、民人同盟の創立に早くも社會運動の第一聲を發したのである。

而も之等青年智識階級に依つて一齊にあげられた新思想の叫びは、も早、人道主義やデモクラシイの中に止まつてはゐなかつた。

彼等は黎明會に依つて代表さるゝデモクラシイの思想、人道主義の思想、社會政策的思想を突破した。そして彼等が一歩先きに踏み出したその思想は取りも直さず階級闘爭の手段を以て、資本主義の社會を倒壞し、勞働者の社會を建設せんとする

社會主義の思想であつた。而して彼等は單に社會主義の思想を只に思想として抱いたばかりではなかつた。露西亞革命に依つて卷き起された西歐一帶に亘る社會革命的氣運に刺戟せられて、彼等は又自己の住む國に於ても之を直ちに實現せんと欲したのである。そして又實際彼等はその幼稚にして純情な頭の中に、社會革命の即時的可能と、理想社會のたちどころなる出現とを容易に確信してゐたのである。

斯くして、社會運動の黎明の鐘は高くもつきならされ、その扉は青年智識階級の手に依つて開かれて行つた。その時、彼等の運動は既に社會のどん底から頭をもたげ始めてゐた、勞働者階級の本流的運動と相關し合體して行くべき運命に進んでゐたのである。

（Ｃ）突進時代

斯くの如く、長い間官僚閥族の奴隷として固く内に閉ぢられてゐた大學の鐵扉が開かれて、そこから新時代の黎明にめざめた青年學徒が、揚々として社會運動の赤旗を高く押し立てながら社會の眞中に雪崩れ出た時、彼等は彼等の生れ出て來た別個の方面から、等しく社會運動の大旗を押し立てゝ進み來る智識階級の運動者の一團を發見したのである。其大旗の色は彼等の赤旗よりも更に眞紅の色をなしてゐた。そして又その旗は彼等の長き苦鬪の歴史をその儘表徴して、激戰のあとを忍ぶ、破れ裂かれたる古色の權威を示してゐた。彼等の一團には、前者の如き單純さと、純眞さと、溌溂たる若か〳〵しさはなかつた。けれ共その中には先驅者の戰ひぬける深刻なる權威があつた。彼等の輪廓は前者の如く大衆に向つての彈力性を持つてはゐなかつた。けれ共その代りに彼等の輪廓は、確然として、其姿は民衆の上に明かに描き出されてゐた。彼等は、今將に前者が進み行かんとする思想に對し、はた又其行動に對し、彼等自身の思想を以て、彼等自身の行動を以て、彼等自身の名を以て、明かに其目標を示してゐたのである。

これ等の一團こそ、まことに日本の社會運動に先驅して身を投じ、惡戰苦鬪の巷に生き殘つて來た、智識階級の運動者の一團であつたのである。その中には堺利彦の名があつた。山川均の名があつた。大杉榮の名があつた。荒畑寒村の名があつた。高畠素之の名があつた。片山潛の名があつた。

之等の一團は、彼の幸德秋水等の所謂大逆事件以來、峻烈なる壓迫の痛手を蒙つて社會の底深く埋もれながらも、先驅せる社會主義運動の命脈をつなぎ來つた一團であつた。そして今、新らしく日本を訪づれた社會運動の黎明期に際會して、再び其

姿を社會の表面に現はし來つたのである。彼等は明かに此白熱し行く新時代に對して、又擡頭して來た社會運動の青年智識階級に對して、強い魅力と指導力とを有してゐた。そして又夫れは極めて當然の事であつたのである。思想的に云へば、彼等の中には社會民主々義らしい傾向を抱く者もあつた。サンヂカリストらしい傾向もあつた。無政府主義者らしい傾向の者もあつた。國家社會主義者らしい傾向の者もあつた。ボルシエビツキーらしい傾向の者もあつた。併しながら彼等は未だ其思想傾向を判然する事なく、日本に於ては一般より慣習的に社會主義者と呼ばるゝ輪廓の中に同一戰線の一團をなしてゐた。そして他の何ものにも增して其特徵とするところは、世間から見て危險と思はれてゐる事と、彼等自身から考へて革命的であると云ふ事であつた。

大正八年の秋に至つて、此異つた出發點から社會の表面に現はれて來た二つの智識階級の運動の流れは、漸次に相接近して思想的にも團體的にも相包合せんとするに至つた。此時、之等の或るものは既に勞働者階級の中に潜入して其勢力をも加へてゐたのである。

抱合して將に一つとなつた之等二つの勢力は、大正八年末から九年にかけて、旭日の勢ひを以て左へ〳〵へと突進を續けて行つた。彼等は明かに勞働者革命の近かきを信じ、革命を招來すると思はるゝ一切の左傾的手段を……勿論それは幼稚なる觀念的手段ではあつたが……又左傾的思想を、何の顧慮するところもなく摑んで行つたのである。ストライキは寧ろ破るゝを以て幸ひなりとした。何故ならばそれは勞働者階級の反逆心を强むるが故である。彼等は寧ろ勞働組合を無用有害なりとした。彼等は又政治運動殊に議會運動を以て等しく有害無用なりとした。何故ならば、それは運動を妥協的ならしめ墮落せしめて、革命の招來を阻害するからであつた。彼等は又街頭に於てストライキに於て警官と衝突して檢束され投獄せらるゝを以て最も重要有効なる事となした。何故ならば斯かる行爲は模範的反逆であつて革命を招來する最も有効なる手段と考へられたからである。

斯くて此白熱的突進時代は、此間多數の青年智識階級を其列に加へ、多くの團體を成立せしめながら大正九年七月に至つて、遂に社會主義同盟なる一團體を出現せしめた。その發起人に名を連ぬる智識階級には次ぎの如きものがあつた。

赤松克麿、荒畑勝三、麻生久、橋浦時雄、服部濱次、岩佐作太郎、加藤一夫、加藤勘十、近藤憲二、大庭柯公、小川未明、岡千代彥、大杉榮、堺利彥、島中雄三、高畠素之、高津正道、川

村太秀、植田好太郎、和田巌、山川均、山崎今朝彌、吉川守邦、等。

之等の發起人の他に極めて多數の智識階級が此運動に參加したのは言を俟たざるところである。

此左傾的運動の大勢は社會主義同盟の成立のみに滿足する事は出來なかつた。彼等は此同盟に對し官憲の迫害を切り拔けて徐ろに成長せしめんとするよりも、たとへそれが解散せらるゝも寧ろ正面から之れと衝突するを以ていさぎよしとなしたのである。同盟は同年十二月十日神田青年會館に創立大會を開いてより、數回の官憲との衝突と幾多の犠牲者を出した後翌年五月二十八日に至つて突如官憲のために解散を命ぜらるゝに至つた。

而も此大勢は止まるところなく進行して行つた。極端に偏狹なる革命的サンジカリズムの思想は、遂に、勞働運動に身を投じたる智識階級を以て、勞働者の革命的精神をにぶらし、その招來を妨ぐるものとなして、智識階級排斥の叫びが擧げられて來たのである。そして此大勢は大正十年の初頭に於て最高調に達し其餘勢は殆んどその年の暮るゝまで繼續せられ、その掉尾として盛んに軍隊宣傳をなした所謂曉民共産黨の秘密結社事件を惹起して、多くの者は投獄せらるゝに至つた。

彼の森戸辰男、木村久一の二氏が、一つは無政府主義、一つはボルシエビズムを宣傳せるの故を以て朝憲紊亂の罪に問はれ、投獄せらるゝに至つたのもその時代の事であつた。そして又山川菊榮、堺眞柄、仲曽根貞代、久津見房子等の手に依つて婦人の社會主義團體たる赤瀾會が生れて活躍したのも其頃の事であつた。

之れを要するに、此時代は、恰かも山を下る河流が奔激して落るが如く、新時代の流れは、自分の足もとを顧みる事なく、たゞまつしぐらに止まるところを知らず流れ下つて行つたのであつた。歐米先進國の社會が長き期間に亘つて築き上げて來た社會思想に關する理論と方法とは一時に飜譯輸入せられて、社會運動の市上はこれがために旋渦を卷き起したのである。

（D）幻滅時代

『今や、萬人悉く神ありて其生命の中に降臨せるを覺え、生靈の奥底に聲ありて、過去の要求に應へ、吾人の情緒に向つて、不和と爭鬪とを呼ぐの時代は來れり。ここに斯かる時代に生を享せたるものは幸ひなるかな。吾人は斯かる時代に生くる事を許されたるを神に謝せん」

これは嘗て我等の勞働階級が人類解放を以てユートピア實現の

目標なりと信じて激烈なる運動を開始し、今や其目的が到達せんとして人心が情熱の最高頂に達し、緊張し興奮したその氣持を、當時の偉大な操觚者カトコフが云ひ表はした言葉である。その時代と目標とは異なるにせよ。露西亞革命を眼前にして、社會革命到來の近かきを信じて突進した時代の日本の青年智識階級の氣持ちは恐らくは之と異なるところはなかつたであらう。

併しながら、千年の月日は一日に進まず、資本主義の根底は深くしてユートピアの來るは遲れ勝ちである。現實のどす黑い鐵壁は、青年の夢と情熱と興奮とを打ち碎いて幻滅の谷に突き落すのに容赦はない。

社會革命即時到來の夢を共背にのせて、たゞまつしぐらに突き進んで來た青年智識階級の運動は大正十年の暮れから十一年に至つて幻滅時代に逢着し大正十二年六月關東一帶を襲つた大震災に至つて共餘勢も止めを刺されたのである。けれ共斯くの如きは極めて當然の成り行きであつて、その運動が未だ革命の即時可能の夢を背に乘せて走りつゝある時、既に幻滅に至るべき原因はその走り行く足元に累積してゐたのである。

大正六年を起點として卷き起された歐羅巴の社會革命の運動は、たゞ一つ露西亞を殘して如何なる方向に進みつゝあつたであらうか。間もなく全世界に襲來した不景氣は、如何に一時危ふく見えた資本主義の陣營を建て直して、勞働者階級に對する逆襲の戰備をとゝのへつゝあつたであらうか。大正八年を以て好景氣の頂點とした我が國の財界も亦大正九年三月に至つて、俄然恐慌に襲はれてゐたのである。

けれ共彼等を幻滅に導いた原因はたゞに之等の外的事情のみではなかつたのである。彼等が共運動の思想的根據とする理論は果して、透徹した確固たるものであつたのであらうか。未だ共眞意を解せざる皮相淺薄なものではなかつたか。彼等は果してマルクス主義なるものをさへ眞に理解してゐたであらうか。

彼等は又果して社會革命を實現すべき手段方法に對して、確固たる理論と信念とを有してゐたであらうか。彼等は果してどれ程深く無產民衆の中に喰ひ入つて、どれ程多くの者をそのどん底から動かし得てゐたであらうか。その運動は、實は上つすべりな動搖常なき、少數者のヒステリカルな運動ではなかつたのか。彼等の運動は翻譯的氣分に陶醉して、自分の動かさんとする日本の社會に對して理解を欠げる運動ではなかつたのか。彼等は口に科學的社會主義者と稱しながら共實、非科學的ユートピアンではなかつたのか。

その原因はともあれ、一種の幻滅時代は日本の社會運動の上

に、そして又殊に止まる事を知らず進み來つた青年智識階級の上に突如として落下し來つたのである。そこで彼等の或る者は幻滅してその戰線から姿を沒した。彼等の或る者は現實の深刻な流れのために其戰線から押し流されて其姿を見失つた。彼等の或者は襲ひ來る現實の迫害と勇敢に戰つて倒れた。テロリズムに走つたのである。そして幻滅の中になほ一縷の生命を保つて來た餘勢は、大正十二年の春、所謂日本共産黨秘密結社事件が曝露して多くの智識階級の運動者が投獄せられ、續いて其年の九月一日に勃發した大震災が幾多不幸なる反動的事件を齎らすに及んで、夢の如く消え去つた。社會運動の十字街は、その血ににじむ深刻な姿の儘に、彼等の眼前に現はれたのである。

(E) 大衆的運動の開始時代

『社會が斯くの如く頑固にして改造すべからずとせば吾人は寧ろ進んで之を破壞せん。吾人は吾人の理想を實現する事能はずんば、寧ろ之を蹂躪し、寸斷し、剿絶せん。吾人は吾人の理想宮を地上に建つる事能はず、然らば吾人が描ける理想宮の圖案を破棄し、更に天をも破棄せん。一切を破壞せば或ひは其破壞の跡より新世界の出現する事あるやも知るべからず。然れ共そは吾人の關ふところに非ざるなり。吾人の目的とするところは、現状の儘の世界を破壞するにあり。更に一切の未來、及び改良せられたる世界を思ふ希望をも併せて之を破壞せん』

こは、露西亞に於て農奴が解放せられたる後、理想社會出現の夢が破れ、多くの智識階級の社會運動者が幻滅して失望落膽其極に達し、遂に虚無主義の運動に變じて行つた時の虚無主義者の宣言である。

併しながら、世界の社會運動の歴史は其時から既に六十餘年を經過してゐる。幻滅した日本の智識階級が、失望と落膽との余り一切を否定して虚無主義者となるためには、時代は余りに明かるく、光りは余りに近づき過ぎて居る。彼等の前には、尚ほ且つ彼等の明かなる理智を働かせるならばその光りに向つて近づくべき道が開かれて居るのである。たゞそこに必用とされるものは、明確な科學的理智の力を以て、その正しき有効なる道を發見して更に新らしき戰ひに門立つ事のみである。

幸ひなる哉、彼等は其理智の力を以つて幻滅の廢墟の中から失敗の經驗を拾ひ、其苦がき經驗の中から新らしく彼等の進む道を發見したのである。そして彼等は今や科學的理智の上に立つて、明確な思想的根據のもとに、又最も有効なる方法のもとに、再び新らしき戰ひの門出に立たんとしてゐる。

今や黎明期以來の混沌として錯綜してゐた社會改造の新思

想は、次第に其本質を明かにし來つて、其最も正當なるものが社會運動の本流の指導的思想となり、然らざるものは傍系となつた。運動の方法に於ても方向轉換が叫ばれ、政治運動の道は明かに開かれた。フエビアン協會が新らしく生れ、政治研究會が名乘りをあげた。彼等は新たに運動の陣容を現實の上に建て直して、社會運動を眞に大衆の上に置き、新らしき戰術を以つて再び戰ひを開かんとしつゝあるのである。

玆に注目すべき事は、黎明時代以來、社會運動の陣列に身を投じた一團が、今幾多の曲折を經て、今再び新らしき戰ひの陣容を建て直した時、更に別個の方面から若か〲しい青年學徒の一團が之れに加はり來つた一事である。黎明時代の高調した潮に棹さした一團が、寧ろ夢の如き理想と情熱の上に立つてゐたに對して、今新らしく加はり來つた一團は寧ろ冷やかな科學的理智の上に立つてゐるのである。前者が空想的であつたに對して後者は著しく現實的である。前者が著しく先驅者的、英雄的、戰鬪的であつたに對して、後者は外面平凡人の如く又事務家の如く見える。前者が著しく熱狂的であつたに對して後者は著しく冷靜である。前者の立場が著しく華々しかつたに對して後者の立場は極めて地味である。彼等は先づ學生たる彼等自身の立場を考察し、次で今日の社會運動上に於ける彼等の持場を觀察し、最も可能にして有効なる方法を以て之れに參加せんとしつゝあるのである。彼等は其運動の方針として次ぎの如きモットーを揭げてゐる。

(一)新中間階級の豫備軍たる學生を支配階級より切離す運動たる我々の運動は、先づ大衆的でなければならぬ。眞面目な學生の支持を受けるものでなければならぬ。

『少數者のグループより大衆的組織へ!』

(二)學生を支配階級から切離す唯一の方法は、社會科學の注入普及にある。それを除いては學生大衆の獲得は不可能である。

『社會主義の普及より社會科學の普及へ!』

(三)大衆の教育は、當面の利害を教材としなければならぬ。社會現象、從つて社會科學に冷淡である學生大衆を、我々の分野に引き入れるためには、彼等と共に學生當面の利害のために戰はねばならぬ。

『學生消費組合の運動、學生自治權の獲得運動、研究の自由、大學擁護、等の標語のもとに學生大衆と共に戰へ!』

之れを數年以前、彼の新人會が運動の方針として揭げた標語

(一)吾徒は世界の文化大勢たる人類解放の新氣運に協調し、之が促進に努む。

（二）吾徒は現代日本の正當なる改造運動に從ふ。

と比較する時、此數年間に於ける時代の變化が目に見る如く窺はれるではないか。彼等はたゞに學生運動の中に活動するに止まらず、或ひは勞働者の教育運動に、或ひは宣傳運動に彼等の力を可能に從つて働かせつゝあるのである。彼等の運動は最近旭日の勢ひを以て發展し、支配階級をして戰慄せしめつゝあるのである。是等青年智識階級の一團こそは、社會科學研究會、或ひは學生社會科學聯合會の名に依つて代表されてゐる一團である。

今は、日本に於ける智識階級が社會運動に對する三度目の門出の時機に遭遇してゐる。新らしく其陣容を建てかへ、更に新らしき一團を其陣列に加へたこの運動が如何に進み行くかは今後の問題に屬するのである。

（附記、私は限られた紙數の中に複雜な歴史をいつぱい詰め込んだので全體が非常に概念的な稀薄なものとなつた事を痛感するのである。が、今は止むを得ない。何れ又、私の記憶を辿つて出來る丈け詳しい此時代の記錄をつくるつもりである。）

私の切實な問題

相續法の改正

平野義太郎

相續法の改正です。

親族法改正について、その審議を終えた法制審議會では、今秋からいよいよ相續法の改正に移るといふことです。無論、その審議は相續權そのものの存在を當然自明のこととし、それを前提としてなされるのでせうけれど、相續權そのものの理論的基礎は國民の一人として、現時、最も愼重に充分に考慮すべきことと考へられます。そこで、第一に、相續權が絕對的な個人所有權の延長だといふことは、社會福祉のためには制限せらるべきです。しかし、このことは、既に今回稅整案における相續稅率の累進制が、たとひ相續稅の形においてであれ、それを示してゐるので、制限は相續法の改正に對しても亦重要な意味をもつものです。

第二に、その點から離れ、いはゆる家族制度を中心として考へてみても、現行法のやうな「無限相續」は、果して、家族制度の本旨を全うするものか。祖先の祭祀のためでも、家系の連續のためでもなく、反對に、單に財產相續のためにのみ、あかの「他人」が無理にひつぱつて來られるのは(民九八五條)、決して家族制度の本旨を全うする所以ではありません。むしろ、相續人の範圍を嚴密に法定し、狹められた範圍においてのみ法定相續を許す方が該制度の本旨を全うする所以となりませう。したがつて、相續人のない相續財產は、當然公共社會のために有用に處置されるべきことにもなります。

丸を握つて

高畠素之

私にとつて最も切實な問題は、私の心に發動する諸欲望の中で最も切實に力強く擡頭したものを充足せしめることである。然らば如何なる欲望が私にとつて最も痛切に發動するか、といつたところで、そんなことは時と場合に依ることだから一概には斷定できない。每日にも變はれば、一日の中にも走馬燈の如く千變萬化する。いま此雜文を書ゐてゐる一刹那についていへば、早く結論まで書きなぐつてしまふことだけが、私にとつては唯一の切實な問題だ。

いま少し大きな期間を標準としていへば、現在やりかけてゐる仕事を一刻も早く片づけて、せい〳〵した氣分になり、ゆう〳〵と次の仕事の段取りに入りたいといふことだ。然しそれ迄の間には、また色々な欲望が發動して來て、瞬間的には屢々このヨリ永續的な欲望を壓伏してしまふ。腹がすけば、食ひたいといふ欲望が最も切實で、その瞬間には仕事もへちまもない。國家もマルクスも陰が薄くなつてしまふ。性欲の發動についても同樣だ。

然しそんなことを考へてゐる時に、たま〳〵癪に障つた野郎でも現はれて來ると、空腹や性慾にも發動の餘地を與へないほど緊張して、何はさて措きその野郎をやッつけてといふ欲望が最も切實に發動して來るといふやうなこともある。これは鬪爭慾とでもいふか、優越慾とでもいふか。思惟に熱中した瞬間や、芝居、キネマ、雜談、酒（これは餘りない）、犬の仕合などに沒頭した瞬間も、略々同じ。これは知識慾、藝術慾、趣味慾とでもいふか。

かくの如く、これ〳〵の瞬間に最も強く發動した欲望を充足することが、私にとつて最も切實な問題だとする意味に於いて、私も一個の刹那主義者だらうが、然し私にも何か斷續的ながら最も長期的に本質的に一貫した欲望があるらしくも思はれる。これは私の有つてゐる主義主張を實現させたいといふ欲望だともいひ得るであらうが、これも欲望としては一種の優越慾に屬せしむべきであらう。

餘談はさて措き、前號中村還一君の文章を見ると、死んだ村木源次郎君が黄文社の樓上で僕にピストルをつきつけたとか書いてあるが、これはとんでもない誤報で、こんな事をいはれたんでは第一、死んだ村木君の靈魂も浮ばれまい。

村木君が片手に蓮根をぶらさげ、片手に數個の實彈を握つて黄文社に僕を訪れたことはある。ピストルをつきつけたなんていへば、發射を豫想することになるが、丸を丸藥のやうに握つてゐたのでは、つきつけやうもあるまい。思ふに、村木君の素振りでは、何しろ實彈もこれ此通りあることだから、これをいくらかに買つて貰ひたいといふにあるらしかつた。然し蓮根では話のしようもなく、いい加減にお茶を濁された次第だが、その後このピストルは何處やらの警察でお買ひ上げになつたといふ噂が傳へられた。

安樂に死ぬこと

正宗白鳥

「貴下に取つて目下切實である問題は何であるか」といふ質問に對しては、直ぐに立派な返事が出來さうであつて、その實なか／＼出來ないのである。

　腹の痛い時には痛みをのぞくことが何よりも切實な問題であり、原稿を書き悩んでゐる時には、何とかして早く書上げることが、最も切實な問題となるのである。

　さういふ譯で、私の切實な問題は、時により場合によつて絶えず變つてゐるだが、傍觀的態度をもつて批評したら、私も如何にしてよく生きんかと藻掻いてゐる生物の一人なのである。生きようと藻掻くのは生物の本性だから爲方がない。一個人の壽命に限りがあるばかりでなく、人類や世界や宇宙にも永遠性はなくつまりは滅亡を免かれないのだと確信しても、絶滅を、人間や國家の信條として日を過す譯にも行かないのである。蟻も蜂もその他の昆蟲の生活も人間の生活も同じやうなもので、やがて、波にさらはれるのを承知してゐながら、お互に砂山を築いてゐるのだ。

　私も青春の頃を懐しみ、若い人々を羨むことがあるが、しかし、も一度若くなつて世の中を渡つて來なければならぬと思ふと、何よりもさきに煩はしい思ひがする。假りに再び原稿生活をし直すとなると、再び雜誌社や書肆の侮蔑を忍び、世評に悩まされ、自己の才能に疑惑を抱き、同輩の反目に心を勞さなければならないので、かういふ生活は一度で澤山なやうに思はれる。外の稼業をしたつて、特別にいゝことがあらうとは思はれない。

「人生宇宙の眞相を知りたい」と、古來の賢者や哲人の心掛けてゐたことを願つて見たつて、人間がそれ／＼心の中で空想してゐる以外に、宇宙の眞相が何處に存在してゐる譯でもあるまいし、どうかして安樂に世の中を送ることを、最も切實なる問題とする外爲方がない。

　この頃徳川時代の歴史を讀んで感じたのだが、あの老猾な家康が、有つてゐる限りの知慧を絞り出して、全國民を奴隷にしても一家の繁榮を維持しようと企んでさへ、辛うじて十五代を續けたゞけであつた。子孫の爲を計つたつて、子孫が何代榮えるのやら、前途は人智で分らないに極つてゐるのだが、生物の本能として子孫のことを考へて屈托しない譯に行かない。國家の前途社會の將來を苦に病むやうに、人類の頭がつくられてゐる。

　私には子も孫もないから、死後の一家の運命について考へるには及ばないが、縁があつてこの國に生れたのだから日本の國家社會について、多少苦に

病むことがある。文學藝術の尊重されだしたのはいいことだが、そのために、文學希望の青年がこの先ますく増加して、同人雜誌などが何萬何十萬と發行されだしたら、不生產的なことに國力を消費する譯だらうと案ぜられる。貧乏な日本が外國の贅澤を眞似てゐる今日の風潮も案ぜられる。時々東京へ出てカツフエーへ寄るたびに、耳新しい外國名の飲料が殖えて、高價なばかりでうまくもないのに、珍らしい名前を餌に客を釣つてゐるのを見て、私は國家の前途を案じてゐる。

私自身の身の上については、ひどい病氣に罹つて惱まされないで、安樂に死なれるやうにしたいものだと、思つてゐるが、つまりは私に取つて、それが最も切實の問題であると云つてもよからう。

石コロと豚の淚

辻潤

私は絶望の亡者かミイラのやうな人間なのです。眼は持つてゐますが、いつでも內側に向けられてゐるので、外界の物象があまりハツキリとは映じて來ないのです。

しかし、まだ死にたくはありません。

生物的意識と動物的精神を抱きながら大都會の泥沼で豚のやうに胃の腑をふくらませラジオを輕蔑しては斷髮に拜跪してゐます。それがよくないと云ふなら、御勝手になさいまし。

私は君が代も唱へば安來節もうたへばインテルナチョナルもうたふのです。

偶にローカルカラーを發揮して都々逸の一ツ位唄つたつていいぢやありませんか？

不景氣をいくら絶叫しても、御腹がすくばかりです。

そこで私にとつて切實の問題は、如何にして今日のよき日をよりよく生きんかと云ふことです。

バットを一プク吸ふことも一ツの喜びです一杯の冷水の味を知らない人間はだが隨分と不幸な人だと思ひます。更に私には一人の「永遠の女性」が存在してゐます。彼女に戀文を書くことを空想しただけでも胸が一杯になりますが、それと私が銀座の加六で菊正の盃に舌皷をうつこととは問題が又自づから別ではありませんか？

私の理想は「文明の沒落」などと云ふナマやさしいものではありません、人類永遠の平和と安樂とを冀ふために生物全體の撲滅をひそかに神樣と相談してゐるのです。

この計畫が惡魔に知れたら大變ですから、どうかみなさんもそのつもりでなるべく知れないやうに御注意下さい。

親友レミドグウルモン曰く――
賢者は唯だ一ツの信仰を有するのみ、そは自己なり。賢者は唯だ一つの祖國を有するのみ、そは生なり。と。

云つたつて僕が君になにも喜劇や飲酒や、放歌などの凡俗な自己主義を説くのだと思つてはいけない。自己、これが一個の世界を包容するに足るのだ。獸の外に孤獨なものはない。人間の感性は彼のみその廣袤を測り得る一ツの面積だ。一生物は往々幾多の生物を包容する、少なくとも測ツのものを包容してゐなかつたなら人間でもなければ多分動物でもあるまい。恐らく人間の足下にコロがつてゐる一個の石だ。眞の自我主義は一つの調和である。

グウルモンを馬鹿だと云ふのはどなたですか？

おまへよりも――ああそうですか、よくわかりました。しかし、實のところ路上の石コロを内々羨望しないこともないのです。

あなたは御子さんを御持ちですか？では愚かなダダイストと共にわが大日本帝國の平和を心から御希望下さい。

代議士位にならいつでもなつてあげません。

大局の經濟の肯定といふこと

村山知義

或る本の中で見た「大局の經濟の肯定」といふ言葉が異常に私の心を打つた。

大局の經濟を肯定するといふ作用は浪曼主義、熱情主義、理想主義及びダダと反對の場所に立つ作用である。

大局の經濟を肯定するといふ言葉は消極的に解釋されなければならない。即ち、少くとも疑はしいものを正當なりとするといふ意味に。もし積極的な意味に解釋されるとそれは浪曼主義、熱情主義云々と踵を接してしまふ。

疑はしいものを正當なりとする作用は凡そ世にある力どもの中で最大なるものの一つである。しかしそれは氾濫しない限り、多くの場合、目前効果的（プラクティカル）な働きをなし難い。

氾濫するとそれはそれ自身この上もなく疑はしい姿の怪物となる。氾濫しないとみぢめに思ひ惑ふ聖者的な侏儒となる。

しかし大局の經濟を肯定するといふ作用は疑はしきものを正當なりとする作用より遙かに以上の作用である。

この作用を私が目下最も重要な問題だと思ふわけは、現在が特に、疑はしいものを決して正當だとしてはならない時代だからである。

現在は萬難を排さねばならず、戰はねばならず、最後に勝たなければならない時代である。

現在に於ては人々はその種類に從つて確然と區別されなければならない。どの程度に適であり、どの程度に味方であるかを明かに知るために。

そして最も勇敢な戰士は右顧左眄しないものである。或ひは自らを戰士とさへも思はないものである。要するにゼヌインでユニークで、無二無三におめき叫んで短刀を提出するものである。

かうして現代のやうな暗黒の時代がある。一人の朋友もない時代がある。

もし人々が少くとも大局の經濟を觀念の上でだけでも肯定し得たなら！さうしたなら、理論の上のではなく現實の、アナとボルの敵意、ダダと構成的意志との間の反目等のうち不必要な部分が取り除かれ得るだらうに。

大局の經濟を肯定すると云ふことは換言すればパースペクテイブの法則を理解するといふことである。それは箇人としては恐らく最も陰鬱な出來事である。特に現在の左傾頃インテリゲンチヤに當て篏めて云へばそれは自分達の一文にも評價されない必然の沒落を當然のこととして意欲することなのである。

國家社會主義の行詰

武藤山治

吾國經濟界の行詰に就ては最早一般に認められて居ることで之を私が茲に示す必要はない私の讀者諸君と共に研究して見たいのは此經濟界の行詰は主として何んに源因するやの點である。

一國の經濟も壹家の經濟と變るところはない貧乏で子澤山であれば余計に稼ぐより外ない。吾國は土地が狹くて天與の富が尠いに係はらず人口は毎年增加する恰も一家で言ゑば貧乏で子供が澤山生れるのと同樣であるかゝる一家に於ては一家共稼するは勿論出來る丈儉約して貯金する外ないそれと均しく國に於ても國民全體が大に働いて資本を大に蓄積して内に產業を興し猶餘れるる資金を外國に投資する外ない如何なる經濟學者の意見を尋ねても是以外に方法がある筈がない唯問題になるのはドウすれば最も能く人が働き又ドウすれば資本が多く蓄積されるであらふかに過ぎない私の見るところでは第一に吾國が天與の富が尠ないからとてその爲めに悲觀するほどのとはないと思ふ現に吾國内を見ても彼信州や江州のやうな山が多く土地が瘦せて居る地方の住民は盛んな出稼をする行商をする儲けた中より貯蓄するこうして余した資本を以つて都會の地に於て商工業に從事し今は東京や大阪で金持の部に屬するものに是等地方の出身者が多い之に依つて見れば吾國全體としても信州人や江州人のやうに大に稼ぎ大に貯めて海外にまで資本を以つて發展す

れば強ち此島の中に増加する人々が養ひ得られたこともないと私は考ゑる然しながらそれには吾國傳統的の國家社會主義を放擲せねばならぬ元來吾國は奈良朝以來世は或時は公家が政權を恣にしたる時代もあり又武人が跋扈したる時代もありたれども常に一種の國家社會主義を表現されて居り國民の懐より多くの資本を吸ひ上げ神社佛閣や自己の權力維持の爲めに浪費せる政治が多少の變化はあつても繼續されて來たのである德川の末路に於ける經濟事情の如き全く此國家萬能の經濟政策が行詰つたのである明治維新の政は其始めに於ては極めて此弊害より遠ざかりたる最も善良なるものであつたが年を經るに從ひ再び國家社會主義の政治が行はれ其後政黨政治の世の中となつては一層其弊害を助長し今や國家社會主義的政治は全く行詰るに至つた此狀態は見様に依ると資本主義が行詰つたように見ゑるがそれは決してそうでない資本主義の正しい發達を妨害し來つた國家社會主義の政治が行詰つたのである吾國の眞の經濟は國家の二字に依る國家社會主義的政治の爲めに如何に其發表を阻害にされて居るかを考ゑねばならぬ試みに鐵道一つ見ても直ぐ分かる最近十年間に政府の鐵道に投ぜられた資本は拾數億以上である然るに英米の鐵道の收入は貨物の運賃の收入が主で乘客は從であるのに吾國の鐵道は正反對で産業發達の爲めでなく人の往來の爲に敷設するのであるから客の收入を第一とする鐵道が敷設されて荷物より人は多く旅行する大切な資本が如何に經濟的に見れば政府の爲め浪費されるかが此一例でも分かる此天與の富の饒い國で此不經濟な政治を改めねば人口の増加と共に經濟上行詰る外ない一日も早く誤れる國家社會主義の吾國の政治根本より改めることが急場である。

是れ重大な社會問題だ

岩佐作太郎

私は今家をもたぬ。それで勞働運動社に厄介になつてゐる。勞働運動社の門を出て、すぐ左に道を取つて僅かに六七歩の所に、稻荷様がある。其隣に番小舍がある。其中にはいつも朝早くから夜中まで、多い時は五六人、少けない時でも一二三人の洋服か又は袴羽織の『紳士』がゴロ〱臥たり、起きたりして居る、人は彼等を呼んで犬と言つて居る。それは勞働運動社に人が來れば臭をかぐ、勞働運動社の誰れかゞ外出すれば何處までもついて行くのがしやうばいだからだ。

勞働運動社の二階の編輯室の卓に凭りてこの犬小舍を見ると、この犬共、然らざればこの『紳士』共の二三若しくは一二が、交々二階の方に向つて能く目乃至は手でものを言はせて居る。

はてこの犬め僕に何にを言ふのかと思ふと、それは大なる間違ひで、その日、その手は隣家の二階に向つてもの言ふて居るのだ。其所には何時も五六名の妙齢の少女が裁縫のけいことして居る。目にもの言はせ、手にもの言はせるのは、それ、私が説明するまでもなく、若い男女の以心傳心の妙計なんだ。

私はそう言ふことを見る毎に、思ふのだ。既に年頃の若い者同志だ、目や手にもの言はせてやきもきするよりは、何ぜに、似たもの夫婦、われ鍋にとぢ蓋とやら、大膽に率直に天の許したある行動を取らぬのだ、と。

ただに犬小舍の『紳士』共と裁縫所の少女共計りでない。世には既に己にこの道の大人になりながら一人寢の淋しさに泣くもの幾許あるか知れやしない。そうだ、五體を完全に備へながら花を咲かせず、實もならさずに、朽ち枯れて、亡び行くもの年々歳々其數を增すばかりである。

抑も人間に男女の別あるは、たゞに生殖のため計りではない、一つ型の人間計りでなく、多くの多くの型の人間を造り、益々進化發展させたいための天の作業であるそうな。男女の數が多ければ多い程澤山の型の異なる人間が出來、型の異なる人間が出來れば出來る程人間は進化發展するのだ。然るに、澤山の人々をして、この天の與へた悦びを享樂させることを得さしめないで、徒らに、亡びさせるのは實に由由敷社會問題であるのみならず、このまゝして推移したならば日本民族は亡びねばなるまい。

それなら何ぜ、完全なる五體を備へながら、數多い男女が、花も咲かせず、實もならさずに、淋しく亡び行かねばならぬのか。自分獨りでさへ生きて行けぬ、せち辛らい世の中だ、況んや、花を咲かせ、實をならすことが、何うして出來やう、と。之れ其答へである。

咄々！　空飛ぶ鳥にも、地にかける獸にも生活の自由はある。萬物の靈長たる人間に其自由のないとは、抑も何事ぞ。

耕やすべき廣大なる土地は横つて居る、着るべき衣は幾許でも蓄へて居るではないか。住むべき家は到る處にあるではないか。人の子をして、住むに家なく、着るに衣なく、食ふにものなく、なさしむる原因は、抑も、何んであるか。我等は生活の自由、戀愛の自由を取り返さなくてはならない。

理學の文化的徹底を

山本一清

私の職務に關して最も重要な問題は、近い内に日本國内の天文台の數を增すことです。日本に天文學研究が始まつてから今日まで、可なりの學者は

出てますのに、多くは理論に走り、天體の實際觀測を重んじないため、天文台そのものは微々として振はず、只、報時當暦などの方面にのみ通り一遍の義務を多くの人々に認められて居るに過ぎない。併し日本は歐米大陸より七八時間の時間の差を持つてゐること、歐米大陸に比して一體に緯度が低いため、觀測しさへすれば非常に割り好い位置に置かれてあるのです。生きた天文學の研究のために、經七八十センチの望遠鏡を持つて、現代式に宇宙の開拓が出來るやうな天文台を公私合はせて少なくとも三十ケ所は日本に作りたいものです。ついては、日本人一般のくせとして官費に賴りたがるのは此の場合いけません。是非、私立として此等を實現したいものです。今年末には吾々の天文同好會は岡山に私立天文台を開き三十二センチの反射式望遠鏡を備へて、主に恒星と遊星との物理研究をやるつもりで居ますが、かうした天文台が今始めて日本に出來上るといふのでは未だ〳〵情ないことです。「天文をやつて何の役に立つ」といふ質問を止して頂きたい。天文は直ぐに人の懐ろを富ませたり、人に美食を與へたりしません。丁度、一枚の繪、一曲の音樂が其のまゝ直ぐに人間生活を物質的に賑はさないのと同じことです。多くの物質理學は此の點に於いて天文や數學と大差があります。どこまでも天文は人の精神生活のために、昔しから貢獻した如く、今後も續きませう。一々の天文台は病院や工場と比べられる代りに、美術館や劇場や音樂堂と同樣に取り扱はれるべきものと一般の人々に了解して貰ひたいのです。此の意味に於いて、大宇宙の消息を傳へる天文台の數少ないことは、即ち人に精神文化の欠けてゐる事實を表はすわけでせう。

と同時に、此うした機會を通じて、一般に純な理學（サイエンス）の文化的意味を徹底させたいと思ひます。理學と理學的精神とは人が持つて生れた最も美しい精神生活の一方面である筈なのです。此うした所以は今より僅々三百年以前まで、ごく自然に人の心の中にあつたのですのに、其の後、理學の應用にのみ驚かされた結果、十八世紀の末から今日へかけて、東洋西洋の區別なく、天文學までも人の物質生活のために何等かの寄與をしなければ存在が許されないかのやうに人々を思はしめるに至りました。迷惑なことです。殘念なことです。

最も切實な小問題

近藤憲二

自分自身にとつて『最も』切實な問題を、さう矢鱈に口にされるものぢやない。また殊に、對國家的の『最も』切實な考へなぞうつかり書かうものな

ら、この不自由な國では、甚だ面倒な事がおつぱじまるかも知れない。桑原桑原だ。僕等の同人雜誌『勞働運動』に書く時でさへ、『最も』切實な事をさう露骨には書かない。大概は半分お座なりで濟ませてゐる。まして商賣雜誌の『改造』に迷惑をかけるやうな事があつては、甚だもつて相濟まない。だから、社會運動者が今まで『改造』や『中央公論』などに書いたもの書くものは、若しそれが『最も』切實なもののやうに見せかけてゐるとしても、やはり大概はお座なりか伏字だらうと思はれる。

僕が次ぎに書く『最も』切實な問題も、まあその位いの程度の『最も』だ。

五月以來三回に亘つて、福田暗殺爆彈事件の被告和田久太郎、古田大次郎等諸君の公判が開かれてゐる。ここ一兩日中には其の第四回公判がある筈である。判決の下る日も近いであらう。檢事の求刑通りに死刑になるか、或は無期になるか、乃至は其他の骰子の目が出るか、その手の內は振る奴でない僕等にはわからない。

が、僕は、今それを問題にしてゐるのではない。裁判の結果を豫想しようとしてゐるのではない。そんな事は裁判官の筋書にまかして置く。僕が考へてゐるのは、『最も』切實に考へてゐるのは、もつと小さな問題だ。僕自身の問題だ。

僕は、この公判を今まで缺かさずに傍聽に行つた。いつも努めておとなしく、靜かに。そして熱心に聽いて來た。だが、次ぎの公判の時には、傍聽に行かうか行くまいかと考へてゐるのだ。たつたこれだけの事だ。

永久のお別れになるか、當分のお別れになるか、その邊の見當はつかないが、何れにしても其の日は近づいてゐるのだ。一度でも餘計に逢ひたいには逢ひたい。長い間相親んだ同志と、せめてほんの暫らくでも微笑みあつてゐたいにはゐたい。僕の心の一つは『傍聽に行け行け』といふ。

が、僕のもう一つの心は、『同志が、今、審かれようとしてゐる。骰子ころは手の中で妙な工合にもまれて、筋書通りに投げ出されようとしてゐる。貴樣はそれを、おとなしく靜かに傍聽に行かうといふのか』と云ふ。

要するに、ただ傍聽に行かうか行くまいかといふ、たつたそれだけの僕自身の極く小さな問題が、僕の今の『最も』切實な問題たんさ。

拔いた竹光

邦枝完二

若い床屋の聽人が、あたしに迫る公休日に、女には會ひたし、金はなしと、いらいらしながら、しまひ際に來た氣の利かないハイカラ男の頭を、ヤ

ケに鋏の音をさせながら刈つてゐる。――その職人の心持になつて見れば、今夜の米がないよりも、この方が餘程的確な切實さを持つてゐるに違ひない。

泥棒を内職にでもしない限り、一金五十圓の月給では、鯱鉾立をしても、三人の家族を養つてはゆけないところから、帝國劇場の文藝部員なる職を辭してすでに三年。その後はなまじ氣兼の多い勤めより、貧乏なりの浪人生活が身に附いて、續引き不規則な生活を繰返してゐる。が、さて前記の職人と同樣、今夜の米には不自由を感じないまでも、元來イヤで別れた譯ではない、情婦のやうな「芝居」だけに、何かと云ふと「芝居」に對する問題では、一番眞劍な氣持が起つて來る。さア來いと、大上段に構へて、戀人を背後へ庇ふやうな形になる。興行者や俳優その他が、寄つてたかつて、「芝居」をいぢめるのが、痛々しくなつて來るのだ。

最も餘計に「芝居」をいぢめたるが者は、何と云つても興行者自身だらう。中には相當藝術に理解を持つた人もゐるやうだが、それでも「芝居」をいぢめることに於ては、決して人後に落ちるものではない。金を儲けるためには「芝居」そのものが假令緣日の見世物以下に墮落しやうとも、決して構ひ申さずでは、百も承知で、女房を異人の妾にしてゐる亭主と、一向選ぶところがない譯だ。

俳優にもヒドイのがかなり多い。取るだけの給料さへ取つてしまへば、あとは入りがあらうがなからうが、極めてのほほんなのがざらにある。口の先では藝術が何うの斯うのと、まるで藝術の佃煮でも製造してゐるやうなことを云つてゐるが、その實肚の中では、自分を綺麗に見せることより外に、一も二もないのだから堪らない。――皿眼になつた俳優が、刃こぼれのしただんびらを口に銜へて、「芝居銀行」の金庫から金を盗み出してゐる。――こんな戯畫を想像するのも、强ち私の無理ではあるまい。

興行者や俳優を頭からやつ付けるなどは、劇作家として立つ上に、決して得なことではないやうだ。が、私は「芝居」が可愛い。他人には何でもない事でも、私の胸にはぐんと來る。世の中が理窟ばかりで渡れない事も先刻承知だが、さて云ひたいだけの事は云はして貰ひたい。たとへ竹光でも太刀は太刀だ。現在私に取つて、一番切實な問題は、この振翳した最初の一刀を持つてどこから斬り付けやうか、といふことにあるのだ。(八・十二)

二つある

小牧近江

プロレタリア作家も有志の努力で、日本的に團結しやうとしてゐます。

この際、そういふ方面で最も適任である改造社の力などで、プロレタリア作家極東大會を北京あたりで開催が出來ぬものでせうか。反帝國主義、反軍國主義に對する我われの共同的な假に意見だけでもを發表するために。

上海並にこん後起るべき日米問題に對しても、そこら近所の大公使のみにまかすべきものでせうか。

我らにはわれ〱の立場があらねばならぬ。

せめて、軍事敎育の勃興した帝國日本に一つの「アンチ・ミリタリスト」專門雜誌位あつていいと思ふ。軍資金が欲しいものである。以上二つ。

生活と藝術のクロス

岡田三郎

自分は今、生活道と藝術道と、この二つが互に相交る十字路に立つてゐる。

流行のクロス・ワードで行くなら、

縱の鍵、生きること。

横の鍵、藝術家の生活を支持するもの。

人に依つては、この横の鍵は、藝術家の生活を支持するものでない場合があらう。だから、藝術を生活の資とする必要のない人には、この横の鍵はあてはまらない。また、或る一部の人は、藝術をもつて藝術家の生活を支持するものとなすことを、藝術の冒瀆と非難するかも知れない。さう云ふ人達のためには、この横の鍵を、人間最高の表現と書き換へるもよからう。

しかし、この場合、人のことはどうでもいい。自分にとつては、縱の鍵は「生きること」であり、横の鍵は「藝術家の生活を支持するもの」である。そして、『セイクワツ』と「ゲイジユツ」は、常に「イ」で交叉し、しかも自分の全生活はこの「イ」に依つて、不斷に制射されてゐるのだ。

自分は常に、生活道と藝術道と、この二つが互に相交る十字路に立つて、生活にも邁進するを得ず、藝術にも精進するを得ず、徒らに迷妄に陷つてゐる。

自分は敢て、生活の勞苦なくして、一意專心藝術に沒頭するを男子の本懷とは思はない。また、藝術を塵埃の如くに捨て去り、あらゆる商略機智を弄して、生活の城を築かうとする生活第一主義者を、自分は決して尊敬するものではない。しかし、それなら、飢えてなほ藝術と共に倒れるの意氣はあるかと云ふに、……ここで自分は、惡魔的微笑を禁じ得ないのだが、……意氣はある。意氣はあつたとして、實

際、食に飢えて、猶且、藝術三昧にふけ、藝術と共に死ぬ、などと考へて見ると、あまり馬鹿馬鹿しくて、眞面目には返辭も出來なくなる。

今の自分には、宇宙の起源も、切實な問題ではない。神の存在も切實な問題ではない。內閣の更迭も、家主の更迭よりは切實な問題ではない。外債幾億たりと雖も、米屋の未拂金よりは切實な問題ではない。

個人主義者、利己主義者と嗤ふ勿れ。日本の國がもつと金持になり、文部省が我我の仕事に理解を持ち、何等かの保障を我我に與ふるに至らざるかぎり、未來永劫我我は自己の周圍に切實な問題を見出し、鋭意それの解決につとめ、己れを治むることに專念するの外はないだらう。

生活と藝術とが交叉するかぎり、艱難は常に伴ふ。その艱難の十字路に立つ自分を、自分みづから鞭撻するより外に、目下の自分にとつて切實な問題はない。(八月十四日)

自我の發掘

神近市子

約二年の間殆ど纏つた創作と云ふものをせず、この頃になつてヤツと身邊の雜事を排することができて何か書いて見やうと云ふ氣持も出て机の前に座つて見ますが、そこでハタと厚い壁につき突つたやうな自分を見出してゐます。

書きたいと思ふことがないのではありません。書きたいと思ふことが相當にあり乍ら、書くのに非常に骨が折れるのです。書かうとする對象と自分、自分と表現の樣式との間が妙にチグハグで、シツクリとできない相當の距離を生んでゐると思はれるからです。

二年の間、病氣とか貧乏とか子供とか最も私自身を分裂せしむる事柄に逐はれて暮してゐるうち、感情に一部の硬化が出來、自分が對象として見てゐる事柄に充分な感情の移入ができなくなつた結果であることは事實です。ウツカリと暮してゐて極く常識的な見方で物を見てゐることに慣れ、さうした自分に對する大きな不滿が同時に少なからず自信を傷けてゐることも事實です。又この二年來の文壇の出來事──プロレタリヤ文學の衰微と新感覺派の運動等に對する考察が、私によりハツキリとした自分の地位の確立を要求してゐる結果、前通りの安易さをもつて物を書かさないことも一の原因です。

ズーツと前から引つゞいて物を書いてゐたら、こんな妙な無要な人知れぬ苦勞はないだらうと思ひます。例へば新しく出る一切のものに眼をつぶつてリアリズムならリアリズム、人道派なら人道派と自分の立場に安住してそこで專念に書いてゐるとか、又は新しい

傾向を受入れるとすれば、極く除々と新しい作風を交ぜて行くとか、とにかくその結果は自然で私のやうに殊更に改めて自分の立場を見定めるなどゝ云ふ手續は入らなさうです。

が、また視野を別に擴げて行くと、よほど強い意志をもつてゐる人は別として、女の作家としての生活にはかうした中斷が來ることは止むを得ないことであるやうです。その點で女の作家は女であると云ふことだけに既に男に多くのハンデイキヤツプをとられてゐます。家庭生活とかうした婦人の生活との間に旨く調和を見出さうと焦つて見た時もありましたが、現在の社會組織古い因習の力が衰へないところでは、例へば一夫婦、一家族だけがさうした生活をすることは困難であり徒勞に歸してしまいさうです。で、現在では、この二つの生活は兩立しがたいもの――好い藝術家たらんには女は獨身である方がよいと考へて居ります。

こゝをどうして切り抜けやうかと云ふことが、最近の私には大きな苦悩でした。が、今ではそれも大體の見當はついて、矢張り自分自身の飽くなき發掘より外に途はないと考へるやうになりました。

改造社

大正大震火災誌

價拾五圓　送料四拾五錢

四六倍判八五二頁

三色判一葉入　寫眞六十六葉入

大地圖一葉入（縱二尺四寸四分　橫三尺四寸弱）

大震火災誌中
不朽の大名著

劃時代的震火災の史的權威として本書が唯一の記念であることは識者の意見の一致する所です。各皇族家、各大使館、大學等も本誌を以つて唯一の學術的、歷史的、記錄的に有價値の書として購求せられました。本書は各學校家庭の敎育に必ず缺かされない一大史實であることは各家庭、學校で爭ふて本書に就くことに依つても證明されます。第一流の地震學者、文士、經濟學者、社會學者、各大學官廳總出にて成れる本書が次時代の國民乃至は我愛兒の敎育の爲に絕對的に必要な書籍であることは玆に呶々の要はない。

東京　改造社　振替東京八四〇二



安全無害強力の理想的殺菌消毒劑

ペルゾーン

（中性純過酸化水素液）

含嗽用　二十乃至三十倍液
消毒用　原液乃至二倍液
化粧用　原液乃至二倍液

小瓶（一〇〇瓦入）
大瓶（四五〇瓦入）

携帶に便利なる固形過酸化水素

ペル錠

ペル錠は純過酸化水素を特種の化學的方法にて安定の固形體となしたるものにして之を微溫湯に溶解すれば隨時に新鮮なる中性純過酸化水素液を得

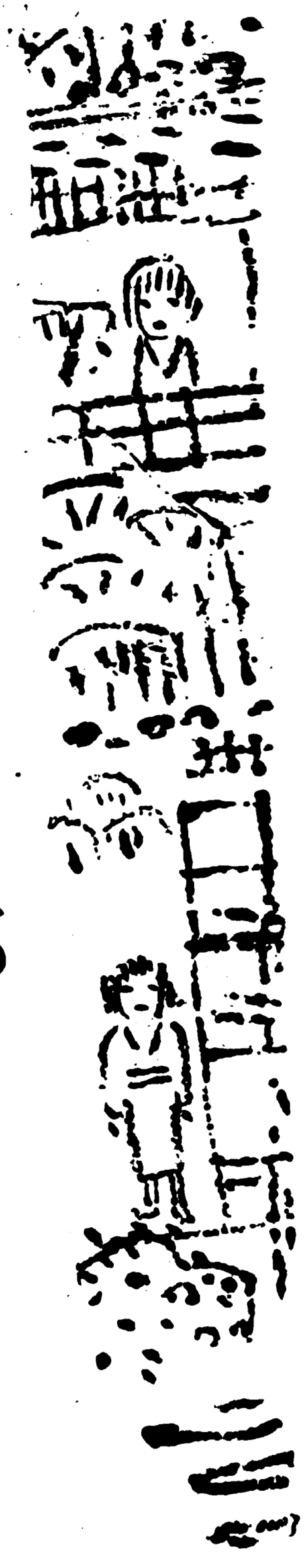
二〇錠入　〇・六〇
五〇錠入　一・〇〇
一〇〇錠入　一・七〇

三越、白木、松屋、松坂屋藥品部
其他全國知名藥店にて販賣す

（詳細說明書贈呈）

製造發賣元　第一製藥株式會社

本社　東京市日本橋區博正町
支店　大阪市東區道修町二丁目



蒲生氏郷

露伴學人

大きい者や強い者ばかりが必ずしも人の注意を値する譯では無い。小さい弱い平々凡々の者も中々の仕事をする。蚊の嘴といへば云ふにも足らぬものだが、淀川兩岸に多いアノフエレスといふ蚊の嘴は、其昔其川の傍の山崎村に棲んで居た一夜庵の宗鑑の膚を螫して、そして宗鑑に瘧をわづらはせ、それより近衛公をして、宗鑑が姿を見れば餓鬼つばた、の佳謔を發せしめ、隨つて宗鑑に、飮まんとすれど夏の澤水、の妙句を附けさせ、俳諧連歌の歴史の卷首を飾らせるに及んだ。蠅といへば下らぬ者の上無しで、漢の班固をして、青蠅は肉汁を好んで溺れ死することを致す、と笑はしめた程の者であるが、其のうるさくて忌はしいことは宋の歐陽修をして憎蒼蠅賦の好文字を作るに至らしめ、其の遂へば逃げ、逃げては復集るさまは、片倉小十郎をしてこれを天下の兵に擬へて、流石の伊達政宗をして首を俛して兎も角も豐臣秀吉の陣に參候するに至るだけの料簡を定めしめた。微物凡物も亦是の如くである。本より微物凡物を輕んずべきでは無い。そこで今の人が好んで微物凡物、云ふに足らぬやうなもの、下らぬものの上無しといふものを談話の材料に

したり、研究の對象にするのも、まことにおもしろい。蚤のやうな男、蝨のやうな女が、何様致した、彼様仕つた、といふが如き筋道の詮議立やなんぞに日を暮したとて、尤千萬なことで、其人に取つてはそれだけの價のあること、細菌學者が顯微鏡を覗いてゐるのが立派な事業であると同様であらう。が、世の中はお半や長右衛門、おべそや甘郎ばかりで成立つて居る譯でも無く、バチルスやヒドラのみの宇宙でも無い。獅子や虎のやうなもの、鰐魚や鯨鯢のやうなものもあり、人間にも凡物で無い非凡な者、惡く云へばひどい奴、褒めて云へば偉い者もあり、矮人や普通人で無い巨人も有り、善なら善、惡なら惡、くせ者ならくせ者で勝れた者もある。それ等の者を語つたり觀たりするのも、流行る流行らぬは別として、まんざら面白くないこともあるまい。また人の世といふものは、其代々で各々異なつて居る。自然そのまゝのやうな時もある、惡く小利口な代もある、情慾崇拜の代もある、信仰牢固の代もある、だらけきつたケチな時代もある、人々の心が鋭く強くなつて沸りきつた湯のやうな代もある、黴菌のうようよくに蛆も適したナマヌルの湯のやうな時もある、冷くて活氣の乏しい水のやうな代もある。其中で沸り立つたやうな代のさまを觀たり語つたりするのも、亦面白くないこともあるまい。細かいことを語る人は今少く無い。で、別に新らしい發見やなんぞが有る譯では無いが、たまの事であるから、沸つた世の巨人が何様なものだつたかと觀たり語つたりしても、惡くはあるまい。蠅の事に就いて今擧げた片倉小十郎や伊達政宗に關聯して、天正十八年、陸奥出羽の鎭護の大任を負はされた蒲生氏郷を中心とする。

歴史家は歴史家だ　歴史家くさい顔つきはしたくない。傳記家と囚はれて終ふのもうるさい。考證家、鑒識家、古文書いぢり、紙魚の化物と稗西遊記に罵られてゐるやうな然様いふ者の眞似もしたくない。さればとて古い人を新らしく捏造して、何の據り處もなく自分勝手の糸を痲氣筋に引張りまはして變な牽強附會を働かせ、藝術家らしく乙に澄ます

のなぞは、地下の枯骨に氣の毒で出來ない。おほよそは何かしらに擬つて、手製の萬八を無遠慮に加へず、斯様も有つたらうといふだけを評釋的に述べて、夜涼の緣側に團扇を揮つて放談するといふ格で語らう。

今があながち太平の世でも無い、世界大戰は濟んだとは云へ、何處か知らで大なり小なり力瘤を出したり青筋を立てたり、鐵砲を向けたり堡壘を造つたり、造艦所をがたつかせたりしてゐる。それでも先々女房には化粧をさせたり、子供には可憐な衣服をさせたりして、親父殿も晩酌の一杯ぐらゐは樂んでゐられて、ドン／＼、チャン／＼、ソーレ敵軍が押寄せて來たぞ、酷い目にあはぬ中に早く逃げろ、なぞといふことは無いが、永祿、元龜、天正の頃は、とても今の者が想像出來るやうな生優しい世ではなかつた。資本主義も社會主義も有りはしない、こんなことは晝寢の夢に彫刻をした刀痕を談ずるやうな譯も無いことで、何も彼も滅茶々々だつた。永祿の前は弘治、弘治の前は天文だが、天文よりもまだ前の前のことだ、京畿地方は權力者の爭ひ騷ぐところで有つたから、早くより戰亂の巷となつた。當時の武士、喧嘩商賣、人殺し業、城取り、國取り　小荷駄取り、即ち物取りを本門にしてゐる武士といふもの〻、然様々々チャン／＼バラばかり續いてゐる譯では無いから、たまには休息して平穩に暮らしてゐる日もある。行儀のよい者は酒でも飲む位の事だが、犬を牽き、鷹を肘にして遊ぶ程の身分でも無く、されぱと云つて何の洒落た遊技を知つてゐるほど怜悧でも無い奴は、他に智慧が無いから博奕を打つて閑を潰す。戰といふことが元來博奕的のものだから堪らないのだ、博奕で勝つことの快さを味はつたが最期、何に遠慮をすることが有らう、戰亂の世は何時でも博奕が流行る。そこで社や寺は博奕場になる。博奕道の言葉に堂を取るだの、寺を取るだの、開帳するだの、といふのは今に傳はつた昔の名殘だ。そこで博奕の事だから勝つ者があれば負けるものもある。負けた者は賭ける料が無くなる。負ければ何の道の勝負でも口惜しいから、賭ける料が蕩きても止められない。仕方が無いから持物を賭ける。又負けて持物を取られて終ふと、遂に

は何でも彼でも賭ける。愈々負けて復取られて終ふと、終には賭けるものが無くなる。それでも剛情に今一ト勝負したいと、それでは乃公は土藏一つ賭ける、土藏一ツを、なにがし百のつもりにしろ、負けたら今度戰の有る節には必ず乃公が土藏一ツを引渡すからと云ふと、其男が約を果せるらしい勇士だとウン、好からうといふので、其の口約束に從つてコマを廻して與れるひどい事だ。自分の土藏でも無いものを、分捕して渡す口約束で博奕を打つ。相手の物でも無いのに博奕で勝つたら土藏一ト戸前受取るつもりで勝負をする。斯樣いふことが稀有では無かつたから雜書にも記されて傳はつてゐるのだ。これでは資本の威力もヘチマも有つたものでは無い。然樣かと思ふと一方の軍が敵地へ行向ふ時に、敵地でも無く、吾が地でも無い、吾が同盟者の土地を通過する。其時其の土地の者が敵方へ同情を寄せてゐると、通過させなければ明白な敵對行爲になるので武力を用ゐられるけれども、通過させることは通過させておいて、民家に宿舍することを同盟謝絕して其軍に便宜を供給しない。詰り遊戲者諸藝人を節儉同盟の村で待遇するやうに待遇する。すると其軍の大將が武力を用ゐれば何とでも隨意に出來るけれど、好い大將である、仁義の人である、と思はれようとする場合には、寒風雨雪の夜でも押切つて宿舍する譯には行かない。憎いとは思ひながらも、非常の不便を忍び、困苦を甘受せねばならぬ。斯樣いふ民衆の態度や料簡方は今では一寸想像されぬが、中々手強いものである。現に今語らうとする蒲生氏郷は太閤即ち當時の主權執行者の命によりて奧羽鎭護の任を帶びて居たのである。然るに葛西大崎の地に一揆が起つて、其地の領主木村父子を佐沼の城に圍んだ。そこで氏郷は之を援けて一揆を鎭壓する爲に軍を率ゐて出張したが、途中の宿々の農民共は宿も借さなければ薪炭など與ふる便宜をも峻拒した。これ等は伊達政宗の領地で、政宗は裏面は兎に角氏郷と共に一揆鎭壓の軍に從はねばならぬものであつたのである。借さぬものを無理借りする譯には行かぬので氏郷の軍は奧州の嚴冬の時に當つて風雪の露營を幾夜も敢てした困難は察するに餘りある。斯樣いふ場

合、戦亂の世の民衆といふものは中々に極度まで自己等の權利を殘忍に牢守してゐる。まして敗軍の將士が他領を通過しようといふ時などは、恩も仇もある譯は無い無關係の將士に對して、民衆は剽盜的の行爲に出づることさへある。遠く源平時代より其證左は歴々と存してゐて、特に足利氏中世頃から敗軍の將士の末路は大抵土民の爲に最後の血を瀝盡させられてゐる。ひとり明智光秀が小栗栖長兵衛に痛い目を見せられたばかりでは無い。斯樣いふやうに民衆も中々手强くなつてゐるのだから、不人望の資産家などの危險は勿論の事想察に餘りある。其代り又手荷い領主や敵將に出遇つた日には、それこそ草を刈るが如くに人民は生命を取られゝば財産も召上げられて終ふ。で、つまり今の言葉で云ふ搾取階級も被搾取階級も、何れも是れも「力の發動」に任せられてゐた世であつた。理屈も絲瓜も有つたものでは無かつた。債權無視、貸借關係の棒引、即ち德政はレーニンなどよりずつと早く施行された。高師直に取つては臣下の妻妾は皆自己の妻妾であつたから、師直の家來達は「御主人も好いけれど女房の召上げは困る」と云つたと云ふが、武田信玄になると自分はそんな不法行爲をしなかつたけれども「命令雜婚」を行はせたらしく想はれる。何處の領主でも兵卒を多く得たいものは然樣いふことを敢てするを忌まなかつたから、共婚主義などは隨分古臭いことである。滅茶苦茶なことの好きなものには實に好い世であつた。

斯樣いふ恐ろしい、そして馬鹿げた世が續いた後に、民衆も目覺めて來れば爲政者權力者も目覺めて來かゝつた時、此世に現はれて、自らも目覺め、他をも目覺めしめて、混亂と紛糾に陷つてゐたものを、「整理」へと急がせることに骨折つた者が信長であつた、秀吉であつた。醍醐の醍の字を忘れて、まごまごして居た侑筆に、大の字で宜いではないかと云つた秀吉は實に混亂から整理へと急いで、譬へば亂れ垢づいた髮を齒の疎い丈夫な櫛でゴシゴシと掻いて整へ揃へて行くやうなことをした人であつた。多少の毛髮は引切つても引拔いても構はなかつた。其爲に少し位は痛くつても關ふも

のかといふ調子で遣りつけた。ところが結ばれた毛の一トかたまりグツト梳の齒にこたへたものがあつた。それは關八州横領の威に誇つてゐた北條氏であつた。エ、面倒な奴、一トかたまり引ツコ拔いて終へ、と天下整理の大梳の下に四十五箇國の兵を率ゐて攻下つたのが小田原陣であつたのだ。

北條氏のほかに、まだ一トかたまりの結ぼれがあつて、工合好く整理の梳の齒に順つて併けなければ引ツコ拔かれるか杜斷（ひつたぎ）られるかの場合に立つてゐるのがあつた。伊達政宗がそれであつた。伊達藤次郎政宗は十八歳で父輝宗から家を承けた「えら者」だ。天正の四年に父の輝宗が板屋峠を踰えて大森に向ひ、相馬彈正大弼と畠山右京亮義繼、大内備前定綱との同盟軍を敵に取つて兵を出した時、年はわづかに十歳だつたが先鋒にならうと父に請うた位に氣嵩で猛しかつた。十八歳といへば今の若い者なら出來の惡くないところで、やつと高等學校の入學試驗にパスしたのを誇るくらゐのところ、大抵の者は低級雜誌を耽讀したり、活動寫眞のファンだなぞと愚にもつかないことを大したことのやうに思つてゐる程の年齡だ。それが何樣であらう、十八で家督相續してから、輔佐の良臣が有つたとは云へ、もう立派に一個の大將軍になつて居て、其年の内に、反復常無しであつた大内備前を取つて抑へて、今後異心無く來り仕へる筈に口約束をさせて終つてゐる。それから、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四と、今年天正の十八年まで六年の間に、大小三十餘戰、蘆名、佐竹、相馬、岩城、二階堂、白川、畠山、大内、此等を向ふに廻して逐ひつ返しつして、次第次第に斬勝つて、既に西は越後境、東は三春、北は出羽に跨り、南は白川を越して、下野の那須、上野の館林までも威餘は達し、其城主等が心を寄せるほどに至つて居る。特に去年蘆名義廣との大會戰に、流石の義廣を斬靡けて常陸に逃げ出さしめ、多年の本懷を遂して會津を乘取り、生れたところの米澤城から乘出して會津に腰を据ゑ、これから愈々南に向つて馬を進め、先づ常陸の佐竹を血祭りにして、それから旗を天下に立てようといふ勢になつてゐた。仙道諸將を

走らせ、芳名を遂つて會津を取つたところで、部下の諸將等が大に城を築き壘を設けて、根を深くし帶を固くしようといふ議を立てたところ、流石は後に太閤秀吉をして「くせ者」と評させたほどの政宗だ、ナニ、そんなケチなことを、と一笑に附してしまつた。云はゞ少しばかり金が出來たからとて公債を買つて置かうなどゝいふそんな錆ツたかりの魂魄とは魂魄が違ふ。秀吉、家康は勿論の事、政宗にせよ、氏郷にせよ、少し前の謙信にせよ、信玄にせよ、天下麻の如くに亂れて、馬烟や鬨の聲、金鼓の亂調子、焔硝の香、鐵と火の世の中に生れて來た勝れた魂魄はナマヌルな魂魄では無い、皆いづれも火の玉だましひだ、炎々烈々として已むに已まれぬ猛燄を噴き出し白光を迸發させてゐるのだ。言ふまでも無く吾が光を以て天下を被はう、天下をして吾が光を仰がせよう、と熱り立つて居るのだ。政宗の意中は、いつまで奥羽の邊鄙に蹐々として蟠居しようや、時を得、機に乘じて、奥州駒の蹄の下に天下を蹂躙してくれよう、といふのである。これが數へ年で二十四の男兒である。來年卒業證書を握つたらべそ子孃に結婚を申込まうなんと思ひ寐の夢魂七三にへばりつくのとは些違つて居た。

諸老臣の深根固帶の議をウフンと笑つたところは政宗も實に好い器量だ。立派な火の玉だましひだ。ところが此の火の玉より今少しく大きい火の玉が西の方より滾轉して來た。命に從はず朝を輕んずるといふので、節刀を賜はつて關白が愈々東下して北條氏を攻めるといふのである。北條氏以外には政宗が有つて、迂濶に取片付けられる者では無かつた其他は碌々の輩、關白殿下の重畳が十分に壓倒するに足りて居たが、北條氏は兎に角八州に手が延びて居たので、ムザとは壓倒され無かつた。强盜をしたのだか何をしたのだか知らないが、黄金を澤山持つて武者修行、惡く云へば漂浪して來た伊勢新九郎は、金貸をして利息を取りながら親分肌を見せては段々と日分の處へ出入する士どもを手なづけて終に伊豆相模に根を下し、それから次第に膨張したのである。此の早雲といふ老夫も中々食へない奴で、三略の第一章を子

ヨビリ聴聞すると、もうよい、などと云つたといふ大きなところを見せて居るかと思ふと、主人が不取締だと下女が檐端の茅を引抽いて焚付けにする、などと下女がヤリテンボウな事をする小さな事にまで氣の届いてゐる凄じい聡明な先生だつた。が、金貸をしたといふのは満し虚事ではなからう。地生（ちぬひ）の者でも無し、大勢で來たのでも無し、主人に取立てられたと云ふのでも無し、そんな事でも仕無ければ機微にも通じ難く、仕事の人足も得難かつたらう。明治の人でも某老は同國人の借金の尻拭ひを仕て遣り／＼して、終におのづからなる勢力を得て顯榮の地に達したといふ話だ。嘘八百萬兩も貸付けたら小人島の政治界なんぞには今でも頭の出せさうに思はれる理屈がある。で、早雲は好かつたが、其後氏綱、氏康、これも先づ好し、氏康の子の氏政に至つては世襲財産で鼻の下の穴を埋めて居る先生で、麥の炊き方を知らないで信玄にお坊ッちやんだと笑はれた。下女が亂髪に焚付を作ることまで知つた長氏に起つて、生の麥を直に炊けるものだと思つてゐる氏政に至つて、もう脉はあがつた。麥の炊きやうも知らない分際で、臺所奉行から出世した關白と太刀打が出來るものでは無い。關白が度々上洛を勸めたのに、悲しいことだ、お坊さん殻威張りで、弓矢で來いと云つたら堪らない。待つてゐましたと計りに關白の方では此大石を取れば碁は世話無しに勝になると、堂々たる大軍、徳川を海道より、眞田を山道より先鋒として、前田、上杉、いづれも戰にかけては恐ろしく強い者等に武藏、上野、上總、下總、安房の諸國の北條領の城々六十餘りを一月の間に揉潰させて、小田原へ取り詰めた。

最初北條方の考では源平の戰に東軍の勝となつてゐる先蹤などを夢みて居たかも知れぬが、秀吉は平家とは違ふ。おまけに源平の時は東軍が踏出して戰つてゐるのに、北條氏は疎に踏出しても居ず、まるで様子が違つてゐる。勝形は少しも無く、敗兆は明らかに見えてゐた。然し北條も大大名だから、上方勢と關東勢との戰は、どんなものだらうと上國の形勢に達せぬ奥羽の端に居た者の思つたのも無理は無い。又政宗も朝命を笠に被て、秀吉が命令づくに、自分とは別

に恨も何も無い北條攻めに參會せよといふのには面白い感情を持たう筈は無かつた。そこで北條が十二分に上方勢と對抗し得るやうならば、上方勢の手並の程も知れたものだし、何も慌てゝ降伏的態度に出る必要は無いし、且北條が敵し得ぬにしても長く堪へ得るやうならば、火事は然程に早く吾が廂へ來るものでは無い、と考へて狡黠には相違無いが、他人交際(つきあひ)の間柄ではあり、戰亂の世の常であるから、形勢觀望二タ心抱藏と出かけて、秀吉の方の催促にも畏まり候とは云はずに、ニヤクヤにあしらつてゐた。一ツは關東は關東の國自慢、奥羽は奥羽の國自慢があつて、北條氏が源平の先蹤を思へば、奥羽は奥羽で前九年後三年の先蹤を思ひ、武家の神のやうな八幡太郎を敵にしても生やさしくは平らげられなかつた事實に心强くされて居た廉もあらうし、又一ツは何と云つても氣ツ張りの强い盛りの二十三四であるから、噂に聞いた猿面冠者に一も二も無く降伏の形を取るのを忌々しくも思つたらう。

然し政宗は氏康のやうな己を知らず彼を知らぬお坊ッちやんでは無かつた。少くも己を知り又彼を知ることに注意を有つて居た。秀吉との交渉は天正十二年頃から有つたらしい。秀吉と德川氏との長湫一戰後の和が成立して、戰は勝つたが矢張り德川氏は秀吉に致された形になつて、秀吉の勢威隆々となつたからであらう、後藤基信をして政宗は秀吉に信書を通ぜしめてゐる。如才無い家康は勿論それより前に使を政宗に遣はして修好して居る。家康は海道一の弓取りとして英名傳播して居り、且秀吉よりは其位置が政宗に近かつたから、政宗もおよそ其樣子合を合點して居たことだらう。天正十六年には秀吉の方から書信があり、又刀などを寄せて鷹を請うて居る。鷹は奥州の名物だが、もとより鷹は何でもない、是は秀吉の方から先手を打つて、政宗を引付けようといふにあつたこと勿論である。秀吉の命に出たことであらう、前田利家からも通信は來てゐる。がこゝまでは何れにしても何でも無いことだつたが、秀吉も次第に膨脹すれば政宗も次第に膨脹して、いよ〳〵接觸すべき時が當つて來た。其年の九月には家康から使が來、又十二月には玄越

といふものを齎して、關白の命を蒙つて仙道の諸將との爭を和睦させようと存じたが、承れば今度和議が成就した由、今後復合戰沙汰になりませぬやう有り度い、と云つて來た。これは秀吉の方に政宗の國內の事情が知悉されてゐるといふことを語つて居るものである。まだ其時は政宗が會津を取つて居たのでは無いが、德川氏からの使の旨で秀吉の意を推すれば、秀吉は政宗が勝手な戰をして四方を蠶食しつゝ其大を成すを悅ばざること分明であることが、政宗の胸中に映らぬことは無い。それでも政宗は遠慮せずに三千塚といふ首塚を立てる程の激しい戰をして蘆名義廣を凹ませ、とう〳〵會津を取つて終つたのが、其翌年の五月のことだ。秀吉の意を破り、家康の言を耳に入れなかつた譯である。そこで此の敵の蘆名義廣が、落延びたところは同盟者の佐竹義宣方であるから、佐竹が政宗といふ奴はひどい奴でござる、と一切の事情を成るべく自分方に有利で政宗に不利のやうに秀吉や家康に通報したのは自然の勢である。これは政宗も萬々合點してゐることだらう、其年の暮には上方の富田左近將監や施藥院玄以に書を與へて、何樣なものだらうと探ると、案の定一白や玄以からは、會津の蘆名は豫ねてより通聘して居るのに、貴方が勝手に之を逐ひ落して會津を取られたことは、殿下に於て甚しく機嫌を損じてゐらるゝところだ、と云つて遣した。もう此時は秀吉は小田原の北條を屠つて、所謂「天下の見懲らし」にして、そして其勢で奧羽を刄に血ぬらず整理して終はう、といふ計畫が立つて居た時だから、勿論秀吉の命を受けての事だらう、前田利家や、淺野長政からも、又秀吉の後たるべき三好秀次からも、明年小田原征伐の砌は兵を出して武臣の職責を盡すべきである、と云つて來てゐる。家康から早く歸順の意を表するやうにするが御爲だらうと勸めて來てゐることも勿論である。明けて天正十八年となつた。正月、政宗は良覺院といふ者を京都へ遣つた。三月は齋藤九郎兵衞が京都から淺野長政等の書を持つて來て、いよ〳〵關東奧羽平定の大軍が東下する、北條征伐に從はるべきである、會期に遲つてはなりませぬぞ、といふのであつた。そこで九郎兵衞に返書を齎らさし

め、守屋守柏、小關大學の二人を京へ出つたが、政宗の此頃は去年大勝を得てから雄心勃々で、秀吉東下の事さへ無ければ、無論常陸に佐竹を屠つて、上野下野と次第に斬靡けようといふのだから、北條征伐に狩出されるのなどは面白くなかつたに相違無い。ところが秀吉の方は大軍堂々と愈々北條征伐に出つて來たのだ。サア信書の往復や使者の馬の蹄の音の取り遣りでは無くなつた、今正に上方勢の旗印を讀むべき時が來たのだ。金の千成瓢簞に又一ツ大きな瓢簞が添はるものだらうか、それとも北條氏三鱗の旗が靈光を放つことであらうか、猿面冠者の軍略兵氣が眞實其實力で天下を取るべきものか。政宗は拔かぬ刀を左手に取り絞つて、ギロリと南の方を睥睨した。

たぎり立つた世の士に取つて慚づべき事と定まつてゐたことは何ケ條もあつた。其中先づ第一は「聞怯ぢ」といふので、敵が何萬來るとか、何十萬寄せるとか、或は猛勇で聞えた何某が向つて來るとかいふことを聞いて、其風聞に辟易して鬪ふ心が無くなり、降參とか逃走とかに料簡が傾くのを「聞怯ぢ」といふ。聞怯ぢする奴ぐらゐケチな者は無い。如何に日頃利口なことを云つてゐても聞怯ぢなんぞする者は武士では無い。次に「見崩れ」といふのは敵と對陣はしても、敵の潮の如く雲の如き大軍、又は勇猛鷙悍の威勢を望み見て、こいつは敵はないとヒヨコスカして逃腰になり、度を失ひ騷ぎかへるのである。聞怯ぢよりはまだしもであるが、士分の眞骨頭の無いことは同樣である。「不覺」といふのは又其次で、これは其働きの當を得ぬもので、「不覺」の好く無いことは勿論であるが、聞怯ぢ見崩れをする者よりは少しは恕すべきところもあり、「不鍛煉」は「不覺」が心掛の沸り足らないところから起るに比して又一段と罪の輕いもので、「場數を踏まぬ」ところから起る修行不足である。聞怯ぢ見崩れする奴ほど人間の屑は無いが、扨大抵の者は聞怯ぢもする、見崩れもするもので、獨逸のホラアフタ博士が地球と慧星が衝突すると云つたと聞いては、眼の色を變へて仰天し、某國のオドカシツク號といふ軍艦の大砲を見ては、腰が拔けさうになり、新學説、新器械だ、ツヘー、ハ、ア

ツと叩頭する輩は、皆是れ閉怯ぢ見崩れの手合で、斯様いふ手合が多かつたり、又大將になつてゐたりして呉れては、戰ならば大敗、國なら喪亡する。平治の戰の大將藤原信頼は重盛に馳向はれて逃出して終つた。あの樣な見崩れ人種が大將では義朝や悪源太が何程働いたとて勝味は無い。鞭聲粛々夜河を渡つた彼の猛烈な謙信勢が曉の霧の晴間から雷火の落掛るやうに哄と斬入つた時には、先づ大抵な者なら見ると直に崩れ立つところだが、流石に信玄勢のウムと堪へたところは豪快淋漓で、實に見上げたものだつた。政宗の秀吉に於ける態度の明らかに爽やかで無かつたのは、潔癖の人には不快の感を催させるが、政宗だとて天下の兵を敵にすれば敵にすることの出來る力を有つて居たので、彼の南部の九戸政實ですら兎に角天下を敵にして戰つた位であるから、まして政宗が然樣手ッ取早く歸順と決しかねても何の無理があらう。梵天丸の幼立からして、閉怯ぢ、見崩れをするやうなケチな男では無い。政宗幼い時は人に對して物羞をするやうな兒で、野面や大風な兒では無かつたゝめに、これは柔弱で、好い大將になる人ではあるまいと思つた者もあつたといふが、小兒の時に内端で人に臆したやうな風た者は柔弱臆病とは限らない、却つて早くから名譽心が潜み發達して居る爲に然樣いふ風になるものが多いのである。片倉小十郎景綱といふのは不幸にして奥州に生れたから陪臣でこそ終つたれ、京畿に生れたらば五十萬石七十萬石の大名には屹度成つて居たに疑無い立派な人物だが、其炯眼は早くも梵天丸の其樣子を衆人の批難するのを排して、イヤ〳〵、末頼もしい和子樣であると云つたといふ。二本松義繼の爲に遽に父の輝宗が攫ひ去られた時、鐵砲を打掛けて其爲に父も殺されたが義繼をも殺して了つた位のイラヒドイところのある政宗だ。關白の威勢や、三好秀次や、淺野長政や、前田利家や、徳川家康や、其他の有象無象等の信書や言語が何を云つて來たからと云つて、蜂の羽音、虻の羽音だ。そんな事に動く根性骨では無い。閉怯ぢ人種見崩れ人種ではないのである。自分が自分で合點するところがあつてから自分の碁の一石を下さうといふ政宗だ。確かに〳〵關白と北條とを見積

つてから何様とも決めようといふ料簡だ。向背の決着に遅々としたとても仕方は無いのだ。

そこで政宗が北條氏の様子をも上方勢の様子をも知り得る限り知らうとして、眼も有り才も有る者共を澤山に派出したことは猜知せられることだ。北條の方でも秀吉の方でも政宗を味方にしたいのであるから、便宜は何程でも有つたらうといふものだ。で、關白は愈々小田原攻にかゝり、事態は日に逼つて來た。ところへ政宗が出した視察者の一人の大峯金七は歸つて來た。

金七の復命は政宗及び其老臣等によつて注意を以て聽取られた。勿論小田原攻め視察の命を果して歸つたものは金七のみでは無かつたであらうが、其他の者の姓名は傳はらない。金七が還つての報告によると、猿面冠者の北條攻めの有様は尋常一様、武勇一點張りのものでは無い。其大軍といひ、一般方針といひ、それから又千軍萬馬往來の諸雄將の勇威と云ひ、大剛の士、覺えの兵等の猛勇で功者な事と云ひ、北條方にも勇士猛卒十八萬を蓄はへて居るとは云へ、到底關白を敵として勝味は無い。特に秀吉の軍略に先手先手と斬捲られて、小田原の孤城に退嬰するを餘儀なくされて終つて居る上は、籠中の禽、釜中の魚となつて居るので、遅かれ速かれどころでは無い、瞬く間に踏潰されて終ふ。然無くとも城中疑懼の心の堪へ無くなつた頃を潮合として扱ひを入れられて北條は開城をさせられるに至るであらう、といふことであつた。金七の言ふところは明白で精確と認められた。こゝに至つて政宗も亦今更ながら流石に秀吉といふものゝ大きな人物であるといふことを感じない譯には行かなかつた。沈默は少時一座を掩ふたことであらう。金七を退かせてから政宗は老臣等を見渡した。小田原が遣付けらるれば其次は自分である。北條も此方には陸奥守氏輝が遠藤基信に好みを通じて以來仲を好くしてゐる。猿面冠者を敵として立上るなら北條の亡ぼされぬ間に一日も早く上州野州武州と切つて出て北條に勢援すべきだが、仙道諸將とは豫てよりの深仇宿敵であり、北條の手足を捥ぐ爲に出て居る秀吉方諸

將の手並の程も承知して居ぬ。さればと云つて今更歸伏して小田原攻參會も時おくれとなつてゐる、忌々しくもある。切り合つて闘ひたいが自分の方の石の足らぬ碁だ、巧く保ちたいが少し手數後れになつて居る碁で幾許かの損は犠牲にせねばならなくなつてゐる。そして決着は孰れにしても急がねばならないところだ。胸算の顔は眼玉がパッチパチ、といふ柳風の句があるが、流石の政宗だから見苦しい眼パチ〳〵も仕無かつたらうけれど、しかし何様しても天下を敵に廻し、朝命に楯をついて、安倍の賴時や、泰衡の二の舞を仕て見たところで、骰子の目が三度も四度も我が思ふ通りに出ぬものである以上は勝てようが無いことは分明だ。そこで、殘念だが仕方が無い、小田原が潰されて終つてからでは後手の上の後手になる。もう何を措いても秀吉の陣屋の前に馬を繋がねばならぬ。と考へた。そこで、何様である、德川殿の勸めに就からうかと思ふが、といひながら老臣等を見渡すと、ムックりと頭を擡げたのが伊達藤五郎成實だ。

藤五郎成實は立派な奧州侍の典型だ、天正の十三年、即ち政宗の父輝宗が殺された其年の十一月、佐竹、岩城以下七將の三萬餘騎と伊達勢との觀音堂の戰に、成實の軍は味方と切離されて、敵を前後に受けて恐ろしい苦戰に陷つた。其時成實の隊の下郡山内記といふものが、此處で打死しても仕方が無い、一旦は引退かれるが宜くはないか、と云つた折に、ギリ〳〵と齒を切つて、ナンノ、藤五郎成實、魂魄ばかりに成り申したら歸りも致さう、生身で一歩でも後へさがらうか、と罵つて惡戰苦闘の有る限りを盡した。それで其戰も結局勝利になつたゝめ、今度の合戰、全く其方一手の爲に全軍の勝となつた、といふ感状を政宗から受けた程の勇者である。戰場には老功、謀略も無きにあらぬ中々の人物で、これも早くから信長秀吉の眼の近くに居たら一ケ國や二ケ國の大名にはなつたらう。政宗元服の式の時には此の藤五郎成實が太刀を奉じ、片倉小十郎景綱が小刀を奉じたのである。二人は眞に政宗が賴み切つた老臣で、小十郎も剛勇だが智略分別が勝り、藤五郎も智略分別に逞しいが勇武がそれよりも勝つて居たらしい。

其藤五郎成實が主人の上を思ふ熱心から、今や頭を擡げ眼を瞬つて、藤五郎存する旨を申上げたうござる、秀吉關東征伐は今始まつたことではござらぬ、既に去年冬よりして其事定まり、朝命に從ひ北條攻めの軍に從へとは昨年よりの催促、今に至つて小田原へ參向するとも時は晩れ居り、遲々緩怠の罪は免るゝところはござらぬ。たとへ嚴しく咎められずとも所領を召上げられ、多年弓箭にかけて攻取つたる國郡をムザ／＼離さねばならぬは必定の事、我が君今年正月七日の連歌の發句に、なゝくさを一ト手によせて摘む菜哉と遊ばされしは、仙道七郡を去年の合戰に得たまひしよりのこと、それを今更秀吉の指圖に就かれようとは口惜しい限り、とてもの事に城を搔き寨を構へ、天下を向ふに廻して爭はうには、勝敗は戰の常、小勢が勝たぬには定まらず、あはよくば、此方が切勝つて、旗を天下に樹つるに及ばうも知れず、思召しかへさせられて然るべしと存ずる、と勇氣凛々四邊を拂つて扇を膝に戰場叱咤の猛者聲で述べ立てた。其言の當否は兎に角、斯樣いふ場合斯樣いふ人の斯樣いふ言葉は少くも味方の勇氣を振興する功はあるもので、たとへ無用にせよ所謂無用の用である。ヘタ／＼と誰も降參氣分になつて終つたのでは其後がいけない、其家の士氣といふものが萎靡して終ふ。藤五郎も其處を慮つて斯樣いふことを言つたものかも知れぬ。政宗も藤五郎の勇氣ある言を嬉しく聞いたらう。然し何等の答は發せぬ。片倉小十郎は默然として居る。すると原田左馬介宗時といふ一老臣、これも伊達家の宗徒の士だが成實の言に反對した。伊達騷動の講釋や芝居で、むやみに甚い惡者にされて居る原田甲斐は、其實兇惡な者では無い、どちらかと云へばカツとするやうな直情の男だつたらうと思はれるが、其の甲斐は即ち此の宗時の末だ。宗時も十分に勇武の士で、思慮もあれば身分もあつた者だが、藤五郎の言を聞くと、イヤ／＼、其御言葉は一應御尤もには存ずるが、關白も中々世の常ならぬ人、匹夫下郎より起つて天下の旗頭となり、徳川殿の弓箭に長けたるだに、これに從ひ居らるゝといふものは、畢竟朝威を負うて事を執らるゝが故でござる、今若しこれに從はずば、勝敗利

害は姑らく擱き、上は朝廷に背くことになりて、朝敵の汚命を蒙り、從つて北條の如くに、あらゆる諸大名の箭の的となり鐵砲の的となるべく、行末の安泰覺束無きことにござる、と說いた。片倉小十郎も此時宗時の言に同じて、朝命に從はぬといふ名を負はされることの容易ならぬことを說いた、といふ說もあるが、また小十郎は其場に於ては一言も發せずに居たといふ說もある。其說に據ると小十郎は何等の言をも發せずに終つたので、政宗は其夜竊かに小十郎の家を訪うた。小十郎は主人の成りを悦び迎えた。政宗は小十郎の意見を質すと、小十郎は、天下の兵はたとへば蠅のやうなもので、これを撲つて逐うても、散じては復聚まつてまゐりまする、と丁度手にして居た團扇を揮つて蠅を撲つ狀をした。そこで政宗も大に感悟して天下を敵に取らぬことにしたといふのである。いづれにしても原田宗時や片倉小十郎の言を用ゐたのである。

そこで政宗は小田原へ趣くべく出發した。時が既に機を失したから兵を率ゐてゞは無く、云はゞ歸服を表示して不參の罪を謝するためといふ形である。藤五郎成實は留守の役、片倉小十郎、高野壹岐、白石駿河以下百騎餘り兵卒若干を從へて出た。上野を通らうとしたが上野が北條領で新關が處々に設けられてゐたから、會津から米澤の方へ出て、越後路から信州甲州を大廻りして小田原へ着いた。北條攻は今其最中であるが、關白は悠然たるもので、急に攻めて兵を損するやうなことはせず、ゆる〱と心長閑に大兵で取卷いて、城中の兵氣の弛緩して其變の起るのを待つてゐる。何の事は無い勝利に定まつてゐる碁だから煙草をふかして笑つてゐるといふ有樣だ。政宗參候の事が通ぜられると、あの卒直な秀吉も流石に直には對面をゆるさなかつた。箱根の底倉に居て、追つて何分の沙汰を待て、といふ命令だ。今更政宗は仕方が無い。底倉の溫泉の烟のもや〱した中に鬱陶しい身を埋めて居るよりほか無かつた。日は少し立つた。直に引見されぬのは勿論上首尾で無い證據だ。從つて來た者の中で譜代で無い者は主人に見限りを付け出した。情無い

娼妓以上の此奴隷生活

女

満十五年の悲惨な勞働苦

細井和喜藏著

奴隷解放の巨彈

我等は享樂勞働に服しつつある彼娼妓等を解放する前に、記號で形容できぬ勞働苦の三百萬女工の解放に努力すべきだ。 彼等は强慾比なき資本家に[illegible]使されつつ、[illegible]

ものだ。婆や爺は自分がたかつて居た其人の壽命が怪しくなると逃げる。貧乏すれば新らしい女は逃腰になると聞いたが、政宗に從つてゐた新らしい武士は逃げて退いた。其中でも矢川野伊豆などいふ奴は逃出して故郷の大里城に據つて伊達家に對して反旗を飜へした位だ。そこで政宗の從士は百騎あつたものが三十人ばかりになつて終つた。

ところへ潮加減を量つて法印玄以、施藥院全宗、宮部善祥坊、福原直高、淺野長政諸人が關白の命を含んで糺問に遣つて來た。淺野彌兵衛が頭分で、いづれも口利であり、外交駈引接衝應對の小手の利いた者共である。然し彌兵衛等も政宗に會つて見て驚いたらう、先づ第一に年は僅に二十四五だ、短い髪を水引即ち水捻にした紙線で卷き立て、むづかしい眼を一ト筋縄でも二タ筋縄でも縛りきれぬ面魂に光らせて居たのだから、異相といふ言葉で昔から形容してゐるが、全く異相に見えたに相違無い。彌兵衛等もたゞ者で無いとは見て取つたらうが、關白の威光を背中に背負つて居るのであるから、先づ第一に朝命を輕んじて、早く北條攻に出陣しなかつたこと、それから蘆名義廣を逐拂つて私に會津を奪つたこと、二本松を攻略し、須賀川を屠り、勝手に四隣を蠶食した廉々を詰問した。勿論これは裏面に於て政宗の敵たる佐竹義宣が石田三成に此等の事情を宜いやうに告げて、そして大有力者の手を假りて政宗を取抑へようと謀つた爲であると云はれてゐる。政宗が陳辯は此等諸方面との取合ひの起つた事情を明白に述べて、武門の意氣地、弓箭の手前、已むに已まれず干戈を執つたことを云立てゝ屈しなかつた。又朝命を輕んじたといふ點は、四隣皆敵で遠方の樣子を存じ得申さなかつたからといふので言開きをした。翌日復彌兵衛等は到つて種々の點を責めたが、結局は要するに會津や仙道諸城、即ち政宗が攻略蠶食した地を納め奉るが宜からうと好意的に諭したのである。そこで政宗は仕方が無い。もとより我慾によつて國郡を奪つたのではござらぬ、といふ潔い言葉に吾が身をよろほつて、會津も仙道諸郡も命のまゝ差上げることにした。

時は明いた。秀吉は政宗に侍從の職を上納することを命じ、米澤三十萬石を舊の如く與ふることにし、それで不服なら國へ歸つて何とでもせよ、と優しくもあしらひ、強くもあしらつた。齒のあらい、通りのよい、手丈夫な立派な好い大きな櫛だ。天下の整理は是の如くにして捗取るのだ。惺々は惺々を愛し、好漢は好漢を知るといふのは小說の常套文句だが、秀吉も一瞥の中に政宗を「くせ者ではあるが好い男だ」と思つたに疑無い。政宗も秀吉を「いやなところも無いでは無いが素晴らしい男だ」と思つたに疑無い。人を識るは一面に在り、酒を品するは只三杯だ。打たずんば交りをなさずと云つて、瞋拳毒手の毆り合までやつてから眞の朋友になるのもあるが、一見して交を結んで肝膽相照らすのもある。政宗と秀吉とは何樣だつたらう。双方共に立派な男だ。ケチビンタな神經衰弱野郎、蜆貝のやうな小さな腹で、少し大きい者に出會うと些も容れることの出來ないソンナ手合では無い。喚や餓鬼を愛することが出來るに至つて人間並の男で、好漢を愛し得るに至つてはじめて是れ好漢、仇敵を愛し得るに至つてホントの出來た男なのだ。猿面冠者も獨眼龍も立派な好漢だ。ケチビンタな蜆貝野郎では無い。貴樣が擬ねて聞いた伊達藤次郎か、おぬしが擬ねて聞いた木下藤吉か、と互に面を見合せて重瞳と隻眼と相射つた時、ウーム、面白さうな奴、話せさうな奴、と相愛したことは疑無い。だが、お互に愛しきつたか何樣だか。イヤお互に底の底までは愛しきれなかつたに違無い。政宗は秀吉の男ぶりに感じて之を愛したには相違ないが、歸つてから人に語つて、其の底の底までは愛しきらぬところを洩したことは堯雄僧都話に見えて居るとされてゐる。秀吉も政宗の押へに彼の手強な蒲生氏鄕を置いたところは愛してばかりは居なかつた證據だ。藤さんと藤さんとお互に六分は愛し、四分は餘白を留めて居たのである。戰亂の世の事だ、孰れにも無理は無いと爲すべきだ。

關白が政宗に佩刀を預けて山へ上つて小田原攻の手配りを見せた談などは今姑く措く。さて政宗は米澤三十萬石に削

られて歸國した。七十萬石であつたといふ說もあるが、然樣いふことは考證家の方へ預ける。秀吉が政宗の歸國を許したに就ては、秀吉の左右に、折角山を出て來た虎を復び深山に放つやうなものである、と云つた者があるといふことだ。そんなことを云つた者は多分石田左吉の輩でゝもあらう。其時秀吉は笑つて、おれは弓箭沙汰を用ゐないで奧羽を平定して終ふのだ、汝等の知るところでは無い、と云つたといふが、實に其邊は秀吉の好いところだ。政宗だとて何で一旦關白面前に出た上で、復今更に牙をむき出し毛を逆立てゝ咆哮しようやである。

小田原は果して手强い手向ひもせず、埒も無く軍氣が沮喪して自ら保てなくなり、終に開城するの已むを得ざるに至つた。秀吉は何をするのも輕々と手早い大將だ、小田原が濟むと直に諸將を從へて奧州へと出掛けた。威を示して出羽奧州一ト撫でに治めて終はうといふのである。政宗が服したのであるから双向はうといふ者は無い。秀吉が宇都宮に宿營した時に政宗は片倉小十郞を從へて迎接した。小十郞は大谷吉隆に就いて主家を惡く太閤に思取られぬよう行屆いた處置をした。吉隆も人物だ。小十郞が會津蘆名の舊領地の圖牒の入つて居る筐を開いて示した時には默つて開かせながら、米澤の伊達舊領の圖牒の入つて居る筐を小十郞が開いて示さうとした時には、イヤそれには及び申さぬ、と挨拶したといふ。大谷吉隆に片倉景綱、これも好い取組だ。互に拔目の無い擧動應對だつたらう。秀吉の前に景綱も引見された時、吉隆が、會津の城御引渡しに相成るには幾日を以てせらるゝ御積りか、と問うたら、小十郞は、たゞ留守居の居るばかりでござる、何時にても差支はござらぬ、と云つたといふが、好い挨拶だ、平生行屆いてゐて、事に當つて埒の明く人であることが伺はれる。これで其上に剛勇で正實なのだから、秀吉が政宗の手から取つて仕舞ひたい位に思つたらう、大名に取立てようとしたが、小十郞は恩を謝するだけで固辭して、飽迄伊達家の臣として身を置くを甘んじた。これも亦感ずべきことで、何といふ立派な其人柄だらう。淺野六右衞門正勝木村彌一右衞門淸久は會津城を受取つた。七

月に小田原を潰して、八月にもう秀吉は會津に居たのであつた。歴史上から云へば會津は蘆名に戻さるべきだが、蘆名は一度もう落去したのである。自己の地位を自己で保つ能力の欠乏して居ることを現はして居るものである。此の樞要の地を材略武勇の足らぬものに托して置くことは出來ぬ。まして伊達政宗が連年血を流し汗を瀝らして切取つた上に據つたところの地で、いや／＼ながら差出したところであり、人情として涎を垂らし頤を朶れて居るところである、又然なくとも倔強なる奧州の地武士が何を仕出さぬとも限らぬところである、又然樣いふ心配が無くとも廣濶な出羽奧州に信任すべき一雄將をも置かずして、新付の奧羽の大名等の誰にもせよに任かせて置くことは出來ぬところである。是に於て誰か知ら然る可き人物を會津の主將に据ゑて、奧州出羽の押への大任、わけては伊達政宗をのさばり出させぬように、表はじつとりと扱つて事端を發させぬように、内々はごつゝりと手強くアテゝ屏息させるやうな、シツカりした者を必要とするのである。

此のむづかしい場處のむづかしい場合の、むづかしい役目を引受けさせられたのが鎭守府將軍田原藤太秀郷の末孫と云はれ、江州日野の城主から起つて、今は勢州松坂に一方の將軍星として光を放つて居た蒲生忠三郎氏郷であつた。

氏郷が會津の守護、奧州出羽の押へに任ぜられたに就ては面白い話が傳へられてゐる。その話の一ツは最初に秀吉が細川越中守忠興を會津守護にしようとしたところが、越中守忠興が固く辭退した。そこで飯鉢は氏郷へ廻つた、といふことである。細川忠興も立派な一將であるが、歌人を以て聞えた幽齋の後で、人物の誠實溫厚は餘り有るけれど、不知案内の土地へ移つて、氣心の知り兼ねる政宗を向ふへ廻して取組まうといふには如何であつた。若し其說が眞實であるとすれば、忠興が固辭したといふことは、忠興の智慮が中々深くて、能く己を知り彼を知つて居たといふことを大に揚げるべきで、忠興の人物を一段と立派にはするが、秀吉に取つては第一には其の眼力が心細く思はれるのであり、第二

に辭退されて、ア、然樣か、と濟ませたことが下らなく思はれるのである。で、この話は事實で有つたか知らぬが面白く無く思はれる。

又今一つの話は、秀吉が會津を誰に托さうかといふので、德川家康と差向ひで、互に二人づゝ候補者を紙札に書いて置いてから、そして出して見た。ところが秀吉の札では一番には堀久太郎秀治、二番には蒲生忠三郎、家康の札では一番に蒲生忠三郎、二番に堀久太郎であつた。そこで秀吉は、奧州は國侍の風が中々手强い、久太郎で無くては、と云ふと、家康は、堀久太郎と奧州者とでは茶碗と茶碗でござる、忠三郎では無くては、と云つたといふのである。茶碗と茶碗とは、固いものと固いものとが衝突すれば双方碎けるばかりといふ意味であらう。で、秀吉が悟つて家康の言を用ゐたのであるといふのだ。此談は餘程おもしろいが、此談が眞實ならば、猿では無いが家康は眼が高くて、秀吉は猿のやうに鼻が低くなる譯だ。堀久太郎は强いことは强いが、後に至つて慶長の三年、越後の上杉景勝の國替のあとへ四十五萬石（或は七十萬石）の大封を受けて入つたが、上杉に陰で糸を牽かれて起つた一揆の爲に大に手古摺らされて困つた不成績を示した男である。又氏鄕は相縁奇縁といふものであらう、秀吉に取つては主人筋である信長の婿でありながら秀吉には甚だ忠誠であり、縁者として前田又左衞門利家とは大の仲好しであつたが、家康とは餘り交情の親しいことも無かつたのであり、政宗は却て家康と馬が合つたやうであるから、此談も些受取りかねるのである。

今一ツの傳説は、秀吉が會津守護の人を選ぶに就いて諸將に入札をさせた。ところが札を開けて見ると、細川越中守といふのが最も多かつた。すると秀吉は笑つて、「おれが天下を取る筈だは、こゝは蒲生忠三郎で無くてはならぬところだ」と云つて氏鄕を任命したといふのだ。おれが天下を取る筈だは、といふ意は人々の識力眼力より遙に自分が優つて居るといふ例の自慢である。此話に據ると、會津に蒲生氏鄕を置かうといふのは最初から秀吉の肚裏に定まつて居た

ことで、入札はたゞ諸將の眼力を秀吉が試みたといふことになるので、などが些訝かしい。往復ハガキで下らない質問の回答を種々の形の瓢箪先生がたに求める雜誌屋の先祖のやうなものに千成瓢箪殿下が成下るところが聊か憫然だ。いろ〳〵の話の孰れが眞實だか知らないが、要するに會津守護は當時の諸將の間の一問題で好談柄で有つたらうから、隨つて種々の臆測話や私製任命や議論やの話が轉傳して殘つたのかも知れないと思はざるを得ぬ。

何はあれ氏郷は會津守護を命ぜられた。ところが氏郷も一應は辭した。それでも是非賴むといふ譯だつたらう。そこで氏郷は條件を付けることにした。今の人なら何か自分に有利な條件を提出して要求するところだが此時分の人だから自己利益を本として釣鉤の鐖のやうなイヤなものを出しはしなかつた。たゞ與へられた任務を立派に遂行し得るように其便宜を與へられることを許されるやうに、といふことであつた。それは奥羽鎭護の大任を全うするに付けては剛勇の武士を手下に備へなければならぬ、就ては秀吉に對して嘗て敵對行爲を取つて其忌諱に觸れたゝめ今に何の大名にも召抱へられること無くて居る浪人共をも宥免あつて自分の旗の下に置くことを許容されたいといふのであつた。まことに此の時代の事であるから、一能あるものでも嘗て秀吉に鋒先を向けた者の浪人したのは、たとひ召抱へたく思ふ者があつても關白への遠慮で召抱へかねたのであつた。氏郷の申出は立派なものであつた。秀吉たる者之を容れぬことの有らう筈は無い。敵對又は勘當の者なりとも召抱扶持等隨意たるべきことゝいふ許しは與へられた。小田原の城中に居た佐久間久右衛門尉は柴田勝家の甥であつた。同じく其弟の源六は佐々成政の養子で、二人何れも秀吉を擊取にかゝつた猛將佐久間玄蕃の弟であつたから重々秀吉の惡しみは掛つてゐたのだ。此等の士は秀吉の敵たる者に扶持されぬ以上は秀吉が威權を有して居る間は假令器量が有つても世の埋木にならねばならぬ運命を負うて居たのだ。まだ其他にも斯樣いふ者は澤山有つたのである。德川家康に惡まれた水野三右衛門の如きも其一例だ。當時自己の臣下で自分に背いた不埒

な奴に對して、何々といふ奴は當家に於て差赦し難き者でござると言明すると、何の家でも其者を召抱へる大名が有れば其大名と前の主人とは弓箭沙汰になるのである。これは不義背德の者に對する一種の制裁の律法であつたのである。そこで斯樣いふ埋木に終るべき者を取入れて召抱へる權利を此機に乘じて秀吉から得たのは實に賢いことで、氏鄕に取つては其大を成す所以である。前に擧げた水野三右衛門の如きも德川家から赦されて氏鄕に屬するに至り、佐久間久右衛門尉兄弟も氏鄕に召抱へられ、其他同樣の境界に沈淪して居た者共は、自然關東へ流れ來て、太閤に敵對行爲を取つた小田原方に居たから、小田原沒落を機として氏鄕の招いだのに應じて、所謂戰場往來のおぼえの武士が吸寄せられたのであつた。

氏鄕が會津に封ぜられると同時に木村伊勢守の子の彌一右衛門は奥州の葛西大崎に封ぜられた。葛西大崎は今の仙臺よりも猶奥の方であるが、政宗の手は既に其邊にまで伸びて居て、前年十一月に大崎の臣の湯山隆信といふ者を引込んで、内々大崎氏を罔らしめて居たのである。秀吉が出て來さへしなければ、無論大崎氏葛西氏は政宗の麾下に立つを餘儀なくされるに至つたのであらう。此の木村父子は小身でもあり、武勇も然程では無い者であつたから、秀吉は氏鄕に對して、木村をば子とも家來とも思つて加護つて遣れ、木村は氏鄕を親とも主とも思つて仰ぎ頼め、と命令し訓諭した。これは氏鄕に取つては旅行に足弱を托けられたやうなもので、何事も無ければまだしも、何事か有つた時には隨分厄介な事で迷惑である。が、致方は無い、領承するよりほかは無かつたが、果して此の木村父子から事起つて氏鄕は大變な目に會ふに至つて居るのである。

氏鄕は何樣な男であつたらう。田原藤太十世の孫の俊賢が初めて近州蒲生郡を領したので蒲生と呼ばれた家の賢秀といふものゝ子である。此の蒲生郡を慶長六年即ち關ヶ原の戰の濟んだ其翌年、三月に至つて家康は政宗に賜はつて居る。

仲の惡かつた氏郷の家の地を貰つたから、大きな地で無くても政宗には一寸好い心地であつたらうが、既に早く病死して居た氏郷に取つては泉下に厭な心持のしたことで有らう。家康も亦一寸變なことをする人である。氏郷の父の賢秀といふのは、當時の日野節の小歌に、「陣とだに云へば下風おこる、具足を脱ぎやれ法衣召せ」と歌はれたと云はれもしてゐる。下風といふ言葉は餘り聞かぬ言葉で、醫語かとも思ふが的證を知らぬ。たゞ普通の漢語の其下風に立つなどゝいふ語とは譯が違ふことは云ふまでも無い。醫家で風といふのは其葉が甚だ多くて、頭風といへば頭痛、驚風といへば神經疾患、中風といへば腦溢血其他からの不仁の病、痛風はレウマチス、猶馬痺風だの何だと云ふのがあるが、病とか邪氣とかいふのと同じ位の廣い意味を有して居て、又一般にたゞ風といへば氣狂といふ意で、風倂といへば即ち氣狂坊主である。中風の中は上中下の中では無いと思はれるから下風とは關せぬ。下風は身體から風を泄らすことらしい。鄙しい語にヤツナ何とかいふのが有る。其人が心弱くて、戰爭とさへ云へば下風おこる、とても武士には爲りきらぬ故に甲冑を脱ぎ捨てゝ法衣を被よ、といふのが一首の歌の意である。これが果して賢秀の上を嘲つたのならば、賢秀は仕方の無い人だが、又其子に忠三郎氏郷が出たものとすれば、氏郷は愈々偉いものだ。然し蒲生家の者は、其歌は賢秀の上を云つたのでは無く、賢秀の小舅の後藤末子に宗禪院といふ山法師があつて、山法師の事だから兵仗にもたづさはつた、其人の事だ、といふのである。成程然樣でなければ、法衣めせの一句が唐突過ぎるし、又領主の事を然樣酷く嘲りもすまいし、且又賢秀は信長に「義の侍」と云はれたといふことから考へても、賢秀の上を歌つたものではないらしい。但し賢秀が怯くても剛くても、親父の善惡は悴の善惡には響くことでは無い。親父は悴の手細工では無い。賢秀は佐々木の徒黨であつたが、佐々木義賢が凡物で信長に逐落されたので、一旦は信長に對し死を決して敵となつたが、縁者の神戸藏人の言に從つて信長に附いた。神戸藏人は信長の子の三代信孝の養父である。そこで子の鶴千代丸即ち後年

の氏郷は十三歳で信長のところへ遣られた。云はゞ賢秀に異心無き證據の人質にされたのである。

信長は鶴千代丸を見ると中々の者だつた。十三歳といへば尋常中學へ入るか入らぬかの齢だが、沸り立つてゐる世の中の兒童だ、三太郎甚六等の御機嫌取りの少年雜誌や、アメリカの牛飼馬飼めらの下らない喧嘩の活動寫眞を看ながらアメチヨコを嘗めて育つお坊ちやんとは譯が違ふ。其の物ごし、物言ひにも、段々と自分を鍛ひ上げて行かうといふ立派な心の閃きが見えたことであるか、信長は賢秀に對つて、鶴千代丸が目つき凡ならず、たゞ者では有るべからず、信長が婿にせん、と云つたのである。これは賢秀の心を攬る爲に云つたのでは無く、其翌年鶴千代丸に元服をさせて、信長の彈正忠の忠の字に因み、忠三郎秀賦と名乘らせて、眞に其言葉通り婿にしたのである。目つきは成程其人を語るが、信長が人相の術を知つて居る譯では無い。十三歳の子供の目つきだけでは婿に取るとまでは惚れないだらうが、別に斯樣いふことが傳へられてゐる。それは鶴千代丸は人質の事ゆゑ町野左近といふ者を附人として信長居城の岐阜へ置いた。或時稻葉一鐵が來て信長と軍議に及んだ。一鐵は美濃三人衆の第一で、信長が淺井朝倉を取つて押へるに付けては大切を立てゝ居る大剛にして武略も有つた一將だ。然し信長に取つては外樣なので、後に至つて信長が其將材を憚つて殺さうとした位だ。ところが茶室に懸つて居た韓退之の詩の句を求められるまゝに讀み且つ講じたので、それを聞いた信長が感じて殺さずに終つたのである。韓退之の詩は大抵字遣ひが嶮峻艱奥であるのに、何樣いふ句だつたか知らぬが、坊主かへりの士とは云へ、戰亂の世に於て之を味はふことが出來たと云へば修養の程も思ふ可き立派な文武の達人だ。此の一鐵と信長とが、四方の經略、天下の仕置を談論してゐた。夜は次第に更けたが、談論は盡さぬ。もとより機密の談だから雜輩は席に居らぬ。燭を剪り扇を揮つて論ずる物靜かに奥深き室の夜は愈々更けて沈々となつた。一鐵がフト氣がついて見ると、信長の坐を稍々遠く離れて蒲生の小倅が端然と坐つてゐた。坐睡をせぬまでも、十三歳やそこらの

小童だから、眼の皮をたるませて退屈もきつて居るべき筈だのに耳を傾け魂を入れて聞いて居た樣子は、少くとも信長や自分の談論が解つて、そして其上に興味を有つてゐるのだ。流石に武勇のみでない一鐵だから人を鑑識する道も知つてゐる。や、こりや偉い物だぞ、今の年齢で斯樣では、と感歎して、畏るべし、畏るべし、此兒の行末は百萬にも將たるに至らう、と云つたといふ。隨分怜悧な婆奴でも、可い加減に年を取つた髯面野郎でも、相手にせずに其處へ坐らせて置いて少し上品な談話でも仕て居ると、大抵の者は自分は自分だけの胸の中で下らぬ事を考へて居るか坐睡りしたりするものである。鶴千代丸の此事のあつたのは、たゞ者で無いことを語つてゐる。一鐵の眼に入つたほどのものが、信長の胸に映らぬことは無い。おまけに信長は人を試みるのが嫌ひでは無い男で、森蘭丸が正直か不正直かを試みた位であるから、何ぞに附けて鶴千代丸を確と見定めるところがあつて、そして吾が婿にと惚れ込んだのであらう。

鶴千代丸は信長一鐵の鑑識に負かなかつた。十四歳の八月の事である。信長が伊勢の國司の北畠と戰つた時、鶴千代丸は初陣をした。蒲生家の覺えの勇士の結解十郎兵衛、種村傳左衛門といふ二人にも先んじて好い敵の首を取つたので、鶴千代に付置かれた二人は面目無いやら嬉しいやらで舌を卷いた。信長も大感悅で手づから打鮑を取つて給はつたが、そこで愈々其歳の冬十二になる女子を與へて岐阜で式を行ひ、其女子に乳人加藤次兵衛を添へて、十四と十二の夫婦を日野の城へと遣つた。もはや人質では無く、京畿に威を振つた信長の縁者、小さくは有るが江州日野の城主の若君として世に立つたのである。

これよりして忠三郎は信長に從つて各處の征戰に從事して功を立てゝ居り、信長が光秀に弑された時は、光秀から近江半國の利を啗はせて誘つたけれども節を守つて屈せず、明智方を引受けて城に據つて戰はんとするに至つた。それから後は秀吉の旗の下に就いて段々と武功を積んだが、特に九州攻めには、堀秀政の攻めあぐんだ巖石の城に熊井越中守

を攻め伏せて勇名を轟かした。今氏郷の功績を注記したい意も無いから省略するが、かくて十餘年の間に次第に大身になり羽柴の姓を賜はつて飛彈守氏郷といへば味方は賴もしく思ひ、敵は恐ろしく思ふ一方の雄將となつて終つた。秀賦の名は秀吉と相犯すを忌んで、改めて氏郷としたのであつて、先祖田原藤太秀郷の郷の字を取つたのである。天正の十六年、秀吉が聚樂の第を造つた其年、氏郷は伊勢の四五百森へ城を築いて、これを松坂と呼んだ。前の居城松ケ島の松の字を目出度しとして用ゐたのである。當時正四位下左近衛少將に任官し、十八萬石を領するに至つた。

小田原陣の時、無論氏郷は兵を卒ゐて出陣して居て、割合に他の大名よりは戰に遇つて居り、戰功をあらはして居る。それから關白が武威を奥羽に示すのに從屬して、宇都宮から會津と附いて來たのであるが、今しも秀吉の鑑識を以て會津の城主、奥州出羽の押へといふことに定められたのである。

氏郷は法を執ること嚴峻な人で、極端に自分の命令の徹底的ならんことを然る可き事とした人である。勿論亂れ立つた世に在つては一軍の主將として下知の通りに物事の捗ぶのを期するのは至當の譯で、然無くても軍隊の中に於ては下下の心任せなどが有つてはならぬものであるが、それでも自らに寛嚴の異があり程度がある。郭子儀、李光弼はいづれも居の名將であるが、陣營の中のさまは大に違つてゐたことが傳へられてゐる。氏郷は恐ろしく嚴しい方で、小田原陣出發の時に松坂を立つた二月七日の事だ。一人の侍に蒲生重代の銀の鯰の兜を持たせて置いたところ、氏郷自身先陣より後陣まで見廻つたとき、此處に居よといふところに其侍が居なかつた。そこで氏郷が、屹度此處に居よ、と注意を與へて置いて、それから組々を見廻り終へて還つた。よく〳〵取締めた所存の無かつた侍と見えて、復もや此處に居よと云付けたところに居なかつた。すると氏郷は物も言はずに馬の上で太刀を拔くが否や、そつ首丁と打落して、兜を別の男に持たせたので、士卒等これを見て舌を振つて驚き、一軍粛然としたといふことである。巖石の城を攻落した時に、

上坂左文、横山喜内、本多三彌の三人が軍奉行でありながら令を犯して進んで戰つたので嚴しく之を咎めたところ、上坂横山の二人は自分の高名の爲では無く、火を城に放たうと思うたのであると苦しい答辯をしたので免されたが、本多は云分立たずであつたので、勘當されて終つた。三彌は徳川家の譜代侍の本多佐渡正信の弟で、隱れ無い勇士であつたが其の如くで、其他旗本から拔け出でゝ、進み戰つた岡左内、西村左馬允、岡田大介、岡半七等、いづれも剛强の者共で、其戰に功が有つたのだつたが皆暇を出されて浪人するの已むを得ざるに至つた。氏鄕は是の如く嚴しい男だつたが、他の一面には又人を遇するにズバリとした氣持の好いところも有つた人だつた。必らずしも重箱の中へ羊羹をギチリと詰めるやうな形式好き融通利かずの偏屈者では無かつた。前に擧げた關白其他に敵對行爲を取つて世の除され者になつた强者共を召抱へた如きは其著しい例で、斯樣いふ妙味のある談さへ傳はつてゐる。それは氏鄕が關白に從つて征戰を上方やなんぞで勵んで居た頃、即ち小田原陣前の事であらうが、或時松倉權助といふ士が蒲生家に仕官を望んだ。權助は筒井順慶に仕へて居たが何樣いふ譯であつたか臆病者と云はれた。そこで筒井家を去つたのであるが、蒲生家へ扶持を望むに就いて斯樣いふことを云つた。「拙者は臆病者と云はれた者でござる、但し臆病者も良將の下に用ゐらるゝ道がござらば御扶持を蒙りたうござる」と云つたのである。筒井家は順慶流だの洞ケ峠だのといふ言葉を今に遺してゐるまで、餘り武邊の芳ばしい家ではない。其家で臆病者と云はれたのは虛實は兎に角に、是も芳ばしいことでは無い。ところが氏鄕は其男を呼出して對面した上、召抱へた。自分から臆病者と名乘つて出た正直なところを買つたのだらう、正直者には勇士が多い。臆病者が知遇に感じて强くなつたか、多分は以前から臆病者なぞでは無かつたのだらう、合戰ある毎に好い働きをする。で氏鄕は忽ち物頭にして二千石を與へたといふのである。後に此男が打死したところ氏鄕が自ら責めて「おれが惡かつた、も少しユックリ取立てゝ遣つたらば强ひて打死もせずに段々武功を積んだらうに」

と云つたといふことだ。此話を咬みしめて見ると松倉權助もおもしろければ氏郷も面白い。

氏郷は法令嚴峻である代りには自ら處するとも一毫の懈怠も無い、徹底して「武人」の面目を保ち徹底して武人の精神を操つてゐる。所謂「たぎり切つた人」である、ナマヌルな奴では無い。蒲生家に仕官を望んで新規に召抱へられる侍があると、氏郷は斯樣云つて敎へたといふことである。「當家の奉公はさして面倒な事は無い、たゞ戰場といふ時に、銀の鯰の兜を被つて油斷なく働く武士がある 其武士に愧ぢぬやうに心掛けて働きさへすればそれでよい」と云つたといふ。勿論これは未だ小身であつた時の事で有らうが、訓諭も絲瓜も入つたものではない、人を使ふのはこれで無ければ嘘だ。碌な店も工場も持つて居ぬ奴が小やかましい說敎沙汰ばかりを店員や職工に下して、おのれは坐蒲團の上で烟草をふかしながら好い事を仕たがる如き蟲ツたかりとは丸で段が違ふ。言ふまでも無く銀の鯰の兜を被つて働く者は氏郷なのである。斯樣いふ人だつたから四位の少將、十八萬石の大名となつてからも、小田原陣の時は驚くべき危險に身を暴露して手嚴しい戰をして居る。それは氏郷の方から好んで爲出したことではないが、他の大將ならば或は逍遙的態度に出て、そして敵をして其企圖を多少なりとも成就するの利を得、味方をして損害を被るの勢を成さしめたであらうに、氏郷が勇敢に職責を嚴守したので、敵は何の功をも立てることが出來なかつた。それは五月三日の夜の事で、城中に居縮んでばかり居ては軍氣は日に衰へるばかりなゆゑに、北條方にさる者有りと聞えた北條氏房が廣澤重信をして夜討を掛けさせた時と、七月二日氏房が復春日左衞門尉をして夜討を掛けさせた時とである。五月三日の夜のは小田原勢がまだ勢の有つた時なので中々猛烈であつたが蒲生氏郷勢の奮戰によつて勿論逐拂つた。然し其時の鬪は如何にも突嗟に急激に敵が斫入つたので、氏郷自身まで鎗を取つて戰ふに至つたが、事濟んで營に歸つてから身内をあらためて見ると、鎧の胸板掛算(けさん)に劍太刀疵箭疵が四ケ處、例の銀の鯰の兜に矢痕が二ツ、鎗の柄には刀痕が五ケ處あつたといふ。以

て氏郷が危険を物の數ともせずして、自分の身を自分が置くべきとする處に置いた以上は一步も半步も退かぬ剛勇の人であることが窺ひ知られる。つまり氏郷は他を律することも嚴峻な代りに自ら律することも嚴峻な人だつたのである。是の如き人は主人としては畏ろしくもあれば頼もしくもある人で、敵としては所謂手強い敵、味方としては堅城鐵壁のやうなものである。然し是の如き人には、やゝもすれば我執の强い、古い言葉で云へば「カタムクロ」の人が多いものだが、流石に氏郷は器量が小さくない、サラリとした爽朗快活なところもあつた人だ。嘗て九州陣巖石の城攻の時に軍令に背いて勘當された臣下の者共が、氏郷と交情の好かつた細川越中守忠興を頼んで詫言をして貰つて、後新に召抱へられることになつた。其中に西村左馬允といふ者があつて、大の男の大力の上に相撲は殊更上手の者であつた。其男が勘當を赦されて新に召還されたばかりの次の日の朝出仕すると、左馬允、汝は大力相撲上手よナ、さあ一番來い、おれに勝てるかい、といふので氏郷が相撲を挑んだ。氏郷ももとより非力の相撲弱では無かつたのであらう。左馬允は弱つた。勘氣を赦されて歸り新參になつたばかりなので、主人を叩きつけて主人が好い心持のする筈は無いから、當惑するのに無理は無い。然し主命である、挑まれて相手にならぬ譯には行かぬから、心得ましたと引組んで捻合つた。勝てば怒られる、わざと負けるのは輕薄でもあり心外でもある、と惑はぬことは無かつたらうが、そこは人の魂の沸り立つて居る代である、左馬允は思ひ切つて大力を出してとう〳〵氏郷を捻倒した。そこで、ヤア左馬允、汝は强い、と主人に笑つて貰へれば上首尾なのだが、然樣は行かなかつた。忠三郎氏郷ウンと緊張した顏つきになつて、無念である、サアもう一度來い、と力足を踏んで眼ざし鋭く、再鬪を挑んだ。觀て居る者は氣の毒で堪らない。オヤ〳〵左馬允も、負ければ無事だらうが、勝つた段にはもと〳〵勘氣を蒙つた奴である、手討になるか知れたものでは無い、と危んだ。左馬允も斯樣なつては是非が無い。こゝで負けては假令過まつて負けたにしても輕薄者表裏者になると思つたから、油斷な

く一生懸命に捻合つた。双方死力を出して爭つた末、とう〳〵左馬允は氏郷を遣付けた。其時はじめて氏郷は莞爾と笑つて、好い奴だ、汝は此の乃公に能う勝つたぞ、と褒美して、其翌日知行米加增を出したといふ。此談の最初一度行けたところで、褒詞を左馬允に與へて濟ます位のところなら、少し腹の大きい者には出來ることだが、二度目の取ッ組合をしたところが一寸面白い。氏郷の肚は濶いばかりでなく、奥深いところがあつた。

斯様いふ性格で、手厳しくもあり、打開けたところもあり、そして其能は勇武もあり、機略もあつた人だが、其上に氏郷は文雅を喜び、趣味の發達した人であつた。矢叫び鬨の聲の世の中でも放火殺人專門の野蠻な者では無かつた。机に憑りて靜坐して書籍に親んだ人であつた。足利以來の亂世でも三好實休や太田道灌や細川幽齋は云ふに及ばず、明智光秀も豐臣太閤も武田信玄も上杉謙信も前に擧げた稻葉一鐵も伊達政宗も、皆文學に志を寄せたもので、要するに文武兩道に達するのが良將名將の資格とされて居た時代の信仰にも因つたらうが、そればかりでも無く、人間の本然の欺き掩ふ可からざるところから、優等資質を有して居る者が文雅を好尙するのは自らなることでも有つたらう。今川や大内などのやうに文に傾き過ぎて弱くなつたのもあるが、大將たる程の者は大抵文道に心を寄せてゐて、相應の造詣を有して居た。我儘な太閤殿下は、「奥山に紅葉踏分け鳴く螢」などといふ句を詠じて、細川幽齋に「しかとは見えぬ灯のともし火」と苦しみながら唸り出させたといふ笑話を遺して居るが、それでも聚樂第に行幸を仰いだ時など、代作か知らぬが眞面目くさつて月並調の和歌を詠じてゐる。政宗の「さゝずとも誰かは越えん逢阪の關の戸埋む夜半の白雪」などは關路雪といふ題詠の歌では有らうか知らぬか何様して中々素人では無い。「四十年前少壯時、功名聊復自私期。老來不識干戈事、只把春風桃李巵」なぞと太平の世の好いお爺さんになつてニコ〳〵しながら、それで居て支倉六右衛門、松本忠作等を南蠻から羅馬かけて遣つて居るところなどは、味なところのある好い男ぶりだ。その政宗監視の役に當つた

氏郷は、文事に掛けても政宗に負けては居なかつた。政宗方との領分爭ひに、安達ケ原は蒲生領でも川向ふの黒塚といふところは伊達領だと云ふことであつた時、平兼盛の陸奥の安達が原の黒塚に鬼籠れりといふはまことかといふ歌があるから安達が原に附屬した黒塚であると云つた氏郷の言に理が有ると認められて蒲生方が勝になつたといふ談は面白い公事として名高い談である。其の逸話は措いて、氏郷が天正二十年即ち文祿元年朝鮮陣の起つた時、會津から京まで上つて行つた折の紀行をものしたのは今に遺つてゐる。文段歌章、當時の武將のものとしては其才學を稱すべきものである。辭世の歌の「限りあれば吹かねど花は散るものを心短き春の山風」の一章は誰しも感歎するが實に幽婉雅麗で、時や祐けず、天吾を亡ふ、英雄志を抱いて黃泉に入る悲凉愴凄の威を如何にも美はしく詠じ出したもので、三百年後の人をして猶涙珠を彈ぜしむるに足るものだ。そればかりでは無い、政宗も底倉幽居を命ぜられた折に、心配の最中でありながら千利休を師として茶事を學んで、秀吉をして「邊鄙(ひな)の都人」だと嘆賞させたが、氏郷は早くより茶道を愛して、しかも利休門下の高足であつた。氏郷と仲の好かつた細川忠興は、茶庭の路次の植込に槇の樹などは面白いが、まだ立派すぎる」と云つたといふ程に侘の趣味に徹した人だが、氏郷も幽閑清寂の茶旨には十分に徹した人であつた。利休が心窃かに自ら可なりとして居た茶入を氏郷も目が高いので切りに賞美して之を懇望し、遂に利休をして其を與ふるを餘儀無くせめたといふ談も傳へられてゐる。又氏郷が或時に古い〱油を運ぶ竹筒を見て、其の器を面白いと感じ、それを花生にして水仙の花を生け、これも當時風雅を以て鳴つて居た古田織部に與へたといふ談が傳はつてゐる。織部は今に織部流の茶道をも花道をも織部好みの建築や器物の意匠をも遺して居る人で、利休に雁行すべき侘道の大宗匠であり、利休より一段簡略な、侘に徹した人である。氏郷の其の花生の形は普通に「舟」といふ竹の釣花生に似たものであるが、舟とは少し異つたところがあるので、今に其形を模した花生は舟とは云はずに、油さしとも油筒とも云ふのは最初

の因縁から起つて來て居るのである。古い油筒を花生にするなんといふのは、もう風流に於て普通を超えて宗匠分になつて居なくては出來ぬ作略で、宗匠の指圖や道具屋の入れ智慧を受取つて居る分際の茶人の事では無い。彼の山科のノ貫といふ大の侘茶人が糊を入れた竹器に朝顔の花を生けて紹鷗の賞美を受け、糊つぼといふ一器の形を遺したと共に、作略無礙の境界に入つてゐる風雅の骨髓を語つてゐるものである。天下指折りの大名で居ながら古油筒のおもしろみを見付けるところは嬉しい。山縣含雪公は「茶の道は道具沙汰に囚はれる」といふので半途から餘り好まれぬやうになつたと聞いたが、時に利休も無く織部も無かつた爲でも有らうけれど、氏郷がわびの趣味を解して油筒を花器に使ふまで踏込んで居たのは利休の教を受けた故ばかりではあるまい、慥に料簡の据ゑ處を合點して何にも徹底することの出來る人だつたからであらう。しかも油筒如き微物を取上げるほどの細かい人かと思へば、細川越中守が不覺に氏郷所有の佐々木の鐙を所望した時には、それが蒲生重代の重器で有つたに拘らず、又家臣の百利八右衛門といふ者が「御許諾なされた上は致方なけれど御當家重代の物ゆゑに、たゞ模品をこしらへて御遣はしなされまし」と云つたほどにも拘らず、「天下に一ツの鐙故他に知る者は有るまいけれど模品を遣はすなどゝは吾が心が恥かしい」と云つて眞物を與へた。そこで忠興も後に吾が所望したことが不覺であつたことを悟つて、返さうとしたところが、氏郷は「一旦差上げたものなれば御遠慮には及ばぬ」と受取らなかつた。忠興も好い人だから氏郷の死後に其子秀行へとう／＼返戻したといふ談がある。竹の油筒を掘り出して賞美するかと思へば、ケチでは無い人だ、家重代の者をも惜氣無く親友の所望には任せる。仲々面白い心の行きかたを有つた人だつた。

さて話は前へ戻る。是の如き忠三郎氏郷は秀吉に見立てられて會津の主人となつた。當時氏郷は何萬石取つて居たか分明でないが、松坂に居た天正十六年は十六萬石若くは十八萬石であつたといふから、其後は大戰も無く、大功も立つ譯が無いから、大抵十八萬石か少し其以上ぐらゐで有つたらう。然るに小田原陣の手柄が有つて後には、大沼、河沼、

稻川、耶麻、猪苗代、南の山以上六郡、越後の内で小川の庄、仙道には白河、石川、岩瀬、安積、安達、二本松以上六郡、都合十二郡一庄で、四十二萬石に封ぜられたのだ。十八萬石程から一足飛に四十二萬石の大封を賜はつたのだから、たとひ大役を引受けさせられたとは云へ、奥州出羽の押へといふ名譽を背負ひ、目覺ましい加祿を得たので、家臣連の悦んだらうことは察するに餘りある。これは八月十七日の事と云はれてゐる。

丁度仲秋の十六夜の後一日である。秋は早い奥州の會津の城内、氏郷は獨り書院の柱に倚つて物を思つて居た。天は高く晴れ渡つて碧落に雲無く、露けき庭の面の樹も草もしつとりして、おもむきの有る夜の靜かさに蟲の聲々すゞしく、水にも石にも月の光りが清く流れて白く、風流に心あるもの丶幽懷も動く可き折柄の光景だつた。北越の猛將上杉謙信が「數行過雁月三更」と能登の國を切從へた時吟じたのも霜は陣營に滿ちて秋氣淸き丁度斯樣な夜であつた。三國の代の英雄の曹孟德が、百萬の大軍を率ゐて吳の國を呑滅しようとしつゝ、「月明らかに星稀にして、烏鵲南に飛ぶ」と槊を馬上に横たへて詩を賦したのも丁度斯樣いふ夜であつた。江州日野五千石ばかりから取上つて、今は日本無双の大國たる出羽奥州、藤原の秀衡や淸原武衡の故地に踏みしかつて、四十二萬石の大祿を領するに至つた氏郷がたゞ凝然と默々して居る。侍座して居たのは山崎家勝といふものだつた。如何に深沈な人とは云へかゝる芽出度き折に當つて何か考へに沈んで居る主人の樣子を訝しく思つて窃に注意した。すると是は又何事であらう、やがて氏郷の眼からはハラ〳〵と涙がこぼれた。家勝は直ちに看て取つて怪んだ。が、忽ちにして思つた是は感喜の涙であらうと。蟹は甲に似せて穴を掘る、仕方の無いもので、九尺梯子は九尺しか屆かぬ、自分の料簡が其邊だから家勝には其邊だけしか考へられなかつた。然しそれにしては何樣も樣子が腑に落ち兼ねたから、恐る〳〵進んで、「恐れながら我が君には御落淚遊ばされたと見受け奉つてござるが、殿下の取分けての御懇命、會津四十二萬石の大祿を被けられたまひし御感の御淚にば御座し

るか」と聞いて見た。自分が氏郷であれば無論嬉し涙をこぼしたことであらうからである。すると氏郷は一寸歎息して、「ア、其樣なことに思はれたか、我羞かしい」と云つたが一段と聲を落して殆んど獨語のやうに、「然樣では無い大崎、我たとひ微祿小身なりとも都近くにあらば、何ぞの折には如何やうなる働きをも爲し得て、旗を天下に吹靡かすことも成らうに、大祿を今受けたりとは申せ、山川遙に隔たりて、王城を霞の日に出でゝも秋の風に袂を吹かゝる白川の關の奥なる奥州出羽の邊鄙に在りては、日頃の本望も遂げむことは難く、我が鎗も太刀も草叢に埋もるゝばかり、それが無念さの不覺の涙ぢや哩。今日より後は奥羽の押へ、贈太政大臣信長の婿たる此の忠三郎がよし無き田舍武士の我武者共をも、事と品によりては相手にせねばならぬ、おもしろからぬ運命に立至つたが忌はしい」と胸中の欝をしめやかに洩らした。無論政勝もこれを聞いて解つた。成程吾が主人は信長公の婿だ、今遽に關白に楯突かうやうはあるまいが、云はゞ秀吉は家來筋だ、秀吉に何事か有らば吾が主人が手を天下に掛けようとしたとて不思議は無い。男たる者の當り前だ、と悟るに付けて斯樣な草深い田舍に身柄と云ひ器量と云ひ天晴立派な主人が埋められかゝつたのを思ふと、凄然惻然として政勝も悲壯の感に打たれない譯には行かなかつたらう。主人の感慨、家臣の感慨、粛として秋の氣は座前座後に滿ちたが、月は何知らず冷やかに照つて居た。

氏郷が會津四十二萬石を受けて悦ばずに落涙したといふのは何といふ味のある話だらう。鼻糞ほどのボーナスを貰つてカフエーへ駈込んだり、高等官になつたとて嚊殿に誇るやうな極樂蜻蛉、菜畠蝶々に比べては、罪が深い、無邪氣で無いには違ひ無いが、氏郷の感慨の涙も流石に氏郷の涙だと云ひたい。それだけに生れついて居るものは生れついてゐるだけの情懷が有る。韓信が絳灌樊噲の輩と伍を爲すを羞ぢたのは韓信に取つては何樣することも出來ないことなのだ。樊噲だつて立派な將軍だが、「生きて乃ち噲等と伍を爲す」と仕方が無しの苦笑をした韓信の笑には涙が催される。氏郷

の青院柱に靠りかゝつて月に泣いた此の涙には片頰の笑が催されるのではないか。流石に好い男ぶりだ。蜻蛉蝶々やきりぎりすの手合の、免職されたア、失戀したアなどゝいふ眼から出る酸つぱい青臭い涙ぢや無い。忠三郎の米の飯は四十二萬石、後には百萬石も有り、女房は信長の女で、好い器量で、氏郷死後に秀吉に挑まれたが位牌に操を立てゝ尼になつて終つた程、忠三郎さんを大事にして居たのだつた。

天下の見懲らしに北條を退りつけてから、其勢力の剛毛ついでに武威を奥州に示して一ト撫でに撫でた上に氏郷といふ強いものを押へにして秀吉は京へ歸つた。奥州出羽は表面ではモヤ／＼ムク／＼して居ても先づ治まつた。ところがおさまらぬのは伊達政宗だ。折角咽へた大きな鴨をこれから啖はうとして涎まで出したところを取上げられて終つた犬のやうな位置に立させられたのである。關白はじめ諸大將等が歸つて終つて見ると何とかしたい。何とかする段には仕方はいくらでもある。仕方が無ければ手も引込めて居るのだが、仕方が有るから手が出したくなる。然し氏郷といふ重石は可なり重さうである。氏郷は白河をば關右兵衛尉、須賀川をば田丸中務少輔、阿子が嶋をば蒲生源左衛門、大槻を蒲生忠右衛門、猪苗代を蒲生四郎兵衛、南山を小倉孫作、伊南を蒲生左文、鹽川を蒲生喜内、津川を北川平左衛門に與へて、武威を強く政治も屆く樣子だから、政宗も迂闊に手を掛ける譯にはゆかぬ。斯樣なると暴風雨は弱い塀に祟る道理で、蒲生へ向ふよりは葛西大崎の新領主となつた木村伊勢守父子の方へ向つて魔手を伸ばし出した。木村父子は武邊も然程では無く、小勢でもある。伊勢父子がドヂを踏んでマゴ／＼すれば蒲生は之を捨てゝ置く譯にはゆかぬ、伊勢父子の居る地方と蒲生の會津とは其間遙に距つて居るけれども必ず見繼ぐだらう。蒲生が會津を離れて動き出せば長途の出陣、不知案内の土地、臨機應變の仕方は何程も有らう、木村蒲生に味噌を附けさせれば好運は自然に此方へ轉げ込んで來る理合だ、といふ樣な料簡は自ら存したことであらう。政宗方の史傳に何も此樣いふ計畫をしたといふ事が遺つて

居るのでは無いが、前後の事情を考へると、邪推かは知らぬが斯樣思へる節が有るのである。又木村父子は實際小身で無能で有つたから、今度葛西大崎を賜はつたに就ては人手が足らぬから急に浪人共を召抱へたに違ひ無く、浪人共を召抱へても法度嚴正に之を取締れば差支無いが、元來地盤が固く無い處へ安普請をしたやうに、規模が立たんで家風家法が確立して居ないところへ世に餘され者の浪人共を無鑑識に抱へ込んだのでは、いづれおとなしく無いところが有るから、浪人するにも至つた者共が、ナニ此の奧州の田舍者めと侮つて不道理を働くことも有勝なことで、然樣あれば然無きだに他國者の天降り武士を憎んで居る地侍の怒り出すのも亦有り內の情狀であるから、そこで一揆も起るべき可能性が多かつたのである。戰亂の世といふものは何時も其下と其上と和睦し難いやうな事情が起ると、第三者が窃かに其下に助力して其主權者を逐落し、そして其土地の主人となつて終ふのである。或は特に利を啗はせて其下をして其上に負かせて我に意を寄せしめ、置いて、そして表面は他の口實を以て襲つて之を取るのであるし、下たるものも亦是の如くにして自己の地位や所得を盛上げて行くのである。窃かに心を寄せるのが「內通」であり、利を啗はせて事を發させるのが「囑賂を飼ふ」のであり、まだ表面には何の事も無くても他領他國へ對して計略を廻らすのが「陰謀」である。たとへば伊達政宗が會津を取つた時、一旦は降參した橫田氏勝の如きは、降參して見ると所領を餘り削減されたので政宗を恨んだ。そこで政宗から會津を取返したくて使を石田三成へ遣はしたりなんぞしてゐる。然樣いふ理屈だから秀吉の方へ政宗が小田原へ出遲つた腹の底でも何でも知れて終ふのである。是の如きことは甲にも乙にも上にも下にも互に有ることで、戰亂の世の月並で稀らしい事では無い。小田原は松田尾張、大道寺駿河等の逆心から關白方に亡ぼされたのであり、會津は蘆名の四天王と云はれた平田松本佐瀨富田等が心變りしたから政宗に取られたのである。政宗は前に云つた通り、まだ秀吉に歸服せぬ前に、木村父子が今度拜領した大崎を取らうと思つて、大崎の臣下たる湯山隆信を吾に內

通させて氏家吉繼と與に大崎を圖らせて居たのである。然ういふ譯なのであるから、大崎の一揆の中に其の湯山隆信等が居たか何樣だかは分らぬが、少くとも大崎領に政宗の電話が開通して居たことは疑無い。サア木村父子が新來無恩の天降り武士で多少の秕政が有つたのだらうから、土着の武士達が一揆を起すに至つて、其一揆は中々手廣く父子强かつた。木村伊勢守が成合平左衞門を入れて置いた佐沼城を一揆は取圍いた。佐沼は仙臺よりはまだずつと奥で、今の青森線の新田驛或はせみね驛あたりから東へ入つたところであり、海岸へ出て氣仙の方へ行く路にあたる。伊勢守父子は成合を救はずには居られないから、伊勢守吉淸は葛西の豐間城、即ち今の登米郡の登米（とよま）といふ北上川沿岸の地から出張し、子の彌一右衞門淸久は大崎の古河城、今の小牛田（こごた）驛から西北の地から出張して、佐沼の城の後詰（ごづめ）を議したところ、一揆の方は豫め作戰計畫を立てゝ居たものと見えて、不在になつた豐間と古河の兩城をソレ乘取れといふので忽ち攻陷して終つた。佐沼は豐間よりは西北、古河よりは東に當るが、豐間と古河との距離は直接にすれば然のみ距つて居らぬとは云へ、然程に近い譯でも無いのに、是の如く手際能く木村父子が樹に離れた猿か水を失つた鮒のやうに本據を奪はれたところを見ると、一揆の方には十分の準備が有り統一が保てゝ居て、思ふ壺へ陷れたのと見える。ナマヌル魂の木村父子は旅の卦の文に所謂鳥其巢を焚かれた旅鳥、バカア〳〵と自ら鳴くよりほか無くて、何共せん方ないから、自分が援助するつもりで來た成合平左衞門に却て援けられる形となつて、佐沼の城へ父子共立籠ることになつた。

西を向いても東を向いても親類緣者が有るでも無い新領地での苦境に陷つては、二人は豫ての秀吉の言葉に依つて、會津の蒲生氏鄕とは隨分の遠距離だが其の來援を乞ふよりほか無かつた。一體餘り器量も無い小身の木村父子を急に引立てゝ、葛西、大崎、膽澤を與へたのは些過分であつた。何樣も秀吉の料簡が分らない。木村父子の材能が見拔けぬ秀吉でも無く、新領主と地侍とが何樣なイキサツを生じ易いものだといふことを合點せぬ秀吉でも無い。一旦自分に對し

て深刻の敵意を挾んだ狼戾豪黠の佐々成政を熊本に封じたのは、成政が無異で有り得れば九州の土豪等に對して成政は我が藩屏となるのであり、又成政がドヂを踏めば成政を自滅させて終ふに足りるといふので、竟に成政は其の馬鹿暴い性格の缺陷により一揆の蜂起を致して大ドヂを演じたから、立花、黒田等諸將に命じて一揆をも討滅すれば成政をも罪に問うて終つた。木村父子は何も越中立山から日本アルプスを越えて德川家康と秀吉を挾擊する相談をした内藏介成政ほどの鼬花火のやうな物狂はしい火炎魂を有つた男でも無いし、それを飛離れた奧地に置いた譯は一寸解しかねる。事によると是は羊を以て狼を誘ふの謀で、斯の樣な弱武者の木村父子を生餌にして隣の政宗を誘ひ、政宗が食ひついたらば此畜生めと殺して終はうし、又何處までも殊勝氣に狼が法衣を着とほすならば物のわかる狼だから其儘にして置いて宜い、といふので、何の事は無い木村父子は狼の窩の傍に遊ばせて置かれる羊の役目を云付かつたのかも知れない。筋書が若し然樣ならば餘り好い役では無いのだつた。

又氏郷に對して木村父子を子とも家來とも思へ、と云ひ、木村父子に對して氏郷を親とも主とも思へ、と秀吉の呉々も訓諭したのは、善意に解すれば氏郷を羊の番人にしたのに過ぎないが、人を惡く考へれば、羊が狼に食ひ殺された場合は番人には切腹させ、番人と狼と格鬪して狼が死ねば珍重珍重、番人が死んだ場合には大概草臥れた狼を撲ちのめすだけの事、狼と番人とが四ツに組んで捻合つて居たら危氣無しに背面から狼を胴切りにして終ふ分の事、といふ四本の鬮の何れが出ても差支無しといふ凉しい料簡で、それで木村父子と氏郷とを鎖で縛つて膠で貼けたやうにしたのかも知れない。して見れば秀吉は宜いけれど氏郷は巨額の年俸を與へられたとは云へ極々短期の間に其年俸を受取れるか何樣か分らぬ危險に遭遇すべき地に置かれたのだ。番人に對しての關白の愛は厚いか薄いか？薄いらしい。會津拜領は八月中旬の事で、もう其歲の十月の二十三日には羊の木村父子は安穩に草を噉んでは居られ無くなつて、跳ねたり鳴いたり

大苦みを仕始めたのであつた。

一體氏郷は父の賢秀の義に固いところを受けたのでもあらうか、利を見て義を忘れるやうなことは毫も敢てして居らぬ、此の時代に於ては律義の人である。又佐々成政のやうな偏倚性格を有つた男でも無かつた。だから成政を忌むやうに秀吉から忌まれるべきでも無かつた。が、氏郷を會津に置いて、葛西大崎の木村父子と結び付けたのは、氏郷に對して若し溫かい情が有つたとすれば、秀吉の仕方は聊か無理だつた。葛西大崎と會津との距離は餘り懸隔して居る、其間に今一人ぐらい誰かを置いて連絡を取らせても宜い筈と思はれる。溫かでは無くて、冷たいのであつたとすれば、あの通りで丁度宜いであらう。氏郷が秀吉に心窃かに冷やかに思はれたりとすれば、それは氏郷が秀吉の主人信長の婿で有つたことゝ、最初は小身であつたが次第〳〵に武功を積んで、人品骨柄の中々立派であることが世に認めらるゝに至つたことゝで、他にこれといふことも見當らぬ。然し小田原征伐出陣の時に、氏郷が畫師に命じて、白綾の小袖に、左の手には扇、右の手には楊枝を持つたる有りの儘の姿を寫させ、打死せば忘れ形見にも成るべし、と云ひ、奉行町野左近將監繁仍の妻で、もと鶴千代丸の時の乳母だつた者に、此繪は誰に似たるぞ、と笑つて示したので、左近が妻は、忌々しきことをせさせ玉ふ君かな、御年も若うおはしながら何の爲にかゝる事を、と泣いたと云ふ談が傳はつてゐる。戰の度每に戰死と覺悟してかゝるのが覺悟有る武士といふものでは有るが、一寸をかしい。氏郷の心中奥深きところに何か有つたのではないかと思はれぬでもないが、又然程に深く解釋せずとも濟む。秀吉が姿繪を氏郷の造らせたといふことを聞いて感淚を墜したといふのも、何だか一寸考へどころの有るやうだが、全くの感淚とも思はれる。すべてに於て想察の纏まるやうな材料は無い。秀吉が憎んだ佐々成政の三蓋笠の馬幟（うまじるし）を氏郷が請うて、熊の棒といふ棒鞘に熊の皮を卷付けたものに替へたのは、熊の棒が見だてが無かつたからと、且は驍勇の名を轟かした成政の用ひたものを誰も憚つて用ひ

なかつたから上で有つたらうか、秀吉に取つて面白い感じを與へたか何樣か、有らずもがなの事だつた。然し勿論そんな此事を齒牙に掛ける秀吉では無い。秀吉が氏郷を遇するに別も何も有つた譯では無い、たゞ特に之を愛するといふまでに至つて居らずに聊か冷やかであつたといふまでゞある。細川忠興が會津の鎭守を辭退したといふのは信じ難い話だが、忠興が別に咎立もされず此の難い役を辭したとすれば、忠興は中々手際の好い利口者である。氏郷が政宗の後の會津を引受けさせられたと同じ樣に、織田信雄は小田原陣の濟んだ時に秀吉から徳川家康の後の駿遠參に封ぜられた。ところが信雄は此の國替を悅ばなくて强ひて秀吉の意に忤つた。そこで秀吉は腹を立てゝ、貴樣は元來國を治め民を牧ふ器量が有る譯では無いが、故信長公の後なればこそ封地を贈つたのに、我儘に任せて吾が言を用ゐぬとは己を知らぬにも程がある、といふので那賀二萬石にして終つた。信雄は元來立派な父の子でありながら器量が乏しく、自分の爲に秀吉家康の小牧山の合戰をも起させるに至つたに關はらず、秀吉に致されて直に和睦して終つたり、又父の本能寺の變を鬼頭内藏介から聞かされても嘘だらう位に聞いた程のナマヌル魂で、彼の無學文盲の佐々成政にさへ見限られたくらゐの者ゆゑ、秀吉に逐はれたのも不思議は無い。前田利家は餘り人の惡口を云ふやうな人では無いが、其の世上の「うつけ者」の二人として擧げた中の一人は確と名は指して無いが信雄ではないかと思はれる。氏郷の父賢秀が光秀に從はぬ爲に攻められかゝつた時援兵を乞うたのにも、怯懦で遷延して、人質を取つてから援兵を出すことにし、それも捗々しいことを得せず、相應の兵力を有しながら父を殺した光秀征伐の戰の間にも合はなかつた腑甲斐無しであるから、高位高官名門大封の身でありながら那賀へ逐はれ、次で出羽の秋田へ蟄せしめられたも仕方は無い。然し秀吉が之を淸須百萬石から那賀へ貶したのも餘り酷かつた。馬鹿でも不覺者でも信雄信孝合戰の時は氏郷は柴田に馴染が深かつたが信孝方に付かず信雄方に附いたのである。其信雄が是の如くにされたのは氏郷に取つて好い心持はせず、秀吉の心の冷

たさを感じたことであらう。然し天下の仕置は人情の温い冷たいなどを云つては居られぬのである、道理の當不當で爲すべきであるから致方は無い。無いけれども些酷過ぎた。秀吉の此の酷いところ冷たいところを味はせられきつてゐて、そして天下の仕置は何樣すべきものだといふことを會しきつてゐる氏郷である。木村父子の厄介な事件が起つたとて、豫ても想ひ得切つて居ることであり、又如何にすべきとも考へ得拔いて居ることである、今更何の遲疑すべきでもない。

木村父子は佐沼から氏郷へ援を請うた。遠くても寒氣が烈しくても、棄てゝは置けぬ。十一月五日には氏郷はもう會津を立つてゐる。新領地の事であるから、留守にも十分に心を配らねばならぬ、木村父子の覆轍を踏んではならぬ。會津城の留守居には蒲生左文郷可、小倉豐前守、上坂兵庫助、關入道萬鐵、いづれも賴みきつたる者共だ。それから關東口白河城には關右兵衞尉、須賀川城には田丸中務少輔を籠めて置くことにした。政宗の方の片倉備中守が三春の城に居るから、油斷のならぬ奴への押へである。中山道口の南山城には小倉作左衞門、越後口の津川城には北川平左衞門尉、奥街道口の鹽川城には蒲生喜內、それ〴〵相當の人物を置いて、扨自分は一番先手に蒲生源左衞門、蒲生甚右衞門、二番手に蒲生四郎兵衞、町野左近將監、三番に五手組、梅原彌左衞門、森民部丞、門屋助右衞門、寺村半左衞門、新國上總介四番には六手組、細野九郎右衞門、玉井數馬ノ助、岩田市右衞門、神田淸右衞門、外池彌左衞門、河井公左衞門、五番には七手與、蒲將監、蒲生主計ノ助、蒲生忠兵衞、高木助六、中村仁右衞門、外池甚左衞門、町野主水ノ佑、六番には寄合與、佐久間久右衞門、同じく源六、上山彌七郎、水野三左衞門、七番には弓鐵砲頭、鳥井四郎左衞門、上坂源之丞布施次郎右衞門、建部令史、永原彌右衞門、松田金七、坂崎五左衞門、速水勝左衞門、八番には手廻小姓與、九番には馬廻、十番には後備關勝藏、都合其勢六千餘騎、人數多しといふのでは無いが、本國、江州以來、伊勢松坂以來の一

族緣類、切つても切れぬ同姓や遺族、多年恩顧の賴み賴まれた武士、又新規召抱ではあるが、家來は主の義勇を慕ひ知遇を感じ、主は家來の器量骨柄を愛でいつくしめる者共、皆各〻言はねど奥州出羽初めての合戰に、我等が刃金の味、膽魂の程を地侍共に見せ付けて呉れんといふ意氣を含んだ者を從へて眞黑になつて押出した。其の日は北方奥地の寒威早く催して、會津山颪肌に凄じく、白雪紛々と降りかゝつたが、人の用ひ憚かりし荒氣大將佐々成政の菅笠三盃の馬幟を立て、是は近き頃下野の住人、一家惣領の末であつた小山小四郎が田原藤太相傳のを奉りしより其れに改めた三ツ頭左巻の紋の旗を吹靡かせ、凛々たる意氣、堂々たる威風、臍撓まず、目まじろがず、佐沼の城を心當てに進み行く、と修羅場讀しが一ト汗かゝねばならぬ場合になつた。が、實際は額に汗をかくどころでは無い、鷄肌立つくらゐ寒かつたので、諸士軍卒も聊か怯んだらう。そこを流石は忠三郎氏郷だ、戰の門出に全軍の氣が萎えてゐるやうでは宜しく無いから、諸手の士卒を緊張させて其の意氣を振ひ立たせる爲めに、自分は直膚に鎧ばかりを着したといふことが傳へられてゐる。鎧を着るには、鎧下と云つて、錦や練絹などで出來てゐるものを被る。袴短く、裾や袖は括緒があつて之を括る。身分の低いものは錦などでは無いが、先づは直垂であるから、鎧直垂とも云ふ。漢語の所謂戰袍で、齋藤實盛の涙ぐましい談を遺したのも其の鎧直垂に就いてゞある。氏郷が風雪出陣の日に直膚に鎧を着たといふのも、ふざけ者が土用干の時の戲れのやうに犢鼻褌一ツで大鎧を着たといふのでは無く、鎧直垂を着けないだけであつたらうが、それにしても寒いのには相違なかつたらう。しかし斯樣いふ大將であつて見れば、士卒も萎けかへつて顫へて居るわけには行かぬ。力肱を張り、力足を踏んだことだらう。斯樣いふ長官が居無くて太平の世の官員は石炭ばかり氣にして焚べて仕合せな事である。

冗談は扨置き新らしい領主が出陣すると、これを見て會津の町人百姓は氏郷を氣の毒がつて涙をこぼしたといふ。そ

れは噂によれば木村伊勢守父子も根城を奪はれた位では奥州侍は皆敵になつたのであるし、御領主の御領内も在來の者共の蜂起は思はれる、剛氣の大將ではあらせられても御味方は少く、土地の者は多い、敵はせられるとでは無からう、痛はしい御事である、定めし畢竟は如何なる處にてか果てさせたまふであらう、と云ふのであつた。奥州に生立つて奥州武士よりほかのものを見ぬものは、一ッは國自慢で、奥州武士といふ者は日本一のやうに强い者に思つて居たせゐもあらうが、其の半面には文雅で學問が有つて民を撫する道を知つてゐたらう氏郷の施爲が、木村父子や佐々成政などゝ違つて武威の恐ろしさのみを以て民に臨まなかつたゝめ、僅々の日數であつたに關らず、今度の領主は何様いふ人で行らうと怖畏憂慮の眼を張つて視つて居た人民に、安堵と隨つて親愛の念を懷かせた故であつたらう。

氏郷の出陣には民百姓ばかりで無い町野左近將監も聊の危ぶんで、願はくは今しばらく土地にも慣れ、四隣の事情も明らかになつてから、戰途に上つて欲しいと思つた。會津から佐沼への路は、第一日程は大野原を經て日橋川を渡り、猪苗代湖を右手に見て、其湖の北方なる猪苗代城に止まるのが、急いでも急がいでも、行軍上至當の頃合であつた。で、氏郷の軍は猪苗代城に宿營した。猪苗代城の奉行は、かつて松坂城の奉行であつた町野左近將監で、これは氏郷の乳母を妻にしてゐて、主人とは特に親しみ深い者であつた。そこで老人の危險を忌む思慮も加はつてゞあらうが、氏郷を吾が館に入れまゐらせてから、密に諫言を上つて、今此の寒天に此處より遙に北の奥なるあたりに發向したまふとも、人馬も勞れて働きも思ふやうにはなるまじく、不案内の山、川、森、沼、御勝利を得たまふにしても中々容易なるまじく思はれまする。こゝは一應こらへたまひて、來年の春を以て御出なされては如何でござる、と頻りに止めたのである。町野繁仍の言も道理では有るが、それはもう魂の火炎が衰へてゐる年寄武者の意見である。氏郷此時は三十五歲で有つたから、氏郷の乳母は少くとも五十以上、其夫の繁仍は六十近くでもあつたらう。老人と老馬は安全を得るといふことに

就ては賢いものであるから、大抵の場合に於て老人には從ひ、老馬には騎るのが危險は少い。けれども其は無事の日の事である。戰機の駈引には安全第一は寧ろ避く可きであり、時少く路長き折は老馬は取るべからずである。今起つた一揆は少しでも早く對治して終つて其の根を張り枝を茂らせぬ間に芟除き拔棄てるのを機宜の處置とする。且又信雄が明智亂の時のやうな態度を取つて居た日には、武道も立たぬし、秀吉の眼も瞋らうし、木村父子を子とも旗下とも思へと、秀吉に前以て打つて置かれた釘がヒシ／＼と吾胸に立つ譯である。で、氏鄉は町野に對して、汝の諫言を破るでは無いが、何樣も然樣は成りかねる、假令運拙く時利あらずして吾が上はともなれかくもなれ、子とも見よ、親とも仰げと殿下の云はれた木村父子を見繼がぬならば、我が武道は此後全く廢る、と云切つた。町野も合點の惡い男ではなかつた。老眼に淚を浮べて、御尤の御仰と承はりました、然らば某も一期の御奉公、いさぎよく御ン先を駈け申さう、と皺腕をとりしぼつて部署に就くことに決した。斯樣いふ思慮を抱き、斯樣いふ決着を敢てしたのは必ず町野のみでは無かつたらう、一族譜代の武士達には、よく／＼沸り切つた魂の持主と、分別の遠く周く者を除いては、隨分多いことで有つたらうし、そして皆氏鄉の立場を諒解するに及んで、奮然として各自の武士魂に紫色や白色の火焰を燃やし立てたことであらう。それで無くては四方八方難儀の多い上に、横ッ腹に伊達政宗といふ「くせ者」が凄い眼をギロツカせて刀の柄に手を掛けて居る恐ろしい境界に毅然たる立派な態度を何樣して保ち得られたらう！であるから氏鄉の佐沼の後詰は邊土の小戰のやうであるが、他の多くの有りふれた戰には優つて遣りにくい戰で、そして味はつて見ると中々濃やかな味のある戰であり、鎗、刀、血みどろ、大童といふ大味な戰では無いのである。

こゝに不明の一怪物がある。それは云ふ迄もなく殊勝な念佛行者の滿海といふ者の生れ代りだと言はれてゐる伊達の藤次郎政宗である。生れ代りの說は和漢共に隨分俗間に行はれたもので、恐れ多いとだが、何某天皇は或修行者の生れ代

りにわたらせられて、其前世の髑髏に生ひたる柳が風に揺られる度毎に頭痛を惱ませたまうたなどとさへ申して居たこともある。武田信玄が曾我五郎の生れ代りなどゝは餘り作意が奇拔で寧ろ滑稽だが、宋の蘇東坡は某禪師の生れ代り、明の王陽明は入定僧の生れ代り、陽明先生の如きは御丁寧にも其入定僧の屍骸に直に對面をされたとさへ傳へられてゐる。二生の人といふのは轉生を信じた印度に行はれた古い信仰で、大抵二生の人は宿智即ち前生修得の力によつて聰明であり、宿福即ち前世善根の徳によつて幸福であり、果報廣大、甚だ貴ぶべき者とされて居る。政宗の生るゝ前米澤の城下に行ひすまして居た念佛行者があつて滿海と云つた。滿海が死んで、政宗が生れた。政宗は左の掌に滿海の二字を握つて誕生した。だから政宗は滿海の生れ代りであらうと想はれ、そして梵天丸といふ幼名はこれによりて與へられた。梵天は此世の統治者で、二生の人たる嬰兒の將來は、其の前生の稱名不退の大功徳によつて梵天の如くにあるべしと、いふ意からの事だ。滿海の生れ代りといふことを保證するのは御免蒙りたいが、梵天丸といふ幼名だつたとは虚誕ではなく、又其名が梵天帝釋に擬した祝福の意であつたらう事も想察される。思ふに伊達家の先人には陸奥介行宗の諡が念海、大膳太夫持宗が天海などゝ海の字の付く人が多かつたから、滿海の談も何か夫等から出た語り歪めではあるまいか。都べての奇異な談は大概淺人妄人無學者好奇者が何か一寸した事を語り歪めるから起るもので、語り歪めの大好物な人は現在そこらに澤山轉がつてゐる至つてお廉いしろ物であるから、奇異な談は出來傍題だ。何はあれ梵天丸で育ち、梵天丸で育てられ、片倉小十郎の如き傑物に屬望されて人となつた政宗は立派な一大怪物だ。人取る魔の淵は音を立てぬ、案外おとなしく秀吉の前では澄しかへつたが、其の底知れぬ深さの蒼い色を湛へた靜かな淵には馬を呑めば豕をも沈めやうといふ洞を爲して居るのである。不氣味千萬な一怪物である。

此の政宗は確に一怪物である。然し一怪物であるからとて其の政宗を恐れるような氏郷ではない。洞の水の捲く力は

凄しいものだが、水の力には陰も陽もある、吸込みもすれば湧上りもする。能く水を知る者は水を制することを會し て、水に制せらるゝことを爲さぬ、魔の淵であらうとも、龍宮へ續く渦で有らうとも、怖るゝことは無い。況んや會津へ來た初より其政宗に近づくべく運命を賦與されて居るのであり、今は正に其男に手を差出して觸れるべき機會に立つたのである。先方の出す手が棘刺滿面の手だらうが粘滑油膩の手だらうが鱗の生へた手だらうが水蹼有る手だらうが、何樣な手だらうが構はぬ、ウンと其手を捉へて引ずり出して淵のヌシの正體を見屆けねばならぬのである。秀吉は氏郷政宗に命令して置いた。新規平定の奧羽の事、一揆騷亂など起つたる場合は、政宗は土地案內の者、政宗を先に立て案內者として、共に切鎭めよ、といふ命令を下して置いた。で氏郷は其命の通り「サア案內に立て」と政宗に掛らねばならぬのであつた。其の案內人が甚だ怪しい物騷千萬なもので、此方から差出す手を向ふから引捉んで龍宮の一町目あたりへ引込まうとするか、何樣かは知れたもので無いのである。此の處活動寫眞の次の映畫幕は何の樣な光景を展開するか、タカタカ、タンタン、タカタカタンといふところだが、賢い奴は猿面冠者の藤吉郎で、二十何萬石といふ觀覧料を拂つた代り一等席に淀君と御神酒徳利かなんかで納まりかへつて見物して居るのであつた。しかも洗つて見れば其の觀覧料も映畫中の一方の役者たる藤次郎政宗さんから實は卷上げたものであつた。

木村伊勢領內一揆蜂起の事は、氏郷から一面秀吉ならびに關東押への德川家康に通報し、一面は政宗へ、土地案內者たる御邊は殿下の豫ての敎令により出陣征伐あるべし、と通牒して置て、氏郷が出陣したことは前に述べた通りであつた。五日は出發、猪苗代泊り、六日は二本松に着陣した。伊達政宗は米澤から板谷の山脈を越えてヌツと出て來た。其兵數は一萬だつたとも一萬五千だつたとも云はれて居る。氏郷勢よりは多かつたので、兵が少くては何をするにも不都合だからであることは言ふまでも無い。板谷山脈を越えれば直に飯坂だ。今は溫泉場として知られて居るが、當時は

が有つたものと見える。政宗は本軍を飯坂に据ゑて、東の方東北に通つて居る街道を俯視しつゝ氏郷勢を待つた。氏郷の先鋒は二本松から杉目、鎌田と進んだ。杉目は今の福島で、鎌田は其北に在る。政宗勢も其先鋒も其邊まで押出して居たから、兩勢は近々と接近した。蒲生勢も伊達勢の樣子を見れば、伊達勢も蒲生勢の樣子を見たことだらう。然るに伊達勢が本氣になつて案内者の任を果し、先に立つて一揆對治に努力しようと進む意の無いことは、氏郷勢の場數を踏んだ老功の者の眼には明々白々に看えた。すべて他の軍の有して居る眞の意向を看破することは戰に取つて何より大切の事であるから、當時の武人は皆これを鍛錬して、些細の事、機微の間にも洞察することを力めたものである。關ケ原の戰に金吾中納言の裏切を大谷刑部が必ず然樣と悟つたのも其の爲である。氏郷の前軍の蒲生源左衞門、町野左近將監等は政宗勢の不誠實なところを看破したから大に驚いた。一揆討伐に誠意の無いことは一揆方に意を通はせて居て、そして味方に對して害意を有つてゐるので無くて何で有らう。それが大軍であり、地理案内者である。そこで前隊から急に蒲生四郎兵衞、玉井數馬助二人を本隊へ馳せさせて、政宗の異心謀叛、疑無しと見え申す、其處に二三日も御逗留ありて猶其體をも御覽有るべし、と告げた。すると氏郷は警告を賞して之に從ふと思ひのほか、大に怒つて瞋眼から光を放つた。こゝは流石に氏郷だ。二人を睨み据え、言葉も荒々しく、「政宗謀叛とは初めより覺悟してこそ若松を出でたれ、何方にもあれ支へたらば踏潰さうまでぢや、明日は早天に打立たうず」、と罵つた。總軍はこれを聞いてウンと腹の中に堪へが出來た。

政宗勢の方にも戰場往來の功を得た者は勿論有るし、他の軍勢の樣子を見て取らうとする眼は光つて居たに違無い。見ると蒲生勢は凜々としてゐる。其頃の言葉に云ふ「戰を持つてゐる」のである。戰を持つてゐるといふのは、何時でも火蓋を切つて遣りつけて吳れよう、といふのである。コレハと思つたに違ひない。

氏鄉は翌日早朝に天氣の不利を冒して二本松を立つた。今の街道よりは西の方になる、今の福島近くの大森の城に着いた。政宗遲滯するならば案內の任を持つてゐる者より先へも進むべき勢を氏鄉が示したので、政宗も役目上仕方が無いから先へ立つて進んだ。氏鄉は其後から油斷無く陣を押した。何の事は無い政宗は厭々ながら逐立てられた形だ。政宗は忌々しかつたらうが、理詰めに押されて居るので仕方が無い、何樣しようも無い。氏鄉は理に乘つて押して居るのである。グン／＼と押した。大森邊から北は大崎領まで政宗領である。北へ北へと道順に云へば伊達郡、刈田郡、柴田郡、名取郡、宮城郡、黑川郡であつて、黑川郡から先が一揆叛亂地になつて居るのである。其間隨分と長い路程であるが、政宗は理に押されてシブ／＼ながら先へ立たぬ譯にゆかず、氏鄉は理に乘つてヂリ／＼と後から押した。政宗が若しも途中で下手に何事か起した日には、吾が領分では有るし、勝手は知つたり、大軍では有り、無論政宗に取つて有利の歩合は多いが、吾が領內で云はゞ關白の代官同樣な氏鄉に力沙汰に及んだ日には、免るゝところ無く明白に天下に對して弓を引いた者となつて終つて、自ら救ふ道は絕對に無いのである。そこを知らぬ政宗では無いから、振捩らうにも賦たぐらうにも爲ん術無くて押されてゐる。又そこを知り切つてゐる氏鄉だから、業を爲るなら仕て見よ、と十分に腰を落して油斷無くグイ／＼押す。氏鄉の方が現はれたところでは勢を得てゐる。でも押す方にも押される方にも、力士と力士との双方に云ふに云はれぬ氣味合が有るから、寒氣も甚かつたし天氣も惡かつたらうが、福島近傍の大森から、政宗領のはづれ、叛亂地の境近くに至るまでに十日もかゝつて居る。

此間政宗は面白く無い思をしたであらうが、其代り氏鄉も酷い目にあつてゐる。それは此十日の間に通つた地方は政宗の家の恩威が早くから行はれて居た地で、政宗の九代前の政家、十代前の宗遠あたりが切從へたのだから、中頃之を失つたことが有るにせよ、今又政宗に屬してゐるので、土豪民庶皆伊達家贔屓であるからであつた。本來なら氏鄉政

宗は友軍であるから、氏郷軍の便宜をば政宗領の者も提供すべき筋合であるが、前に擧げた如く人民は蒲生勢を酷遇した。寒天風雪の時に當つて宿を假さなかつたり、敷物を假さなかつたり、薪[illegible]諸道具を供することを拒んだ。朧月夜にしくものぞ無き、といふ歌なんぞは宜いが、霙まじり雨の降る夜の露營つゞきは如何に強い武人であり優しい歌人であり侘の味知りの茶人である氏郷でも、木の下風は寒くして頬に知らるゝ雪ぞ降りけるなどは感心しなかつたらう。桑折、刈田、岩沼、丸森などの處々、斯様いふ目を見たのであるから、蒲生家の士の正望の書いたものに、悄しといふこと限り無し、と政宗領の町人百姓の事を罵つてゐるのも道理である。

押されつ押しつして、十一月の十七日になつた。仲冬の寒い奥州の長途も盡きて漸く目ざす叛亂地に近づいた。政宗は吾が領の殆んど謙頭（はづれ）の黒川の前野に陣取つた。前野とあるのは多分富谷から吉岡へ至る路の東に當つて、今日舞野といふところで即ち吉岡の舞野であらう。其處で其日政宗から氏郷へ使者が來た。使者の口上は、明日路ははや敵の領分にて候當地のそれがしが柴の庵、何の風情も無く侘しうは候が、何彼と萬端御意を得度く候間、明朝御馬を寄せられ候はゞ、本望たる可く、粗茶進上仕度候、といふ慇懃なものであつた。日頃懇意の友情こまやかなる中ならば、干戈弓鐵砲の地へ踏込む前に當つて、床の間の花、釜の沸音、物靜かなる草堂の中で、風流にくつろぎ語るのは、趣も深く味も遠く、何といふ樂しくも亦嬉しいことであらう。然し相手が相手である、伊達政宗である。異な手を出して來たぞ、あやしいぞ、とは氏郷の家來達の誰しも思つたことだらう。皆氏郷の返辭を何と有らうと注意したことであらう。ところが氏郷は平然として答へた。誠に御懇志かたじけなうこそ候へ、明朝參りて御禮を申さうず、といふのであつた。

「イヤ驚いたのは家來達であつた。政宗謀叛とは初めより覺悟してこそ若松を出たれ、と云つた主人が、政宗に招かれて躙（にじ）り上りから其茶室へ這入らうといふのである。若し彼方に於てあらかじめ大力手利（てきゝ）の打手を用意し、押取籠（おつとりこ）めて打つて

かゝらんには誰か防ぎ得よう。主人若し打たれては殘卒全からず、何十里の敵地、其處の川、何處の峽で待設けられては人種も盡きるであらう。こは是れ一期の大事到來と、千丈の絶壁に足を爪立て、萬仭の深き淵に臨んだ思がしたらう。飛んでも無い返辭をして異れたものだと、恨みもし呆れもし悲しみもした事であらう。然し忠三郎氏郷は忠三郎氏郷だ。しほらしくも茶を習うたる田舍大名が茶に招くといふに我が行かぬ法は無い、往いて危いことは有るとも、招くに往かずば憶したに當る、機に臨みて身を扱はうに、何程の事が有らうぞ、朝の茶とあるに手間暇はいらぬ、立寄つて政宗が言語面色をも見て異れう、といふのであつたらう。政宗の方には何樣いふ企圖が有つたか分らぬ。蒲生方では政宗が氏郷を茶讌に招いたのは、正に氏郷を數寄屋の中で討取らう爲であつたと明記して居る。然しそれは實際然樣だつたかも知れぬが、何も政宗の方で手を出して居る事實が無いから、蒲生方で然樣思つたといふ證據にはなるが、政宗方で然樣いふ企を仕たといふ證據にはならぬ。又萬一然樣いふ企をしたとすれば、鶺鴒の印の眼球で巾開きをするほどの政宗が、直接自分の臣下などに手を下させて、後に至つて何樣ともすることの出來ぬやうな不利の證據を遺さうやうはない。前野と敵地大崎領とは目睫の間であるから、或は一揆方の剛の者を手引して氏郷の油斷に乘じて殺させ、そして政宗方の者が起つて其共者を其場で切殺して口を滅して終はう、といふ企をしたといふのならば、其の企も聊かは有り得もす可きことになる。然も無くば政宗にしては些智慧が足らないで手ばかり荒いやうに思へる。但し蒲生方の言も全く想像にせよ中つて居るところが有るのでは無いかと思はれる所以は幾箇條もあり、又ずつと後に至つて政宗が氏郷に對して取つた舉動で一寸窺へるやうな氣のすることがある。それは後に至つて言はう。此處では政宗に惡意が有つた證は無いといふのを公平とするが、何にせよ此時蒲生方に取つて主人氏郷が茶讌に赴くことを非常に危んだことは事實で、そして其の疑懼の念を懷いたのも無理ならぬことであつた。氏郷が其の請を拒ばないで、何程の事あらんと懼れ氣も無しに水

深うして底を知らざる魔の淵の龍痛鮫室の中に平然として入らうとするのは縮むことを知らない膽ッ玉だ。織田信長は稻葉一鐵を茶室に殺さうとしたし、黒田孝高は城井谷鎭房を酒席で遣りつけて居る世の中である。

夜は明けた、十八日の朝となつた。氏郷は約に從つて政宗を訪うた。氏鄕は無論馬上で出かけたらうが、服裝は何樣であつたか記されたものが無い。如何にこれから戰に赴く途中であるとしても、皆具取鎧うて草摺長にザックと着なした大鎧で茶室へも通れまいし、又如何に茶に招かれたにしても直に其場より修羅の衢に踏込まうといふのに絝肩衣で、其肩衣の鯨を拔いたやうな形も變である。利久高足と云はれた氏鄕だから、必ずや武略では無い茶略を然るべく見せて、工合の宜い形で參會したらうが、一寸想像が出來ない。是は茶道鍛錬の人への問題に提供して置く。氏鄕の家來達は勿論甲冑で、鎗や薙刀、弓、鐵砲、昨日に變ること無く犇々と身を固めて主人に前驅後衞した事であらう。やがて前野に着く。政宗方は迎へる。氏鄕は數寄屋の路地へ潛門を入ると、伊達の家來はハタと扉を立てんとした。これを見ると氏鄕に隨つて來た蒲生源左衞門、蒲生忠左衞門、蒲生四郞兵衞、町野左近將監、新參ではあるが名うての荒武者佐久間玄蕃が弟と聞えた佐久間久右衞門、同苗舍弟源六、綿利八右衞門など一人當千の勇士の面々、火の中にもあれ水の中にもあれ、死出三途主從一緖と思詰めたる者共が堪り兼ねてツッと躍り出た。伊達の家來は此は狼藉に近き振舞と支へ立てせんとした。制して制さるゝ男共であればこそ、右と左へ伊達の家來を押退け押飛ばして、桐に取る門の扉をもメりくと押破つて、「氏鄕の相伴つかまつて苦しい者ではござらぬ、蒲生源左衞門罷り通る、蒲生忠右衞門罷り通る、町野左近將監罷り通る、罷り通る、罷り通る、と陣鐘のやうな聲もあれば陣太鼓のやうな聲も有る、陣法螺吹立てるやうな聲も有つて、聞隔たつたる味方の軍勢の耳にも響けかしに勢ひ猛く挨拶して押通つた。茶の道に押掛の客といふのも有るが、これが眞個の押掛けで、もとより大鎧籠手臑當の出で立ちの、射向けの袖に風を切つて、長やかなる陣刀の

鐺あたり散らして、寄付の席に居流れたのは、鴻門の會に樊噲が駈込んで、怒眼を圓に張つて項王を睨んだにも勝つたらう。外面は又外面で、士卒各々兜の緒を緊め、鐵砲の火繩に火をさゝぬばかりにし、太刀を取りしぼつて、座の中に心を通はせ、イザと云へばオッと應へようと振ひ立つてゐた。これでは假令政宗方に何の企が有つても手は出せぬ形勢であつた。

茶の湯に主と家來とを一緒に招く場合も有るべき譯で、主從といへば離れぬ中である。然し主と臣下とを如何に茶なればとて同列にすることは其の主に對しては失禮であり、其の臣下に對しては僭上に堪ふる能はざらしむるものであるから、織田有樂の工夫であつたか何樣であつたか、客席に上段下段を設けて、膝突合はすほど狭い室ではあるが、主を上段に家來を下段に坐せしむるやうにした席も有つたと記してゐる。主從關係の確立してゐた當時、もとより主從は一列にさるべきものでは無い。多分政宗方では物柔らかに其他意無きを示して、書院で饗應でも仕たらうが、鎧武者を七人も八人も數寄屋に請ずることは出來もせぬことであり、主從の禮を無視するにも當るから、御免蒙つたらう。扨政宗出坐して氏郷を請じ入れ、時勢であるから茶談軍談取交ぜて、寧ろ軍事談の方が多く會話したらうが、此時氏郷が佐沼への道の程に一揆の城は何程候と前路の模樣を問うたに對し、政宗は、佐沼へは是より田舍町（六丁程歟）百四十里ばかりにて候、其間に一揆の籠りたるは高清水と申すが佐沼より三十里此方に候、其の外には一つも候はず、と謀るところ有る爲に僞りを云つたと蒲生方では記してゐる。殊更に虛言を云つたのか、精しく情報を得て居なかつたのか分らぬ、次いで起る事情の展開に照らして考へるほかは無い。然候はば今日道通りの民家を燒拂はしめ、明日は高清水を踏潰し候はむ、と氏郷は云つたが、目論見の齟齬した政宗は無念さの餘りに第二の一手を出して、毒を仕込み置いたる茶を立てゝ氏郷に飲ませた、と云はれてゐる。毒藥には劇毒で飲むと直に死ぬのも有らうし、程經て利くのも有らうが、かゝる

場合に飲んで直に血反吐を出すやうな毒を飼はうやうは無いから、仕込むだなら緩毒、少くとも二三日後になつて其効をあらはす毒を仕込んだであらう。氏郷も怪しいと思はぬことは無かつた。然し茶に招かれて席に參した以上は亭主が自ら點じて薦める茶を飲まぬといふ其樣な大きな無禮無作法は有るものでないから、一團の和氣を面に湛へて怡然として之を受け、茶味以外の味を細心に味はひながら、然も「御服合結構」と挨拶の常套の讃辭まで呈して飲んで終つた。そして茶事が終つたから謝意を叮嚀に致して、其席を辭した。氏郷の家來達も隨つて去つた。客も主人も今日これから戰地へ赴かねばならぬのである。

氏郷は外へ出た。政宗方の眼の外へ出たところで、蒲生源左衞門以下は主人の顏を見たことであらう。主從は互に見合はす眼と眼に思ひ入れ宜しくあつて、ム、ハ、、ハ、、ハ、、と芝居ならば政宗方の計畫の無効に歸したを笑ふところであつた。けれど細心の町野左近將監のやうな者は、「殿、政宗が進じたる茶、別儀もなく御味はひこれありしか、まつた飲ませられずに御ン濟ましありしか、飲ませられしか、如何に、如何に」と口々に問はぬことは無かつたらう。そして皆々の面は曇つたことだつたらう。氏郷は「ハ、、、飲まねば卑怯、餘瀝も餘さず飲んだはやい」と答へる。家來達は「ギエーツ」と今更ながら驚き危ぶむ。「誰ぞあれ、水を持て」と氏郷が命ずる。小ばしこい者が急に馳つて馬柄杓に水を汲んで來る。其間に氏郷から印籠は「西大寺」を取出して、其水で服用し、「もとより砒霜の類の猛毒は用ゐ得ぬ場合。彼に計謀あれば我にも防備あり、案ずるな、者共、ハ、、ハ、、ハ、、」と大きく笑つて後を向くと、西大寺の功驗早く忽ちにカツと飲んだ茶を吐いて終つた。

以上は蒲生方の記するところに據つて述べたので、伊達方には勿論毒を飼ふたなどといふ記事の有らうやうは無い。毒を用ゐて即座に又は陰密に人を除いて終ふことは恐ろしい世には何樣しても起り、且つ行はれることであるから、か

かる事も有り得べきではある。毒がひは毒飼で、毒害は却つてアテ字である、其毒飼といふ言葉が時代の匂ひを表現してゐる通り、此時代には毒飼は頻々として行はれた。けれども毒飼は最もケチビンタな、碌ツたかりの、クスブリ魂の、きたない奸人小人妬婦悪婦の爲すことで、人間の考へ出したことの中で最も醜悪卑劣の事である。自死に毒を用ゐるのは恥辱を受けざる爲で、クレオパトラの場合などはまだしも恕すべきだが、自分の利益の爲に他を犠牲にして毒を飼ふ如きは何といふ卑しいことだらう。それでも當時は随分行はれたことであるから、これに對する用心も随つて存したことで、治世になつても身分のある武士が印籠の根付にウニコールを用ゐたり、緒締に珊瑚珠を用ゐた如きも、珊瑚は毒に觸るれば割れて警告を與へ、ウニコールは解毒の神効が有るとされた信仰に本づく名残りであつた。西大寺は西大寺から出た除毒催吐の薬で、其頃用ゐられたものと見える。扨此の毒飼の事が實に存したことゝすれば、氏郷は宜いが政宗は甚く器量が下がる。但し果して事實であつたか何様かは疑はしい。政宗にも氏郷にもゆかりは無いが、政宗の爲に虚談想像談で有つて欲しい。政宗こそ却つて今歳天正の十八年四月の六日に米澤城に於て危ふく毒を飼はれうとしたのである。それは政宗が私に會津を取り且つ小田原参向遅怠の爲に罪を得んとするの事情が明らかであつたところから、最上義光に誑かされた政宗の母が、政宗を亡くして政宗の弟の季氏を立てたら伊達家が安泰で有らうといふ譯で毒飼の手段を廻らした。幸にそれが劇毒で、政宗の毒味番が毒に中つて苦悶即死したから事露はれて、政宗は無事であつたが、其爲に政宗は手づから小次郎季氏を斬り、小次郎の傅の小原縫殿助を誅し、同じく誅されそこなつた傅の粟野藤八郎は逃げ、目上の人即ち政宗の母は其實家たる最上義光の山形へ出奔したといふ事がある。小次郎を斬つたのは鈴木七右衛門だつたとも云ふ。これも全部は信じかねるが、何にせよ毒飼騒ぎのあつたことは有つたらしく、又世俗の所謂鬼役即ち毒味役なる者が各家に存在した程に毒飼の事は繁かつたものである。されば政宗が氏郷に毒を飼つたことは無

かつたとしても、蒲生方では毒を飼つたと思つても強ち無理では無く、氏郷が西大寺を服したとても過慮でも無い。又ずつと後の寛永初年（五年？）三月十二日、徳川二代將軍秀忠が政宗の藩邸に臨んだ時、政宗が自ら饗膳を呈した。其時將軍の扈從の臣の內藤外記が支へ立てして、御主人役に一應御試み候へと云つた。すると政宗は大に怒つて、それがし旣にかく老いて、今さら何で天下を心掛けうず、天下に心を掛けしは二十餘年もの昔、其時にだに人に毒を飼ふ如ききたなき所存は有たず、と云ひ放つた。それで秀忠が笑つて外記の爲に挨拶が有つて其儘に濟んだ、といふ事がある。政宗の答は胸が透くやうに立派で、外記は甚だ不面目であつたが、外記だとて一手さきが見えるほどの男ならば政宗が此の位の返辭をするのは分らぬでもあるまいに何で斯樣なことを云つたらう。それは全く將軍を思ふ餘りの過慮から出たに相違無いが、見す〳〵撥飛ばされると分つてながら一ト押シ押して見たところに外記は外記だけの所存が有つたのであらう。政宗と家康と馬の合つたやうに氏郷と仲の好かつた前田利家は溫厚にして長者の風のあつた人で、敵の少い人ではあつたが、それでも最上の伊白といふ鍼醫の爲に健康を危ふくされて、老臣の村井豐後の警告により心づいて之を遠ざけた、といふ談がある。毒によらず鍼によらず、陰密に人を除かうとするが如きことは有り內の世で、最も名高いのは加藤清正毒饅頭一件だが、それ等の談は皆虛誕であるとしても、各自が他を疑ひ且つ自ら警め備へたことは普く存した事實であつた。政宗が毒を使つたといふ事は無くても、氏郷が西大寺を飲んだといふ事は存在した事實と看て差支あるまい。

其日氏郷は本街道、政宗は街道右手を、並んで進んだ。はや此邊は叛亂地で、地理は山あり水あつて一寸錯綜し、處處に大崎氏の諸將等が以前據つて居た小城が有るのだつた。氏郷軍は民家を燒拂つて進むだところ、本街道筋にも一揆の籠つた敵城があつた。これは四竈、中新田など云ふのであつた。氏郷の勢に怖れて抵抗せずに城を開いて去つた。

で、中新田に止まり、氏郷は城の中に、政宗は城より七八町距たつた大屋敷に陣取つたから、氏郷の先隊四將は本隊を離れて政宗の營の近邊に特に陣取つた。無論政宗を監視する押へであつた。此の中新田附近は最近、即ち足掛四年前の天正十五年正月に戰場となつた處で、其戰は伊達政宗の方の大敗となつて、大崎の隣大名たる葛西左京太夫晴信が使を遣はして慰問したのはまだしも、越後の上杉景勝からさへも使者を遣して特に慰問されたほど諸方に響き渡り、又反覆常無き大内定綱は一度政宗に降參した阿子島民部を誘つて自分に就かせたほど、伊達の威を落したものだつた。それは大崎義隆の臣の里見隆景から事起つて、隆景が義隆をして同じ大崎の巨族たる岩出山の城主氏家彈正を殺させんとしたので、彈正が片倉小十郎に因つて政宗に援を請うたところから紛糾した大崎家の内訌が伊達對大崎の戰となり、伊達が勝てば氏家彈正を手蔓にして大崎を呑んで終はうといふことになつたのである。ところが氏家を援けに出た伊達軍の總大將の小山田筑前は三千餘騎を率ゐて、金の采配を許されて勇み進んだに關らず、岩手山の氏家彈正を援けようとして一本槍に前進して中新田城を攻めたため、大崎から救援の敵將等と戰つて居る中に、中新田城よりは後に當つて居る下新田城や師山城や桑折城やの敵城に策應されて、袋の鼠の如くに環攻され、總大將たる小山田筑前は惡戰して死し、全軍殆んど覆沒し、陣代の高森上野は智勇の好みを以て哀を敵の桑折（福島附近の桑折にあらず、志田郡鳴瀨川附近）の城將黑川月舟に請うて僅に歸るを得た程である。今氏郷は南から來て四竈を過ぎて其の中新田城に陣取つたが、大崎家の餘り強くも無い鋒先ですら、中新田の北に當つて同盟者をさへ有した伊達家の兵に大打擊を與へ得た地勢である。氏郷の立場は危いところである。政宗の兵が萬一敵意をあらはして、氏郷勢の南へ廻つて立切つた日には、西には小野田の城が有つて、それから向ふは出羽奥州の脊梁山脈に限られ、北には岩出山の城、東北には新田の城、宮澤の城、高清水の城、其奥に弱い味方の木村父子が居るがそれは一揆が圍んでゐる、東には古川城、東に南には鳴瀨川の股に師山城、松山

城、新沼城、下新田城、川南には山に依つて桑折城、東の一方を除いては三方皆山であるから、四方策應して取つて掛られたが最期、城に據つて固守すれば少しは支へ得ようが、動かうとすれば四年前の小山田筑前の覆轍を履むほかは無い。氏郷が十二分の注意を以て、政宗の陣の傍へ先手の四將を置いたのは、假想敵にせよ、敵の襟元（えりもと）に蜂を止まらせて置いたやうなものである。動靜監視のみでは無い、若し我に不利なるべく動いたら直に螫させよう、螫させて彼が騒いだら力足を踏ませぬ間に直に斬立てよう、といふのである。七八町の距離といふのは當時の戰には天秤のカネアヒといふところである。

小山田筑前が口惜くも大失敗を演じた原因は、中新田の城を乗取らうとして掛つたところ、城將葛岡監物が案外に固く防ぎ堪へて、そこより一里内外の新田に居た主人義隆に援を請ひ、義隆が直ちに諸將を遣はしたのに本づくので、中新田の城の外部までは乗取つたが、其間に各處の城々より敵兵が切つて出たからである。譬へば一箇の獸と相搏つて之を獲ようとして居る間に四方から出て來た獸に脚を咬まれ腹を咬まれ肩を攫み裂かれ脊を攫み裂かれて倒れたやうなものである。氏郷は今それと同じ運命に臨まんとしてゐる。何故といへば氏郷は中新田城に據つて居るとは云へ中新田を距ること幾許も無いところに、名生の城といふのがあつて、一揆が籠つてゐる。小さい城では有るが可なり堅固の城である。氏郷が高清水の方へ進軍して行けば戰術の定則上、是非其の途中の敵城は落さねばならぬ。其名生の城にして防ぎ堪へれば、氏郷に於ける名生の城は恰も小山田筑前に於ける中新田の城と同じわけになるのである。しかも政宗は高清水の城まで敵の城は無いと云つたのであるから蒲生軍は名生の城といふが有つて一揆が籠つて居ることを知らぬのである。されば氏郷は明日名生の城に引かゝつたが最期である。よしんば政宗が氏郷に斬つて掛らずとも、傍觀の態度を取るだけとしても、一揆方の諸城より斬つて出たならば、蒲生勢は千手觀音でも働ききれぬ場合に陷るのである。

明日は愈々一揆勢との初手合せである。高清水へは田舍道六十里あるといふのであるが、早朝に出立して攻掛からう。若し途中の樣子、敵の仕業に因つて、高清水に着くのが日暮に及んだなら、明後日は是非攻め破る、といふ軍令で、十八日の中新田の夜は靜かに更けた。無論政宗勢は氏郷勢の前へ立たせられる任務を負はせられてゐたのである。然るに其朝は前野の茶室で元氣好く氏郷に會つた政宗が、其夜の、しかも亥の刻、即ち十二時頃になつて氏郷陣へ使者をよこした。其の言には、「政宗今日夕刻より俄に蟲氣に罷り在り、何とも迷惑いたし居り候、明日の御働き相延ばされたく、御先鋒を仕候事成り難く候」とあるのであつた。金剛の身には金剛の病、巖石も凍融の春の風には潰るゝ習ひだから、政宗だとて病氣にはならう。蟲氣といふは當時の語で腹痛苦惱の事である。氏郷及び氏郷の諸將は之を聞いて、ソリヤコソ政宗めが陰謀は露顯したぞ、と思つて眼の底に冷然たる笑を湛へて點頭き合つたに違ひあるまい。けれども氏郷の答は鷹揚なものであつた。「仰の趣は承り候、さりながら敵地に入り、敵を目近に置きながら留まるべくも候はねば、明日は我が人數を先へ通し候べし、御養生候て後より御出候へ」と穩やかな挨拶だ。此の返答を聞いて、政宗は政宗で、ニツタリと笑つたか何樣だか、それは想像されるばかりで、何の證も無い。たゞ若し政宗に陰險な計略が有つたとすれば、思ふ壺に氏郷を嵌めて先へ遣ることになつたのである。

十九日の早朝に氏郷は中新田を立つた。伊達勢は主將が病氣とあつてヒツソリと靜かにして居る。氏郷は潮合を計つて政宗の方へ使者を出した。「それかしは只今打立ち候、油斷無く御養生の上、後より御出候へ」といふのであつた。そして氏郷は諸軍へ令した。政宗を後へ置く上は常體の陣組には似る可からず、といふのであつたらう、五手與、六手與、七手與此三與を後備と定め、十番手後備の關勝藏を三與の後へ入替へた。前にも見えた五手與、などゝいふのは、此頃の言葉で五隊で一集團を成すのを五手與、六隊で一集團を成すのを六手與といふのであつた。さて此の三與は勿論

政宗の押へであるから、十分に戰を持つて、背後へ向つて逆歩に歩み、政宗打つて掛らば直にも斬捲らん勢を含んで居た。逆歩に歩む、とは記してあるか、それは言葉通りに身構は南へ向ひ、歩は北へ向つて行くことであるか、それとも別に間隔交替か何かの隊法があつて、後を向きながら前へ進む行進の仕方が有つたか何樣か精しく知らない。但し飯田忠彦の野史に、行布三常蛇陣一とあるのは全く書き損ひの漢文で、常山蛇勢の陣といふのは、此とは異なるものである。何はあれ關勝藏の一隊を境にして、前の諸隊は一揆勢に向ひ、後の三與は政宗に備へながら、そして全軍か、木村父子救援の爲に佐沼の城を志して、差當りは高清水の敵城を屠らんと進行したのは稀有な陣法で、氏郷雄毅深沈とは云へ、十死一生、危きこと一髪を以て千鈞を繋ぐものである。既に急使は家康にも秀吉にも發してあるし、又政宗が露骨に打つて掛るのは、少くとも自分等全軍を鏖殺にすることの出來る能く〱十二分の見込か立た無くては敢てせぬことであると、多寡を括つて、其の政宗の見込を十二分には立たせなくするだけの備へを仕て居れば恐るゝところは無い、と測量の意味であるところの當時の言葉の「下墨」を仕切つて居り、一揆征服木村救援の任を果さうとして居るところは、其の魂の張り切り沸り切つて居るところ實に懦夫怯夫をしてだに感じて而して奮ひ立たしむるに足るものがある。

高清水まで敵城は無いと云ふ事であつたが、それは眞赤な嘘であつた。中新田を出て僅の里數を行くと、そこに名生の城といふが有つて一揆の兵が籠つて居り、蒲生軍に抵抗した。先隊の四將、蒲生源左衞門、蒲生忠右衞門、蒲生四郎兵衞、町野左近等何躊躇すべき、しほらしい田舍武士めが弓箭だて、我等が手並を見せてくれん、たゞ一ト揉と揉立てた。池野作右衞門といふ者一番首を取る。面々勵み勇み喊き叫んで攻立つた。作右衞門素捷く走り戻つて本陣に入り、首を大將の見參に備へ、こゝに名生の城と申す敵城有つて、先手の四人合戰仕つた、と述べた。サアこゝである。氏郷がこゝで名生の城に取掛けて手間取つて居れば、四年前の小山田筑前と同じ事になつて、それよりも猶甚だしい不利の場

合に身を置くことになるのである。鏖殺さるべき運命を享受する位置に立つのである。

氏鄕は眞に名生の城が前途に在つたことを知らなかつたらうか。種々の書には全く之を知らずに政宗に欺かれたやうに記してある。成程氏鄕の兵卒等は知らなかつたらうが氏鄕が知らなかつたらうとは思へぬ。縮みかへつて居た小田原を天下の軍勢と共に攻めた時にさへ、忍びの者を出して置いて、五月三日の夜の城中からの夜討を知つて、使番を以て陣中へ夜討が來るぞと觸れ知らせた程に用意を怠らぬ氏鄕である。まして未だ曾て知らぬ敵地へ踏込む戰、特に腹の中の黑白不明な政宗を後へ置いて、三里五里の間も知らぬ如き不詮議の事で眞黑闇の中へ盲目探りで進んで行かれるものでは無い。小田原の敵の夜討を知つたのは、氏鄕の伊賀衆(いがしゆう)の頭、忍びの上手と聞えし町野輪之丞といふ者で、毎夜毎夜忍びて敵城を窺つたとある。伊賀衆といふのは伊賀侍、若くは伊賀侍から出た忍びの術を習得した者共といふ義で、甲賀衆と云ふのは江州甲賀の侍に本づく同樣の義の語、そして轉じては伊賀衆甲賀衆といへば忍びの術を知つて偵察の任を帶びて居る者といふ意味に用ゐられたのである。日本語も滿足に使へぬ者等が言葉の妄解妄用を憚らぬので、今では忍術は妖術のやうに思はれてゐるが、忍術は妖術では無い、偵察の術である。戰亂の世に於て偵察は大必要であるから、伊賀衆甲賀衆が中々用ゐられ、伊賀流甲賀流など〻武術の技としての名目も後には立つに至つた。石川五右衞門は伊賀河內の間の石川村から出た忍術者だつたまでだ。町野輪之丞は伊賀衆の頭とある。頭が有れば手足は無論有る。不知案內の地へ臨んで戰ひ、料簡不明の政宗と與にするに、氏鄕が此の輪之丞以下の伊賀衆をボカリと遊ばせて置いたり徒らに卒伍の間に編入して居ることの有り得る譯は無い。輪之丞以下は氏鄕出發以前から、秘命を受けて、妄談者流の口吻に從へばそれこそ鼠になつて孔から潛り込んだり蛇になつて樹登りをしたりして、或者は政宗の營を窺ひ、或者は一揆方の樣子を探り、必死の大活躍をしたらうことは推察に餘り有ることである。そして此等の者の報告によつて、至つて危

い中から至つて安らかな道を發見して、精神氣魄の充ち滿ちた力足を踏みながら忠三郎氏郷は兜の銀の鯰を悠然と游がせたのだらう。それで無くて何で中新田城から幾里も距らぬところに在つた名生の敵城を知らずに十九日の朝に政宗を後にして出立しよう。城は騎馬武者の一隊では無い、突然に湧いて出るものでも何でもない。まして名生の城は木村の家來の川村隱岐守が守つて居たのを柳澤の城主柳澤隆綱が攻取つて據つて居たのである。それだけの事實が氏郷の耳に入らぬ譯はない。

氏郷は前隊からの名生攻の報を得ると、其の雄偉豪傑の本領を現はして、「よし、分際知れた敵ぞ、瞬く間に其城乘取れ、氣息吐かすな」と猛烈果決の命令を下した。そして一方五手組、六手組、七手組の後備に對つては、「おもしろいぞ、おもしろいぞ、名生の城攻むると聞かば、必定政宗めが寄せて來うぞ、三段に陣を立てゝ靜まりかへつて待掛けよ、比類無き手柄する時は汝等に來たぞ」と勵まし立てた。後備の三隊は手藥煉ひいて肅として、政宗來れかし、眼に物見せて呉れむと意氣込む。先手は先手で、分際知れた敵ぞ、瞬く間に乘取れ、といふ猛烈の命令に、勇氣既に小敵を一ト呑みにして、心頭の火は燃えて上る三千丈、迅雷の落掛るが如くに憤怒の勢凄じく取つて掛つた。敵も流石に土民ではない、柳澤隆綱等は、此處を堪へでは、と熱湯の玉の汗になつて防ぎ戰つた。然し蒲生勢の恐ろしい勢は敵の膽を奪つた。外郭は既に乘取つた。二の丸も乘取つた。見る〳〵本丸へ攻め詰めた。上坂源之丞、西村左馬允、北川久八、三騎並んで大手口へ寄せたが、久八今年十七八才、上坂北川を拔いて進む。せはせぬ者ぞと云ふ間もあらせず、敵を切伏せ首を取る。先んぜられたり、心外と二人も駈入りて手痛く戰ふ。氏郷本陣の小性馬廻りまで、たゞ瞬く間に陷せ、と手柄を競つて揉立つる。中にも氏郷が小小姓名古屋山三郎、生年十五歲、天下に名を得た若者だつたが、白綾に紅裏打つたる鎧下、色々絲縅の鎧、小梨打の兜、猩々緋の陣羽織して、手鎗提け、城內に駈入り鎗を合せ、目覺ましく働きて

好き首を取つたのは、猛きばかりが生命の武者共にも嘆賞の眼を見張らさせた。名古屋は尾州の出で、家の規模として振袖の間に一ト高名してから袖を塞ぐことに定まつて居たとか云ふ。當時此戰の功を讃へて、鎗仕鎗仕は多けれど名古屋山三は一の鎗、と世に謠はれたといふことだが、正に是れ火裏の蓮華、人の眼を快くしたものであつたらう。或は山三先登は此の翌年、天正十九年九戸政實を攻めた時だともいふが、其時は氏郷のみでは無く、秀次、徳川、堀尾、淺野、伊達、伊井等大軍で攻めたのだから、何も氏郷が小小姓まで馳出させることは無かつたらう。此の戰は瞬間に攻落すことを欲したから、北村名古屋の輩までに力を出させたのである。それは兎もあれ、角もあれ、敵も一生懸命に戰つたから、蒲生勢にも道家孫一、粟井六右衛門、町野新兵衛、田付理介等の勇士も戰死し、兵卒の討死手負も少くなかつたが、遂に全く息もつかせず瞬く間に攻落して終つて、討取る首數六百八十餘だつたと云ふから、城攻としては非常に短い時間の、隨分激烈苛辣の戰であつたに疑無い。

政宗は謀つた通りに氏郷を遣り過して先へ立たせて仕舞つた。氏郷は名生の城へ引掛るに相違無いと思つた。そこで、いざ急ぎ打立てや者共と、同苗藤五郎成實、片倉小十郎景綱を先手にして、揉みに揉んで押寄せた。ところが氏郷の手配は行届いて居て、彼の三隊の後備は三段に備へを立てゝ、靜かなること林の如く、儼然として待設けて居た。すはや政宗寄するぞ、心得たり、手を出さば許すまじ、彈丸振舞はん、と鐵砲の火縄の火を吹いて居る勢だ。名生の城は既に落されて烟が揚り、氏郷勢は皆城を後にして、政宗如何と觀て居るのである。これを看て取つた政宗は案に相違して、何樣にも乘らう潮が無い。仕方が無いから名生の左の野へ引取つて、そこへ陣を取つた。

氏郷は名生の城へ入つて之に據つた。政宗が來ぬ間に城を落して終つたから、小山田筑前と同じやうにはならなかつた。氏郷が名生の城を攻めるに手間取つて居たならば、名生の城で相圖の火を擧げる、其時宮澤、岩手山、古川、松山

四ケ處の城々より一揆勢は繰出し、政宗と策應して氏郷勢を鏖殺し、氏郷武略拙くて一揆の手に斃れたとすれば、木村父子は元來論ずるにも足らず、其後一揆共を剛、柔、水、火の手段であしらへば、奥州は次第に掌の大きい者の手へ轉げ込むのであつた。然し名生の城は氣息も吐けぬ間に落されて終つて、相圖の火を舉げる暇なぞも無く、宮澤、岩手山等四ケ處の城々の者共は、策應するも縁瓜も無く、却て氏郷の雄威に膽を拔かされて終つた。

政宗は氏郷へ使を立てた。「名生を改められ候ほどそれがしへも一方仰付けられたく候ひしに、かくては京都への聞えも如何にと殘念に候」と云ふのであつた。氏郷の返辭はアッサリとして妙を極めたものであつた。「此の敵城あることをば某も存せず候間に、先手の者ども、はや攻落して候」と、空嘯いて片付けて置いて、扨それからが反對に政宗の言葉に棒を刺して拗つて居る。「京都への聞え、御心づかひにも及び申すまじく候。此の向ふに宮澤とやらん申す敵城の候、それを攻められ候へ、然るべく聞え候はむ」といふ意であつた。政宗は違儀も出來ない。宮澤の城へ寄せたが、もとより政宗の兵力宮澤を城の攻め潰せぬことは無いに關せず、人目ばかりに鐵砲を打つ位の事しかなかつた。宮澤の城將岩崎隱岐は後に政宗に降つた。

明日は高清水を屠つて終はうと氏郷は意を洩した。名生の一戰は四方を震駭して、氏郷の賴むに足る雄將である事を誰にも思はせたらう。特に政宗方に在つて、一揆の方の樣子をも知り、政宗の詭策を知つてゐた者に取つては、驚くべき人だと思はずには居られなかつたらう。そこで政宗に心服して居る者はとに角、政宗に對して豫てからイヤ氣を持つて居た者は、政宗に付いて居るよりも氏郷に隨身した方が吾が行末も賴もしい、と思ふに至るのも不思議ではない。茲に政宗に取つては厄介の者が出て來た。それは政宗の臣の須田伯耆といふ者で、伯耆の父の大膳といふ者は政宗の父輝宗の臣であつた。輝宗が二本松義繼に殺された時、後藤基信が殉死しようとしたのを政宗は制した位で、政宗は殉死を忌嫌つたけれど、

其基信も須田大膳も、馬場右衞門といふ人も遂に殉死して終つた。殉死の是非は別として、不忠の心から追腹は切られぬ。大膳の殉死は輝宗に對する忠誠に出でたのだ。ところが殉死を忌嫌ふ政宗の意は非とすべきでは無いが、殉死を忌む餘りに殉死した者をも惡んだ。で、大膳は狂者のやうに謂はれ、大膳の子たる伯耆まで冷遇さるゝに至つた。父が忠誠で殉死したのである、其子は優遇されなくても普通には取扱はれても然るべきだが、主人の意に負いたと云ふ廉であらう。伯耆は自ら不遇であることを感じたから、何につけ彼につけ、日頃不快に思つてゐた。これも亦凡人である以上は人情の當に然るべきところだ。氏郷の大將振り、政宗の處置ぶり、自分が到底政宗に容れられないで、行末の賴もしからぬことなどを思ふと、今にして政宗を去つて氏郷に附いた方が賢いと思つた。丁度其家を思はぬでは無い良妻も、夫の愛を到底得ぬと思ふと、誘ふ水に引かれて横にそれたりなぞするのと同じことである。人情といひ世態といふ者は扨々なさけないものだ。大忠臣の子は不忠者になつて政宗に負いたのである。

そこで其十九日の夜深に須田伯耆は他の一人と共に逃げ込んで來て蒲生源左衞門を賴んだ。たゞ來たところで容れられる譯はないから、飛んでもない手土產を持つて來た。それは政宗と一揆方との通謀の證據になる數通の文書であつた。逃げて來た二人の名は蒲生方には山戸田八兵衞、牛越家兵衞とある。須田は政宗が米澤を去つた後に氏郷の方へ來て、政宗の秘を許いた者となつて居る。

蒲生源左衞門は須田等を糺した。二人は證據文書を擕つて來たのだから、それに合せて逐一に述立てた。大崎と伊達との關係、大崎義隆の家は最上義光を宗家としてゐること、最上家は政宗の母の家であること、母と政宗とは不和の事、政宗が大崎を圖つた事、そんな事をも語つたらうか、それよりは先づ差當つて、一揆を勸めたこと、黑川に於ての企の事、中新田にて虛病の事、名生の城へ氏郷を釣寄せた事、四城と計を合せて、氏郷を殺し、一揆の手に打死を遂げ

たることにせんとしたる事、政宗方に名生の城の落武者來りて、餘りに嚴しく攻められて相圖合期させりしと語れる事等を訐き立てた。そして其上に、高淸水に籠城して居る者も、赤佐沼の城を圍んで居る者も、皆政宗の指圖に因つて質は働いてゐる者であることを語り、能く政宗が樣子を御見留めなされて後に御働きなさるべし、と云つた。

二人の言は悉皆信ずべきか何樣かは疑はしかつたらう。然し氏郷は證據とすべきところの物を取つて、且二人を收容して生證據とした。もうなまじひに働き出すことは、敵に乘ずべきの機を與へるに過ぎぬ。木村父子を一揆が殺す必要も無く、政宗が殺す必要も無いことは明らかだから、焦慮する必要は無い。却つて此城に動かずに居れば政宗も手を出しやうは無い、と高淸水攻を敢て攻めずに政宗の樣子のみに注意した。伊達衆は頻りに働いたことだらう。

氏郷は兵糧を徵發し、武具を補足して名生に據るの道を講じた。急使は會津へ馳せ、會津からは彈藥を送つて來た。政宗は氏郷が動かぬのを見て何とも仕難かつた。自分に有理有利な口實があつて、そして必勝與殺が期せるので無ければ、氏郷に對して公然と手を出すのは、勝つても負けても吾身の破滅であるから爲す術は無かつた。須田伯耆が馳込んだ事は分つて居るが、氏郷の方からは知らぬ顏でゐる。そこで十二月二日まで居たが、氏郷は微動だに爲さぬので、事皆成らずと見切つて、引取つて歸つて終つた。勿論氏郷の居る名生の城の前は通らず、斷りもしなかつたが、氏郷が此を知つて默して居たのであることも勿論である。もう氏郷は秀吉に對して盡すべき任務を豫期以上の立派さを以て遂げてゐるのである。佐々成政にはならなかつたのである。一揆等は氏郷に對して十分畏れ縮んで居り、一揆の一雄將たる黑澤豐前守といふ者は、吾子を名生の城へ人質に取られて居るのを悲んで、佐沼の城から木村父子を名生に送り屆けるから交換して欲しいと請求めたので、之を諾して其翌月二十六日、其交換を了したのである。豐前守の子は後に黒澤六藏と云つて氏郷の臣となつた。

淺野長政は關東の仕置を濟ませて駿河府中まで上つた時に、氏郷の飛脚に逢つた。江戸に立寄つて家康に對面し、蒲生忠三郎を見繼がん爲に奧州へ罷り下る、御加勢ありたし、と請うたから家康も默つては居られぬ。結城秀康を大將に、榊原康政を先鋒にした。長政等の軍は十二月中旬には二本松に達した。それより先に長政は淺野六右衛門を氏郷の許へ遣つた。六右衛門は名生へ行つたから、一切の事情は分明した。長政は政宗を招ぶ。政宗は出ぬわけには行かぬ、片倉小十郎其外三四人を引連れて、おとなしく出て來て、言譯をした。何事も須田伯耆の讒構といふことにした。それならば成實盛重兩人を氏郷へ人質に遣りて、氏郷これへ參られて後に其仔細を承はりて、言上可申、と突込んだ。政宗は領掌したが、人質には盛重一人しか出さなかつた。氏郷は承知しなかつた。遂に十二月二十八日成實は人質に出た。此の成實は嘗て政宗に代つて會津の留守をした程の男で、後に政宗に對して何を思つたか伊達家を出た時、上杉景勝が五萬石を以て迎へようとした。然し景勝には隨身しないで、復伊達家へ歸つたが、其時は僅に百人扶持を給されたのみであつたのに、齋藤兵部といふものが自ら請うて信夫郡の士兵五千人を率ゐて成實に屬せんことを欲したので、成實は亘理郡二萬三千八百石を賜はつて亘理城に居らしめらるゝに至つたといふ。所謂埋沒さるゝこと無き英靈底の漢である。大阪陣の時は老病の床に在つたが、子の重綱に對つて、此戰は必ず一度和談になつて、そして明年に結局を見るだらう、と外濠を埋められてから大阪が亡びるに至るだらうことを豫言した片倉小十郎と共に實に伊達家の二大人物であつた。其の成實を强要して一旦にせよ人質に取つた氏郷は、戰陣のみでは無い樽俎折衝に於ても手强いものであつた。

其年は明けて天正十九年正月元日、氏郷は木村父子を携へて名生を發して會津へと歸る其途で、淺野長政に二本松で會した。政宗の樣子は凡て長政に合點出來た。長政はそこで上洛する。政宗も手を束ね居てはならぬから、秀吉の招喚に應じて上洛する。氏郷は人質を返して、彼の二人が提出した證文を持參し、これも同じく上洛した。政宗が金箔を押し

た磔刑柱を馬の前に立てゝ上洛したのは此時の事で、それがしの花押の鶺鴒の眼の睛は一ト月に處を易へまする、此の書面の花押はそれがしの致したるには無之、と云ひ抜けたの此時の事である。鶺鴒の眼睛の在處を月に三度易へるとは平生から恐ろしい細かい細工を仕たものだ。

政宗は是の如く證據書類を全然否定して剛情に自分の罪を認めなかつた。溝の底の汚泥を掴み出すのは世態に通じたものゝすることでは無い、と天明度の洒落者の山東京傳は曰つたが、秀吉も流石に洒落者だ。馬でも熊でも狼でも自分の腹の内を通り抜けさせてやる氣がある。人の腹の中が好いの悪いのと注文を云つて居る絛蟲や蛔蟲のやうなケチなものではない。三百代言氣質に煩はしいことを以て政宗を責めは仕無かつた。却つて政宗に、一手を以つて葛西大崎の一揆を平げよと命じた。或は是れは政宗が自ら請うたのだとも云ふが、孰れへ廻つても悪い役目は葛西大崎の土酋で、政宗の爲に小苛い目に逢つて終つた。

此年の夏、南部の九戸左近政實といふ者が葛西大崎などのより規模の大きい反亂を起したが、秀次の總大將、氏郷の先鋒、諸將出陣といふので論無く對治されて終ひ、それで奥羽は腫物の根が抜けたやうに全く平定した。氏郷は此時も功があつたので、前後勳功少からずとて七郡を加增せられ、百萬石を領するに至つた。

多分九戸亂の濟んだ後、天正十九年か、二十年の事であつたらう。前年の行掛りから何樣も氏郷政宗の間が悪い。自分の腹の中で二人に喧嘩されては困るから、秀吉は加賀大納言前田利家へ聚樂での内證話に、大納言方にて仲を直さするやうにとの依頼をした。利家も一寸迷惑で無いことも無いだつたらう。仲の悪い二人を一室に會はせて直れば宜いが、却て何かの間違から角立つた日には、兩虎一澗に會ふので、相搏たずんば已まざるの勢である。刃傷でもすれば喧嘩兩成敗、氏郷も政宗も取潰されて終ふし、自分も大きな越度である。二桃三士を殺すの計とも異なるが、一席の會合が

三人の身の上である。秀吉に取つては然様いふことが起つても差支は有るまいか知らぬが、自分等に取つては大變である。そこで辭し度いは山々だつたらうが、兩人の仲惡きは天下にも不爲であるといふ秀吉の言には重量が有つて避けることが出來ぬ。是非が無いから、氏郷政宗を請待して太閤の思はくを徹することにした。氏郷は承知した。政宗も太閤内意とあり、利家の扱ひとあり、理の當然で押へられてゐるのであるから戻くことは出來ぬ。然し主人の利家は氏郷と大の仲好しで、且又免れぬ中の緣者である、又左衛門が氏郷贔負なのは知れきつた事である。特に前年自分が氏郷を招いた前野の茶席の一件がある。如何に剛膽な政宗でも、コリヤ迂濶には、と思つたとで有らう。けれども我儘に出席をことわる譯にはならぬ、虚病も卑怯である。是非が無い。有難き仕合、當日罷出で、御芳情御禮申上ぐるでござらう、と挨拶せねばならなかつた。餘り御禮など申上度いことは無かつたらう。然し流石は政宗である。シヤ、何事も有らばあれ、と參會を約諾した。其日は來た。前田利家も可なり心遣ひしたことであらうが、これは又人物が大きい、ゆつたりと肉つきの豐かなところが有つて、そして實は中々骨太(ほねぶと)であり、諸大名の受けも宜くて、徳川か前田かと思はれたほどであるから、かゝる場合にも坦夷の表面の底に行屆いた用意を存して居たとであらう。相客には淺野長政、前田徳善院細川越中守、金森法印、有馬法印、佐竹備後守、其他五六人の大名達を招いた。場處は勿論前田利家の邸で、高樓の大廣間であつた。座席の順位、人々の配り合せは、斯様いふ時に於て非常に主人の心づかひの要せらるゝものだ。無論氏郷を一方の首席に、政宗を一方の首席に、所謂兩立(りやうだて)といふところの、双方の甲乙上下の付かぬやうに請じて坐せしめた事だらう。それから自然と相客の贔負々々が有るから、右方贔負の人々をば右方へ揃へ、左方贔負の人々を左方へ揃へて坐らせる仕方もあれば、これを左右錯綜させて坐らせる坐らせ方も有る譯で、其時其人其事情に因つて、主人の用意は一樣に定つた事では有るまいが、利家が此日人々を何樣組合せて坐らせたかは分らない。但し此日の相客の中

で、佐竹の家は伊達の家と爭ひ戰つた事はあるか、元來が親類合だから、伊達が蒲生に對する場合は無論備後守は伊達贔負の隨一だ。德善院は早くから政宗と懇親である。細川越中の守は蒲生贔負たること言ふまでも無い。淺野彈正大弼長政は中々硬直で、場合によれば太閤殿下をも「狐に憑かれておはす」なぞと罵ることもする程だが、平日は穩便なるとが好きな、物分りの宜い人であるから、氏鄕贔負では有るが、政宗にも同情を吝む人では無い。有馬、金森、いづれも中々立派に一器量ある人々であり、他の人々も利家が共席を尊くして吾子の利長利政をも同坐させなかつた程だから、皆相應の人々だつたは疑無い。主人利家に取つては自分の支持をする者が一人でも多いが宜い譯だから、子息達も立派な大名である故同座させた方が萬事に都合が好いのだが、そこは又左衛門利家そんなナマヌル魂では無い。兩者の仲裁仲直りの席に、司會者の側の類を大勢並べて兩者を威壓するやうにするのは卑怯で、かゝる場合萬々一間違が出來れば、左方からも右方からも甘んじて刀を受けて、一身を犧牲に、そして飽迄も双方を鎭めるのを當然の覺悟とする故、助勢なんぞは却つて要せぬのである。人々は座に直つた。利家は一座を見ると、伊達藤次郎政宗は人々に押つけらるまじい面魂でウムと坐つてゐる。それも其筈で、いろ〳〵の經緯（いきさつ）があつた蒲生德三郎を面前に控へてゐるのであるから。又蒲生德三郎氏鄕も「何を」と云はぬばかりの樣子でスイと澄まして居る。これも其筈だ。氏鄕は「雖、褻にたまらぬ風情の人」だと記されて居るから、これも隨分恐ろしい人だ。厄介な人達の仲直りを利家は扱はせられたものだ。前田家家臣の書いてゐるところに據ると、「其節は勝手衆も申候は、今日政宗の體、大納言殿御ン屋にて無く候はゞ、まんをも仕られ申すべく候、又飛驒守殿も少も〳〵左樣の事堪忍これなき仁にて、事も出來申候事も之有るべく候へども云々」とある。まんとは我儘である。氏鄕政宗二人の樣子を饗應掛りの者の眼から見たところを寫して居るのである。そこで利家が見ると、政宗は肩衣（かたぎぬ）でゐる、それは可い、脇指をさして居る、それも可いが、其の脇指が朱鞘の大脇指、長

さが壹尺八九寸もあつた。そんな長い脇指といふものが有るもので無い。利家の眼は斯樣な恐ろしく長い脇指を指してゐる政宗の胸の中を優しく見やつた。こゝを我等から政宗の器量が小さいやうに看て取つてはならぬ。政宗は政宗で、寧ろ此處が政宗の好い處である。脇指は如何に長くとも脅かしにはならぬ。まして一坐の者は皆血烟りの灌頂洗禮を受けてゐる者達だ。だから其の恐ろしく長い大脇指は使ふつもりで無くて何で有らう。使ふつもりである。ほんとに使ふつもりであつたのである。好んで此を使はうやうは無いが、主人の挨拶、相手の出方、誤り間違つたら「おれはおれだ。」の料簡がある。何十萬石も捨てる、生命も捨てる、屈辱に生きることは嫌だ、といふ所存があつたのである。沸り立つた魂は誰も斯樣である。これが男兒たる者の立派な根性で無くて何で有らう。後に至つては政宗もずつと人が大きくなつて、江戸の城中で徳川の旗本から一拳を食はせられたが、其時はもう「蟻牡丹に上る、觀を寄せず」で、毆つた奴は蟻、自分は大きな白牡丹と納まりかへつたのであるが、此時はまだ若盛り、二十六七、せい〴〵二十八である。まだ泰平の世では無い、戰亂の世である。少しでも他に抑込まれて男を棄てゝは生甲斐が無いのである。壹尺七八寸の大脇指は、珍重、珍重。政宗は政宗だ、誰に遠慮がいるものか。元來政宗は又人に異つた一ト氣象の有つた者で、茶の湯を學んでから、そこは如何に政宗でも時代の風には捲込まれて千金もする茶碗を買つた。ところが其を玩賞してゐた折から、ふと手を滑らせて其茶碗を落した。すると流石大々名でもヘツと思うて胸ドツキリと心が動いた。そこで政宗は自ら慚ぢ憤つた。「貴いとは云へ多寡が土細工の茶碗だ、それに俺ほどの者が心を動かしたのは何事だ、エヽ忌々しい」と其の茶碗を把つて、ヘツシ、庭前の石へ叩きつけて粉にして終つたといふことがある。千兩の茶碗を叩きつけたところは些癇癖が強過ぎるか知らぬが、物に囚はれる心を碎いたところは千兩ぢや廉いくらゐだ。千兩の茶碗をも叩ツ壞した其政宗が今壹尺七八寸の叩き壞し道具を腰にして居る、何を叩き壞すか知れたものでは無い。そして其の對坐に

座つて居るのは、古い油筒を取上げて三百年も後まで其器の名を傳へた氏郷である。片や割茶碗、片や油筒、好い取組である。

氏郷其日の容儀は別に異樣では無かつた。「飛驒守殿仕立は雨かゝりの脇指にて候」とある。少し不明であつて精しくは分らぬ。が、政宗の如きでは無く、尋常に優しかつたのであらう。主人はじめ其他の人々も無論普通禮服で、法印等法體の人々は直綴などであつたと思はれる。何にせよ政宗の大脇指は目に立つた。人々も目を着けて之を讀んだらう。仲直り扱ひの主人である又左衛門利家は又左衛門利家だけに流石に好かつた。其大脇指に眼をやりながら、「政宗殿にはだてなる御仕立」と挨拶ながら當てた。綿の中に何かゞ有る言葉だ。實に味が有る。又右衛門大出來、大出來。太閤が死病の時、此人の手を押頂いて、秀頼の上を頼み聞えたが、實に太閤に頂かせるだけの手を此人は持つてゐたのだ。何とまあ好い言葉だらう。此時此場、此上に好い語は有るまい。政宗は古禪僧の德山の意氣である、それも慥におもしろい。然し利家は德山どころではない、大禪師だ。「政宗は殊のほか當りたる體にて候」と前田の臣下が書いて居るが、如何に政宗でも、扱ひ役である利家に對つて此語を如何ともすることは出來無かつたらう、殊のほか當つたに相違無い。然し政宗も惡くはなかつた、「遠國に候故」と云つて謹んでおとなしくしたといふ。田舍者でござるから、といふやうなものだ。そこで盃が二ツ座上に出された。利家は座の中へ出て、殿下の意を傳へ、諸大名も自分も双方の仲好からんことを望む趣意を挨拶し、双方へ盃を進め、酒禮宜しく有つて、遂に無事圓滿に其席は終つてしまつた。利家の威も強く德もあり器量も有つたので上首尾に終つたのである。殿下が利家に此事を申付けられたのも御尤だつた、といふので、秀吉までが讃められて、氏郷政宗の仲直りは濟んだ。「だてなる御仕立」は實に好かつた。「だて」といふ話は伊達家の衣

裳持物の豪華から起つたの、朝鮮陣の時に政宗の臣遠藤宗信や原田宗時等が非常に大きな刀や薙刀などを造つたから起

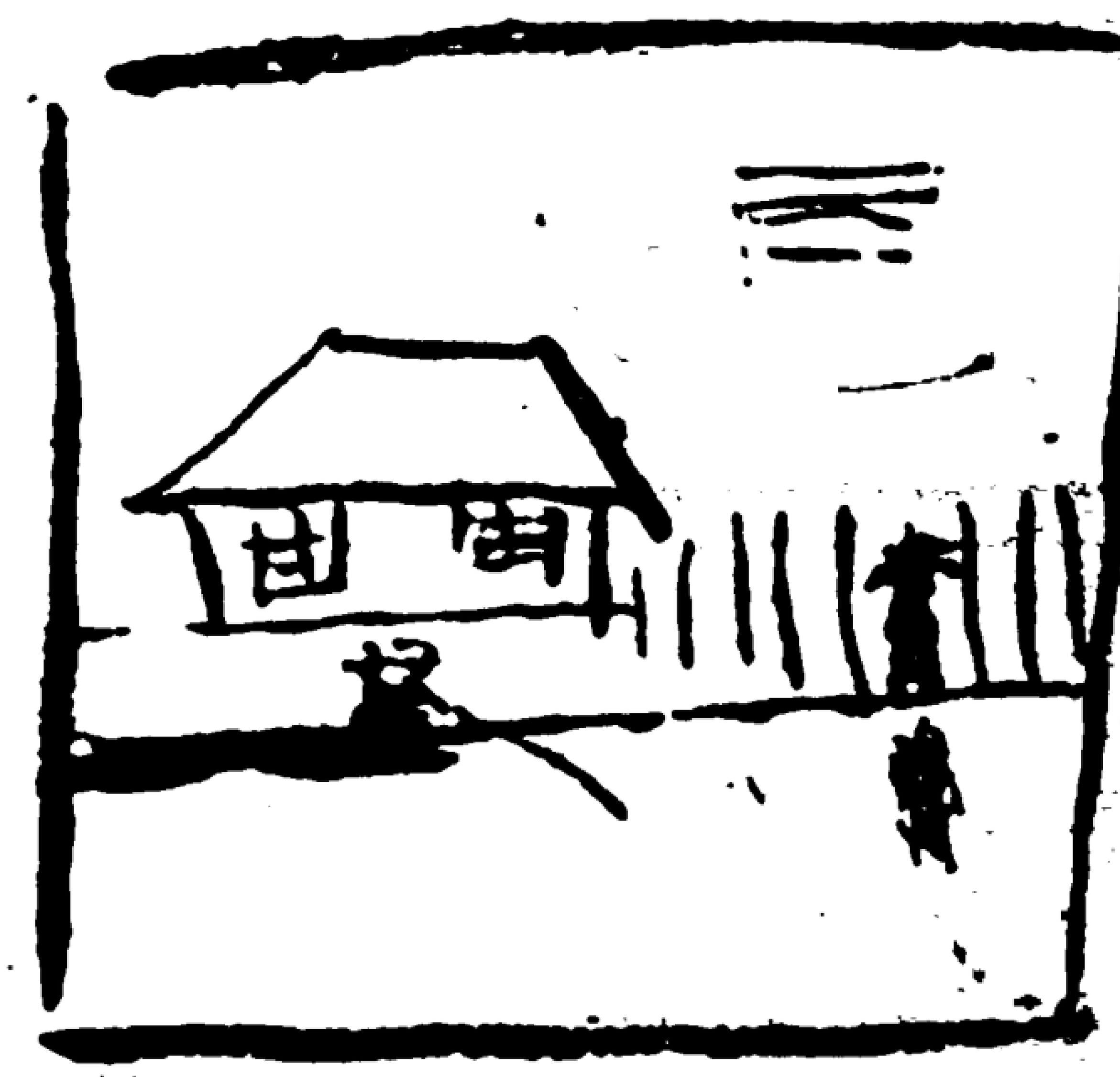
つたのなど、云ふのは疑はしい。も少し古くから存した言葉だらう。

天正二十年即ち文祿元年、彼の朝鮮陣が起つたので、氏郷は會津に在城してゐたが上洛の途に上つた。白河を越え、下野にかゝり、遊行上人に道しるべした柳の陰に歌を詠じ、それから那須野が原へとかゝつた。茫々たる曠野、草萊いたづらに茂つて、千古たゞ有るがまゝに有るのみなのを見て、氏郷は「世の中にわれは何をかなすの原なすわざも無く年や經ぬべき」と歎じた。歌のおもては勿論那須野が原の何の世に益をもなさで今後も甲斐なく年を經るであらうかと歎じたのである。然し歌は顯眼昭闍黎の論じた如く、詩は祇園南海の說いた如く、其裏に汲めば汲むべき意の自然に存して居るものである。此歌を味はへば氏郷が身漸く老いんとして志未だ遂げざるをは自ら悲み歎じたさまが思ひ浮められる。それから佐野の身橋を過ぎ、信濃へ入つたところ、火を有つ淺間の山の煙は濛々漠々として天を焦して居る。そこで「信濃なる淺間の嶽は何を思ふ」と詠み掛けたりなぞしてゐる。自分が日頃胸を焦がして思ふところが有るからであつたらう。

肥前名護耶に在つて太閤に侍して居た頃、太閤が朝鮮陣の思ふやうにならぬを悅ばずして、我みづから中軍を率ゐ、前田利家を右軍、蒲生氏郷を左軍にして渡海しよう、と言つた時、氏郷が大に悅んで「人生は草葉の露、願はくは思ふさま働きて」と云つたことは名高い談である。其事は實現し無かつたけれども、氏郷の英雄の意氣と、太閤に頼もしく思はれた程度とは想察に餘りある。氏郷が病死したのは文祿四年二月七日で、齡は四十歲で有つたが、其死後右筆頭の滿田長右衛門が或時氏郷の懸硯を開いて、「朝鮮へ國替仰せ付けられたく、一類眷屬悉く引率して彼地へ渡り、直ちに大明へ取つて掛り、事果てぬ限りは歸國仕るまじき旨の目安」を作り置かれしが、これを上らるゝに及ばずして御壽命が盡きさせられた。と歎じたといふ。これをケチな史家共は、太閤に其材能を忌まれたから、氏郷が自ら安んぜずして然樣

いふ考を起したのであるといふが、そんな蝨ツたかりの秀吉でもない氏郷でもない、九尺梯子は九尺梯子で、後の太平の世に生れて女飯を食つた史傳家輩は、元和天正の丈高い人を見損ふ僻がある。太閤が氏郷を忌んで、石田三成と直江兼續の言を用ゐ、利休の弟子の瀨田掃部正忠に命じて毒茶を飮ませたなどゝ云ふのは、實に忌々しい。正忠の茶に招かれて、歸宅して血を喀いたことは有らうが、それは病氣の故で有つたらう。無い事に證據は無いものであるから、毒を飼なかつたといふ證據は無い譯だが、太閤が毒を飼つたといふことは信ぜられない。太閤が然樣なことをする人とは思へないばかりでは無い、然樣なことをする必要が何處にあるであらう。氏郷が生きて居れば、豐臣家は却つて彼樣にはならなかつたらう。氏郷が利家と仲好く、利家は好い人物であり、氏郷と家康とは肌合が合はぬのであつた。然樣いふことを知らぬやうな寢惚けた秀吉では無い。或時氏郷邸で雁の汁の會食があつて、前田肥前守、細川越中守、上田主水、戶田武藏守など參會したことがあつた。食後雜談になつて、若し太閤殿下に萬一の事があつたら、天下を掟するものは誰だらうといふことが話題になつた。其時氏郷は、「あれ〳〵、あの親父」と云つて肥前守利長を指さした。利長の親父は即ち利家だ。利長は「飛驒殿は何を申さるゝや」とおとなしい人だから笑つた。皆々は些合點しかねた。で氏郷は、利家は武邊者なり、北國三州の主なり、京都までの道すがら足に障る者もなく、毛利は有りても浮田が遮り申す、家康上洛を心掛けなば此の飛驒が之有る、即時に喰付て箱根を越えさせ申すまじ、又諸大名多く洛に在りて事起らば、猶更利家の味方多からん、と云つたと云ふ。氏郷が家康に喰付けば、政宗が氏郷に喰付きもするだらうが、それは兎に角として、氏郷は利家贔負であつた。又他の場合にも氏郷は利家が天下を掟するに足ることを云ひ、前田殿を除きては と問はれたら、其時はおれが、と云つたので、德川殿はと問ふ者が出たところ、「彼の物悋みめがナニ」と云つた談が傳へられてゐる。氏郷が家康を重く視てゐず、又餘り快く思つてゐなかつたことは實際だつたらう。秀吉も猜忌の念の無

いことは無い。然し氏郷を除きたがる念があつたとすれば、餘程譯の分らぬ人になつて、秀吉は大下落する。氏郷に毒を飼つたのは三成の讒に本づくと、蒲生家の者は記してゐるが、氏郷は下血を患ひたと同じ人が記し、面は黄に黒く、項頸の傍、肉少く、目の下微し浮腫し、其後腫脹彌甚しかつたと記してある。法眼正純の藥、名護屋にて宗叔の藥、又半井道三等の治療を受けたとある、一朝一夕の病氣ではない。想像するに腎臟などの病で終つたのだらう。南禪寺靈三和尙の慶長二年の氏卿像賛に「可惜談笑中竊置鴆毒」の句が有つたとしても、それは蒲生の家臣の池田和泉守等が氏卿の苑を疑つたに出た想像に本づいたものであらう。下風が氣を洩らす事であらうとも、腿酸股顫して自ら支へ能はぬ事であらうとも、何でも差支無いと同じく、深く論ずるに値せぬ。彼の氏郷が自ら毒飼をされた事を知つて、「限りあれば」の歌を詠ずると、千利休「降ると見ば積らぬさきに拂へかし雪には折れぬ青柳の枝」といふ歌を示して落涙したなど丶いふのは餘り面白くない演劇だ。降ると見ばの歌を聞いたとて毒を飼はれて終つた後に何にならう。且其歌も講釋師が示しさうな歌で、利休が示しさうな歌ではない。氏郷の辭世の歌は毒を飼はれたのを悟つて詠じたと解せずとも宜からう。二月七日に死んだのである。春の事であり、花を惜むことを詠んだので、其中おのづからに自ら傷むで居るのである。別に毒の匂などはせぬ。政宗をさへ羽柴陸奥守にして居る太閤が、何で氏郷に毒を飼ふやうな卑劣狹小な心を有たう。太閤はそんなケチな魂を有つて居ぬ人と思はれる。たゞ氏郷が壽命が無くて、朝鮮へ國替の願を出さずに終つたことは、氏郷の爲に太閤の爲に、惜んでも餘りある。太閤は無論悅んで之を許した事であらう。家康も家康公と云つて然るべき方である、利家も利家公と云つて然るべき人である、其他上杉でも島津でも伊達でも、當時に立派な沸り立つた魂は少くないが、朝鮮へ國替の願を出さう者は、忠三郎氏郷のほかに誰が有つたらう。



感覺の花火

堀口大學

鳩

窓の前を一羽の鳩がとんだ
心の上をあなたの思ひ出がすぎた

鳩のはばたきが空氣に穴をあけた
思ひ出の嘴（くちばし）が心臓に血を流させた

窓の前を一羽の鳩がとんだ
心の上をあなたの思ひ出がすぎた

感覺の花火

ほのほはすべて灰となる
明日の日今日は昨日となる
愛する女よ
やがてわれ等が憎み合ふ日が來よう
やがてわれ等がわれ等を忘れる日が來よう

然しそれにしても
然しそれにしても
今日私はお前を愛し
お前は私を愛す
肉はなぐさめ易く
感覺ばかりが正直だ

われ等のほのほが灰となる前に
明日(あす)が來て今日(けふ)を追ふ前に
愛する女よ
われ等によろこびを與へよう
肉を饗宴に招いて
感覺の花火をあげやう

忘却

忘れよう
思はぬやうにしよう

返らぬ夢だ
死んだ小鳥だ

忘れよう

思はぬやうにしよう
昨日(きのふ)の花だ
失はれた寶玉だ
忘れよう
思はぬやうにしよう
消えた花火だ
すたれた帽子だ
忘れよう
思はぬやうにしよう
沈んだ笛だ

錆びた鏡だ

忘れよう
思はぬやうにしよう

去年の雪だ
すぎた花ざかりだ

忘れよう
思はぬやうにしよう

閉された窓だ
うつろな鳥籠だ

忘れよう

思はぬやうにしよう

殺された鳩だ
埋れた寺院だ

忘れよう
思はぬやうにしよう

終つた戀だ
去つた女だ

忘れよう
思はぬやうにしよう

瓦

瓦
屋根の上の瓦
屋根瓦
晝は日に燃え
夜は月に濡れる

瓦
屋根の上の瓦
屋根瓦
ペンペン草も一緒になつて
風の若者が來て腰かけて
口笛を吹くのだが
星はなかなかに降りて來ぬ

瓦
屋根の上の瓦
屋根瓦

嫁ぐ少女

うしろ手に
夕ぐれが
戸をとざす
ひるの戸を
うしろ手に
ものうげに
夕ぐれが
まりながら

みかへりがちに

夕ぐれが
戸をひらく
夜の戸を
あこがれて
夕ぐれが
來てひらく
わななきて

レダ

すさまじき少女(をとめ)の戀に
白鳥は傷きて死ぬ
白鳥は血まみれて死ぬ

狂ほしき少女(をとめ)の接吻(キス)に
傷つきて白鳥は死ぬ
血まみれて白鳥は死ぬ

草にねてレダはほこれり
伃は血にぬれたれど
なほ處女におのれ殘りて

太陽と蛇

わが罪よ
わが邪惡よ
すべてわが惡しき存在よ
汝(なむち)あきらけし
太陽のごとく

わが罪を
わが邪惡を
すべてわが惡しき存在を
憎まざる惡しきおのれよ
汝(なんぢ)は見るか
夏日(かじつ)青葉にねむる
蛇(くちなは)を美しと?
太陽の明るさ
蛇(くちなは)の美しさ
ああ　わが存在のあしさ

晩秋哀歌

木(こ)の葉が落ちる
時は秋だ

風に追はれて
雨は嘆く
墓の方へと
人等あゆみ
花なき地上
影に被はる

戀よ　若さよ
今しいづこ？
才よ　わが名よ
人は知らず！
ほろび行く時
うたはさびし
風よ　木の葉よ
秋よ　われよ！

春と夏

少女よ
私は云ふのだが
お前の十八歳は
四月のやうにやさしいと

然しそれにしても
お前は思ふだらうか
私の三十二歳は
眞夏のやうに力強いと

月光をのむ

われ等戀のたはむれに
なんとのどのかはくことだ

さあ二人でのまう
無花果の葉にうけて
月の光の牛乳を

詩

詩は言葉のSEXEだ
だから言葉は詩をかくす

毛蟲

電氣廣告
光の毛蟲が
はひまはり
はひまはり

震災詩集「災禍の上に」の扉に題す

やけあとに月が出て
やけあとに火が燃え
やけあとに詩人等が
むくろをさらす
恥さらす

飴の心臓

飴屋さん　飴屋さん
心臓を一つおくれよ
五錢のを一つおくれよ
埃だらけの　しわだらけの
店(たな)さらしはいやだよ
出來合ひは可哀相だよ
おれはまだ初戀だよ
すまぬことだがせめて

おれの寸尺に合せて
一つこしらへておくれよ
君の手あかとつばさは
それは大せつだよ
忘れぬやうにし給へ
それが君　さきになつて
運命と宿世になるのだ

内側には粉をぬつて
一寸とよしの棒をはさんで
さあ息を吹きこみ給へ
もつと息を吹きこみ給へ
皮の薄いほど感受性は鋭敏だよ
もつと息を吹きこみ給へ

(あんまりいきんで吹いたので
ぽうんと音がして
飴屋が破裂して消えてなくなつた
飴の心臓も一緒に………)

春夫に答ふ

震災直前、春夫月餘に渡り、余と共に大森望翠樓にあり。日夕詩文を談じ、木天蓼(またたび)を食ひ、麥酒をのみ、創作にふける、快云はん方なし。その間、春夫つくる所の詩數篇ことごとく出色、余の久しく愛誦おかざる所、曰く「鳩」、曰く「花なき庭」、曰く「月なき窓」、等々々。

今春余あらたにルウマニアよりかへり、再び望翠樓に行李をとく、晩春哀情多く、遠く紀山にある友を思ふの心切なり、即ち書をとばして春夫の來遊を求む。春夫こたへず、偖に左の一詩を示す、

與大學

哀れむべし
われ老ひぬ
雨はれし

五月の朝に
新らしき
戀を求めず
古りにし
友を思ふまで

その園に花が咲き
その窓に月が出て
その鳩が君を呼び
その友が君を待つ

十字語

クロス・ワードを遊びませう

ウオタア・スコツトの火の名と
セミラミツスの花の名と

リリアン・ギツシの目のいろと
サロメが好きな果物と
(奥さん　それは戀ですね)
クロス・ワードを遊びませう

充分が

充分が私には不充分だ
飽いて私は飽き足らぬ

愛する女よ　私は痛む
この食慾が私をさいなむ

このやうにお前を愛することは
氣ちがひ沙汰だと私は知つてゐる

然しそれにしても
然しそれにしても

充分が私には不充分だ
飽いて私は飽き足らぬ

自分の信用する人としない人其他

武者小路實篤

自分の信用する人としない人

自分はこの人は信用が出來るか、出來ないかを左の理由できめる。

どんな時でも物質的に損をしたがらない人は信用しない。

さう云ふ人は利益によつて動かされる人だ。より利益のある仕事が見つかれば何とか理窟をつけてその方に走つてゆく人はどんな種類の人でも信用出來ない。さう云ふ人は使ふのには便利だらうが、友人として信賴するには不適當である。

噓の平氣でつける人。誰でも絕對に噓をつかない人と云ふものはないかも知れない。しかし噓をつく理由に人情味がない人は信賴出來ない。たとへば醫者が死ぬにきまつてゐると思ふ人に希望を持たせるやうな噓を云ふのは、聞いてゐてわるい氣はしない。しかし死ぬときまらない病人をつかまへて、殺してやらうと思つて君は死ぬと云つたとすれば、その噓は氣持がわるい。噓もそのつく元因でその人の心がけがわかるものである。その人の愛の深さ、その人の慾の深さ、意地のよしあし。人間に多少の慾があつたり、意地のわるい所があるのは信用出來ない理由にならないことがあ

る。しかし自己の正體を見失なつた嘘つきは一番信用が出來ない。次ぎに利益のためには平氣で嘘がつけるものも、いつも得したがる人間と同じく信用が出來ない。

根氣のないもの、意志の弱い者も信賴出來ない、人はよくつても、その時、その時で自分の考や意見がかはり、生活態度がかはる者も信賴が出來ない。半年や一年は信賴出來るが、それ以上は信賴出來ないと云ふ人がよくあるものだ。始めに熱中してすぐさめる。熱しやすく、さめやすいと云ふ性分は困りものである。共に仕事は出來ない。

かるはづみ、思慮不足、共に信用の出來ないのは云ふ迄もない。

女にあますぎるもの、他人の意見に動かされやすいものも信用出來ない。

他人の言葉を入れることは美德である。たゞ頑固一點許りで他人の云ふことは頭から否定するものは愚であるが、又始末に困るが、他人の云ふことに動かされすぎる後人際も困りものである。他人を利用しやうとするものにいゝ人間は少ないが、後人際はさう云ふよくない人間が利用される。どつちにしても自己のない人間は信用が出來ない。

岩でも山でも川でもあるべき所にあるからいゝ。あると見へる所になく、ないと思ふ所にあるのでは危險この上ない。自己のない人間はあると思ふ所になく、ないと思ふ所に平氣で居たりする厄介ものである。尤も存在するやうな顔してゐても自己のない人間は氣體にすぎないから始末にはいゝ所もあるが信用は出來ない。

新しき村に來て三四ケ月働けば理想境が出現するものゝやうに思つてゐる現實や人間にたいする無智な空想家も信用出來ない。

要するに惡人は信用出來ないとしても、善良でも自己のしつかりしてゐない、又あきつぽい性質の人や、意久地なしや、根氣のない人や、意志の弱はい人や、自己のない人、だまされやすい人は信用出來ない。さう云ふ人が存外多いの

は惜しいことである。

其他

税については僕は別に何にも考へてない男だが、この頃のやうに金に困つてゐる時に、どん／＼税をとりに來られると勢ひ考へないわけにはゆかない。こんなにとり上げる税を何に、つかつてゐるのだらうと思ふ。

田舍にゐるせいか税許りとられてゐるやうな氣がする。税の御利益はなさすぎる。

鐵道や郵便の御利益はうけるが、それは税をとらないでもやつてゆける仕事だ。あとは軍備につかはれる位いが、田舍者にとつては一番意味がある位いだからやり切れない。

税はすなほに出す方針にしてゐるが、時々税のつかい道が調べたくなる。

○

僕の若い平和な友から結婚するのに就て結婚後の夫婦の生活にとつて何が一番大切であるかと云ふ質問をうけた。僕は結婚する人にとつてはあまりいゝ先例者でないだけに、かう云ふ質問をうけることは反つて感謝する。

自分の家庭よりも自分の仕事を尊敬しなければならない種類の人と、家庭の平和を一生たのしんでゆける人とあるとすれば、この若い友は家庭の平和を第一として生ていつていゝ性質をもつてゐるやうに思ふ。僕は家庭の平和を尊敬することは人後におちないつもりだ。どんな仕事をするのでも、家庭の平和は大事であるが、殊に平和な民として生てゆける質の人にとつては家庭は大事なことは云ふ迄もない。自分は家庭生活に恵まれた人間とも思はない、それを不幸と

許りは思はないが、圓滿なる家庭を見ればそれは地上に於ける最も美しい生活の一つと思ふ。それは想像の世界にのみ花さくものゝやうな美しさを感じる。

勿論、家庭は家庭のための家庭とは思はない。家庭は安息所であり、力を養ふ所であり、次ぎの時代の人間を健全に生長させる所である。我等の働くべき仕事は家庭以外にあることが必要である。一家のために働くとか、金をとるとか云ふのは變態社會の現象である。我等は家庭に奉仕すべきものではなく、家庭全體をもつて社會に、或は人間に奉仕すべきものである。男の人はこのことを心得てゐるが、女の人にはこのことがのみこめない人が多いかと思ふ。女の人が家庭のことを切り廻すのは、家庭のためではなく、夫や、子供が社會のために更に役立つためである。

他人に對する、又社會にたいする務めなしに男子は生てはゆけない。家庭を主にするのはまちがいだ。しかしそれにもかゝわらず家庭を大事にすることは必要なことである。家庭は快樂を得る處ではない。禁慾する必要はないであらう。家庭はなるべく樂しいもの、温かいものでありたい。快樂も目的とせずに得られるなら得た方がいゝ。自分は家庭で一番大事なのはお互の氣樂さだと思ふ。家庭は窮屈であつてはならない。自分の家と云ふ落ちつきが大事だ。家を持つ、愛するものを持つ、自分の歸りを待つてゐるものを持つ、自分が喜ばすことが出來るものを持つ、利害が一致して二人が一人のやうになれるものを持つ、妻をもつ、夫をもつと云ふことはいゝことである。樂しいことであり、よろこばしいことである。お互の要求が强すぎさへしなければ。

大がい普通の夫婦は、夫婦になると云ふことは一つの冒險であり、勝つか負けるかの爭そいである。夫婦の調和の仕方がきまるまでは兩方が自分の分のいゝ調和の仕方をしたがるものだ。どつちかゞ折れゝばどつちかゞつけ上ると云ふ傾がある。之は面白くないが、事實である。其處で夫婦になる時はお互が樂しい空想をもち、虫のいゝ空想をもつ、そ

して相手が愛の化身か、謙譲の化身のやうに思ひたがるが、現實はそれを許さない。矢張り多くの場合癖のある頑固な處のある動かすことの出來ない先入主をもつ、又自分とちがつた習慣をもつ、中々思ふ通りにならない代物である。しかし勿論、人による。理想的な人間がないものときめるわけにはゆかないが、十が十まで長所と同時に缺點はもつものと思はなければならない。そしてお互がそれを認めあい、更によき所を認めあふことが必要である。自分自身が完全でなく、理想的な夫でないことを棚にあげて他にだけ理想的な所を求めるのは虫がよすぎる。

しかし十人並以下でなければ取柄のない人間と云ふものはない、その人獨特のいゝ所をもつものだ。缺點はあつても一つのよき所があれば人間はすてるべきものでない。ましていゝ所をより多く持つものは尊敬しなければならない。

自分が撰んで結婚する場合はだまされやすい、それは相手にだまされるのではなく、自分の空想や、虫のいゝ要求にだまされる。他人や親には氣がつく缺點が氣がつかない。氣がついても其處が又アバタも笑くぼになる。其處が男女の面白い所であるが、一生さめなければいゝが、鼻につくに從つて缺點は氣がついてくる。だから自由結婚は安全とは云へない。しかし仲人の言葉だけを信じるよりはまだましであらうが、自分が夢中にならないまでに相手を冷淡に批判することは必要なことゝ思ふ。しかし愛さずに女を見るのが本當か、愛して見るのが本當かはわからない。愛せずに女を見る事を自然は男に要求してゐないやうにも思ふ。

話がだん／＼それるが、夫婦にとつて大事なのは信賴だと云ふことが本當かも知れない。もつと大事なことはお互が靜かに愛すると云ふことだ。お互が平和に愛する、調子の高い愛も惡くはないであらうが、靜かに愛さなくつては家庭はたもてない。熱愛とか、愛慾は人をつかれさす。一時的ならかまわないが、さめた時に淺ましくならずに靜かな愛がわくことが必要である。

自分は結婚する前は結婚することを一方恐れてゐたが、結婚は恐れる程のものとは思はない、靜かな愛、新鮮な愛が感じられる夫婦は仕合せである。そして男は矢張りそとで働き、女は家で働くのが自然と思へる。それは人によることで一概にきめられはしないが。

朝から晩まで晩から朝まで同じ家にゐる夫婦は、仕合せかどうかはわからない。夫はそとで働いて夕方我が家に急いで歸つてくるのが、（自分は文士だからさう云う經驗はないが）家らしい氣がしさうに思ふ。そして細君は夫の歸りを待つてよろこばしたく思ふのが家庭らしい。夫に留守中の嫉妬の不安をさせる細君はいゝ細君と云へない。細君を待ちぼうけさせて遊んで歩く夫のよくないのは云ふ迄もない。さうなると夫婦は、少し變形したものになつてくるのはやむを得ない。道樂者を夫にもつ細君は、家とか子供とかが主にならなければならない。だが道樂の夫は細君を愛しない夫と思ふのはまちがいである。道樂と夫婦の愛情とは不思議な處で兩立出來ることもあり得る。しかしそれが完全な夫の態度とは云へないであらう。だが完全な人間は何處にゐるか。

見ぬもの清しと云ふのは男女の間においても通用する。しかし清い夫婦、兩方完全に貞操を守りぬく夫婦もあり得るし、又そう云ふ美しい夫婦も自分は知つてゐる。しかし貞操は守つてゐるが、夫を愛してゐないと云ふ女もあり得る。いろ〳〵のことがあり得るから一々例外をあげて話しては切りがない。

自分に聞いて來た若い友は童貞を立派に守りぬいてゐる人のやうに思ふ。又結婚しても夫として立派に一生を清くおくりさうな人に思へる。又その妻になる人も、その人に實に適當の人のやうに思へる。だから一般の夫婦の場合を話して、參考にする必要はない。珍らしい美しい夫婦が出來上ることを自分は信じてゐられるからだ。

しかし自分はその質問をうけて考へさせられる事實は一般の場合である。自分の最も信じてゐる友も、夫として完全

な人間とは云へない。自分自身、又夫として不完全すぎる。しかし自分はよき夫婦を讃美することは人後におちない。そして高砂の爺さん婆さんの美しさはこの世の美しさの最大の一つと思ふ。しかしそれが人生の全部とは思はない。

家庭は圓滿であれ、夫婦はお互に感謝して、平和な靜かなよろこびと愛とにしたつてほしい。そして更に自分の仕事に忠實であり、そして次ぎの時代をつくる子供を立派に育てあげることが大事である。

童貞を守つてゐる男、又處女にとつて結婚は美しい祝宴であれ、そしてその幸福を何かに感謝して更に決心づよく生てほしい。

家庭は人生の目的ではない、家庭は更に生る力をあたへる人生のための港である。港にゐるのが舟の使命ではないが、歸るべき港を持たない舟は淋しいにちがいない。歸るべき所をもつて、歸る時のよろこびを二倍するためにも、自分の仕事をより忠實にやつてゆくことが必要である。

結婚するものに清い深いよろこびあれ。本當に愛し得るもの、本當に夫婦となり得る資格をもつものはすべて夫婦になれる世界が來ることを望む。

そして更に人々が喜び多く希望多く生きられる世界のくることをのぞむ。

○

一夫一婦を理想にしてそのために自己の全力をつかい果したとしたら、その人は利口かどうかわからない。一夫一婦な人生の唯一の目的とすべきものではない。一夫一婦は男女の生活形式として最も健全なものであると云ふにすぎない。男女の働くべき仕事は他にある。夫婦がお互に奉仕することに全力をつくしすぎて自分の使命につくす餘力がなく

なつたら、見ぢめなものである。

自分は自分の使命のため、自分の天職のためには一夫一婦も、家庭も、自己の幸福も問題にしないでいゝ時があると思つてゐる。

僕をあるカリカチュアで一夫二婦主義と云ひ、あるゴシップでは三角の家をたてるとか、四角關係とか云ふ。何と云はれても事實に變化は來たさないのだから僕一個にとつては問題にしないでいゝが、さう云ふ冗談が、定評になり、その言葉だけが通用して、その言葉の內要を各自が最も賤しく想像することを考へるとあまりいゝ氣はしないが、しかし自分で辨解するだけはしても通用しない世の中だからほつたらかしておくのが一番いゝが。

自分は自分の使命を立派に果したいと云ふ希望と、立派な父として生てゆきたい希望をもつと共に、安子に貞操を望む自分は又安子にたいして貞操を守らなければ惡いと云ふことを知つてゐる。房子にたいしては親身のものとして以上の愛を淸くもてることをよろこんでゐる。房子にたいして自分は幸福をのぞむ愛は實に强い。又房子は一方へんに他人に幸福を望まれる赤坊のやうな純な心をもつてゐる。しかし肉の關係をつけてゐないことは云ふ迄もない。自分は自分が女に淸い人間だとまだ中々云ひ切れない人間だが、房子とは淸い人間でゐられることをよろこんでゐる。その點で三角關係とか、四角關係とか云ふ言葉を安心して笑つてゐることが出來るから。

○

人間はどうかして金をもうけやうとするかはりに、又どうかして權力を得たいと思ふかはりに、どうしたら人間全部が幸福になれるか、生活の安定を得るかと云ふことを考へるやうになつたら世の中は今よりずつとすみいゝものになつ

てゐると思ふ。

政治家が黨派の勢力をはる苦心の半分でも國民全體の幸福を考へたら世の中はよくなり得ると思ふ。

先日神戸で國家主義にたいする僕の考へをきいた人があつたが、僕は國民主義と云ふものが、國民一人のこらずの生命を尊敬する主義なら賛成だと云つた。國家主義でありながら天皇の赤子だと云ふ國民の一人の生命でも尊敬することを知らなかつたら、その國家主義者は國民を愛しない、同胞を愛なさい、日本人を愛しない人間である。日本人を愛しない、日本人の生命を尊敬しない、國家主義者には賛成出來ないと云ふ意味を云つたら、不服さうに默つてしまつた。デモ國家主義者をやつけるには同胞を愛しない點をあげるのが一番いゝ方法である。

國家と云ふ偶像で人類愛を否定しようとする者には先づ國家と云ふものを完全に整理してくれることを望むべきである。國家の名で少數の人が得をして平氣でゐられた時代は通りすぎてしまつた。人間の生命を尊敬する運動が起つていゝと思ふ。

○

野心家はすべての人が獨立人になることをよろこばない。敵のあることをよろこぶ。征服するもののあることをよろこぶ。征服するものがなくなつたら威張るわけにはゆかない。他人を支配する愉快が味はへない。中央委員なぞと云ふ名を鼻の先にぶるさげることが出來なくなる。又正義をふり廻しても敵がある間は自分の身に歸つて來ない。敵がなくなるとうつかり正義をふり廻すと自分があぶなくなるが、皆が敵に注意をあつめてゐる間は安心である。

しかし本當のよき世界は獨立人が集ることによつてのみ來る。他人を支配することで勢力をはることの出來る間は、

世の中はいつも反動と革命がたへない。征服された者は必ず復讐する機會をねらうものだから。征服者はそれを恐れてます〳〵壓制が必要になる。

獨立人同志のあつまりだつたら、誰も征服されるものはない。「そんなことはいやだよ」と云へばそれですむ。自分のなすべきことだけはするが、他人の野心の犠牲にはならない。さう云ふ時が來なければ世の中はいつも征服者と被服征者が出來る。

○

兵隊と巡査は征服者か、被征服者か。

○

獨立した人間同志、生活の不安ない、××するもの、されるものゝない社會。それで立派に存立し得、そして益々進歩する社會。それが自分の望む社會である。今までさう云ふ社會にすむ資格のない人が多いだらうが、さう云ふ社會が來て始めて總べての人の生命はすなほに、卒直に正しく生られる。

征服したがる者の多いのは不愉快である。

○

新しい運動者が勢力爭そいをしてゐるのを見るのは悲慘である。自分一個の價値以外をたよるものは悲慘である。

他人の肩の上にのりたがるものは悲慘である。他人の肩を無理に自分の下に押しこむものは憎惡すべきである。獨立人でありたい。この望みはすべての人が持つべきである。

○

獨立人の價値、健全な人間の價値を知るべきである。末世の宗教は健全な人間の價値を見くべる傾がある。自分は健全な望みをもつ、獨立人を讃美したい。

自分の頭でものを考へ、自分の意志でものを實行する。協力する時は進んで協力をするが、自分が不正だと思つたことには斷じて組しない。さう云ふ人間が必要である。

人間の慾望も社會の病所によつて病的に發達せられることなく、健全に正當にすなほに生きることを望むべきである。

つまらぬことをくよくよしたり、小さいことに一々反撥するのは愚だが、大事なことには自分の考を押し通すことが必要だ。

好んで異を立てるのは愚だが、雷同するのも愚である。自分の頭で考へ、自分の足で歩く、他人の肩の上にものらず、他人を肩の上にものせず、自分の考で進む、自分はさう云ふ人こそ社會の柱だと思ふ。

今の人はあまりつまらぬことに頭を奪はれすぎる。そして足元をわすれ、本來の要求を忘れる。

○

たとへば金をもうけたいと思ふのはいゝ。しかし何のために金をもうけるのか考へないのは愚である。たゞ金さへためればいゝと云ふ人がよくある。そしてその如何に馬鹿氣たことであるかを知らない人がある。贅澤がしたいためかと云へばさうでもない。金が目的になつてゐるから切りがない。かう云ふ人の一生は正當な目的に費やされた一生とは云へない。

自分や、子孫の生命のために必要な金だけをとりたいと云ふのなら今の世の中では當然なことかも知れない。しかしそれ以上金をもうけたいと云ふのは不正當な、輕蔑されるべき慾望である。金持は生命に忠實なものからは輕蔑されるべきである。

しかし金のほしい連中からは尊敬されるのは當然であり、そして金のほしくない連中は今の世の中には殆んどないと云つていゝ。だからなんでも、金、金、と云つて、大金持が偉いことになる。不正當な要求を持つものが多いからである。

生命を若々しい勇士にくらべれば、金持はいやしげな老人に比較されるべきだ。金袋を勇士にいやしげに見せびらかす老人は、金持の姿である。自分は金に仕へるものにも善良な人間があるのを知るが、彼等は生命に忠實な勇士とは云へない。自分は革命に贊成しないものだが、生命の勇士が、金を見せびらかすものに征服されることはなほよろこばない。金持たちのことを思ふと、金を唯一のたよりに思ふのを思ふと、革命もわるいと許りは思はない。正當な望み、生命の本來の姿が生々と生きることを自分は強くのぞむものである。

○

生命本來の姿、
それを見るものは、
それの地上に生き、
かゞやくことをのぞむ。
生命の天使の本來の姿よ、
地上を濶歩せよ。

○

いやしげな老人のさしだす金袋を、
笑つて見かへりもせず、
馬をしづかに進める勇士。
それは實にコンペンショナルな光景だが、わるくない光景である。
自分は金が生命を支配せず、生命が金を支配する世界を想像する。その時金は便利な下僕にすぎないと思ふ。
大事なのは人類の生命の生ることに役立つものが、どん〳〵製産されることである。
藝術的よろこびも、どんな山のなか、津々浦々までしみこむことも自分はのぞんでゐる。

○

立派な教養のある人間、そして立派に一人前の勞働の出來る人間。

自分はさう云ふ人を健全な人間と云ひたい。自分は過渡期の人間だが、さう云ふ健全な若者を多く見るのは愉快なことである。

金はいくらあつてもいゝが、

自分の目標、自分の生命に少しでも不忠實にはなりたくない。

兄弟姉妹の生命の健全に生ることが、自分の願ひである。

金はなくつても生るのに困らない世界を自分達はつくりたく思ふものだが、個性を生かすのには金を利用したい。

○

自分が假りに政治家となつたらどう云ふ政治を行なつたらいゝかを考へて見やう。日本全國、世界全體が新しき村になるには少くももう五六十年はかゝるだらう。五六十年かゝつても駄目だらう。それでも自分が政治家になつて自分の思ふ通りのことを行なふよりはおそいとは云へない。第一自分が政治家になつて絶大の權力をふるう時があるとは思はないし、ふるひたいとも思はない。そして絶大の權利を持たない政治家には破壞も出來ないかも知れないが建設はなほ出來ないだらう。内閣が一年や二年でかはるのでは破壞の方は少しは出來ても建設の方は出來ないだらう。今世界でながくつゞいてゐる政府と云へばロシヤと伊太利だ。何と云つても反對するものを殺すことの出來る内閣だけがながつゞきする。そんな政府がいゝかわるいかは別だが。思ひ切つたことをやるのにはそんな政府でゞもなければ實行出來まい。勿論實行出來るかどうかは國民の力であつて、政府の人の力でないであらうが、しかし殺す權利を平氣でふりまわすこと

が出來れば大概のことは出來る。何百萬の人が餓死にしてもかまわず百萬の兵を養ふ度胸が必要かも知れないが。僕は素人考だか、軍隊を養ふ以上は國民の實生活に役に立つことに利用することが必要と思ふ。之はさうむづかしくなく出來ることゝ思ふ。失業者をつくる仕事をさせずに、失業者にも役に立つ仕事を考へだせば出せると思ふ。少くも工兵なぞは實際に役に立てゝ、日本の文明が全國に及ぶやうにしたい。鐵道なぞもつとどん〳〵しく方がいゝと思ふ。素人考かも知れないが。兵隊に製作的仕事をさせて、國民の生活程度を高めることは出來ないものか。

國民に最低の生活の保證を、最も短時間の勞働で得させることを考へ實行して見たい。

それからすべての人が自己の才能を研きたく思へば研ける設備を全國的にしたい。國民の義務教育につゞけて出來るだけやすく、各自の內心の要求に應じての教育をしたい。教育は出世するためではなく、自己を生かすためでありたい。

國民の生活に役立つ學問をするもの、そしてその方に功勞のあるものに最大の名譽を與へたい。國民の感謝のしるしを捧呈するのはいゝことゝ思ふ。

最低の生活、生活に必要なものばかりを得られる仕事を先づ與へて、それから段々自分の好みや、努力で豊かな生活に入れるやうにしたい。ともかく國民は生活のことは安心してゐられるやうにしたい。困ればあすこに歸ればいゝと云ふ處をつくつておきたい。そして其處で餘暇を十分につくり、其處で修業かつめるやうにしたい。立派な、國家の第一流の人物は其處から出得るやうにしたい。

勞働時間はその人の技術や、熱心によつて少しの長短をつげるのは自然と思ふが、ながくも其處の勞働時間は六時間にとめたい。衣食住に少しでも贅澤したい人は六時間以上働いてもいゝが、質素な生活で甘じて勉強したい人に最上の

便利を與へたい。

又進歩的な精神がなくつて、たゞ安樂をのぞむものには、又その人に適當な勞働の生活を與へたい。國民全體が安心して生てゆけ、希望をもつて生てゆけ、又たのしんで生てゆける餘裕を與へたい。

つまり國民は自由を樂しみたいだけは自由を樂しみ、今の社會によろこびを見出せるものは見出させておいていゝと思ふが、よはつた時に心地よく居られる處をつくつておきたい。

兵營や、工場や、カン獄以外に、自由人の安心して生活出來る大きな工場や農場や、手工場をつくりたい。さうすればいざと云ふ時に歸れる處があるわけだ。

このことは出來難いことかと思ふが、出來ないことゝは思へない。カン獄の囚人に一人前の働きをして食つてゆける方法を與へる以上、罪なくして生活に苦しむ人々が、名譽を失なはず、よろこび多く生きてゆける處があつたら、カン獄に行く人も少くなるであらう。

さう云ふ設備を方々につくることが出來たら、そして有志の人に、さう云ふ仕事を奬勵して研究さしたら、面白いことが出來さうに思ふ。生活は隨分安く出來ていゝはずと思ふ。そしてそれくらいの仕事は誰にでも出來ると思ふ。設備と資金とがあれば金もうけをしない、たゞ多くの人が自由時間多く生活出來ると云ふことのみを主眼にして、兄弟姉妹の本來の生命のみをひたすら尊敬しての、工場とか、農場とか、手工業をする處とかをつくれば面白いものが出來ると思ふ。そして其處から人間生活の新しい形式が生れると思ふ。

金もうけを考へず、立派な國民をつくる處、國民の生活の安全と、よろこび多いことを本願にする設備は完全につくると云ふことは大きな仕事と思ふ。

自分は政治家になつたら先づ第一にさう云ふ目的に叶ふ生活をするにはどう云ふ設備がいゝか、どう云ふ方法をとるのがいゝかを研究する處をつくり、そして贅澤品に課した税を全部その方にまわして完全なその目的に叶ふ田園都市をつくつて見たく思ふ。

田園都市をつくらないでも他にもやり方があると思ふ。小さくも大きくもやれると思ふ。誰かやつて見ないか。

○

カン獄へ入る方が樂だからと云つて泥棒した人がある。カン獄へ入りたくつても泥棒の出來ない人はどうするか。考へるがいゝ。

今のお役人がしたらどうせ碌なものはつくるまいが、しかし適任者を見つけ出せば面白いものが出來ると思ふ。そして存外適任者はゐるものと思ふ。

金もうけのかはりに國民の生命を尊敬することに全力的に頭を使ふ人があつてもいゝと思ふ。

さう云ふ人も少しはゐるのかと思ふが、一番大事なことを忘れてゐる人が多さうだ。

○

自分は人類主義者ではあるが、日本人としてまづ日本の國民に不幸な人のなくなることをのぞむ。他國人のことは他國人に任せたい。

國民の生活に最低のより所を與へよ。之以上日本の國民は誰も不幸にはならずにすむと云ふ土台を築くことが必要

だ。それ以上の生活は各自の腕により、又運によるやうにして、誰でも生活のことは心配しないでいゝ、そして病人は安心に病氣を養へるやうにしたい。

今のまゝでは國民を愛するとは云へない。日本人を日本人が愛してゐるとは云へない。日本人は皆天皇の赤子なぞと平氣で云ふ人間の顔が見たい。それだけのことを先づしやうとしなければならない。悪いことをしたものをカン獄に入れる、之は仕方がないかも知れない、しかしいゝ人間、働きたがつてゐる人間を食へなくさせるのはいけない。尤も田舎に居れば食へるのに、食へなくなつても都會に出たいと云つて、都會に出て食へないのは少し自業自得であるが、食へなくなつてもいゝ人はともかくとして、食へないでは本當に困る人々、家族に食へる道を先ず與へたい、それも出來るだけ名譽ある、喜びある方法で出來るだけ容易に出來る仕事を與へたい。そしてこの上なく質素でいゝから健全な衣食住を與へたい。自分達はそれを新しき村の一つの仕事にしたいとも思つてゐるが、今の處力が少なすぎる。出來る力をもつてゐる人、又境遇におかれてゐる人は考へて見てくれるとうれしい。之が完全に出來れば日本は世界に、日本人は萬世一系の天皇を戴く、天皇の赤子の集りである。國民は皆、お互の生命を尊敬しあふ兄弟姉妹の集りだと云へる。それが出來ない間は、外國と同じやうに國民は階級爭鬪にまきこまれるより仕方がない。

僕のすゝめるのは温情主義ではない。國民の生命を一つのこらず尊敬し、それの健全な生長を願ふ、生命主義である。

生る道を與へずに冷酷な目にだけあはせて、過激思想や、破壊思想がふへるのを恐れるのは愚である。おちついた責任のある考へ方をするにはおちついた位置に立つことが必要である。いくら考へても生活の方針が立たず、何處へ行つても露骨にいやな顔をされ、厄介ものあつかいにされるのは、する者も尤もなだけ、なほたまらない、それで生て行かう

とするには出來るだけ厚顔になり、自棄になるより仕方がない。

安心して生られる處を與へ、それがいやな人だけ生活に苦しむやうにしたいものだ。少くも人間の傲りを失なはずに國民の生られる處をつくりたいものだ。そのためなら兵營や軍艦やカン獄をあはせてつくる位いの金を稅としてとられても滿足すると思ふ。養老金よりもはるかに安全な國民の貯金法にもなるわけである。しかし稅は生きるに必要なものからはとらずに、生るに不必要なものからとつてほしいものだ。

この事が完全に出來たらそれは新しい生活方法を見出したことになる。新らしき村が出來上つたのと殆んど同じものになると思ふ。

つまり通俗に云ふと食ふ心配のない、そして何處までもその人の力相當に出世の出來る世界をつくつたら面白いと思ふのだ。その社會の門は常に開かれ、出たいものは出、入りたいものは入れるやうにしておきたい。勿論入るものは、始めは一定の家に居て眞面目に働くかどうか試驗をうけることも必要かもしれない。その試驗は元より誰でも、怠惰者でない限りは通れるものでなければならない。そして試驗に落ちたものは適當な所に收容されていゝ。

一人の人の勞働は二人か三人の人がやつと生活出來る位いの働きでとめておきたい。自分の働けない時の分、病氣の人や、自分の子供の分も働く必要があるから。そのかはり働けない時は安心して休める。尤もそんな委しいことは實行する氣がある人なら、すぐ考へつくことであり、又その人達の方が、遙かに實行的な考へをもつてゐるであらう。

自分の望むのは、國民の內、最も不幸なものも生活の不安を受けずに生てゆけ、そして又段々自分の生命に叶ふ生活が築いてゆける世界である。

いつまでもいつまでも同一の生活をくり返さなければならなく一生運命づけられるのは面白くない。自分の實力と努力次第で自分の生命にあつた生活を築いてゆけるやうにしたい。上にはいくらでも眞價によつて出られるが、下には地面がちやんとあつて、それより下へはおちずにすめるやうにしたいのが自分の願ひである。この願ひは自分一人の願ひではあるまい。

（一五、八、四）

堺利彦傳

堺利彦

第五期　福岡時代

（一）蜜月行

『蜜月行』は、東海道の汽車に始まり、大阪に於ける親しき家々の歴訪となり、それから瀬戸内海の汽船に移つた。東海道の富士の裾野も私にはまだ二度目の珍らしさであつたが、既に六度目の瀬戸内海も、矢張り珍らしい。そして懐かしい船旅であつた。あの靜かな海、あの澄みきつた海の水、あの美しい島々、船の甲板から手の屆きさうなあの島々の眺め。船に弱い私は、どうかすると播磨灘や周防灘の荒れにさへ吐き苦しむのであつたが、さすがに『蜜月行』は平穩無事で、新郎新婦御機嫌うるはしく下の關に着いた。その頃はまだ、山陽鐵道は三田尻あたりまでしか開通してゐないのであつた。

これまでの旅行には、いつも下の關から小蒸汽で小倉にわたつたのであつたが、この度は直ぐ對岸の門司にわたつた。僅かに數年前まで、鹽濱と小いさな漁村との外に何もなかつた門司が、今は既に繁昌の港となつてゐた。その變化は實に九州鐵道開通の結果であつた。

門司から九州鐵道の汽車に乘つて、懐かしい小倉を過ぎて博多に着いた。土地不案内の貧弱な若紳士とその妻とは、人力車夫に案内されて、博多の松島屋といふ大きな旅館の三階に上げられた。早速、福岡日々新聞社から主幹の濱地氏が來てくれた。そして福岡の榮屋といふ、これも立派な旅館に移された。榮屋が自由黨方の定宿なのであつた。

福岡と博多とは川の兩岸にある二つの町で、福岡は昔し城下の屋敷町であり、博多は商人町であつたのだらうが、今はそれが一つの福岡市になつてゐた。そして今でも矢張り、福岡は主として官廳地域、博多は商業地域であつた。

福岡の橋口町、橋のすぐ袂の川添に福岡日々新聞社の木造の洋館が立つてゐた。そのすぐ近くに縣廳があり、市役所があつた。榮屋も半町ばかりの距離にあつた。私はその夜、博多の中洲の料理屋で福日社の歡迎を受け、醉うて戻つて榮屋の二階の柔かい夜具の上に身を横たへて、それで『密月行』の終りを告げた。

(二) 福　日　社

丁度、天神町の芝尾入眞君の隣に空家があつて、私は早速そこに入れられた。家賃は僅かに三圓だつたが、私に取つては堂々たる大邸宅であつた。天神町は縣廳前の奇麗な靜かな大通りで、それに沿うた私の借宅は、昔しのサムライ屋敷ででもあつたらうか、門内が廣々として玄關先に野菜畑があり、その片隅には大きな梅の木があり、内菜といふ柑類の大木もあり、門から玄關までの道の兩側には茶の木の生垣があつたりした。家は可なりに古い平家であつたが、それでも八疊の座敷、六疊の茶の間、三疊の玄關、外に三疊、四疊などの小間もあつた。粗末ながら湯殿もあつた。妻は至極滿足して主婦振を樂しんでゐた。

福日社に出勤して見ると、一階の事務室に六七人、二階の編輯室に八九人の人達がゐた。事務室には濱池氏が主幹として控へて居り、編輯室には高橋光威氏が主筆として君臨してゐた。社長の征矢野さんは折々編輯室に來るが、いつも立ちながら話してゐた。私の同僚としては先づ芝尾入眞君があつた。芝尾君が私に取つて同郷の先輩である事は前に記した通り。又彼が欠伸と共に大阪で西村天囚氏の門に出入してゐた事も前に記す通り。私は征矢野さんに招かれて福日社に來り、編輯局では芝尾君と椅子を並べ、住宅も芝尾君のと相隣りしてゐたから、知らぬ土地へ初めて來た者の樣な心持ちではなかつた。その時、芝尾君は、筑前の或る山城の城主『高橋紹運』の事跡を小説に書いてゐた。文章は既に老熟してゐた。彼は編輯局中第一の故參であつたが、權勢を振ふでもなく、不平を抱くでもなく、默然として日々の事務に服し、只だ時として醉餘の放言大笑に氣焔を擧げ、そして翌日は更に默然と坐するのであつた。

次に中野鸚蟬君。これも豐前の人で、私とは直ぐに親しんだ。小男で少し藪睨みで、貧弱な風采で、云はゞ文學癖の田舍少年と云つた位の所であつたが、その文才には一種の鋭い閃きがあつた。私が早速それを認めて激賞すると、征天野さんは其の筈だと云つたやうな微笑をしてゐた。私は野あるきの道ばたに、色は淡いが香りの高い菫の花でも見つけた様な氣がしてゐ

た。然し彼の才は後に餘ほど違つた方面の、謂ゆる『新聞記者』として發揮されたらしい。

海妻猪勇彦君と云ふは筑前の人で、政治經濟方面の、筆の記者ではなく、むしろ口と足との記者らしく見受けられたが、私が行つてから間もなく、足を洗つて實業家に成りすました。『探訪』と云はれた側の人々には先づ八字眉に愛嬌のある小河敏郎君を思ひだす。朝から編輯局のゆかの上にブツ仆れてゐるのが毎度の事で、それは前夜の飲過の結果であつた。小河君の相棒に、年はまだそれほどでもないのに、禿頭の聳え立つた、好人物の（ツイ名を忘れた）某君があつた。小河君はたしか數年後に卒中で若死をしたと聞いた、禿頭氏の其後は知らないが、恐らく好人物通有の運命だつたらう。今ひとり原田德二郎君と云ふのは、古風な博多の商人とでも云つた樣なジミな恰好で、如何にも溫厚篤實な人物だつたが、これはズツト後に廣告部か何かの有力な働き手になつてゐた。

それから、私より少しおくれて入社した人々に、横岡蘆舟、森半佛、池元呦鹿庵、××××などがあつた。蘆舟君は上方生れの畫かきで、まだ二十あまりの青年でありながら、頭は全部ツル／＼であつた。それが此の人に取つては却つて一つの大きな、愛嬌といふ武器になつてゐた。暫く私の家に同居した事もあるが、柳町から美しい女が尋ねて來たりした。半佛君は熊本の人で、赤く焦げた樣な顏に眞黑い口髭が濃く、ドツシリした體格、重々しい物の言ひぶり、何處から見ても一個の快男兒であつた。呦鹿庵はその庵號にも似ず、まだホンの青年で、根本的の福岡士族の子だらうと私に思はれた。その呦鹿庵が後に東京の區會議員か何かになつてゐたのはチョイと意外だつた。半佛君には定めし面白い運命があつたらうと思はれるが、全く消息に接しない。蘆舟君は近ごろ京都に居て、自ら『勞働畫家』と稱してゐる。最後の××××君は、その縮れた髮と、愛嬌のある目とが、今わたしの頭の中に浮んでゐながら、名前がどうしても思ひ出されない。――（こゝまで書いて、『江口』といふ姓であつたかといふ氣もするが、それにしても名の方が分らない。）――彼は慶應義塾卒業のホヤ／＼でやつて來たのだつたが、初めて私等に引合はされた時、『どうぞお手柔かに』と笑ひながら挨拶した。その如才なさが、さすがに慶應出身だと思はれた。彼が後に鐘淵紡績に居た事だけは私の記憶にある。恐らく今は然るべき實業界の紳士だらう。

高橋光威君は新潟縣の人で、同じく慶應義塾の出身であつた。年は私より幾つか上だつたが、塾では私の昔しの相棒だつた杉元（神崎）平二君と同期だつたさうだ。先づ幾らか好男子の

部類に屬する恰好で、その細長い顔と痩せぎすの骨格とが、敏捷な事務家たる事を示してゐた。文章の技倆は言ふに足りなかつたが、社交の手腕は素晴らしいものだつた。思ふに、日清戰後の實業勃興時代に於いて、福岡といふ土地柄の新聞主筆としては、文章の技倆などよりも社交の手腕の方が必要であつたのかも知れない。少なくとも本人自身に取つては、その方が出世の糸口だつたのだらう。何しろ私に取つては、高橋君の第一印象が既に餘り面白くなかつた。高橋君は確かに遣り手であり、才人であつたに相違ない。然し私を引きつける樣な、志士的な所も、君子的な所も、學者的な所も、全く缺けてゐた。

然し私は征矢野さんの下に居るといふ事が何よりの愉快で、高橋君の存在には頓着なく、稍や勝手に振舞つてゐただらうと思れる。私は主として小說を書き、隨分雜錄樣の物を書き、柔かい雜報を書いてゐた。小說は例の通り、恐らく獨りよがりのずいぶん齒の浮く樣な所のある、變な物だつたらうが、それでも何しろ東京新下りの文學者と云ふわけで、『枯川』の名が多少の評判になつてゐた。東京を立つ時、尾崎紅葉君が『これなどはチョット面白い』と云つて餞別に呉れた英文の小說も、顯案の役に立つた。その頃、私の崇敬してゐた小說家は、紅葉、露伴、一葉の三人であつた。征矢野さんが小說好で、よく新らしい小說の噂などをするので、私は征矢野さんに向つて、現時の文壇、右の三人の外、恐るゝに足る者は無いなどゝ氣焰を吐いたりした。私は恥かしながら、いつか必ず小說家として躍りださうといふ『大望』を持つてゐた。

（三）自由黨の進化

第一議會の選擧に、征矢野さんが『吏黨の末松謙澄』との競爭に負けて落選した時、私がひどく失望を感じた事は前に記した。然るに今、自由黨は既に伊藤內閣と提携し、そして征矢野さんが末松氏に代つてゐた。自由黨は漸く政友會になりかけてゐた。私は少年の時にあこがれた自由黨に、初めて今ま接觸したのだが、それはもう昔の自由黨ではなかつた。

その頃、福岡縣から出てゐた自由黨の代議士では、多田作兵衛、藤金作の二氏が名物であつた。殊に多田氏は『百姓議員』として『ツクルベエ』と仇名された愛嬌者であつた。つまり二氏は地主階級の代表者であつた。それに對し、我が征矢野さんは士族階級の代表者で、全國的には餘り有名でなかつたが、內部では最も多く推重された先輩であつた。その後、前二氏は程なく隱退して、資本家階級の色彩を帶びた新人物が追々に現出して來たが、征矢野さんは猶ほ永く福岡政友會の中心人物とし

て殘存してゐた。そして征矢野さんが無くなつた時、士族の代表が亡びると共に、自由黨の正統が亦全く亡びたのであつた。

私はその頃、福日社で野田卯太郎氏のあの偉大な風采を見た事がある。彼は確かに自由統の正統であつた。然し彼の實質は既に變化してゐた。彼は既に三井系統の實業家であつた。即ち資本階級の色彩を多量に帶びた新人物であつた。彼が後に有力な議員となり、福岡政友會の代表となり、内閣員中の名物男となり得たのは、決して自由黨の正統なるが故ではなかつたらう。

私は又福岡で永江純一氏を見た事がある。豐肉短軀の温良な一紳士。同じく自由黨の先輩として知られてゐたが、同じく又三井系統の實業家であつた。後ち議員に當選した。私は又福岡で富安保太郎氏と多少の交りをした。富安氏は明治學院の卒業で、まだ一個の青年紳士であつた。彼は地主出身ではあつたらうが、その時すでに製油會社の社長であつた。彼も亦た一個の實業家として、後に福岡政友會から議員に選出された。私は當時又、征矢野さんあたりから、豐前の炭坑主（坑夫から成り上つた一豪傑）として藏内次郎作氏の名をチラ〳〵聞いてゐた。それが後に征矢野さんの選擧區から選出されて『若炭議員』の英名を天下に馳せた。現在、その選擧區から酒造家たる神崎勳氏が選出されてゐる事は、前にも記した通りである。これらが凡そ、福岡縣に於ける自由黨の進化、政友會の發達の足跡である。

私は當時、そうした進化發達の意味を理解してはゐなかつた。只だ何となく自由黨の意氣精神の喪失に不滿を感じてゐた。そしてひたすら征矢野さんの清高な人格に寄りすがると云つた樣な心持であつた。それが小説家志願の文學青年たる私の他の一面であつた。

（四） 征矢野さん

征矢野さんは政治家と云ふよりも寧ろ君子人であつた。『酒色』といふ英雄豪傑の資格は全く缺けてゐた。小説が好きと云ふのがおかしく感じられるほど一切の道樂氣がなかつた。字が非常に下手で、葉書一枚も滅多に書かなかつたのも、一つの特色であつた。殺風景と云ふのは當らないが、ずいぶん沒趣味であつた。家は豐前の片田舍に置いたまゝで、福岡では榮屋に宿屋住居をしてゐた。その方が便利でもあり、安上りでもあると云ふのだつた。只だ征矢野さんは柿が好きで大きな柿を女中にむかせて大きな鉢に山盛りにして、盛んにそれを貪り食ひがなら、人にも食へ食へと勸めるのであつた。

然し私は、征矢野さんにそれほど推服してゐながら、一面に

は何處か物足りなさを感じてゐた。或る夜、菜屋の二階で外に來客もなく、征矢野さんと私と二人きりで、シミ〲とした話になつた時、私は征矢野さんに質問した。あなたが、これだけの地位經歷を持ちながら、大いに世に現はれると云ふ處まで至らないのは、どういふわけでせうと。すると征矢野さんは、聊か慨然たる形であつたが、私には子分が無いからぢやらうなアと云はれた。征矢野さんには實際子分がなかつた。現に福日社の内部に於いても、芝尾君と、中野君と、私とを目して、豐前派などゝ呼ぶ場合も無いでは無かつた樣だが、征矢野さんは小さな豐前派を作るほどケチな首領では無かつた。つまり征矢野さんには個人的の權勢慾が殆んど無かつた。子分を偏愛して朋黨を作るといふ、そんな賤しい事の出來ないほど、美しい人物だつた。財物の私慾などは全く無かつた。それで自由黨が政友會に進化し發達して行く間に、征矢野さんは只だ自分一個の淸高を守つて、そこに自負と滿足とを感じながら、全體に於ては矢張り大勢に引きずられて行くといふ姿であつた。

然し私は征矢野さんに接する時、幾分なり古い自由黨の風氣を感ずるのが嬉しかつた。征矢野さんの徹底したデモクラシーの考へ方などには、當時の私を驚かせるほどのものがあつた。それを思ひ出すと、その後に於ける政黨の態度の保守的逆轉が著しく感じられる。

（五）福日と福陵、筑前と豐前

當時福岡日々新聞と對立して福陵新報（後に九州日報）があつた。福陵新報は有名な玄洋社の系統に屬するもので、保守主義、國粹主義の立場であつた。福日社の人達は憎惡と侮蔑との傳統的感情を以て福陵社の人達に對してゐた。私にはそんな感情がないので、機會があれば平氣で彼等とも交つた。或る時私が大阪時代の、高橋健三さんとの關係、國民協會との關係などを話すと、福陵派の一人は云つた。『そんなら君は、本當はコッチの人たい。』そう云はれると、私は又厭な氣持ちがした。實際わたしは、本當はドッチの人だつたのか。

或る時、福陵新報が『不敬』よばはりをして猛烈に『福日』を攻擊した。それは大祭日の『福日』の紙上に、祝意を表した文字が一つもないと云ふのであつた。これには高橋主筆が少々狼狽して、いろ〲と辯明や反駁をやつてゐた。その頃の自由黨には、儀式ばつた、態とらしい忠君振などは、まだ生じてゐなかつたのだが、然し日清戰爭後の國威發揚時代に於いて、政友會に進化しかけてゐる自由黨として、そうした不敬よばはりの攻擊を受ける事は、よほどつらかつたものと見える。

福日と福陵の對立には無理解な私も、筑前と豊前との關係には全く冷淡であり得なかつた。筑前、筑後、豊前の三國が福岡縣を成してゐるのだが、私は福岡縣人と呼ばれる事が餘り嬉しくなかつた。何だか筋前の附屬になつた樣な氣持のするのが少し厭だつた。福岡縣といふものは、私に取つて、故郷でない。故郷は只だ豊前ばかりである。私は何處までも豊前人でありたい。但し豊前の中でも、北部の六郡（今では四郡）の元小倉領だけに親しみがある。それほど私の頭の中には舊藩時代の傳統的感情が殘つてゐた。私の征矢野さん崇拜には、固よりその感情が交つてゐた。私はずいぶん『愛國者』であつた。

（六）縣會、共進會、克己趣味

福岡に於ける私の生活は無事平穩であつた。高橋君との折合が妙でないといふ一事を除いては、社の仕事は總て愉快であつた。

私は縣會の傍聽にも行つた。『由布雄義君、議長席に就く、威儀端然たり』と書いた時、それが意外の評判になつたのに驚いた。『威儀端然たり』が如何にも好いと云ふのであつた。實際、由布君のキチンとした、品のいゝ議長姿は、今でも私の目に浮ぶ樣だ。由布君は後に衆議院議員にもなつたと聞いたが、遂に再びその端然たる姿を見るの機會を得ない。

長崎に九州聯合共進會があつた時、私は出張を命ぜられた。たしか武生まで汽車で、それから先は歩いた。途中、疲れた足を引きずつて嬉野の溫泉にたどりついた時の嬉しさは今だに忘れない。長崎では丸山の繁華も見た。『うんだが青餅』の歌も聞いた。然しそんな事よりも何よりも、强く私の心を刺激した一事件があつた。共進會に集まつてゐた官吏達の中に、一ツ橋時代の私の舊友が幾人もゐて、意外の邂逅を樂しんで一緒に飲んだ。一人は小原鉐吉君、一人は俵孫一君、その他は忘れた。彼等は今、高等官になりたてのホヤ／＼であつた。俵君はたしか沖繩縣の參事官であつた。年少得意、談論風發で盛んに飲む彼等を見ると、私の心は寂しかつた。飲む事にも、喋る事にも遜色はないが、貧弱な一小新聞記者は何となく彼等の得意の前に忸怩たらざるを得なかつた。

博多には中洲、水茶屋など、風流の地が多かつた。高橋君あたり盛んに艶名を傳へてゐた。柳町は毛剃九右衛門で有名な小女郎以來の名所であつた。蘆州君など頻りに出かけて行つた。私も折々はあちこちに連れられて行つた。然し私はモウその昔の遊蕩兒ではなかつた。父母を失つて妻を得た私は、必然的に新らしい生活に入りかけてゐた。そして過去數年間の放縱な生

活に對する種々なる恨悔の念に驅られて、多少反動的に克己趣味を生じて來た。酒も餘り飲まなくなつた。時としては全く飲まなかつた。

(七)　論語の感激、平和な家庭

その頃、私はフト論語を讀んで、昔し學校で讀んだ時とは全く違つた感激を覺えた。『手の舞ひ、足の踏む所を知らず』といふ味ひを經驗した樣な氣持がした。こんな事は、早熟の人にとつては、恐らく二十歲前後に通過するセンチメンタリズムの一經過なのだらうが、晩學の私は廿七歲にしてヤツトそこまで到達した。それも少年の時、キリスト教にも佛教にも接觸する機會を持たなかつた結果だとも考へられる。そしてそれが、晩學の儒教であつただけ、病毒が輕くて濟んだとも考へられる。

私の家庭は誠に平和であつた。妻と小女と犬と猫と、總て五人の家族であつた。小女は梅と云つて、元氣なヒョーキンな娘だつた。『フテーガツテナ、ドウジヤロカイ』などゝ、よく人を笑はせた。犬は小いさな黑で、初め古參の猫から引つかゝれて、鼻先から血を垂らしながら、それでも怒る事を知らないほどの人好しであつた。後には、黑が座敷の庭の松葉牡丹の間か何かに寢てゐると、猫がノコ〳〵出かけて行つて、その腹にもたれかゝつて寢るといふほど、ふたりが仲好しになつてしまつた。若い夫婦は折々連立つて遊びに出た。香椎の松原を散步したり、太宰府の天神に詣でたりした。その中、いつの間にか、『あの馬鹿八百屋が今日も梅干を持つて來ない』と妻が怒つてゐる樣な時が來た。

學問らしい話をする樣な友達は福岡に殆んど無かつた。只だ榮屋の主人倉成久米吉君が變人で、英語、獨逸語をいぢくり、カント、ヘーゲルをこねまはすほどの、自任哲學者であつた。或晚など、榮屋の二階で、食成君と私と誰やらと三人、夜の明けるまで哲學めいた議論をやつた事がある。

(八)　故鄕の訪問

福岡まで來た以上、永く故鄕を見舞はないではいられない。或る時私は豐津に行つた。節丸の叔父をも尋ね、本吉の姪をも尋ねた。その時、兄と本吉家との關係は既に斷絕してゐた。爲替の失敗以來は、暫くその儘になつてゐたが、『いつまで蛇の生ごろしは堪らない』と兄が云ひだしたので、私が福岡から法律上の手續をしたのだつた。それで私が豐津で、本吉に行くと云ふのを聞いて、『さばけたものぢやなア』と不思議がつてゐる人もあつたが、私が喧嘩をしたのではなし、姪に會ひに行くに不

思議はないと私は思つてゐた。

私は又、豐津中學校と小學校とを訪問した。中學校には緒方先生と、島田先生など、昔の先生方も居られ、大森藤三、柏井德一などいふ友人達も教員になつてゐた。小學校には昔の横山先生がそのまゝ校長で、古い友人の中村君がその下にゐた。その夜、錦町の闕屋で私の爲に小宴が開かれた。私と中學校の同期の卒業生たる生石久間太君と井村健彦君とも來た。生石君は九州鐵道に勤めてゐたが、今ま罷めて歸つてゐる所であつた。井村君は一時博多の驛長か何かで可なり幅を利かせてゐたが、近來は病氣の爲め保養かたがた小さな雜餉驛に引込み、ツイその近所の二日市の溫泉に住んでゐるのであつた。そしてこの晩は何かの用事で丁度故郷に歸りあはせてゐる所であつた。私の故郷熱はこれで大いに滿足された。

又或る時、行橋町に豐前人の懇親會が開かれた。その席上で私は珍らしい人にふたり會つた。一人は老壯士の勝平八さん（昔し私の少年の時、私の家の前をドテラ姿で通つたあの人）であつた。人々から揮毫を求められて、『自由棲處是吾家』と大書した。そこに昔の自由民權運動の面影がしのばれた。今一人は豫備陸軍大佐馬場素彦さんであつた。これは前に記した通り、私が東京の學生時代に世話になつた、私の養家先の叔父に當る人で、その娘のお力さんが私の妻になる筈であつた。然るに私の放蕩の爲、私はその中村家から離緣されたのであつた。それから七年、今では私の元の養父は死去し、椎田の中村家は無くなり、馬場さんがその因緣からして椎田の町に退隱して居られるのであつた。私は只管懷かしい心持で馬場さんに挨拶した。馬場さんも大へん嬉しさうにして、ぜひ遊びに來いと云はれた。それから暫くして私は椎田に馬場家を訪問した。叔母さんも懷かしさうにして、こんな田舍の住居の寂しい事など話された。お力さんは十八ばかりの美しい娘になつて、元氣らしく笑つてゐた。これも『不思議』な訪問に相違ないが、私としては、本吉家の訪問と共に、非常に愉快な跡片付であつた。

（九）福岡引揚

兎かくする中、高橋君と私との不和はいよいよ增大した。細かい成行は忘れてしまつたが、紙面の或る部分の編輯を獨立させて、それを私に任せてくれとか、それは出來ないとか云つた樣なモツレがあつて、それらの事について編輯會議を開くとか開かぬとかいふ論爭を生じて、編輯局の全體にかなりの動搖を來した。然し結局の所、云はゞ私の我儘から起つた事なので、私が退くより外に道の無い事は分りきつてゐた。私は征矢野さ

んからも、他の總ての社員からも、惜しまれたり氣の毒がられたりして、退社した。一般の送別會もあり、外に高橋君と富安君と私と三人だけの小いさな別宴もあつて、私は機嫌よく福岡を出發した。それが明治三十年の春の事で、私の福岡にをること正に一年であつた。(この高橋君が今の政界に時めく政友本黨總務である事は云ふまでもない。)

それより前、妻が姙娠したらしいといふ事を征矢野さんに話した時、征矢野さんは「誰しも若い時、女房を持つただけではそれ以前と別段の變りはないが、子供が出來ると大いに心持が違つて來る。それに餘程善く氣をつけないと、兎かく引込思案に陷る恐れがある」と警告してくれた。それから幾許もなく、私は早くも自分の地位を擲つてゐた。征矢野さんは、私の引込思案に陷らない事を喜んでくれた筈だ。

その時、私に今一つ大問題があつた。兄が東京で血を吐いたといふ知らせがあつた。そして數日の後、『病氣は肺結核といふ事に相成、前途絶望に候。』といふ手紙が來た。そして猶『社にては歸國せよと申し候へども、歸國したとて家も妻子もなき身の上なれば、矢張り東京を死處と覺悟し、出來るだけ養生して生きのびられるだけ生きのびて見る積りに候』とあつた。これは私に取つて大いなる打撃であつた。私はその爲にも、早く東京に歸りたいといふ氣がしてゐた。

然し兄は、私の東京に歸る事に反對した。さすがに少し私よりは年を取つてゐるだけの事もあつて、兄は私の身の上の將來を功利的に考へてゐた。自分の身の上は甚だしく無計算に處置して來た男として、頗るおかしな言分だが、要するに兄の意見は斯うであつた。東京に立戻つて多少の文名など得たところで、それが幾許の手柄でもない。それよりは折角、手がゝりの出來た今の地位にジット辛抱して居れば、將來の運命は必ず自然に開けて來る、と云ふのであつた。私も萬さらそれを考へないではなかつた。文學ばかりが私の志願の全部ではなかつた。一元來は政治家志願、代議士志願であつた。高等中學では政治科を選んでゐた。そして福岡の今の地位は、其の方面の事に對して正に兄の謂ゆる『手がゝり』であつた。然し私の若い心は矢張り最も多く東京の生活にあこがれてゐた。

然し私の福岡出發には、經濟上の困難があつた。征矢野社長と濱地主幹との立會で、何分にも勤務期間が短かいので仕方がないといふ事で、それに前借の殘りもあつたりして、八十圓だけの退社手當を下附された。然るに私の家には色々の小負債があつた。妻は幾度も質屋に通つてゐた。東京育ちの奥さんは違つたもので、質屋がよひに耻かしさうな顔もせず、人力に乘つたりして平氣で行かつしやる、と笑はれた位であつた。それで結局、質物などはその儘に殘して置いて、それでも猶ほ足りないので、私は唐津に行つて生石君に無心した。生石君はニヤニヤ笑ひながら、默つて二十圓ほど出してくれた。それでヤツト私の福岡引揚が出來た。

淺草研究

吉田文俊

一

淺草を中心として東京に群がるところの下層生活者の種々なる社會相を述べて見たいと思ふのであるが、それには社會學的見地からも或は犯罪學上刑事人類學上からも、亦歷史や風俗習慣などの調査上からも觀察を下すことが出來るのである。今玆にはさういふ矢釜しい學問上の立ち場をはなれてたゞ下層生活者の一般世相のみに就いて私の調べました實際を述べやうと思ふのである。私は淺草公園には可なり長らく住んでをりまして日本民族の思想史研究の傍淺草寺の圖書庫を主として預つたり、或は淺草寺內で發行する雜誌編輯の主任をしたことなどのある關係上、その當時、淺草寺の本場である傳法院にはながらく居住してをりました。つい先頃、東京の讀賣新聞が私を寺男に住み込んで淺草を十六年も研究したやうに書いてくれましたのは、それは讀賣記者の誤解してをつたのださうで寺男云々に就いては、すぐ様取消してくれました。私が淺草に就いて多少研究したことは事實でありますが、何も寺男にまでなる必要もなかつたので、それは全く讀賣記者の誤りであつたのであります。其のことをこゝに豫め申して置きます。斯様な譯で淺草には比較的永く住んで居た關係上淺草公園に於ける內面的見聞は相當に廣く、且つ深く知ることが出來たのである。從つて私の眼には淺草公園に於ける下層生活相もさまで事新らしく映じなかつたのである。寧ろその生活相が普通相だと思はれる感さへあつた位である。そして淺草公園に於ける下層生活者の中で最も研究を要しまた注意すべきことの多いのは盲人と淫賣婦、少年浮浪者、私娼窟、少年浮浪者と飲食店、自由勞働者と雇主手引、自由勞働者と密娼、乞食の横行、婦女誘拐者の手段、香具師仲間の常套手段等である。今、これ等のことに就いて社會世相上から觀察してどんな風に見らるゝか順次にその眞相を明かにして見たいと思ふ。

三　盲人と淫賣婦

盲人の中には按摩を渡世としてゐるものと、其の他の仕事をしてゐるものとがあるが、彼等盲人は目によつて物を見ることは出來ないかはりに聽覺や觸覺が頗る敏感に出來てゐるので、婦女子と接するにも、其の婦女の朗かなる音聲の美や、衣裳や皮膚に對して手ざわりに知るところの觸覺が其の媒介をなすのである。彼等が賣春婦に接す

るの時も同様であつて、彼等按摩を業とするものが、初めは客を取る爲めに彼女等の魔窟には入つて女將の肩を揉んだりなどしておるのであるが、それがいつしか、遂に自ら進んで彼女等の魔窟へ行くに至るのである。これらの現象は夏季よりも冬の季節に多く、夏の季節には按摩は餘り流して歩かないが、冬になると可なり多數の按摩が街路を流し歩いてゐる。從つて冬季に於て按摩と賣春婦との關係を多く見出さるゝ譯である。或る年の十一月末の寒い夜でありました。公園裏の萬世庵といふ蕎麥屋の裏の魔窟へ幾人かの按摩が揃つては入つたことがある。またこれも寒い冬の夜であつたが、昔の十二階裏の一廓の約二丁餘り二列に建ち並んでゐる淫賣屋の前を三十人餘りの按摩が流して歩いてゐたことがあつた。それがやがて辻の廣場のところで多勢集つて來て約三四十人一團となつて一群の按摩共が何か話し合つてゐたのであつた。殘燈の影小暗き辻の廣場に於けるこの光景を月明りに見ると各自杖を携へたものやなどであたりの様子がまことに變つておるので、頗る奇觀であつた。この時一群の按摩どもの外には殆んど人影もなかつたので如何にも奇怪に感じたのであつた。それが暫くして一齊に見えなくなつてしまつたので、どうしたのかと思つて方々それとなく探つて見ると何れも淫賣屋の中には入つて行つたのであつた。それからこれは明治四十二年の十二月であつたが、公園の池の畔に佇んでゐた五十人許りの按摩が一齊に見えなくなつたことがある。これもすぐ附近の魔窟には入つたことが分つたのである。斯くの如く團體的でさへ行く彼等であるから一人一人では入るのも可なり多いことであらうと思ふ。それに淫賣婦などは常に普通の男には接し拔いてゐるものだから或はかうした盲人（めくら）按摩などには特殊な情味を覺えるのかも知れないと思ふ。

三　魔窟待合

魔窟の待合などをやつて秘密の密會所を營んでるものゝなかには、表面は正業であつても内密に賣春を業としてゐるシレ者が尠くない。といふのは元來が私娼窟に於ける彼女等は素より公然と許されてゐない賣笑をやつてゐるのであるから何時官憲の手が這入つて警察に擧げられたりしないとも限らない。そこで常時嫖客をつれ込む密會所の待合の必要が起るのである。

勿論かうした賣春宿は公許されたものではないが、然し警察も以前は無暗とそれを檢擧しなかつた。何故かといふと彼女等を實際に檢擧する日になると警察が二つあつても三つあつても到底收容し切れなかつたからである。で普通私娼窟は公然と許されてはゐなかつたが、非公式には許されてゐるやうな形であつた。ところが全然公許も非公式の許しもなくて内密に賣春を業としてゐた待合があつた。そこでは大抵男

女が時間をしめし合せて別々に出入りして密會をするのであつた。晝日中など嫖客をとるとこの待合へ連れて行つて春を鬻ぐのである。これらの待合の老婆などには花合せや賭博は常習犯で、殆んど手の付けられないのが多かつた。ある老婆の如きは三人の娘の中で二人にまで客をとらしてゐた。末の子にも客を取らせたかつたのであるが、脊髓のために止むを得ずそれをよさせ得なかつた。併し彼の老婆はこの娘達に淺草では春を賣らせなかつた。やはり彼女らにも外聞があつたのかも知れない。この老婆は賭博もやれば酒も飲むといつた無賴の惡婆であつたが、官憲に向つては何時もニコニコ顏で實にデリケートに犯行を蔽ふて十二三年前まで其れを本業としてゐた。そしてかうした魔窟待合をながく繼續したのであつた。

淺草公園の夜の觀音堂裏や五重塔脇の木蔭の暗みに客をくはひ込む女と來ては、殆んど想像の外であつた。彼女らは白粉も塗らず、帶もだらしなくしめて公園の中を彷徨いて男を物色して歩く。摑へると木蔭の暗に消えて了ふ。昔の夜鷹は胡座莚一枚で男を漁り歩いたといふが、彼女等には莚一枚さへ要さない至極簡便なものである。勿論淺草公園などを彷徨てる賣春婦の中には暗がりの中では春を賣らないで、何處か彼の下等の魔窟待合へ男を連れて行くのもある。かうした女は少し注意して見てをればすぐ一見して分るのであるが、然し、私どもにはお前が淫賣婦であらうと訊問もすることも檢擧も出來ないから何處の何者とも知れないのは致し方もない。

四　少年浮浪者

世間は少年浮浪者に對しては案外冷淡である。彼等が物を盜んだり人に危害を加へたりすると初めて注意する位のもので、人目に立つ不良の行爲でもしなければ、一向に注意してゐないやうである。かゝる不良の傾向を帶びた少年は、既に六七歳にして浮浪の群には入つたものもあるので、まことに憐れむべきである。そして淺草公園に於ける彼等浮浪少年と飲食店との關係は亦、決して見逃すことの出來ないものがある。淺草公園附近に於ける飲食店は大抵夜の一時頃までも營業をして、客の出入が多いのであるが、ところがこの飲食店で客の食ひ殘した殘飯であるが、それがどう處分されるかといふと、客の殘して行つた殘飯は餘り汚くならないのは、ゴミ箱などに捨てないで、女中がこれを綺麗にそのまゝ隅の方に片付けて取つて置く。すると翌朝になつて浮浪少年の大將の指揮の下に七八人の大勢の少年がぞろ〳〵と列をなしてその殘飯を貰ひに行くのである。飲食店に於ても殘飯は彼等に貰つてもらはねば始末の仕樣がないので、女中などは彼等に十錢とか二十錢とかの錢をつけて貰つてもらふやうのこともあるのである。この十錢、二十錢と貰つた金で、彼等浮浪少年は見世物活

動見物などをして一日を過ごすのである。(このことについては他日浮浪少年研究を述べるときに詳しく述べたいと思ふ。)だから淺草公園に飲食店があるかぎり彼等浮浪少年は絶えないと言つて好い。淺草寺の本坊である傳法院などでも、殘飯は初め彼等浮浪少年や乞食などに與へてゐたのであるが、一度與へるとその時刻には翌日も翌々日もまるで蠅の集まるやうに必ずやつて來られるので、これでは堪らぬといふので、寺では幾ら澤山の殘飯があつてもそれは池の鯉にやつたり、綺麗なところは寺男が持つて歸つたりして決して彼等浮浪少年や乞食などには與へないことにしてゐたのである。

この浮浪少年は夏などは軒下や砂利置場などの砂利の上に所構はず寝るのであるが、冬になると大抵は五六人連絡して一つ團りになつて活動寫眞小屋の裏などにある埃箱の中で寝るのである。この埃箱は五尺以上の高さで相當の大さであるから中は子供の五人や六人は自由に寝られる位の大きさである。だから警官が冬など浮浪少年を檢擧しやうとなら未明に活動寫眞館裏の埃箱を開けて廻れば何時でも五人や六人は立ちどころに捕へることが出來たのである。

彼等はそこから朝早く殘飯を貰ひに出て一日中ぶらぶら淺草公園其他を彷徨ふのである。

彼等は一旦この淺草公園を巣にし初めたなれば決して他へは行かないのである。こゝでは食ふには困らず見世物、活動寫眞はあるし自由に放浪が出來て實に浮浪者の歡樂郷として少年浮浪者の完全地帶である。だから淺草公園は帝都の浮浪少年を作り養つてゐるところと言つてもよいのである。帝都の眞ン中淺草方面にかく少年浮浪者の集まるといふことは、これは全くかゝることが其の素因の一をなしてゐるのだと思ふ。

五　自由勞働者

何處でも同じことであるが、不景氣の今日淺草に於ても自由勞働者は殆んど木賃宿にも宿ることが出來ぬ有樣である。帝都に群がる彼等自由勞働者は、淺草公園のベンチに寝てゐるばかりでなく、公園を捿家のごとく心得て宿りに來る者がある。觀音堂の側の縁堂脇など暗い塀のところへなど永住の捿家の如くに心得て宿りに來る者がある。

彼等は一日八十錢から一圓廿錢とか或は一圓五十錢位で、溝泥浚ひや日雇に傭はれて行くのであるが、勞金日當の大部分は酒食に要してしまふのである。實際彼等はよく酒を飲むものが多い。夕方になつて仕事が終るや歸途には必ずめしやで酒食をする。

タラ腹食つて飲んで好い氣分で公園へ歸つてくる。ふところのドンブリを見るともう木賃宿ホテルに宿るほどの僅かの錢もないので公園のベンチにゴロ寝をするといふやうなものがこの社會のものには多いのである。一體自由

勞働者には、媒介者があつて、その媒介者にもまた幾種類もの階段がある。そしてそれらの手引で、雇主に雇はるるのであるが、例へば市役所の仕事をするとすれば、次のやうな人の手を經て雇はるゝこととなるのである。第一、市や區役所から直接に請負ふ者、その下を請負ふもの、それをば請負つて彼等自由勞働者を狩り出しに來るものと云ふやうに、自由勞働者が仕事に有りつくまでには幾人もの手を經てゐるのである。彼等自由勞働者を狩り出しに來るもの即ち朝早く連れ出しに來るものは一日一人について二三十錢の收入があるのだと彼等仲間ではいつてゐたが、この狩り出しがまた中々容易ではないやうである。この狩り出しが自由勞働者のゴロ寢してベンチなどに寢てゐるところへやつて來るのであるが、今日のやうに不景氣でありますと狩り出しどころでなく、勞働者の方で押掛けて往つても其日の仕事にアブれて僅かの勞金にもありつけない現狀であるとこぼしてゐるものが多い。自由勞働者の働きに行く先ざきその方面は互に交代のやうにして變つたところへ連れて行くやうにしてゐるのだといふ。

そして彼等は若し東京に思はしい仕事がなくなつたり、勞金が餘計に欲しかつたりすると、時には遠い地方の炭坑や鑛山まででも出かけて行つたりするのである。ところで、この自由勞働者はどういふ經歴のものが多いかといふと、それは何と云つても地方から出て來て、この仲間(なかま)に這入つたものが一番多いのであるが、では彼等は東京に親戚や知己を持たぬ無頼のものであるかと云ふと決してさうでない。否却つて親戚や知己を持つてをるものが多いのである。これは鳥渡意外の現象のやうに思はれるが、よく調査して見ると成る程と首肯ける理由がある。彼等は固より自己を投げ出してゐる。自暴自棄で自分自身にもう愛憎を盡かしてゐるのである。そして自己を極端に卑下したり、僻んだりして、ことに知つてゐる人などに會ふことを甚だしく嫌ふのである。從つて親類や知人にも會ふことをしない。そして自墮落な生活を送つて、一日一日と其日を送つてゐるのである。彼等の中には高等小學校を卒業したものも居れば、中學二三年で退學した者なども居る。この仲間に以前日本橋の火の番小屋に傭はれてゐた男があつたが、この男は以前田舍で新聞記事も書き、小説なども少しは書いたことがあるといつてゐたが、かふ云ふ者が何故に自由勞働者の群に這入つてゐるかといふと何れも意志は薄弱で酒癖が惡いなどいふことが自墮落の最大原因であつた。

斯ういふ智識階級に屬するものゝ自墮落して自由勞働者になつたものも稀にはあるが、多くは先天的に頭腦が惡くて惠まれずかうした社會にドン底生活をしてゐるものが尠くないのである。

六 癩疾の乞食

淺草に於ける自由勞働者の群中には時として乞食も交つてをることがあるけれども、乞食はどこまでも勞働をすることを嫌つて敢えて仕事を爲さうともしないので自ら自由勞働者とは別種になつて生活することになる。

この乞食に就いても種類が多種多樣で一樣には申すことが出來ませんので、玆には淺草公園附近によく見受けるところの癩疾患者の乞食に就いて述べて見やう。彼等は淺草公園などを根城にしてをつても彼等の住所は大低他にあるので、下谷日暮里金杉であるとか、千住方面に多く住んでをるのである。稀には殆んど公園地内に住んでをる如く朝夕姿を見せてをるものもあるが、それは淺草觀音の參詣者を目當てに地上に匍ひ歩いてをるのである。彼等に聞くに一日觀音堂の扉の際に頭首を垂れて埃だらけになつてをれば、貰ひの多い日には三圓も四圓にもなると云つてゐた。よく外國人などが初めて淺草に來て觀音堂の壯嚴に驚くと同時にこの癩疾患者の禮讃の一瞥に振ひ上がつて驚いた樣子をして不快を感ずることを暫々見受けるのであるが、コレは實に帝都の眞ン中に於て遺憾のことである。彼等はよくこれを導けば稀には救濟し得るものも出來やうが。併し大體に於て、不良癩疾の乞食どもには警察でも持て餘して お互の管轄區域から遂さけるやうにしてをる位で、よく彼等が區と區との境界のところに彷徨(うろつ)いてゐるのを見受けるのである。

かの吾妻橋の中央に於ける彼等癩疾患者の乞食の動作を見てをると、人通りの多いところで乞食をしながら一方の本所警察の巡査が來れば淺草區域の方に逃げ、一方の淺草警察の巡査が見えれば本所區域の方に避けてゐて橋の中央であるから僅かの所で官憲から邪魔物扱ひにされることをのがれてゐるのを私は暫々目擊したのである。斯樣に癩疾患者の乞食には實に手古擦(ず)つてをるので彼等に對して今のところ殆んど何の方法でも救濟の方法がまづないといつてよいのである。

七 自由勞働者と密娼婦

自由勞働者と密娼婦との間に於ける關係に就いても更らに驚くべき幾多の事實がある。彼等は下層生活者中に於ても殊にドン底生活をしてをるものであるから普通の賣笑婦公式の私娼などを相手方とするのでなくて、非公式の密娼に係はるものが多いのである。彼等密娼は其年齢大低廿五六歳から、三十歳位までが一番多く、時に四十歳を越したと思はる〻年増の女もゐるが二十歳以下のものなどは殆んど見受けないといつても好い。彼女等はそのだらしない風姿から觀察すればすぐ分るのであるが、十二三年前などは彼女等は僅か○○錢か○○錢位で春を鬻いでゐたものである。その當時普通の公式私娼は、○○錢から○○○錢位であつたが、これらの下等密○○はその三分

の一位で〇を賣つてゐた。そして前述した如く觀音堂の側の三社の蔭の方や、暗がりの蔭などで〇を賣るのである。それが、以前は、下谷の入谷、山伏町本所花町邊などから稼ぎに來たものであつた。

自由勞働者はこれらの下層密〇〇であれば勞金の僅かの殘りでゞも女買ひが出來るので、何うしても兩者の關係は離るべからざるものがあるのであつた。密行中の警官なども縱令彼女等を見付けても見ないふりをして追ひ拂つて終ふのであつた。

家を構へて嫖客を物色する〇〇は自由勞働者とは殆んど關係がないと云つてもよい。勿論彼女等は大學生向きや、下級官吏向きや番頭會社員職人向きなどが多いのである。最も好く此等嫖客の眼につくのは、朝格子戸などを開けて出て行く時である。近頃の學生は吉原の公娼などよりも寧ろ私娼を好む傾向が濃厚になつて來たので〇〇を商賣として家でもこれ等の呼吸をすつかり飲み込んでをる。

そこで教養のありさうな新らしい傾向のある若い女學校出の女などを傭つて、學生等の歡心を唆らうとしてゐる。

そして彼女等は結局公娼よりも高い遊興費を要求するのである〇門〇閥といつた調子であるから自由勞働者などは、とても其の方へは行かれないので結局下等な密〇賣を買ふより他に方法はないのである。

八　自墮落なる青年夫妻

薄志弱行な一青年夫妻が訪ねて來て身のふり方に就いて相談を受けた時には、彼等夫妻のいろ〳〵不遇な境涯を彼等自ら作つたことについて人ごとでなく暗くならせらるるものがある。それは夫妻二人の間にもうけたみどり子の捨兒した事件に就いてゞあつた。

生後すでに一ケ年と數ケ月可愛い盛りのみどり子を生活苦のために育てかねるといつて四五日前に淺草のお寺の石塀の横丁に捨てたといふのである。說諭して私は彼等夫妻の其の不心得を諭し、早速に其捨子の親であることを申出るやうに親切に教へたが、もうそれ限り、彼等夫妻の姿は見せなかつた。あとで人の噂に聞くと男は自由勞働者といへば聞えはよいが實は立ン棒同樣となり、女は遂ひ淫賣婦となつて公園の魔窟に何處か龍泉寺町あたりの人の家から通つてるといふことを聞いたのであつた。

この若い夫妻が薄志弱行のために夫は立ン棒同樣とあり、妻は肉を鬻いでも己が可愛きみどりさへ養ひかねてこれを捨子するまでになつた經緯を聞いて私は暗然としたのであるが、彼等はいつも社會に生活する上に眞心でなかつた。彼女の里親にしても我娘のかうした仕打ちをすこしも知らんでゐたほどに無頓着であつた。つきり娘には愛想つかしをしてゐたのであつた。

この妻君にして此の夫といふやうに似たもの夫婦で男も女も共に親戚故舊

から心離れしていつたのであつた。女の里親は小さな荒物店を車坂町に出してゐたが、男の母親といふのはしもた屋で僅かばかりの家作持ちであるところから家賃などを取り立てゝ生活してゐた。男の父親は彼れが三歳のときに彼世に旅立つて了つたので母の手一つで我儘氣儘に育てられた彼は、少し大きくなつてから　小學校時代にもう近所の娘子などを追廻はすことを覺え、母親をだましてはいろ〳〵な學校用品を買ふのだなどいつては、金錢をねだつて何かしら無駄な費用をつかふことを覺えたのであつた。小學校を卒業してからも神田の工手學校つどいて夜學の中學に通つてをつたが、とうとう彼は通學の途上などに於てしばしば小學校時代より知り初めた情婦と逢曳するに至つた。

そして學校へ通ふやうに見せかけてはその都度春はあすか山の花見であるとか、秋はきた瀧ノ川に目黒に紅葉見物など〻彼方此方の遊覽地などを歩き廻つて其費用は何時でも母親より絞りとるのであつた

こんな關係になつたから彼れが未だ十八歳で女が十五歳にしてすでに妊娠してしまつた。そして彼女が十六の時には一人の男の兒の母親となつてしまつた。かういふ有樣であつたから女の里親の方でも彼れの家へ嫁入らせることをよぎなく承知してしまつた。男の母親に云はせれば女の母親が無理にひつつけてしまつたのだなどいつてをりましたが、それは何れにしても殆んど野合目標に夫婦關係を結ばせてしまつたのであつた。

斯うした夫婦關係に於かれた彼等夫妻である。もとより貞操も何も考へてゐなかつた様である。彼等が十八歳や十六歳で一人の男兒の親となつたので其頃彼等夫妻は俄かに若紳士若奥樣でもなつたやうにして着飾つて出歩いてゐた。それは皆此男の方の母親より絞取つた金錢によつてであつた。それが一年と二年と續けらるゝうちはよいが三年とはながくはつづかなかつた。そこで母親より別けて貰つた資産などはすぐに賣拂つて消費して仕舞つた。もうこうなると親戚は構はなくなるし母親の方でも女の里親の方でも愛想をつかして構ひつけない。その頃男は日本橋邊の會社に這入つて僅かばかりの月給にありついてゐたのであるが、その會社も失策りなどして無職で徒食してゐた。そんな譯で折角母親から分與てもらつた資産なども蕩盡して了つた譯で、それから彼等が生活苦は始まるのである。そのうち女の方は一寸男好きのする美貌なので世話するこの道の女などがあつたとうとう通ひの淫賣婦などに落ち込んだのであるが、それでも男は徒食して遊んでゐた。とうとう女の方で我子を捨てゝまで生活苦と鬪はなければならなかつた。

斯うして彼等夫妻は淪落の淵に落ちていつたのであるが、それでも男の方は始めは勞働を嫌つて少しも働かうとしなかつた。この男が女と別れてから

自由勞働の仲間には入てしまつたといふことは他から聞いたが其後の消息は少しも分らない。この青年夫妻の如きはまづこの方面の典型的人物といつて好いと思ふ。

九　婦女誘拐者の手段

婦女誘拐者の手段には幾種類もある。彼等は如何にして婦女を誘拐するか、その手段方法には實に恐怖すべきものがある。

私は地方出の二十二三歳位で、相當な生活をしてゐる家の娘さんらしい女が誘拐されるのを目撃して、その女を彼等の手から引き離してやつたことがある。

田舎出らしい女なとが公園のベンチに腰を掛けてゐると、そこへすぐ三四人の婦女誘拐者が近づき、一人はその女の側へ寄り、他のものは少し離れたところでそれとなく警戒してゐる。そして女の側へ寄つた一人が素知らぬ振りをして言葉をしかけ、それから種々と話し出すのである。若し女が東京で働きたいとでも言はうものなら、それでは自分は恁ふ云ふよい所に世話をしてやる。といふやうなことを言つて巧みに誘ひをかけて行く。そこまでゆけばもう彼等は占めたものである。若しその邊でうまく行かずに女がベンチを立てば彼等もまた同じく跟いて行く。そして途中などで、女がこれは怪しい警察へでも行かうといふやうな素振りを見せると、手を替へ品を替へて誘拐さうとする。それでも巧く行かなければ遂には人通りのない寺の裏庭や境内のやうなところへと連れて行つて口説いたり威嚇し初めるのである。傳法院のやうな大きな寺の境内などでやつてゐると少し位大きな聲をしても、外へは聞えて行かないから、彼女を充分に口説いたり、威嚇したりすることが出來るのである。縱令多少人通りのある所でやつてゐるにしても通りかゝりの人々は何にか彼等同志打合せでもしてゐるか秘密な話でもしてゐるのだらう位に思つて通り過ぎて終ふのである。私等にすれば、これは婦女誘拐者どもであるといふことがすぐ分るのであるが、普通の人にはさう手易くは分るやうなことはない。

私は一度かうして誘拐されやうとしてゐる女を見て、女をば彼等の手から引離してやつたことがあるが、そんな場合、女を彼等から全然引離して終はなければ、彼等はまた入り替はり立ち替はりそれを誘拐しやうとするのである。だから一度彼等の網にかゝれば、殆んどそれが最後といはなければならないほど彼等の手段は恐ろしいのである。若し女の方で途中でこれと感づいて何とかして其の場を逃れやう爲めに私は神田に叔母さんがゐるからといふやうなことを言ひ出せば、私等も神田まで行くのだから、では一緒に行きませうとか、何とか言つて、何處までも跟いて來る始末である。

かゝる手段に依つて一度び彼等の手中に陥ちたら最後、蟻地獄のやうに、

卻々そこを遁れられるものではない。餘程氣丈な女ででもあつて、多少は怪我をしてまでも警察或は交番へでも訴へるといふやうなでもなければ、到底これを逃れることが出來ないのである。

かうして誘拐された女達の行く先きは、田舍の達磨茶屋か、淫賣か、女郎かよくて料理屋の女中位の所が關の山で、殆んど決定的に前途が定まつてゐる。そして一度びそのはめへ落ちたが最後、如何に悶がかうとも逃れるものではなく、殆んど全部がさうした方面の深みへ深みへと墮落して終ふのである。かうして墮落した女はまた、その反撥として今度は男を誘惑するやうになる。密淫賣などには斯うした女が非常に多い。彼女等がかうした方面から足の拔けられない一方法として、彼等誘拐者は、誘拐したが最後彼女等に何の費用が要つたとか何かかが要つたとか言つては前借をさすやうにして一日もながく自分等の糧にしやうとするのである。若し彼女等が病氣でもしやうものなら借金は忽ちにして莫大なものとなり、半年や一年働いたのではどうすることも出來なくなつて了ふものである。さうなるとそこでまた其借金うめ合せの方法や何かで女を賣るやうな、ことがよくやる彼等誘拐者の手段である。

雇人口入業の主人はまさかにそんな非道な婦女誘拐はやらないにしても、その口入業の家に出入してゐる男などにひどいのがある。どうかすると彼等はそんな口入業者と一つ穴のむじなのやうに同類となつて女を地方の達磨茶屋などに巧妙な手段で賣りつけるやうなことをする。でこれらの同類は非公式に看板を掲げたやうな婦女誘拐者と見ても差支へがない位である。

十　香具師の常套手段

香具師(やし)仲間の淺草公園に於ける存在もまさに驚異に値する。彼等の賣る物品たるや、大抵は不正品か或は傷物なのである。呉服反物にせよ、金指輪にせよ、一つとして正しい好い品物はないといつて好いのである。そして彼等は仲間のものを巧みに客のやうに仕組んで他の田舍客などを釣るのである。帶地などでも最初二十圓に値段をつけた品物を終ひにはこれ一反限りなどいつて僅かの五圓位に負けて賣つたかと思ふと、その買つたものは多くは彼等の同類仲間で、かやうにして品の安價を客に感ぜしめて購買心を唆らうと試みるものである。そしてその仲間の買つた品は、同類によつて何處かを一廻りして後、三十分か一時間も經つた時分に、後ろの方からこつそり彼等香具師の手に再び渡すのである。金指輪などを賣る小さな屋臺店では三十歳過ぎた位の年增の女などを手先きに使つて客に化けさせ、之れに依つて他の女客の購買心を唆り、そしてマンマと目的を達するのである。

この化け込みは彼等仲間にありては常套手段でも何でもない普通のことにな

つてゐる。

この場合決して十七八位の少女や五十歳を越したやうな老年期の女を使はない。これも人心收攬の一方便であるといふ。

香具師のほかにテキ屋といふものがあるが、テキ屋もきは物を商ふ一つの稼業で、彼等仲間にありては万に一晩交替などで水菓子屋になつたり、新薬屋になつたり、殆んど一定し居ないのである。彼等の勢力も淺草界隈にありてはまたあなどるべからざるものがあつて、新規に淺草公園などで商賣をしようとすると殆んど彼等仲間の諒解を得てやらなければならない。若しさうでないとすると、彼等のために防害をされたりなどして安全に商賣が出來ないことになるのである。

よく彼等はけちをつけては他の行商人などをおびやかすのであるが、彼等のために一度けちをつけられ、人の出盛りなどに喧嘩を吹きかけられては、商賣は出來ず店には人だかりなどして屋臺や商品などの引繰返さるゝのが落ちであるから大抵のことは大目に見て彼等の横行に任せてある。これをいいことにして官憲のォヂサンと衝突したり跳梁、跋扈、他の良商人をいぢめつけてしまふなどといふやうなことが暫々ある。

場所は淺草。人出盛りの眞最中であつた。

オイ煎餅を呉れ！

如何程あげますか？

オイ五錢ォクレ！

ハイ！といつて手に煎餅を摘んで男客に差し出したのは淺草の夜店の煎餅屋のおかみさんであつた。すると

男客『一寸袋に入れて呉れ』

煎餅屋のおかみさん、人出盛りの最中ではあるし氣忙しかつたので、つい思はず…………

内儀『五錢ばつち』と口走つて了つた。

男客『何に五錢ばつちじや袋に入れられない』といひさま一たん受取つたその煎餅を店の商品の上にたゝきつけてしまつた。

男客『例令五錢でも客は客ぢやないか、それを生意氣な！テキ屋の吉公を知らないか』と

いつた調子で男は啖呵を切つて詰めよせた。煎餅屋の御内儀も負けては居ず

内儀『五錢ばつちの欲しけれや呉れてやらア』

といつた調子で更らに煎餅を紙袋に入れて男客に差出さうとすると、男客のテキ屋の吉公の方でも負けてはゐない。

『何にもソヌ等から只買ふといふンじやねい。ふざけて居やがら！人を侮辱するにも程があらア』

といひさま、またも内儀の差出した煎餅入りの袋をそのまゝたゝきつけたので、煎餅は袋のまゝ飛散つて砕ける。そして互に殆んどつかみ合ひの喧嘩になつてしまつた。

淺草の盛り場のことではあるし、人

は黒山のやうにたかつて屋臺店も何も引繰返りさうになつてしまつた。その時白い服の長劍を帶びた巡査が鎭撫に來たが、男客である吉公なか〳〵に承知しない。さんざ警官といがみ合つた末にとうとう警官をやり込め、交番に來いといつても啖呵を切つてゐて、應ぜす、テキ屋の吉公は、『そんなこツちや貴樣等の厄介にやならねいや』などと煎餅屋のことはもう忘れたやうに今度は警官とはげしくわたり合つて衝突した。そうしてしまひには『テキ屋の吉公テナ覺えてをれや！』などゝ凱歌を奏したやうな、いゝ氣持になつて群集の人浪の中を押分けて雲を霞と行つてしまつた。淺草公園附近に於ける香具師仲間テキ屋仲間などの跋扈跳梁はこんな風であるから夜店商人などは皆んな此連中に渡りをつけ諒解を求めて店を張るやうなことを常習慣例にしてをる。例令警察署の許可があつても一方にこんな仲間が一つの慣例規約のやうなものを設けてをるのであるから密柑箱一つ位の小さい露店を出すとしても時に彼等親分の指圖、支配を受けなければならぬことが多いのである。

結末

尙ほ社會問題に關して下層生活者の種々なる世相を述べて注意していただきたいことが多いのであるが、從來、世の所謂社會事業家や宗教家或は慈善事業家などは、それが社會的に美はしく反響する事業には可なり多大の力を注いでくれるが、斯うした浮浪者や、暴力者の取締、賣春婦の改善事業、或は自由勞働者の生活問題や、癩疾患者の乞食救濟事業等ドン底生活者の生活改善などには餘り手を出さうとしない傾向のあるのは甚だ遺憾としなければならぬ。官憲にしても社會局あたりの役人の方でも亦然りである。歴然と效果の擧がる即ち帳簿の上に統計的に成績顯著なる事業には手を染めるが、かうした體驗に待つべき方面には却々著手しない。亦、著手しやうとせないばかりでなく、注意も研究もされてゐないのはどうした譯であるか。

勿論浮浪者や賣春婦等には取締つたり救濟したりするのに困難な幾多の事情もあるけれども當局者は更なり、世の社會事業家や宗教家など、尙ほ一層かういふ下層階級方面の社會改善に力を盡して貰ひたいと思ふものである。

鄰の笛

―大正九年より同十四年に至る年代順―

芥川龍之介
小穴隆一
芥川龍之介

竹林や夜寒のみちの右ひだり
木枯や目刺にのこる海のいろ
臘梅や枝まばらなる時雨ぞら

お降りや竹深ぶかと町のそら

一游亭來る

草の家の柱半ばに春日かな

白桃や莟うるめる枝の反り

炎天にあがりて消えぬ箕のほこり

桐の葉は枝の向き向き枯れにけり

元日や手を洗ひをる夕ごころ

湯河原

金柑は葉越しにたかし今朝の霜

あてかいな　あて宇治の生まれどす

茶畠に入り日しづもる在所かな

白南風(しらはえ)の夕浪高うなりにけり

秋の日や竹の實垂るる垣の外

野茨にからまる萩のさかりかな

荒あらし殿の中の山の襞

洛陽

姿ほこりかかる旅子の眠りかな

秋の日や榎の梢の片なびき

伯母の言葉を

遊絲はのばし兼ねたる新夜かな

庭芝に小みちまはりぬ花つつじ

漢口

ひと籃の暑さ照りけり巴旦杏

病中

赤ときや蝉なきやむ屋根のうら

唐黍やほどろと枯るる日のにほひ

しぐるるや堀江の茶屋に客ひとり

再び長崎に遊ぶ

唐寺の玉巻芭蕉肥りけり

木の枝の瓦にさはる暑さかな

蒲の穂はなびきそめつつ蓮の花

一游亭を送る

霜のふる夜を菅笠のゆくへ哉

病を問へるひとに

あさあさと麦藁かけよ草いちご

山茶花の苔こぼるる寒さかな

菊池寛の自傳體小說「啓吉物語」に

元日や啓吉も世に古簞笥

再び鎌倉平野屋に宿る

雨ふるやうすうす焼くる山のなり

藤の花軒ばの苔の老いにけり

震災の後、増上寺のほとりを過ぐ

松風をうつつに聞くよ夏帽子

春風の中や雪おく甲斐の山

竹の芽も茜さしたる彼岸かな

風落ちて曇り立ちけり星月夜

小春日や木兎をとめたる竹の枝

吉利支丹坂は急なる寒さ哉

初午の祠ともりぬ雨の中

乳垂るる妻となりつも草の餅

松かげに鶏はらばへる暑さかな

苔づける百日紅や秋どなり

室生犀星金澤の蟹を贈る

秋風や甲羅をあます膳の蟹

一平逸民の描ける夏目先生のカリカテユアに

餅花を今戸の猫にささげばや

明星の銚釐(ちろり)にひびけほととぎす

寄内

臀立てて這ふ子おもふや笹ちまき

日ざかりや青杉こぞる山の峽(かひ)

臘梅や雪うち透かす枝のたけ

春雨や榆は霜に焦げながら

鐵線の花さき入るや窓の穴

二

信濃洗馬にて

雪消する檐の雫や夜半の山

—計五十句—

小穴隆一

伸餅に足跡つけてやれ子ども

雨降るや茸のにほひの古疊

百舌鳥なくや聲かれがれの空曇り

雨日

熟れおつる蔓のほぐれて烏瓜

けふ晴れて枝のほそぼそ暮の雪

庚申十三夜に遅るること三日　青問の渡に碧童先生と遊ぶ

身をよせて舟出待つまののぼり月

薯汁の夜から風は起ち登る

山鶏の霞（かすみ）網に羅（かゝ）る寒さ哉

手拭を腰にはさめる爐邊哉

同上

木枯に山さへ見えぬ尿かな

烏蕎麥に骨もうち噛むさむさ哉

わが庭をまぎれ鷄かや殘り雪

暮秋

豆粥は熨斗代りなるそば粉哉

籠洗ひ招(を)鳥(とり)に寒き日影かな

冬夜

信濃の俗、鳥肌を寒ぶ寒ぶと云ふ

寒ぶ寒ぶの手を浸したる湯垢かな

雉料理る手に血もつかぬ寒さかな

壜の影小(を)窓(まど)に移す夜寒哉

鷄の足ほそりて寒し風

大利根や霜枯れ葦の足寒ぶに

尺あまり枝もはなれて冬木立

まろまりて落つる雀の雪氣哉

三の輪の梅林寺にて

厠上　朝貌は木にてかそけき尿かな

すでに冬至なり　そこひの伯父は庭鳥の世話もづくがなければ賣つぱらふ

餌こぼしを庭に殘せる寒さかな

連れだちてましゆびなり莖の薹

望郷

四五日は雪もあらうが春日哉

庭の花咲ける日永の駄菓子哉

端午興

酒の座の坊やの鯉は屋根の上

桐の花山遠のいて咲ける哉

夏の夜の蟲も殺せぬ獨りかな

豌豆のこぼれたさきに蟆子ひとつ

錺屋の槌音絶ゆる夜長かな

滄江堂主人送別の句に云ふ　霜のふる夜を菅笠のゆくへ哉　即ち留別の句を作す

木枯にゆくへを頼む菅笠や

望郷

山に咲く辛夷待つかやおぼろ月

しやうぶ咲く日のうつらうつら哉

庭石も暑うはなりぬ花あやめ

長崎土産のちり紙、尋あまりなるを貰ひて

よごもりにしぐるる跡を貰紙

短夜

水盤に蚊の落ちたるぞうたてなる

十二年正月脱疽にて足を失ふ　松葉杖をかりて少しく歩行に堪ふるに及び、一夏を相模鎌倉に送る

小町園所見

葉を枯れて遂と咲ける花あやめ

平野屋にて三句

藤棚の空をかぎれるいきれかな

山吹を指すや日向の撞木杖

月かげは風のもよりの太皷かな

思遣人　南米秘露の薛清遠藤清兵衛に

獨りゐて白湯にくつろぐ冬日暮れ

しぐるるや窓に荔枝の花ばかり

よき硯をひとつほしとおもふ

ゆく秋を雨にうたせて硯やな

せつぶんのあけ

よべの豆はばかりまでのさむさかな

みひとつに蚊やりうち焚く夜更けかな

笹餅は河鹿につけておくりけり

ゆく秋やお蹊様の祝ひ酒

ゆく秋を米搗き虫のひとつかな

——計五十句——

後記。僕の句は「中央公論」「ホトトギス」「にひはり」等に出たものも少くない。小穴君のは五十句とも始めて活字になつたものばかりである。六年間の僕等の片手間仕事は畢竟これだけに盡きてゐると言つても好い。卽ち「改造」の誌面を借り、一まづ決算をして見た所以である。

芥川龍之介記

藤森成吉著

東京へ

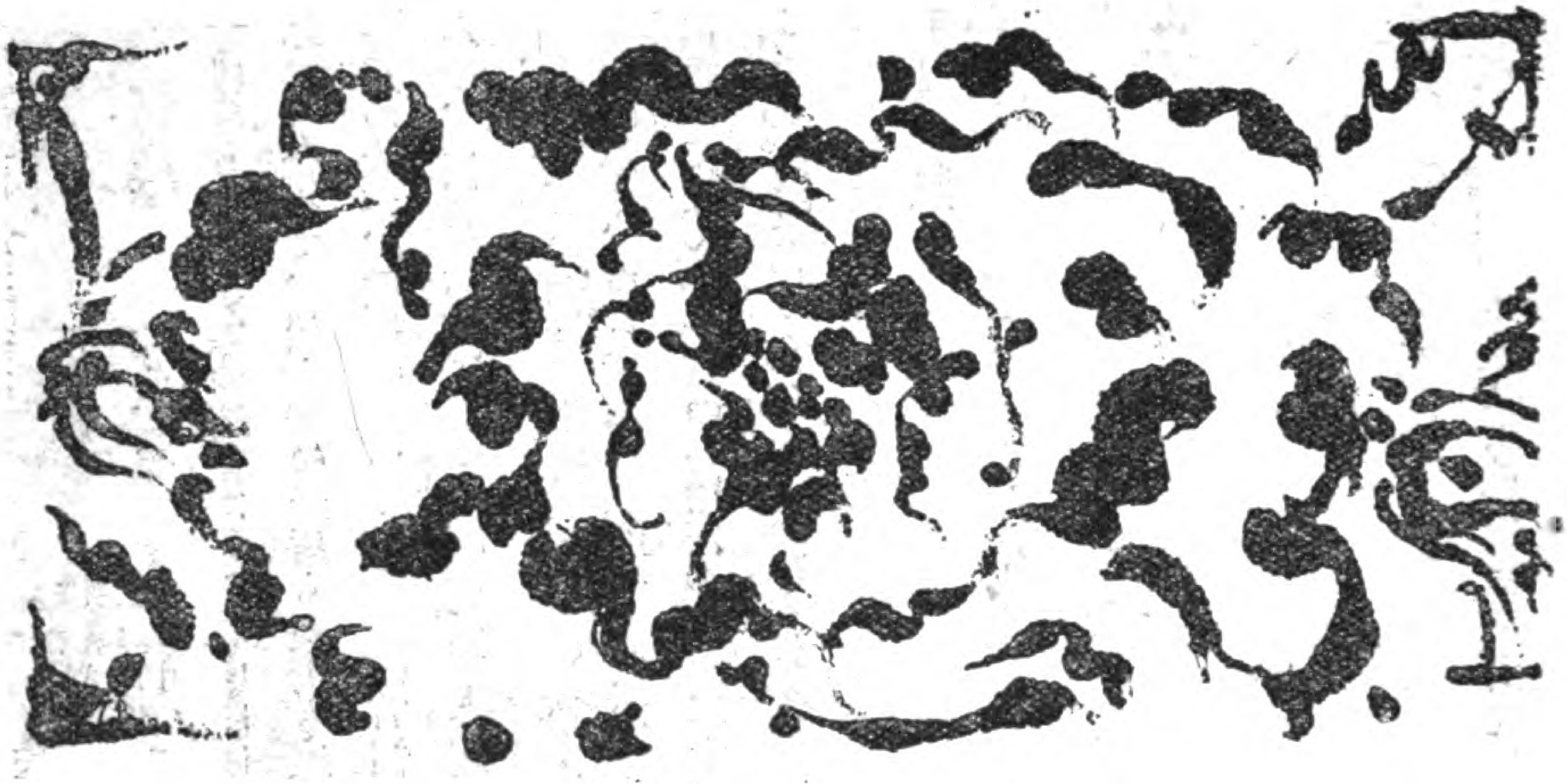
四六判上製

定價貳圓參拾錢　送料二十三錢

著者の代表作

敬虔なる著作が快心の五篇を選んだものが本書である。海を見ず、電車を知らぬ遠い山國から遙々東京を慕つて來る朴訥な青年心理を描いた「東京へ」、都會の一角に時代から忘れられた敗殘者に取材した「無心」、穢されない北海道の自然を背景にした不良兒の群を描く「少年の群」、監獄部屋の恐ろしい經驗を語る「脫走者」、禁慾と祈禱とそして人々の惱みを描く「若き修道者」の五篇、其處に眞摯な著者の人生觀と濃厚な反逆性とが滲んで時代に目ざめた青年達の盛んなる共鳴を得つつある

發行所　東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二



狼へ！（一）

（わが勞働）

藤森成吉

「オール、オア、ナッシング！　イブセンのブランドを見るやうだ。おそろしい氣がする。」

と或る友人は書いてくれた。去年五月、私の勞働生活が始めて新聞にあばかれた時。

「中古ダンテは、ベアトリイチエに導かれて天國煉獄地獄三界を見て廻つた。二十世紀の君は、細君と一緒に現代の地獄へ降りてゆくつもりか。」

他の友人は、また諷刺的に書いてよこした。

私は、ブランドも神曲も思ひうかべてゐなかつた。その代りに、ジャック、ロンドンの「野性の呼び聲（コール・オブ・ゼワイルド）」を考へてゐた。その特色ある小説の主人公は、犬から狼になつた。私は、所謂インテリゲンチヤからプロレタリアにならうと思つた。

片方は、ならうと思はずにいつかなつてしまつた。作者ロンドンの唯物史觀に徹する所以だらう。が、私はならうと自ら企てた。そこに、誰でもの眼にうつる疑問

があるo が、もう一段高きところから見たら、ならうと思ひ立つのとなるのとは、紙一重ではないか。何物が、そもそも彼をならうと思ひ立たせ、又此をならしめるか…………。

唯物史觀は事實の總括だ。その中には私の如き者をも採り入れて、含めて、然も些の矛盾も撞着も感じないだらう。すでに一疋の犬が、種族のちがつた狼群の首領にさへなり得る。いはんや、同じ種屬の中の人間がなぜ人間になれないか？——

とにかく、自ら所謂勞働階級のなかへ入つて行くことは、私に取つては多年一貫の心願だつた。二十代の初めから實に十何年來の。

勞働問題社會問題のなかへ頭を突つ込んで行けば行くほど、その念願は熾烈になつた。少しは、私といへどもその實相について知らなくはなかつた。が、何と云つても、そこには一の鐵壁があつた。自らその經驗を持たないことは、自分の最大の弱味で、又いつも顧みて顏の赧くなることを痛感しなくてはゐられなかつた——。

然し動機については、今これ以上云ひたくない。又書けもしない。今までも、新聞雜誌のみならず、最も親しい友人からさへたび／＼答案を求められた。が、私はいつもことはるか、又ば笑つて相手の推測するにまかせた。何しろ長いあいだの素志だ。複雜した氣もちは、言葉にすれば端から無理や不足の生じる恐れがある。一言にすれば、たゞどうしても勞働しなければゐられなくなつたから………。

從つて、周圍や世間の批評や非難は、私に取つて初めから何の顧慮のたしにもならなかつた。今もなつてゐない。が、自分の立場と、同時に、勞働によつていよいよ固くなつた自信——おそらくは何よりの收獲であらうところの——とを明かにする爲め、一言自分の知識階級論の大略を書きたい。

今、私は決して傲つた氣もちになつてはゐない。又、今まで幾分耳にした非難攻擊に對して、應戰しやうなぞとも考へてゐない。べつに批評を聞きたいとも思はなければ、それを各自の勝手に委したくも思つてゐる。が知識階級論のついでには、幾分その批評を批評する道を取らなければいけない。たゞ私意に依つてゐるものでないことを豫め承知して貰ひたい。

我等知識階級は、はたして絕對プロレタリアとなり得ないか？

この問題に對して、否定の最も强い支持者は、「宣言一つ」を書いた故有島氏だつた。

プロレタリアの一切は、プロレタリアの手によつて成る。我

等は、たゞその外部からの應援者——それもブルジョア組織崩壞を早める爲めの、單なる消極的の——たるに過ぎない。これが氏の信念だつた。その信念の惡辣さが、一部分あづかつて氏を殺した、と私は今でも思つてゐる。氏は後年、マルクス唯物史觀の堅い信奉者だつた。その信奉から、この絕對差別觀が生れ出たことは疑ひない。

ここまで唯物史觀を延長させることが正しいかどうかは、しばらく措き、ここまで徹底させなければやまなかつたところに、私はこの尊敬する先輩の潔癖と眞面目さを見る。が端的に結論を云ふなら、この思想は氏が唯物史觀に囚はれすぎた弱點を示す。人間として、又藝術家として。それは、まさに概念の徹底だつた。が、事實の徹底ではない。

今度の私の勞働についても、知人足助君は、私が自己の單なる遊戲の爲めに、他の一人の勞働者の席を奪ひ食を奪つた、許すべからざる行爲として痛擊したと聞く。それに對して、同じく友木村（毅）君は、たとへ一時食を奪つたとしても、その勞働が藤森にいい影響を與へ、或は今後十人百人乃至千人の食を與へるやうなことがあつたら、當然許されることではないか。と擁護してくれたさうだ。——友人の直言と好意と共に謝したい。

が、この前者の攻擊の如きも、畢竟知識階級の最も陥りやすい概念の遊戲にすぎない。概念的推斷、机上の空論にすぎない。

如何にも表面論理的だ、數學のプラス一、マイナス一の式の正しいと同じく、それは正しい。が、事實について見れば、現在の社會は決して然く原始的且つ單純ではない。社會組織、經濟組織は表裏複雜を極めてゐる。私が「俄か勞働者」になつた爲めに他の一人の勞働者が食を奪はれてなぞは實際ゐない。もしそれほど、明瞭な、正確な、整理された社會全體なら、夙に××××の必要などは、なくなつてゐるだらう。勿論、だからと云つて私は自分の勞働に無反省ではゐないが。

これによつてこれを見る。事實は、幼稚な頭腦以上に生きてゐる。人間も又生きてゐる。概念は、たゞ思想整理の一個の形式、乃至型にすぎない。その適用の範圍には、おのづから限度がある。

が、一方唯物史觀的にも、知識階級の現在と將來の運命を、かなりたしかに指示し得られる。

封建時代の知識階級は措いて問はず、現在日本のやうな知識階級は、あきらかに資本主義時代の産物であり、現象だ。それはそれ自身の當然な運命を持つ。從つて知識階級者は、それ自

らの部署で——有島氏の云つたやうに——努力を徹底して行つても何の差し支へもない。

もとへ遡れば、すべての物の發生がさうであるやうに、知識階級は最も知識、然も新しい知識に富んだ、聰明で感受力の鋭敏な、慾求が強く、吸收力の速かな、理知的であると同時に感情の豐かな、自覺と理想に滿ちた、清新潑剌たる時代の急先鋒に外ならない。ブルジョアと勞働階級のあいだに介在して、それは純粹の人數においては尠く、力においては意外なおどろくべき影響を以て、分解しやすい物質原子の如く動き、ころがりやすい水銀の玉のやうに流れる。

が、片方にはその社會的地點、經濟的地位から云つて、彼等は所謂プチブルジョア、中産階級と密接な關係を持つてゐる。その階級獨特の長所と短所とを、著るしく分ち持つ。それをフイリスチン、乃至プチブルジョアとして冷笑しながら。

その特徴は、時代の成熟につれて、いよいよ強くなる。そして、やがては中産階級と共に當然社會の表面から滅び去る運命を荷ふ。あのロシア大革命前のインテリゲンチア の變化を見よ。又現在日本の一般知識階級、或は文壇に現はれはじめてゐる墮落と、無氣力と、萎靡と頽廢のにほひに見よ。

のぼつて —— 社會階級的に—— ブルジョア 社會の中へ入るか、くだつて一般勞働階級の中へ移るか、ブルジョアの一味に加はるか、プロレタリアの味方となるか、一か他か、それは中産階級興亡の運命そのままではないか。

そもそも、知識階級の名は知識の獨占を示す。そう云ふ知識の堆積の偏倚は、富の堆積の偏倚と相まつて、ただ資本主義時代にのみあり得られる。社會革命のあとに、どうして現在のやうな知識階級が存在しやう。××××××！、その時、何の特權的知識があり得やう。

が、ただ一つ、知識は財物のやうにすぐに奪はれ、又與へられるものではない。それ故に、知識を萬人の物にする運動は、今のロシアでも盛んに行はれてゐる。いな、必死の力を以て試みられてゐる。勞働者に知識を！、又學生に勞働を！、それは、實に現勞農ロシアの教育の大指標ではないか。その方針と信念は、移して以て日本その他の知識階級に、勞働を！、勞働階級に知識を！、の合言葉に變へても矛盾してゐるだらうか。

これこそは、兩者に最も互ひに缺けてゐるものだ。然もこの二ツ——勞働と知識——は、人生に取つて最重要の要素だ。兩者の結合にこそ、はじめて人間の幸福は成り立つ。もし勞働と知識が本質的に截然分裂して、水と水銀のやうに融合出來ないものなら、又知識を持つ者の勞働に携はることが滑稽至極な矛

盾なら、勞働する者の知識を持たうとする努力や試みも、同じく噴飯極まることではないか。もし知識階級の勞働が絶對不可能な事件なら、勞働者の知識的修練も絶對不可能事ではないか。私の試みが笑ふべき遊戯乂は自己欺瞞なら、あの勞農政府も、不可能を勞働者に强ゐ、或は切角の純粋な勞働者をむざむざあやふやな知識階級に仕立て、墮落させてゐる偉大なドン、キホーテではないか。

が、から云つては、議論が少し先走つて再び概念に陷ちる。——先きへ行つてインテリゲンチャとプロレタリアの區別がなくなり、知識と勞働が萬人の物になるにしても、それはしばらく現在のインテリゲンチャ對プロレタリアの問題には當てはまらない。又革命後のロシアの狀態と、日本の資本主義的現實とのあいだにも、幾何の距離がある。

・今の知識階級と勞働階級とのあひだには、では何等具體的ギャップがないか。

いな。かなり大きなそれがある。今あらためて、一般知識階級人の特徴を云ふまでもあるまい。その差違があればこそ、敏感なインテリゲンチャの絶えざる悩みが起り、私の行動なぞに對してもいろんな批評が起つて來るのだ。

現在の兩階級相互間の——殊にせせこましい日本における——誤解、猜疑等の問題は、一切撥無して論を進めやう。それら勞働階級からの猜疑に對しては、日本の知識階級はたしかに一半の責任を持つてゐると私は信じてゐる。が、そんなことに一々考察を加へてゐては、煩に耐えない……。

端的に云はせて貰ふなら、さう云ふギャップがありながら、なほ且つ知識階級は充分勞働階級と融和することが出來る、と云ふ確信を、私は勞働體験から獲た。勞働者達の一員となり、彼等と一緒に飲み食ひ、且つ働きながら、私は決して彼等から水と水銀のやうに離れてゐる氣はしなかつた。「わが仲間よ!」そう呼び合つても、決して不自然を感じなかつた。彼等は、又まつたく私を同類として扱つてくれた。

それが、私の鈍感か、傲慢か、又は態度の虚僞から來てゐたいか。いな。私は充分に自分と彼等を疑ひ、又虚心になつた。自分の性情をそのまま暴露して、決して彼等に媚びやうとも取り入らうとも企てなかつた。

ただ一言云つておかなければならないことは、六回の勞働中、私が本名を名乗つたことは唯の一度だけで、あとはみんな變名だつたことだ。從つて、私がどこの何物か彼等は少しも知らなかつた。勿論私の擧止態度から、彼等は幾分でもインテリゲンチャの匂ひをかぎつけたにちがひない。が、そんなことは

問題にならなかつた。

もし私が、はじめからインテリゲンチャの或る人間なことを明示して入つて行つたら、やつぱり彼等は私を眞の仲間には入れなかつたらう。きつと警戒し、分離したらう。これは、彼等特有の觸角だ。トルストイなぞの農民生活の悲哀を、私はその點にハツキリ指摘することが出來る。

もう一つ、彼等は決して知識を憎んではゐない。どころか、非常な熱心を以てそれを求めたがつてゐる。缺けた者こそ、一番要求することを知つてゐる。彼等の將來を明るくするものの大きな一つは、たしかに知識だ。彼等のなかにゐても、私はそれを痛感した。

かう云つても、が、誤解してはいけない。彼等はすでに前時代の勞働者ではない。殊に男の勞働者仲間には、いろんな知識が隨分入つてゐる。或る點では、所謂知識階級よりもはるかに素朴な、新鮮な、氣もちのいい知識的少年の感じを私は彼等のなかに發見した。

この點では、責任はやつぱり知識階級にかかつてゐる。日本の知識階級が、勞働者達から反感を持たれてもやむを得ないのは、彼が彼等のなかにあまりに知識を齎そうと試みた罪からではなく、實にあまりにそれに超越し、又は無頓着すぎた罰だ。

一日勞働の世界へ入つてゐる時、如何に知識階級の存在が架空のかなたに隱沒してゐるか。所謂當代名家達の威張つてゐる文壇などと云ふものが、はたしてどこに感ぜられるか。資本家は、まだしも直接彼等に接觸してゐる。が、聰明なインテリゲンチヤに至つては、全然沒交渉の他界だ。近ごろ通俗小說論などが文壇に行はれかけてゐるが、あまりになまぬるく、不純で、自覺がおそすぎる。何十年前のロシア青年達の、「ブ、ナロオド」のやうな運動が、今なほ一度でもほんとうに日本の知識階級に起つたらうか。

文壇と云へば、私はみづから所謂勞働して、如何にこの知識階級の一部と勞働者とのあひだに、大きな懸隔のあるかを知つた。所謂勞働者あがりの文筆生活者達が、容易に文壇生活から離れまいとするには大きな理由がある。一ト昔以前の文壇なら知らず、今の文壇は、もしその中で生活出來さへするなら、所謂勞働生活に對してほとんど比較にならない安易さを持つ。

勞働者達は、毎日時計にしばられて、一日十時間から十四時間も、それ以上も働かせられて、一月に得るところは、さしひき糊口に足るか足らない賃金にすぎない。假りに賃金全部そつくり殘るとしても、初給三十圓内外だ。それだけの金は、噂にきく流行作家達の婦人雜誌の稿料にすれば、たかだか二四枚分

にすぎない。そしてその原稿は、彼等に取つてはたつた半日分の仕事にも足らないだらう。

このことは、勞働者の嫉視に値ひすると同時に、それ自身重大な意味を持つてゐる。それは、さう云ふ生活程度の相違から起つて來る必然的感情思想の相違だ。一言にすれば、全精神生活の隔離だ。

人間の思想感情は、そのどれだけを素質にまつかは措き、環境乃至生活に重大な基礎を置くことは、唯物史觀を待つてはじめて知ることではない。所謂インテリゲンチヤとプロレタリアの精神生活の差違、乃至ギヤツプも、この點に議論を置く時、もつとも重大な且つ困難な問題となる。それこそは、その人間の無意識的全人格の別れる根本だ。眞のプロレタリア的感情、乃至思想は、プロレタリアでなければ持てず、又わからない、と云ふ論は、そこを指して初めて千鈞の重みを持つ。かつて勞働者だつた人間でも、一度文壇へ入つてその中でくらすやうになつたら、もう決してプロレタリアではない、と云ふ言葉も、ここにおいて充分の意味を帶びる。

「貧しきものはさひはいなり」。

その句は、新しい眞理にひびく。このことに、眞に思ひを到してゐる文壇人は――所謂プロレタリア派の作家と雖も、はたして幾人ぞ。

私の勞働について、純粹勞働者仲間――殊に所謂勞働運動の指導者達――のあひだでも、遊戯であり、又貧乏の生活に徹し得ざるものとして、非難があつたやうに傳へ聞く。が、遊戯か否かは前にも云つたとほりだ。ことにこんな場合には、單なる遊戯又は試みの氣もちだけでは、とても通れないものがあることを、その人々も亦おそらく内心に知つてゐるにちがひない。もし又藝術をも遊戯だと云ふほどの意味に使ふなら、私はよろこんでその言葉に從はう。又貧乏云々の非難については、知らざる者は知らざれ、私はかつてかなり貧乏に苦しんだ經驗を持つ者だ。そのことは或る新聞でも一度書いたから、ここに繰り返しては云はない。單に自分のことばかりではなく、私の周圍にも亦、今なほ澤山の貧乏人がめぐつてゐる。一時でも、私はその貧乏から眼を離しても、忘れてもゐない。

が、それが何だ、と重ねて云ふ者があつたら、しばらくこの事について云ふを避けやう。ただここで云ひたかつたのは、人間の責任としては勿論のこと、眞にプロレタリアの問題に心を潜めるほどの文壇人は、まづ自らの生活、乃至その基礎について、一時でも考へることを忘れてはならない、と云ふ警告だ。

單に限られた文壇人の範圍にとどまらない。一般知識階級に

取つて、苟くも時代の最も尖鋭な、終始潑剌新鮮な精神と感情を持つてゐることを誇りとする人間に取つて、これこそは夢寐にも忘れてはならない問題だ。それを怠つたが最後、最も時代の先端に立つてゐると自惚れながら、その情感においていつの間にか遙か時代のうしろに取り殘されてゐる時が、必ず彼のうへを見舞ふだらう。いな、すでに見舞はれてゐない者が幾人ぞ。

　知識は、時におどろくべき尖鋭さを持つ。が、それは一方、時間的に弱い特徴を持つ。體驗から否應なしに教へられ鍛ゑられて來たものは、無意識的に水火も犯しがたい力をひそめてゐる。そしてその鍛練の爲めにも、亦矛盾の解決の爲めにも、私は自分が勞働生活のなかへ飛び込んで行つたことを、私としては最善の道と信じてゐる。

　嚴密に云へば、そこには勿論矛盾がある。それらの矛盾は、然し誰よりも自分が最も知り、又あらかじめ惱んだものだ。その些細な一つにも眼を蔽はなかつたつもりだ。が、現實の世界は、前述のとほり、決して單純な机上の空論でも、概念でも、數學的方程式でもない。私自身が生きてゐるやうに、現實は生きてゐる。あらゆる矛盾を纏めて、然もそのなかに、自身を成長させ、眞に步ませる道のあることをこそ、私はハッキリ信じてゐる。

　自分の非力をも顧みず、嗚滸にも「狼へ！」の大願をいだいて出發した一疋の犬が、はたしてその念願の幾分をでも達し得たか。やうやく野良犬になるやならずで終つてしまつたか。それについては今何も云ひたくない。そんなことは、もし運があつたら、死後にでも誰かが論じるにふさはしい。

　が、私は、すくなくとも自分の確信を握つて來た。無限の生きた知慧を學んで來た。尊敬する先輩石川三四郎氏の言葉のやうに、「小學校の卒業證書を受けて來た。私のおそらくは一生の健康の基礎と、生活の基礎を與へられて來た。

　こんなことは、云はなくてもいいことだ。云ふなら、この記錄の最後へでも一言書き込んでおけば足りることだ。が、所謂知識階級の問題について、外國は知らず、今の日本ではあまりに常識的なことばかり云はれ、身を以てその問題に惱んだやうな言說が――有島氏あたりを除き――一つも聞かれてゐないはがゆさと、不思議さと、又私の勞働が否應無しに大關係を持つてゐる爲めとで、ホンの少しばかり自分の氣もちを記して見た。一個の知識階級論としては、體裁も備へなければ、まだ云ひ足りないことだらけだ。が、こんなに論じてゐる暇はない。

　これだけでも長すぎる冒頭を打ち切つて、すぐ記錄に進ま

う。

まだ一言ことはつておきたいことは、記錄とは云ふものの、これは私の經驗の一部の、それも簡略な輪廓にすぎないことだ。一勞働の終るごとに、私は苦痛を忍び忍び、やうやくその大體の心覺えをとめておいた。その中の、人間に關することなぞは勿論一つも書けない。又こまかい、ただ勞働の時にだけ感じるやうな、然も最も重大な感情や氣分も、とても記せない。

事實でさへ、今までいろんな事情から、或は全然書けず、或は差し支へない限り變へて書くより仕方ないものがある。或はかなりあつけないものになるかも知れないが、惡しからず許しを乞ひたい。一體最初から、少しもこんな記錄を書く氣はなかつたのだから。

も一つ、私の經驗した勞働は、去年五月初めから今年五月末まで、前後六回、六種類だ。石鹼工場。北海道の牧畜（主として牛の世話）。東京郊外の豚飼ひ。遠州の織物工場。鐵工場。製絲工場。

これは、ただ出鱈目に選んだ仕事ではない。最初、私は日本の――日本に限らないが――代表的な產業を、五つ位充分經驗して見たいと考へた。紡織、鐵工、製絲、自由勞働、及び農業、がそれだ。それが、實際にあたつていろんな事情で、こんな排列になつたのだ。殊に今年になつてからは著るしい不景氣で、仲々求めてゐる工場へ入れず、或る勞働なぞは豫期どほりの結果を收めてゐないものがある。が、それはいづれ他日の機會にまつつもりだ。

幸ひ、身體のうへでは何の障害も受けなかつた。わづかな怪我位はふんだんにしたが。――實は、中途でその方で倒れて了ふかも知れないと、知人や近親の心配してくれたやうに、元來弱い自分も何より氣がかりでゐた。が、不思議な位、返つて丈夫になつた。

これは、自分のささやかな誇りの爲めに云ふのではない。つぶれるか、鍛えあげられるか、今の世界の勞働にはただ二つの道よりない。そして私は、ただ幸運にわづかばかり鍛えられたのだ。

一、石鹼工場勞働

その三月二十日、信州の或る地方へ講習に賴まれて行き、咽喉をいため、延いて風邪にかかり、胃腸を害して、一月以上うちに寢つづけた。

實は、いろんな準備をもうすつかり濟ませて、講習から歸京次第、すぐ工場へ出かけてゆくつもりだつた。すぐ癒るかと思つた病氣は、意外に長びいた。然も、いくら經つても少しも身體に力がつかない。私は長年の自分の計畫を思ひ、思ふやうにならない自分を考へて、病床で男泣きをした。

「おれは、もう駄目かも知れないね。」

こんなことを云つて、女房にまで涙をこぼさせてしまつた。

病床から起きられるやうになると一緒に、私は、勞働者出身の友人細井和喜藏君に口を頼んだ。それと一緒に家を出て、同君の世話で、府下龜戸の方の或る勞働下宿の一室へ入つた。

それは細井君も一時ゐたことのある下宿だつた。私は、二階三疊の間を一つ借り切つた。賄共月三十圓餘りで。——そんなことは一體贅澤すぎる。普通は、それだけの室へ二三人コミで入るのだ。が、私はまだ病氣上りでヒヨロヒヨロしてはゐ、初めてのそう云ふ下宿でもあり、大事を取つたのだ。

知つてゐる人は知つてゐやう。とてもきたない、又陰慘な感じの宿だ。眞中にガタピシの廊下。その兩側に、例の暗い三疊が幾つもピツシリ向ひ合つてゐる。

便所の簡單さ、又不潔さ、室の疊のすりきれかた。又よごれかた、……が、そんなことより、一番困つたのは、窓の上へ室の半分足らず取りつけた押入れだつた。

頑丈な木箱と云つた感じだ。そいつが、坐ると頭がつかへて持ち上がらない低さに垂れてゐる。この陰鬱さ。切角の窓、切角の光線も、それですつかり遮られる。それだけならいい。が、ヅシヅシ震動させて歩かれる廊下がいやさに、頭を窓の方にして寢ると、起きる時きつとそれで頭を打つ。

その痛さ、いくら氣をつけてゐても、すぐまたやられる。寢のうちでも、ちよいと横になつたり歩き廻つたりするたびやられる。一日二日のうちに、私は頭をすつかり傷だらけにしてしまつた。鐵棒でも持つて來て人間の心理と生理を無現した横暴極まる存在を粉微塵に叩ツこはしてやりたいほど、腹が立つた。

が腹立ちだけならいい。私はしんから恐怖と憂鬱を感じた。まだ勞働も初めないうち、こんなことで怪我をしたり、心配したりしてゐては仕樣がないぢやアないか、……で、又細井君に頼んで、一週間ばかりの後そこを出て、K館に引き移つた。

それはまだ新築したばかりの、云はば簡易アパアトメントと云つた建物で、その平家建ての方の一室、——同じく三疊、と云つてもまだ疊も敷き込まない——を借り込んだ。そこには例の横暴なばけものは無かつた。私はほんとにホツと一息ついた。

そのあひだに、細井君は私の口を奔走してくれてゐた。同君

の勤めもあり、まづ紡織工場へ入るつもりだつた。一緒に日清紡績へ行つたりもした。そのうち、工合よく行つて、或る大紡織工場へ、十中の九まで入れそうになつた。

ただ、どこの大紡績でもそうであるやうに、是非戸籍謄本と身分證明書が要る。それを早速「借名」の知人に頼んでやつた。知人は、すぐ又手數料その他封入で故郷の役場へ依賴してくれた。ところが、幾日待つても、待つても役場から書類を送つてくれない。一體そんなに手間ひまのかかる筈のものではない。知人も心配して、何度も催促狀を送つてくれた。それでも來ない。これは當時例の衆議院總選擧の行はれる前で、役場の吏員達はただもうそのほうで一杯だつたらしい。飛んだくだらないものの飛ばつちりを受けたものだ。

ただ下宿でごろごろしてゐても仕樣なし、第一、いつになつたら送つてよこすか皆目見當がつかないので、細井君が、當分間に合はせにK石鹼工場へ入つて見ないか、と云つてくれた。これは、石鹼工場としては一寸珍らしい位の大會社だ、今丁度募集の貼り紙も出てゐる、あそこなら手つづきも簡單至極だし、きつと入れる。………と云ふ同君は、かつてその中で働いたことがあるのだ。入つては見たが、安賃金で、おまけにひどい仕事で、一日でよしてしまつたのだ。

私は、もう何の仕事でもいゝと思つた。ただ働かせてさへくれるなら、……で、細井君から會社の志願用紙を貰つて來てもらつて、額を集めて履歴書をつくりあげた。「一、學歴、――小學校卒業。四五年間地方代用教員を勤務せしことあり……」と云つた調子に、

それへ捺印し、保證人の印も捺して貰つて、五月初旬のある朝、六時半ごろK石鹼會社へ出かけた。

その前、同君に案内して貰つて、會社の前の大川一つ隔てた一膳めし屋で、一緒に朝飯を濟ませた。一杯五錢の飯丼一つ、汁碗三錢、漬物三錢。

ついでに、辨當も一つ作つてもらつた。お菜は、「今日はガンモか、蓮根の煮付けか、さつま揚げですが……」と女將の言葉によつて、ガンモドキを賴んだ。

その時、すでに私は立派な勞働服を着てゐた。折り襟の新しい「ヲイオン印」と云ふ奴だ。鳥打ちもかぶつてゐた。が、まだ手袋を持つてゐなかつたので、ついでに同じ河岸並びの雜貨店へ入つて、白木綿の手袋（一揃ひ十八錢乃至二十錢）を買ひ込んだ。これこそは、その後の勞働者に缺くべからざる必要品だつた。その頑丈な手袋が、わづか四五日ですつかり指穴があき、又新しく買ひ込んで、その二つを交りばんこに、毎日眞つ黑

になるのを仕事のあと洗つては使つた。「手袋の仲間よ」私は、今でもさう思ふとたまらなくなつかしくなる。

さて外の工場へ行く細井君に別れて、私は赤煉瓦の大會社の門衛室に入つた。そこで、いま顔を洗つたばかりの老人に願書を見せて、少しばかりたづねられて、傍のつめたいベンチへ腰をおろしたのは、私一人ではない、男女取りまぜて八九人ばかり集つた。

七時の出勤近くなると、あとからあとから男女の職工連中がやつて來る。その古參の一人に連れられて、私達はみんなぞろぞろと、まづ食堂へ引つぱつて行かれ、次に二階の更衣室へ導かれて、いろいろと毎日のやりかたを教はつた。それが濟むと、あつちこつち手不足の場所へ配られた。私は、早速「釜場」仕事に廻はされた。

それは高い天井の、廣くガランとした、やや陰欝な第一印象を與へる大建物だつた。うろうろする間もなく、先輩の一人が來て、まづシャコ集めと運搬を云ひつけられた。

シャコと云ふのは、の形をした鐵鑄物だ。(以下、かう云ふ個々の名前などをそのたび説明するのは煩に堪えない。やむを得ない場合簡單に解說する外は、やめたい)。かなりヅシりと重い。これをシャコ廻しを使つてねぢて、トロの鐵枠をとめるのだ。

この石鹼工場のトロは、台も鐵だ。その四方の緣へ溝がついてゐる。そこへ下部を嵌めて、四枚の大小の鐵板で長方立方形を組み立てる。その時各下部の角を三本づつのシャコで、上部の角を一本づつで、都合十六本でシッカリとめるのだ。その科學工業の工程については、案外知つてゐる人が尠く、大體知つてゐなくてはこれから書くこともわかつて貰へないから、ついでに簡單に記しておく。

その組み立てたトロを、一枠と云ふ。それへ、工場の片側へ並んだ鐵の大釜(攪拌釜)の尻から、石鹼の熱湯を木の樋とヘラで流し込んで滿たし、何十本と地面へ敷いたレエルの奥へ、二人三人、又は四人がかりでだんだんに押して運び入れる。

一列のレエルへ、まづ二十枠位置ける。一日に注ぎ出す石鹼の熱湯は、六十枠以上七十枠に及ぶ。さうやつて靜置して冷えるのを待つて、すつかりシャコと鐵板を取りはづして、四日目位に又大切り部の方へ押し出す。

大切り部には、これも鐵の機械が据えつけてあつて、その一枠七十貫目位のシャボンを、まづ縦眞ン中から、次に横に眞ン中から、四つに切斷する。その四分の一個が次の機械で百個の棒に切られる。

その棒の不整形な物の一部分は、近くの踏切り式の小切りの機械の傍へ積んで、端から切つてゆく。が、一般の棒は、底板の上へ載せて、三板分づつトロで乾燥室の方へ運搬してゆく。

乾燥室は、別棟の廣い建物だ。そこで乾燥されると、すぐ隣り棟の仕上部へ送られて、ここで專門の小切り機械でズンズン六個づつに切斷される。それを、なほ型附け機械や乾燥器やさまざまなものをくぐらせて、やがて一個の完全な石鹼が出來あがると、ベルトで流して、兩側に居流れた女工達の手によつて端から包裝され、封緘されて、箱につめられる。

トロ以後の工程はそれでいいが、その前に、まだ仕込みだの鹼化だのいろんな仕事がある。例の攪拌釜のもう一つ上の三階には、四角だの圓だのの大鐵釜（鹼化釜）が、十六個ばかりブツブツと煮えくりかへつてゐる。それが二階の、第一號から五號乃至六號にわたる攪拌釜へ移されて、すつかり色つけをされて、はじめて石鹼の熱湯として注ぎ出されるのだ。

以上は、ホンの荒筋を掻いつまんだのだ。參考までに、そのほかのいろんな建物を擧げて見れば、修繕部、木工部、機關部、發電部、グリセリン部、粉末部、研究室、事務所、倉庫、製品倉庫……。……。

更に食堂だの、浴室だの、炊事場だの、男工寄宿舍だの、運動場だの、事務員社宅だの、等々。

これだけ書いたのでは、仕事の實際の內容なぞ少しもわからない。そのほかあらゆる雜用、——それは、みんな我々によつて處理されるのだ。が、一切略して先きへ進まう。

それらの仕事は、毎朝七時から初まる。開始のボウが鳴るまでに、門衛の窓の前の小さな受け箱のなかへ、出勤簿を入れてゐなければいけないのだ。もし少しでも遲れれば、どんな理由があつても、門をしめられてしまつて入ることが出來ない。その嚴格さ。——これはあとで一寸書くが、女房が初めかよつてゐたゴム會社なぞでは決してそんな手酷しいことはなかつたそうだ。遲れれば、ただ遲れただけの印を捺して貰ふので、都合でいくらおそく行つても、入場をことはられなかつたそうだ。會社が大きくなればなるだけ、時間を勝手に嚴しくする癖があるらしい。

とにかく、それから十時まで仕事をすると、ジリジリジリ…………と號鈴が鳴つて十五分間休む。その休みの待ち遠しさ。十二時には又鳴つて、午飯を食ふ。そのあいだは三十分間だ。

あつちこつちからみんな食堂へ飛んで來るが、この時間も變に嚴しい。熱い茶を會社から出してくれるが、なぜか藥罐の數が尠い。それで下手におそく行くと、湯がのめなくなる恐れがあ

るので、みんなの慌しい飛びつけかたや、藥罐を引つ張り合ふ恰好つて云つたらない。切角立派な食堂まで備へつけてゐる大會社として、その不用意さ……いな、不親切さには、まつたく腹立たしくなる。

まだ食事については書きたいとがいくらもあるが、省略する。三時になると又ジリジリが鳴つて、十五分間休み、五時のボウで會社の門を出る。總計十時間だ。

休日は、一月のうち第一日曜と第三日曜の二日だけ。ただ、この個人會社の當主の先代の命日、二十六日には、毎月特に一時間早く四時びけで、おまけに五錢足らずの干菓子の紙袋を一つづつ呉れる。

先代——創業者——は、何でももと越後か何かの百姓で、それが出京して石鹼工場をはじめて、トントン拍子に大儲けをして、今日のやうな大會社になつたのだそうだ。普通にさへ行けば、これは儲かつて儲かつて仕樣のない商賣らしい。おそるべき剩餘利得と搾取——。

よく工場の仲間で話し合つたが、職工の賃金など云ふものは、考へて見るとあんまりあはれで、馬鹿々々しくなる。たつた初給一圓二十錢。もつともそれは男工のこと、女工は七十錢きりだ。

それが、一年間に二錢三錢づつ、ホンの蝸牛の歩行のやうにあがる。もう三年間もゐて、よく働くことで有名な、會社の御覺え最もめでたい某職工の賃金が、わづか一圓八十錢だ。つまり、最大限進給、年二十錢と云ふことになる。

前に書いたことをよく讀んで貰ひたい。この會社の製品K石鹼は、——安いのと「品質本位」を賣り物にしてゐるが、——一個小賣り十五錢だ。例の石鹼棒一本から六個の石鹼が取れるのだから、初給職工一日分の賃金は、棒一本半にも當らない。(女工に至つては一本に追ツつかない)。そう云ふ棒が、トロ一台から四百本取れるのだ。そして一日には、トロを六十個乃至七十個押し出すのだ。

實は、まだその外に一緒につくる物がある。浮石鹼や洗濯石鹼やグリセリンがそれだ。グリセリンはしばらく措き、その二つの石鹼のどつちかが、平均四日目位に、大抵五釜、二十五六拌づつ出る。前に「第五號乃至六號までの攪拌釜」と書いた、その第六號目を使ふのだ。

から數字的に計算して、さて眼をつぶつて、職工一人一日分の賃金高とよく比較對照して見て欲しい。(職工の總數は、大略男工七八十人、女工百三十人位だ)。おそらくは、現代資本組織の輪廓が、彷彿として讀者の眼前に浮んで來るだらう。

かう云つたら、或は考へる讀者があるかも知れない。いくら安い賃金でも、仕事がそれだけらくなのではないか、やつぱり勞力相當の賃金ではないか、と。

かう云ふ議論は、それ自身成り立たない性質を持つ。が、しばらく正面からそれに答へる。斷じていな、と。

前にちよつと、細井君が一日働いていやになつてやめた、と書いた。同君は、これまで散々いろんな勞働をやつて來た人だ。その人が、あんまりひどい仕事で、おまけに安い賃銀なので……と云ふ言葉は、おそらく何より雄辯に事實を語る。

同君の當てられたところは、三階のエレベータア傍の鹽場だつたさうだ。そこらの仕事は、仲間達の云ふところでは割合らくなほうだと云ふ。私の最初割り當てられた釜場仕事、例の、トロへ鐵板を組み立てたり、押し出したり、又シヤコをはづしたり、トロ板を掃除したりする仕事は、一つとして隨分力を要しないものはない。初めのうちは、それだけでもヘトヘトになつた。が、これもまだ、この會社の仕事では割合らくだ。「大切り」の方へ行つて、例の百本の棒を底板へ載せて二人で始末する「棒取り」や、それをトロへのせて乾燥場へはこぶ「運搬」に至つては、血氣盛りの若者でさへ泣く仕事だ。

自分から進んでそれをやらうと云ふ者は、ほとんどない。毎朝職工長が、その部で働く人間を物色しに二階の席から降りて來ると、みんな見つからないやうにトロの陰へかくれてシヤコはづしなぞしてゐる、と云つた有樣だ。

私も、あとでその「棒取り」をやらされた。その忙しさ、又重たさ、……最初なぞは、まつたく言葉どほり流汗淋漓として、眼がくらんで、もう少しでブツ倒れそうになつた。おしまひ頃には次第に馴れ、力が增し、自信が持てるやうになつたが、その時のうれしさは、今も忘れられない。

が、それよりもつと怖ろしい仕事にぶツつかつたことがある。「屑揚げ」だ。

大切り部、小切り部、仕上げ部、その他から、毎日隨分澤山の所謂シヤボン屑が出る。そいつを、すべて石油の空き箱以上の箱へ詰めて、二人で底へ手をかけて、木のトロのうへへ運んで、仕込み部の横の隅のエレベータアのところまで押してゆく。それから呼吸で、四つ又は五箱づつ、エレベータアの鐵板の上へほうり投げる。あとは合圖をして、上へ引きあげさせる。

仕事と云へばそれだけだ。それを何回も繰り返すだけだ。數は一日二百箱位。――――が、そんなつらい力仕事には、勞働前は勿論、その後の勞働でも一度も會つたことがない。

初めのうちは割合平氣だ。が、だんだんに、もういくら我慢しても、いくら掌へ鹽をこすりつけても、どうしても箱が持ちあげられなくなる。殊に仕上げ場から來る府箱の重さ。………私は、この時ばかりはしんからひとり涙をこぼした。

やつと宿へ歸つて來ても、腕頸がヅキヅキ神經痛のやうに痛む。熱する。ヨヂウムを眞ツ赤に塗りつけながら、一晩ぢう眠れなかつた。

こんなことを云つてゐてはキリがない。勿論グリセリン部や浮石鹼がかりのやうな、かなりらくな仕事もある。が、全體を通じて、これは職工仕事と云ふより、全然人夫仕事だ。土方仕事だ。（科學工業の勞働は、一般にみんなそうだ、と細井君の話だ）。ほかの仲間達も、異口同音にそう云つてゐた。

「シャボン工場なんて云やアがるから、割合らくな仕事かと思つて入つて來たら、こりやあ一てえ何てんだい！」

人夫仕事なら仕事でいい。それだけの賃金をくれるなら。――――が、人夫賃銀とはてんで比較にもならないではないか。

だから、頻々として職工の顔が變る。一日二日、乃至三日位で、入つて來た者の半分以上は出てゆく。十日もゐれば、もうそろそろ古參づらになる。二十日もゐるうちには、二三度も「職工募集」の木札が會社のおもてへかかる。

私は前述のやうに、ただちよつと足掛けのつもりでそこへ入つた。それが、どうして五十日間もつづけて働く氣になつてしまつたか。それは、實に勞働者の出入りが激しく、いろんな、ありとあらゆる種類の人間、――地方出の百姓も、車力も、人夫も………に接しられるのに、たまらない興味を惹かれたのが一つ。も一つは、期せずして人夫仕事、乃至自由勞働者の仕事を體驗出來ると感じたからだ。

勿論、中には十年、乃至二十年もつづけて工場に働いてゐる職工も少しはある。職工長の如きはその雄たる者だ。が、それにはわけがある。どんな種類の勞働でも、幾らかづつの熟練とコツは要る。が、かう云ふ純粹筋肉勞働では、いくらそれに馴れても、他の技術的勞働には役に立たない。又ほかの筋肉勞働的工場へかはつたところで、初給は似たり寄つたりだ。一年、いな、半年でも一月でもゐれば、もう顔馴染になつてゐるだけでも、その工場のほうがやりいい。だから、すでに二年三年と辛抱した者は、今更ほかの工場へ移つてもただやりなほしに過ぎない、と云ふ未練に惹かされる。それが、實に何年かの永い職工のゐる原因だ。

所謂幹部その他の階級まで行くと、なほ他の理由が加はる。それを詳細に解剖すれば、如何に資本家のヤリ口が巧妙且つ狡

猾を極めて、その内部にどうしても組合なぞを作らせないやうな算段をめぐらしてゐるかが、ハッキりわかるが、そんなことまではとても書き切れない。

比較的年月の勘い——會社へ入つてから——者ほど、だから反抗心に燃えてゐる。最もおとなしい人間でも、その心の底には不平をひそめてゐる。が、彼等は手も足も出ない。何の反抗も試みることも出來ないやうにされてゐるのだ。ただ時たま呟く。

「へん、こんな處に十六年もゐる奴の、面ア見てえや！」。

あはれなる仲間よ！、私は時々、實際たまらない憂愁に心を嚙まれた。この、時折りおそつて來るおそるべき精神的憂鬱と退屈感は、その後の勞働でも始終經驗したことだが、すべての現在の勞働者の氣もちらしい。資本主義社會の中にあつて、もしこれを感じない者があつたら、まさに白痴だ。いたづらに、勞働を神聖だなぞ云ふ者よ。君達ほど、知つた顏をして、然も現世の勞働の何たるかを知らない者はない。

勞働の激しさのついでに、一言危險についても書かう。ほかの部のことまでは云ひ切れない。私のやつた仕事のうちでの事實を、二三點記して見やう。

「釜場」仕事は、隨分危險が多い。例のトロの鐵板を組み立てる時、あやまつて足の上へ落して怪我をした者は、私のゐるあいだでも幾人あつたか知れない。隨分重い方形の板だ。おまけに、その下に二つづつカギのやうなものが突き出てゐる。そいつが足の甲へ墮つたら、穴があく。指ならつぶれる。

そのほか、トロの車輪に足を食はれたり、手の指を枠と枠とのあいだへ挾まれたり、頭を浮石鹼の釜の角でぶちつけたり、シャコを落して足を痛くしたり、石油罐へどつさりシャコを入れてはこぶ時、罐の緣で手を切つたり、箱の釘を刺したり、……そんな小怪我を數へあげたらキリがない。

こんな怪我は、みんな本人の不注意だと、よく人は云ひたがる。なるほど不注意かも知れない。が、どこに一體、神のやうな注意周到の人間がゐるか？ 又痛さに對して無感覺の人間がゐるか？人間であるかぎり、ほとんどすべての怪我は、必然會社が責任を持つべきものだ。

今云つた危險位なら、精々仕事が出來なくなる程度で、べつに生命に差し支へはない。が、一度、三階——中の連中はみんな二階と呼んでゐるが、便宜の爲め三階と云つておく、——の鹼化釜の蒸汽が沸騰して、おそるべき「苛性」の滝が幅十間あまり一面に直下して來た時の凄さは、今も忘れない。もしその時眞下にゐたら、今私はこんなことを書いてはゐない。とくに葉の下に靜かに眠つてゐるだらう。然も間一髮で、私はその危

險を逃れた。

人間と云ふものは、實に脆く死にやすく、然も又不思議に死なないものだ、と私は感じた。一月ばかり前にもそんなことがあつたそうだ。

この邊で、少し女房のことを書かして貰はう。

彼女は、やつぱり以前からいつか勞働して見たいと云つてゐた。が、元來あまり身體の丈夫でないはうの女だ。今度私がはじめるについても、一緒に働くことなぞはやめてくれ、と云つた。自分だけでも、やりとげられるかどうか確信がない。勿論氣もちでは、石に噛みついても。……が、身體が潰れてしまうなら何とあがいたところで仕方がない。その不安と緊張へ持つて來て、女房の心配まで加へられてはやり切れない。切角出來ることまで、そのお蔭で出來なくなるかも知れない。…………そう私は考へた。

それに、手もとに二人も幼い子供がある。それを控へてなぞ、保育所の設備のある工場ででもなければてんから出來ない相談だ、……と云つたが、こんな機會ででもなければ、又働かうと云つたところでいつ出來るやらわからない、と彼女はしきりに働きたがる。そんなら、都合が出來たらやるがいい、と生返事で私は家を出てしまつた。

ところが、工場へ入つて四五日した晩、彼女がひとりで宿へやつて來た。子供達は、みんな或る親戚へ預つて貰へることになつたから、と云ふ話だ。そこで、彼女も一緒に勞働することにきまつた。

便宜の爲め、勝手に彼女の女らしい日記の一部分を引いて見やう。

「——日、五時半に起きたところ、六時でなければ水が出ず。その水も黄色い（註、私設簡易水道の爲めだ）。主人につれられてめし屋へ行き、主人は工場へゆかれる。その歸りに、昨日からたびたびさいそくした棚の木を指物屋から買つて來て、棚をつけ戸棚をかたづける。

實は、自分も今日から工場へ出かけるつもりのところ、生憎女工滿員。それにゆふべ見つけて聞いて見た處ははんぱな爲め、二三日あそぶつもりで家にゐる。昨夜來內職でもと思つて氣をつけても、一向見あたらず。

お午にまづいお引ッ越そばを食べ、よく見るとやくみなど皆眞ッ黑（註、この邊は工場地帶で、あつちもこつちも煙突だらけだ。その煤煙が朝から晩までしッきりなし降つてゐる。で何でもかんでもすぐ眞ッ黑に染まる）。」

「大ぜいの人が行く爲め、はばかりが大そうくさいので、なる

たけ我慢する（註、なるたけ行かずにゐる意味）。お湯から歸つて、疲れの爲めついうとうとすると、チクンと何かの蟲にさされて、赤く痛んではれあがつて來る…………」。

「――日、女工募集の立札を見て××ゴム會社へ行つてたのむいろんなことを聞かれ、職工長がはんを押し、明日から勤めることになる。給料は、一日初給七十八錢。七時から五時まで。毎月、第一第三日曜公休日。そのそばで、女工達がゴム糊を、紙ヤスリを貼つた板切れでこすつて仕上げをしてゐる」。

「――日、機關室の人は、朝四時半頃から出働。又男工は、三時間、多い人は五時間七時間も夜業をするのにおどろく」。

「――日、女工募集のふだを見て三人も來たが、皆ことはられる。今日は、むづかしい物などぼつぼつし初める。男工は、機械のなかで皆輪になつて食事をし、女工はめいめいの机の前で辨當を出して食べる。工場長は、四十年もこの會社に勤めてゐる由。その他の重要な人達も、皆小僧の時からたたきあげた人なり。夜強き雨ふり出す。この邊は、雨が一ふりふると、溝があふれて往來まで沼のやうにのぼり、くるぶしの邊まで水がつくので困る」。

「二十五日、ゆふべの雨で、又もう往來が水でうまつてゐる。今朝から事務所の方へ廻される。

今日は皆勤〆切日なれど、十八日の公休日が、退出時間五分前に二十一日と繰りかへになつた爲め、知らない人や都合の惡い人が多く、欠勤した爲め、皆勤少し。そんな風に急に會社の都合のよいやうに變へても、やつぱり欠勤なり。皆勤は一日半の增給。遲刻あれば半日給賞與」。

「――日、今朝、監督の田村さんに又仕事の方へ廻してくれるやう賴む。

『まアそうおつしやらないで、せつかく物色してゐたのですから』

呼びずてが急に、君、さん、づけになる。丁度來合せた工場長の河内さんに云ふ。

『仕事の方へ廻して下さい。また事務に用のある時はいつでも手傳ひますから』

『そう云ふことは、かへつていけない』

『今日でカードの方も片つきましたから』

『もう事務に用はありませんか』（事務員に）

『いゝえ、まだまだ、これから棚おろしの整理があります』

『でも、私には出來ませんから』

『お前さん位出來れば結構です』

『でも、慣れませんから出來ません』

「一ケ月半位しなくては、なかなか慣れない」
「それに、兩方することはかへつていけない」
「では、仕事ばかりさせて下さい」
『どうせどつちも慣れてゐないのだから、もう少し慣れるまでこつちをおやりなさい』
（事務員）『女がもう少しゐるといいけれど。たつた一人だから』
「男だつて、何も取つて食やアしまいし」
と云つて、河内さん出てゆく。私は眼のなかに涙が出て來た。そして、今日限りやめやうと決心する。」

この簡單な引抄に、よく眼をとほして欲しい。

出勤規定は、表面十時間となつてゐても、實は夜業又は殘業と稱する何時間かの實際勞働か公然追加されてゐることを。これは、石鹼工場でも普通に見られるところだ。それも、精々一時間位ならいい。五時間乃至七時間も、更に働くに至つては、工場法の規定なぞ、一體どこに効果があるか。

又々切日の項を見よ。會社の都合で勝手に、然も實に突然に、翌日のたのしみ待たれた定休日を變じ、延ばして、その爲め或は家の都合がつかず、或は全然知らずに歸つて缺勤したあはれな職工達に、むさむさ皆勤賞與を棒にふらせる横暴さを。――不親切なぞと云ふより、かうなると、皆勤賞惜しさの非常手段だと見られても仕方ないではないか。然もその皆勤手當たる、一馬鹿げたほどわづかながら、それを何よりのたのしみに精勤して來た職工達に、わづか一日で背負ひ投げを食はせて顧みないとは。……明瞭にペテンではないか。

終りの項では、女房が少しばかり字が書けたり讀めたりする爲め、幹部の目にとまつて、女工から事務員手傳ひに拔擢された事件が記されてある。これは甚だ名譽なことかも知れない。又仕事も、女工仕事よりらくかも知れない。が、ここにも會社の狡猾な手段がひそんでゐる。彼女は相變らず女工だ。事務員の仕事をさせるなら、當然日給もそれだけ増すがいい。が、日給は依然女工給にとどめて、仕事だけ純然たる事務員級にしやうと云ふのだ。

彼女には、勿論それがわかつた。が、然く彼女をして事務員の仕事をいやがらせたのは、では、切角女工達の一人として實際勞働の經驗を持ちたいと考へた目的が、水泡に歸して了ふではないか。で、一生懸命、彼女はまた女工の仕事へ戻して貰ふことを哀願した。然しまるで相手にされない。その爲め、十日ばかりで切角のゴム會社をやめてしまつた。

退勤の途中出會つた彼女の言葉によつて、私は再び石鹼會社へ引きかへして、女工部の方へ彼女を入れて貰へまいか、と門

衞にたのんだ。と、今滿員だが、ほかならぬおかみさんのことなら何とか都合しやう、ただし、今日はもう時間すぎだから、明日志願用紙を渡さう、と云ふ返事で、いそいそと一緒に歸つた。

翌々日から、彼女は私と同じ會社で働くことになつた。再び彼女の日記を拾はう。

「――日、朝、主人と一緒に出勤した。この會社は、ずいぶん中が廣い。そして、洗濯場や運動場や、又洗面場などがある。仕事は、初めての人は、型を機械で捺した角形石鹼を包裝するのである。

ベルトの上を流れて來る石鹼の兩側にすはつて、最初の慣れた人がよいのをより分けて置くと、次の人が、版のついた蠟引きの長方形の紙にそれを包み込み、次の人が能本で卷いてはりつけ、次の人が封の紙を合せ目にはり、次に一ダースづつ箱に入れ、次がはこを十文字にしばつて出來あがる。

けれども、しつきりなしにどんどん流れて來るので、休む暇はもちろん無く、初めての日は氣のもめること一通りでない。左手の親指と手頸が、疲れて痛くなる。ゴムよりもつらい。

十時と三時の十五分の休みには、肩をなほす人、又雜談の小太などよむ人が多く、一體にゴム會社の女工よりも敎育ある人、きれいな、家に餘裕ある人などのやうに見える。これだけ人と親しみにくく、又不親切な人達に思はれる。

仕事をしてゐる時も、だまつてひとりで一生懸命やつてゐると、慣れない爲め、石鹼の香りが鼻をついて、クシヤミや鼻汁が絕えず出る。口をあければ咳が出る。まるで風邪をひいたやうで、かなり頭痛がする。然し、休みにそとの空氣を吸ふとなほる」。

「――日、今日は少し慣れた爲めらくになり、いい工合に石鹼もたまらず、いろんな勝手がわかつて來てうれしい」。

「――日、今日は立番をする。水の中をくぐつたベルトがぬらしてはじき出して來る石鹼を、六個づつ箕の中へならべ、十五行二列並んだとき、二人でになつて持つてゆき、その四隅にカギを入れて、又だんだんと十五枚積みあげる仕事で、自分の背たけ位になつた時はなかなか腕に力がいる。お午おなかがすき、疲れる……。」

女工の仕事は、勿論これにとどまらない。私も仕上げ部の方で女工達の手傳ひをしたことがあるが、隨分めまぐるしく忙しい仕事が多い。中には、女達には實に無理だと思はせる力仕事がある。

が、こまかいことは一切省く。ただこの日記で見逃せないこと

とは、彼女が新しい仲間を前のゴム會社の仲間と比較して、第一印象的に親しみにくく感じてゐることだ。

後になつては――私も同じやうだつたが――彼女もだんだん仲間と親しくなり、いろんな親切な氣風を發見してゐる。たとへば菓子の袋でも買ふと、――女工のなかには、ひそかにそれを商賣にしてゐる者があるのだ、――きつとそこにゐるだけの仲間へ、みんなに分ける。これは、嘗ての彼女の女學校生活なぞと、著るしい對照をなすものだそうだ。女學生のあいだでは、何か物を分ける時でも、ただ親しい者だけに分ける。たとへすぐ傍にゐても、外の者には決して分ないくせになつてゐると云ふ。

が、比較すれば、今でもやつぱり、彼女にはゴム會社の女工達の方が親しみやすく、人なつツこい氣風に思はれるそうだ。工場の設備もわるく、ヨリ貧乏で、ヨリ質素で、ヨリ無知な彼女達の方が。――これは、充分考へさせられることだ。

女工の方へ筆が行つたついでに、一言書いておかう。

一體このK石鹼會社は、有名な大會社のくせに、ひどくケチだと云ふ内部の評判だ。たとへば石鹼の屑なぞ、決して職工の持つて歸ることを許さない。どんなよごれた屑でも、みんなくそ丁寧に掃除して集めさせて、例の「屑揚げ」でドシドシ三階へ運び、生きかへらせて再び石鹼の材料に使ふ。普通の石鹼工場では、そんな屑のカケなぞは勝手に職工にくれてやるそうだ。いつも新聞その他へ麗々と大廣告する「品質本位」のモツトウに照しても、そんなものは少しは職工の自由にまかしたらどうだ？。

又、石鹼を買ひたいと云ふ職工達へは、會社は定價の小賣値段で賣る。いくら買つても、ビタ一文まけてやらない。毎日退け時に、門衛の窓口に、何々殿と赤インキで書いた新聞包みが、きつと一つや二つは載ツけてある。それを、女工達が受け取つて歸る。はじめは何のことかわからなかつたがそれが彼等の直接會社から買ふ石鹼だつた。

その定價分だけ、月末の日給支拂ひ日に差し引いて渡すのだそうだ。よくも商賣の本筋に酷誨に徹底したものだと、それを聞いて私はつくづく感心した。

なほ、六ケ月以上勤めた職工には、ドウコと云ふ、石油鑵を胴切りにして把手をつけたものを一つづつ與れる。それはみんな自分の名を書いたりして、洗濯その他に使ふ。ところが、例の休み時間以外に洗濯することは絶對禁じてある。これは當然な話のやうだが、女工なぞに取つては非常な苦痛だ。何しろ十時間勞働では、家へ歸つてから碌々洗濯なぞする暇はないっ

普通工場でなまけやうと思つたところで、なかなか容易になまけられるものではない。職工長もゐれば、巡視もゐ、又女工の方には「助手」と白く抜いた襷の布を、まるで陸軍の將官みたやうに肩から脇へ掛けた助手達も幾人かゐる。その怠けるかはりに、せめて手でもあいた時少し位洗濯をさせても罰は當るまい。

が、それが蟲のいい要求ならそれでもいい。ここに一つわからないことがある。と云ふのは、私のゐるあいだに、內規が一層嚴しくなつて、たとへ休み時間でも、仕事着以外の物は洗濯まかりならぬ、と云ふことになつた。職工達は相變らず表面的には何の反抗もしなかつたが、怨嗟四方に滿ちた。

この場合、一たい會社の氣もちを知るに苦しむ。何の爲めにそんな干渉をする必要があるか。工場の中でなら、石鹸屑は自由に使つていいことになつてゐる。又使ふ量なぞたかが知れ切つてゐる。そんなら湯が惜しいか。湯は、仕上げ部の横手の桝にいつも餘り湯が溢れ流れてゐるではないか。それは、ただ捨てられるものではないか。では、女工達が切角の休み時間にあんまりセツセと洗濯なぞすれば、疲れて工場の能率があがらない、とでも云ふ理由か。神よ！この會社の本心を教へて下さい。

この位で仕事の話は打ち切つて、次に、私が初めて入つた勞働者仲間の印象を、少しばかり記そう。云はば、この會社の職工氣質の一部だ。

第一に感じたことは、彼等がみんなおとなしい人間なことだ。勞働者とさへ云へば、今でも一般の人間は、荒くれた、亂暴な、無知な「土方」と云つた概念を持つ。大まちがひだ。なるほど、めいめいの性質から云つたら、割合荒ツぽい人間も、强情な人間もゐるだらう。それは他の社會でと同じことだ。が特に勞働者だから亂暴だ、なぞと云ふ人間は一人もゐない。

決して然く無知でもない。新聞のよめないやうな男工は、ここには一人もない。殊に男工の場合には、もののわからない人間は極尠い。濫りに喧嘩なぞはしない。大抵のことは、戯談にして笑つて濟ませてしまふ。その點、彼等は實に「苦勞人」だ。たとへ口爭ひをするやうな事があつても、云ひ分があるならそとへ出ろ！と怒鳴る。そとへ！とは、釜場なら釜場のなかで喧嘩しては他人へ迷惑が掛かるから、建物のそとへ出てやらう、と云ふ意味だ。そう云はれて、わざわざそとまで出かける者はまづない。その棄てゼリフで、大抵爭はおしまひだ。

彼等は、又割合親切だ。正直で率直で、さつぱりして、氣もちがいい。

が、中には、時たまいやな性質もないことはない。それは、ひどく口やかましく、小うるさい、まるで姑婆のやうな氣質だ。當つても當らなくても、一々他人のやつてゐることに干渉したがる。自分のしてゐることはわからずに、人のことばかり眼につく。人間としては大抵小心者だ。だから惡人ではないが、高朗な心を知らない者だ。

實際を云へば、から云ふ人間は決して工場特有の性質ではない。一般日本人に、一たいその素質がある。文壇にも教育界にも實業界にもあらゆる方面にゐる。云はばニイチエの「小人」だ。それが特に日本人の氣質の一側面を形づくるのは、小さな島國の地勢その他の主因に依らう。が、そんなことまで今考察してゐる暇はない。

たゞ工場での場合を見れば、それは確かに一つは工場の組織制度の結果だ。自分も今まで散々人から口や言を云はれ、立居振舞にまで一々餘計な世話をやかれて來たから、その仕返しに……と云ふより、いつかもう第二の天性を形づくつてしまつてゐるのだ。感染しやすい少年工などにすらその形跡を認めて、私は一種撫然とした氣もちになつた。女工の方にも勿論それがある。それはあとから記そう。

その次に感じさせられたことは、彼等が實によく働くことだ。

いくら働いたところで、それだけ自分の懐へ收益が入つて來るわけではない。云はば、働けば働くだけ會社の不當な剩餘利得を増してやるだけのことだ。考へれば馬鹿げ切つてゐる。それ位なことは、彼等も勿論知らない者はない。なのに、決して故意になまけたりはしない。たとへ職工長や巡視が見てゐなくとも、自分のやるべき仕事だけはチャンとやる。

少年工の場合には、さうも云へないことがある。それは、普通ならまだ尋常科何年位の、遊びたい盛り、いたづら盛りの年齢を考へてやれば、少しも無理がない。が、成年工達に至つては、何もそんなに働かなくても、と思ふまでにみんな働く。會社への不平は不平として。……仕事に對する彼等の誠實さは、眞におどろくに足るものがある。

これは女工の方でも同じことだそうだ。女房なぞも、感心してしまつたと云つてゐる。

彼等が休む時は、決してなまける爲めではない。仕事が丁度合ひ間になつたか、でなければ實際休む必要があるからだ。それさへ怖れて、職工長達の眼からかくれる爲め、トロのうしろなぞに身體をちぢめてゐるのだ。仕事に對する職工の良心と云ふものは、慾張りな資本家達が鷲の眼で睨つてゐるやうな、そ

れないい加減なものではない。職工の不誠實か、資本家の不誠實か、——勿論後者でなくて何ぞ！

さてその仲間達のなかに二ケ月近くもゐると、彼等はもうすつかり仲間の一人として扱つてくれる。すべてが氣安く氣もちよくなる。が、この點では、女工達の方がまだずツと修練が足りないらしい。同じく仲間の感情は持つ。が、どこか了簡が狹く、小意地が惡く、扶け合ひが尠い。

さきにゴム會社の女工との比較を書いておいた。その仲間達の方が、はるかに和氣に滿ち、無意識的な同類意識に富んでゐるらしい。この石鹸工場の女工のあいだでは（以下女房の感想を綜合すると）、まだ隨分喧嘩が多い。くだらない、愚にもつかないことで、すぐ喧嘩になる。それがまた忽ち周圍に波及して、みんな總立ちになつて「監督」を呼んで來るやら、ぽんきで泣くやらの騷ぎになる。又男工に比して、反つておどろくべくあばずれた者が多い。

これも女房の日記にあるが、最初の日なぞ、食堂へ入つても席がない。——食堂は、男工部と女工部と、ちよつとした板壁一つで隣り合つてゐるが、女工の方は人數が多くて、とてもその中へは入り切れない。で、半分は二階の更衣室へあがつて、その板じきへ坐つて食べる。——然し誰一人、この新米の爲めに場所をあけてくれる者がない。で、仕方なく立つて食べてゐると、ほかの者が見かねて席をあけてくれたと云ふ。

「ああ云ふなかへ入ると、どうしても氣が強くならなければなられませんわ」。

と彼女は嘆息してゐる。これは、彼女自身ずいぶん氣の強い方の女だから、少々割引きして聞かなければならないこと勿論だが。

次に感じられることは、職工達のやや偏狹なことだ。たとへ必要な仕事でも、自分達の仕事と一緒にやらない場合には、決してその人間に快感を持たない。もつとも男工達の方では、少年工をもみんなよくいたはつてやつてゐることを、特に記しておきたい。

その次に彼等の清潔好きなことだ。

これは、噂にきく支那の勞働者なぞと比較して、著るしい對照をなすものらしい。元來日本人は、古神道の儀式や精神によつてもわかるやうに、清潔ずきの國民だ。殊にきたない仕事なぞをしてゐる勞働者のあいだでは、それがハツキリわかる。每日仕事のあと、きつと顏や手足を洗つて歸るばかりでなく、何か特別な仕事をした後でもチャンと洗ふ。工場もよく掃除して奇麗にしておく。——一寸おかしいことは、割合よごれることの尠

い。又始終女工達のあいだに立ちまじつて働く仕上げ部の方の男工には、特別ハイカラなしやれ者が多いことだ。それから仕事を濟ませて更衣室で着物を變へて出る時には、みんな大抵おどろくばかりな立派な服裝になる。しやれた兵子帶をグイと尻の先きへ結んだりして、ちよつと見ちがへるばかりだ。これは、殊に男工の方に著るしい現象だ。

この氣もちはいろいろあらうが、第一に、彼等は一歩工場の外へ出れば、職工と思はれるのを快く思はないのではないか。私なぞ、いつも平氣で勞働服のまま門を入り門を出たが、そんな人間は外にはほとんどなかつた。

よごれた勞働服、それは何んにも恥じない立派なものではないか(もつとも、私のは不精が手傳つてゐるのだが)。が、一般世間人の見る眼はちがつてゐる。一から十まで勞働者の恩惠を受けながら。彼等は未だにその人々の姿を輕蔑することに慣れ切つてゐる。——輕蔑するか、でなければ怖れるかだ。——勞働者達も、又あまりにそれに慣らされてゐる。勞働者の名詞は、社會的地位の下等や生活程度の低級の觀念と、すべての人間の腦中に離れがたい關係で結びついてゐるのだ。

もう一つの心理は、終業と同時に、又會社の門を出ると一緒に、全く工場から開放されたのびのびした氣もちを持ちたい爲めではないか。

これこそは、彼等に取つて何よりのよろこびだ。たのしみだ。それは牢獄の門を出るに等しい。氣もちがすつかり一變される。彼等に取つてほんとうに人間らしい生活の時が來、休息の時間が來る。

これは實際試みて初めて知つたことだが、——ついでに書くのは少し變だが、——筋肉勞働には、文筆その他の所謂精神勞働とは異つた一種特別な幸福感、乃至快感が存在する。それは、毎日々々ハツキリ片がつき、仕事が切れてゆくことだ。

「一日のことは一日にして足れり」。

その言葉は、殊に下級勞働者の勞働の原則だ。幾日、又幾月も引きつづいて、眠つてゐるあひだでさへ全然絶えることのないやうな性質の仕事、さう云ふ種類ばかりを知つてゐた者に取つては、この一日一日に全く責任をのがれ、明確にキチキチと區別りのついてゆく仕事に接したことは、別世界的愉快さと朗かさの感じだつた——。

最後に書いておきたいのは、職工達の言葉だ。殊に仕事の時呼び合ふ言葉は、まるで符牒のやうな短い、簡單な裂片だ。初めのうちは、何を云つてゐるのか、私はさつぱり意味が取れなくて弱つた。

一つには、これは地方訛りにも依つてゐる。總戸近傍は、汽車その他の交通路關係からか、又は地方的便宜からか、東北方面から入り込んだ勞働者が頗る多い。殊に福島、栃木、越後、埼玉、山形、仙台等の人間が、大半を占めてゐる。その東北訛りが遠慮なく飛び出して來るので、聞きにくいこと夥しいのだ。

男工の方にふんだんに使はれる言葉があると同じやうに、女工の方にもある。何にでも、端から「濟みません」を使ふ。それでどの場合でも濟ます、とは例の彼女の話だ。こんなことは際限がないから、いい加減で切りあげる。

ついでにここで一言云つておきたいのは、私の勞働の記事が新聞に出た時のことだ。何か、わざと私が新聞へ賣名的に書かせたやうに云ふ者が世の中にはある由、勞働者の言葉を使つて云へば、「笑はしやアがる」だ。辯解など「糞ウくらへ」だが、勞働に關係があるから一寸書く。

五月末日、工場から歸つてすぐ洗湯へ行つて戻ると、朝日新聞の記者が二人室にゐて、女房がコンロの火をおこしながら應接してゐる。私はびつくりしてしまつた。何でも、まる一日とか自動車で諸々方々探し廻つたあげく、細井君の寓所を突きとめ、巧みに同君を私のかくれ家まで案内させたとのことだ。とにかく、今度のことについて、いろいろ話してくれ、それを新聞へ書きたい、と云ふ。私はたつてことはつた。が、どうしてもきいてくれないので、歎願した。では、此の第一回勞働が濟むまで待つて欲しいと。

それでも承知してくれないので、ホンの少しばかり、向ふの質問に答へた。たゞし、自分の現在の變名や、會社名や、その所在地や寓所などは、一切變へて貰ふといふ約束のもとに。

この約束を、記者F君は實に立派に守つてくれた。なほ、あまり好意すぎる位な記事を書いてくれた。同君の人物に對しては、私は今でも大へん感謝してゐる。

が、記事はやつぱり私の迷惑になつた。隨分苦しい勞働をしてゐる最中にも、私はひとりひそかに「多年の望みつひに成る」。「天をも衝つる意氣もがな……。」と時々うたつてゐた。笑はないでくれたまへ。これは、昔一高時代におぼえた寮歌の一節なのだ。それが、十年ぶりで、思ひがけなく私の口へ浮んで來たのだ。

その張りと喜びが、一つには私をすべてに堪えさせた。なのに、そんな一片の新聞記事によつて、切角の實現の初めにもう滅茶苦茶になつてしまふのか、と、たまらなく情なく切なくなつた。

さいはひ、それは杞憂に終つた。が、記事が發表されると一緒に、早速私は工場長に呼ばれた。

やつぱり長年の知識階級の風丰は爭はれず、その前から職工長等は幾分疑つてゐたらしい。仲間の連中も、私を戯談半分に「おとツさん」だの、「校長」だの、「村長」だの、「旦那」だの、「若旦」だの、「落選議員」だのと綽名してゐた。最後の奴は、當時例の衆議院總選擧があつた爲めだ。（その後或る工場でも、「高等官三等」の異名を一度贈られたことがあつた。）それに、生憎私の名を借りてゐた知人が同姓だつた。

事務所の横の、奇麗な應接室へ私はとほされた。カアキイ服の工場長は、ひどく丁寧な口調で、强ゐて上席の椅子へ腰かけさせた。鐵錆とシャボン屑でべたべたによごれた勞働服のまんま、ボロボロの手袋へシャコ廻しをつかんだまんま、私はテーブルをへだてて對ひ合つた。まさに奇觀だつた。

工場長はまづ名刺を出してから、鄭重に、私が例の記事の當人ではないか、と訊く。私はさうではないと答へた。が、勿論承知しない。いろいろ質問して、もし私がさう云ふ人間なら、あんまりむさくるしい仕事なぞして貰ふことは遠慮し、その代り研究の方面では、何でも出來るだけの便宜を取り計らひたいから、どうか遠慮なく打ちあけてくれ、との頼みだ。丁度十一時すぎ時分呼ばれたが、十二時のベルが鳴つても出してくれない。腹はへる。時間はおそくなる。私はまゐつた。が、飽くまで異人だと頑張りとほした。死んでも云はない了簡だつた。で、さすがの工場長も我を折つて放免してくれた。

が、その後も職工長なぞ時々いろんなことを訊いた。例の「苛性」の大瀧の降つたあとのこと、私がうずくまつて、トロからこぼれた石鹸液の屑を拾つてゐると、

「あのなア××君！」

と、不意に頭のうへで聲がする。見あげると工場長が立つてゐる。

「こんなふうに危險も多いし、仕事も苦勞だからなあ……
……」。

「はア、はア」。

何を云はうとしてゐるかはすぐわかつたが、私はただおとなしく返事をして、俯いて石鹸屑を拾ひつづけた。工場長は云ひかけたものの、さて接穂に困つたらしい。とにかく、私は眞面目に順從にセッセと働いてゐる。これと云つて叱言を受けるやうなことは何一つしてゐない。そのうへ、自分でやめやうと云ひ出すけはひもない。

「いや、このシャボンは、これは二階へ送れば又生きかへりま

すからな——」。

そのまんま彼は去つてしまつた。

そんなふうで、とうとう私は六月末まで、その勞働にすつかり堪能するまで强情をとほした。

が、表面は何氣なくしながら、會社の方ではあらゆる探索の方法を取つた。私ばかりか、女房の寫眞までコツソリ撮る。そして、私の故郷の役場から何から、すつかり調べあげたらしい。國の町の警察から、私の父のところへ小さな寫眞を持つて訪ねたこともあるそうだ。又私の宿へ、組戸警察からも、巡査や高等係りがやつて來た。

そんなことを一々書いてはゐられないから略く。が、おしまひには、私が何者かは勿論すつかり會社は知つてゐたらしい。工場の仲間は、誰もそれとわかつた者はなかつたが。——これこそ私に取つて何よりの幸ひで、又有難いことだつた。——でも、肝腎の本人がどこまでもしらを切つてゐるので、會社の方は云はば痛し痒し、そのまま抛つておくよりほか仕方なかつたのだ。

そんな僞りを云つたことは、生れて初めての經驗だつた。工場長達に對しても一言詫びておく。自分でも癇を起して、もういつそ思ひ切つてやめて了はうか、面白くもない、と思つたことも度々だつた。又時々は、虛心平氣で働いてゐる仲間達を、しんから羨ましくて仕樣ないこともあつた。が、やつぱり辛抱した。それは、私にかなり大切な自信を與へてくれた。又、どうせいつまでも旅行中なぞと知人のあいだへ觸れておくわけにも行かないこと、反つて新聞に書かれて面倒が一切はぶけて、さつぱりとらくになつた點もあつた。

頑張つたと云へば、勞働でもかなり强情を張つた。

まるで意志力の、實地試驗にかけられた氣のする時もあつた。一體詩人が、是非こんな勞働をやる必要があるか、筋肉や體力が弱くたつて、立派な詩人たることに何の妨げもないぢやアないか、こんな野蠻な重い物を持つことが、詩と、そもそも何の關係があるか？……女々しくもそんなことを考へた時もあつた。あまりの苦しさに。

が、後になつて、一個の勞働者としての自信を獲た時のうれしさ。それは、實際の經驗のある者でなければわからない。

身體も非常な變化をした。腰が固く、頸が强く、腕が鋼かとばかり太く、もう三十を越してゐるのに、肩幅や胸幅までずつとひろがつたやうな氣がした。飯なぞ、自分ながらあきれるほど食へる。たとへば夜なぞ、天丼の大きな奴を一つ食べて、おと鯛燒きを十錢——と云へば餡のドツサリ入つたのが五つ來る

が、そいつをベロリと平げて、まだ腹一杯ではない。又無暗に咽喉がかわく。水のうまさ。いくらガブガブやつてもきりがない。

（少年工の時のそう云ふ勞働の爲めに、今胃擴張になつてゐる勞働者が澤山ある）。

氣も張つてゐるせいか、その後の勞働でも、勞働中身體をわるくしたことは一度もない。反つて家へ戻つて來ると、急に狀態が變るので、きつと一度は腹をわるくする。もつとも大したことはないが。――それでやつと身體が平調になる。

又、だんだん勞働の種類が變るので、使ふ筋肉なども一々變る。當分仕事に馴れるまで、又新しい苦痛を嘗めなければいけない。この「馴れる」と云ふことについて、私は今までまつたく考へつかなかつた新しい不思議さを知つた。それこそは、何と云ふおどろくべき世界の事實だらう。（例のコール、オブ、ゼ、ワイルド参照）

が、長くなりすぎる。ただ一言最後に書いておきたいのは、亀戸邊の土地の特殊さだ。

勞働のあいだ、定休の前日のゆふべ、雜司ケ谷の家へ戻らうと、隅田川の電車で越して來る時、――何日間電車にも乘らず、久しぶりに市內へ入つてゆく時の電車のなかの明るさよ。又市內へ入つてゆけばゆくほど、乘り込んで來る人間の奇麗さと、別世界的感じよ。それを私は永久に忘れないだらう。――モオタアボオトに女達と乘り組んで爆音けたたましく川波を切つて馳らせてゆく若い人間を見て、私は思はず傍の女房に怒鳴つた。

「その前に勞働して見ろ、一遍！一遍でも！」

おそらくその若者には、永久自分のやつてゐることがわからずに、――モオタアの氣もちさへ實は皆目わからずに、――済んでしまひはしないか？、それと同じやうに、いくら長いあいだ東京にゐても、一度亀戸の工場地帶へ足を踏み入れたこともない人間は、東京について語る資格を持たなくはないか？。

柳島の終點の橋を一歩渡れば、そこはもう全く別天地だ。いな、橋の中途で川のうへを覗いて見よ。そんな種類の川が、日本のどの外の場所にあるか。（これは細井君も證言してゐるところだ。）もつとも一本位なら、例の東京驛貫通の鐵道線路に添つた濠なぞも擧げられなくはない。が、亀戸邊のやうな、川と云ふ川、堀り割りと云ふ堀り割りが、悉くあんな景觀を呈してゐるところはあるまい。

それは水の色はしてゐない。くさつた紺靑とでも云へば一番いい。流れてなぞはゐない。泥のやうに澱んでゐる。その眞ツ

黒なおもてへ、絶えず一面ブツブツと穴があいて、臭氣、ごみ……。

一體が低地で、雨が降るとすぐ溝があふれて、途にくるぶし位まであがつて來ることは、さきに女房の日記から引抄しておいた。そのあがつて來るものは、この水なのだ。

空が煤煙だらけで、蕎麥屋のやくみさへ黒く染つてゐることも前に書いてある。白い洗濯物など干しておけば、みんな鼠色になる。ただゴロリと家のなかに寢てゐても、一日經てば鼻の穴が眞ツ黒になる。煤煙ばかりか、ボウやら機械の躁音やらで、空氣は飽和し切つてゐる。

この空と水とのあいだの地面のうへには、樹が實に尠い。植ゑても、碌々育たないのだ。從つて、緑色に對するあこがれの强さよ。愚かにも、私はそこに住んではじめて、人間に取つて如何に緑色の重大な價値を持つかを痛感した。毎月二十五日には、一口に香取樣と云はれる天神の縁日がひらかれる。その時の夜店と云つたら、まるで植木市見たいだ。あつちもこつちも、ただ植木、植木、植木、植木……然も割合小さな緑色の鉢物の。それをみん買つて歸つては、小さな借家の、又は借り部屋の前の、縁側や小窓に並べて、わづかに心をたのしませてゐるのだ。

例の定休日などに雜司ケ谷の方へ歸ると、第一に感じることは緑の樹だ。その多さ、色の濃さ、生々しさ、美しさ、大塚町の停留所で降りて、護國寺の方へ坂をくだつて來、又坂町をあがつてゆくと、その靜けさ、ゆツたりさ、空氣の清さ、冷たさ。……まるで箱根か何かの遊覽地へ行つたやうな感じだ。町家の灯さへ、土産物か何かの店にふさはしい。すくなくとも別莊地だ。こんなにまでちがつてゐるかと思つて、私はしみじみ嘆息すると同時に、今までそこにくらしてゐた自分が濟まなくなるのが、常だつた。

これだけで第一回の記録を打ち切る。

後事賴み置く事ども

—同志諸兄へ—

和田久太郎

妄執外の妄執

『何んだ、遺言だつて？』なぞと、讀まない先きから眼玉をむき出しちやいけない。そんなに『遺言！』などと御大層にいふ程のものぢやないんだから。

僕は此處へ來てから、たいくつまぎれに俳句をひねるやうになつた。歌も作つて見た。萬年筆と原稿用紙を差入れて貰つて、隨筆めいたものも書いて見た。ほんのちよつぴり親父の思ひ出も書けば、自分の略歴みたいなものも綴つて見た。此處彼處への友人へは、かなり頻繁に馬鹿文、與太手紙を飛ばせもした。そして、今後もやはり、裁判の大團圓が來るまでは同じやうなことを、ぐうたらな調子で續けて行くだらう。僕がいま此處に書かうとする『後事賴み置くことども』も、やはり同じ意味のものの連續——一片だと解してくれればいいんだ。

俳人芭蕉が臨終のときの句に、

旅に病んで夢は枯野をかけめぐる

といふのがある。彼は最後に近い苦しい息の下から此の句を吐き出すと共に、『ああ、如何に好める道とは言ひなが

ら、かくても猶ほ何を案ずるとは我ながら浅ましい妄執である……』と、歎息して淋しくほゝ笑んだといふことだ。

僕には勿論、強い妄執がある。さうだ、妄執がある。僕の全身的な戦ひは、單に理想の爲めばかりではない。それは理想の爲めであると同時に、復讐のためでもあるのだ。それは、正義の信念と憎惡との混合物なのだ。だから僕は、これを主義理想、正義の信念の力といはないで、敢て妄執といふのだ。が、いまは僕の此の妄執に就いて、遺言めいた、最後の雄叫びめいた、ことどもを書かうとしてゐるのではないのだ。僕は現在の社會が何う進化して行きつつあるかを知つてゐる。社會的正義の焔が如何に揚りつつあるかを知つてゐる。資本主義制度の運命が最早餘命の幾何もない事は明らかである。我等の運動は進みつつある。此の上に、今更ら獄中から砂粒に等しい蛇足の聲を附加する必要はない。『ぢや、何にを言ひ遺したいんだ?』つてかい。ハハハハハ、さう固くしやつちこばるなよ。先づ塩せんべいでも買つて來ないか。そして、茶を呑みながら、皆んなでがやがや笑ひさざめいて讀んでくれ。さういふ類ひの『遺言』なんだから——。

つまりこれは妄執の他……さうよ、雜念かな。しかし、雜念よりは少々意味が強いから、妄念……も幽靈のぐちめいて、ちと變だな。まあいゝや、其處のところ、いいやうに勝手に解釋して置いてくれ。芭蕉の言つたやうな意味でなら、やつぱりこれも妄執の一つだらうが、要するに、自ら歎息して淋しくほゝ笑んで居られる種類の妄執なのさ。

死體の處分

先づ、死體の處分から頼まう——。

僕の陳述した『死刑希望』を判事が賛成してくれるならば、九月下旬頃、桐の一葉の落つるのと共に僕は死體となる。僕は吉田君とは趣味が異つて、菊の花は氣高すぎて好かない。そこで桐の一葉と共に散ると、一とひねりひねつた閑寂を氣取るんだ。呵々。

が、若し不幸にしてクロポトキンの謂ゆる『ゆるゆるとの死刑』になつたならば、死期は何年かの後に伸びる。そして、死刑が病死に變る。つまり、遲かれ早やかれ、どの道諸君の御厄介にならねばならないのだ。ゆるゆるとの死刑になつたなら、生きて居られるだけはウジ蟲のやうな氣持ちで生きても居ようが、此の體がそんなに長持ちのしないことは、僕に確信がある。で、まあ、いまの中からこんな事も頼んで置かうかと思ひついたのだ。自分の死んでからの脫けがらについてまで兎やかうと空想するなんて、全く、歎息に價ひする妄執だね。然し、何んにしろ監獄の獨房といふ所は、諸君の充分に經驗のあるやうに、立派な事でも、美しい事でも、ゴミみたいな事でも、何んでもいいから止むときのない走馬燈のやうに、ぐるぐるぐるぐると考へて居ねばならぬやうにかり立てる所なんだからな。

明日にも死んだつていいと思ふ體でも、やつぱり生きてゐる間は腹も空く。いろいろと考へもする。だから、こんなことも書いて見る氣が起る。歎息。苦笑。

さて、僕が死體となつたなら、早速解剖に附して貰つて、醫學上の研究に使用して貰ふのも惡くないと思ふ。しかし僕は、帝大なんかで濟まし込んで天晴れ國手で御座いてな面付きをしながら、それ等の發達した醫術の恩惠に預るには餘りに貧乏である多くの人々に、無關心と冷笑とを浴びせつつある奴共の手では、何うも解剖されたくない氣持があるんだ。僕は科學を尊敬する。しかし、その恩惠を壟斷しつつある階級を憎むと同時に、彼等有産者階級にのみ忠誠なる御

用學者を憎む。

用學者を惜む。

そこで僕は、自分の死體解剖の如何は、僕の最も尊敬する三田醫院の奥山伸先生にお任せしたいと思ふ。否、お頼みしたいと思ふ。僕の死體解剖が、幸ひにして奥山さんの研究の上に一滴の貢獻たりともなし得るならば、僕は喜んで解剖をお願ひする。執刀者その人が奥山さんであるか否かは問題でない。それに依つて、奥山さんの御恩の萬分の一でも報ずる事が出來るならば、これに越した喜びはない。

後とは灰にしてくれ。若し奥山さんに役立たなかつたら、そのまゝ灰にしてくれ。

葬式、墓

謂ゆる葬式といふ奴は、要するに親しかつた知人が集つて、棺桶に入れる、燒場へ持つて行つて灰にしてくれればそれで本望だ。

僕はいま、渡邊の爺さんが死んだ時の光景が非常に心持ちよく眼に浮ぶ。あの朝は、棺桶をとりまいて皆んなで別れの革命歌を歌つた。二人の人夫を頼んで來てそれをかついで貰ひ、皆んなは棺桶を取り圍み革命歌を歌ひながら、三河島の燒場までくり込んだ。僕は袢纏一枚で、物干竿に赤旗をくりつけて先頭に歩いた。歸りは千住大橋まで船で歸つたが、船の中で大いに騒いで、久し振りに清遊をやらかしたやうに感じた。ああ、僕の時も、あんな風だと嬉しいがなあ——と思ふ。

墓なんか、決して作らないでくれ。尤も、こんな事を頼んで置く必要はないかも知れぬが、ハハハハハ、まあ念のためだ、頼んで置く。

九州の海岸にある、大杉夫妻の墓標石の何處かへでも小さく刻んで貰へばと思ふが、しかし、ほんの淡い望みにすぎないんだから、それもどうでもいゝ。

死灰の處分

死灰――即ち『骨』と稱するものだな。あれの捨て所に就いて、實は少しめんどうな希望があるんだ。おまけにそれはセンチメンタリズムを加味した處分法なんだが、聞いてくれ、あんまり冷かさずにね。

その以前、堺さん達ちが賣文社に立て籠つて、謂ゆる『萬年筆の先きに紙の旗をくつつけた小さい旗上げ』をする下準備として『へちまの花』と題するペラ〳〵雜誌を出したのは諸君も知つてゐるだらう。確かあの『へちまの花』の消息欄にあつた記事だと記憶するが、高畠素之君が愛兒を失つたとき、彼はその愛兒の骨を肥料としていくらかの鉢植の朝顏を作り、知人間に配つた、といふ話しが載つてゐた。僕はそれを讀んだ時、非常に趣味のある、面白いやり方だと思つて感心した。そして自分も死んだなら、骨なんかはこんな風に片附けて貰ひたいものだなあと、獨り考へた。

この事をいま思ひ出したのだ。で、厄介だらうが、僕の死灰も此の肥料方法で處分してくれまいか。あの世から一と花咲かせて見たいといふ、洒落つ氣さ。鉢は素燒の、四五錢の奴が面白い。しかし、これは忙しい勞働運動社の人々にはちと氣の毒だから、この仕事は一切、望月家の人々にお願ひしたいと思ふ。あの一家はこういふ事は好きだから、いろ〳〵考察してやつてくれるだらう。それ等の鉢植ものは『久さんの骨で咲かせたのなら面白からう、貰つてやらう』と言つてくれる人々にだけ分かつてくれ。

ところで、植える花だが、僕は最も平凡な草花を好む。樹や、灌木のやうに裸の幹を殘さないで、咲くだけ咲いたら

一年きりですつかり枯れて了ふか、根だけになつてしまふかして、來年また土の中からそつと赤や青や黄の芽を覗かせる、あの草花を望む、それも、成るべく野原なんかに咲く、極く平凡なるを好む。高島君が植えたといふ朝顔は、僕は餘り好きぢやない。

此處へ僕の好きな草花を少し書いて置かう。いまは野山の草花でないものも少しはあるが……。

▽春のものでは

れんげ草、土筆と杉菜、菫、えんどうの花、茅花。

▽夏のものでは

芥子の花、螢草、葵、晝顏、かたばみ花、つめきり草、鴨足草、矢車草、撫子。

▽秋のものでは

桔梗、りんどう（紫）、野菊、萩草、蓼の花、月見草、ほうづき、唐辛子（丸い實）、秋海棠、かまつか、まんじゆさけ（死人花）。

▽冬のものでは

水仙、石蕗の花、さふらん。

その他。いま思ひ出せないで好きなのが、まだ大いにあるやうに思ふ。だから、其の邊のところは、萬事望月家に頼むからいゝやうに選んでやつてくれ。

（一四、八、四）

遊歐雜記（一）

（一九二二、五——一九二三、一〇）

阿部次郎

歸來（一）——藝術の社會的地位に就いて

1

歐羅巴に於ける多くの國立美術館がさうであるやうに、パリのルーヴルも亦、一面から云へば、フランス帝國が幾代に亘る世界侵略の紀念である。而もそれはロンドンのブリテイシユ・ミウゼアムと並んで、その最も著しいものと云ふことが出來るであらう。このやうな成立の歴史を持つことは、ルーヴルにとつて名譽であるかないか、それは私が今玆に問はうとする問題ではない。ただ、その時代の意識から見れば、この掠奪は優者や先勝者の當然の權利として、著しい良心の咎なしに行はれ得たであらうといふことゝ、これほど厖大な蒐集をなすことによつて、美術品の散佚と湮滅とを防ぎ得たのは、フランスの世界侵略を通して持來された一つの有益な結果であつたといふことを考慮して、この存在を寛容すればそれで足りるであらう。征戰の結果に美術品の大蒐集が伴ふことは、戰勝者の側に於ける藝術欲求の强さを證明する、藝術に對する愛と尊重とがなければ、藝術品の掠奪といふ不正事も亦起り得ないであらう——私が玆に注意を喚起したいと思ふのは寧ろこの點にある。征戰と美術品の掠奪との相關は、固よりフランスに限つた現象ではな

く、支那に於ける六朝の戰亂や、西洋に於ける羅馬の希臘征服の昔から、ヱルサイユ條約の現代に至るまで、古今東西を通じてその例證を列擧することは極めて容易であるが、現にその大蒐集を目睹する便宜を持つてゐる點に於いて、而もその蒐集が大體から見て世界第一の質量を併せ有する點に於いて、吾々は、暫くその成立の歴史を問題外にして、特にこの美術館の存在に感謝するところがなければならぬ。

而もルーヴル所藏の美術品は、悉く掠奪によつてのみ此處に集つて來たのではない。掠奪行爲の根柢に横るフランス人の「藝術意志」は、更に他の方法によつても亦その蒐集を豐富にした。さうして正當な相續と購買とによる幾多の重寶の外に、熱心な蒐集家の個人的寄附が又これに重要な貢獻をなしてゐることは、吾々日本人の特に羨望に堪へぬところである。單にフランスの國家のみならず又その國民各自の蒐集欲を表現してゐる點に於いて、而もその蒐集欲の表現が國民の公財（ゲマイングート）として「寄附」されてゐる點に於いて、ルーヴルは正にフランス人の美術館である。これに反して、吾々の國に於いては、日本及び東洋藝術の代表的作品の如何に多くが、貴族若くは富豪の私財として、平民の眼の屆き難き倉庫中に死藏されてゐることであらう。吾々はただ國家の貧弱な美術館を有するのみで、未だ國民の美術館と稱すべきものを持つてゐないのである。私の見るところによれば、日本は、現在の世界に榮えてゐる諸國のうち、伊太利と佛蘭西とを除けば他に比肩すべきものがないほどの光榮ある藝術上の過去を持つ國であるのに、その日本が、美術館事業に於いては、あらゆる辯解を絶して後進國の位置に立つてゐることは、深甚の遺憾と云はなければならぬ。

固より歐羅巴の先進國に於いては――（斷つて置くが、私はあらゆる點に於いて歐米が日本の先進であると信ずる者では決してない、然るにこの場合、淺薄な西洋崇拜者の輩に習つて、私も亦「先進國」といふ言葉を使ふことを餘儀なくされるのは深い悲哀である）――歐羅巴の先進國に於いては、それ〴〵に「國民の」美術館を持つてゐる。さうして

その形成には單に國家の意志のみならず又國民各自の意志も具體的に參加してゐる。併しその意志表現の方法に於いて、ルーヴルは、此等の美術館のうちでも亦一種の特色を持つてゐると云つていいであらう。或美術館に於いては——例へば伊太利の多くの美術館のやうに——個人の蒐集が基礎となつて、それが國家の手に渡つて更に擴張增大される。或他の美術館に於いては——これは例を擧げるまでもないであらう——個人の寄附が大美術館中に攝取せられて、全體の中にその「個人的」存在を沒了する。又或國に於いては——例へばイギリスのやうに——國立の大美術館の外に幾多の個人的蒐集を基礎とする美術館が併存してゐる。然るにルーヴルの蒐集は個人的蒐集の手足を添加することによつて成長して來た。其處では、個人的蒐集が個人的蒐集として保存されながら、國立美術館の一部を構成してゐるのである。國立美術館の大屋臺の中に、個人的蒐集が個人的蒐集の特色をそのまゝに保持して存在してゐるのである。固よりこのやうな陳列法は、ルーヴルのやうに厖大を極むる面積を持つものにとつてのみ始めて可能である。さうして、美術館整理法としてこの遣り方が理想的であるかどうかについては、多くの議論の餘地があり得る。現にルーヴル自身、割合に價値の少い若干の小蒐集を引受けて、今更その場處塞げに困つてゐるやうなことがないかは疑問と云はなければならぬ。併し善きにせよ惡しきにせよ、兎に角に、このやうな陳列法がルーヴルの一特色をなしてゐることは拒み得ないであらう。かくて觀覽者の眼と心とに休養と變化とを與へ、最も良きものに於いては蒐集者の個性に特別の興味を感ぜしめるやうな、幾多の Collections が成立するのである。

私の今玆に語らうとするところも、ルーヴルに於ける此等のコレクションの一つによつて誘ひ出される。

千九百二十三年の七月、私は、獨逸を出て和蘭白耳義を經て再びパリにはひつた。其處の美術館で、前に見た目ぼしいものを見なほしたり、前に見のこして置いたものを見たりするのが私の主なる目的だつた。その月の二十七日の午後、私はルーヴルの大玄關をはひつて直ちに右に折れ、Galerie（ギャレリー） Mollein（モリヤン）を突當つて同じ名を負ふ階段（エスカリエ）を二階に上り、右折して佛蘭西初期の畫廊に入ると間もなく又三階に上る階段を踏んで Collection（コレクシオン） Camondo（キャモンド）に到達した。それは千九百十一年に死んだキャモンド伯の蒐集で、印象派の繪畫を以て有名なものである。さうしてこの蒐集には東洋藝術の遺品も亦相應にまじつてゐるのである。

未だ階段の中途にあつて、私の眼は既に壁にかけた支那畫にひきつけられた。階段を上りきつた小さい廊下には大きな座像佛が安置されてゐた。さうして其處から足を最初の室に踏み入れると、吾々の眼は四壁にかけた歌麿や寫樂等の浮世繪によつて涼しくされる。客遊既に一年半、故國の趣味と生活とに對する鄕愁を胸の奥に持つてゐる私に取つては、その微妙な色彩、その簡素な描線、そのほのかな靜かな氣分が、殆んど一種の救ひとして働きかけて來た。此處には色と線とに對する無量にデリケートな官能がある。此處には、日常生活の些事の中にも滲透して、戯れながらその味を吸ひ取りその美を掬び上げることの出來る藝術家のこゝろがある。凡そその素質のこまやかにその官能の豐かな點に於いて此等の畫家は、時代を等しくする歐羅巴の畫家の多くに比較しても決して遜色がないであらう。而も此等の浮世繪が特別の意味で民衆を代表し民衆に支持されてゐた藝術であることを思へば、此等の藝術を產んだ日本の民族も亦この誇を分つべき充分の資格を持つてゐるのである。一體に私は、故國を離れてから、他と比較することによつて益々祖國に對する自信の篤くなることを感じて來た。さうしてこの自信が此處でも亦更に確められるを得たことは、私の大なる喜びであつた。

實しこの喜びは、決して影のない光のみではなかつた。私の誇りは、その反面に於いて、羞恥に似た一種の感情に裏打せられることを、如何ともすることが出來なかつた。此等の畫家と彼等を生んだ民族とが、優れた素質と豊かな官能とを持つてゐることについては、少くとも私にとつては何の疑ひもない。併し彼等はこの素質と官能とを如何なる自覺と意志とを以て率ゐてゐるか。彼等の繪のうちに、その志すところの高さと、人生の第一義に參する者の自信とを搜し求めるとき、吾々は其處に何等か積極的に貫くものを發見することが出來るか。透徹するに先つて横に逸れた、小さい機智と皮肉との遊戯、一面に非難者の聲を豫想しつゝ一面もこれに戰兢することを禁じ得ざる、意識的な反抗的な好色――かういふものがその素質と官能との純眞を累して藝術の本流との疎隔を餘儀なくしてゐるやうなことはないか。特に最も悲むべきは、彼等がその畫技の意義と尊嚴とについて充分の自信を持ち得なかつたところにある。彼等が自ら自己の事業を卑下し、自分の仕事に就いて暗默の間に一種の「良心の不安（シュレヒテス・ゲヴィッセン）」を持つてゐたところにある。吾々は彼等から、「構ふものか」、「この道樂がやめられようか」といふやうな主張を聽くことは出來るであらう。道學も說教もこれを說破するを得ぬ「ぬきさしならず身に泌みる面白さ」の力を彼等の藝術中に看取することは出來るであらう。併し小さい反抗と辯疏とを離れた腹の底からの自信、道學的の意味を超脫した大なる「正しさ」の自覺――此等のものが彼等の藝術の根柢にあつたかどうかは極めて疑問である。自分の仕事に對する動きなき自信の缺乏は、彼等の藝術を小さくし、彼等の藝術から根本的の落付きを奪つてゐると云はれても、吾々はこれに抗辯する所以を知らないであらう。

この印象は、國を越えて佛蘭西印象派の室に踏み入るに從つて更に確められる。其處には私の平生敬愛するセザンヌやゴーホのもの二三の外に、私が外遊後實物を見ることによつて始めてその眞價値を知つたとも云ふべきコロー（特にその人物）マネー等の作も相應にあるが、この場合特に比較に持ち來されるものはドガの諸作である。ドガが日本の浮

世評家のやうに微妙な垢ぬけのした感覺（特に色彩感覺）を持つてゐたか、彼の舞妓の繪は浮世繪の遊女や美人のやうに透徹した味を持つてゐるか、此等の點に於いて、若し後者を揚げて前者をその下に置く者があつても、私はこれを不思議とはしないであらう。併しドガの繪は浮世繪の多くのもののやうな他念——若くは邪念がない。彼は良心の不安や「士流」の非難に對する反抗なしに、餘念なくその對象との「對話」に沒頭する。自分の仕事の意義に對する積極的な「自覺」が、彼の繪の中に現されてゐるかどうか、縱令この點については疑問があつても、兎に角彼はその自信を脅す魔を持つてゐない。心を專らにして、欣々としてその仕事を追求してゐる點に於いて、彼の An sich の自信は聊かも紊されるところがないのである。如何に逆說めいて響くにもせよ、浮世繪はドガの舞妓の繪に較べて遙かに傾向的（テンデンチエース）である、換言すれば好色の說教を含んでゐる。更に逆說を推し進めることを許されるならば、傾向的な傾向に於いては浮世繪は——その傾向の內容に天地の差異あることは云ふまでもないが——ミレーとの間により多くの親緣を持つとも云ひ得るであらう。而もその說教がミレーと異る「良心の不安」を背景とするが故に、如何なる長所を以てするも結極「日陰の藝術」に近いことを如何ともなし得ないのである。

然らば十八世紀の浮世繪と十九世紀の佛蘭西印象派との間に此の如き相違を持來したものは何であるか——これは德川時代の藝術を理解せむとする者が、誰でも一度は問はずにゐられぬ問題である。

3

千九百二十二年七月廿八日、ベルリンに著いて間もなくのことである。私は大使館のY君の私宅で端唄の「薄墨」のレコードを聽いた。その夏はベルリンでは寒い雨勝な夏であつた。獨逸の困窮と不安とは未だ馴れぬ旅ごゝろを特に寂

しく落付かぬものとした。さうしてこの不安ながた〳〵した町の中で故國のしめかやな哀音を耳にするのは、何とも云へない心持であつた。この言葉少なな、溢れ出る感情を抑へに抑へた、咽び音のやうに幽かな魂の訴へは、歐羅巴のカフエーと其處でダンスにつれて奏せられる騷々しい音樂に比較して、何といふ深淵によつて隔てられてゐることであらう。此の如き音樂を伴奏とする日本の好色は、キッテンベルガ・ストラーセの邊で吾々を擁する夜鷹の群と——ブラインドをおろした密室で裸踊のはてに行はれるといふ現代歐羅巴の好色と——何といふ悲しい懸絶であらう。私は三千里の外にゐて日本流の哀歌に對するあこがれに堪えなかつた。さうして遂に日本にゐる遊仲間と、彼と共に子供の時分から御座敷で逢ひ馴れてゐる歌妓とに葉書を書くといふ誘惑に打勝つことが出來なかつた。

4

ミュンヒエンは私の未見の「師」リップスが、その生涯の最後の二十年を送つたなつかしい土地である。彼の遺族を其處にたづねて、彼に對する死後の感謝を致すことは、日本を發つときからの私の念願であつた。千九百二十三年の春、私は遺族の消息をたづねるために、故人の弟子で當時其處の大學の教授をしてゐたモーリッツ・ガイガーとの文通を始めた。さうして伊太利から獨逸への歸途、六月一日から九日までミュンヒエンに滯在してゐるうち、殆んど毎日この人と逢つてゐた。音樂美學に關する一二の論文を書いた若い美學者フーバーとも其處で面識が出來た。

フーバーは日本の音樂をききたいものだと云つてゐた。私も亦彼にこれを聽かせてその批評をきいて見たいと思つたが、遂にこれをする機會を得なかつた。ガイガーはアメリカの伯父を訪問したとき、其處で日本の總理大臣T氏の令嬢に日本の音樂をきかせて貰つたと云つてゐた。その時彼の受けた印象はどうであつたか。彼は Kolossal Elegend（極

めて歎きの深い）といふ要領を得た二語にその印象を要約した。吾々の音樂の瀏息と深い歎きとは、敎養のある歐羅巴人の魂にも亦直ちに通ずるところがあるのである。

日本の音樂が必ずしも吾々の間にのみ通ずる地方的音樂でないことを發見したのは、私の深い喜びであつた。

5

千九百二十三年九月、東京の大震災の後十日、未だ何の消息もない家族の運命に對する不安を抱きながら、私は加茂丸といふ小さい客船に乘つてマルセーユから歸國の途に就いた。當時日本に對するセンテイメンタルな愛の極めて昂進してゐた私も、多くの日本人の顏を見ると一寸不思議を感ずるぐらゐに歐羅巴化してゐた。さればと云つて東洋行の英吉利人の中には、歐羅巴人の顏の美しさを代表するやうな男女がゐるわけもなかつた。同船の英吉利人は、往航の場合と等しく復航にも亦私の心を暗くした。この航海に於いて割合に親しく自分と話をしたのは、一人離れて日本に關する佛蘭西語の本を耽讀してゐた一伊太利人――一見すればソヴエート・ロシアの共產黨員らしい顏をしてゐながら、その實ムツソリーニやダンヌンチオの旗下に屬してゐる男で、今度橫濱で橫死した領事の代りに日本に赴任するといふ、ミラノのアカデミアの敎授――のみであつた。彼は武骨ではあるが眞率であつた。さうして新しく赴任する日本の文化が最も多く彼の心をひいてゐるやうに見えた。彼は日本の音樂を聽きたいと云つた。さうして私は又日本の音樂に對する外國人の批評を耳にし（若くは眼に見る）機會を得たのである。

人も知る如く、日本の客船には皆蓄音機を具へてゐる。併しそれは單調にして無趣味な現代米國式ダンスの曲に使はれるのみで、船客の音樂的要求を充すに極めて緣の遠いものであることは云ふまでもないであらう。私はデッキ　スチ

ウワードに日本のレコードがないかをたづねた。この間に應じて彼が出してくれたものは、もう散々に痛んだ十數枚の俗曲落語の類であつた。私はそのうちから清元の十六夜清心を選んだ。さうして多少の説明を與へたあとで彼にこれをきかせた。

私はこれをきくときの彼のポーズを今でも忘れることが出來ない。彼は下を向いて膝の上に肱を支へ、肱の上に顔を支へた（たとへばロダンの「考へる人」のやうに、若くはミケランジエロのエレミヤのやうに）。さうしてそれでなくとも陰鬱な顔を一層陰鬱にして、最後までじつとしてきいてゐた、曲がをへたときに、彼は搾り出すやうに Schön, sehr schön といつた（私は彼と獨乙語で話をしてゐたのである）。これが御世辭でないことは、彼が御世辭には最も遠い種類の人間であることを考へれば、直ちに首肯することが出來る。恐らく此處でも亦、この伊太利人は吾々の音樂の「哀愁」に心を摑まれたのである。吾々の音樂は此處でも亦その憂鬱によつて「直ちに人心を指した」のである。私はこの Schön, sehr schön が Kolossal Klagend の同義語であることを疑ふことが出來ない。

歐羅巴にゐて未だ大地震の報に接せずにゐるあひだ、日本に歸つて折しも顔見世の芝居を見、なにがしの邦樂會に行つて久しぶりに三味線の冴えた音をきくことは、郷愁を慰むるための私の白日の夢であつた。併し震災後五十日にして東京に歸つた自分には固より此のやうな享樂の機會は絶對に與へられなかつた。私はせめてもの代償を又蓄音機に求めた。例へば松尾大夫の吉田屋の如きは私の最も聽かむと欲する音樂であつた。生憎このレコードも亦求めて得られぬ戀に過ぎなかつたが、併し私は端唄や清元や新内の「明烏」のやうなものを買ひ求めて、暫くの間これに聽き耽つてゐた。さうして、悲しいかな、私は此處でも亦日本音樂の「限界」に觸れることを餘儀なくされたのである。

然らばその限界とは何であるか。それは Fiat lux（光をつくる力）を缺くことである。繰返し／＼これ等の音樂をきいてゐるうちに、私の心は陰鬱に、ひたすらに陰鬱になるのみであつた。私の心は底なき穴の中にひきずり込まれて

行くことを感じた。さうしてその無底の洞穴を充すものは、はてしなき憂愁の響のみであつた。無限の哀音は平凡を絶して黎明の中を流れる。私はこの「絶望」の聲の中にゐるに堪へなくなつて、再びベートーヹンやバッハの音樂に救ひを求めた。

德川時代に發達した日本の音樂は――三味線音樂は、何故に此の如き絶望の音樂となつたか。

6

私は更に一例を附加する。日本をたつとき、私は土産にするために複刻の歌麿浮世畫集を持つて行つた。千九百二十二年の八月、ハイデルベルクの下宿に落付いたとき、私は日本好きの其處の夫人に、この畫集中彼女自身の選んだ四五葉を送つた。さうして自分は鏡台二美人圖（上村屋版、橋口五葉氏の說に從へば寛政七年頃の作であるらしい）をかけて置いた。前向きに鏡に向つて、赤い櫛を持つて前髪との境をかきわけようとしてゐる、縱横濃黄絡の女は、暫くの間その麗柔な姿勢と顔とを以て私の心を和かにして吳れた。併し時を經るに從つて、そのしどけなくとけかかつた帶下や、赤い蹴出しを洩れる膝などが私の心をかき亂すやうになつて來た。私は五月蠅くなつてこれをとり外してしまつた。さうすると一日夫人が私の部屋にやつて來たとき、それに氣がついたと見えて、貴方はウタマーロを何處にやつたのですかときいた。私は、それは Erhebend（高めるもの）でなくていやになつたから取外してしまつたのです。と答へると、彼女は獨逸流の率直を以て、ではなぜそんなものを私に下すつたのですと反問した。「それは Erhebend ではないが Anmutend です、それでいゝぢやありませんか」――これが私の答へであつた。さうして私は今でもこれを洒脫だとは思つてゐないのである。

此等の藝術が人の心を高めること少くして而もこれを樂ましめることの多いのは何故であるか。人を Anmuten する點に於いて極めて長所を持つてゐながらこれを Erheben する力を缺くやうな藝術は如何なる地盤から來れて來たか――これが歐羅巴から私の持つて歸つた問題の一つである。

童馬山房雜歌

齋藤茂吉

1 閑居吟 其の一

なにがなし心おそれて居たりけり雨にしぬれる疊のうへに

烟草(たばこ)をやめてよりはや五年(いつとせ)になりぬらむ折々(をりをり)はかくおもふことあり

言にいでて強く悔いむとはおもはねどさびしき心いやたへがたし

Münchenにわれ居りしとき夜ふけて陰の白毛を切りて棄てしか

梅の實のころ清しさやわが身にははや衰ふるけはひこそすれ

ただ一つ生きのこり居る牡雞に牝雞ひとつ買ひしさびしさ

庭すみに竈つくれり燒辭書も燒人形も燃やしてしまへ

さ夜ふけゆきて朱硯に蚊がひとつとまりて居るもこゝろがなしも

さみだれて疊のうへにふく黴を寂しと言はな足に踏みつつ

午前二時ごろにてもありつらむ何か清清しき夢を見てゐし

2 閑居吟　其の二

をさなごの熱いでて居る枕べにありし櫻桃を取り去らしめし

さみだれも晴間といへば燒けし書つらなめ干せりあはれがりつつ

窓したを兵幾隊も過ぐるなり足並の音をしまし聞き居り

わがこころ呆けしごとしと人みるらむか雷こそ鳴れ玻璃窓ひびきて

夜ふけてみじかきこゑを立てて啼く鳥こそ過ぐれ我が窓のべを

あつぐるしき日にこもりつつ居たりけり黒きダリアの花も身に沁む

四五日まへに買ひてあたへし牝雞が居なくなれりといふこゑのする

燒あとに迫りしげれる草むらにきのふもけふも雨は降りつつ

Thanatos といふ文字見つけむと今日一日燒けただれたる書をいぢれり

今日の日もゆふぐれさまとおもふとき首をたれて我は居りにき

3 逢坂山

春逝きし逢坂山の白き路きのふもけふもひたに乾ける

ひるがへる萌黄わか葉や逝く春のひかりかなしき逢坂を越ゆ

砂けむりあがるを見つつ午すぎし逢坂山をくだり來にけり

逢坂をわが越えくれば笹の葉も虎杖もしろく塵かむり居り

あふさかの關の清水ははしり出の水さへもなし砂ぞかわける

逢坂の山のふもとに地卵を賣るとふ家も年ふりて居り

その家に雞の糞をも賣るといふ張紙ありてうらさびしかり

蟬丸の社にたどりつきしとき新聞紙を敷きてやすらふ

春ふけし逢坂山ののぼりぐち生ふるあらくさに塵かかりけり

逢坂山の道のべにながれけむ砂のかわけるを吾は踏みつつ

4 沙羅雙樹花

いにしへも今のうつつも悲しくて沙羅雙樹のはな散りにけるかも

あかつきに咲きそめたるがゆふぐれてはや散りがたの沙羅雙樹の花

いとまなき現身なれどゆふぐれて沙羅雙樹の花を見にぞわが來し

白たへの沙羅の木の花くもり日のしづかなる庭に散りしきにけり

命をはりて穉き兒らもうづまりしみ寺の庭の沙羅雙樹のはな

白妙の淡き花こそ散りにけれいまだ丈ひくき沙羅の木のもと

くるしみにこらふる人もおのづから沙羅の木のもとに來りけるかも

ゆふぐれのをぐらき土(つち)にほのかにて沙羅の木の花散りもこそすれ

あはれなる花を見むとて來りけり一もと立てる沙羅雙樹の花

うつそみの人のいのちのかなしとぞ沙羅の木の花ちりにけるかも

5　木曾福島

あが心(こころ)かたじけなさに木曾(きそ)がはの鳴瀬(なるせ)聞きつつ二夜(ふたよ)寢にけり

こころ細(ほそ)りしにやあらむ山(やま)にして漆(うるし)の芽(め)さへかなしきものを

闇鳥の佛法僧鳥の呼ぶこゑをまなこつむりて我は聞きたり

木曾の夜くだちに佛法僧といふさびしき鳥を聞きそめにけり

山のべにかすかに咲ける木苺の花に現身の指はさやらふ

くれなゐの炎にもゆる山火事の話しながら木曾谷ゆけり

樹の根がたの土にこもれる蟻地獄あはれ幽けしとこそおもひしか

6 木曾山中 其の一

あはれとぞ聲をあげたる雪照りて茂山のひまに見えしたまゆら

みちわたる夏のひかりとなりにけり木曾路の山に雲ぞひそめる

おくやまの岩垣ぶちを小舟にて人ぞ渡らふ木曾路かなしも

かなしかる願をもちて人あゆむ黒澤口の道のほそさよ

ここにして雪をかかむる奥山はおりゐしづめる雲のかげなる

くろずめる山は幾重もたたなはり見えがくれする山ぞ戀しさ

しげ山の日かげるうへにあらはれし雪はだらなる山は何やま

赤彦はわれに語らふ昨の夜は燕嶽の夢みて居たりとふ

あまねくもわたらふ夏とたたなはる茂山のかげに雲しづむ見ゆ

旅を來て大瀧川のさざれには馬の遊ぶをけふ見つるかも

奥木曾へ汽車こそ走れ御嶽の雪のかがやきをもろともに見つ

あしびきの山澤びとの家居よりをさなごひとり出でて來れり

椹樹のしげき樹の間を通り來てこころ明るし羊齒のむらだち

山がはの鳴瀬に近くかすかなる胡頽子の花こそ咲きてこぼるれ

木曾谷は行くべかりけりふかぶかと山膚くろくなりにけるかも

7 木曾鞍馬渓

こもり波あをきがうへにうたかたの消えがてにして行くはさびしゑ

ふかぶかと青ぎるみづにいつしかも雨の降り居るはあはれなるかも

鶺鴒のあそべる見れば岩淵にほしいままにして隠ろふもあり

岩のまのみづのこもりに細き雨ふりて波よるときのまを見し

青淵に蛙ひとつがいづこゆかぱたりと落ちてしづごころなし

おく山の淵に來しかば水のへに浮きてたゆたふ水沫を見たり

頬白は淵のそがひの春の樹の秀にうち羽ぶり啼きたるらしも

青淵に石おち入りしときのまのとどろく水をなぐさみがたし

山がはのあふれみなぎる音にこそかなしき音は聞くべかりけれ

こもり淵たたへがうへの岩の秀に赤蜂の巣はかかりけるかも

8　木曾山中　其の二

やまがひのすでに黝ずむしげり生に枯れし木立を見すぐしかねつ

しげ山に枯れし木群は雷のひびきて落ちしあとと云ふはや

夏山のしげりがおくに一ところ枯れ果て居るをわれは目守れり

奥木曾のかぐろくしげる山なかに枯れし木群を見ればかなしも

繁山のしげりのなかに枯れたるは雷の火に枯れしとを聞け

春ぐさの黄いろき花を摘みしときその花恐れよといへば棄てつる

畦畔居に今はくぐもり鳴く蛙ゆふさりくれば多く鳴くらむ

9 木曾氷が瀬 其の一

やまこえて細谷川に住むといふ魚を食ふらむ旅のやどりに

ふかやまのはざまの陰におちたまり栗のいがこそあはれなりけれ

栗のいが谷まのそこにおち居れば夏さりくれどしめりぬるかも

羚羊の皮の腰皮さげながら木曾の山びと山くだる見ゆ

のぼりゆく谷水のうへを蝶ひとつ飛べるもさびし山は遠くて

峽間路をとほく入りしか山かげに焚火のあとがありにけるかも

黑くなりて焚火せるあとの殘れるをしばし見てゐしが我は急げり

人戀ひて來しとおもふなあかねさす眞日くれてより山がはのおと

櫟若葉ひねもす風にうごきたる山のゆふぐれ人怒り居り

山路來て通草の花のくろぐろとかなしきものをなどか我がせむ

10 木曾氷が瀬 其の二

細谷のすがしきみづに魚の命とりたりと思ひつつ寝し

山水にねもごろあそび居りぬらむ魚のいのちを死なしめにけり

慈悲心鳥ひとつ啼くゆゑ起きいでてあはれとぞおもふその啼くこゑを

あかねさす晝のひかりに啼かぬ鳥慈悲心鳥を山なかに聞け

木曾山に夜は更けつつ湯を浴むと木の香身に沁む湯あみ處に居し

初夏の山の夜にして湯に沾でし太き蕨も食しにけるかも

さ夜ふけて慈悲心鳥のこゑきけば光にむかふこゑならなくに

啼くこゑはみじかけれどもひとむきに迫るがごとし十一鳥のこゑ

二ごゑに呼ばふ鳥がね聞こえつつ川の鳴瀬の耳に入り來も

ぬばたまの夜の山よりひびきくる慈悲心鳥をめざめて聞かな

まぢかくの山より一夜きこえ來し慈悲心鳥は山うつりせず

ほがらかにこゑは啼かねど十一鳥のおもひつめたるこゑのかなしさ

夜半に起きて聞きつつ居れば十一鳥は川の向うの一處に啼く

なくこゑの稍にけどほくなりたるは山移して啼くにやあらむ

木曾やまの春くれゆきし木末には闇に戀しき鳥啼きにけり

夜ふけて慈悲心鳥の啼くきけばまどかに足らふ心ともなし

あはれなるこゑに啼きつつ木曾山の慈悲心鳥はあかつきに啼く

夜ふけし山かげにして啼くらしき佛法僧鳥のこゑのかそけさ

11 木曾氷が瀬　其の三

すがすがし谿のながれに生れたる魚をとりて食ふあはれさよ

おぎなぐさ小きみれば木曾山にしみ入るひかり寂しとおもふ

白頭翁ここにひともとあな哀し蕾ぞ見ゆれ山のべにして

山かげのながれのみづを塞きとどめ今ぞ魚とる汗かきながら

魚とると細谷川のほそみづにいさごながれてしましにごりぬ

谷あひをながるる川の水乾るとさざれに潛む黒き魚あはれ

瀬と淵とこもごもあれど日の光あかきところに魚は居なくに

塞き止めて細きながれのにごるときはやも衰ふる魚ぞ哀しき

ほがらかにあしたの鳥の啼けるとき慈悲心鳥はつひに啼かずも

あしびきの山よりいづるやまがはの石はあらはに日に溫み居り

石楠は木曾奥谷ににほへどもそのくれなゐを人見つらむか

さるをがせ長きを見れば五百重なす山の峠も越えにけらしも

たまゆらはいのち和まむやまがはに温き砂を手につかみ居り

ひかり染む山ふかくして咲きにけり石楠の花いはかがみのはな

白雲は直ぐ目のまへをうごきつつ夏にい向ふ空晴るるらし

ここにして寂しき山に雨合羽かけられし馬いななきにけり

慈悲心鳥すでに啼かざる朝山に峠を越ゆる馬が憩へり

12 閑居の時 其の三

焼あとに草はしげりて蟲が音のきこゆる宵となりにけるかも

極楽へゆきたくなりぬ額よりしたたる汗をふきあへなくに

ひさびさに銀座あるきてうらわかき夜の女を見ればすがしも

戀にこがれて死なむとすらむをとめごもここの通に居るにやあらむ

尋常のごとくわれはおもへり猫蛾が猫おちて畳まよひありくを

焼死にし屍をおくるとゆふぐれて庭にひくく火を焚きにけり

まじろがず吾は目守れり二形になり果てたりといへる少男を

吾つひに蕃茄汁をくひて滿ち足らふ外面に雨のしぶき降るとき

ひぐらしは墓地の森より鳴きそめてけふのゆふぐれわが身にぞ沁む

ひぐらしの心がなしくひびくこゑ五年ぶりに聞きて我が居り

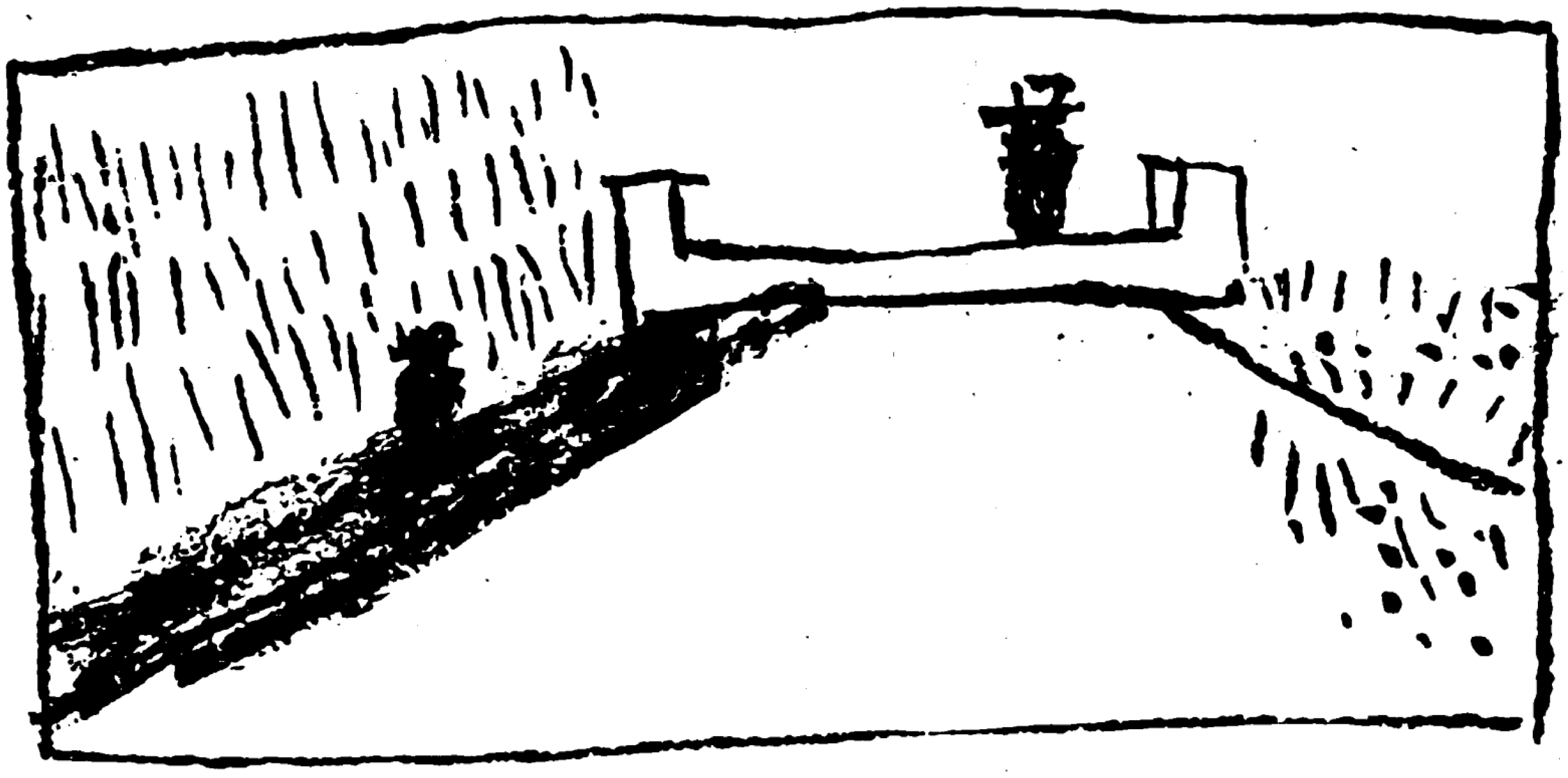
かたづかぬ爲事いくつか手にもちて比叡のやまに旅だたむとす

偶像の黄昏などといふ詞も今ぞかなしくおもほゆるかも

馬追のすがしきこゑはこのゆふべかはりはてたる庭よりきこゆ

――大正十四年五月・六月・七月作――

秋期特別號創作



或る警察署長の死

倉田百三

人物

岩田英太郎　元安橋警察署長

同　とし子　その妻

同　弘　その息　大學生

佐倉勝三　巡査

同　いそ　その妻

近子　罹災した婦人

警部。部長。巡査數名。勞働者達。靑年達。

借地人總代。風鈴賣。市民の群衆

小間使。女の兒。猿まわしその他。

處

或る首都。

第一場岩田署長宅　第二場元安橋畔

第三場被服廠跡　第四場納骨堂前

時

現代

第一場

岩田英太郎の宅　貧民窟に近き或る裏街に面した質素な二階建の家。部屋から街の一角が見える。僅かばかりな庭。二階は弘の勉強部屋になつてゐる。物干竿とポンプ井戸。庭には木で縁をとつた、小さな花壇にダーリヤ少しと茄があり、一部分は耕されて野菜が植えてある。垣は隣りの佐倉巡査の小さな家と共通になつて居り、互いの家の庭が見透かされる。隣りの庭の物干竿にはシャツやおしめが干してある。八月末の曇つた夕方。とし子、ジョロで花壇に水を撒き乍ら、隣りのポンプ井戸で米を磨いで居る佐倉巡査の妻おいそと話してゐる。おいそは少しおつくりをして丸髷に結つて居る。

とし子。大へん蒸しますね。

おいそ。一とふり來るといゝのですが。（空を仰ぐ）

とし子。赤ちやんはいかゞですか。

おいそ。おかげさまで蟲も大分をさまりまして……一時は夜ちう寢さゝないもんですから。

とし子。なか／＼大變ですね……佐倉さんは……まだ？

おいそ。はい……——もう歸るでせう。昨夜は宿直でかへりませんでした……旦那様もまだ……

とし子。はい。此の頃は何だか面倒な事件があつて署の方が忙しいさうですから……でももう歸へる時分です。若しかすると御一緒かも知れませんね。

おいそ。(少しいそ〳〵する風が見える。)かへるまでにちやんとして置かなくつちや……(米をとぐ。始終きゝ耳を立ててゐる。)

とし子。赤ちやんが泣いてますね。

おいそ。少しはかまひませんわ。ほつて置いたつて。ゆうべはさびしかつた……(笑ひながら)泥棒の心配だけはないけれど。

とし子。(笑ふ。)でもうつかりしたのが飛び込んで來るかも知れませんね。

おいそ。やつて來たつて何も持つて行くものはありませんわ。簞笥一本も……

とし子。あなたはいつも感心にちやんとしていらつしやいますことね。

おいそ。(少し赤くなる。)やりくりばかし………

とし子。私なんかもせい〳〵染め直しですよ。…………でも心がけ一つでね。

おいそ。たくのやうに素寒貧でもきれいにしろと申しますからね。ほゝゝ。(ポンプを使ふ。)あら、ポンプが………

とし子。動きませんか。

おいそ。何かつゝかゝつたんでせう。

とし子。お待ちなさい。(二階に向つて叫ぶ。)弘や、弘や。

弘。(二階からてすりにのぞく。青い神經質な顏眉宇の間に烈しい氣象が見える。)何ですか。

とし子。一寸。おいそさんとこのポンプが動かないんだがね。一寸見てあげておくれ。

弘。(引つ込む。やがて庭へ下りて來る。無言のまゝ小さな柴折戸を通つて隣りに行き、ポンプを色々動かして見る。水が出る。)

おいそ。なほりました。どうもありがたう。(桶の米に水をかける。)

とし子。(家に入る。)

弘。(沈默のまゝ立つておいその米を磨ぐのを見て居る。)

(赤ん坊のかん高い泣き聲)

おいそ。(眉をひそめる。)はい。今行きますよ。今………

弘。(ぶつきら棒に)僕が米を磨いであげませう。

おいそ。(少し硬く)いゝえ。結構です。………もう濟みました。(桶をかゝへて退場。)

弘。(一瞬間手持無沙汰に立つて居る。やがて家の庭にかへり、花壇の側にころがつて居る雨ざらしになつた木の椅子に腰を下ろす。考へ込む。)

おいそ。(出て來る。垣根の竹に干してある赤い鼻緒のかゝつた漆ぬりの下駄をとる。)こんなところへかけて………(家へ入る。)

弘。(淋しそうに庭を歩く。)

とし子。(出て來る。)お前お湯には入らないかい。さきに………お父さんは少しおそくなるかも知れないから。

弘。僕はは入りませんからそれよりすぐ飯にして下さい。
とし子。だつてお前がわかしてくれたんだのに。それにお夕飯は皆と一緒にしたらどう。
弘。僕はこれから夜學に行かなくちやなりませんから。
とし子。夜學に？
弘。夜學に敎へに行く事になつたんです。
とし子。さうかい。家庭敎師だけぢや足りないかね。
弘。家庭敎師は止めました。夜學では一文も貰ふんぢやありません。
とし子。（おどろいて弘の顔を見る。）
弘。立派な學校へ行つてるなまけものを敎へるのはいやになりました。一方ではかせぎのために學校へも行けないものがゴロ〳〵して居るのに。
とし子。それはさうだらうが――
弘。一人に一人の敎師がつくなんか贅澤な話だ。夜學では先生が足りなくて困つてるんだ。
とし子。それでお前どうするの。學資の方は。
弘。學校は止めました。
とし子。學校を止める？
弘。斷然止めることにしました。
とし子。どうして？今になつて、お前。それぢや今までの苦心が無駄になつてしまうぢやないか。

弘。止すのが當然と思ひます。廿三にもなつて、人間の義務をはたさずに居る、何億といふ人がパンに困つて居るときに………

とし子。でもお前は自分で働いて學資をつくつたんぢやないか。

弘。(自ら嘲るやうに)兩親に口をあづけて、ブルジョアののらくら坊ちやんの御用をつとめて……

とし子。さうお云ひだけれどお前くらゐやればね。後一年のことぢやないか。

弘。どうも僕の氣がをさまりませんから。

とし子。よく考へてからにおしよ。大きなことなんだから。實はわたしずい分樂しみにして卒業を待つて居たんだよ。學資もしてやらずに何だけれど……

弘。僕も色々口實をつくつて延ばして來たんですが、やはりごまかしに過ぎないと思ひます。

とし子。お前のことだからわけがあることに相違ない。私なんか何と云つたつてはじまらない。たゞお父さんにはよく相談してお許しを得てからにしておくれよ。

弘。(一寸額に皺をよせて考へて)ぢや、さうしませう。

とし子。さうしておくれ。もうおかへりになるだらう。(間)夜學は何處なの。

弘。××の貧民窟です。今度僕たちで初めるんです。その下相談で今晩同志と——

とし子。同志と?(何か考へて)お前のお友達は學生の人ばかりぢやないやうだね。

弘。色んな人が居ます。職工も、人夫も、朝鮮人も……

とし子。女の人も居るやうだね。

弘。えゝ。どんなものでも居ますよ。たゞ金持ちが居ないだけです。

とし子。ふむ。（考へる。）何だかみんな落ちつきの悪さうな人たちぢやないか。

弘。興奮してますからね。みんな。

とし子。（躊躇して後）實はお前があるバーで變な人たちと騒いでゐたのを見たと云つて、注意してくれた人があるんだが。

弘。誰ですか。佐倉君でせう。

とし子。その人のためにまあいふまいよ。

弘。同志と場末のバーにゐる所を佐倉さんが通りかゝりましたからね。みんな議論して興奮して、中には酔つぱらつたものもゐました。僕は酒も煙草もやりませんが。皆の自由をやかましく云ひたくありませんからね。

とし子。ずい分亂暴な口を利く人ばかりだといふぢやないか。

弘。上品といふ事に反感を持つて居ますからね。

とし子。友達を氣をつけろといふ事だつたが……

弘。はゝゝゝ。佐倉君は善い人だが、迚も僕たちの自由な生活の空氣は解りつこないからね。

おいそ。（赤ん坊を背負つて垣の外にあらはれる）一寸マーケットに買物に行つてまいりますから。どうか……

とし子。ようござんす。

おいそ。（退場）

とし子。とにかく氣をつけておくれよ。私たちにはどうもお前たちのやり方はわからないところがある。

弘。それが階級意識のしきたりですよ。もつとへだてなく人間同志はつきあへばいゝんです。
とし子。だけどみだりがましくなつてはね。(間)では御飯にしやう。
弘。僕は一寸お隣りの留守居をしてあげませう。仕度が出來たら呼んで下さい。

(とし子は臺所に弘は隣りに退場。)

(間。)

(岩田英太郎と佐倉巡査話しながら街の方から垣根について歸つて來る。)

英太郎。なに？ そんな事はない。誰がそんなことを言つたかね。
佐倉。弘君が云ひました。
英太郎。弘が？
佐倉。はい。人間は絕對に自由だ。戀愛は個人の權利で、相手が他人の妻だつて、それを拒む權利は誰れにもないつて。
英太郎。馬鹿な！それぢや自分の女房に他人が手を出しても亭主は文句は云へないことになる。
佐倉。さうです。振ると否とは女房の自由であつても、亭主が第三者を拒む權利はないと云うんです。
英太郎。出來損ねの個人主義だ。彼奴の云ふことなど取りあげないでくれ給へ。實に亂暴なはなしだ。
佐倉。弘君は正直ですからな。
英太郎。考へが一本調子だ。まだものがわからない。(沈默。何か考へて急に非常に不安な表情になる。)君に迷惑をかけるやうなことはないのでせうな。
佐倉。(英太郎の面を見ないで) そんなことはありません。

おいそ。(歸つて來る。)あら。(英太郎にお辭儀をする。)お歸りなさいませ。

英太郎。一緒にかへりました。

おいそ。奥さんとさつきからお待ちしてゐましたの。

佐倉。今日は少し早びけだ。

おいそ。ゆうべはさびしかつたわ。

英太郎。(赤ん坊の頰をつゝく。)ふむ。いゝ子だな。別嬪さんだぞ。お母さんに似て。

佐倉。さやうなら。

英太郎。失敬。

(佐倉巡査とおいそ隣り家のうちに退場。英太郎庭に入る。)

英太郎。おい。(さけぶ。庭の盆栽の松に一寸さはつて見ながら。)歸つたよ。

とし子。(出て來る。)おかへりなさいませ。

(二人部屋に上る。英太郎和服に着替へる。)

とし子。(官服をたゝみ、帽子や劍など次の部屋の釘にかけ乍ら)隨分忙しいのでせうね。此の頃は。

英太郎。あゝ。目が舞ふやうだ。(端近く出てあぐらをかく。)

とし子。段々おかへりがおそくなりますのね、

英太郎。事件が無暗に多い。(沈欝に)それに不祥事が……弘は居るかい。

とし子。はい。

英太郎、二階か。

とし子。さつきまでおかへりを待つてゐましたが、ちよいとお隣りのお留守居にゆきました。

英太郎。ふむ。(間)弘はあまりしげ〳〵隣りへやらない方がいゝかも知れないぜ。

とし子。どうして?

英太郎。いや、何でもないんだが、佐倉君の留守にあまり行くのはおもしろくない。

とし子。赤ん坊をつれて、おいそさんが大變手づかへしていらつしやるもんですから。

英太郎。さうだらうが、おいそさんきりのときはあまりやらない方がいゝ。

とし子。どうかしたんですか。

英太郎。いや、何でもないが、どうも弘は危險思想だからな。

とし子。まさか。

英太郎。(空を仰ぐ。)一降り來ないかな。(吐息をつく。)いや、さすがに俺もくたびれた。

とし子。あんまり忙しすぎますからね。例の事件はかたづいたんですか。

英太郎。まだなか〳〵。署の方も事件は多いし、手は足りない。それにまじめに考へると隨分複雜な、のつぴきならぬ問題だ。神經をなか〳〵痛めるて。

とし子。何でも物事をいゝ加減にすまされない性分の人ではね。も少し手をふやす事はできないものですかね。

英太郎。六ケしいね。今法定の人數のぎり〳〵一ぱいだからね。それに經費がゆるさない。しかも事件はどん〳〵ふへる一方だ。巡査も氣の毒なもんだ。

とし子。お隣りなんかも台所がずゐ分苦しいやうですよ。

英太郎。さうだらう。俺はあんなのを見るとたまらなくなるね。若い、仲のいゝ夫婦が、貧乏で、赤ん坊をそだてゝ……

とし子。本當に。林檎一つあつても、それで皆の幸福をつくり出さうとしてゐますからね。時々行つて見ると涙がでますよ。氣のつかないふりはしてますけれど……

英太郎。俺だつて雇ひからたゝきあげたんだ。

とし子。弘のできた頃のことを思ひだしますね。

英太郎。あの頃の事を思へば今日はありがたいもんだ。

とし子。さうですよ。人は私たちを貧乏だとおもふでせうが、私なんか、人を助けてやれないのが殘念な時のほかには、自分を貧乏だと思つたことはありませんわ。

英太郎。うむ。人を助けてやれない時の外にはね。

とし子。でもあなたは本所あたりの貧乏人から「おやぢ署長」とまで云はれる位力になつておやりになつたんですからね。

英太郎。金はないから、腕でやるよりない。俺は思うんだ。俺のやうに學問をする機會の無かつたものは、どうせゑらくはなれないんだから、分相應に職務につくすのが一番いゝと。深川本所が大水でつかつたとき泥水のなかを俺れが舟を乘りまはして、少しばかり職務につくしたと云つて、あんなに評判にされるなんて世の中は變なものだ。

とし子。此の二十年間あなたが缺勤なさつたことは一度もありませんね。

英太郎。いや只一度あるよ。乃木さんが切腹された時だ。あの時はのぼせあがつて氣が變になつてしまつた。乃木さんの屋敷のまはりを一日うろ〱してゐた。

とし子。（壁にかゝつてゐる乃木夫妻の額を見ながら。）乃木さんもえらいけれども、奥さんは尙えらいと思ひますわ。もつと勇氣が要りますわ。

英太郎。立派な夫婦だ。幾度思ひ出してもしいんとする。

とし子。お子さんを二人も戰死させてはもうたのしみもなかつたでせうからね。

英太郎。何しろ二百三高地では何萬といふ人がばた〱やられたんだからね。乃木さんの頭にはそれがこびりついて居たんだらう。

（二人沈默。）

英太郎。（突然）弘はどうした。

とし子。お隣りで話してゐるんでせう。

英太郎。彼れも來年は大學を出る。俺は學問ができなかつたから、弘には學問をさせて置きたい。なあに學資位俺れが貧乏だつてどうにかなるんだが、彼奴が殊勝に自分でやるといふから、いゝ心がけだと思つてやらして置くんだ。

とし子。（云ひかけて躊躇する。）お湯におはいりになりませんか。

英太郎。そうか。一杯はいつて來やう。

（英太郎とし子と退場。）

（弘と佐倉巡査興奮して隣りの庭にあらはれる。すぐ後からおいそ夫を制しながら出て來る。）

佐倉。失敬な！

弘。僕の自由だ。

佐倉。夫の面前でそんなことを云ふ奴があるか。

弘。僕は只眞理を云つたまでだ。

佐倉。そんな眞理は不良少年のまへで云ふがいゝ。俺の眼の前ぢや云つてもらうまい。

おいそ。お止しなさいつてば、あなた！

弘。君は嫉妬して居る。

佐倉。俺にはその權利がある。

弘。嫉妬、何といふ卑劣な感情だらう。それも所有欲の變形だ。ブルジョア根情は何處まで深く浸潤してるんだらう。

佐倉。(涙ぐみ)おいそは俺のものだ。俺はおいそのものだ。

弘。古い考へ方だ。

佐倉。かぶれて慢心すな。俺は正直にはたらいて食つてるんだ。君たちのやうに飲みまはつたり、女にからかつたりして、理窟をこねまはしてゐるんぢやない。

おいそ。お止しなさいな。お願ひだからよ。

弘。君は僕の友だちのことを母に云つつけたな。

佐倉。あゝ。云つたよ。友だちが惡いんだ。俺は君のことが心配だ。

弘、ありがたいが、余計なことだ。(悲しさうに)君たちは當然僕らの味方でなければならない筈だのに！

佐倉。(やゝ和らいで)君は理窟すぎるからいけないよ。

おいそ。弘さん。おこらないでね。もう喧嘩は止して下さいな。

(二人沈默。)

(赤ん坊が泣く。)

おいそ。とにかく御夕飯をおあがりなさい。

(佐倉とおいそ家の内に退場。弘自分の家の庭にかへる。とし子御夕飯の食卓をこしらへて登場。)

とし子。御飯にしませう。

弘。お父さんに話してくれましたか。

とし子。まだだよ。

(沈默)

英太郎。(浴衣と着かへて出てくる。)

弘。お父さん、僕話しがあるんですが。

英太郎。喰べ〳〵話さう。

(三人食卓につく。とし子給仕をする。英太郎に酌をしてやる。)

英太郎。何の話しだ。

弘。僕學校を止めます。

英太郎。(ちよこをおく。)どうして?

弘。喰うに困るものが何億といふ程居るのに、安閑と自分の學問をして居る氣がしません。

英太郎。先きで皆の役に立つ働きをするためだ。

弘。さう思ふのは口實にすぎません。

英太郎。俺は貧乏で學問ができなかつた。大學を出てゐたらと思つたことが幾度あつたか知れない。それでお前には學校を出させて置きたい。

弘。さうでせう。さういふ、お父さんのやうな人間がうよ〳〵して居るんです。だから僕は學校へ行きません。

英太郎。お前の氣持はわかる。だが早まるな。後で悔やむ時がある。

弘。僕は決して悔いません。

英太郎。さういふ心がけで、立派な地位につけ。さうすれば世間がどれ程助かるかわからない。俺は區々たる署長だが、若し俺が大臣で見ろ。色々やりたい事があるぞ。

弘。さういふ考へが間ちがいなんです。根本にふれて居ません。幾らお父さんが職務に熱心にはたらかれても、社會の根からやり直さなくつちや……

英太郎。ぢや立法府へ出るがいゝ。お前は正しい、立派な法律をつくれ。

弘。……………

英太郎。(酒を飲む。)腐つた政治家を覺醒させてやれ。勞働黨をつくつて、貧乏人が一人もできないやうな法律をつくつてくれ。俺れはさういふ法律を保護する署長ならそれで滿足だ。何故默つてるんだ。

弘。問題はもつと先きにあるんです。

英太郎。（ちよこを置く。）弘、まじめなことになるぞ！

弘。…………

英太郎。よく〳〵考へろよ。恩といふこと、ありがたいといふ心なしに、世の中を円く治めることは決して出来つこないんだ。幾ら制度がよくつたつて、物が足りて居たつて、權利思想で要求するだけぢや、平和はない。ありがたいといふ、油のやうなこゝろもちがなくつちや、なめらかにまはらないんだ。

弘。愛と相互扶助が必要でせう。

英太郎。それだけでは足りん。縱の關係が要る。お互ひが愛し合ひ、助け合ふだけでなく、何か上のものに對するうやまいと感謝——君とか神とか…………

弘。人間だけで充分です。人間同志だけで！僕はさう思ふとふるへるやうな解放のよろこびを感じます。

英太郎。傲慢な！　死ぬる人間が、有限な、明日の生死も知る事の出來ない、あはれむべき我々が——

弘。人間は明日死ぬかも知れません。しかしたとひ今日一日の生命でも、それは完全に自分のものです。我々は間違ふかも知れない。しかし我々は我々の理性で——科學で處置して行きませう。

英太郎。いのちは私のものぢやないんだ。上からあたへられたものなんだ。——うつし身だ。それは實に深い氣持だ。俺は此の世に四十七年生きた。そしてやつとその深い氣持を知ることができた。

弘。僕は人間にもつと自分を恃むことを教へたい。人類にもつと運命と戰ふ勇氣を——僕は神を信じません。

英太郎。（嘆息して）さういふ思想はきつといつか人類をつまづかせるだらう。俺はもう神佛をおがまずには落ちついて生きて行かれない。

弘。僕たちはやつて見ませう！
英太郎。此の頃の青年は皆お前のやうな考へを待つて居るのかね。
弘。殘念ながらさうではありません。しかし少數の目ざめたものは、强い僕等の同志は――あゝ……同志が垣の外で合圖してゐます。（垣の外で口笛を吹く音がきこえる。）
弘。椽端に飛んで行く。手を上げて合圖をする。）行つて來ます。
英太郎。學校を止すことはも少し考へろ。
弘。（急に元氣づいて）僕は斷然止めます。會社や、銀行の椅子を學校にゐる時からねらつてゐるやうな學生と別れるためだけにでも。
英太郎。貧乏な人たちを助けてやるのに必要な智識をたくはへるためだ。
弘。クロポトキンが「青年への訴へ」のなかに云つて居ます。「俺たちが辛苦して勞働して學校を立てゝやつたのに、君たちは俺たちにわかりもしないやうな理窟をかいた本ばかりよむ」つて……
英太郎。クロポトキンは俺もよんで感動した。立派な人物だが、何か足りないものがある、一番深いものが――
弘。（反抗的に）深いか、淺いか知りません。しかし正義です。時代の正義です。
英太郎。正義とは何だ。
弘。………
英太郎。俺は理窟の深淺を云つてるのではない。こゝろもちの深さだ――ありがたいといふ氣持だ。
弘。しかしあの燃えるやうな熱情は、博い人間味は――

英太郎。俺は人間味がわからない男だらうか。熱情のない人間だらうか。

弘。…………

英太郎。俺はお前ほどの學問もない人間だ。また無理にお前の意志に立ち入る氣もない。……たゞ輕はずみなことはしてくれるな。

弘。お父さんは眞直ぐな人間です。だから僕も僕なりにまつすぐに生きます。

英太郎。うむ。

（再び促すやうな口笛の音。）

弘。僕は行きます。

英太郎。（沈默。）

弘。（帽子をとつて庭に下りる。）

とし子。（ついて行く。涙ぐみ）お父さんにあまり心配をおかけしないやうにね。

弘。（うなづく。退場。）

とし子。（部屋にかへり、食卓をかたづける。）

英太郎。（默つて考へて居る。）

とし子。弘は學校を止すでせうか。

英太郎。とめてもきくまい。

とし子。惜しい氣がしますわ。本當に。

英太郎。思ふ通りにやらせるがいゝ。考へて見れば小さなことだ。

とし子。ずい分頑固ですね。

英太郎。正直な處たのもしい奴だ。それだけに脱線させたくないな。

とし子。親ゆづりの一本調子で、やりしくじらねばいゝが…心配ですわ。あれでいゝもんでせうか。

英太郎。少しおもしろくない所がある。(首をひねる。)だがさう心配すな。

とし子。今も變な仲間が來てゐましたよ。……それにさつきの事だつて……

英太郎。何かあつたのか。

とし子。(あいまいに)いゝえ。

英太郎。お前のやうにそんなに影でしよつちう氣をもんだつて仕方がないよ。

とし子。一粒種ですもの。彼の子が若ししくぢりでもしたら生きてる氣はしませんわ。

(玄關に人の聲。)

とし子。はい。(玄關に行く。すぐ名刺を以て引きかへす。)お願ひして置いた件についてあがつたんですつて。三人です。

英太郎。(名刺を見る。)通してくれ。借地人の總代だ。

(借地人總代甲、乙、丙登場。)

英太郎。どうでした。

甲。なか〳〵きゝ入れてくれません。

乙。頑として拒絶します。
英太郎。ふむ。
丙。何しろ評判の欲つぱり地主ですから。
甲。いやなら立ち退いてくれと來るんですけれど、ぼろ店でも建物もあるし、商賣の得意もありますからね。
乙。それをちやんと見込んでるんですから。
英太郎。借地法で立ち退きの要求は出來ないが、地代を上げるのは仕方がないことになつてるからね。
甲。私たちもまるでいやだと云うんぢやありませんので、せめて十五錢位にしてくれと賴むんです。何しろ八錢からいきなり二十錢にあげるのはあんまりどうも……
英太郎。酷いことをするもんだ。
乙。何しろ此の不景氣で困りぬいてる處なんで。
英太郎。幾ら事情をうちあけて賴むでもきかないんだな。
丙。どうしても駄目です。私たちの力ぢや泣き寢入りになるより外ありません。ひとつ署長さんのお力でお助けしていたゞきたいんで。
英太郎。僕の力でも、法律上どうすることもできないが、談判して見てあげやう。
甲。どうぞお願ひ致します。
乙。あなたから云つていたゞけば彼奴にも槌が効けるでせう。
丙。せめて仕方がなければ、一年間でも十五錢位にして貰はなくつちや――

英太郎。その位な話には出來さうなもんだ。
甲。どうぞお願ひ致します。
英太郎。よろしい。俺れが引受けた。
乙。どうもありがたうムゐます。（皆と面を見合はせて。）署長さんが引受けて下さつたからにはな……
丙。大丈夫だ。どうもありがたうムゐます。
甲。では樣子をうかゞひにまた參りますから。
英太郎。明日早速話してあげやう。
甲、乙、丙、何分よろしく。どうぞお願ひ致します。有りがたうムゐます。
（一同よろこんで退場。）
とし子。酷いことをするもんですね。（針仕事をはじめる。）
英太郎。どうも困つたもんだ。いくら細かく法律をつくつても、くゞる余地はいくらでもあるからな。
とし子。地主が折れるでせうか。
英太郎。折れさすんだな。
とし子。あんなに引受けて、若しうまく行かなかつたときはどうなさるんです。
英太郎。なに、引受ける時にはできるかできないか、なんか考へないのさ。そんなことを考へた日には引受けられるもんぢやない。見てゐられないことは兎に角やるんだ。その勢でたいてい成功する。——涎れかけだね。
とし子。えゝ。お隣りの赤ちやんにあげやうと思つて。

英太郎。うむ。時々氣をつけてやつてくれ。

とし子。さう思つてますの。だけどおいそさんがあれでしつかりもんで、何かあげるとすぐおかへしをなさるもんだから、かへつてね。

英太郎。ふむ。―俺も署の仕事のし殘りがある。(カバンから帳簿をだして、机につき、しらべる。)

とし子。宅でまでしなけやいけませんかね。あんなにをそくまでつとめても。

英太郎。何しろ手が足りないんでね。(帳簿に書き込みながら)弘なんかゞあんなことを云ふのも一方無理もない事情もあるんだね。俺もよく大鹽のことを思ふ――天滿の與力と云へばまあ今の俺のやうな職務だつたわけだ。あゝいふ事をやつたのも貧乏人が可哀相で見て居られなかつたんだね。――だが俺はやらない。……(考へる。)やつぱり本當の道ぢやないからな。

(此の會話の間に、隣りの庭においそが赤ん坊を抱いて出て、子守唄をうたひ乍らあちこち歩く。やがて風鈴と風車の屋台店の車を曳いた五十男が垣の外を通りかゝる。風鈴が皆鳴り、風車がまはつて居る。)

男。(車を止める。)いかゞでムゐます。風鈴に風車。

おいそ。(側による。)きれいだこと。

男。(風車を一本ぬき)これいかゞです。廿錢。

おいそ。勉强しときなさい。十五錢に。

男。ようがす。仕方がない。はい。坊ちやん。(子供に風車を持たせる。)

おいそ。(帶の間から紙入を出し十五錢を拂ふ。)

赤ん坊。(さつきから目をまろくして、赤い花笠のついた大きな風鈴をぢつと見、耳をすましてゐたが、それを手を出して握る。)
男。買つておやんなさい。奥さん。これ、おついでに。
おいそ。いゝえ、よござんすよ。
男。ねえ、坊ちやんはこの方がよござんすね。
おいそ。いくらなの。
男。五十錢。極上等です。
おいそ。(赤ん坊の手を放させる。赤ん坊澁面をつくる。)
男。買つておやんなさい。四十錢に勉強しときますぜ。奥さん。
おいそ。(紙入れから金を出しかけるが、またひつ込める。)やつぱり止めときますわ
弘。(此の會話の間に、街の方からかへつて來て、後ろに立つて見て居たが、前に出る。)それくれ給へ。
男。はい〳〵。どうも有りがたう。(風鈴の紐をといて弘に渡す。)
弘。(金を拂ふ。)
男。どうも有りがたうさま。(屋台車を曳いて退場。)
弘。(おいそに風鈴をさし出す。)これ赤ちやんに。
おいそ。いゝえ、ようござんすわ。
弘。まあ、さういはないで。

おいそ。坊やには一つ買つてやりましたから。

弘。折角買つたんですから。(赤ん坊に風鈴を持たせる。)

おいそ。(硬く) 本當にようござんすわ。(風鈴を放させる。)

(赤ん坊泣く。)

弘。………

おいそ。お泣きでない。坊やはいゝ子だ。(少しはなれ赤ん坊をあやし乍らあちこち歩く。)そら。よく廻るだらう。くるくるくる〱

弘。何か僕は失禮をしたんでせうか。

おいそ。いゝえ。

弘。何か恐つてゐるんですか。

おいそ。そんなことはありません。

弘。(興奮して) ぢや僕の小さな贈物を何故拒むんです。

おいそ。………

弘。あなたはきつと何か恐つてゐるんだ。僕のこゝろを解つてくれないんだ。

おいそ。そんなことはないけれど………

弘。(悲しさうに) 何故そんなに他人行儀にするんです。

おいそ。だつてあんまり親切すぎるんですもの。

弘。人間が人間に親切にしちやいけないんですか。

おいそ。（家の内の方に氣を兼ねながら）程がありますわ。——さもないと——

弘。僕は何もやましいことはありません

おいそ。さういふわけにも行きませんよ。

佐倉巡査の聲。（家の内より）おいそ。おいそ。

おいそ。はい。

弘。これとつて置いて下さい。

おいそ。ぢや、いたゞきますわ。（小聲で）後生だからしつこくしないで下さいな。

佐倉。（門口に出る。）やあ、弘君か。

おいそ。これ、坊やにいたゞきましたのよ。

佐倉。さうか。どうもありがたう。（少し硬く）まあ、はいつてくれ給へ。

（二人家の内に退場。）

英太郎。（椽端に出る。鋭く。）弘。

弘。（側に來て庭に立つ。）

英太郎。恥知らずなことは止せ。

弘。（青くなる。）何が恥知らずですか。

英太郎。おいそさんは他人の妻だ。あつかましいことをするもんぢやない。

弘。何もしては居ません。

英太郎。他人の妻になれ〳〵しくするのは禮でない。

弘。愛は自由です。

英太郎。いくら愛は自由でも夫婦となつた以上は又別だ。

弘。何故です。

英太郎。理窟を云ふな。

弘。僕は理にかなはないことに服從するのはいやです。

英太郎。當然なことだ。素直に感じて見ろ。佐倉君が起るのは當り前だ。

弘。所有觀念の一種です。

英太郎。(癇癪を起す。)ちがふ。夫婦はてんで一つのものなんだ。所有するといふやうなことよりもつと深い。

弘。僕にはわかりません。

英太郎。わからないことは幾らでもある。だから生意氣になるな。まだ淺い。

弘。僕は勿論淺いでせう。併し僕の理性の導きの外には、外から來るものには何ものにも從ひません。愛、理性そして勇氣――これが僕のモツトーです。

英太郎。(はがゆさうに。)破廉恥なことは俺は決して許さないぞ!

弘。許す、許さないといふやうな權利はお父さんにだつて決してありません!

英太郎。仲のよさゝうにしてゐる夫婦の間をかきまぜるやうなことはすな。

弘。(沈默)

英太郎。お前は氣をつけないと身をあやまるぞ。

弘。自分が全責任をもつてやつたことはどうなつたつて悔いません。

(再び垣の外で口笛を吹く聲。)

弘。同志がまた來ました。(帽子を上げて合圖する。)僕は行きます。

英太郎。(沈默。)

弘。(出て行く。)

(やがて弘と其の仲間との歌ひつゝ遠ざかる聲。)

(二人しばらく沈默。)

とし子。弘はしくじりはしないでせうか。

英太郎。少しおもしろくないな。

とし子。本當に私心配ですわ。學校は止める、——人樣の奥さんに對して……そしてあのお友だち……

英太郎。なに、そんなに案じるもんぢやないさ。

(部長急ぎ庭から登場。)

部長。實は急に事件が……

英太郎。さうか。

部長。(側により何か小聲でさゝやく。)

英太郎。（緊張する。）ぢやすぐ行かう。

部長。どうぞお願ひします。お待ちして居ます。

（急いで退場。）

英太郎。服を出してくれ。

とし子。また署ですか。

英太郎。職務だ。仕方がない。

とし子。本當に御苦勞でムゐますね。

英太郎。（默つて服をきかへはじめる。）

（近所から蚊やりの烟がなびいて來る。猿廻はし風呂敷包を背負ひ、豆太鼓をたゝき乍ら庭からはいつて來る。）

とし子。お通り――今日はよろしいよ。

（猿まはしかまはずに子猿を座敷に放す。猿棒ぎれをかついでおどる。二人思はず引き入れられて見る。）

猿廻し。（竹の輪を二つ並べ持ち、猿を鞭打つ。）そらッ。

（猿輪を飛びくぐる。）

とし子。（台所から人參を持つて來て猿にやる。猿頬ばる。）かあいもんですね。いくつです。

猿廻し。當才でござゐますだ。

（猿まはし猿歌ひつゝおどらせる。）

（涙ぐんで猿の踊るのを見て居る。）

——幕——

第二場

元安橋畔の街頭の一部　左手奥に元安橋警察署の鐵柵と、建物の一部及び火見櫓が見える。右手寄りに元安橋が一部見える。背景に開閉橋とそれを越えて大市街の家並みが見える。橋のたもとに一寸した廣場がある。堤防修繕用の丸太と石材ののこりが少し置いてある。河原に下りる石段がある。そのそばに街燈と柳の木。空は晴れ、殘暑の強い日光が道路を照してゐる。幕開くと大勢の人夫の言ひ爭ふ聲が聞えて、河原から石段をつたつて、廣場に十數名の勞働者を率た人夫等があがつて來る。

人夫甲。（棒を持つて嚇やかし乍ら）待ちねえつて事よ。譯の解らねえ事を言ふもんぢやねえ。

人夫乙。（シャヴェルを握り乍ら）けちな事を言ひやがる。負けた金を出さねえつて言つた日にや俺たちの場のおきてが立たねえや。

人夫甲。（嚇となつて）そりや知つてゐる。勝負は時の運だ。出さねえつて言ふんぢやねえ。明日迄待ちねえつて言ふんだ。おいら今晩家内にちつと許り金の要る事があるんだ。

一部の人夫等。お互ひだ。待つてやるがいゝ。

人夫乙。馬鹿〳〵しい。ばくちの金を掛にするなんざあおいらたちに似合ひもねえ。

一部の人夫等。渡り者の新米には江戸つ兒の氣持は解らねえ。

人夫甲。（逆せ上つて）何だと。（棒を持つて詰め寄る。）

人夫乙。（シャヴェルをふるつて應じる）

人夫等の一部。やつちまへ！ぜいろくを。

人夫等の他の一部。ぜいろくだと！やつつけろ。日頃の意趣だ。（棒を振るつて打ちかゝる。）

巡査甲。（橋を渡つて通りかゝる。驚いて馳けつける）待て。こら待て。（人夫甲、乙の間に割つて入る）

（人夫等きかづに格闘する。警察署から数名の巡査が出て來て應援し、しきりに制すれどもきかず、人夫たち激しく闘ふ）

英太郎。（馳けつけて來る）待て！やめろ。（人夫甲、乙の間に割つて入る）

人夫等の聲。岩田さんだ。おやぢ署長だ。

英太郎。止めろ。やめないか。（人夫乙の棒英太郎の肩に當る。人夫乙思はず躊躇する。英太郎ひるまず、飛びかゝつて棒を奪ふ。その間に巡査たち人夫甲に飛びかゝつてシャヴェルを取り上げる。人夫等皆手をゆるめる。）

人夫等。（沈默。）

（其間に立ちどまつて輪を作つてゐた通行人の中から、或る商人らしき一人の男口を出す）

男。ばくちをやつてゐたんです。こいつらは橋の下の小屋でいつもやつてゐます。

人夫等。（思はず顔を見合せて、白らけ込む）

英太郎。告げ口はよろしい。皆どいた、どいた。（巡査たちに目くばせす。巡査たち見物人を散らせる。商人も不服そうな顔をして去る。）

巡査甲。お前たちは又やつたな。

人夫甲。やりやしません。（一同を見まはして）なあみんな。

人夫等。そうだ。やりやしない。

巡査甲。嘘をつけ。證人がゐるぞ。

人夫等。（沈默）

英太郞。諸君もうよろしい。歸り給へ。（巡査たち署の方へ歸る）

英太郞。何でもやつて遊ぶがいゝ……許される事なら……君たちの氣が晴れる事なら。だが喧嘩だけはすな。

（間）今日はよろしい。（人夫等石段を下りて河原に退場）

英太郞。（河岸をあちこち歩く）いゝお天氣だ。

弘。（橋を渡つて登場。父の姿を見とめて側に來る）お父さん。

英太郞。お前か。天氣がいゝので少し散步してた所だ。

弘。いゝ所でお目に掛りました。實は僕はお願ひがあつて來たんです。

英太郞。まあ懸けろ。（丸太の上に腰懸ける。）

弘。（石材の上に腰懸ける）

英太郞。此の頃は何をやつてゐるんだ。

弘。自由勞働をやつてゐます。

英太郞。うむ。（弘の勞働着を着た、けはしい容子をした顏を見る）お前は相變らずだな。もう少しのんびりした氣持になれ。

弘。………

英太郎。このいゝ天氣に。見ろ平和ぢやないか。あの旗を立てゝ行くモーターボートや、あの空を飛んでゐる鳶や――

弘。（遮る）僕はそんな餘裕はありません。もつと切迫した氣持で生きてゐます。

英太郎。俺だつて呑氣に暮してゐるんぢやない。目まぐるしい事件の中で生きてゐるんだ。だが俺は息をつく所を持つてゐる。

弘。お父さん。果してそんな所があるでせうか。よしあつたにしろそんな事をするのは恥づ可き事ぢやないでせうか。今の時代に――僕は毎日勞働をやるやうになつてから殊にそう思ひます。

英太郎。いつも苦しい／＼と言ふ。然し樂しいと云ふことはおくびにも出さない。まして有難いとは――丸でそう言ふ事を口にする事が恥でもあるかのやうに。俺はそれは厭やだ。毎日畑を耕すのは苦しい／＼と言ふ。だが鍬をかついで歸り途に夕陽の沈むのを見たり、涼しい風に當つた事は一度もないのか。喉が渇いた時に清水を呑んだ事はないのか。病氣した時に世話をして貰つた事はないのか。

弘。お父さん迄がそんな殘酷な事を仰しやるんですか。

英太郎。俺がかう言ふのは苦勞の味を知らないからぢやない。おみきおばあさんは堀立小屋の中で水ばかり呑んでゐても有難いと言つたんだ。少くともこんないゝお天氣の朝に、それを樂しいと言ふ氣持がちつとも起らないやうなものはばち當りだ。

弘。ばち當り、このお天氣に働きもしないで遊びに行くブルジョアやボートなんか漕いでゐる親のすねかぢりの學生なんかこそばち當りでせう。

英太郎。お前は狹い。一方にばかり頭を突つ込んで行く。お前が獨立して働いて行きたいと言ふから。俺は自由にさ

してはゐるが、俺はお前が勞働してゐる爲にそんなに荒んだ氣になつて呉れるよりは、未だ俺のすねをかぢつて呉れてもいゝから、たまにはボート位漕いで樂しいと言つて貰いたいよ。

弘。僕は苦るしんでゐる人たちを傍觀してそんな呑氣な事はやつてゐられません。

英太郎。(歎息して)俺は言つてやる。どんなに苦るしくつても樂しいと。年から年中俺はどんなに目の舞ふやうな忙しい生活をしてゐても、俺は呑氣な心を無くしないぞ。いゝお天氣だ、有り難い。愉快ぢやないか、ボートの走るのは——俺はこう言つて仲間のものや、側に立つてゐる人たちに話し掛けるぞ。俺はお前が勞働してゐるのを褒めてやる氣はしないぞ。そんなに苦るしい、苦るしいと言つて、しかめ面をして人に見せなければならないのなら。俺は本當に殘念だ。お前のその硬ばつた、けはしい顔付きを見るとなさけなくなる。

弘。(涙ぐむ)僕が角帽をかぶつて、通學してればお父さんはそれで滿足なんでせう。

英太郎。そうぢやない。俺の氣持がお前には呑み込めないんだ。

弘。(きつぱりと)お父さんお願ひがあるんです。僕たちの同志を解放してやつて下さい。

英太郎。……

弘。もう一週間拘留になつてゐます。

英太郎。あれはお前の仲間なのか。

弘。直接に知つてゐるものは二、三人に過ぎません。然し勞働運動をやつてゐるものはみんな同志です。無産階級のものはみんな兄弟です。

英太郎。有産階級のものは兄弟ではないか。

弘。彼等が過を改めない限りは我々の敵です。
英太郎。それがいけない。そこが違うんだ。
弘。敵を愛せよ——お父さんはこうお仰しやるんでせう。それは階級意識に目覺めない昔の人が言ふ事です。
英太郎。昔だつて今だつて人情は一つだ。どうしてもつと一人一人の人間を見ないんだ。階級意識と言ふやうな正體の解らない幽靈を信じるんだ。不幸なものは幸福に引き上げてやりたい。だが幸福なものは祝してやるがいゝ。又一體どこに幸福なものが暮してゐるんだ。そう言ふ狹い量見は据てるがいゝ。
弘。（興奮する）お父さんはどうしてもつと惡をお憎みにならないのです。自分の兄弟からパンを奪ひ、自分の姉妹を淫賣婦に連れて行くものをお許しになるのですか。もつと不正に對して嚴しくなつて下さい。
英太郎。俺は不正を許す事は出來ない。だから暴力を許す事が出來ないんだ。勞働運動には反對ではない。だがお前たちの仲間は恐ろしい事をくはだてゝゐる。俺は今度色々と話し合つて見たが到底一致する事が出來なかつた。
弘。然し□□も暴力を使ふぢやありませんか。現に貴方さへも夫れを使はずに職務はつとまらないぢやありませんか。
英太郎。…………
弘。惡を征服する爲に暴力を用ひる——つまり同じぢやありませんか。
英太郎。實は俺も夫れが解らないんだ。此間からお前たちの仲間を取り調べてゐる時に、夫れを突込まれたので、はつと思つた……然しどうも違ふやうだ。それに暴力だけの問題ぢやない。お前たちの仲間はてんで道德と言ふものを認めてゐないぢやないか。何の理想も——第一何も信じてゐないぢやないか。
弘。彼等は何も信じられないのです。ニヒリストです。

英太郎。俺は實際驚いた。人間がこう迄なれるものかと思つて恐ろしくなつた。これは暴力どころの問題ぢやたい。もつと重大な事だ。そう言ふ考へを人類に廣められちやあ大變だ。俺は彼等を許す事が出來ないと思つた。

弘。お父さんと今此處で議論をしたつて仕方がありません。どうか解放してやつて下さい。お願ひです。

英太郎。…………

弘。僕は家族のものから頼まれたんです。みんな困つてゐるんですから。

英太郎。未だ取調べが濟んでゐない。

弘。彼等に悪い所もあるでせう。然し周圍が悪るいんです。お父さんがそれを考へて下すつたらもつと同情して下さい。お父さんはいつも貧乏人の味方ぢやありませんか。

英太郎。うむ。（間）お前の氣持も解る。兎に角悪いやうにはしない。俺に任せて置いて呉れ。家族の人にも安心させてやるがいゝ……之れ以上は俺の職務にかゝはる事になる。

弘。解りました。お父さんを信じます。どうかお願ひします。

（この時美しく着飾つた五ツ六ツ許りの女の兒を連れたキチンとした身なりをした上女中風の女橋を渡つて登場。）

女。さあ渡つて了ひました。もうぢきで御座いますよ。

女の兒。モトヤスバシ……長いながい……

女。えゝ、長いながい……モトヤスバシ……

女の兒。水天宮様……鳩ポツポ……どつちへ行くの

女。さあどちらで御座いませうねつ（方角を考へてゐる）

女の兒。（川を指差し）モーターボート、モーターボート。

女。え〻モーターボート。赤いお旗を立て〻。一寸お待ち遊ばせ。（側の店に一寸立ち寄る）

女の兒。（川の縁の方へ歩いて行く。材木に躓いて倒れる。泣く。弘思はず飛んで行つて、女の兒を起す）

弘。危いよ。（泥を拂つてやる）

女。（銀色のモールの付いた、紅い造花の玩具を持つて飛んで來る）危いこと。（女の兒に）なんでもありませんよ。（弘に）どうも有難う御座いました。（着物の泥を拂つてやり乍ら）さあもう泣くのおやめ、人樣に笑はれますよ。さあこれ綺麗でせう。（花を女の兒に持たせる。女の兒泣きやめる。女弘に）あの水天宮樣に參りますのは、どちらで御座いませうか。

弘。この川岸について、二ツ目の角を曲るんです。

女。どうも有難う御座いました。（弘に丁寧にお辭儀する）さあ孃ちやま參りませう。（女の兒の手を引いて退場）

（間。）

英太郎。ねえ穩やかぢやないか。晴れた空、街の上を飛ぶ飛行機、それを見乍ら川岸を傳つて行く人たち、行つたり來たりする船――お前はこんな人たちの樣子を見て、それを毀したいと思ふかね。

弘。………

英太郎。今通つた女の兒と小間使にしてもだ。どうせ金持の家のものに相違ないんだが、あれを見てお前は憎いと言ふ氣がするかね。可愛いと言ふ氣がするぢやないか。

弘。（沈默。）

英太郎。みんなひねくれずに仲よく暮らしやあいゝんだ。

弘。みんながそうならいゝんです。然し事實はそうぢやないんですから——僕は泣きたくなります。

英太郎。うむ。(間。)久し振りだ。今日は一つ一緒に鰻でも食はうぢやないか

弘。えゝ。お父さん。皆は大丈夫でせうね。

英太郎。心配しないでいゝ。

弘。有難う。ぢやあ一緒にめしを食べませう。それから早く行つて家族のものに知らしてやりませう。然し久し振りですなあ、お父さん。

英太郎。うむ。ビールでも飲まう。なんだか今日は愉快になつた。お前と會ひさへすりや議論だが。はゝゝぞ。

弘。(獨白の如く) 澤山な人や車の列、大都會の空を覆ふ蒼空。公園にもショーウインドーにも人が一ぱいゐる。眞晝の強い日光——めまぐるしいと言はうか、平和と言はうか。うら悲しい氣がする。俺は變にセンチメンタルになつた

英太郎。(ポケットから時計を出して見る) 正午少し前だ。ぢやあ晝飯にしやう。俺がいゝ鰻屋を知つてゐる。

(英太郎と弘肩を並べて橋を渡つて退場。暫らく樣々の通行人が無言にて町を過ぎるのを見るのみ。と突然大地の底から恐しい地鳴りが聞える。續いて激しい震動が起る。建物も、屋根も、橋も、舞台にある物盡く激しく搖れ、通行人は地に倒される。一瞬間倒れた人も聲を立てずしいんとした沈默。やがて通行人が聲を擧げて、地震だ、地震だと叫び乍ら走り去る。家の雨戸や、屋根看板や、瓦が音を立てゝ落ちる。警察署の柵や壁の一部も倒れる。市街の方々から人々の叫ぶ聲が聞える。以後この場面の終る迄地鳴りと震動と物の破壞する音と、人々の叫び聲が斷續

する。あはてふためく避難民が絶えず通る。

（兒供の手を引きたる母親、荷物を脊負つた男、老人を連れた娘等一群の避難民登場。）

母親。（兒供を引立て乍ら）早く、早く、早く。

兒供。（倒れて泣き乍ら、又立ち上つて引摺られて行く。）

女。駄目です。駄目です。早くしなくちやあ。

老人。（息を切らし乍ら辛うじてついて行く）

男。（荷物を持つた妻を叱咤する）捨てつちまへ。そんなもの。ぐづぐづしてゐる時ぢやないぞ。

妻。だつてやつと持ち出したのに。

男。馬鹿。着物がなんだ。命がないぞ。

（半鐘の音が方々から起る。續いて火事だ、火事だと叫ぶ聲。英太郎と弘馳けつけて來る。）

英太郎。俺は歸らない。

弘。家はどうしたでせう。おつかさんが心配です。

英太郎。お前馳けつけて安否を見て與れ。

（警察署の中から佐倉巡査が飛んで來る。）

佐倉。大變です。署も方々毀れました。留置場も危險です。

英太郎。うむ。みんなしつかりしろ。此際出來るだけ働かねばならん。

佐倉。さうです。

弘。みな大丈夫でせうか。留置場が崩れたら。
英太郎。俺が引き受ける。お前はおつかさんをたのむぞ。
佐倉。（苦しさうに涙を制し乍ら）勿論わたしも歸りません。署長殿。
英太郎。そうだ。俺たちは内の事を思つてる時ではない。（弘に）おいそさんを氣を付けて呉れ。
弘。佐倉君安心し給へ。僕が直ぐ家へ駈けつけるから。
佐倉。どうかお願ひします。弘君。
弘。ぢや直ぐ行きます。
英太郎。氣を付けろよ。
弘。お大事に（走り去る）
英太郎。（又も起る震動に辛うじて身を支へ乍ら）これは仲々大事だ。ひどい事になるぜ君。
佐倉。どうも大變です。（川の向ふの市街の空に黒煙が上る）火が出たな。
英太郎。この際だ。お互ひに職務に盡さう。
（警察署の中から巡査が二、三人飛んで來る。）
巡査。早く來て下さい。大變です。隠謀を企てゝゐます。
英太郎。よし。皆しつかりしろ。
（英太郎と佐倉、及び巡査たち署の方へ退場。この會話の間に大勢の避難民が方々から出て來て、川岸に添つた廣場に一ぱいに集る。火藥庫の爆發するらしき大音響が續けさまに聞える。方々から街の空に火の手が上る。燒け屑

や、黒煙が川の向ふからも川のこちらからも渦巻いて飛んで來る。群集の中には頭を瓦で傷つけたもの、火傷したもの、踏み拔きをしたもの等の負傷者が大分混じてゐる。荷物は放ふり出され、病人は地べたに倒された儘息をついてゐる。）

怪我をした男。（額の血を拭かうともせず）瓦でやられた。だが壓し潰ぶされたと思へば………

踏み拔きした男。俺が踏み出すのと家が崩れるのと同時だつた。

一人の女。お芳さんはとう〳〵やられた。

他の女。一體どうなるんだらうねえ。こんなに搖れ通しぢや

一人の女。（眞蒼になつて飛んで來る）厭だ。厭だ。家の下敷なつて助けて呉れ、助けて呉れつて泣いてるんだもの。でもどうする事も出來やしない。

一人の男。何しろすし詰めにぎつしり長屋が詰つてるんだから。庭だつて空地だつてありやしないんだもの。

倒れてゐる病人。（呻りながら）水を呉れ、水を……

（誰も應へるものがない。）

一人の母親。（半狂つた樣子で）坊や、坊や、坊や。

（この會話の間にも群集が方々から出て來て加はる。廣場は一ぱいになる。一生懸命、念佛や、題目を誦へてゐる老婆や、女たちもゐる。英太郎と佐倉巡査出て來る。）

英太郎。（群集を見て）此處ぢやとても駄目だ。

（群集の間に動搖と悲鳴が起る）

群集。署長さんだ。どこへ逃げりやいゝんだ。

（巡査一人飛んで來る。）

巡査。電話は全部切れました。通じません。

（一むれの群集が叫び乍らやつて來る。）

群集。火事だ、火事だ。一面の火の手だ。

（それと共に凄まじい勢で黑煙が渦卷いて來る。群集の間に叫喚が起る。）

聲。にげろ〳〵此處は駄目だ。

（一人の巡査橋を渡つて息せき飛んで來る。）

巡査。榎通り一たいは火の海です。とても駄目です。水道は全部斷水でポンプも効きません。四十幾ケ處から火の手が起つて、燒け死んだ人間が到る處にころがつてゐます。向ふは駄目です！

（この時煙と火に追はれた一群の群集が再び叫び乍ら駈けて來る。）

聲。火事だ。火事だ。逃げろ。逃げろ。もう其處迄火の手だ。

（群集狼狽して橋を渡らんとして袂迄押し寄せる）

英太郎。（大聲に叫ぶ）駄目だ。川向ふは駄目だ。

群集。何處へ行きあいゝんだ。

英太郎。（落着いた、決心した聲で）被服廠だ。本所の被服廠跡だ。あすこより他に安全な處はない。諸君皆被服廠跡へ逃げ給へ。あすこなら少くとも七八萬人の人を收容する餘地がある。

(巡査たち聲を揃へて叫ぶ。)

巡査。被服廠跡へ逃げろ。

(群集の一部は被服廠跡へと叫び乍ら駈け去る。一群の避難民が反對の方角から又煙に追はれて駈けて來る。)

聲。向ふへ行け。川向ふへ逃げろ。

巡査たち。被服廠跡へ行け。

一部の群集。こちらは駄目だ。向ふへ逃げろ。

(橋のそば迄押し寄せる。一部分は橋を渡つて向ふに走り去る。)

聲。向ふへ行け。向ふは廣い。川の向ふだ！

巡査たち。(聲をからして)向ふは駄目だぞ！被服廠跡へ逃げるんだ。

(この時又火に追はれて來た一群の群集橋の側へ押し寄せる。)

英太郎。諸君被服廠跡へ逃げろ。向ふは駄目だ！

聲。こちらは駄目だ。其處迄火の手が來てゐる。俺たちは火に追はれて逃げて來たんだ。

英太郎。向ふは駄目だ。諸君落着いて考へ給へ。この風の向きを見給へ。風は西南だ。被服廠跡より他に安全な處はない。

一部の群集。引きかへせ。被服廠跡へ逃げろ。

他の一部の群集。向ふへ逃げろ。川向ふでなくちや駄目だ。

聲。なんだか知らねえがこちらは氣がさす。向ふへ逃げやう。

英太郎。（高い台の上に突き立ち、兩手を擴げて叫ぶ。）諸君聞かないのか。命の惜しくないものは向ふへ逃げろ。命の惜しいものは被服廠跡へ逃げろ。

群集の内より。おやぢ署長だ。おやぢ署長だ。

一部の群集。（なほも橋を渡つて川向ふに行かうとする。）

英太郎。（怒鳴る）馬鹿！命が惜しくないのか。風の向きを考へろ。

聲。なんだかこつちは蟲が好かない。どう言ふもんだか。

英太郎。御幣擔ぎはよせ。惡い事は言はない。諸君はしくじるぞ。

聲。被服廠跡へ逃げやう。おやぢ署長が言ふ事だ。

（橋を渡り掛けた群集引き返して被服廠跡の方へ駈け去る。群集殆んど全部それに從ふ。）

聲。被服廠跡へ。被服廠跡へ。

警部。（駈けつけて來る）留置場が危險です。もう隣の板塀迄火がまはりました。

英太郎。彼等を解放して呉れ給へ。

警部。彼等は亂暴をやつてゐます。このどさくさを利用して何かたくらんでゐるやうです。

（この途端警察署の壁がドット崩れて落ちる。中で革命歌を唄ふ聲が聞える。）

英太郎。（落着いて）解放して呉れ給へ。

警部。彼等を今放つたらこの無秩序の狀態でどんな事をやるか知れません。全く千載一遇の機會ですから。（意味ありげに眼を光らす。）署長殿丁度いゝ機會ではないでせうか。

英太郎。それはいかん。卑劣だ。この際釋放しなければならん。

警部。然し……

英太郎。いや法規の許す所だ。直ぐに、火がうつらない中に釋放して與れ給へ。

警部。ではそうしませう。(急ぎ退場)

(群集の叫ぶ聲川の向ふより聞え、一團の群集元安橋を渡つて逃げて來る。)

聲。一面の火だ。

他の聲。榎通りは火の海だ。

他の聲。舟が燃え乍ら川を流れて來る。橋杭へ燃えうつつた。

他の聲。逃げろ。元安橋が燒け落ちる。どこへ逃げりやいゝんだ。

英太郎。被服廠跡へ逃げろ。被服廠跡へ。

(群集叫び乍ら退場。
川向ふの市街の家並みが一面に燃え始める。黒煙が渦卷いて橋の上から吹き寄せて來る。)

英太郎。橋はもう駄目だ。もう橋を渡つて逃げる事は出來ない。

佐倉巡査。あゝ川の中へ飛び込んでゐます。火に追はれて川の中へ。

英太郎。(一生懸命に)舟を出せ、舟を。(この途端瓦が飛んで來て英太郎の額に當る。額傷つき、血が流れる。)

佐倉。怪我をされましたか。

英太郎。なに大丈夫だ。(巡査たちに)舟を出せ。

巡査。火の粉が一ぱい飛んで來る。燒け杭が流れて來る。まるで地獄の川だ。

佐倉。死骸が流れて來る。

英太郎。救助船を出せ。この岸にのこつてゐる限りの舟を――死の川を乘り廻して生き殘つてゐる限りの者は助けるんだ。

(巡査たち救助艇をおろす。英太郎及び巡査たち乘りうつる。其時反對の方角より、一團の黑烟凄まじき勢ひにて渦卷き來る。)

巡査。風の向きが變つて來たな。(一同しんとして沈默。)

佐倉。(恐怖の叫び聲を上げる)あの雲はどうだ。あの恐ろしい雲は。

巡査。むく〳〵と固まつて動かない。殺氣を含んでゐる。

佐倉。あの鬼のやうな形をした雲がじつとして動かないのは、あの下のあたりに旋風があるんぢやあるまいか。

(群集叫び乍ら川岸を走り逃げる。)

聲。あの雲を見ろ。

他の聲。おゝ厭だ。あの雲を見ると俺は身震ひがつく。

他の聲。風の向きが變つた。風の向きが變つた。

巡査。(舟に乘らんとして)あのいやな太陽を見ろ――ぞつとする。

警部。どうも風の向きが變つたやうです。

英太郎。(この時迄沈默して身動きもせず、妖雲を眺めてゐたが、眞蒼になり、殆んど倒れんとして、わずかに身を支へ

る。舟首に突き立つ。)天だ。命だ。俺は俺の全力を盡さう。火の粉の中を乘り廻せ。あゝ死……死の川から一人でも救ひ上げるんだ。

(血のやうな赤い色をした太陽が烟で曇つた市街の上の空に、鈍く大きく懸つてゐる。英太郎舟首に突き立つた儘瞑目する。)

——幕

第三場

岩田英太郎の假家　被服廠跡の一部に建つてゐるバラック建ての家。少しはなれて隣の佐倉巡査の假小屋がある。背景に廣漠とした被服廠跡の空地。向ふに遠く一聯のバラック建が並んで見える。震災後未だ間もなく萬事無秩序に、テント張り、トタン屋根等不揃ひに並んでゐる。所々に火に焦げて曲つた不格好な形をした樹木が立つてゐる。英太郎の假小屋の外にも、佐倉巡査のバラックの前にもバケツ、盥、おしめ、等雜然と打散らかしてある。英太郎の小屋の中で英太郎一人粗末な白木の位牌の前に坐つて鉦を叩いてゐる。隣のバラック小屋の外を粗末な浴衣を着た佐倉巡査が抱いた兒供をあやし乍らあちこち歩いてゐる。時々立ち留つて鉦の音に耳を傾け涙ぐむ。又自分を勵ますやうに、口の中で子守唄をつぶやき乍らあちこち歩く。とし子米とねぎとを持つて歸つて來る。

とし子。やつと貰つて來ました。今晩はこれでも御馳走が出來ますよ。(前掛けから牛乳の壜を出す)さあ赤ちやんお腹がすいたらう。

佐倉。どうも有難う。

とし子。御飯は一緒に焚いて置くからよござんすよ。

佐倉。どうも御世話になります、奥さん。せめて嬶が丈夫でありやいゝんですが。

とし子。いゝえ、よござんすよ。おしめなんかもわたしが洗つて上げますのに。
佐倉。どうも隨分手がかゝるんで困りますよ。
とし子。本當に男親ぢやあね……隨分不自由でせう。
佐倉。どうもあいつがゐて呉れたらと思ひますよ、役に立たないやうでもやつぱり女ですから――いやどうもぐちつぽくなつちやつて。
とし子。本當にね。おいそさんがあんなに働き手だつたのに――でも餘り力を落して了つてはいけませんよ。
佐倉。そうです。兒供が可哀想ですから。夜隨分やかましくつてお困りでせう。
とし子。いゝえなんでもありませんよ。（鉦の音に耳を傾ける）本當に解らないもんですね。
佐倉。毎日、毎日おつとめ許りですね。
とし子。えゝどうも（沈默）すまない。すまないと言ひどうしです。
佐倉。どうもあゝ氣をとがめては困りますね。すつかりやせて陰氣になつて了はれたぢやありませんか。僕實に心配です。
とし子。（眉をひそめる）わたしも實は心配してゐますの、食事も殆んどしないんですから。
佐倉。それはいけません。どうも不可抗力ですから仕方がありません。あれ程迄一生懸命働かれたんですから、怪我迄して。
とし子。あなたのやうに言つて戴けば……でも考へて見れば隨分恐ろしい事です。
（二人暫らく沈默して鉦の音を聞いてゐる。）

佐倉。岩田さんはどうしてもおやめになるんですか。

とし子。辭表を出したきりみなさんがいくらなだめて下さつても肯かないんですの。

佐倉。あの時どんな偉い人が岩田さんの位置にあつたとしても、あれより以上の處置は取れなかつたでせう。あの時急に風の向きが變つて旋風が起つたと言ふ事は實際不可抗力です。廣い隅田川があり、八田家の大きな森があり、堅い地盤の三萬坪の廣さもある此處より他に、もつと適當な場所が考へつけるでせうか。全く神様でない限りはあれ以上の處置をあの場合に取る事は出來ません。

とし子。わたしもそう言つて幾度も慰めるんですけれど、胸にしみ着いてとれないらしいんです。俺があの時にあれ程勸めさへしなければ、あの澤山の人間がむざ〳〵死ぬ事はなかつたらう。俺の一生の過だ。申譯がないと言つて苦しみ通しなんですの。それに一等いけなかつたのは自分が變事を聞いて此處へ駈けつけてみんなの死骸を見た事です。

佐倉。(目をつむる)あの時は僕と二人で駈けつけたんです。全くたまらない光景でした。あの時の岩田さんの御様子は本當に氣の毒で見てゐられませんでしたよ。

とし子。その時の印象が憑きものがしたやうに胸に烙きついてゐるらしいんです。

佐倉。(涙ぐみ)それでも岩田さんはその時非常な決心をされて、まるで鬼神のやうにみなを指揮して、死骸の間を走り廻つて一人でも息のあるものを助け出されたのです。實際僕は感心しました。立派だと思ひました。

とし子。その時にもう辭職する決心はしてゐたのですが、少しでも義務を盡さうと思つて死骸の後かたづけが出來る迄辛棒して働いてゐたらしいんです。

佐倉。本當に僕は泣きたくなつて了ふ。岩山さんの心を思ふと——あの日の事を思ふと……
とし子。おいそさんは本當に氣の毒をしました。何しろ不意なので、揺れ出したかと思ふとあんな粗末な長屋ですから一たまりもなく崩れて了つたんです。おいそさんは赤ちやんがよく眠つてゐらしつたので、庭で板ばりをしてゐらしたんです。直ぐに家の中へ飛び込んで赤ちやんをかゝへて、戸口迄逃げ出された途端に、ぐらぐらと家が倒れかかつたので、その下におなんなすつたんです。わたしは幸ひ庭に飛び出して無事でしたが、驚いて飛んで行つて助け出さうとしても、何しろ女の力ではどうにもならなかつたんです。助けて呉れ助けて呉れと言つても、近所もみな同じですから直ぐに間に合ひませんでした。やつと通り掛つた人に頼んで材木の下から引張り出したんですが、方々ひどく打たれてゐらつしやるもんですから、暫らくしてとうとうなくなられました。でも赤ちやんが助かつた事は本當に運が強かつたんです。二尺許し離れた地べたの上に放り出されて泣いてゐました。本當にあなたは家へも歸らないで働いてゐらしたんですのね。（涙を拭く）
佐倉。僕は二日後迄知らなかつたんです。弘君に聞く迄。
とし子。わたしの家の庭に筵を敷いておいそさんと赤ちやんとを寢させて、わたし一人どうして上げる事も出來ないで困つてゐる處へ弘が歸つて來て呉れたんです。弘と二人で一生懸命手を盡しましたけれど、どうもね。直ぐに弘にあなたの處へ行つて貰つたんですけれど、もう橋が燒け落ちて駄目だつたと言つて歸つて來ました。
佐倉。おいそは……おいそは隨分苦しんで死んだんでせうね。
とし子。いゝえ。傷の方はそれ程お苦しみになりませんでしたよ。段々氣が遠くなつてあなたの名を呼んで……でも赤ちやんの助かつたのを隨分お喜びになつて抱きしめて……

佐倉。（目をつむる）せめて死體だけなりと僕はもう一度見たかつた。

とし子。その夜は野天の下で弘と二人でお通夜しました。空が晴れて綺麗な星が光つてゐるのが本當に不思議な氣がしました。夜露が降るので佛さんにもつたいないと思つて着物を掛けやうと思つても、家の下になつてどうしても出せないので顔だけ弘のハンケチを掛けて――それでもあくる日の朝迄はお守りしてゐたんですけれど、何しろかれこれしてゐる中にわたしたちの處へも火が廻つて來ましたので、どうする事も出來ませんでした。赤ちやんをわたしが抱いて、弘と二人でやつと逃げたんです。あなたにお見せする迄はと思つたんですけれどどうにも仕方がありませんでした。

佐倉。いゝえ、勿論それは仕方がない事です。隨分お世話になりました。お陰で赤ん坊も助かつたんです。然し一體弘君はどうしたんでせう。あれきり歸つて來ないんですか。

とし子。（暗くなる）あれつきり樣子がないんです。あなたにお知らせすると云つて二日の夕方わたしと別れてから。あなたにお目に掛つたのは三日の何時頃だつたんでせうか。何か變つた樣子はありませんでしたでせうか。

佐倉。三日の午後です。弘君は大變興奮してゐました。救護所で配給の事で働いてゐますと、弘君がいきなり僕に抱きついて何も云はないで泣くのです。僕は直覺しました。おいそがやられたなと思ひました。おいそがやられたんでせうと僕が言ふと弘君は兒供は無事だ、母が預つてゐると言つて、詳しい事は言ふに忍びないやうな樣子で、仕方がない我々は未來に生きやう。ぐず／＼してる時ではないと言つたきり、仲間の人と急いで行つて了ひました。

とし子。仲間の人がゐたんですか。

佐倉、えゝ十人許りゐましたよ。

とし子。(不安さうに)さうですか。ふん(考へてゐる)

佐倉。何かあつたんですか。

とし子。いゝえなんでもありませんけれど、わたしと別れる時の弘の様子がどうも變だつたやうに思ふんです。一日の夜は夜つぴておいそさんの頭の側に坐つて考へ込んでゐましたが、二日の朝になつてからひどく興奮して、おいそさんが死んだのもあんな不完全な長屋の中にゐたからだ。小林さんの家を見ろ、多少ゆがんでゐるが倒れては居ない。あの芝生のついた廣い庭の上に出れば安全でゐられる。然し粗末な長屋の、立て込んだ空地のない家に住んでゐる貧乏人は助からない。と言つてひどく憤慨してゐました。それからあなたの所へ知らせに行くと言つて出かけたんですけれど……

佐倉。兎に角行方不明でも、弘君は生きてゐる事だけは確かです。もう火事も治まつた三日の午后迄無事だつたんですから。

とし子。えゝ、わたしもそれは安心してゐますの。唯何か間違つた事でも爲出かさなければよう御座いますが。

佐倉。そんな事はないでせう。御心配なさらない方がいゝです。

(市街を戒嚴する巡邏兵の一部隊が通過する。月が火に焦げた森の梢の上に出る。向ふのバラック建物の部落に一列に火がともる。)

(赤ん坊が泣き出す。)

とし子。赤ちやんにお乳をお上げなさい。(家の中に這入る)

英太郎。(鉦を打つのをやめ、靜かに後に向く。其の顔は蒼ざめ、ひどく疲れてゐる。)歸つたかい。

とし子。え丶、早く御飯にしませう（コト〲と仕度しかける。）

（間）

英太郎。とし子。

とし子。何ですか。

英太郎。俺は今夜はお前に話したい事がある。飯はい丶。

とし子。（英太郎の樣子が改つてゐるので、御飯の仕度をやめて側に來て坐る。）

英太郎。俺はお前と永い間一緒に暮して色々助け合つて來た。その間色んな難儀に遭つて二人でよく相談したもんだ。色々考へて見ると實際お前は親身によく助けて來て吳れたと思ふ。

とし子。それはあたりまへで御座いますわ。どうしてそんな事を仰つしやるんです。

英太郎。人の一生には災難と言ふものがある。それは人間には測り知る事の出來ないものなんだ。今度俺が出つくわした事はそれだと思ふんだ。

とし子。そうです。全くふりかゝつて來た災難です。あなたがお惡いんぢや御座いません。

英太郎。其處なんだ。人間は目をつむつてそれを受けねばならないんぢやないだらうか。俺のせいぢやなくつても、俺の身にふりかゝつて來た事なんだ。わしがのがれる事の出來ない廻り合せなんだ。俺は潔よくそれを背負うと思ふ。

とし子。………

英太郎。男は其處の見定めが大事なんだ。

とし子。そうには違ひ御座いませんけれど、あんなに一生懸命お働きになつて、かういう事になるなんて……この三十年間あれだけ正直にみんなの爲に盡して來た事が一度に駄目になつて了ふ。そして大きな過ちの疵だけが殘る——本當に天道樣はないのかと言ふ氣が致します。

英太郎。さう言ふな。みな免れられない因縁なんだ。隣りのおいそさんを見ろ。あんなに働き手で、未だ若く、いゝお嫁さんだつたのに、赤ん坊を殘して、ぶつつりと緒が切れたやうに……わしらだつて—

とし子。本當にあんな仲のいゝ夫婦だつたのに……

英太郎。俺も隨分天道が恨らめしく思へたがそれはもうやめた。あの西郷さんが謀叛をしたのは自分のせいぢやなかつたんだ。部下の者や青年たちがやつた事なんだ。西郷さんが青年等が火藥庫を占領したと言ふ事を聞いた時には大隅山に獵に行つてゐたんだそうだ。それを聞くと天を仰いで歎息して、其儘默つて山を下つたそうだ。その時恐らく西郷さんの胸中では「我が事畢る」と思つたんだらう。その儘少しの辯解もせずに、賊の名を着せられて了つたんだ。色々計畫してゐた事も、何もあきらめて—

とし子。(不安に襲はれる)あなたは二十年勤續した、あなたの墓場だと言つてゐらしつた署をおやめになりました。そしてこれからどうなさらうとお思ひになるんですか。

英太郎。(とし子の顔を見る。そして言ひかけた事を躊躇して止める。)

(この時四十才位の人のよさそうな婦人線香と花とを持ち、外から覗き込む。)

婦人。今晩は。

とし子。どなた。近子さんですか。

近子。え〻。納骨堂へお參りして歸りがけですの。

とし子。どうぞお這入りなさいまし。お怪我はもうおよろしいんですか。

お米。え〻。もうかうしてお參り出來るやうになりました。お陰樣で命拾ひをしました。(這入つて來る)

とし子。よくお參りになるやうで御座いますね。

近子。自分だけ不思議に助かりましたから、せめて之れから每日日參したいと思ひまして。本當にあの時岩田さんに助けて戴かなかつたら、それつきりだつたんですもの。考へるとぞつとします。

英太郎。わたしが助け出した人はわたしが死地に陷れた人の何百分の一です。

近子。あなたは又それを仰しやいます。だけどあの時に逃げ込んで來た人はあんなひどい事になるなんて思つたものは一人もありません。現にわたしなんかもそうです。みんな安心し切つてゐたんです。全く運が惡るかつたんですもの。たとひあの時死んだ亡魂が生き返つて來たにしても、あなたをお恨みするものは一人だつてあるまいと思ひます。

英太郎。あなたは助かつたからそう言はれますが——

近子。い〻え本當です。不服を言ふのは亡魂ではない。事情を知らない遺族だけです。

とし子。遺族の方がお恨みになるのは無理はないとは思ひますけれど、あんまりひどく言はれると(涙ぐむ)

近子。無理ですよ。それは。餘り聞き別けがなさ過ぎます。そんな人は多いんですか。

とし子。每日のやうにひどい手紙がやつて來たり、家に石をぶつつける者があつたり、わたしたちが外を步いてると變な事を言つたりする者があるんです。

近子。なんと言ふ人たちでせう。わたしは腹が立つて來ます。

英太郎。いや。無理はないんだ。川向ふの方へ逃げやうとする人たちをわしが叱りつけて、無理に此處へ逃がしたのが大分ある。わしは思ひ出す。あちらの方は何だか氣がさすと言つていやがつた、子供を連れたおかみさんの姿を。あの人もとう〳〵此處で死んで了つたんだらう。

（沈默）

英太郎。（突然）奥さん。あなたが此處で遭難された時の樣子を話して下さいませんか。

とし子。それはもうお聞きにならない方がよろしいでせう。

英太郎。いや。俺は聞きたいんだ。事實を知つて置きたい。そして俺の横着な卑怯な心が頭を擡げるのを叱りつけたいんだ。奥さんどうぞ話して下さい。

近子（目をつむる）わたしは初めは安心しきつてゐました。方々から澤山の人が逃げて來て、それがみんな大丈夫だと言ふので、心丈夫に思つてゐました。然し夕方から風の向きが急に變つたのでみなが不安に襲はれました。そのうちに火が近所迄廻つて來て熱氣で息苦しくて堪らなくなり出しました。其頃はもう火に追はれて來た人でこの廣い空地が一ぱいになつてゐました。どういふものですか人ごみのなかに這入つてゐれば不安で不安で外の方に出たくなり、外の方に出れば餘計に怖ろしくて人ごみの中にもぐり込みたいのです。なんとも言へない氣持ちでした。燒屑が飛んで來る。熱氣で息苦しくなつてじつとしてゐる事も動く事も出來ない不安な氣持ちなんです。その中に急に大きな音が起つてワツと言ふ人聲が聞えたかと思ふと、わたしたちの體は敷いてゐた筵と一緒に空中に舞ひ上げられてゐました。それからは空中と言はず、地の上と言はず、自分の體は吹き廻はされて旋風の儘に無我夢中で――それから何

時間經つたのか、何日たつたのか、ちつとも解りませんでした氣が付いた時にはもう旋風がやんで空には綺麗な星が出てゐました。わたしは身を動かさうとしましたが一足も歩く事が出來ませんでんた。それでもまはりに澤山な死骸を見る事が出來ました。そして逃げられる限りは逃げやうと無意識に側を見ると連れの姿は見えなくなつて、見も知らない女の人が苦しさうに倒れて息をついてゐました。わたしは無意識にあなた逃げませうよと自分でも不思議な程元氣な聲が出たやうに思ひました、するとその女の人はわたしは駄目です、一足も動けませんと言ふのです。その時にわたしは逃げ出す氣はなくなつて了ひました。みなと一緒に死ぬのだと思ひました。そして又ごろりとそこに寢ました。するとわたしの體がどんなに弱つてゐるのかと言ふ事が急に解りました。體の方々が急に痛み出しました。それからまるで死んだやうにぐつたりとしてまたよく覺えてゐません。何時間經つたのですか、氣がついた時には夜が明けて日が照つてゐました。そして方々に人が來て死骸の間をさがし廻つてゐるのが解りました。すると誰かゞ側に來てコツ〳〵と杖でわたしをつゝくのです。そして違つてゐるとつぶやいて行つて了ひました。わたしはその時初めて自分の姿がどんなになつてゐるかといふことが解りました。そしてあきらめて目をつむりました。それでも二三間側を擔架を擔いだ救護隊が通つた時には急にまた生きたい氣が起つて助けてくれと一生懸命言ひました。その人たちはわたしをじつと見て辛抱なさい。少しでも動けるものから助けなくてはと言つて行つてしまひました。わたしは動かうとはしましたが體が少しも動きません。それでももうその時になつてはあきらめる氣はなくなつて、助かりたい一念で心はもがき苦しんでころがつてゐました。そう言ふ風で小半日も經つてから後、岩田さんに助け出されたのです。

とし子。九死に一生と言ひますけれど、あなたのは本當に、もう半分は三途の川を渡つてゐたやうなもんで御座います

ね。

近子。何しろ人には死骸と間違へられたんですから。

英太郎。死なうと思つても死なれないものもゐる。生きたいと思つても死なずにはゐられないものもあるんだ。

近子。まつたくですわ。生き神と死に神と言ふのがそれなんでせう。

とし子。あなたには生き神が憑いたんですね。あなたどうふなさつたんですか。

英太郎。いや、俺は納骨堂へお參りして來る。

とし子。さうですか(不安さうに)こんな話をもうお聞きにならなければいゝのに。

近子。いけませんでしたね。

英太郎。いや、奥さん。それでは失禮します。(假小屋の外に出て、月を仰ぎ見乍ら、沈默の儘佐倉巡査の假小屋の前を通つて退場。)

とし子。(沈默)

近子。惡い話をしましたね。おきゝになるもんだから………

とし子。いゝえ。あれはもうしよつちうその時の事が頭に喰つ付いてゐるんです。それで他の事を話して氣をまぎらさうとしても、それはいやがつて一日中その時の事ばかり話してなきやならないんですの。本當に息苦しくなつて了ふ。

近子。岩田さんはどうも御樣子が少し變ではないでせうか。

とし子。さうお思ひになりますか、やつぱり………

近子。氣を付けになつた方がよう御座いますよ。

とし子。(蒼ざめる。)どうすればいゝんだらう。弘が歸つて吳れるといゝんだのに。

(佐倉巡査入口からのぞく。)

佐倉。岩田さんはいらつしやいませんか。

とし子。えゝ。今納骨堂へお參りすると言つて行きました。何か御用ですか。

佐倉。實はさつき署の友達が來まして。

とし子。おやさうですか此處へはいらつしやいませんでしたが。

佐倉。(口ごもる)實はその………僕がお話しするやうに賴まれたんですが。

近子。ではわたしは失禮致します。

とし子。さうですか。

近子。餘り御心配なさらない方がよう御座いますよ。では又。(退場)

佐倉。(沈默の後)では納骨堂の方へ行つて見ませう。

とし子。何か起つたんですか。

佐倉。………

とし子。佐倉さん這入つて下さい。

佐倉。(這入る)

とし子。(靑褪めて)弘の事でせう。

佐倉。………

とし子。言つて下さい。屹度そうでせう。

佐倉。實は貴女には話すまいと思つたんですが。

とし子。いゝえ。佐倉さんわたしに話して下さい。岩田には今仰つしやらないで下さい。

佐倉。（沈默）

とし子。どうか話して下さい。わたしはもう覺悟してゐます。

佐倉。實は弘君がある陰謀事件に關係したんです。

とし子。………

佐倉。で今搜索中なんです。

とし子。どういふたちの陰謀でせう。それが岩田にとつて大きな事なんです。

佐倉。………

とし子。岩田は地震の事から責任を感じて御承知のやうに思ひつめてゐるんです。頭が段々冴える一方で今夜などの樣子では……

佐倉。岩田さんには今お話しにならない方がいゝと思ひます。

とし子。どういふたちの陰謀なんですか。

佐倉。革命に關係した陰謀です。（曖昧に）僕はよくは知りません。然しあの弘君がやる事です。恥知らずな事をやる筈はありません。その點は御安心なさつていゝと思ひます。

とし子。あの子は恥知らずな事をするやうな奴ではありません。國事犯と言ふのでせうか。

佐倉。僕にはよく解りません。唯動機は貧乏な人たちを助けたいと言ふ事の他にはない事だけは信じます。

とし子。申譯のない事です。でもそれでしたら岩田の心をこの上取返しのつかぬ程打ち砕いて了はずにすむかも知れません。でもつかまつたらどうせ監獄で御座いますね。

佐倉。御氣の毒な事です。

（二人沈默。）

とし子。弘は此處へ歸つて來はしないでせうか。

佐倉。歸つては來ますまい。歸れば手がつきますから。何處かに隱れてゐるでせう。

とし子。何處にゐるのでせう。

佐倉。多分東京にはゐますまい。

とし子。わたしは三日の朝別れたきりあの子を見ません。まだ火事跡の目まぐるしい神田の通りで別れてから……

（隣りで赤ん坊の泣き聲が聞こえる。）

とし子。赤ちやんが泣いてゐます。行つて見て上げて下さい。

佐倉。どうか力をお落しにならないで下さい。悪い時には悪い事が重なるもんです。

とし子。有り難う。もう覺悟して居ります。

（赤ん坊激しく泣く。）

佐倉。（出て行く。）

とし子。（暫らくじつと坐つて考へてゐる。）

（ワンタン賣の聲が外を通り過ぎる。）

とし子。（身を起し、夫の歸りを待ち佗びるやうに戸口に出て、月明りの外を眺める。暫らくその儘考へてゐる。軈てがつかりしたやうに家に這入り、夫が先き迄叩いてゐた眞鍮の鉦とその上に置かれた粗末な木製の鐘と、線香の燃えさしのくづれた灰皿とをじつと見る。深いあきらめの表情が彼女の顔に浮かぶ。その儘靜かに位牌の前に坐る。）

弘。（四邊に氣をくばり乍ら登場。戸口から覗く。母の姿を眺め、涙が急に込み上げる。）

とし子。（弘に氣が付いて驚く。一瞬間沈默）

弘。（中に這入る。）おつかさん、僕は監獄へ行かなければなりません。

とし子。わたしはもう知つてゐます。

弘。一寸御別れに來たのです。

とし子。（涙を抑へる。）仕方がない。大事にしてお呉れ。

弘。お父さんは。

とし子。署をやめて責任を感じて毎日苦しんで許りゐられる。

弘。新聞で知つてゐます。實にお氣の毒です。僕會つて行きたいのだが………

とし子。直ぐ御歸りになるだらう。納骨堂へお參りされたのだから。

弘。やつぱりお目に掛りますまい。この上又僕の事で………

とし子。お前は恥知らずな事をしたんではあるまいね。お父さんに立派に申しひらきが出來るだらうね。

弘。(急に興奮する)勿論です。然しお父さんはどうお考へになるかは別問題です。僕は××事件に關係したんですから。

とし子。(驚く)××事件?

弘。そうです。

とし子。(蒼褪める)それではとてもお父さんが……何と言ふ大それた……

弘。僕はそんな事をかれこれ言ひに來たのではないのです。僕は唯お別れに來たのです。そんな事を言つたつて初まりません。(涙ぐむ)僕はもう直ぐつかまるでせう。

とし子。何も言はない。大事にしてお呉れ。

弘。(あたりを見廻し)ではお大事に、お母さん。僕はもう行きます。

とし子。……

弘。(泣く)僕を赦して下さい。どうか力を落さないで下さい。

とし子。わたしはもう驚きません。(非常に落着いた、すなほな調子で)自首した方がよくはないだらうか。

弘。ふん。僕はそんな善良な人間ぢやありません。(强い憎しみの表情を浮べる。)

とし子。(憐れみの心で弘の顏を見る。)わたしはもう何も憎いものはない。悲しい事もない……大事におし。

弘。さようならお母さん。(涙が一ぱいたまる)

とし子。(じつと弘の顏を見る。最も自然な、母らしいいつくしみを以て。然し涙はこぼれない。)

弘。（退場）

とし子。（部屋に歸り、靜かに位牌の前に坐る。）

（數瞬間沈默。やがて外に若干の人群の口笛を吹く音が聞え、小石がバラ〳〵と飛んで來る。聽て佐倉巡査の叱咤する聲。）

佐倉。馬鹿！何をするんだ。何んと言ふ馬鹿者だ。お前たちは。

とし子。（部屋の中で靜かに位牌に向つて手を合せる。）

——幕——

第四場

納骨堂前　同じ夜の深更。背景に廣場を越えて、向ふにバラック街の灯の列と、黒い森が見える。月はもう小さくなつて空に懸かつてゐる。納骨堂前所々に卒塔婆、地藏尊などあり。堂前の大きな供養箱には人々が思ひ思ひに捧げた花が積まれ、燃え殘つて煙つてゐる線香の烟がかすかになびいてゐる。英太郎堂の前に跪いてゐる。

やゝ永き間。

英太郎。（立ち上り、フラフラと廣場を歩む。半ば濡れたものゝやうに見える。顏色は青く、着物は夜露に濡れてゐる。）西では二百三高地、東では被服廠跡（又默つて歩む）何萬と言ふ精靈が此處で受難したんだ……人間はみんな受難者だ。俺もそうだ。（又默つて暫らくあちこち歩く）命の惜しいものは被服廠跡へ逃げろ。命の惜しくないものは川向ふへ逃げろ。（彼は突然立ち留り、墓標の如く立つてゐる。暫らくして吐き出すやうに言ふ）何萬と言ふ墓石を斉

負つて生きて行く事が出來るか……嗚呼乃木將軍……

(彼は廣場を歩みつゝ背景の端の方迄行き、其處にある材木の上に腰を懸け、じつと考へてゐる。とし子登場。夫の姿を月明りに認め、一瞬間立ち留る。軈て靜かに夫の方へ歩いて行く。)

英太郎。(人影に氣が付き、立ち上り、又廣場を歩き出す。)

とし子。(夫の側に行く。)あなた。

英太郎。(我に返つたやうに)お前か。

とし子。餘りお歸りが遲いもんですから……

英太郎。餘り月がいゝので……丁度いゝ。一緒に散歩しやう。俺たちはもう永く一緒に歩いた事はないな。

とし子。(すなほに寄り添ふて歩く。)えゝ。ずつと若い時からこつち……

英太郎。二十五年……お前と俺とはそんなに永く一緒にゐるのだな。

とし子。えゝそうです。わたしが十六の時ですから。あなたは濡れてゐますね

英太郎。なに構はない。かうして歩いてゐると何だかずつと昔のやうな氣がするね。はゝゝ。

(二人暫らく默つて歩く。)

とし子。(突然)あなたの今思つていらつしやる事を言つて下さい。お心の中にある一番大事な事を。

英太郎。(沈默)言つてもいゝのか。

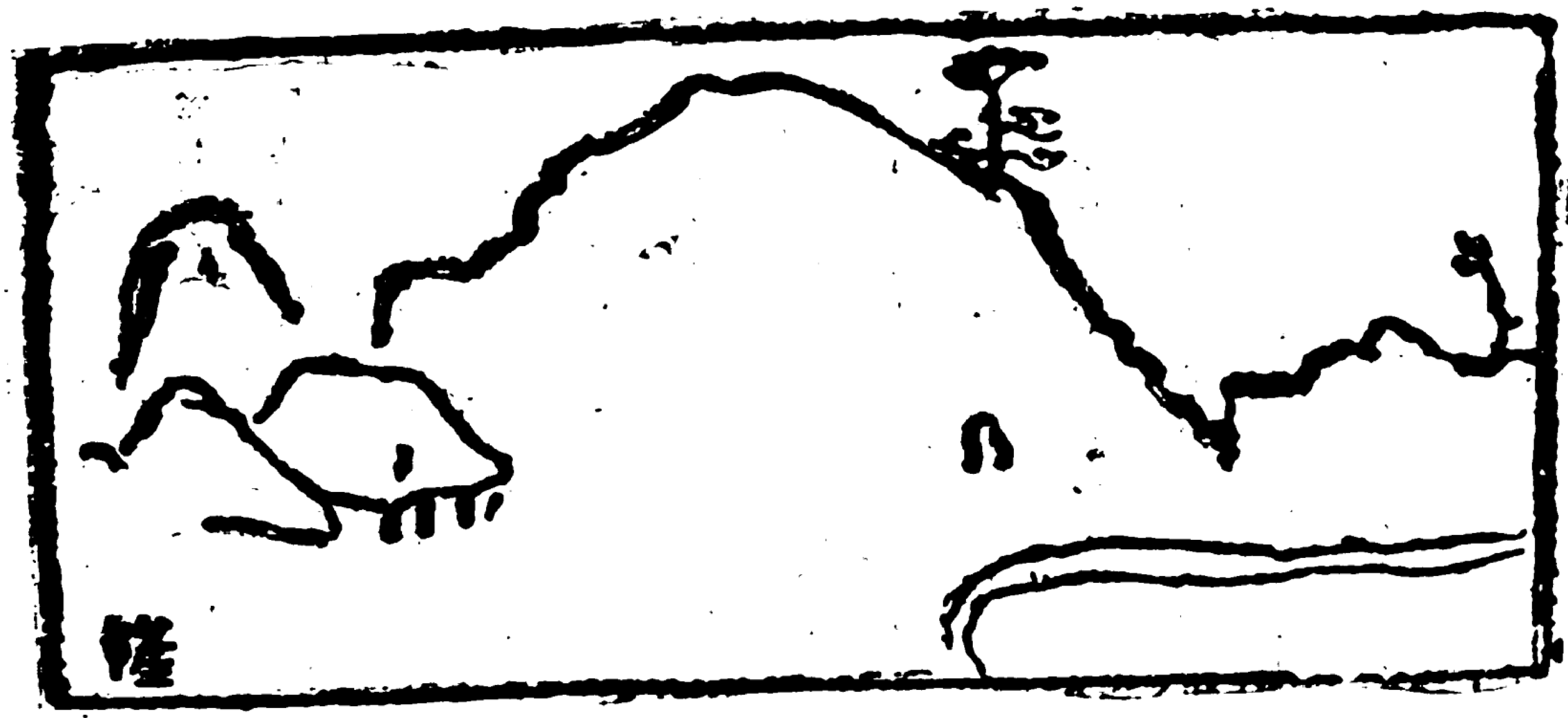
とし子。はい。

英太郎。(月明りにとし子の顔を見る。卒塔婆の前にある石の上に腰を懸ける。)俺は死ぬ氣だ。

とし子。………
英太郎。お前に默つて死なうか、どうしやうかと迷つてゐた。
とし子。（懷から短刀を出し英太郎に示す。）
英太郎。（沈默）すまなかつた。
とし子。乃木さんたちのやうに……
英太郎。うむ。
とし子。その前に申し上げて置かなければなりません。弘は陰謀に加はりました。××事件です。
英太郎。（目をつむる。）さうか。
とし子。わたしはもう何も悲しい事は御座いません。
英太郎。業緣だ。
とし子。何も恨みますまい。
英太郎。（うなづく）二人が一つの石にならう。（短刀を拔く。）
とし子。（うなづき手を合せる。）
（大都會の曉の最初の動きをつたへる汽笛が遠くで聞こえる。）

――幕

（一九二五、八、三〇）



一樹の蔭

野上彌生子

彼は郊外にある書室のベッドで眼を覺ました儘、向側の壁の古風なクツクー時計が十時を打つのを聞いてもまだ起きなかつた。壁と直角になつた廣い磨硝子の窓からは、五月の輝かしい日光が一杯に溢れ込み、天井の高い、がらんとした板張の部屋を、調節された眞珠色の光線で充たした。壁の其處此處に吊された畫は、その程よい媒介體を通して、それ〴〵の位置から寢床の主人に優しく笑みかけた。高いモデル台が、まだ冬のまゝのストーヴと並んで、武骨な忠僕のやうに突つ立つてゐる。何處かで鷄が長々と啼いた。ごろごろと云ふ鈍い轍の音が往來に起こる。高調子の話聲が續く。夜を冒して東京の市場に野菜を積んで出た村の人たちが、歸つて來たのである。

少くとも一年前までの彼に取つては、毎朝の斯うした眼ざめは、一種快い詩であつた。彼は床の中で十分それを樂しむために、三本の煙草を出來るだけゆつくりと

ふかす。淡い薫のよい煙が、しーんとした部屋の中を、靜かに斷續して漂ふ。彼は滿足しきつた快活な眼で、五分間ぢつと煙のあとを追うた後、今度は眼を壁の畫の方へ轉じて、遠くから一つ〳〵熱心に點檢する。拙くないと思ふ。一層愉快になる。丁度窓一杯に漲つた光線の調子もよい。彼は急に激しい製作慾に捕はれる。で、寢床から飛び起き、口笛を朗らかに吹き立てながら、其處いらぢうの物を引つかき廻して着換をする。同時に、モデルは午後からでなければ來ないことを思ひ出す。彼はがつかりし、また腹を立て、あの白い象のやうな身體をした、おしやべりの、大物喰の、少し足りないモデル女を腹の中で散々罵る。畜生！何處をほつつき歩いてやがるんだ。兎に角、そんな奴をのんべんだらりんと待つちやゐられない。——書生の村瀬が、主人の起き出たらしい樣子を知つて畫室を覗きに行つた時には、彼はもう畫具箱をかついで飛び出してゐた。

併し今の彼にはその頃のやうな元氣はすつかりなくなつた。この一年間、彼の上に降りかかつたあらゆる不快な出來事が、四月ばかり同棲した女の醜惡な行爲が、仲間で組織してゐた畫會の解散が、それを誘導した友達のさもしい爭が、その奸計と裏切が、彼を打碎き、丁度有毒な瓦斯が、青葉の新鮮な美しい色素を褪色させて仕舞ふやうに、彼の快活と無邪氣な信頼を彼から奪ひ取つた。彼は別人のやうに氣むづかしくなつた。一切の交遊を絕ち、面倒な世俗的係累から遁れて畫室に閉ぢ籠つた。が、災難はしつこく追つかけて來た。彼の愛する弟子であり、現在では寧ろ唯一の友達であつた村瀬が肺病になりかけて國に歸つた。斯うして完全な孤獨と憂鬱の中に、彼は僅の雇ひ婆さんと二人つきりで殘されてしまつた。併し何より怖るべきことは、この空虛な生活と共に、彼が自分の仕事に對してまで自信を失ひかけたことであつた。

彼は起きることを知らないものゝやうにいつまでも寢床にへばりついたまゝ、眼だけを鋭く見開き、ぢつと壁の上を

凝視してゐた。どの畫も一つとして彼を滿足させなかつた。色が生だ。構圖がなつてない。悉く拙い。欠點だらけだ。胡魔化しだ。斯んな下手糞な畫を描いて、誰だ、今までいゝ氣になつてゐたのは。――彼は危く叫び込みさうになる心を紛らすために、わざと他人の畫に對するやうな悪口を浴びせかけ、その飛ばつちりをモデル臺とストーヴと煙突に持つて行つた。何んだつて揃ひも揃つてそんな處にぼんやり突つ立つてゐるんだ。間抜の、唐變木の、へちやもくれ！彼は寢返りをした。窓の光線が額に直射する。今の彼にはその調子のいゝ光の洪水が却つて忌々しかつた。カーテンで遮斷してやらうと思ひながら、寢床を出るのが面倒臭い。身體ぢうが變にけだるく、頭が重い。彼はそのまゝの姿勢で、右の手だけを寢床の外に突き出し、枕許の圓い卓の上をかき廻した。煙草が欲しかつたのである。併し手は煙草の罐を探し當てる前に、先刻聾の婆さんが、主人の眠つてゐるのを見て默つて卓の端に置いて行つた一束の手紙を摑んだ。

「誰から來たつて、どうせ碌なことを云つて來やしない。」

併し、どんな手紙にしろ、見ないで打つちやつて置けるほど悟つてはゐなかつた。反對に彼の寂寥と憂欝に蝕まれた心は、かたくなに冷え切る代りに、壓し潰された。當て度のない熱情でいぶり立ち、同時にその内訌した强い感情を、素直にほぐして吳れる何物かに對してあこがれてゐた。假りそめの優しい一言、ほんの僅かな眞情の表示も、この狀態の中では偉大な作用を及ぼすであらう。

彼は握んだ手紙をいつもするやうに枕の端に挾み、上から順々に引き出して見て行つた。最初の手紙は飮んだくれの叔父からの無心狀であつた。このやくざ者は、親達が達者な間は親達に、親達が亡くなつてからは甥の彼に散々厄介をかけた末、東京を飛び出した。何處を渡り歩いてゐるのか平生は分らない。たゞ金をせびらうとする時だけ、住んでゐる場所と生きてゐることが分かる。今度の手紙は神戶からで、電車にはねとばされて大怪我をして、身動も出來ない始

末だから、幾らでもいゝ送つてくれと云ふのであつた。

『さう〳〵火事に逢つたの、チブスにかかつたのとも云はれないからた、電車をかつぎ出したところは思ひつきだ。』

彼は手紙を丸めて床の上に放り出した。この電車の怪我を成功させれば一ケ月後にはきつと自働車にでも曳かれるに相違なかつた。

次は葉書であつた。もとの仲間の、一番狡いことをしたと信じられてゐるKが、すぐ近所の村に建ててゐた新しい畫室に移つたと云ふ通知を寄越したのである。お手のものの器用な地圖を添へた活版刷の文句の間に、ペンで書入がしてあつた。

『今度は君のところが一番近くなつた。ちとやつて來ないか。僕もその内行く。』

『よく斯んな洒々したことが云へるなあ。』

彼は怒るよりはちよつと感心した。

葉書をまん中から引き裂いた。

併し三番目の手紙が彼に與へた結果に比べれば、前の二つの通信はそれほど不快なものではないと云つてもよい位である。それは別れた女から來たものであつた。はじめは哀願と謝罪の調子を取つてゐた彼女の手紙が、今では露骨な脅迫狀になつてゐる。女は現在の自分の不幸を彼の無情と理由のない嫉妬に歸し、その責任を問ひ、若し要求を容れなければ裁判沙汰にしても爭つて見せると息捲いてゐる。要求と云ふのは、彼女と彼女の中に育ちつゝある者のために金を出せと云ふのである。

讀み終ると彼は毒物でも取り扱ふやうな丁寧さでそつと手紙を疊み、元のごとく封筒に收めた。——彼は重い溜息を

吐いた。憤りも怖れもしなかつた。たゞ斯んな醜悪な爭の中に引きずり込まれた自分の愚かさが厭はしかつた。否、斯んな醜悪な爭が、自分の最も手近なところに發生してゐると云ふ事實に堪へられなかつた。

『おれは斯んなものは封を切らないで紙屑籠に投げ込む決心が何故ないのだ。どうせ碌な手紙ではないと知り切つてゐて矢張り讀む。而して求めて毒氣に當てられる。馬鹿。』

彼はこれ等の手紙で今日の一日がめちや〳〵になつた氣がする。これから起きたつて何かいゝ事があらうとは信じられない。もつと寢てやれと思ふ。眠つてゐる間だけは確かに平和なのだ。——彼はその前に先刻飲み損なつた煙草を一服やるために、腹這になつて卓の上を本氣に探さうとした。と、飛んでもない向の端に轉がつてゐたネヴイ・カットの罐と並んで、今一通の氣取つた澁い色の洋封筒が殘されてあるのを認めた。

『ふん。』

彼は顏をしかめた。もう誘惑されるものかと思つた。で、封筒には目もくれなで、寢床から身體を乘り出し、一杯に伸ばした手先でやつと屆いた罐を引き寄せると、中から一本摘み出して、側にあつたマッチをすつた。口の中に湧き込むもや〳〵した、暖い、刺戟性な感觸、快い、馴染の香氣、または悠々と立ち昇る煙自身の姿が、彼の胸に和らぎを與へた。彼はその輕い陶醉の中に何もかも忘れた積りでゐた。併しちらと見た封筒のことが、矢張り注意から消えてはゐなかつた。

『誰だらう、あんな封筒を使ふ奴は。ちよつと思ひ出さないな。』

一本の煙草を吸ひ盡す間、彼はそればかり考へてゐたと云つてもよかつた。兎に角、差出人の名前を見れば大概見當はつく。いやな奴から來たのなら、開けないまでだ、この口實は彼に氣休を與へたので、二本目の煙草を取る序に、封

筒を取り上げ、裏を返して見た。福岡市、大學病院、病理學室、丹生勤と書いたペンのしつかりした署名が現はれた。これは封を切ることを躊躇させる名前でなかつた。中學の同窓で、不斷は碌に交際もしないが、何か用事があると、腕白時代の氣安さでどんな我儘も云へると云ふ種類の友達であつた。一と月前村瀬が病氣で故郷の豐後に歸ることになつた時、彼は丹生が福岡の醫科を出て助手になつてゐるのを思ひ出し、紹介狀を渡して置いた。

『前略、御紹介の村瀬君が一昨日訪ねて來た。――』

『まだ行かなかつたのか、何んて愚圖だ。いや、村瀬のは愚圖ぢやない、呑氣なんだ。肺病になりかけてると云はれてもあの呑氣さを失はないところが村瀬だ。』

彼は開いた手紙の上に眼を急がせた。

『君の近況を聞いて懐しかつた。僕は相變らず頑健で檢微鏡覗きをやつてゐる

さて村瀬君の病氣は、案外快くなつてはゐるが、右肺の後端部にまだ幾らかラッセルがきこえる。たちの惡いものではなささうだが、今のうち完全に癒すことが必要だ。早速入院の手續をさせて、今日から來てゐる。今後同君のことは僕が責任を以つて引き受けるから御安心を乞ふ。併しこの際君に報告して置かなければならないのは、僕が村瀬君の世話をするのは、君から紹介された爲ではない。また君の大事な弟子だと云ふ爲でもない。或る事情から、僕自身が報恩の意味で村瀬君に盡さなければならないのだ。話が長くなるから順序を追うて書かう。ゆつくり讀んでくれ。

僕が高等學校の二年の時だつた。僕等は夏休みを利用して九州一周旅行なるものを企てた。一行は僕と、Aと云ふ一高で知り合ひになつた山口の男と、中學の上級に居た僕の弟の三人。先づ大分の家から出發して北九州を迂回

して、長崎をも省かないで、熊本、鹿兒島とめぐり、日向、豊後の海岸をつたつて歸らうと云ふ計畫だ。それも僅かな旅費で、全部歩かうと云ふのだから、今から考へると無謀極まる話だ。併し僕等は意氣軒昂として出掛けた。最初の一週間ばかりは兎に角旨く行つたのだが、長崎に入り、それから熊本の方へ志した頃から少し草臥れて來た。何しろ暑くてやりきれない。にも拘らず三人は行く先で怖ろしく食ふ。大徳寺の燒餅なんざ幾ら食つたものだか分らない。長崎には少くとも二日以上は滯在すべきだと云ふ意見が一致したのは、浦上の天主會堂乃至南京寺の引力ではない、その間に三人はあの燒餅を思ふさま食つてやらうとしただけなのだ。他は推して知るべし。そんな譯で、熊本に着いた時には殆んど無錢旅行に等しい狀態になつてゐた。この際、電報で家から金を取り寄せるなんてことは、當時の僕等には考へられない屈辱であつた。とは云へ、その儘鹿兒島へ下るのもちよつと心細かつた。で、熊本から阿蘇の裾を過ぎて東海岸へ向けて横斷しやう。別府が其處に我々を待つてゐる。つまり計畫の一周を半周に縮めやうと云ふ譯だ。熊本を立つた日は、今までの暑い旅行中でも特別に暑い日であつたが、山にかかると一層たまらなくなつた。何しろあの山は樹木らしい樹木が少しもない上に、單調な坂が無數に連つてゐる。眺望が利かない。噴火口から立ち上る淡い褐色の煙がまつ靑なぎら〲した炎天に長く尾を引いてゐるのも、壯大と云ふよりは變に暑苦しく見える。僕等は登山しないのが最初は心殘りであつたのだが、その時には未練もなかつた。上まで行つて見たところで余計な暑い思ひをするに過ぎないと思はれた。兎に角一時間でも早くこの山嶽から拔け出さうとあせり、殆んど強行軍をやつた。途中の、丁度熊本から一日の旅程に當る町に入つた時も、まだ行かうと云ふ勢ひで歩き續けた。其處までは上出來なのだが、頓て日が入り、あたりが暗くなりかけても同じ山、同じ坂が盡きたいのを見ると、今夜は何處へ寢るんだと云ふ心配が生じた。ひどい目に逢つた末、それでも僕等は終に一つの

小さい村に辿り着いた。すると泊めて呉れる家がない。どの家も宿屋ぢやないと云ふ挨拶だ。もう身動きも出來ない程疲れ果て、その上空つぽうの胃袋と同樣に中身のない金入を抱えて、その時の僕等がどんなに悄げ込んだか想像して呉れ玉へ。併しそのまゝ道端に倒れてしまふ譯にも行かないし、野宿するならするで適當な場所を探さうと決心して、僕等はとぼ〳〵と村外れの方へ重い足を曳きづつて行つた。瘦せた犬が吠えつく、振り返ると、向の暗い空に、阿蘇の噴の煙が濁つた赤い火になつて棚引き、續く外輪山の頂を射光でうす赤く照してゐる。その妖怪じみた背景の中で、僕等は三人の乞食のやうにうろついてゐたのだと思へば間違ひない。村を通り拔けたところに小さい岡があつた。木立を通して灯が見えてゐた。僕等は位置から考へて寺か社だと思つた。この想像は僕等を元氣づけた。どちらにしろ普通の民家のやうな無情を示しはしないと考へたからである。僕等は足の痛みも忘れて暗い坂を上つた。併しそれは寺でも社でもない普通の家で、明けつ放した部屋のまん中に僕等の目に入つたランプが吊るしてあり、緣先には蚊ふすべの土鍋が置いてあるきりで誰もゐない。植物性の青臭い煙の中に、蜜柑の皮らしい匂ひがしてゐる。僕等は緣の外に立つて交る〳〵呼んで見た。すると同じやうに明けつ放しになつてゐる土間の横から、一人のおばあさんが一束の木の枝を抱えてあらはれた。裏へでも蚊ふすべの材料を折りに行つたのだ。僕等は三人の異樣な大男に驚いて立ち留つたおばあさんの前に飛んで行つて、一夜の宿を乞ふと共に、姓名、生れた町、學校、今までの旅行の道程、すべて自分たちの身分と、怪しい者でないと云ふ證明に役立つ一切のものをさらけ出した。これで拒絕されたらお仕舞だと思つて一生懸命だつたのだ。この說明に安心したのか、でなくも生來情深い質であつたのか——確かに後者であつたことはあとの話が證明するのだが——おばあさんはひどく丁寧に僕等を迎へてくれた。而して前の坪庭にある暗い井戸から水を汲んで來て、足を洗への、身體を拭けのと世話をしてく

れた。僕等も云はれるまゝに足を洗つたり身を拭いたりして、いゝ氣持になつて家へ入つて見ると、おばあさんはランプの下の圍爐裡の前に坐つて、灰の下から火をほじり出し、それに金網をかけた。それから後の戸棚をあけて小さい鉈を持つて來て、その中から餅を出して網に載せた。今日は親類の村の祭で若い者たちが泊りがけで行つたので餘分の飯が炊いてない。この餅でも食べてくれと云ふのである。僕等はその時にはもう泊めて貰へるだけで澤山だと思つてゐたのに、意外な御馳走にありついて夢のやうな氣がした。一體僕は今でも餅は好きだが、殊に餅の燒ける匂ひが堪らなくいゝ。あれこそ眞に日本的な家庭の匂だ。幾つになつても、昔甘へた母親の優しい膝を思ひ出させる匂だ。さうは思はないか、君。兎に角そんな譯で、おばあさんの燒いてくれた餅はこの際何よりも愛情を感じさせる食べ物だつた。最後には僕等は一宿をまめた旅人と云ふよりは、息子か孫のやうに三人でおばあさんの傍に坐つて愉快に食べた。尤も皆んなで十切あるかなしの餅は、僕等の飢えきつた胃袋には洞穴に小石を二つ三つ投げ込んだほどの反應もなかつたのであるが。――併しおばあさんはそれきりで打ちやりはしなかつた。餅がすむと、今度は土間の隅から唐もろこしを提げて來て、またそれを燒いてくれた。奥の座敷に吊つた廣い蚊帳の中で、頓て僕等は思ひもかけない樂しい眠りに落ちた。翌日は暗いうちに立つ積りであつたのだが、前の日疲れ過ぎた上に、餘りいゝ氣持で寢たので、目が覺めた時には日が高かつた。僕等はあはてて飛び起きた。見ると例の爐端に大きな飯櫃と共に古風な三つの膳が並べてあり、爐の上の自在鉤には味噌汁の鍋がたぎつてゐた。おばあさんが僕等のために早く起きて用意して呉れたのだ。勝手に食べてくれと云ふので僕等も顔を洗ふと遠慮なしに膳に着いた。飯櫃の飯はまつ白であつた。そればかりではない、おばあさんはその飯で大きな結飯を作つて、めいめいに竹の皮に包んで呉れた。昨夜からのおばあさんの親切は、香氣な、人にどんな世話になつても平氣でゐられる年頃の僕等

にも強い感銘を與へないではゐなかつた。且つ朝の明るい光線で注意して見ると、家は普通の百姓家よりは大きな構へであるが、ひどく荒れて、衰へた舊家と云ふ感じが出てをり、物質的には決して裕かでないことが想像された。で、僕等は少しでも多くの謝禮を殘すことに依つて自分逹の深い感銘を表はし度いと思つたのだが、三人の金入れをはたいても二圓とない始末でどうにも出來ない。併し僕等は大決心を以つて半分をおばあさんに贈ることに極めた。忘れもしない。五十錢銀貨一枚と十錢が三枚だ。それを鼻紙にくるんで僕が愼んで爐端のおばあさんに持つて行つたものだ。ところがおばあさんは受け取らない。而して斯う云ふことを云つた。實は私の家にも一人孫がございます。男の子のことですから、いづれは上方の學校へも上りませうし、旅をもいたしませう。一生の間にはいつ何處でまたあなた方のお世話にならないとも限りません。ですからどうぞ何んにも御心配下さいますな。世の中は相待ちでござゐます。――僕はこの言葉が妙に忘られないでゐた。而かも十年後の今日、おばあさんの云つた一人の孫にめぐり逢つたと云ふのは何と云ふ不思議だらう。村瀬君は――』

歡喜の颶風が彼の目と心をくるくる舞させた。彼はもうぢつと讀んではゐられなかつた。彼は寢床から飛び出すと行きなり後の窓を引きあげ、身體を突き出し、大聲と手眞似で雇ひ婆さんを呼び立てた。

『おい、婆や、婆や、ちつと來い。』

書室の後にくつついた小さい家にゐる婆さんを呼ぶには、この窓が一番便利であつた。婆やは聲が聞き取れないでも、開いた窓と手振で主人に用事があることを知る。で、その時も急いで書室の方へ廻つたがドアを開けると呆つ氣に取られて立ち留まつた。主人がだらしのない西洋寢捲のまゝ、右手に四角な紙片を持つて部屋のまん中に突つ立ち、何か彼を夢中にしてゐる時にいつもするやうに、左手を空に振り廻しながら、愉快で堪らぬと云ふ風で相恰をくづしてゐ

る。床には新聞がはね飛ばしてある。封筒や引き裂いた葉書が散らかつてゐる。併し婆やはそこで長く呆つ氣に取られてゐる暇はなかつた。

『おい、婆や、素敵に愉快な話があるんだ。まあ、こつちへ來い。』

彼は自分から飛んで來て、部屋の卓の傍へ引つ張つて行つた。

『おれの友達が、今この手紙で知らして來たんだがね、村瀨のお婆さんなるものが實に佛様見たいなお婆さんなのだ。このお婆さんにね、十年前に――』

興奮すると少しどもる癖のある彼は、彼の友達がどんなに親切にされたか、その親切に對してお婆さんがどんなに謙遜であつたか、また彼等の親しい村瀨が、實はそのお婆さんの孫であつたことがどうして分つたかを、縺れる言葉で、ぶつつけに、順序なく話した。

『で、僕の友達はね、十年前のおばあさんの愛に報いるために、村瀨のために出來るだけのことをすると云つて來た。どうだ。いゝ話ぢやないか。僕は近頃斯んな氣持のいい話を聞いたことがない。學者が火星に旅行する方法を發見したよりもつと素破らしい報告だ。さうだとも。火星どころぢやない。この方は人間を天國へ連れて行くんだからな。はツはツはツ。愉快だ。斯んな話を聞くと、人間の世界も決して惡いもんぢやないと云ふ氣がするよ。ねえ、婆や、さうぢやないか。』

それまで夢中に、我を忘れて饒舌り續けた彼は、卓の前に棒立になつて、皺の寄つた口を開け、くぼんだ茶つぽい目に子供のやうな當惑の色を浮べて、あつけらかんと主人の動く唇を見守つてゐる小さい白髮頭に氣がついた時、自分が誰を相手に話してゐたかを思ひ出した。彼は婆やの怖ろしい聾を忘れてゐたのだ。併し、そんなことはどうでもよかつ

たのだ。婆やがゐなければ、ストーヴでも煙突でも相手にして饒舌つたに相違なかつたから。同時に不断の彼には、婆やの聾は可なり我慢のならないもので、とんちんかんな事を返事をしたり、命じたものを間違へて持つて來たりすると肝癪を起してしてゐたに拘はらず、この場合は決して腹が立たなかつた。この年になつても人に使はれてゐる不具な年寄に對して、今までにない憫と同情を感じさへした。彼は優しい身振で、もう用事はないのだと云ふ意を傳へた。而して最初からお仕舞まで譯の分らなかつた婆やが、狐につまゝれたやうな顔をして部屋を出て行つたのを見て、可笑しくなつた。と、現在の彼を支配してゐる樂しい滿足な氣持が、その滑稽感と結びついて、不意に少年のやうな哄笑に彼を誘ひ込んだ。卓に片肘をついたまゝ、彼は涙を出して笑つた。二分の後、やつとその奇妙な發作から恢復した彼は立ち上り、大跨に部屋の中を歩き出した。悦びがまだ胸一杯であつた。彼は恍惚した氣持ちで幸福の後味を味ひながら無意識に壁の畫を眺めて行つた。不思議にも一時間前彼を失望さしたすべての畫が、今の氣持ではそれほどいやでもなく、どの作品にも、一度は彼を滿足さした獨自の魅力と價値が甦つてゐるのを發見した。彼の唇からは幾月ぶりかで朗らかな冴え／＼した口笛が鳴り響いた。丁度その時、時計の下にあつた一枚の秋の果物を描いた六號のカンヴアスの前を歩いてゐた彼は、急に何か考へついたやうに足を留め、改めて畫面を熱心に熟視した末、手を伸ばしてその畫を外づした。彼は部屋の隅から新聞紙を持つて來て外づした畫を丁寧に包んだ。それから大急ぎで外出の支度をした。

午後、下町の或るカフエの卓の一つで、朝飯と一緒の遲い晝飯を取らうとした時には、彼の内懐は裕であつた。彼は輕い樂しい氣持で好きな料理を誂へ、たんと飲めない酒さへ命じた。斯んな場所に斯んな氣持でかけてゐるのは、實に久しぶりであつた。食事がすむと、彼は途中で買つた書簡箋をポケツトから引き出し、卓の端で、萬年筆で村瀬に手紙

を書いた。

『丹生君の手紙で、君達の深い因縁を知つた。何と云ふいゝお婆さんだ。君のお婆さんと云ふ人は、丹生君の眞率な報恩的態度も愉快だ。人間と人間が斯んな不思議な、而かもこの上なく美しい繋がり方をされると云ふ事實は、この世に生き甲斐を感じさせる。實際、僕は君のお婆さんに依つて今日はすつかり幸福になつた。斯んないゝお婆さんのついてゐる君が肺病になぞなるものか。天がさせない。――』

だから安心して少し遊んでゐれば癒るのだと云ふことを力説すると共に、余計な金が入つたから小使を贈る旨を傳へてペンを措いた。彼はカフエのすぐ傍に小さい郵便局があるのを知つてゐた。で、勘定をすまして卓から立ち上ると、其處に入つた。手紙を出す前に爲替を組まなければならない。彼は窓口に立つて金入から何枚かの紙幣を取り出した。併しその瞬間、丹生の手紙と一緒に受け取つた他の二つの封書のことが、意識に浮んだ。彼は今度はありつたけの紙幣を摑み出し、一枚の代りに三枚の爲替を組んだ。而して一つは豫定の通り村瀬の手紙の中に、他の二つは單にそれだけ封じて書留にした。

『叔父もあれでまた飲めるんだ。まあ飲ましてやるさ。――あの女にしても、もう安心して子供が産めるだらう。誰の子供にしろ、兎に角無事に生れて來ることは目出度い。』

歸りの電車に乘つてまでも彼の上機嫌は減じなかつた。追加した二つの爲替のことが、一層快感を强めたのであつた。彼は明け放した窓から晴れ〳〵した顏を突き出し、午後四時過の射光に照らされた郊外の瑞々しい新綠を眺めて行つた。空の色も空氣の調子も申分がなかつた。この惠まれた季節に、一體何を毎日してゐたんだと云ふ氣が彼はした。明日からうんと描くぞと決心した。素敵にいゝものが描けさうに思へた。無事で仕事が出來る。無上の幸福ではない

か。――數ヶ月の陰鬱と焦慮はもはや完全に消散し人生と生活に對して新たな希望が甦つた。彼はのびやかな樂しい興奮の中に他の一切を忘れ、うつとりと馬鹿のやうにかけてゐた。

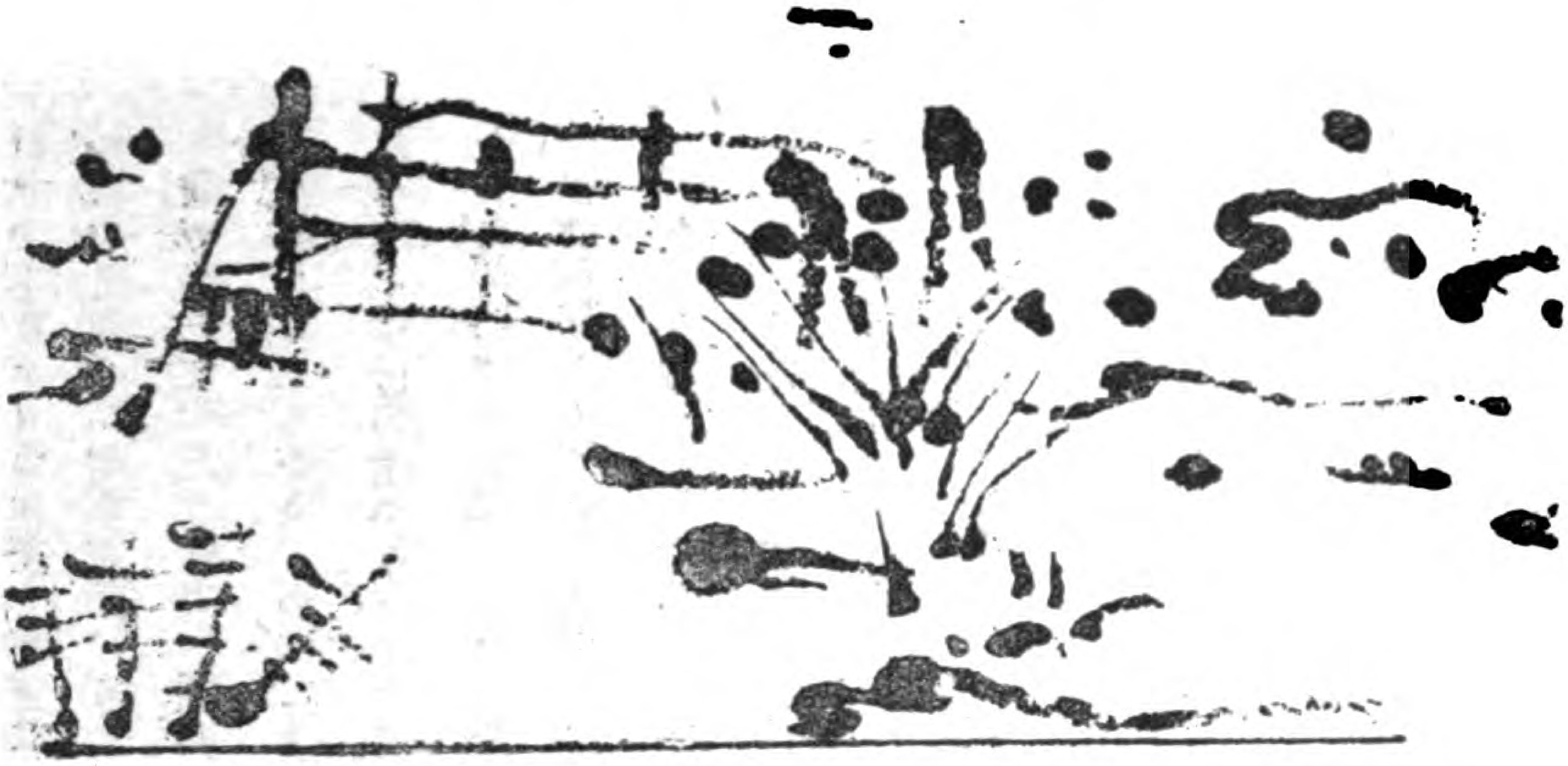
電車がとまつた。驛夫が驛の名を呼んで通つた。人がどや／＼と下りた。下りた位の人數がまた入つて來た。と、彼は喫驚して立ち上り、あはてゝもう動きかけた電車から飛び下りた。下りて見て、なあんだと思つた。一つ手前の驛であつた。併し其處から家まではわざ／＼次の電車を待つほど遠くはなかつた。彼は新開の田舍道をぼつ／＼歩きかけた。乳屋の汚い牧場に添うた小さい森を通りすぎた時、ふとKの越して來た家は此度この邊に相違ないと思つた。彼の心に起つた今日の愉快な變化は、この男に對する感情にさへ影響してゐた。彼は今朝ほどKが嫌ひではなかつた。

『ちよつと寄つてやるかな。彼奴も根は惡い男ぢやないんだから。』

同じやうな赤い屋根の並んだ一廓の土地が行手に現はれた。葉書の地圖は碌に見なかつたのだが、貸室に特有な屋根の傾斜を注意することに依つてKの家はすぐ分つた。

『おい、居るかい。』

彼は彼のズボンの高さほどもない低い杉垣の外から、その窓に向つてわだかまりのない快活の聲をかけた。



『Cocu』のなげき

サン・ジヤン・キヤプ・フエラ

武林無想庵

あかるい。ほがらかな青空が見える。たゞ一つある裏の窓から見える。したゝるばかりスツキリと清澄な深藍色の下の、松、橄欖、オランジ、シトロン、ミモザの黄、スリージエの白、さうしたものゝ一團になつてフウワリと盛りあがつた丘陵の中の、いかにもあざやかな淡紅色の小別莊を、そのクツキリと目にたつ濃綠色の鎧戸を、とき〳〵まぶしい瞳にうつしながら、あまりに思ひでのふかすぎる、あまりにくるしい、にがい、またやるせのない、おそらくいくら書いても永遠に書きつくされぬであらうところの、この悲しい物語をわたしはいま澁りがちに書きはじめようとしてゐる。

おとつひの晩から、わたしは南フランスの、アルプ・マリーチーム州、サン・ジヤン・オー・ポールといふところにゐる。そこの小さな美しい舟つきばに面した、二十世紀式の、もつとも單純な、安價な、もつともエコノミツクに建築された、しき

りにまだペンキのにほひの到るところに發散しつゝある、それほどにまあたらしい、同時にはなはだ無趣味きはまつたパンシヨン・ド・フアミイユの一室にゐる。

わたしはどうしてこゝへ來たか？ こゝへ來るまへにはどこにゐたか？ どうしてこゝへ？ どこからこゝへ？……思ひだすとつらい。考へると死にたくなる。このまゝ消えてなくなりたくなる。

みんな、みんなわたしのした事だ。わたし自身のぐうだらがした事だ。これほどまでにわたし自身がぐうだらであらうとは、わたし自身ですらいまゝでまつたく知らなかつた。

諸法因緣生だとか、自然の法則のまゝに、なるやうになるのだとか、無抵抗主義の、一木一草無不中道のと、エラさうに悟りがほした自分自身の愚かさがはづかしい。

巴里生活の滿一ケ年、あゝ、あの一ケ年、ダンテの煉獄にも、また地獄にも、たとへて決してたとへられないことのない、そのわたし自身のこゝろの苦しみやうといつたらなかつた。

こゝへ來るまへには、わたしはいふまでもなく巴里にゐた。

女なしでは、妻子の顏を見ることなしには、わたしは一日もおちついてこの世に生きてはゐられぬやうに生活づけられてしまつた人間だ。わたしはよわい。わたしには自分自身の生活といふものがない。わたしの生活の中心は妻と子だ。さうしてその愛する妻と子との一顰一笑によつてのみわたし自身のはかないその日〳〵が成りたつてゐる。

さうしたとらはれた生活中につかりながら、わたしはたえず文藝をおもふ。たつた一人きりのつよい自由な、天地に

俯仰してまつたくおそるゝところのない自我そのものゝなかにとぢこもりながら『ミゼラーブル』を書きつゝあつた時のユーゴーのやうな、『戰爭と平和』に沒頭しつゝあつた際のトルストイのやうな、全提全令の創作的努力をおもふ。

妻子の一顰一笑はザインとしてのわたしの生活だ。全提全令の文藝はゾルレンとしてのわたしのそれだ。要するにわたしの生活はザインとゾルレンとのたゝかひだ。倒れてのち、息の音のとまつてのち、はじめてやむ人生の白兵戰だ。

わたしの妻と子とは今わたしと一緒にゐない。

このサン・ジャン・オー・ボールのつゝましやかな家並をぬけて、裏山の方へ二三丁はいり、遠く近くボーリューから・モナコのあたりまで、白い岩山と、碧い海と、世にも美しい別莊やホテルの數かぎりなく點綴した、コット・ダ・ジュールの街々をば、あだかもこの世ながらの、極樂淨土のやうに、脚下に縹緲と眺めながら、葉のうらの白く光る橄欖の林の中の、素樸に急峻な石坂道をよぢのぼつて、ところどころにエレガントな小別莊のさしのぞくむらちのいゝ松林の崖道をば、夢のやうにうかうかと六むすゆきつくすと、そこに燈臺の立つカップ・フェラの岬端へ出る。

わたしの妻と子とは、二週間以前から、去年の夏フランスへ留學に來た、まだ充分に年の若い農政學の秀才と共に、この岬端に輪奐の美を極めたグランド・ホテルにゐる。

滿一ヶ年のわたしたちの巴里生活の結果がこれだ。妻子に對するわたしの愛の足らなかつた結果がこれだ。あゝ、人類愛！　わたしの愛は淺かつた。あまりに淺すぎた。

わたしとA君とだけに送られて、わたしの妻子を擁護しつゝ、ある夜人知れずガール・ド・リヨンを出發して數日、農政學の秀才は、カップ・フエラのグランド・ホテルから、その間わたしの毎日食事を共にしに通ひつゝあつた、巴里なるリユ・ド・リイルのF氏方へあてゝ、「トウブンココニヰマス」といふ電報をうつてよこした。わたしは生かへつたやうなおもひをした。とびたつばかりに胸をとゞろかした。さうしてすぐにも妻子のあとを追つて、カップ・フエラへゆきたくなつた。

ガール・ド・リヨンを出發する際、もちろんわたしは一緒にゆきたかつたのだが、わたしの妻はそれを喜ばなかつた。さうして、

――いゝ家でも見つかつておちついたら、わたしたちのゐるところへよんであげるから、それまではバチニヨルに一人ゐて、おとなしく原稿でも書きはじめておいでなさい。さうして御飯はFさんとこへ行つて、みんなと一緒にたべさしてもらふといゝわ。と、そツけない調子で云つた。わたしは悲しかつた。

バチニヨルは秀才がサン・ジエルマン・アン・レエから巴里へ出て來て間借りしたばかりの家だ。わたしは妻の云ひのこした言葉どほりにしてゐた。

電報をうけとつた翌朝、わたしはバチニヨルの寢床の中で、あわたゞしいA君にその寢込みをたゝき起された。A君はインタアナショナル・トランスポートのガイドだが、さうして秀才の巴里到着以來何かにつけて一切の世話をしてゐる青年だが、同時に秀才から巴里に於けるたゞ一人の親友として考へられてゐる人だ。

――きのふ行つて見たんですが、と、A君は椅子へ腰かけると、當惑したやうな表情をした。

――どうしました？

――はじめはどうやらわたしてくれさうな樣子で、いま荷物をまとめるからとかなんとか云つてゐたんです。で、Kさんはなんべんも階段をあがつたり降りたりしてゐました。さうしてその間いつたい何をしてゐたものか、ばからしく長い間人を待たして置いた揚句、結局かう云ふんです。執達吏から手紙が來てゐて、二十四時間内に家賃を拂はないと、あなたや奥さんの持物と衣類とが差押へられることになつてゐるから、もしその時何も殘つてゐないと詐欺になるんださうです。

――で、わたしてくれなかつたの？

――え丶。と、A君は力なげに答へて、わたしの妻にあてた執達吏の手紙をわたしの手にわたした。

わたしは不快でたまらなくなつた。

Kの手元から一刻もはやく一切の妻の紀念物を奪ひ去つてしまひたいのがわたしの切なる希望だつたのだ。

寢室の瓦斯ストーヴに火をつけて、マリイランを一本くはへながら、わたしはしばらく無言のまゝとつおいつ思案にくれて見た。

が、どうしても都合のいゝ考がうかんで來なかつたので、

――ぢや、しかたがない。あすこの荷物は放棄することにしませう。どうせもう碌なものは殘つてゐないのだから……

……が、もしそのうちいゝ機會があつたら、とつて來て、君の手元へ保管しておいてください。

――え丶。

子供のやうにこらへ性のないわたしのこゝろは、そんなことを云つてるうちに、もう一刻もはやくこのいまはしい巴里

をぬけ出して、すぐカツプ・フエラへとんで行つて、妻子の顔が見たくてたまらなくなつてゐた。が、出發の際、秀才がわたしの手に殘してくれた二百フランの金がもう百フランにも足りなくなつてゐることを思ひ出して、さうしてそれでは到底三等の汽車賃にもならぬことを考へて、わたしのこゝろは急にくらくなつた。巴里からカツプ・フエラにゆくには、PLMのラピツドにものゝ十八九時間のりつゞけなければならぬのだ。

——考へて見ると、僕はもうこゝにかうしてゐる必要がなくなつてしまつたやうな氣もするが……と云つて、みんなのところへ出かけて行くだけの旅費もなし……と、わたしはひとりごとのやうにつぶやくと、A君はわたしの心もちには大して同情のないやうな調子で、

——えゝ。と答へた。

わたしはふと妻の殘して行つた日佛銀行の小切手帳を思ひだした。四ケ月まへ、妻が倫敦なる日本料理店の主人Kと共に、巴里なるリユ・ケプレルといふエトワルにちかい小さな裏通りで、かれ等二人の共同事業といふ名目の下に、その料理店の支店の經營をはじめた時、百磅ばかりのわれ〳〵夫婦の殘金を土臺として、その店の日常の金錢をだしいれする唯一の經濟機關にしてあつた小切手帳だ。

ねまきのまゝわたしは立つて行つて、ゆうべぬぎすてたデイヷンの上のヴエトンの内がくしから、その帳面をつかみだして來ると、それを不案内さうな顔してるA君に示した。

——こゝにこんなものがあるんです。立つとき三四枚このとほり妻にサインしてもらつてあるんだが、……實は二三日まへKの手へも一枚だけわたして置いたから、ひよツとすると、もうKが全部引きだしてしまつてゐるかもわからないけれど……或はまた、ひよツとすると、日佛のH氏が、家主へ對する、自分が家賃支拂の保證に立つてゐる關係

た、この金をおさへて、一文も引きださしてくれないかも知れないけれど………とにかくまだ六千フランちかく殘つてゐる筈なんです………。

――なるほど。

――で、僕はこのとほりこの際世間から姿をかくしてゐる身だから、僕自身銀行へ出かけてはゆかれないのだから………どうでせう、君ひとつ、御面倒だけれど………なに、もし銀行でおさへてゐなかつた場合なら、單に受取人の名まへを書き込みさへしたら、八百屋でも肉屋でも、もちろんすぐ引きだして來られる金なんだから………そこを何とかして今明日中に………

――旅費だけあればいゝんでせう？　と、A君はいろ〳〵に云ひよどんでゐるわたしのことばをもどかしさうにスパリと切つてくれた。ホツとした思ひでわたしは、

――まア、さうです。と口ごもつた。

――三百フランもあつたらいゝでせう。二等でね………その位のことなら、わたしがけふ中にこしらへて來てあげます。

――君にそんな心配をかけてはすまないけれど………

――なにかまひません。では、今晩六時ごろまでに。

要領よくA君は立ち去つた。

要領よくわたしもその晩ガール・ド・リオンを出發した。

楽師たちが力を籠めて熱心にしきりと喧噪たる管絃の響を立てゝゐるかなたには、充分に日光をうけた、すばらしく天井の高い、見事な石造の大廣間で、幾組かのダンスの群が大理石の大柱のあひだ〳〵に、みやびやかに見えたりかくれたりしてゐた。

孫子の名をコンシエルジに告げると、胸へズラリと小さな金ボタンを縦列させた一人の美少年が、意をうけて小走りにその人を迎へに行つた。

わたしはすわかりでゝちのいゝやわらかいフオトイユの上に腰かけて待つた。

花やかな日本服を着た妻と子とに伴つて、わたしは一年まへ同じこのホテルの同じこの廣間へわざ〳〵ニースから茶をのみに來たことがあつた。

なんといふ心もちのちがひであらう！

去年は幸福であつた。妻の心にもわたしの心にも決してまだなんのわだかまりがなかつた。友禪の袂をひるがへして、わたしの子供は嬉々としてフランスの青年たちと踊つた。妻はよろこんだ。屈托のない目を細くして、滿足さうに、得意さうに、譯もなく無邪氣にニコ〳〵とほゝゑみつゞけてゐた。それが今年は……あ…、今年は……

わたしはダンスの群を見てゐるに堪へなくなつた。

と、目をそらすとたん、アツサンスールとおしならんだ階段のうへから、四才ばかりの日本人の女の子がひとり、チヨコ〳〵とかけおりて來るのがたちまち目にはいつた。あたゝかい嬉しさが泉のやうにわたしの心頭にわきあがつた。

いふまでもなくそれはわたしのイヴオンヌであつた。

イヴオンヌは洗ひさらしのうす青い天鵞絨のローブを身にまとつてゐた。また風でもひいたと見えて、鼻の下を眞赤にしてゐた。あまりにリュックスなあたりの光景にひきくらべて、彼女の姿はわたしにはなんとなく見すぼらしく感じられた。

――パパ公！　と叫んで、彼女はわたしにとびついて來た。

――ママ公のところへイヽ公が一緒につれてつてあげるから、さア、來なさい。と、大人らしい口をきいて、彼女はわたしの手をひッぱつた。

――ママ公は今なにしてる？

――ママ公、いまね、お部屋でお仕事してるよ。

――イヽ公のお部屋はどこだ？

――ツウタンオーだ。

あたりまへのやうに使ふフランス人とまつたく同音の彼女のフランス語をきくと、わたしは思はずニツコリした。

秀才もやがて降りて來た。

わたし達は一緒に昇降機にのつた。

たゞ三つしきやない最上層の客室の、中央のそれが、かれ等の四五日來同棲してゐる部屋であつた。大きなアルモアール、厚い石榴色のタピ、さうしてその左手には、あたゝかさうな寢臺が二つ、それから入口の通路を狹くして、子供の寢臺が一つ、なんとなく邪魔さうにおしならんでゐた。

いひやうのない淋しさが、わたしのこゝろにこみあげて來た。

おくの方のオリーヴ色のフオトイユにうづまつて、ものおもはしげに針仕事してゐたわたしの妻は、わたしの姿をチラリと見ると、いやな顏してすぐ目をそらした。さうしてまつたく同情のない目を伏せたまゝ、

――なんだつて勝手に出て來たの？　と、にが〳〵しい調子で、まづつめたくわたしをなじつた。

わたしはまづ失望した。

――一刻も巴里にゐるのが、いやになつたからサ……と、わたしは苦しげに答へた。

と、そのわたしの弱みにつけ込むやうに、

――一刻もゐられなくなつたからツて、ばか〳〵しい、子供ぢやなし、あんまり辛抱がなさすぎるぢやないの……

と、妻はつけつけと云つて、いまいましさうにそツぽうを向いた。

『妻とこの若い學生との間にはもう肉の交渉が成立してしまつてゐるのか知らん？』と、わたしはこゝろの底で忖度して見た。が、學生の態度にも妻の擧動にもそれがもう成立してしまつたやうな陰翳はまだ感じられなかつたので、わたしはやゝ安堵の思ひをした。

――イヽ公はまた風をひいてるやうぢやないか？　しばらくたつてから、わたしは口を切つた。

――例の鼻ツかぜよ。だけど、こゝなら風はいくらひいたつて、ちつとも心配なんぞありやしないわ。

――さう、氣候はよし、空氣はよし、海の中にゐるやうなものだからね。

話頭がイヴオンヌに轉ずると、けはしい妻の表情はすこしばかりやわらいだ。

――一昨夜、あまり暖かすぎて、室内の溫度が高すぎたので、イヽちやんは夜中に蒲團をふみぬかれたものです。それが原因だと考へます。と、秀才は甚な責任を感じつゝあるもののやうに、ひどく恐縮して云つた。

そんな事にまで氣をつかはなければならぬ學生の偶然に陥つた奇妙な境涯にわたしはすくなからず同情した。

寸刻もその潑溂たる活躍をやめることのできないイヴオンヌは、いつのまにかそこへひきずツて行つた椅子のうへにあがつて、とツついた一隅の洗面器のロビネから、ふんだんにジヤア〱と湯や水をひねりだして、それを香水の空瓶へ入れたりこぼしたりしてゐた。

――イヽちやんはまた水いたづらをして……お風を邪ひいてるんぢやありませんか……と、これもその子供と同様に一分とは仕事の手をやすめてはゐられないヘルプレスに能動的な母親がたしなめた。

――すぐやめる。すぐ……いまね、クイジンをかたづけてゐるんだから……

――やめないか？　やめないとつめるよ。

かうした家庭の一角をばエスカルゴのやうにその双肩に擔つたまゝ、わたしの妻はこの年若な農學士と或夜ひそかに巴里から驅落して、さうしてこゝまでおちのびて來てゐるのだ。さうしてその驅落を默許した、或はむしろ勸誘した、むしろ教唆した、はなはだ氣のしれぬ彼女の夫であるところのわたし自身が、かうしてます〱妻にいやがられる、わくわくと女々しくも彼等のあとを追ひかけて來てゐるのだ。

なんといふ不可思議きはまつた人間同志の近代的シチユアシオンであらう？

――來てしまつたものだから仕方がないけれど……今晩はお部屋を一つ頼んで來てあげるから、一トばんだけこゝへとまつてもいゝとして、あしたの朝、さつそくどこか近所のやすいパンシヨンをさがして、そこへひツ越すやうにしてもらひたいよ。

さうした妻の言葉どほり、わたしはその翌日からこのパンシヨンへ來てゐるのだ。

原因はすべてわたしに金のないことからだ。わたし自身にまつたく世才といふものゝ欠けてゐることからだ。世才のみならず、生活に對する努力の念の、病的に薄弱な、自分ながらあきれるほどのなまけものであることからだ。さうしてそれにもかゝはらずわたしの妻がいくつになつてもあまりにその容貌と姿かたちの美しさを減ぜぬことからだ。駿馬痴漢をのせて走る――それだ。さうしてもうことしで滿五ケ年走つた。

――わたしがむかし名古屋にゐた時分、近所にバカ勝といふ、いつもボンヤリふところ手をした、あなたもおなじやうにからだの大きい、のそツとした白痴がゐたけれど、あなたがさうやつてなんにもせずに、たゞポカンとつツたつてゐるところを見ると、そのたんびに、いつでもそれを思ひだすわ。と、とき〲妻は歯がいたらしく云つた。

わたしはバカ勝だ。

かうやつてほんとうの一文なしになつても、まつたくの着のみ着のまゝになつても、そんなことにはもう一切おかまひなく、わたしは毎日このパンションを出ては、或は日に二度も三度も、ちやうどサカリのついた時の見すぼらしいをす犬のやうに、前後不覺にあの石坂をのぼり、あの松林をぬけて、一心不亂にグランド・ホテル・デユ・カップ・フエラの最上層へ通つた。妻はいやがつた。治郎左衛門に對する八つ橋のやうにしてまでいやがつた。さうしていやがられればいやがられるほどわたしは櫻姫にあこがれよる清心のやうにしてまでつきまとつた。

白い小石のはき淨められたグランド・ホテルのはれがましい前庭をつと横ぎつて、相對した小綠岸のシツトリとした花壇を縫へる、百花のほのかにみだれさいた間の小石階をのぼり、秀才とわたしとが、かはる〲イヴオンヌの手をひきながら、をぐらくかぶさつた綠蔭をくゞりでた時には、背中の肉のハチきれさうに盛りあがつたマダム・シエツフエーアと、支那美人のやうにほツそり黑琥珀の外套につゝまれたわたしの妻のうしろ姿が、したしげにかたり合ひつゝ、いつのまにかもうむかうのダラ〲坂の上までのぼりきつてゐた。

丘陵はことごとく松でおほはれてゐた。その間の別莊のかず〲が一歩ごとに靜寂と瀟洒とを冀ふ人のこゝろをそゝつた。山上には赤い小さな信號所(セマフォール)の建物が見えた。心ゆくばかり空氣がすんで、心ゆくばかり森閑としたものであつた。

こんなところで書物を讀み、こんなところでものを考へ、こんなところで文章を書き、さうしてこんなところで愛する妻と子とが養へたら、わたしにとつてはもうこの上の幸福はないと思つた。

貸別莊の代理人マダム・シエツフエーアがやがてわたし達に見せてくれたヴイラの名はベギヤテルと云つた。うつくしい花毛氈を敷きならべたやうな庭園。ところ〲に配置よく立つパルミエ、オリヴイエ、ユーカリプトユス、あを〲した芝生、さうした中からぬきいでた二階建の小別莊。わたしの妻子が秀才の出費によつて、もう今明日のうちに日本から金さへ來れば、すぐにもこゝへ住み得られるのかと思ふと、わたしは嬉しくてたまらなかつた。が、同時にその幸福なわたしの妻子と同棲する人が、かれ等の夫であり父であるところのわたし自身ではなくて、その出費者たる農政學の秀才であることが。白刃で心臓をさし貫かれるほど、わたしには苦しくも辛くもあつた。

『あらゆる幸福は出費者のものだ。』──さう思つて、わたしは人しれず心で泣いた。

二階のバルコンへでて眺めやると、松、橄欖の一帶のみどり、點々たる家並のあかい瓦、それ等にいろどられた紺碧の海、マリアの像の立つサントスピースの岬からボーリユーの絶壁、グランド・コルニツシユ、そゝり立つたトユルビイの山頂をなすまツ白な岩塊へかけて、畫にも夢にも未だかつて見たことのない一灣の風光が、脚下に妖艶にまとめられて見えた。

——こりやいゝ！

感嘆の絶叫が心の底から思はず三人の唇にほどばしつてふるへた。

マダム・シエツフエーアとはヴイラ・バギヤテルの裏木戸の前でわかれた。

十二分にひきつけられたこの貸別莊に於ける、來たるべきわたし達の新しい生活に對して、心におもひ／＼の空想を描きながら、三人はそゞろにあとになり又さきになり、とはいへ、無心に道草をくふイヴオンヌをば無意識に擁護しつつ、例の石坂を下り、サン・ジヤンの港町をぬけ、松林の斷崖をたどり、さうしてサントスピースのマリア像まで散策してかへつた。

わたしのこゝろはだん／＼ふかく憂欝の雲にとざゝれて行つた。

ゆふぐれグランド・ホテルのかれ等の部屋までたちもどつた時、さうして妻が入浴に赴いたあと、さうして秀才がイヴオンヌと共にしばらく部屋を留守にしてゐる間、わたしはグツタリくづをれたフオトイユの腕にもたれて、ボロ／＼と涙をながしながら、たゞひとり身をもだへてすゝり泣いた。

と、秀才がはいつて來た物音に、わたしはハツとして顏をそむけた。さうしてテレかくしにシガレツトに火をつけた。

——今から二十分ほどしたら、あなたに湯殿まで來て下さるやうに云つてゐられました。と、それだけ云ふと、秀子は又すぐ姿をかくした。

湯殿！……

わたしの全身の血は一時にサッとよみがへつた。

『湯殿！……妻の心の底には、まだわたしと二人きりで、おたがひに裸體のまゝ、天眞爛漫に相對してくれるだけの無邪氣さが失はれずにゐたのか……』と、さう思ふと、わたしは妻に面目ないやうな心持になつた。

で、机の上へ時計をだして、わたしはじつと短針を見つめながら、正確に二十分のすぎさるのを待つた。

なんといふ捉はれきつたわたしの湯慾の痴愚さであらう！

二十分たつた。わたしはドキドキ胸をとどろかしつゝ湯殿の戸をたゝいた。と、戸は内部から素直にあいて、立ちのぼる湯氣にふうわりとつゝまれた薔薇色に水々しい妻の全肉體が、たちまち燃ゆるわたしの瞳孔を射つた。わたしのからだはぶるぶるとふるへた。

——こゝで着物をぬいで、すぐあとへおはいりなさい。と、大きなタオルで背中を拭ひながら、無表情に妻は云つた。

……、…………………。…………………。

…………………………。…………………………。

…………………。…………………。

——…………………わかつてゐるよ……わかつてゐるよ……わかつてゐる

けれど、わたしは意久地なし大きらひ、弱蟲は大きらひ……辛抱して傑作をお書きなさい。と、あだかもだゞつ子でも教へさとすやうに、言葉やさしくなだめすかしながら、妻は手早く着物をきて、さつさと外へ出てしまつた。

わたしのこゝろは又もとのまゝの憂欝にもどつた。さうしてまともに妻から指摘された自分自身の本質的なぐうだらに對して、その上に云ひやうのない恥辱さへおぼへた。

『妻のおれから求めてゐるものはたゞ傑作なのだ。文士としての社會的名聲なのだ。さうして愛慾の對照としてのおれ自身ではなかつたのだ。』と、石鹸と妻のからだの垢の浮いた浴盤中で、わたしはほとんど半年の間しかたなし抑制すべく余儀なくされた性慾をもてあつかひながら考へた。

オルネエ・ヴレエ・オー・ルー

自分の金がなくなつて、他人の金をつかふやうになつてから、わたしの幸福は奪はれて了つた。

わたしの幸福とは何か？

パッスイの小さなアパルトに住んで、夫はすきな本を讀んだり、氣まゝな原稿を書いたり、妻は炊事をしたり、針仕事をしたり、フランス語の稽古をしたり　さうして二人の間の一粒だねであるところの、巴里で生まれたイヴォンヌの成育をたのしむといふ、いたつて單純な幸福だ。

──珈琲ができたぜ。

──茶目が起きてからさ……役者がそろはないと、つまらない。

――まつたくだ。

カチヤンといふタトスの香をき丶つけると、むく／＼と茶目が起きあがる。それ、おしつこ、それ、パントツフル、それ、牛乳だ、お砂糖だと、それをきつかけにして、ワチヤ／＼とたゞわけもなく暮れゆく一日がはじまる……と、まア、云つたやうな程度にすぎないほどの幸福だ。

が、いくらさうした單純な幸福でも、このあまりに不幸にみち／＼た世の中から見れば、さうながい筈のない一生中に、殊に破綻の多い生活ばかりつゞけて來たわれ／＼夫婦のやうなものにとつては、一度失つたら又と得がたい、これでなか／＼、それ相當にたうとい價値をもつたそれであつたに相違ない

わたしはそれを失つたのだ。むざ／＼と失つて了つたのだ。五十ぢかくなつても、いまだにお坊ツちやんかたぎのぬけきらぬわたしは、それが親ゆづりであるところの、自分の金といふものがなくなると同時に、一トたよりもなくこのたうといものを失つて了つたわけだ。

愚痴をこぼしたつて、くだらない。愚痴はよさう……が、愚痴をのぞいて、わたしに果して書くことがあるか？だら／＼と愚痴を書くよりほかに、今のわたしには果して働けることがあるか？

金がなくなつたので、わたしは妻にあいそをつかされたのだ。一文も收入の道を工夫する能力がないので、わたしは妻に見すてられたのだ。妻はイヴオンヌをつれて、同じパツスイの、月に千三百フランもする立派なアパルトで、その愛人であり保護者である男と一緒に暮らしてゐる。さうしてわたしはそこへ足ぶみすることを拒絶されてゐる。あたりまへだ、すべてがあたりまへだ。あまりにあたりまへだ。一週間まへ妻からわたされた十磅の金がなくなれば、わたし

は自然餓死することにならう。それでいゝのだ。結局それでいゝのだ。

巴里のダンフエルからソオ・ロバンソンゆきの郊外鐵道で三十分、その終點から一キロ、セイヌ州のシヤトネエ、俗にオルネエ、又狼谷といふ、土曜日曜のほかは、それは閑寂な別莊地の、はなはだ古ぼけた、はなはだ野趣を帶びた宿の二階で、こんなことを書きはじめた男が、その妻へあてた手紙。

『わたしもよツぽどどうかして了つた。あんまり靜かなのと、萬感が胸一杯になつたのとで、さツそく日記にでもとりかゝらうと思つて、內がくしへ手を入れると、いつもあるはづの萬年筆がない。けさそちらで洋服をきかへる時、ぬいだ方へ入れ忘れて了つたものだ。さツき旅劵をとりに行つた際、どうしてそれが思ひだされなかつたのであらう。もう十時すぎだけれど、母屋へ行つて、今夜だけペンとインキをかりて來た。あしたはさツそく一キロあるいて、ロバンソンの驛前まで買ひに出かけなければならない。その節つひでにアルコール・ランプや食料品を仕入れて來ることにしよう。實はけふこゝへついて見ると、隣りにもう一室あつて、そこには二年越し人がゐるのださうな。この間見に來た時、この建物は上下二間きりだとばかり思ひ込んでゐたところが、上に二間、下に二間、都合四室あつたわけだ。何事に對しても迂濶なわたしは、かんじんかなめの自分の物を考へたり書いたりすべき場所の選定さへ滿足に出來ない男なのだ。愛する女房に見かぎられるのも無理はない。又利口な人々のより合ひであるところの世間から、ばかにされるだけばかにされるのも無理はない。普通の人間なら、とうの昔に自殺してゐるはづなんだけれど、妻子に執着して死にきれないほど愚痴になりきつて了つてゐるのだ。すこしも愛情をもたぬ妻に對して、又とうてい養へもせぬ子供に對して、のみ

ならず自ら働いて食へる自分自身さへもたぬくせに、それでも食ふだけは一人前に食つて生きたいのだ。これ以上に意久地ない男もめつたにないであらう。要するにすべてわたしが悪い。責めるならいくらでも責めてくれ。わたしはお前達のやうな利口な人間から充分に責めて責めぬかれる價値があるのだ。』

――六月二日

『宿の亭主の云つたとほり、なるほど小鳥がさかんに啼く。まへの大きな花園では、美しいさま／＼な花が、到るところ塊をなして、咲きほこつてゐる。濃緑淺緑の木々、庭木の苗、すべて植木會社であるところのペピニエールといふ家の庭だ。閑かなことだけはこの上もない。爰でおちつけなかつたら、よつぽどどうかしてると、お前たちは思ふであらう。たゞし夜はペトロールのランプだ。便所はこのホテルの庭のうしろの、しげみの奥の、ひどくきたないところにあつて、それがほとんどたれながしのまゝだから、日本の田舍と大したちがひはない。しかし文明はすべて金で買ふものだから、さうして今は一文なしなんだから、それんばかりの辛抱はもちろんしなければならない。愛する妻子をどこまでもパリジエンヌの姿にして置きたければ、何よりもかによりも、この際は金が第一だ。道成寺の文句ではないけれど、その金には恨みがかず／＼ムるだが、恨んで見たところで、それがはじまるものでもない。金がなくて妻子の養へなくなつた男と、世わたりの腕があつて、人の妻子をあづかり得られる男と、さうした間へ立たせられたら、どんな女だつて今どきその取捨選擇に迷ふものがあらう。わたしが女だつたら、やつぱりお前のするとほりしたにきまつてゐる。

『人間の運命といふものはいつどうかはつてゆくかわからぬものだ。今はこれが運命だと思つてゐても、すぐそのそばから次の運命が人しれず食ひ込んで來てゐるから、さうしてそれはそれ／＼の人間がおたがひに氣づかずにゐるものだ

から、いざそれが形にあらはれるとなると、病氣と同様おたがひにビックリするのが常だ。

『幸福が幸福でない。不幸が不幸でない。人間の世の中に永遠性のあるものは一つもないことは誰でも知つてゐる。が、併しもし人間生活のうちで、何が一番幸福で、何が一番不幸だといふと、それは貧乏しても乞食しても氣兼なしで暮らされる時が前者で、形は幸福でも心に屈托がある時が後者であるにきまつてゐる。さうして今のわれ〳〵の生活はすべて不幸だと云はれなければならぬ。たゞその間にあつて全く何も知らぬ茶目だけが幸福だ。わたしは茶目が幸福でありさへしたら、もうそれでいゝ。一切が茶目中心だ。

『わたしはこれから一生懸命になつて原稿を書きはじめよう。たゞ茶目のためにのみ働かう。茶目が一人まへになるまでには、まだ十四五年ある。普通の健康者は六十までは働ける。殊にわたしのやうな原稿生活者なら、七十が八十までも働ける。わたしの餘生はまだ働くには充分餘地がある。人間が十年以上一定のことを忘らずみつちりやり得たら、たとへわたしのやうなボンクラでも、たぶん普通人のやり得られる程度の事は出來るであらうと思ふ。

『The Child is The Father of the man ──とウアーヅヲルスが云つたが、子供はたしかに大人の父だ。男女の戀はおたがひに幸福も與へるけれど、不幸を與へる分量の方がむしろはるかに多い。ところが子供は兩親にかならず幸福のみを與へるものだ。子供によつてのみ男女はこの世の中に希望を置くことができる。子供は今の時代にはもつとも偉大なる救世主だ。

『來たるべき時代のために。』さうだ。それがためにのみわれ〳〵はよろこび勇んで粉骨碎身の勞働ができる。

『筆をもつと、かうした感想が自然に筆先へにじみ出て來る。わたしは要するにたえず筆をもつてゐられる狀態に置かれなければいけない人間だつたのだ。わたしを自然のまゝのわたしらしくして置いてくれ得る女が本當にわたしの妻

だ。」

——六月二日正午

『十時五十分が終列車だつた。一時間以上もあつたので、ダンフエルの角のカフエで音樂をきゝながら待つた。ドミを一杯、フインを一杯、二フラン四十、チツプ六十、合計三フランがところ散財して、ジツとメトロの赤デンキを見つめたり、疾走するタクシを見送つたり、道ゆく人々の足首を眺めたりして待つた。さうして例によつてさまぐ\な雑念に捉はれながら待つた。このたえまなく雑念にのみ捉はれることが、とうぐ\わたし自身をば知らぬ間にこんな境地にまで陥れて了つたのだ。それにも拘らず、わたしには到底この雑念に打克つだけの力がない。結局このまゝかうしてこの雑念に捉はれながら死んでゆくだけの話だらう。「狐に穴はあれど、人の子に枕するところなし」——キリストもさういふ愚痴をこぼした時もあつた。お前のおかげで今はまだ枕するところはあるけれど、そのうちにはきツと狐にも劣る時がまはつて來るに相違ない。一生懸命に原稿を書く？ さう、書けさへしたら……さうして改造の山本氏の氣に入る原稿でもできたら、それは成程二の宮時代の生活はつゞけ得られるかも知れぬ。從つてその位の程度なら或は巴里でも親子三人水入らずの生活ができるかも知れぬ。が、そんなシミツたれた生活を待ちのぞんでゐるお前かしらん？又さういふ生活をもたらすべくわたしを奬勵してくれるだけの好意で、お前の保護者はお前を引きとつてくれてゐるわけか知らん？……まア、まア、それはさうとして置かう。とにかく一生懸命に原稿にとりかゝることにしよう。

『ロベンソンでは終列車で二十人ばかり降りたが、わたしのゆく方向へむかふ人は一人もなかつた。宿へつくまで一人きりだつたが、月があるのと、二丁おき位に街燈があつたので、大してさびしくもなかつた。又犬にも一度もほえられ

なかつた。すぐ寢床へ這入つたが、丁度十二時だつた。このごろのわたしの生活中で、寢床にゐる時が一番つらい。寢床に鬪聯したお前の生活が、とめどなく頭にうかんで來て、それに苦しめられ脅かされるからだ。朝目がさめた時もさうだ。ほんとうに目がさめていよ〳〵起きあがるまでは苦しめられつゞける。食慾に餓えなければならぬ前に、わたしはまづ性慾に渴しなければならぬのだ。さうして食慾と性慾とに對してかくまで飢渴しなければならなくなつたのは、みんな〳〵自分一人がわるいので、決して自分以外の人々のあづかり知つたことではないのだ。わたしは自分自身のわるかつたことのために人間生活の基礎をば徹底的に奪はれる刑罰に處せられなければならぬわけだ。さうしてわたしの犯した罪といふのは何か？　いかなる罪か？　それは單純にお人よしといふ罪だ。自分自身の本慾に對してははなはだ忠實でなかつたといふ罪だ。

『起きて、お前からもらつて來たおべんとうのすしをたべる。それから裏の便所へゆく。この便所がとても大變なものだ。こいつに每朝閉口させられなければならぬかと悲觀する。併しどうにでもして用がたせさへしたらいゝのだから、そのうちには馴れるだらう。女が部屋の掃除に來たので出てゆく。前の森林の中の道をゆく。左は廣やかな大森林だが、それはメーゾン・ド・サンテの私有地だから這入れない。病人で金があつたらかうしたところにもゐられるのだ。四十分ばかり散步してかへる。到るところヴイラがある。かういふ別莊に親子三人で住み得られたら、などゝ考へてばかり步いた。三十五六の夫婦が十位を頭に三人の子供をつれ、森の中でたのしさうな午めしをたべてゐた。人間らしい幸福といふものは、まづあの邊のところに位してゐるものだらうと、しみ〳〵思つた。それにつけても一文なしでは駄目だ。月に三四千フラン收入のある生活にとりつけなければ、あの位の單純な幸福でも容易にもたらし得られないのだ。なんといふおれは意久地なしなんだらうと、さうした一家團欒の前をとほりすぎながらはづかしくなつた。

『午後からすこし仕事らしいものを書きはじめて見たが、二枚ばかり書くと、あんまり下らないので、例の反古にして了ふ。こんなことしてはゐられないのだが、ゐられないのだがと、追ひたてられるやうにたへず思つてはゐるのだが、やりはじめると相變らずこれだ。どうしてもこれではいけない。わたしの頭は根本的にぶちこはして、その底からなまなましい血をほどばしり出させなければ駄目なのだ。

『先達て大事な萬年筆を落してペンの先がをかしくなつて了つて以來、どうも書きにくいので、ロバンソン驛前へ、このペンとインキとを買ひに行つた途中で氣がつくと、どこの家でも電燈はあつたのだ。考へて見ると、ホテルでも母屋の方にはついてゐたのだが、わたしのゐる建物だけはついてゐなかつたのだ……萬事がこれだ。人がよくて、迂濶で、その上にクジ弱いと來てゐるのだから、みじめだ。いくら閑かだつて、いくら眺望のいゝ窓があつたつて、電燈のない部屋を二百五十フランも出して借りてゐるおめでたさが、自分ながら本當にはがゆくなる。が、それにしても閑かなのはまつたく申分がない。

『ロバンソンから玉子とソーシスを買つて來て、アルコール・ランプで米の飯をたいてたべる。』

――六月四日午後七時

『美女は命を斷つ斧と古人も云へり――と西鶴にあつたが、わたしは今美女であるところのお前といふ斧によつて、古人も云へるとほり、とう/\命を斷たれようとしつゝある過程にあるところだ。何だか非常にからだが疲れて、ゴロリゴロリ横になりたくばかりなる。けさもフエア・デ・シャンプルの間散歩に出たが、森の中をあるいてゐると、足がフラフラする。もつとも、きのふから米を一リーブルと玉子一つと小さなソーシス一つたべたきりだから、おなかのすいて

るせいかも知れない。横になると、すぐウト／＼する。ウト／＼すると、苦しい夢ばかり見る。ゾツとして目があく。なるほどかうして人は死んでゆくものかと思ふ。書きたいと思ふことが、いろんなかたちで頭の中へ浮かんでは來るけれど、さてまだ意を決して筆の先でそれをつかまへるところまでゆかない。直接女に溺れてたわいなくなることはわけのない話だが、そいつを筆に上せることは中々むづかしい。天才のない文士の苦悶をしみ／＼考へる。併し天才と云つたつて、要するに熱中力の程度なんだから、どうかしてその熱中力を全身の底からよび起したいものと工夫をこらしてはゐるのだ。それが卽ち生きる力だ。念彼観音力だ。今度はどうなつてもそいつを呼び起さなくてはならない

『「來たるべき次の時代のために」——さうした題目がしきりに頭の中を往來してゐる。子供一人が生きるために、父母をはじめとして、あらゆる周圍の人々が、進んで犧牲になつてゆくこと〻。又何だかだとそれ／＼に自分勝手な理由のもとに、實はその子供の母親であるところの美女を獨占しようとして、とんで火に入る夏の蟲のやうに悶き死にしてゆく男達の姿とを、ドラマでも小說でもい〻から、何とかした一つの新しい藝術樣式にまとめあげて見たいと思つてゐる。人類はじまつて以來、いや、むしろ生物はじまつて以來。テーマとしては新しくも何ともないけれど、わたしの一生の直接經驗が、しきりにわたしにそんなことを思はせるからだ。

『大正六年十月一日、例の大風がふいて、小石川の家にヒビが入つた時、北海道へ赴いて、あの家を賣ることにきめるまでは、わたしの生涯も、單に足のわるい妹のために犧牲となつたゞけで終つたのであらう。ところがその翌年の三月、所謂ナベを東京へつれて來る問題が起つて、わたしはとう／＼かうした放浪の生涯を志す動機をつくつて了つたわけだ。さうした容易ならぬ過去をしよつてのお前との結婚禮讃だつたものだ。今日となつて見ると、そんな因果な過去をしよつての消えがたい一生の苦悶が、お前との今日までの同棲に對して、何とも云ひやうがない氣の毒なことをしに

了つた原因になつてゐるわけだ。

『大正九年三月二十六日、お前の神明町の家から鵠沼の東屋へ赴いた時、札幌の父から驚くべき手紙が來てゐたのだ。わたしは便所の中でそれを讀んですぐすてゝ了つた。それはその月の六日、即ちわたしの養母の命日の日、わたしが墓まゐりに赴くべく東京へ出かける際、東屋の九番室から階下へをりて、恰も朝の化粧中であつた洗槽の前の、まだ何の關係もなかつたお前と冗談を云ひかはした日、ナベがわたしの子供を生みつゝあつたわけだ。腹ちがひではあるけれど、わたしは自分の妹に子を生ました男だ。ナベが若しもうすこし狡猾な女であつたら、その子供はきつと正式の夫の子として世の中へパスしてゐたであらう。然しナベは正直な女であつた。それを夫の前へ自白して裁斷を仰いだ。さうしてその夫の裁斷の結果、ひそかに北海道へかへつて、その子供を生み落したものだといふ。札幌の實父にとつては、悲慘にもそれが本當の初孫であつたものだ。北海道の宅地に關しては、さうした事件が裏面にある

『わたしはその事をばお前と一緒になつた後に知たつけれども、つい〳〵勇氣がなくて今日までお前に白狀する機を逸して了つた。わたしの甚だ重くろしい人間である所以がそこにある。わたしの物を本當に書けなかつた原因もそこにある。又わたしのやうな人間がなぜ茶目をあのやうに愛するか、なぜ茶目と離れては暮らせぬやうに思ふか、その動機もそこにある。父母のそろはぬ子供は不幸だ。わたしは自分自身にしみ〴〵それを體驗してゐる。それにも拘らず、わたしはまだ見たこともない、さうした不幸中の不幸なる子供を日本へ殘してゐるのだ。殘るところは茶目一人だ。どうかして茶目だけは兩親そろつた中で育てたいと思ふ。

『「來たるべき次の時代のために」――どうかして茶目だけは活潑々地の身神ともに健全な本當に獨立した女に仕立てたいと思ふ

『働かう。働かう。自分の體驗した生活そのまゝがもうすでに立派な藝術品ではないか？たゞそれを立派な藝術品として表現するためには、文字どほり一生懸命の努力がいる。努力だ。努力だ。一生懸命の努力しさへすれば茶目だけは必ず兩親そろつた中で育てられる。この世に於いて唯一つのこつたわたしの希望がそれだ。』

――六月五日午後五時半

ベルを押すと、もう正午だといふに、まだねまき姿の靑い顏した妻が、これもねまきを着てはだしのまゝイヴオンヌと共に顏を出す。

妻は不快な顏して、

――何しに來たの？ といふ。

――ヅボンがほころびたからなほしに來たのサ。

――近所で針でも糸でも買つて、自分でなほせばいゝぢやないか。

この暑いのに風をひいたと見えて、茶目は鼻汁をたらしてゐた。

保護者であるところの妻の同棲者もまだ浴衣がけのまゝで、妻と共に箒をもつて、そこらを掃除してゐる最中であつた。

ヅボンをぬいで、サロンのデイヷンへ腰かけ、さつそく修繕にかゝる。イヴオンヌは針だ糸だ鋏だと、そばへつきゝりで、面白さうにいろ〳〵と手傳つてくれる。

やがて修繕のをはつたころ、妻がそばへ來て腰かける。

——こつちへおよこしなさい。わたしがなほしてあげるから。

——いゝよ。もう出來たんだ。

——さう……と、出した手をひつこめたが、と、ツケ〳〵した聲で、

——どうしてあんな愚痴ばかり毎日〳〵書いてよこすの？　あんなくだらもない愚痴の百まんだらを書くひまで、なぜ一行でもお金になる原稿にとりかゝらないの？　あんなものをよこしたつて、わたしはろくすつぽよみやしないよ。ばかばかしい。

——あれは日記のつもりで書いてよこすのサ。だから讀まなくてもいゝからとつといてくれたらいゝのだ。

——日記なら日記で自分のところへとつとけばいゝぢやないか。あんなものをよこすとうるさいよ。

——さうか。そんならさうしよう。

——何しろあんたも男一疋のくせに、妻子を養ふどころか、自分一人の飯代さへ自分でかせぐことができず、何から何までみんな他人のお金をつかつてるといふ境遇ぢやないか。ちつとは人間らしい考になるものだよ。

『茶目。おかぜはなほつたかい。お前がねむると、ママ公はすぐお前のそばにゐなくなるんだらう。それでお前がふとんをふみぬいだまゝ、ながいことねてゐるので、それがためこのあたゝかいのに、かぜなんぞひくんだらう。もつともかぜ位ひいつたてかまわないサ。めしさへくわしてくれるならそれが何よりだ。それが第一だ。パパ公はこの世の中で、この上もない腰ぬけで、なまけものので、お前の飯の種をこしらへてやることができないのだよ。お前の生きてるの

は、みんなママ公のおかげなのだ。ママ公のべつぴんさんが、お前ばかりでなく、このむしろ死んだはうがいゝパパ公まで養つてくれてゐるのだ。

『茶目。パパ公はさびしいよ。朝から晩までたつた一人ツきりなんだ。一人ツきりでいろんなことを考へてゐるんだよ。御飯もきのふまでは毎日お米一リーブル半に玉子三つしきやたべなかつたのだが、あんまりおなかがすいていけないから、ゆふべから奮發して、お庭のこんもりした木の下の食堂へ行つて、夕御飯だけこのホテルでたべることにしたよ。イヽ公はまだお庭の木の下で御飯をたべたことがないだらう。なか〳〵いゝ氣持のものだよ。併し御飯は何と云つてもママ公とイヽ公とパパ公と三人きりでたべるのが一番おいしいよ。パパ公も澤山々々お仕事して、一日もはやくさういふ御飯のたべられる日が來るやうに勉强しなけりやならないね。

『茶目、お前はいゝママ公をもつて仕合はせだが、わるいパパ公をもつて不仕合せだね。パパ公はね、あんまりわがままそだちだつたものだから、増長して、自分のする事はなんでもいゝ事だと思ひつめて來た罰で、とう〳〵こんな身の上になつて了つたんだよ。さうしてかんじんのママ公にまでにくまれるやうになつて了つたんだよ。ママ公がパパ公をにくむのはあたりまへだけれど、茶目だけはいくらパパ公がお金ぐらいなくたつて、そんな事でにくまないやうにしておくれ。』

『茶目。おどりは上手になつたかね。小森さんのおぢさんのいふ事をきくんだよ。さうして早くおどりが上手になつて、ママ公と小森さんと三人で、大勢の外國人の前でおどつて見せなければならない。さうしたらみんながきつと「ケル・ミニオン」といふだらうね。でも、決して増長だけはしてはいけないよ。増長するとパパ公のやうになつて了ふものだら。

『茶目。パパ公はそのうちすこしお仕事がはかどるやうになつたら、又せんのやうに一日ボアへ行つて、砂いぢりしたり、種なげしたりして遊ばうね。ボアでなければ、リユクサンブールでもいゝ。ギニヨルを見たり、バランソワールへのつたり、木馬へのつたり、驢馬へのつたり、ブレーへのつたり……パパ公はね、もうこの世の中で、イヽ公と森や公園で遊ぶよりほかには、なんにもたのしみがなくなつて了つたんだよ。イヽ公が大きくなつたら、いろんな御本を敎へてやるのだけれど、イヽ公はまだ御本をよむことができないから困るねえ。早く大きくおなり。さうしてマダム・キユリイのやうな上等な頭になつておくれ。お金なンぞあつたつてなくたつて、上等な頭になりさへしたら、人間はそれでいゝものだよ。』

この手紙を出さうか出すまいかと思つてゐるところへ、妻の方から意外にこんな手紙が來た。

『パパ公。

いまやうやく小森さんとスキ焼をたべて、あとかたづけをしてすんだところ。こんな小さな家でも、一日用事をすると、かぎりもなくあつて、女中の來ない間は、とても物をかくどころか、學校にもゆけさうにもない。

『きのふブローのかみさんとフォンテンブローへ出かけて行つた。一々云ふのはうるさいからだまつてゐるけれど、何をしてもどうもあんたのことが氣になつていけない。殊に愉快に原稿でも書いてゐると思ふとさうでもないが、例のウツ〳〵と何んにもしないで考へてゐられると思ふと、しきりに氣になる。おまけにイヽ公が、何かすると、パパ公、パパ公と連發する。とにかくあんたの思つてゐるやうに、こつちでも決して氣樂なしに面白をかしく暮らしてゐるわけで

はないから、なるたけ辛抱して、原稿を書いてもらひたい。「念々不離心」で、五年間しみこんだなじみはやはり五年もかゝらないと、一寸ぬけさうにない。殊に茶目公がかうしてくッついてゐる間は、決してどんな場合でもパパ公をないがしろにはしないから、安心して、とにかく原稿を一生懸命書いて下さい。さきのことはどうなるかわからないとして、とにかくあんたが一生懸命原稿を書いて、それがすこしづゝでも發表されてゆくやうになれば、一切の狀態がまた自然とちがつて來る。決して今より悪くなる筈はないと思ひます。突拍子もないあんたのザンゲをよんでも、私は別におどろきも呆れもしない。「ハハン、さういふこともあつたのかな」と思ふくらゐなもので、それよりも現在の親子三人が今よりよくなること以外に、オテントウ様の中からスッポンが逆さに落ちて來たときいても、私は別に呆れも珍らしがりもしない。たゞ親子三人が今よりよくなること！　それ以外に何にもない。が、親子三人が今よりよくなることゝ云つても、それは必ずしもリユ・デユ・パンのやうに、三人で爪に火をともして暮すといふとではない。とにかく表面はどうでも、こゝしばらくはあんたもこの狀態で辛抱して、不自由を忍んで、一生懸命原稿を勵んで下さい。あの話の一件では北海道はどの道棒にふるよりしようはあるまいから、その代り幸ひK氏の方が都合よく行くやうだから、それを足場に、われ〳〵もなるべく早く一人だち出來るやうな努力をおたがひにしようではないか。あんまり下らなく考へ込まないで！

『博覧會のはうも景色のいゝ間に、なるべく早くケリをつけて、眞の商賣にうつる豫定です。そのうちにはパパ公の旅行費ぐらひラクに出るやうになりませうから、こゝもとしばらく不自由と淋しさを忍んで、茶目公のためにいゝものを書いてやつてください。

『この手紙の裏へ茶目が書くと云ふから、手をもつてかゝしてやるよ。』

――パパコー、ゴキゲンヨー、メルクルデイニイラツシヤイ、イヽ公ガオドツテミセマス。　イヴォンヌ

パパコー

『三分ほどのちがひで、終列車にのりおくれたが、併しそのおかげで、朝まで夜どうし巴里中をうろつきあるいた。同時にそのおかげでわたしの心には或る今までにない何物かが目をさまして來た。云ひかへれば、苦悶して、苦悶して、苦悶しぬいた結果、四十年來の迷夢がすこしばかりさめはじめた曙光を感じたのだ。昔の言葉で云へば、さしづめ復活だ。今の言葉で云へばクラルテださうしてわたしにとつては新生だ。今日ただ今から勇ましく進んでゆくべき道の糸口だ。わたしはやうやく物質上の人間生活から超越しさることができたのだ。リユ・デユパン時代の大問題であつた「餓死」に對する恐怖の念が根本的に消滅してしまつたのだ。一路居士の公案の意味がハツキリわかつたのだ。

『われ〳〵親子三人の幸福は、決して單なる肉の問題ではなかつたのだ。人間の愛情はつねに肉から發足するけれど、肉を離れることの出來ないうちは、決して徹底したものになり得ない。さうした昔からわかりきつてゐたやうなことが、今迄ほんとうにわからなかつたのだ。

『わたしはもう大丈夫だ。茶目とお前とに對するわたしの愛情は、こゝにやうやく一進歩を劃することができたわけだ。さうしてもうきのふまでのやうなあゝした淺薄なものではなくなつたわけだ。もつと〳〵深い愛情がわきはじめたのだ。清い、尊い、ほんとうに生きてこの世に生き甲斐のある、力づよいものに變りはじめたのだ。』

『わたしの今後の行動は、もちろん今までどうりのお前の命令のまゝだけれど、それが今までとはちがつて、決していや〳〵ではなく、よろこび勇んでお前自身の生活の都合のいゝやうになる氣になることができるやうになつたのだ。

『かうした心の狀態を得た以上は、いふまでもなく原稿はかならず書ける。二十年前志を立てゝ文士にならうと欲した時以來、書かうとして遂に今までその緖にすらつきかねてゐた文章をば、今度こそは本氣になつて書きつゞけ得られるに相違ない。さうしてそれをもつて本當に終生の事業とすることができる。

『わたしは單なる言葉の藝術家としての文士ではなかつたのだそれにもかゝはらず、わたしは言葉の藝術を市場に賣りだしにゆく人々の眞似をしようとばかり企てゝゐたものだ。さうしてそれが根本的の大いなる誤謬であつたのだ。まつたく身のほどを知らなかつたのだ。さうしてそれがために、本當に開放された、本當に自由な、本當にかの威武も屈することのできない自分自身といふものがつかまへられなかつたのだ。書くべきことが山のやうにありながら、なぜ今まであゝして書けずに來たものかといふ理由が、今日やうやく會得できた。

『再び云ふが、わたしはもう大丈夫だ。お前の夫として、又茶目の父として、かならず耻づかしくない人間になつて見せる。どうか今後のわたしの生活ぶりを刮目して見てゐてくれるやう願ふ。

『負債に對するわたしの態度も、お前に對するわたしのそれも、すべてバルザックが手本だ。お前も知つてゐるとほり、バルザックの小說はすべて前半生にしよつた借金をかへすために出來たのだ。又バルザックはハンスカ夫人と本當の意味の結婚するために一生を賭したのだ。さうして死が目前に迫つた時、はじめてその臨終の床の上で成就することができたのだ。バルザックの死んだ年まで、わたしにはまだ十年ある。わたしはバルザックの心意氣にまけないやうな文士として一生を終りたい。

『もう一度いふが、わたしはもう大丈夫だ。だからその點に於いては安心してもらひたい。要はたゞ今後だ。今日たゞいまからの將來だ。茶目のためには、われ〳〵は命がけで働かなくてはならなかつたのだ。わたしはきのふまでの自分

自身がシンソコはづかしい。それはどうかゆるしてくれ。』

『今あさの五時半だ。起きて、しばらく忘れてゐた冷水摩擦をやる。隣室の若い勞働者はもう働きに出てしまつてゐる。母屋ではまだねてゐる。木々の小鳥は心持よさゝうに囀づつてゐる。しげみの中の便所へゆく。庭では十羽ばかりのヒヨコを引きつれて、母鷄がしきりと餌をあさつてゐた。わたしは茶目のため又わたしのために餌をあさつてくれてゐるお前の美しい心を思つた。お前の手紙に『念々不離心』といふ言葉が出て來たので、それからわたしはお前に對してスッカリ安心するやうになつたものだ。お前はやはりわたしの妻だつたのだ。お前の美貌とお前の誘惑に對する弱さとが、わたしとお前との間に立つて、長いことわたしを苦しめたけれど、美貌や誘惑にはかぎりがあつて、さういふものに捉はれてゐるうちは、本當に大自然のふところに抱かれて生死すべき人間の道には這入れない。わたしの苦しんだのは、その點にまだ徹底した悟りが開らけなかつたからなのだ。が、一昨夜からきのふの朝にかけての巴里の彷徨は、おぼろげながらわたしにその悟りをひらかしはじめた。わたしはもう大丈夫になつた。わたしはもう働ける。』

半世紀のあひだ、わたしはたえずいゝものを書きたい〳〵と思ひつゞけてくらして來た。さうしてたゞ單純にさう思ひつゞけて來たばかりで、いゝものはさておき、わるいものすら、ほとんどまつたく書けなかつた。

半世紀の事實が示すとほり、わたしは文士ではなかつたのだ。云ひかへれば、詩人でも小說家でも、思想家でも藝術家でも、實は何でもなかつたのだ。從つてわたしのこれまでの一生は、朝から晩まで、たゞ漠然と文藝々々と念じつゞけ云ひつゞけて、しかもまつたく自分自身には何事をも創出し得る能力のない、いたづらに空虛な、ぐうだらな、人間

として最も生き甲斐のない、人類の一員として最も恥づべき、單なる穀つぶしとしてのそれであつたにすぎなかつたものだ。

原因はすべてわたしの頭にある。異常に薄弱な頭にある。刻々周邊からの刺激に動かされつづけてゐて、一瞬も心に落ちつくひまがなく、さうして普通人のやうに仕事に對してはおのづから一切の刺激を排し本能的に自分の意志を行つてゆくことが、極端にできないやうに組織づけられた非常識の頭にある。

さうした頭から生ずるわたしの一擧一動は、それゆえに常識的の打算では、普通人の意識的意志では、どうしても現れて行つてくれない。要するに、たゞその時〳〵の無意識的衝動でのみ動かさるを得なくなる。

從つて氣がむかないと、全く何もしたくなくなつて了ふ。物も云ひたくなくなる。机へ向つても、一行も一字も書けなくなる。さうしてたゞジッと仰向けに臥そべつてゐたくばかりなる。一口に云へば、我儘だ。甚しい氣むづかしやだ。金があつて遊んでゐられる間はそれでもよかつた。しかし働いて食はなければならぬ境遇の下には、それではすまされなくなつた。

復活しなければならない時が來た。根本から出なほさなければならない時が來た。平凡な、溫健な、たゞ一個の、人間らしい人間として、普通人らしく働きはじめなければならない時が來た。

「けふはじめて二十枚書いた。お前に送つた手紙がみんな原稿になつたわけだ。わたしはこれからこれを動機として、

わたし自身の一生の苦悶を書く。一寸の蟲にも五分の魂といふやうに、わたしにも魂はあつたのだ。文藝は形式や文字ではなく、一個の人間の全人類に浸染する魂の表現だぐらいのことはわからなかつたわけでもなかつたが、とう／＼今日までその緒につく機會を得なかつたものだ。さうしてその機會をばたとへ無意識でもわたしに與へてくれた人はお前だ。わたしは改めてお前にお禮を云ひたい。

「一生懸命の努力しさへすれば、茶目だけは必ず兩親そろつた中で育てられる。この世に於いて唯一つのこつたわたしの希望はそれだ。」

『わたしの魂は苦しめられた。十重二十重にとりかこまれた肉體のために、スッカリ魂の自由を失つて了つてゐたものだ。二十代にわたしは人間の自由そのもの丶ためにこの人世へ發足した。併しそれから半世紀の間、ます／＼かへつて自由そのものを緊縛してゆくやうな生活ばかりつゞけて來たものだ。人妻を犯し、妹を犯し、親にそむき、朋友にそむき、國も社會もかなぐりすてゝ、さうして尙且つしきりと何ものをか求めつゝ來たのだが、それは要するに二十年前一度失つた自分自身の魂を求めてゐたゞけの事であつたにすぎなかつたものだ。

『わたしは今肉から解放された。わたしは魂の自由をとり戻した。これでこそ今迄のわたし自身のにがい人世の體驗も、決して無意味ではなくなつて來たのだ。

『生活とは所謂肉慾の事ではなかつたのだ。肉慾こそはかへつて人間の眞の自由、眞の歡喜、眞の愛情、眞の善美を滅ぼすものだつたのだ。惡魔主義は痛快だつた。併しその痛快さは一轉して自己の魂を滅亡の斷崖へ導きつゝあることに終つた。二十代に發足した惡魔主義は半世紀の格鬪を經て、とう／＼魂の勝利に歸した。

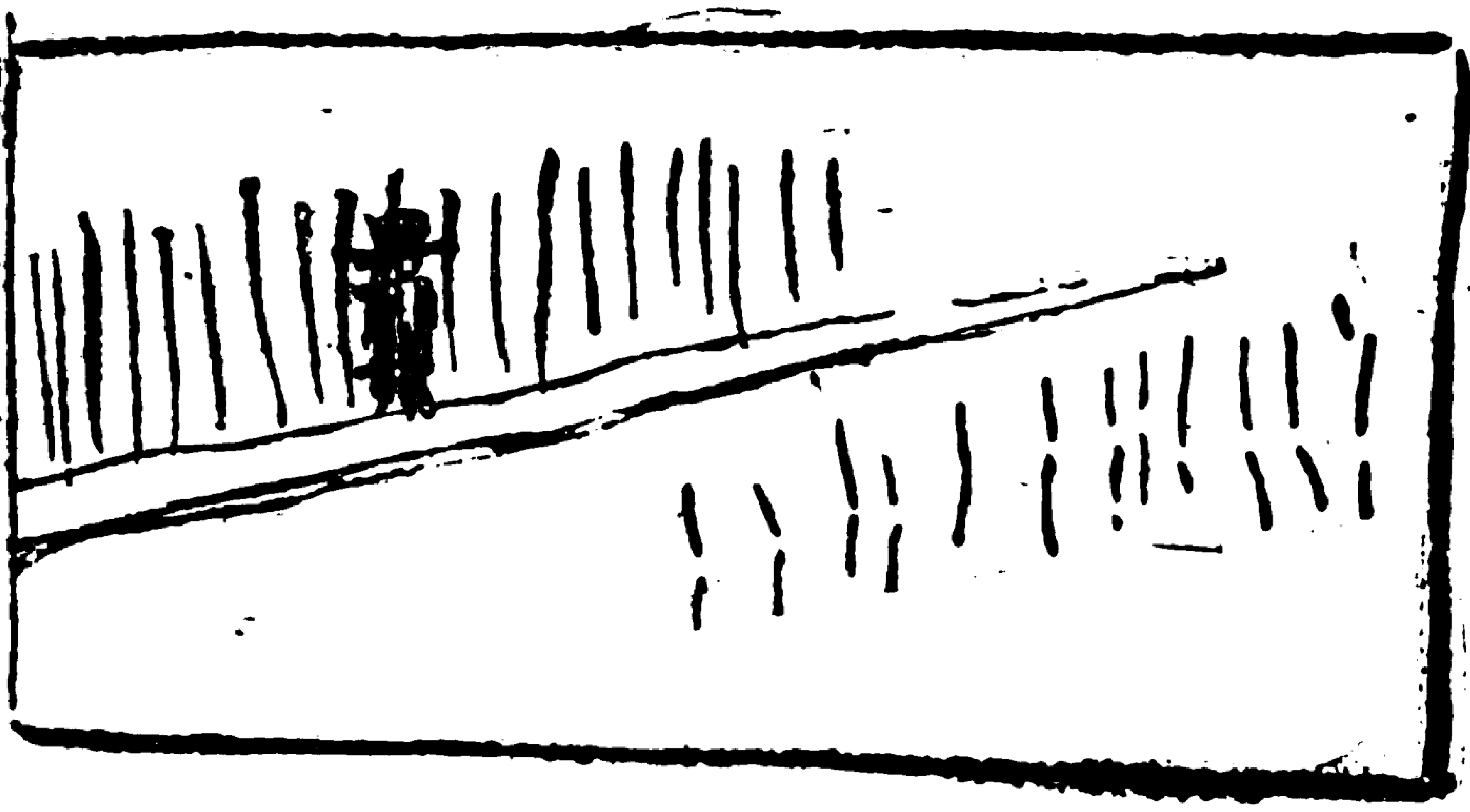
「人世には正しい事と正しくない事とがあつたのだ。わたしはこれを無視して、知らず知らず正しくないことばかりに

捉はれて來てゐたのだ。

『どう考へても茶目は救世主だ。この世に茶目が出現しなかつたら、わたしは今日のこの徹底を把握することができなかつたものだ。おたがひに茶目のためには命がけで生きなければならぬ。

『人間は何をしてもかまはぬものだ。しかしそれは魂の解放を目的とした場合にかぎる。然らざれば人世の一切は必ず無意義にをはる。

——六月十三日午後』



蚊やり

里見弴

一

盆をすぎて四五日、カリン〱に晴れあがつて、よウ、夏だな、と、そこへ來るべきものがいよ〱やつて來たといふ、いかに期節負をする人にも、或る落ちつきと壯な氣持とを起させるやうな、さういふ日、――都會のものとも思はれない、瑠璃いろの空のもとで、亞鉛屋根に載せた簀の子の物乾から、ひと擁へ取込んで洗濯ものを薄暗い二階の六疊に、ぺたんと鳶足に坐りこんだおたねが、それ〱疊み返ししてゐる最中だつた。もの靜に、勝手の硝子戸があいて、

「御免あそばせ、御免あそばせ」

と訪ふのを、誰とも見當はつけかねたが、

「どなた？」

と、勝手口の客だけに、ゆつくりともなく[illegible]

「まア、奥様、御免あそばしまして……、ふみでございます」
大小いろ〳〵の調帯を載せた棚の下に、菰包のまゝの革車、メタル、シャフトなど、傳働裝置の鐵器類が積み重ねてある板敷の彼方から、しきりと小腰をかがめてゐた。
「あら、あんたなの、まアこの日中に……。さア、早くこつちにいらつしやいなね。何してるの。……あゝ、そこ、下駄のまんまでいゝのよ、お店の人のゐるところを、いつの間にか物置きにされちやつたの。きたならしくつて、電氣臭くつて、仕様がありやしないわ。……さア、ほんとに下駄でいゝんだから、構はずこつちへいらつしやいよ」
「さようでございますか。では、御免かふむりまして……」
板敷の上に、薄齒の、いやな音を立てまいと、淺瀬を渉るやうな足どりで近よつて來たが、上り框に、風呂敷包と洋傘とをさし置き、さて改めて、いつもの馬鹿丁寧な挨拶にかかつた。「その後は、なんとも申譯ない御無沙汰を致して居りまして、もう疾にお伺ひ致さなければなりませんのですけれど、つい〳〵自分にかまけまして……。でもまア、いつも皆様、お變りもいらつしやいませんで、何より結構でございます」
「えゝ、ありがたう。まアおかげさんでね……」
「で、なんでございますか。こんちは皆様お出ましなさいまして……？」
「えゝ、おデブさんは工場、お姑さんはお寺參り、女中さんには、今ちよいとそこまでお使に行つて貰つたから、あたし一人で、洗濯ものを取り込んでたところなの」
「それは〳〵まア……」
と、日盛りを歩いて來て、眞ッ赤にほてつた白粉ッ氣なしの丸顔を、キチンと疊んだ木綿の手布で、手早くひつこす

つてから、まるで子供を劬るやうな調子で、「それはどうも、大働きでいらつしやいますわねえ」

「えゝえ、奥さんも、女店員も、女中さんも、なんでもかでも、みんな早替りで一人で勤めなけれアならないんだから、なか〳〵これで大へんよ。……さア、そんなところに立つてないで、散らかつてるけれど、こつちにおあがんなさいなね」

「いえ、もう、すぐにお暇いたさなければなりませんのですから」

「さういへば、四五ンちあとに千駄ケ谷さんの御隱居さんが見えて、そんとき伺つたんだけれど、病人さん、めき〳〵とい丶方だつてぢアありませんか」

「ありがたうございます。お影樣でまア、やつとこの節、うちのなかだけは、ものにつかまり〳〵ながらでもどうやらかうやら一人で步けるやうになりましたですけれど、何分あゝいふ病氣のことでございますから、さう目に見えてはかばかしくは參りませんので……」

「あゝ、さう。ぢア、いまだにヅッと臥たつきりなんですね」

「はい、お正月の末からでございますから、丁度もう半年からになります。暑くなつて參りますと、臥てゐるつてことも、なか〳〵辛さうでして、そばで見て居りましても、ほんとうにお氣の毒でなりませんわ」

「あら、大へんねえ。あんた、それぢや、御亭主さんのことを云つてるやうにやア聞えないわよ」

「まア、奧樣、あんなことを……」

克明に白絽の襦袢を重ねた洲濱の明石の袖を、掬ひあげるやうに膝に載せながら、半ばてれかくしに、「御免あそばせ」と、上り框に腰かけて、どこまでも年上らしく落ちついてみせやうと、すぐ言葉を續けて、「……それでもまア、お

を、始終もう何かと御心配いたゞきまして……

「へんだわ、あんた！　御隠居様つて云ふのはまだいゝとしても、御時さんは、あんた、芳造さんの妹さんぢアありませんか。さうすれアあんたにとつても義妹(いもうと)だし、御隠居さんだつて、つまりおッ姑(かあ)さんぢアありませんか。あんまり御丁寧に云ふと、却つてをかしいわよ」

「ですけれども、あんまり身分が違ひますから……」

「あら、そんなことないわ。一體芳造さんて人は、さう云つちアなんだけれど、あゝいふ變人で、自分の好きで指物屋なんぞ、……あら、御免なさい、なんぞなんて隨分失禮だわね、……でもさ、さうでせう？　なんにもそんなことしないたつて、立派にやつて行けるんぢアありませんか」

「それはもう、お影樣で……」

「あら、何もうちでお仲人をしたからつて、それで云ふわけぢアないけれど……」

「いゝえ、奥様、わたくしだつて、さういふつもりで申しあげたんぢやございません。それはもう、一年が二年患はれましたからといつて、少しも御不自由なんておあんなさいませんのですから、それだけはわたくしも……」

「あら、へんよ、おふみさん！　さういふ風に、……自分のうちのことを云ふのに、御不自由がおあんなさらないなんて……」

「いゝえ、それは、わたくしから申して……」

「だから、あんたのうちなり、御亭主なりの話ぢやありませんか」

「どう致しまして、も、わたくしなんぞは……」

「あら！　御奉公にでもあがつたやうに、……お嫁に行つてゝそんなへんなのつてないわ！」

「いゝえ、ですけれども、わたしのやうなものが、一體、初ツから、身分違ひでございまして……」

「まア、ふみつておかしな人ね！　そんなに云ふなら話してあげるけれど、いつかも御隠居さんが見えて、いゝ人を貰ひあてたつて、大へん喜んで……」

「とんでもない！」

「いゝえさ、それから先があるのよ。ほんとにこれんばかりも云ひ分はないんだけれど、たつた一つ、困る……とも仰有らなかつたけれど、一つをかしいのは、職人のおかみさんにしては、言葉が丁寧すぎて、手もなく、『あーら我が君』だつて……」

「はア？」

「『妾がことのたらちねは』つてはなしがあるでせう？」

「いゝえ、存じません」

「あるのよ。御殿奉公をしてゐた人がね、職人のところへお嫁に行つて、あさ御亭主を起すのにも、あーら我が君、日も早やどうとかかうとかしたつていふ風に、一々むづかしい言葉ばかり使ふもんだから、ちつとも御亭主に解らないで、まご／＼するはなしがあつてよ」

「はア？」

「寄席で落語家が話すはなし……」

「あゝ、さようですか。……まア、可厭ですこと！　わたくし、……あら、どう致しませう……」

と、無雑作にひツつめて、角ピンで止めた、そのおくれ毛ゆゑに、やつれて見える額際を、慌たゞしく手巾で押し拭ひながらも、非難されたといふ心持ちからの、いぢけた調子などは更になく、――それどころか、反對に、だしぬけに褒めそやされた人のやうな赤面のし方で、さも他人事らしく、クツクと身を揉んで可笑しがつた。

「あら、いやだ！　笑つて！　あんた、自分のことぢやないの！」

少しは窘めるやうに云つたのは、遠い縁續きにあたる千駄ケ谷の隠居が尋ねて來ての話が、實は、たゞ可笑しいといふだけでなくて、あゝどうも他人行儀では……、と、いくぶん夫婦の親しみが危ぶまれてゐるらしい口吻だつたので、おたねとしては、それとなく意見するつもりであつたのだが、然しそれは、仲人としての、謂はゞ義務的な氣持ちで、正直なところはその笑ひ聲を聞くと同時に、（ほんとにおふみつて、ほがらかな、子供みたいな人ね）といふやうな、今更ながらの好感情しか湧いて來なかつた。

「あら、でも奥様、わたくし可厭でございますわ。そんな、御殿奉公なんて……」

「だつて、□□子爵つていへば、昔のことにしたら、きつと大大名よ」

「それはさうかも存じませんけれど、わたくしなんぞ、五年も御奉公申し上げて居りました間に、お臺所からそとへ、――おみ奥の方へ參りましたことは、それこそ數へるほどしかございませんもの、なんにも存じては居りませんわ」

「あら、隨分存じてゐるわよ」

この、日本橋の東仲通りで、傭働裝置用品の一式を商つてゐる木村の細君と云ふのは、前身が藝者だつた。そして、今もつてそれを隠さうとしないやうな性分だつた。――六七年あと、まだ妓籍を脱しない時分に、腸チブスのひどいの

を想つて、半年近くも入院してゐた揚句、逗子へ轉地した時に、女中を探してゐると、出入の商人から、横須賀の女だが、永い間お邸奉公をしてゐて、少し體に無理がいつたので、一時と云つて、お暇を頂いて歸つて來てゐるが、ぽかんと遊んでゐられない性分で、氣骨の折れない小人數の別莊方へでもあがりたいと云つてゐるのがあるが、その話に、早速來て貰つて、四月ほど煮炊の世話をして貰つたのがおふみだつた。その時分の年齢で七つ違ふと、ちよつと小母さんの感じだつた。何しろ、おたねは二十歳になつたばかりで、おまけに大きな藝者家の賣れッ妓だつたから、心持が誠に鷹揚で、體のことは看護婦に、うちのことはおふみに、一切まかせきりだつたから僅の間ではあつたけれども、とても普通の雇主と奉公人との間には見られないやうな親しみが出來てゐた。初の間はひどく謙遜し卑下してゐたおふみも、だんだんには、徒然の枕もとで、百人一首の講釋をして聞かせたり、手紙の代筆をしたり、□□子爵家仕込の學問で、小學校も碌々出てゐない、若い女主人を吃驚させるやうなことも屢々だつた。――おたねは、今、それを思ひ出して云ふのだつた。

「あんた、なんだつてね、このごろ芳造さんは、歌をよんだり發句をつくつたりしなさるんだつてね。いつだか御隱居さんが行つたら、枕もとに萬葉集が置いてあつたつて……」

「あら、嘘でございますわ」

と、少しも感じの惡いところはないけれど、さうかといつて、決して美しいとは云へない平顔を、いとも稚やかに伏せて、何も、わたくし、數へるのなんのつてつもりはちつともないんですけれど、たゞ、病人さんがあんまり退屈いたしますもんですから、……もうこの頃は、蓄音機も飽きて了ひまして、……だもんですから、つい……」

つて、芳造さんの病氣がなほつちまつたら、一體、どう云つて呼ぶつもりなの？」
「まア、奥樣！」
「それより、うちで、なんてつて呼んでるの？」
「わたくし、あの……、なんとも申しませんのでございますよ」
「さうでせうねえ。何しろ芳造さんが、御隱居さんやお時さんの前だと、おふみ……さんつて、云ひ悄さうにしちア、そうつと『さん』をくツつけてるつて」
「あら、可厭でございますわ」
「可厭でございますつて、さうに違ひないんでせう？」
「わたくし、あの、呼び捨にしてくださいますやうにつて、度々さうお願ひ申すんでございますけれど……」
「いゝわねえ」
「はア？」
「仕合だわ」
「はい」
「それアね、御嫁に行つて半月たつかたゝないうちに、御亭主に病みつかれて、……それも、一時はどうかも知れないつていふやうな騷ぎをして、それからこつち半身不隨で臥たつきりなんだから、不仕合と云へば不仕合よ……」
「いゝえ、もう奥樣、どう仕りまして……」
「あら、大へんねえ。來る草々御亭主のお惚話？ずゐぶん暑いわねえ」

「いゝえ、奥様！……あら、わたくし可厭でございますわ」

「あたし、話に實がいつちまつて、まだお茶ひとつあげないのよ。どうかしてるわねえ」

「とんでもない！　わたくしすぐにもうお暇いたしますんでございますから……」

と、慌てゝ立ちあがるのを、叱りつけるやうな調子で、

「駄目よ、たまに來て！」

「はい。ほんとうに、いつも〱心にはかけながら、何しろ病人さんを控えて居りますんで、……小僧さんでも、是非お盆のうちにと思ひましたんでございますけれど、伺ふくらゐなら、わたくしがあがつて、久々で奥様にお目にかゝつて、いろ〱とお話し申しあげたくなるもんでございますから、つい今日は明日はとだん〱延びになつて了ひまして……」

「いゝえ、そんなことはいゝけどさ、たまに來たんだから、今日はゆつくり話していらつしやいよ。もう女中も歸つて來る時分だし、おデブさんやおつ姑さんは、ほんとのこと云へば、ゐない方がいゝでせう？　逗子にゐた時分みたいに、二人で可厭ンなるほど喋りませうよ」

「いゝえ、それがね、奥様、こんちはちよつとお盆のお顔だしだけに……」

と、云ひかけて、ひよいと氣がついて、傍の風呂敷包をときかけながら、「……何しろ、一月の末から、一週もおもてへ出たことがございませんので、電車のなかで、わたくし、もう少しでクラ〱ッと目が廻りさうになつて了ひましてすわ。ほんとうに、無我夢中で出て參りましたのですから……」

と、板敷から伸び上つて、渡船でも呼ぶ態に、兩手で押へながら、「どうぞもう、ほんとうにお立ちなさいませんやうに……」

「いゝわよ」

「いゝえ、そんなことあそばせば、わたくし逃げて歸つて了ひますから」

「だつて、仇のうちへ行つても、お茶だけは飲むもんだつていふから……。まア、兎に角お待ちなさいよ」―

「いゝえ、頂きたければ、わたくし自分でお臺所で頂いて參りますわ。ですから、ほんとうに、どうぞ……」

さう云つて、立つて行かうとしてゐるおたねの足を、無理にも止めさせて置いて、風呂敷から取り出した砂糖のボール箱を、四ン匍に、部屋の隅の方へヅッと押しやりながら、「奥樣、これは誠になんなんでございますが、ほんの御中元のおしるしに……」

「まア、それはどうも、却つて……」

おたねもそれで引き返して來ると、輕く會釋をして、「こちらこそしよつちう御無沙汰ばかりしてゐるし、お見舞かたがた是非伺はなければ、と思つてたんですけれど、何しろ御覧の通りの、こんな有樣だもんですから」

「どう致しまして。なか〳〵奥樣も、お大抵ぢアいらつしやいませんわね」

「えゝ。それでもね、うちなんぞは、子供がないから、まだ〳〵これでよつぽど暢氣なのよ。先達もちよつと千駄ケ谷さんへお伺ひしたけれど、まつたく大變だわね。十を頭に六人……、馴れないものぢアいゝ加減逆上あがつちまいさうだけれど、そこをうまアくお時さんやつて行きなさるのよ。あたしとたつた二つしか違はないんだのに、すつかり阿母

さんぶつて……。子持になると、あゝもしつかりするものかしら。あたし、なんだか悲觀しちやつたわ」

「それに、それは〳〵お優しい方でございましてね、あのお忙しいなかから、それも遠方のところを、月に一度や二度は、必ず手前どもへお見舞くださるのですよ。先達もおいでくださいました時に、病人さんの樣子を御覧になつて、大へんお喜びなさいましてね、もう少し體が自由になるやうになつたら、ゆつくり二人で湯治に行つていらつしやいなんて……」

「あゝ、それはいゝわね。あんたゞつて、ずゐぶん無理を押して來てゐるんだから……」

「とんでもない！　病人さんは兎も角、わたくしなんぞ、湯治どころぢアございませんわ。そんなことしたら罰があたつて了ひますわ」

「あら、行つてらつしやいなね、新婚旅行のつもりで」

「まア、奧樣、御冗談ばつかり！　可厭でございますわ。……でも、わたくし、おかみさんにさう仰有つて頂いた時には、我知らず涙がこぼれましてございますよ」

「えゝ、あの人はね、一體、昔ツから大へんな兄さん思ひなのよ。あんちやん〳〵つてね、今もつてあんちやんでせう？　おかしいわ、子供が六人もあるくせに！　……それもおかしいけれど、あんたのおかみさんも、もういゝ加減によさないとへんだわよ。お時さんつて仰有いなね」

「あら、そんな……。それこそ罰があたりますわ」

おふみとしてみれば、いかにもそれは、さうは呼びにくかつたかも知れない。お時は、亭主の實の妹には相違ないのだけれど、身分、と云ふより、財産で比べると、どだい桁違ひで、地震前まで東京ちうで十指を洩れない一流の宿屋を

てゐるだけに、夢にも思はない義理の姉にあたつた今も、おふみは、一も二もなく、たゞもう頭がさがつて了ふのだつた。

一體、芳造お時の父であり「千駄ケ谷の御隱居」と呼ばれて、七十二歳の今もつて、なかく若いものに負けてゐないほど達者なおゆうの良人、――といつてもよからう、然し正しくは旦那で、五十何歳で本妻に先だたれてからは、そつちに子供がなかつたので、本石町の店を大番頭に讓つて了ひ、以前の妾宅を我が家にして、もの靜な餘生を終つたのだが、その木綿問屋の主人といふのが、これがまたよほどの變り者だつた。職態に似合ず、漢學の素養が深くて、漢詩をつくつたり、文人畫を描いたり、そんなことが道樂で、そしてまた道樂の境を脱した、玄人はだしの作も殘つてゐる。本妻や店のものは、たゞの一度も慍つた顏を見たことがないと云はれてゐるのに、不思議におゆうとは、若い時分から別れたり、また一緒になつたり、何遍と數へ切れないほど喧嘩をし通したものださうだ。その他、いろく逸話もあるが、玆には、おゆうの生んだ二人の子供に對して、實に驚くばかりの慈愛と自由とを與へて、少しもこせついたところのないやうにと、始終それをやかましく云つてゐたことだけを誌すにとゞめやう。

で、芳造は、自分の好きから指物師になつて、今の世には向かない、念のいつた仕事をしてゐた。二十臺で貰つた女房とは、子供が出來ないうちに死別れて、それ以來、三十五になる今年の正月まで獨身で來た。無口で、金錢に頓着がなく、これも自分の好みから、龜井戸の、陰氣な襤褸家に住んでゐた。

またお時は、これも自分から望んで、十四の年齡に、一流の土地の、一流の藝者家から雛妓に出た。一文でも借りる必要なんぞはなかつたが、それでは困ると云はれて、おゆうが、笑ひながら三十圓の金子を收めて歸つたといふのが、

いまだに一つ話に殘つてゐる。十九で×屋の若旦那と知つた。若旦那は、この人を嫁に貰つてくれなければ、どうするのかうするの、仕舞には死んで了ふまで持ち出して、その頃まだ達者だつた兩親に駄々をこね、親類縁者の反對にも拘らず、やがてまづ親たちから折れて、お時の抱主の方へ話をさせた。この時だけは、おゆうが妙に可厭がつたが、當人がたゞふうわりと承知して、さして行きたさうな顏もしずに行つて了つた。若いおかみさんとして、×屋の帳場に坐るやうになつてからの苦勞は、なか〳〵なみ一通りのものではなかつたが、お時はついぞやつれたやうな顏さへ見せなかつた。兩親が惚れ込み、親類ぢうの評判も、おひ〳〵に好意に傾いて行つた。そのまに、子供がどん〳〵ふえ、老父母は、同じ年のうちに、相繼いで亡つた。

震災で、京橋の、金目のかゝつた家藏が灰になつて了つた。良人の治助は、前々からあまり家業に興味をもつてゐなかつたので、これ幸、といふくらゐの氣持で、多年賣り込んだ×屋の看板を、それきり引つ込めて了ひ、千駄ケ谷に庭の廣い貸家を見つけて、氣樂な無職の境界にはいつた。地震前までは、龜井戸の方にゐたおゆうが、そつちで、大勢の孫の世話をやいたりしてゐるうちに、いつとはなしに「千駄ケ谷の御隱居」になつて了た。

これだけの事實を語れば、可なり突飛にも思はれる芳造とおふみとの縁組については、もうそんなに詳しいことを云ふ必要はあるまい。中絶して、永らく行き往はしなかつたのだけれど、おたねの亡父とおゆうとは、再従兄弟くらゐの間柄にはなつてゐたし、お時とおたねとは、同じ土地で出てゐた頃の仲よしだつた。そして芳造は變り者で、なんでも自分のしたい通りにしなければ氣のすまない男だつたから、一遍でもおふみを見て、いゝとさへ思へば、それが横須賀のほんのつまらない綿屋の娘であらうとなんであらうと、それでもう一切萬事がきまつて了ふわけだつた。

と、そこへ使ひに出てゐた女中が歸つて來たので、おたねは茶を淹れるやうに云ひつけ、顏を見るなり喋りつゞけでつい忘れてゐた座布團も、おそまきながら客に勸めた。ひとしきり、話は、逗子に轉地してゐた頃の思ひ出に移つて行つたりしてから、

「ほんとにあんたも、先の御亭主さんにも永いこと患はれたんだつていふし、その次があたしの看病で、今度はまた芳造さん……。いやに病人ばかり緣があるのね」

「いゝえ、そんなこと、ちつともなんとも思つては居りませんけれど、何ぶんこんな不束者で、萬事につけて行き屆きませんから、さぞ病人さんがなんだらうと思ひまして……」

「そんなことないわ。あたしでさへあんなによくして貰つたんですもの、ましてや御亭主さんぢやありませんか。それァもうあんたならきつと大丈夫よ。さうだし、御隱居さんでも、お時さんでも、お目にかゝるたんびに、あんたがよくじてあげなさるつて、いつでも褒めていらつしやらないことないわ。それは有難いけれど、あれでは、今度はあのこに倒れるやうなことになりやしないか、なんて、御隱居さんなんか、そこまで心配していらつしやつたくらゐだわ。……ほんとにあんた、ちつとは自分の體も氣をつけなけれァ駄目よ」

「いゝえ、わたしなんぞ、御覽の通り、なか／＼ぶち殺さうつたつて死にさうにもございませんのですもの、出來ることなら、ちつと病人さんにこの肉を分けてあげて……、さうしたらわたくしも、奥樣のやうにすらつとして、ちつとは格構がよくなるかも知れませんけれど、ほんとうに相變らずのブテ／＼肥りで可厭ンなつて了ひますわ」

「でも、先から思へば、少し痩なすつたわねえ」

「なんですかどうも……」

と、伏目に、我が膝頭を撫で廻してゐたが、「……まア、奥様、ちよつとお門口までと思つてお伺ひ致しましたのが、お目にかゝると、つひうか〳〵お喋りを致して了ひまして……」

「まアいゝぢやアないの」

「いゝえ、もう、なんでございます……」

「忙しないのねえ。いま電話で冷いものをさう云はせたから、もう少しお話しなさいよ。たまのことだし、もうおツつけおツ姑さんもお歸ンなさる時分だと思ふから」

「ほんとうに、御隱居様にも旦那様にも永らくお目にかゝりませんし、いろ〳〵お禮も申しあげたいのでございますけれど、何しろ病人さん一人おいて參りましたので、なんですか氣になつてなりませんから……」

「え？　一人つて……？小僧さんか誰かゐるんでせう？」

「いゝえ、それが、こんちは、三人が三人、揃つて出かけて了ひましたものですから」

「あら、どうして？」

「年嵩のは、ちよつと仕事の使に參りましたのですが、あとの二人は、お盆に都合が悪くつて、藪入をせられませんもんでしたから、今日はお天氣もよしするので、一日ゆつくり遊んで參るやうにつて……」

「女中さんは？」

「わたくしが參るまでは、婆やさんと若い方と二人をつたのでございますけれど、勿體なうございますから、折を見てみんな暇を取つて貰ひまして……」

「あら、さう！　ぢや、ほんとうの一人ツぼつちで待つてるの？」

「はい」

「あら可厭だ！　あんたもまア、なんだつて、よりによつてそんな日に出かけて來たのよ」

「それがねえ、奥樣、今朝からなんですか大へんに心持がいゝし、大丈夫だから、こんな時に日本橋へ伺つて來いつてやかましく申すものですから……」

「大へんねえ、そんなに云はれなければ來てくれない人なの？」

「あら、さうぢアございませんけれど、わたくしが出ましても、せめて小倅さんでもうちにゐてくれます時でございませんと、あとが心配ですし、それに、何も是非今日に限つたといふことでもないんですからつて、いろ／＼賴むやうに申してみたのでございますけれど、小倅がゐればゐるで、また飯の世話やなんかしてやらなければならないし、今日くらゐお前の手のすいてゐることは珍しいんだから、どうしても今からすぐに行つて來いつて、あゝ見えましても、一度云ひだしたら、なか／＼あとに退(ひ)きません性分だもんですから、わたくしも、それほどに仰有るのを、押し切つて可厭だとも申されませんもんですから……」

「あら、さう！　そいぢア、よつぽど今日は氣分がよかつたんでせうから、少しくらゐおそくなつたつて大丈夫よ」

「はい、まアさう存じましたから、わたくしも思ひ切つて出て參りましたのですけれど、なんですかどうも、矢つ張り……」

「大へんねえ、あんたは！　すまアしこんですゐぶん云ふわねえ」

「はア？」

「はアぢやないわ。あたし、あんたみたいに、のめ／＼と惚話る人はじめてだわ」

「あら、奥様、そんなに……。まア、わたくし、可厭でございますわ」
「だつてさうぢやないの。たまに來てくれたかと思ふと、上へもあがらずに、すぐもう歸る〱つて。……そんなにも御亭主さんが氣ンなるかしらん」
「いゝえ、さうぢアございませんけれど」
と、むきになつて、喰つてかゝるやうな調子で、「何しろあのへんは、じけ〱して居りますもんですから、とてもそれはお話になりませんでございましてね……」
「え？　なアに？」
「晝間つから、大へんな蚊なんでございますよ」
「あらいやだ！　誰が蚊の話なんぞしてよ。あんまりあんたが……」
「いゝえ、ですからわたくし、出がけに蚊帳を吊つて參りませうつて申したんですけれど、宅の蚊帳は、病人々々して陰氣で可厭だつて申すものですから、あつちこつち戸障子を締めて了ひまして、ふたところに蚊燻をしまして、それから出て參りましたくらゐで……」
「あら、この温氣に締め込まれてちやアたまらないわね」
「はい。そんなわけで、わたくし、蚊が氣になりますから……」
「まア、をかしなふみねえ！　病人さんはどうでも、蚊が氣になるつて云ふの？　まア、ずゐぶん下手な誤魔化し方ねえ」
「奥様みたいにさう仰有られると、わたくし、とてもどうもかなひませんわ。……わたくし、何もさう、別に……」

「可厭なおふみさんねえ、あんな怨めしさうな顔をして。……解つてゝよ、ちやんと！」

「さようでございませう？」

と、すぐ笑顔になつて、「ほんとに奥様は、人をお揶揄ひあそばすのがお上手で、わたくしのやうな田舎者は、どう申しあげていゝのか、まつたく困つて了ひますわ」

そこへ女中が、アイスクリームを運んで來たので、おふみも擡げかけてゐた腰をもう一度落ちつけ、龜井戸あたりの人氣のよくないことなどを話題にしながら、馳走になつた。

「では、頂きだちで、誠に失禮でございますけれど」

と、やがて、いよ／＼歸り仕度にかゝつて、「四時になりますと、そろ／＼電車がこみ始めますから、こんちはこれでお暇いたします」

「さう？ 病人さんを擁えてゐるんじやア、あんまり無理に引きとめても却つてなんだから……。ぢアまた近いうちに、今度はゆつくり遊びに來て下さいね」

「はい、有難う存じます。どうぞ、御隠居様、旦那様がお歸りあそばしましたら、くれ／＼もよろしく申しあげてくださいまし……。どうも、これは、ちよいと出まして……」

「遠いところを、態々どうも有難うございました。なんですか、頂戴物まで致しまして……」

「どう致しまして、恐れ入ります」

「あたしもまた、折を見て一度お見舞に出ますけれど、どうぞ芳造さんに、お大事になさいましつて、よろしく云つといてくださいね」

「畏りました。さう申し聞かせます。奥様も、どうぞくれ〴〵もお暑さおいとひあそばしまして……」
勝手の硝子戸までに、幾度も〳〵振り返つて、丁寧に挨拶をしながら、おふみはやがて歸つて行つた。

二

「あら、どうしたんでせう、戸が締つてますわ」
枸橘垣(からたちがき)について、往來から四五間はいつたところが、格子戸の玄關になつてゐる。――仍で俥をおりて、そこへ來て見て、お時は、まるで思ひもかけない。古ぼけた雨戸の色を見た。
「さうかい？」
と、老人(としより)らしい落ちつき拂つた心から、然しおつき合に、さも吃驚したやうな氣持を聲音(こわね)に響かせて、「でも、うちどうで出かけられる筈のないうちなんだから、聲をかけて御覽なね」
「ちよいと！ もし〳〵……」
で、耳を澄したが、ゴトリともものの音はなかつた。指の長い白い手を、輕く握つて、綏か(かすか)に戸を叩きながら、
「おふみさん！ おふみさん！ もし〳〵、誰もゐないの？」
それでまた、暫く待つてみたけれど、人氣もなく、深閑と靜まり返つてゐた。振り向くなり、思はず低聲(こごゑ)になつて、「どうしたんでせう」
「なに！ どうもしやアしないよ。ちよつとお使にでも出かけたんだらう。あかないかい？ 締りはしてないんだらう？」

隙間に指をかけてやつて見たがあかなかつた。

「へんですわね。どうしたんでせう」

「晝寢でもしてゐるんぢやないかい？　もう一度叩いて御覧な」

戸の隙へ口をもつて行くやうにして、

「おふみさん！　おふみさん！　お留守なの？」

「ぢやいゝやね、庭から廻らうよ」

おゆうは、暫く住み馴れた家の、氣も輕く、すた／＼と二三間さきへ行つて、木戸を押すと、他愛もなくあいた。眞直にはいつて行けば水口だつたが、五六本、煤煙に黒ずんだ樫の木の枝をくゞつて、いきなり茶の間の緣先へよつて行つた。そこも、ところ〴〵五寸、一尺と隙して、雨戸がたてゝあつた。

「あら！　阿母さん、烟が！」

あとから來たお時が、突拍子もない聲をたてゝ、草履でパタ／＼と駈けよるなり、一二枚戸を引きよせて、恐怖もないところから踊り込みながら、

「おふみさん！　火事ぢアない？　烟が出てよ！　ねえ、誰かゐないの？」

老人の日にも、成程、戸の隙から洩れて來る白い烟が見わけられた。で娘のはいつた隙から、續いて伺ひあがつた。

「ほんとうに大へんな烟だよ！　どうしたんだい？」

「あら、蚊やりだわ！」

「なんだつてまた、こんなに締め込んだんだらう。プーウ」

と、息を吹いて、「なんぼなんでも、これぢや毒だよ」

その時、薄暗い奥の間から、お時の聲が、

「あんちやん、寝てゐるの？……あんちやん！　あんちやん！」

戸袋の方へ行きかけてゐた母親も、それを聞くと、病人のそばへ馳けよつた。

「どうおしだえ」

「あんちやん！　あんちやん！」

「芳や、どうしたんだよ！　しつかりおしよ！」

お時の膝に抱き起された芳造は、薄暗がりに、懶げな目を瞬かうともしずに、力なく手足を伸してゐた。

「芳や、どうおしだえ！　しつかりしておくれよ！」

「あんちやん、おふみさんも誰もゐないの？、え？一體どうしたのよ」

「どこかどうかあるのかい？　氣分が惡いのかい？」

「なんでもない」

聲音は存外しつかりしてゐたが、たゞいかにもうるささうだつた。

「なんでもないつて……。ぐつたりしてゐるぢやアないか。どつかどうかあるんだらう？」

「大丈夫、どうでもないんですよ」

「あんちやん、あんた一人？　だアれもゐないの？」

「ゑゝ」

「まア！」、

「この暑いに、なんだつてこんなに雨戸をたて切つておくのさ」

「蚊がひどくつて、とてもあけておかれやしないよ」

「だつて、お前さん、これぢア……、大へんな煙だよ！　てつきりもう火事をだしたんだと思つたよ」

「あんちやん一人おきツぱなしにして、一體おふみさん、どこへ行つてるのよ！」

「うん？　ちよつと出かけたんだ」

「そんなことより、お時さん、兎に角まア戸をあけちまはうぢアないか。これぢア達者な者だつて、三十分とゐたら目を廻しちまふよ」

云ふうちにも、すぐもう立つて行つて、茶の間の雨戸を、ガタピシやり始めるのに、お時も手近の窓障子を、ガラガラあけ放して置いてから、すぐそつちへ駈けよつて行つて

「阿母さん、よござんすよ！あたしがしますから」

それが、叱りつけるやうな突慳貪な調子になつてゐるのにも氣がつかなかつたほど、お時はかツとなつてゐた。まだるつこい母親を押しのけるやうにして、急ぐのと八ツ當りを半分々々に、手荒く雨戸を繰り込んだ。――ふたところに炊いた蚊やりの煙が、天井にたゆたひ、軒端に絡みながら、生温い夕風に乘つて、流れ出して行つた……。

「お阿母さん！」

「なんだい？」

お時は、相が變つてゐた。ついぞ見たことがないやうな劍だかな目つきをして、

「やつぱり、他人だわねえ」
「何を云ふんですよ！」
「あたし、つく〴〵可厭ンなつちまつたわ。人間つて、こんなもんかしら」
調子の烈しさに撃たれたのか、奥の間に聞えてもと思ふ遠慮から、内々同感なのを、わざと口を噤んで了つたのか、おゆうはそれにはなんとも答へずに、すまして、臺所との隔の障子をあけ開げたりしてゐた。
「あんちやん、どう？　これでせい〳〵したでせう？」
云ひながら、枕もとへ來て坐つたが、病人は、兩手で頭を擁え込むやうにして、ぢつと目をつぶつてゐた。領き返しもしなかつた。
「どうしたの？　頭痛がする？」
微にかぶりを振つてみせた。
「ぢアどうしたのよ。どこがどうとはつきりおつしやいなね」
肩までたくしあがつた袖をおろしてやつて、序に掌を額に押しあてゝゐたが、「熱がありやアしないこと？」
「うゝん」
「冷しませうか」
「いゝよ」
「でも、熱いことよ」
あゝ、うるさい！　と云ひたげな溜息をついて、今度はかぶりも振らなかつた。
「おふみさん、どこへ行つたの？」

「…………」

「小僧さんたちも、今日に限つて、一人殘らず出て行つちまつて……。一體どうしたつてことなのよ」

「…………」

「體の惡い人を、たつた一人ほツたらかして置くなんて、少し亂暴ね。……ねえ、いつごろ出かけたのよ」

そこへおゆうが戻つて來て、

「お前さんもまたうるさい人だね。氣分の惡い時には、口ひとつ利きたくなくなるもんだのに、そんなにやいやい云ひなさるなよ」

「だつて阿母さん……」

「いゝから、臺所へ行つて、金盥に水を汲んどいでなさいよ。ちつと頭でも冷してみたら……、ねえ、芳さん、どうだい？」

「……あゝ……」

溜息とも呻き聲とも聞えるやうな返答をして、芳造は、くるりと壁の方へ寢返へつて了つた。

「きつと、なんだよ、蚊やりの煙にまかれたんだよ」

おゆうは、取りつく島もない手持無沙汰から、娘の方へ話しかけて、「これで、すつかり煙が出ちまいさへすれば、すぐ氣分がなほるに違ひないんだけれど、でもまア、兎も角頭を冷してあげようぢアないか」

お時は、むしように腹がたつた。――いやにお上品ぶつたあそばせ言葉かなんかで、亭主關白と崇め奉つてゐるのも、ほんの人前のお體裁だけのことで、自分の勝手についてては、どこまで行つたのか知らないが、この濕氣に戸障子を締め切つて、狐つきではあるまいし、周から燻したてゝ置くなんて、ずいぶんひどい人だ。こんなことゝも知らないで、今

まで、心からありつたけの誠を盡してつき合つて來たのが忌々しい。見損つた、見損つた！　あたし口惜しい！……と、肚の底から煮えくり返つて來るやうな思ひを、唇の裏つ側を嚙み締め嚙み締め、ぢつと我慢してゐたが、母親に話しかけられては、默つてそつぽを向いてゐるわけにも行かなくなつて、
「えゝ。ぢア、今、水を持つて來るわ」
と、知らず識らず足掻きも荒々しく、臺所へ立つて行くと、先刻母親が戶を繰つたとみえて、水口はあけつぱなしになつてゐたが、きちんとあたりの取り片づいてゐるのにも、折が折とて、例の馬鹿叮嚀な言葉使が思ひ出されて、他人には指一本さわつて貰ひたくないと云ひたげに、一分一厘己の居場所を違へず、納り返つてゐる鍋釜までが面憎かつた。
そこへ、勝手口から、息せき切つてはいつて來る人の氣勢がしたと思ふと、
「あら！」
きつと睨んで、
「おふみさん！　あんた、今時分まで一體どこへ行つてたの！」
「はい」
「はいぢアないわ！　あんちやん、もう少しで氣が遠くなりかゝつて……」
「へー！」
簀の子におり立つてゐたお時を突き飛ばすやうにして、バタ〳〵ツと奥へ駈け込んで了つた。續いてお時も、搖れ動く金盥の中の水を見詰めながら、すり足で、奥の間へ引き返して行つた。
と、芳造が、ぴたりと布團の上に坐つて、膝と膝とをつきつけたおふみと、眞正面に顏を見合せて、ぢつと睨み合つてゐた。相手の兩の手頸を把つて、腿のつけ根へぎゆつと引き据えた病人は、亢奮から一層蒼白く、夕日を浴びて駈け

戻つて來た女房は、眞ッ赤な顏をしてゐた。……そのまゝ石になつて了つたやうに、どつちも、口を利かうとはしなかつた……。

生垣のそとで、だしぬけに、頓狂な豆腐屋の喇叭が鳴つた。

……痩せ尖つた鼻梁に沿つて、涙がこぼれ落ちて來た。同時に、眞つ赤な頰にもつたつてゐた。

「……おい！……」

「……やつぱり、御覽なさいましな、……ですから、わたくし……」

「あゝ、俺が惡かつた！」

「……わたくし、わたくし、……ですから、わたくし、隨分いやでしたのに……」

「惡かつた！」

「いゝえ、わたくしこそ、……御免あそばせ、御免あそばせ……」

「……おい！　寂しかつたよ！」

「さうでせうとも、さうでせうとも！　もう／＼一生、決してどこへも參りはしません！　どうぞ御勘辨くださいまし！　ね、あなた！　ね！」

立身に金盥を持つたまゝ、お時は、ボロ／＼ボロ／＼涙をこぼしてゐた。

おゆうは、ふら／＼と起つて行つて、先刻緣先に持ち出した蚊やりの小鉢を提げて來ながら、

「成程、これアどうもひどい蚊だ。着物の上からくふよ……」

と、獨語にぶつ／＼呟いて、頰を掠めて匍ひ昇つて來る烟に、しきりと瞼をしばだゝいてゐた

夫婦は頰を押し重ねて、手ばなしでオイ／＼泣いてゐた……。



長篇「この三つのもの」

佐藤春夫

三章

重い沈默であつた。お八重は胸のなかに蟠つてゐたすべてを言つてしまつたし、赤木はほんの一時逃れの返事をして、然しこれから先に起らうとしてゐる出來事がどれだけお八重を悲歎させるかを考へた。

「たうとう！」

赤木は彼の心のなかでさう言つた。さうして赤木は、お八重が外には適當な人は誰もなかつたとは言へ、彼女の重大な相談事の相手に彼を擇んでくれたことを嬉しく思つた。實際、今までには幾度か、おせつかいだと思つて差控へてゐたこの事件に就て、その赤木にお八重は最も適當な役を賴んだのである。——非常な信賴を以て。その信賴が赤木には喜ばしかつたが、さて直ぐにそれに對してお八重に酬いるわけにはいかなかつた。お八重の眞劍な質問に、赤木は明確に答へることが出來

た。當然すべきであつた。それを赤木が躊躇したのは北村の秘密を、赤木はかつて當の北村自身の口から明されてあつただけに、北村に對して憚られたのだ。それかと言つて「あなたの口から、そんな馬鹿なことがあるものかと聞きさへすれば、わたしも安心をするんです」といふこのお八重に對して、赤木は僞を言ふことは出來なかつた。この僞を言ふほどなら、赤木は寧ろこの場合、お八重に一切を明した方がいゝと思ふ。それが敢て出來ないといふのは赤木がお八重に對して冷淡でないだけに、北村の秘密を好んであばいたと思はれてはならないといふ氣持が強く働いてゐた。――これはやつぱり、北村自身の口からお八重は眞實を打明けさせるやうに勸めるより外にはない。赤木はさう考へつづけながら、彼がさつきから探つてゐた態度が、甚だ曖昧だつたけれども、外に仕方のない事だと思つた、しかしお八重がもう一歩踏み込んで來るならば、自づとはつきり答へざるを得ないだらうと危んだ。

しかしお八重は、そんなに複雜に働いてゐる赤木の心を知らなかつたから、すつかり赤木に任せた氣持になつて、とは言へ、彼女がこの日頃まさかと思ひながらも惧れてゐた事がだんだんと事實になつて現れて來さうなのを感じながら、心は悪く落着いてゐるのが自分ながら不思議だつた。

彼等の沈默は各さういふものであつた。

「あ！歸つて來ましたわ」

お八重は、突然、低い聲で力強く言つた。噂の人物が身邊に出て來た事を警告する聲であつた。また自分の運命ともいふべきものが接近した感じに打たれて怯へた人の叫びでもあつた。赤木は自分の瞳に見入つてゐるお八重の瞳を見返へした。お八重は直ぐに立つて慌てて夫を出迎へに下りた。一向にそれらしいけはいをさへ感じなかつた赤木は、お八重が氣が立つてゐて何か感違ひしたのではないかと思つた。とたんに、威勢のいい足音が驅け登るやうにして、北村が

そこに立つてゐた。

「やあ、歸つて來たですな」

部屋へ這入りながら北村は、さう言つて、八重歯の現はれる柄にない可憐な笑顏を赤木に見せた。北村の言葉は道化た切口上で、それは彼等の共通の友人である俳優山上白雲の會話振りの眞似だつた。彼等はいつも好んで時々に適當なさまざまな共通の友人の言色を使つて、その友人の性格描寫を試みて笑ふ癖があつたが、この場合、赤木にとつては北村の遊戯は氣にそぐはなかつた。

「君は一たい、何だつて早く歸つて來ないんだ」

赤木は眞面目た沈んだ聲で言つて、咎めるやうにして北村を見入つた。自づと目についた赤と青と黑と紫とが交錯した豪華な絢爛なネクタイからそれのくつついてゐる顏のへ、赤木は徐ろに見上げて行つた。しかし、そこにまだ消えずに殘つてゐる北村の微笑に對しては、赤木の顏にもさすがになつかしさの笑ひが自づと湧き上つてつつみ切れなかつた。赤木は北村を見ると氣が引つたつやうな氣がした。これはいつもの事である。北村はさういふ風に活氣に充ちてゐた。

赤木の言葉には別に注意を拂はうともせず、北村は返事の代りにはもう一度、今度は意味ありげにニヤリと笑つて見せた。さうしてやはり山上流の口調を改めようともしなかつた。

「ああ、赤木氏。しばらく待つです。ちよつと着物を平生のものに改めるです」

立つたままそれだけの事を云ふと北村はそのまま下へ降りて行つたが、洋服を拔ぐと直ぐさま引返して來た。さうしていくらかぐつたりとした樣子で、座敷の眞中にある卓によりかかつて座つた。それは十分前までお八重のゐた席ぶと

んの上である。

赤木は言つた「君は全くいいところへ歸つて來てくれたよ。僕は困つてゐた」

「どうしてでありますか」北村は今度山上流ではない別の口調で言つた。やはり友人の誰かの句法ではあつたが、聲は北村の地聲であつた。たとひ眞顏なことがあつてもいつも直ぐにはしやぎ出す赤木、沈鬱になればなるほどはしやぎ出す赤木が、今日に限つていつまでも妙に口の重いのに北村はふと氣がついたのだ。

赤木は今のさつきまでつづけてゐたお八重との會話で心が一杯だつた。さうしていつの間にか決心をしてゐた。その決心はお八重と話てゐる間にごく靜に醱酵してゐたが、北村を見た瞬間にはつきりと完成された。今こそ眞面目にかつてはよく冗談のやうに言ひかけた事を、赤木は改めて北村にばかり計りたかつた。計らねばならないと思つた。——偶然にもすべてのまはり合せが恰もそれを要求してゐるやうに赤木には感ぜられた。事情を考へれば考へるほどその感が深い。

「——いづれゆつくりと話をするがね、……ともかくも君が來てくれてよかつたのだ」それだけいふと赤木は急にやや低い調子になつて「ね、君、お八重は（と赤木は北村に對してはその家族をいつも北村が呼ぶとほりに呼び捨てにしてゐたが）AとBとの件をもう感付いてゐるんだね」

「うん」北村はさも事もなげに頷づいてその序にがつくりと横になつて肘枕をしながら「さうなんだ」

「……………」

默つてゐる赤木を促すやうに北村はもう一度言つた「お八重が、何か言つたかい」

「言つたよ」

赤木はしつかりと頷いて見せた。

お八重の輕い足音が階段を二つ三つ踏んだので、ふたりは急に默つてしまつた。お八重が現れた時、北村はわざとらしい無言を取繕らつた。

「旅行は面白かつたかね。——わざ〳〵またつまらない、遠くまで行つたものだなあ」

「つまらなくはないよ、どうして!」さうは言つたものの赤木は氣のない顏付だつた。

その會話の合間を見てお八重は言つた

「もしあれでしたら、どなたからでもお湯へお這入り下さいませんか」

一應ちよつと讓り合つてから結局、北村が先きに這入ることになつた。

北村は起ち上つて、立つ時にお八重をふりかへつて見て言つた「それから直ぐに飯にして貰ふかな。なるべく早く。非常に腹が空いてゐるんだ。お湯から上つたら直ぐに食へるやうに」

「それぢやお湯はおあとになさいますか」

「はてな。……いや、それぢや都合が惡いだらう」言ひながら北村は下りて行つた。

その後姿を見送つて赤木は、この頃ではどんな事でも一言だつて口も利かないと言つたさつきのお八重の言葉を思ひ出したものだから、お八重を眺めて言つた「機嫌はさう惡くないぢやありませんか」

「嘘、嘘。」お八重は一口に打消した「あなたがゐるから特別なの——今日だけですわ」

偷むやうな早口で言ふとお八重はあたふたとまた下りて行つた。

赤木は煙草をくゆらしながら、風呂をうめてゐるらしい水音をぼんやり耳にしつつ昨日の今時分のことを思ひ出して

ゐた——お雪の外出の姿なども目に見えて。たつた一日の間がどうしてだかひどく長かつたやうな氣がした。またそのたつた一日の間に、彼とお八重との心が非常に近づいてゐるのを感じた。誰もさう心掛けて努めた者はない。但、お八重が彼女にとつては言ひ辛いに違ひないあんな話をしみじみと持出したりしたことが、自づと彼等を親密にさせたらしい。もう半時間も北村の歸りが遲かつたら、お八重に何もかも打明けてしまつたのぢやあるまいか——そんなこと赤木は考へてみて、お八重があれだけの話をもち出すのにいかにも落着た口調だつたのも思ひがけないが、それをたつた一口にしろ北村に傳へても、北村も「うん、さうなんだ」と輕く言つたきり、さほど驚くでもないのも意外であつた。もしかすると北村はもう成行をすつかり悟つてゐて腹の底ではちやんときめてかかつてゐるのかも知れない……

「あ、いい氣持になつた。ピンとして來た!」叫ぶやうに呼びながら北村は例によつてどんどんと踏みならしながら階段を上つて來た。上りも終らないうちから「君、這入つて來給へ。早く。それから飯にしようよ。腹がへつた。實に腹がへつた」

ちぢくれた癖の多い長い毛をかきむしり上げながら、赤くらだつて目まで血走つて見える彼は、まだ夕飯には多少間のある時刻なのに、またしても空腹と飯の事とを言ひ立てるのであつた。江戸子で美食家を誇にしてゐる彼は、又、怖ろしい大食漢でもあつた。さうして小男だが肥つてゐて、そのくせいつも何か病氣を怖れ訴へて、どこが惡いのか常に二三種の新藥を愛用してゐた。高等學校時代の同窓で醫者になつてゐる親友があるので、病氣に就ての知識を話すのが得意だつた。さうして腹が張つて苦しいと言はない時には、きつと腹がへつて不愉快だと訴へた。メランコリヤ、フングリヤなどと、その狀態を命名してゐた。もう聞きなれてゐる赤木にも、北村の「腹がへつた。實に腹がへつた」は時折にをかしく愛嬌だつた。今も赤木は、北村が大きなビフテキにむしぶりついて噛みしめた八重歯の間から、ぽたりぽ

たりと血汁を滴らしてゐる顔つきを思ひ出して、思ひがけなくもほんの少しばかりをかし味を感ずるのであつた。

「どうれ、それぢや僕も一つ、おつき合ひに腹をへらして來るかな」

湯につかりながら、赤木はとりとめもなく北村のことを考へてゐた。以前、彼がまだ北村を知らなかつた頃に、或る友人が北村の噂をしてその顔のことを「神と獸との混血兒のやうな面魂(つらだましひ)」だと言つた言葉を思ひ出しながら、その北村の安全剃刀を使つて赤木は顎に黒くなつてゐる髭を剃つてゐた。自分のものは大阪の荷物のなかへ置き忘れて來てゐたのである。その大阪の宿屋の事から、故郷へ先づ寄らずに出て來た事情やら、それを何も知らずに一月ほどと言つて出て來て四月の間もうろついた旅行やら、またここにゆつたり湯につかつてゐる自分を見出して、一瞬間ふと望郷の心持を持つたのがすぐに忘れてしまつた。その時、北村らしい足音が廊下にしてゐたので、「腹のへつた」北村が待ち兼ねてゐると思つて赤木は湯を出た。

北村はそこらには見えなかつた。二階へ上つて行つた赤木は、そこにはお八重がひとりで、しよんぼりとガラス越しに窓から庭を見下ろしてゐるのを見出した。何か見つめてゐるので、赤木も外を覗いてみたが、そこには茂つて黒い蜜柑の樹の外には別に何もなかつた。お八重は人の來た事を知るとふりかへりもせずに、廊下を隅の方へ歩いて行つて、戸ぶくろのなかから戸を搜りながら繰り出した。暮れやすいとは言へ日が落ちたばかりで、空には夕焼雲が美しくまだ戸を閉めるには早いのに、お八重は十枚ばかりの戸を一心に閉めてゐた。赤木は、そのお八重の樣子を傷ましいものに直感した。

戸を締めてしまふと今ともつたばかりの電燈が急にかゞやきを出して、それをお八重は歩きながらふと眩しさうにちらと見上げた。自然に赤木の視線にぶつつかつて彼女は直ぐに目を伏せたが、赤木は一目でお八重が泣いてゐたのを知つた。顔が赤くなつて淚が一杯光つてゐた。

「どうしたんです」

「わたしが悪いんですわ」鼻がつまつてゐるやうな聲で言ふとお八重は慌てて目を壓えた指の間から、涙がこぼれ落ちた。「あなたがゐなくなれば直ぐに吐鳴るんです。何でもないの。何でもないの——わたしが氣が利かないものだから……」

赤木はそれ以上には慰められなかつた。

食事が持運ばれた時には、平和な家庭と何の相違もなかつた。北村はろくに話もしなかつたが、これはその不機嫌の理由からではない。口を利く代りに口を盛んに動かして舌鼓をならした。北村は時々赤木に向つて言つてゐた「お八重は馬鹿なくせに、料理だけはうまい。——君のやうな田舍者には食つてもわかるまいが。」

赤木は食べながら今夜はここにゐ合せないお雪のことを考へた。もしお雪がここにゐれば、お雪もこの仲間に加はつて、お八重に給仕をさせながら食べてゐるであらう。いつもさうなのだから。時たまさうでない時には、お雪は「あら、姉さん。今日はわたしをお客並みにしないんだね。また八つ頭の煮付だらう。ほんとうに姉さんつたらいやなものを好きだ」と、彼女がきげんのいい時には朗らかに高調子で、もしきげんが悪かつたら例の深い八の字を寄せて言ふところなのだ。そんな時には赤木は言つたものだ「僕はお雪ちやん一緒に食ふのはいやだよ。まづいよ」「へ！わたしだつてまづいわよ！」——そのお雪が座にゐないので、落着いてはゐるが、少し眞面目すぎる。尤も今夜ここにお雪がゐて、彼等と一緒に食事をしてゐたとしたならば、赤木は多分座に堪えない氣持がしただらう。何故かといふのに今夜もうお八重は、自分の夫にとつてお雪が何であるかを殆んど悟つてしまつてゐるからである。赤木はさつきからお八重を注意して觀てゐた。しかしお雪がここにゐないとは言へ、お八重のすべてのそぶりは、今までと格別何の變つたところもなかつた。つとめて平靜を裝ふてゐるでもなし、赤木にはお八重の心持が解り兼ねた。北村はといふと、傍にお八重

といふ女あることなどは全く忘れてゐるらしい。

「君は」と赤木は笑ひながら言つた「バイブルにあるとほりのことをしてゐるね。——額に汗を流しながら食ふ」

北村は目つきでやつと笑つた。口には一杯頰張つてゐて言ふことが出來なかつたのだ。

赤木の言葉のをかしさはわからなかつたが、お八重も笑顏になつた。その笑顏だけは、赤木には氣の廿ゐかいつもの無心なものに似げなく慘然たるものに思へた。

傍若無人にさうして一心不亂に食つてゐる北村は、時々一言二言、——それも重に飯を盛り代へる間などに、活動寫眞の仕事に身が入る事や、外國人の多いYの市街の夏の情趣が異國的でいかに氣に入つたかを赤木に話しかけた。お喋りの赤木が今夜は無口なのが少し氣になつてゐるのである。それから腹のなかでは洋服の女の出て來る氣の利いたストリイを一つ工夫しなけやと思つて見た。お雪が洋裝してぴつたりと體の線の現はれてゐる姿が心のなかを往來した。フキルム製作の必要にかこつけて兼々お雪にねだられてゐる洋服を注文してやりたいのだが、……ぼんやりとした雜念のなかにも、何かにつけてお八重がお雪のことをもう知つてゐると言つたさつきの赤木の言葉が、北村の胸もとに消化物のやうに殘つてゐる。それに氣がつく度毎に北村は時々お八重の表情を見た。普通ならば偷み視るところだが北村は眞向から睨みつけた。傲岸な北村は腹のなかを人に見すかされたくなかつた。「赤木といふ奴は妙に敏感な奴だから」北村は赤木に對してまで用心をしてゐた。

食後には、赤木と北村との間に人の噂が出た。北村は大野の夫婦別れの件は多少詳しく述べたが、大野がどうして北村にそんなに憤つてゐるかは別に說明しようともしなかつた。ただ簡單に無雜作に言つた「あの男は、君、馬鹿だね。

……別れるより仕方のない女に未練があると言つて、間に立つた者があんまり一ときにきまりをつけ過ぎたのが不足で、叔つ

てゐるんだ。をかしな奴だよ、實に。あんな男たあ今まで知らなかつた」
「不聽亭が」と赤木が別の友人に就て言ひ出した「洋行留別宴の招待をよこしたらう。行つたかい。僕のところへも田舍へ案內狀をくれたが……」
「誰が行くもんか。僕はあの男にも愛想がつきたよ。四十面下げて、今更あんなすべたを女房にするにさ、摩訶止觀を讀む必要があるかよ。それも遠慮でもしてるれや別だが、(もう二度と死ぬまでお目にかかれないかも知れません。今生の思ひ出にもて是非ともお出)だとか何とか、馬鹿々々しい案內狀は醜態だ――尤もあれや女が書いたのだらうがね。いやな女だとさ――橘から聞くとね」
「橘が知つてゐるのかい」
「時々來たさうだよ、何でも橘のおやぢさんが知つてゐるんださうだ。橘の親父もひよつとすると關係があつたんぢやないかな」
「さう言つたかい」
「まさか、そんなことまでは橘も言はなかつたが、ともかくいやな奴らしい」
「橘の言ふ事などわかるものか」
「それやさうだが、皆言つてゐるぢやないか。決つてゐるさ。何にしろ、不聽亭ともあらうものが、哲人氣取のくせに……」
どうかした加減で北村は圖に乘つて人を罵倒することが往々ある。或は食ひ過ぎた後の胃の腑の工合で、それの消化を助けるための運動の一種として無意識にさういふ惡口を吐き出すのかも知れない、そんな時に理由を聞くと「いや、理由はないのだ。あの面が氣に入らん」などと北村は言ひ放つたりする。わざと口汚く誇張して、しかし別に私怨など

といふやうなものがあるわけではなく、一圖に好惡に因つてゐることを知つてゐるだけに、赤木には北村のさも我慢がならないもののやうな言ひ方が時には面白いものに思へた。そればかりではなくその好惡も、女に對してはともかくも男に向つては赤木も大たい同感なことが多かつたのだが、今夜の大野に對する赤不與亭に對する北村の言ひ方に就ては、赤木は少し同感しにくかつた。何だか自分に覺えのあることのやうに感ぜられたからだ。

「不與亭もちよつと氣がさしたから、わざと思ひきつて、てれ隱しにやつてゐるかも知れないぢやないか。それとも思ひきつて本音を出したのか、何にしても……」

「それやさうかも知れんよ。が、何しろいやだ。今まであれだけに押通して來た不與亭ぢやないか。もう四十面を下げて今更……」

「四十面を下げたからだらうよ、青年時代ならやけにでも暮すが、今までのやうな生活をしてゐたのでもやつぱり淋しいのだらうぜ」

「それや淋しいだらうさ。だが、もうあと少しの我慢ぢやないか」

「に、は、は。あと少しだつてさうは行くまいよ。そこが人間の弱さといふものだらう。それに何も我慢することはないからう」

「何でもいいです」理窟つぽい赤木を知つてゐる北村は、もう少しうるさくなつたと見えて、また誰かの口調を眞似た。

「うう。人のことなどはどうでもいいさ」赤木の言つたのは物憂げで虚無的な不與亭の聲色だつた。

「は、は、は。不與亭は問題になつてゐると思つて自分で出張したね」

例によつてさまざまな友人の聲色が一しきり出て彼等は笑ひはしやいだ。彼等のさういふ對話がいつもあまり長くつ

づくので或る人はそれを「惡童い」と評した。また「見給へ、才能の剩餘ですね。もつたいない浪費だ。立派なカリカチユアを樂書してゐるんだからね」と半ばはたしなめ、半ばは面白がつて聞いてゐた人もあつた。同じことを「全くあなた方は惡因緣ですよ」と言つた人もあれば、「ここにゐなけや、さぞ僕の聲色も出ることでせう」と笑つた人もあつた。彼等のそのやうな無意味な會話が日によつては半日ぐらゐつづくのを聞いてゐて「何がをかしいのだかちつとも解りませんわ。赤木さん、よくもさう面白いことがあとへあとへあつたものですね」と、お八重は或る時不思議がつてしみじみ、彼女の夫とそんなに氣の合ふ赤木を羨しげに言つたこともあつた。しかし今夜は、そんな惡童問答がさういつまでも續かなかつた。赤木がまづ急に默り込んでしまふと、やがて北村も言はなくなつてゐた。それに氣がついた時、北村はやや眞顏で言つた。

「面白かつたといふが、一つ旅行談でも聞かせないか」

「あ。……旅行の話もしたいが」赤木は一向氣のない聲だつた。赤木はたゞぢつともう一度耳を澄してみた。彼は、先刻お膳を下げておりて行つたまゝ上つて來ないお八重のその泣き聲を、今しがたふと耳にしたやうな氣がしたので、聽き耳を立てゝみたけれども、どうやらたゞ氣のせいらしかつた。

「旅行談もいゝが」赤木は改めて言ひ直した「それよりも、僕はね、お八重に賴まれたことをさきに果したいな。あんまりここでばかり笑つてゐちやお八重に氣が置けるよ。――賴み甲斐のない、何を考へてゐ笑つてゐるんだらうと思はれてもいやだ」

「ふむ」北村は不機嫌に似た調子だつた。」

赤木は言つた「大野は、君、よほど君に惱つてゐるね」―

「どうして？」北村には、赤木が急に大野の事を持ち出したのが不審だつた。

「どうしてだかは知らないが、今日もお八重が誘ふから、あの山の上の家へ行つて見たのだ。君の事を言ひ出してね、ほんの一口だが、お八重に君が留守かと言つて、直ぐそのあとからお雪ちやんは？　と言ふのだ。困るなあと言つて、僕に、君が何とか言つたらどうだと言つたよ。大野は一たいが、あゝいふこせつかない性質だから自分ぢや氣がつかないだらうが、それが暗示的でね、僕ははら〳〵した。ひよつとするとお八重が何か氣がついてゐるかどうかを大野がさぐりを入れてゐるのぢやないかと思つた位だよ。尤も別にさうでもないらしいが。二時間ばかりも大野のところにゐて君がもう歸つたかと思つてここへ來ると、お八重が突然に言ひ出したのだ。——座つて十分ばかりも考へ込んでゐた樣子だつたが……」

「うむ」

北村はさつきから同じやうな返事ばかりして、赤木には背をむけたまゝ、寢ころんで、あらぬ方を見ながら煙草をくゆらしつゞけてゐた。

赤木は話しつゞけながら、昨日から初めて入れた火鉢の火をつゝ突きつゝ、客間の同じこの部屋のことを、自然思ひ浮ぶが上にも努めて細かく思ひ出して見た。——あまり默つてゐるお八重が氣の毒だつたので、彼は會話をする義務を感じたのだ「いつもYへ行くと、直ぐには歸らないのですか」この知れ切つた事を聞くことで、彼はやつとお八重を慰めようといふのであつた。「えゝ」と一言お八重は殆んど上の空で答へたつけが、それつきり口を開かうともしなかつたが、もう何も言はないのかと思ふ頃になつて「お雪が北村とをかしいではないでせうか」と切り出した。お八重の問は赤木には不意だつた。しかもそれがすら〳〵と普通の調子で言はれたので、彼には彼女の心持も、その疑惑の程度さへも推

察出來なかつた。たゞ心のなかで「たうとう」と思つた——さうして彼女の樣子を見ると、彼女はうな垂れてはゐたけれども平常と大した相異もなかつた。彼は何と答へていいか戸迷ひして、一時逃れに逆にお八重に反問してみた。

——なぜ、そんな事を聞くんです。何かそんな事でもありさうなのですか。

てつきりこれは大野の暗示が有効だつただと思つて彼はかう尋ねると、お八重は答へた。

——いいえ、別に。……でも辰子さんが私にそんなことを言つたのです。

——へえ？　何と言つて？

——たゞそれだけの事ですけれど。

——それであなたは何と答へたのです。

——そんな馬鹿な事があるものですか。お寧は私の妹ぢやありませんかつて……

——ふむ。

——すると、辰子さんは、ごめんなさいね、あなたさへさうお思ひにならなければそれでいいんだわ。ごめんなさい。

と言つてあやまつたわ。

——ふむ。

——私ね、いやなことを言はれて氣持が惡かつたものだから默つてゐると、辰子さんは何べんかあやまつて下すつてかう言ふんですよ、「でも世間にはそんな間違ひもちよい／＼無い事は無いのだから、つひわたし飛んでもない事を言つて仕舞つたんです」つて。それで何だか辰子さん御自分の知つてゐる方の例を幾つか上げて話したわ。

その時、赤木は「ある。世間にはよくある」と呟くやうに言つてから、

――それで、あなたは、辰子さんにさう言はれてから、あとで何か思ひ當る事でもあつたのですか。

――別だん、これと言つてそんな事もありませんわ。……でも、北村に何かあることだけは、私にもせんからわかつてはゐるんです。それがお雪だなんて……。お婆さんが、うちのお婆さんまでが、またやつぱりそんな事を言ふんです。その時も私が怒ると、お婆さんもやつぱり辰子さんと同じ事を言つてあやまつて……

「ねえ、北村」赤木は思ひ出すとほりを出來るだけ丁寧に傳へながら、ここで、北村に呼びかけた「僕はね、お八重が君を信じてゐることの深すぎるのを、聞いてゐながら氣の毒にも哀れにも思つたよ。誰かひとり暗示しても氣がつくに澤山な事をはつきりと二人まで言つて聞かせても、お八重はそんな事を信じないのだね。そのお八重を見たんぢや、言ひ出した人もさすがにそれ以上には言へないだらうよ」

「ふ、ふ、ふ。」北村は一種特別な笑聲を出してから「あいつは馬鹿だからね。そんな事でさうと思ふ程なら、今までにとつくに氣がついてゐる筈だよ。――それでどうした」

「それでお八重は」と赤木は言ひつづけた「あんまりいろ／＼人が同じ事を言ふものだから、と言つてお八重は僕の顔を見上げたよ。いつもより少し蒼白い顔色をしてゐたつけ。でお八重がいふには――それからといふものはわたし何だか氣になつてしまつたんです。でも、まさかね。さう言つてお八重は笑つて見せたよ。それから不意に非常に恥かしさうに今まで白かつた顔が紅くなつたよ。まさかねと言つて、お八重は僕に今度こそ何とか返事をさせようといふらしいのだ。出來ることなら、そのまさかねに僕にも同感してほしいらしいのだ。君は何と思ふか知らないが、その時僕は默つて答へなかつたよ。ただね、お八重が無理にも笑顔になつたのを幸に、僕も笑つて、それから氣輕るに言つたんだ――

—そんな事を、あなたひとりでくよく〳〵思つてゐるのはつまらない。一そ、そりや一つ北村にぢかに聞けばいいのに。本當だ、それが一番ぢやないかつて。お八重は——そんな事が！と言つて笑つてゐたが、半分泣き顔なのだよ。——そんな事が出來るものですか。何か一言でも言はうものなら、それこそ吐鳴りつけられてしまふ。といふから僕は言つたのだ——いいや。外の事とは違ふ。眞面目にさう改つて聞けば吐鳴りつけたりするやうな話とは違ふってね……」

「うむ。で、結局、自分ではそれが出來ないから君に、それを頼むといふのかい」北村は話の結末を急いでゐた。

「結局はさうなのだ。僕もお八重が自分で直接云ふやうに勸めてみたが、何しろ、あんなに君を怖れてゐてはよくないね。それに、もしまたそんな事實が無かつたとしたら、お八重が自分の口からそんな事を君に切り出した時には、それこそお八重が自分の面目がないといふのだ。これは尤もなことだし、まさか大丈夫言ひ出しても間違ひこはありませんとも言へないぢやないか……」

「は、は、は。」北村は愉快さう笑つた。

「僕もしかし」赤木は眞面目に言ひつづけた「何もかも言つてしまはうかとも思つたぜ。それでも、君から直接聞いてゐるだけに、僕の口からお八重に打明けてしまふのは君に悪いような氣がした。さうかと言つて僕はお八重にそんな馬鹿な話はないと一口には言つてしまへないのだ。お八重は僕に、——あなたさへさう言つて下さるなら、そんな事があるものかとはつきり言つて下されば、わたし、安心出來るんです。といふのだから、さう言はれてゐる僕としてはおいそれと言つて事實を否定してそれほど僕を信用してゐるお八重を欺すわけには行かないぢやないか。ね。僕はちよつと板挾になつた形で、君が早く歸りさへすればこんな目には逢はなかつたのにと、君を怨みながら、今にも來てくれれば自然この話はやまるのだがと氣を揉むでゐたのだ。近ごろの君のことはお八重こそ僕にゐて知つてゐる筈で、一年も道

はない僕が知つてゐやうわけがないと言つてごまかしてゐたが、さういつただけではお八重が氣の毒だから、僕がお八重の代りに君から聞かうといふ事になつたのだ。」

「で、ちやうどそこへ僕が歸つたといふわけなのだな」

「いいや。まだ……」赤木が言ひかけたところへ、靜かに階段を上つて來たのは、お八重らしい。彼女はひよつとすると、自分もこの話のなかに加はるつもりで來たのではないかと疑ひながら、赤木は話を中絶した。

障子を開けたのは案の定、お八重だつた。

彼女は部屋に這入るとすぐに障子のわきに坐つて手をついた。妙に改まつた樣子に見えたので赤木は、話に來たのだといふ豫感が當つたと思つた。

「あの」お八重は言つた、赤木と北村との顏色を見ながら「まだ早いのですけれど、お床をのべさせていただきませうか」

赤木はふと氣が拔けたやうな調子で「は、お願ひしませう」

さう言つてしまつて、彼は氣がついたがお八重の言葉には當然北村が返事すべきであつた。それをついうつかり赤木が主人らしく答へてしまつた。赤木は全く無意識だつたが、お八重の北村に對する態度が全く客にものいふやうな――それも宿屋の女中が客に對するやうな恐縮の態度であつたことが、永い旅行で宿屋にゐることの多かつた赤木に、ふとそんな返事をさせてしまつたらしい。赤木はへんにきまりの惡い思だつた。しかし、そんなことを注意したものは誰もない。

お八重は階段のところへ出て、女中のひとりを呼ぶと、再び這入つて來た。彼女は湯上りらしく、健康さうに火照つ

た頰へ兩の掌をあててみたりしてゐるのが、いつものとほりと何の變りもないお八重であつた。それがどうしてだか赤木には少し物足りないに似た氣持がした。きつと赤木は、今夜もつと思亂れてゐるお八重を空想してゐたのであらう。

　北村は便所へでも行くのか、すた〳〵とひとり下りて行つた。

赤木は彼女たちの邪魔にならないやうにと廊下へ出ながら、そこからお八重に言ひかけた。

「もう何時ですか」

「十時打つたばかりなのです。まだ早いのですけれど。手つだつて貰つた女中達はもう休ませてやらうと思ひましてね。この人たちは朝早いんですよ」

「いいえ」おとなしい女中はさう言つた。

　どかかで、しきりにさま〲な蟲の聲がしてゐる。それを聞きながら赤木が言つた、

「ほんとうに夜が長いのですね」



幼兒

德田秋聲

その日も祐吉が机にすわつてゐると、外から歸つて來た末の子の丸子が、つかつかと駈けよつて來て、いきなり負さるやうに肩につかまつたと思ふと、耳に口を寄せて囁いた。

「ねえ、どこかへ連れてつて頂戴。」

さういふ丸子の調子が、ほんとに何處かへ行きたさうであつた。

「あゝ。」祐吉が生返事をした。

「ねえ、連れてつて頂戴。」まる子は又たせがんだ。

この子は時々行きたくなると、矢も楯もたまらないやうに行きたくなるのであつた。さう云ふ刹那的な慾求に襲はれる氣持なども、我慢情のない自分によく似てゐると祐吉は思つたが、まる子にさう言はれると、何かなしそれを抑へつけることが出來ないやうな氣がするのであつた。

祐吉は子供をつれて外へ出るなぞといふことは、近來全くしなくなつてゐた。一

つは忙しいせいもあつたし、又た交通の便が子供の同伴などを氣樂にさせないといふこともあつたが、實は興味がなくなつてゐた。子供をつれて出ることが詰らないのではなかつたが、遊びに行くような場所が、どこにもないのであつた。丸子のやうな七八つの子供をつれて、二三時間愉快に遊べるやうなところは、實際どこにもなかつた。近くではせいぜい動物園か植物園であつた。震災後の淺草へは行つてみる氣にもなれなかつた。

「いけない?」

祐吉はその日の仕事に取りついてゐた。

「あめ、可し〱、連れてつてあげますよ。勉強がすんだらね。」

まる子はやつと手を放した。

「うれしい〱。」

「どこが好いかね。」

「私ね……。」

「動物園かい、淺草かい。」

まる子にはこれと云ふ選擇がないらしかつたが、この間叔母が家へつれて行つて、新宿園へつれて行つて遊ばせたことが二度ばかりあつた。丸子はそれから何處かへ行くことが好きになつたのであつたが、新宿園がひどく氣に入つたらしかつたので、そこへ行きたいのに違いないと、祐吉は察した。まる子は叔母のところで、一と晩泊まつて來た。そして歸つてくると、その日の事をすつかり御母さんに話して聞かせた。つひ近頃まで乳房につかまつてゐたやうな丸子のことなので、彼女の母は、一と晩ゐないと寂しくて仕方がなかつた。祐吉も寂しかつた。

「今頃は何うしてゐるでせうか。ちよつと私が出てゐる間に、あんな洋服なんか着て、寢衣がなくて困つてゐるでせう。女中たちがぼんやりだもんですから。」

「何うにかするだらう。そんな事もいゝんだよ。」祐吉はさう言ひながら、獨りで微笑んでゐた。

「あの子はほんとうに面白い子ですね、誰にでも附くんですもの。」

しかし何のこともなかつた。そして翌日の午後、お土産なぞもつて、元氣よく歸つて來た

「まる子さん隨分機嫌がよかつたんですよ。」叔母は言つてゐた。

後で聞くと、まる子は新宿園や叔母夫婦の家の話をしながら、「私眞實は歸りたかつたんだけれど……」と笑つてゐた。

「厭な丸ちやんね。」姉のよし子が笑つた。

事によると丸子は叔母たちではなしに、父か母と一緒に新宿園へ行つたら、もつと面白いと思つてゐるのかも知れなかつた。

「新宿園が好い？」祐吉はきいて見た。

「うん。」まる子は頷いた。

「あすこは遠いから、今日はもう遲い。」祐吉はさう言ひながら、ペンを走らせた。

妻の久子はゐなかつた。多分髮をゆひに行つたのであらう。祐吉は忘れてゐたが、今日はたしか彼女が大きい子供と二人で歌舞伎を見に行く日であつた。久子は歌舞伎へは祐吉につれて行つてもらいたかつた。子供と行つても何となし張合がなかつた。祐吉は或る便宜があつたので、その日に限つて外の劇場へ彼女をつれて行つた。その劇場の方が出し

ものが好いと思つた。

「四谷怪談見たいね。」久子はその時から言つてゐた。以前二人で團藏の直助權兵衛で、隱亡堀を一と幕見たことが、朧ろげに記憶にあるので、興味があつた。それは何處かの歸りに、ちよつと寄つて立見をしたのであつた。

しかし祐吉には餘り興味がなかつた。六七年も前に見た同じ狂言は、今でも印象に殘つてゐたけれど、今度のは缺けてゐる役者もあるし、それが一番目に据ゑられてあるのも、感じが惡かつた。最近脚本を讀んだときも煩さくて退屈を感じた祐吉は強いて見に行つて古い彩象を失ふにも當らないと思つた。同伴してやりたくないことはなかつたが、子供も歌舞伎を少しは見ておきたい希望をもつてゐたのでさうすると親子三人になる譯であつた。

「正雄は音樂なんか始終聞いてゐるんですもの餘り見せない方がいゝですよ」

「いや、しかし……。」

祐吉は十一二のをり、父に隱して芝居好きな自分に、善く私有財（ほまち）をそつと出してくれた慈母を、いつでも懷ひだした。それが好かつたか惡かつたかは知れないけれど、正雄は正雄の自由に委しておいてもいゝと思へた。それに彼は脚本も見てゐた。

「日本にゐて日本の音樂や芝居を知らないといふ事も何だか……。」正雄は言ふのであつた。

實を言ふと祐吉は彼の校風を餘り好いてはゐなかつた。氣取つた帽子からして氣に入らなかつた。學生はやつぱり豚のやうに汚ない方が、同じ標榜するにしてもいくらか優（まし）だと思つた。紳士風の洋服を着込んで、銀座なぞぶらついてゐるブルヂョウの子弟くらゐ氣障なものはなかつた。勿論正雄がそんな眞似をしてゐる譯ではなかつたし、信用して渋悶はないと思つたけれど、都會趣味には餘り耽ませたいとは思はなかつた。

「あの學校だつて、强ちさうでもないですよ。」正雄は時々辯護した。

しかしうつかり放任しておくと、何うなるか知れないと云ふ不安が、時々祐吉を脅かした。正雄たちの生活が彼には段々判らなくなつて來た。

祐吉は直きにペンをおいて、茶の室へ出て來た。

「さあ、お父さんと一緒に行くのは誰々だい。」彼は今日半日に丸子の犧牲になる積りで、その序に十六になる芳子や、丸子の直ぐ上の四郎も一緒につれて出ようと思つた。

「僕行きます。」四郎は立どころに應じた。

「三郎は。」

「遊びに行つてゐます。」

そこへ妻が髮を結つて、いそ〳〵と歸つて來た。彼女はふとしたら、祐吉が芝居に行くかも知れないと思つてゐたが、彼は振向きもしなかつた。

「ぢやあ私行つても可うごさんすか。」久子はその氣持でわざと駄目を押した。

「あゝ可いとも。」

やがて子供の仕度が出來た。

「何處へ行く、お父さん。」丸子が帽子を冠りながら問いた。

「さあ何處がいゝかね。矢張動物園かね。」

「え、近いところで結構ですよ。」久子はさう言つて、祐吉の紙入に札を幾枚か入れたから、その員數を祐吉に注意した。

「細かいのもありますよ。間違はないやうに。」

祐吉か外へ出ると、年の割りに小さい丸子はいつか隣の塀ぎわに隠れてゐた。丸子はどこか死んだ長女に似通つたところがあつたけれど、それよりか總てが少し貧弱であつた。でも誰が一番亡兒の面影をもつてゐるかといへば、丸子より外にはなかつた。そんな感情も手傳つてゐるせいもあつたが、一番末の子だけに、父に取つても母に取つても、丸子が誰よりも可愛がられた。彼等は殆んど無條件で丸子を愛した。丸子を考へるときに、祐吉は幼少のをり尤も神經を惱ました長男に對すると、まるで違つた愛が、そこに流れた。彼はもう丸子の前途を考へるやうなことは餘りなかつた。一緒にゐることが一番短かいのが丸子だと思ふと、いぢらしく思へたし、心が脆くもなるのであつたが、しかし祐吉の心のほんとうに慰まるのは、何といつても丸子であつた。祐吉は子供の多いことも、いつも苦に病んでゐたけれど、それは自分の勞苦が子供の生長と共に、年齢と反比例に年ごとに增して行くからであつた。しかし祐吉は丸子までは思ひが屆かなかつた。

今から丸子の生活を考へるなぞといふことは、思ひもよらない事であつた。考へても追着かないことであつた。それに丸子の出生と位置が何の子供からも少し離れて特別の事情に置かれてゐた。と言ふのは、祐吉自身の不注意——勿論それは醫師の手落ではあつたが——から、一晝夜のうちに死んで行つた長女の光子に對する悲嘆と悔恨とが、まだ大きな澱りとなつて、彼の胸先につかへてゐたとき、丸子が久子の腹へ來たことを彼は知つたのであつたが、その丸子の產れたときの顏容(かほだち)が、兄弟の誰よりも不幸(ふかう)な姉に似てゐたといふことと、女の子が一人きりになつた家庭の如何に寂しいものであるかを、光子の死によつてつくづく感じさせられてゐたところなので、丸子が少しづゝ愛嬌づく頃から、彼女は

祐吉に取つて、色々の意味で無くてならないものとなつたのであつた。祐吉の年齢から言へば、丸子の存在はちやうど孫のやうな感じしか與へない程度の、父子の愛といつても、さう切迫したものではなかつた。

丸子が久子の腹へ來たとき、彼女の健康は餘り好くなかつた。死んだ光子を産んだ時以來宿病となつた腎臓炎が、妊娠によつて重つてゐた。が、それよりも、光子の死から受けた精神的の打撃が、彼女の生活氣分を、著しく壞してゐたことが、病氣以上に彼女の體に障つてゐた。殆んど全生命を打込んでゐた光子を、わずか二十時間のあいだに失つてしまつたことは、何んと言つても堪へがたい苦痛であつた。久子は俄に自信と矜りを失つた。信じきつてゐた良人にさへ信頼ができなくなつたやうに感じた。融自身から言つても、彼女の愛の領分の殆んど總てを占有してゐた光子を失つたことによつて、幾分久子に對する信頼を裏切られた形であつたので、久子に對する見方や態度を變へなければならなかつたほどで、男の自分があつての久子だといふことが、初めて、明瞭に解つて來たのであつた。

勿論祐吉は光子の代りを、現世に求めようなどとは、少しも思つてゐなかつた。光子の死によつて、子供のために勞苦してゐることが、一番好いことだと氣づくやうにはなつたけれど、それは單に今在る子供たちに向けられる感情であつた。彼は妊娠ときいて、又しても心が暗くなつたが、大した刺戟もなかつた。

「光子がお腹へ來たんぢやないかしら。」久子が懲りずまにそんな事を言つてゐる氣持が不思議でならなかつた。

「しかし腎臓があるとすれば、お産は危險ぢやないか。」

祐吉はそれを恐れたが、同時にお産に危險の伴ふ腎臓のあるのが、寧ろ幸ひだと思つた。

或日彼はその頃自分の通つてゐた病院へ同行して、婦人科で診てもらはせることにした。そして自分の診察がすんでから、婦人科の方へ行つて見た。彼女は强さうに見えてその癖獨りではどこへ行くのも臆劫がつた。光子を失つてから

は、殊に意氣地がなくなつてゐた。彼女は寂しげな顏をして、控室にゐたが、裕吉の姿を見ると、俄かに椅子を離れて廊下へ出て來た。

「もう直きですわ。」久子はさう言つて裕吉についてバルコニーへ出て來た。

初夏の頃で、堀を隔てた向ふの高台に、若葉が煙つたやうに見えて、電車がその下を走つてゐた。二三度上の子供が厄介になつた小兒科の病院が、高台の左手寄りに其の屋根を見せてゐた。殆んど絶望の淵を覗きかけた上の子供が、そこで助かつた事があつた。光子が死ぬと同時に、そこに擔きこまれた彼女の妹も弟も、交互に生死のあひだを彷徨ひつゝも、到頭助かつた。久子は二人の看病と、光子を失つた悲しみとで、まるで氣が狂ひさうになつてゐた。

「あの時光子を三四時間早くあすこへ擔ぎ込んだら……。」裕吉は今もそれを憶ふのであつた。四年も經つてから、また新しく第一歩を踏出すやうな赤子を取りあげなければならないとは、何と莫迦げたことだらう。

待ちあぐねた時分に、久子は漸と診察を了へて出て來た。

「何うしたんだ。」

「姙娠はたしかに姙娠ですけれど、今のうち内科でよく軀を診てもらつておけと言ふんです。」

「餘程悪いのかね。」

「そんなでもないでせう。腎臓がひどくなれば、子供を出さなければならないけれどその時になつて見なければ判らないさうですの。」

二人はやがて病院を出た。

「それから内科の診察も受けたし、産科へも二三度通つた。そのうちに久子は何處かで聞いて來て、駿河臺の病院で診

てもらふことにして、一人で行つた。そこの方が彼女の氣に入つたので、孰にしてもお産はそつちですることに決めてしまつた。

入院したのは九月であつた。病院の庭の碧桐の葉が黄色く蝕んで、朝晩は大分凌ぎよくなつてゐた。新吉も一緒に行つて見たが、何だか不安であつた。色々の場合を彼は頭腦に描いて見たが、赤ん坊が殘つて、彼女が死んで行くのではないかとも思つた。しかし胎兒は九つ月になつたばかりでこのうへ持たせるのは、多少危險だと言はれたほどだから、やはり胎兒が犧牲になる譯であつた。

久子はしかし割合安心してゐた。そして室になれて來ると、隣室の患者の話や、院長と副院長の噂や、夜なかに擔ぎこまれた哀れな施療患者の勞働者の妻の話などをしてゐた。久子の氣分は、新吉に比べると、づつと現世的で、そして都會的で、生や死を凝視めるよりも、生きることの興味や悲哀にのみ頭腦が動いてゐた。死其物よりも死ぬ人の身のうへや生活に興味をもちがちであつた

二三日すると、機械がかけられたが、月が重なつてゐるので、容易に陣痛が來なかつた。久子は不愉快な顏をして薄暗い産室でその一と晩を過した。

翌日のお晝頃に、新吉はまた行つて見た。そして産室を覗いて見た。久子は苦しみの眞最中であつた。額からはじりじり油汗がにじみ出て、目も殆んど閉ぢたまゝであつた。看護婦がその傍で、絶えず脈を取つてゐた。新吉は半分死んだやうな久子を見るに忍びなかつた。

「苦しいかい。」

久子は時々薄目をあいたが、殆んど意識を失つたやうに見えた。新吉は直きにそこを出た。

お產のあつたのは、それから間もなくであつた。祐吉は義弟の細君を殘して、家へ歸つて來たが、間もなく其の細君が知らせに來てくれた。

久子は產後ぢび〳〵出血があつたので、看護婦はその手當に忙しがつた。久子は二十四時間以上もそこで苦しんで居たので、すつかり疲れ切つてゐた。顏が死人のやうに蒼白めて、相がすつかり變つてゐた。祐吉は俄かに不安になつた。

「大丈夫なんでせうか。」祐吉は看護婦長に聞いた。

「え、今に止まるでせうけれど、何しろ御病氣があるものですからね。」

そこへ院長もやつて來て叮嚀なお上品な口調で祐吉が安心するやうに、容態を說明してくれた。

「お子さんも、少しお手はかゝりますが、發育は好い方ですから、きつとお育ちになるでございませう。」院長は言ふのであつた。

看ると赤子は直ぐそこの小さいベットに寢かされてあつた。祐吉は見る氣もしなかつた。九月で產れた子が、完全に發育しやうとは思へなかつた。久子さへ助かれば、その子はむしろ生きない方が幸福だと思つた。

可なり長いあひだの出血で、久子はひどく衰弱してしまつたけれど、しかしもう危險はなかつた。一兩日たつて祐吉が見舞つたときには、もう落着いてゐた。束ねた髮に光澤がなくなつて、脣が乾きつてゐた。頰骨の高く出てゐるのと、目の落窪んだのと、顎の尖つたのとで、一時に十も年を取つたやうに見えた。赤子が傍に寢かされてあつたが、祐吉はやつぱり見る氣がしなかつた。

「湯婆を二つ入れてゐるんですよ」久子は寂しい顏で微笑んでゐた。もう愛着が出てゐるらしかつた。

「そいつは大變だね。」

「九月兒は育つと言ひますけれど、何うですかね。こゝにゐるうちは可いけれど、家へ歸つたら死んでしまふかも知れませんわ。」

「さうかも知れないね。」

「それでも此の一と冬持越せばね。院長さんはこの兒は好くなりさうだから、大切になさいつて言つて下さるんですの。何だか光子酷肖の顏をしてゐるやうですよ。」

久子はさう言つて、赤子の方へ目をやつてゐたが、祐吉は何だか鼠の子でも寢てゐるやうな感じしか起らなかつた。すつかり死んで出るつもりにしてゐたので、蒲團や着物や襁褓などの用意が十分でなかつたところで、久子の希望で、祐吉はそれらのものを一通り買ひ調へに行かなければならなかつた。彼は學校の歸りに、ちやうど母を見舞いに來た正雄をつれて、下町の雜貨店へ行かなければならなかつた。

外はひどい風になつてゐた。それにその二三日めつきり冷氣になつて、日影が薄ら寂しかつた。祐吉は正雄をつれて、廣い雜貨店の建物を、あつちこつち獵り歩いた果てに小さい肌襦袢だとか、ちやん〳〵子だとか、蒲團、枕と云つたやうなものを、一と通り取纒めて、病院へ屆けるやうに頼んで、そこを出た。雨がぽつ〳〵降り出してゐた。

祐吉はそれから久しく病院へ足が向かなかつたが、ふと思ひだしたやうに、或日また病室を訪ねて見た。久子は餘り快くなつてはゐなかつた。髮がぼさ〳〵して、目に潤ひか少しもなかつた。そしてひどく寂さうな風であつた。看護婦が何彼に氣のつかないことや、食べものゝ不味いこと、夜眠れないときの寂しき心細さを、それとなく訴へた。祐吉はもつと早く來てやらなかつたことを悔ひた。

「それから寢衣を一枚、何でもいゝんですから見繕つて、お島さんに縫つてもらつて戴きたいんですが……もう、そんな長くもないだらうと思ひますけれど。」

祐吉は隅の方で、洋食を食べたりしてゐるあひだに、久子もいくらか神經がほぐされて來たが、兎角病院生活などするには、物質的に何かと不自由と不滿を感じてゐることが、あり〳〵見えた。

歸つてからも、祐吉は餘り丸子を見ることを好まなかつたが、しかし生きて行く力が、段々確められて來ると共に、彼は遙かに彼女の存在を認めるのであつた。何かと世話のやける二三月がすぎて、顏の輪廓がはつきりして、いくらか表情が出てくるにつれて、月不足を不便に感じながらも、また月不足であるにも拘はらず、健やかに生ひ立つて行くことに決まつた幼兒に、特殊の感情の湧くのを覺えた。久子の言ふとほり、まるで違つてはゐながらに、面影が外の誰よりも光子に似てゐた。

「光子に似てゐますよ。」久子はさう言つて、丸子の寢顏を見せたりした。

祐吉もそれを拒むことは出來なかつた。それに人の話をきいて見ると、月不足で育つた子は、決して珍らしくなかつた。考へてみれば十分發育するまで胎内にゐなかつたと云ふだけで、生命力があるものなら、一と月くらゐの差は直ちに取返しがつきさうであつた。實際丸子は健康であつた。

大きくなるにつれて、光子に似てゐると云ふ期待は、段々裏切られて來たけれど、でも其に近いものであつた。光子ほど髮も好くなかつたし、體の小ひさいところも父親に似てゐた。殊に骨格と氣質の或部分を父から承繼いで來たことが、大きくなるにつれて、益々明瞭になつた。

しかし丸子は兄弟の誰よりも愛嬌ものに育つて行つた。父や母や兄や姉の皆んなからも無條件で可愛がられた。そして父母や大きい兄の彼女に對する緩やかな愛情には、死んだ光子に對して頭の上らないやうな或る感情と同じやうな氣持が、先天的に混り合つてゐたことも爭はれなかつた。

丸子は段々智慧づいて來た。光子がやつたと同じ風で人形を悦び、世帶事を遊ぶやうになつた。乳を離れる時分から、夜は誰かに枕元で童謠を讀んでもらひ、朝の御目覺を枕の傍に用意しながら眠つた。朝は誰よりも早く目をさまして、次ぎの室に寢てゐる姉を呼んだ。そして祐吉が目をさますと、きつと小さい手を延べて、彼の手を握つて嫣然してゐた。

何うかすると彼女は氣むづかしくなつた。影の形に添つてゐるやうな姉や女中の松やを手こずらせた。

「厭、厭、厭……」と言つて駄々を捏ねてゐる聲が、うと〳〵眠つてゐる久子の耳にも入つた。

「まる子ちやん、いけませんよ。」久子は聲をかけた。

「どうも可けない子だ。少し叱つてやらなけあ可けませんよ。」

「おれに似てゐるな。」祐吉は笑つてゐた。

「え、ちよつとね。」

しかし丸子は小さいながらに、不幸な女中の松やに人情をもつてゐた。小さい時分から居眠んだ松やは、田舍の親達の方で、大抵彼女の給銀を幾月分か纏めて借りて行つたが、近頃來た今一人の女中は、年も上だつたし、家もよかつたので、自分の給銀で、結婚の仕度なぞしてゐた。久子が買ひものゝ序でに、柄を見たてゝ、着物を買つて來たりした。丸子にはそれが不思議であつた。

おかあちやまは厭な人ね。いつでも峰やにばかりおべゝを買つてやつて、ちつとも松やに買つてやらないんですもの。今度松やにも買つておやんなさいよ。」

　久子は峰やと目を見合した。

「あゝそう〳〵。今度松やのも買つてありますよ。」

　久子は間もなく松やに春のお仕着せを買つてやつた。丸子はそれを抱えて祐吉に見せに來た。でも久子は、松やには何を着せても恰好がつかないので、張合ひがなかつた。松やは年の割りに軀が小ひさくて、横へばかり堅く太つた子であつた。彼女は少しでも丸子が折檻されるのを見ると、胸が迫つて泣いてゐた。彼女は一生丸子の家を離れまいと思つてゐた。

「丸子はどうも小さくて、私今から心配ですよ。松やのようにならなけあ可いと思つて。」久子は時々傍で遊んでゐる丸子を見ながら言つた。

　祐吉も軀が小さいために、づゐぶん損をしてゐる自分の妹に引比べることがあつた。そして庭先きへ丸子がつれてくる友達の一人々々について、時々年をきいたりしたが、丸子はやつぱり誰よりも小さかつた。

「いや、そんなでもないさ。パリぢや小さい女が持てるといふから。」呑氣ものゝ兄は言つた。

「何分兄さんたちの御厄介ですから。」久子は笑談を言つたが、そんな時が今に來さうな氣がしてならなかつた。

　それよりも久子は女學校にゐる姉の方が差迫つた心配であつた。きび〳〵してゐた死んだ光子や、いくらか共に似通つた丸子に比べて、頭腦が佛蘭西語や裁縫のやうな勉强以外には働かなさすぎると思つた。久子は彼女の結婚期前後のこと、生涯のことを考へ出すと、夜も眠られないことがあつた。

「あゝいふのも好いぢやないか。却つて運がいゝかも知れないよ。三度も大病をして助かつたくらゐだから。丸子の方が却つて苦勞するかも知れない。先きのことは解らないよ。」

丸子は毎朝名々に辨當をもつて、學校へ出て行く兄達や姉が段々羨ましくなつて來た。

「わた何時學校へ行くの。」丸子は時々促した。

「もう一つお正月をすると行くんですよ。でも丸ちやんは學校へ行けるかしら。さう何時までも母さんのおつぱいなんか弄つてちや駄目よ。」

「でも花ちやんも春ちやんも行くわよ。花ちやんはお琴にも行くわよ。あたにもお琴ならはして。」

そして丸子は「さくら、さくら……」をいつか覺えてゐた。その歌を聞くと、久子たちは直ぐ光子を思ひ出した。

今丸子は到頭一年生であつた。彼女は桃色の洋服を着て、仲のいゝ二人の友達の眞中にはさまつて、學校へ通つた。

そして久子が靴の始末や、大小便や、彼女の新らしい學校生活について、先生や小使に特に頼んだりして案じたほどのこともなくて、少し馴れるにつれて、段々甲斐性が出て來た。

「あなたちよつと見てやつて頂戴よ。」久子は雨の降る日などに大きな雨外套にすつぽり小さい軀をつゝんで、ゴム靴をはいて入つて來る丸子を入口に迎へると、さう云つて裕吉に注意した。

「さあ、唯今は……。」久子が言ふと、丸子は極惡さうに躊躇して、あつちへ行つてしまつた。

「唯今ができないやうぢや駄目ですね。兄さんでも姉さんでも皆んなお行儀はよかつたんですよ。でも直きできるやうになるでせうね。」

そして初めは勝手の惡さうであつた丸子も、到頭それをするやうになつた。それに久子も時々首を傾げて、

「この子は學校はちよつと何うかと思ひますね」と案じてゐた。丸子は時々特別に殘されたりして、一時間ばかり遅い日があつた。

「どうも算術がいけないやうですよ。遊戲が大變いゝんですて。」

「算術はまるで駄目かい。やつぱり已に似てゐる。」

祐吉は時々姉さんに算術をおそはつてゐる丸子を見た。が、しかし興味がなささうには見えなかつた。皆んなは寄つてたかつて、丸子を揶揄つた。

「丸子やつてごらん、八つに五つは幾箇。」三男が大人ぶつてきいた。

丸子は「え、八つに五つ……」と小さい指を屈めながら「ちよつと待つて……」と、探つたさうな表情をして、呑込みにくさうに數へてゐた。

「丸子ちやんのは駄目よ。一々指をらないでさ。」

しかしそれも一定の時がたつと、自然に道がついて來た。そして或時は書取、或時は算術の成績を、祐吉の傍へつきつけて行つたりした。三重丸がついてゐた。

「初めはちよつと呑込みがわるくて、先生も困つたさうですけれど、この頃は大變いゝんですて。」久子は或時學校で先生に逢つての歸りに、さう言つて告げた。

丸子は燥ぎだすと際限なく燥いで、よく皆なを笑はせたが、學校生活が初まつてから淡い惱みに似たやうなものが彼女の氣分をいくらか眞面目なものにした。

「まだ水道の口へ手がとゞかなくて困るの。」丸子は一緒に風呂へ入つたとき、祐吉にそんな話をした。

「誰か大きい人にしておもらひなさい。」
「でも誰もゐない時もあるの。」
「丸子ちゃん一番小さいの、」
「うゝん、私よりもつと小さい人もあるわよ。あた家のお姉ちやなよりか、もつと小ひさいお姉ちやまがあるといゝわ。皆なあるわよ。」
「兄さんがあるからいゝでせう。」
「え、でも男でせう。」
するど彼女は風呂のなかで、いきなり兩手をあげて、「ざんぐ\〱ぎら〱」を遣りはじめた。
しかし丸子は段々父に取りつかなくなつて來た。女中や姉を困らせてゐるのを見ると、祐吉はわざと大きい聲で叱つたり、時には煩くさくなると、立つて行つて頭を打つたりした。そして後で仲直りして、抱かうとしても丸子は迷惑さうに逃げて行つた。
祐吉は子供たちを二三時間何處で遊ばせようかと思ひ惑つた果てに、久しぶりで淺草を見せてやらうと思つた。そして廣小路まで電車をかりて、そこから田原町まで乘合自働車に載せた。
皆んなで六區へ入つていつた。祐吉はそれが子供を遊ばせるに尤も俗惡な場所であることを考へてゐたけれど、子供本位に設備されたところは近くになかつた。
「この幡何に？」丸子は活動館などの澤山の幟を見て不思議さうにきいた。

「これ活動よ。活動は何處でも幡が出てゐるでせう。丸子ちやん見たことない？」姉娘が言つて聞かせた。

皆んなはさつさと其處を通つて行つた。子供たちに見せるやうなものが一つもなかつた。大人のためにも子供のためにも、何故もつとすがくしい美しい公園を市中に作らないのかと、祐吉は思つた。

これらの遊び場所は、人間の頭惱や趣味性を濆せばとて、決して濟めてくれないのであつた。

「さあ何を見ませうかね」。祐吉は子供たちに相談するやうに言つた。

その邊をぶらついた果に、到頭花屋敷へ入つてしまつた。動物や人形や、瀧や、活動がそこにあつた。まる子たちは象の前に立つて、餌の堅パンなどを役げながら、しばらく遊んでゐた。しかし熊や虎や狒々は、小さな子供には幾分は恐怖を與へずにはおかなかつた。祐吉自身も猛獸は餘りに殺風景だといふ氣がした。

やがて演藝場で喜劇の初まつてゐるのに氣がついて、そこへ入つて行つたが、やはり子供に見せるものではなかつた。

「今から歸つても、母さんはゐないからね」。そこを出てから、噴水のそばへ來たとき、祐吉は呟いた。

まる子もそれをきゝつけた。

「母さま何處へいつたの」

「お母さん兄さんとお芝居。」

丸子は何とも言はなかつた。

それから木立のなかへ入つて行つた。そして木蔭にしやがんで暫らく足を休めたが、どこを見廻しても汚ならしくて仕方がなかつた。ベンチにさはるのも氣味がわるかつた。」

仲店で丸子は人形を買つたりして、電車通りの洋食店へ入つたのは、それから暫らくたつてからであつた。お盆の前なので、比較的どこもひつそりしてゐた。耕吉は子供たちにアイスクリームを食べさせてから、ぶら／＼歸途に就いたが、上野の廣小路で乘合自動車をおりてみると、日の暮れるまでにまだ時間のたつぷりあることに氣がついた。

「家へ歸つても母さんがゐないから、何か食べて行きませう。」

耕吉はM百貨店の食堂が、此の場合尤も家庭向きだと思つたので、わざ／＼其處へ入つて行つた。そして食堂の入口にある見本の前に立つた。

「何が好い。」

「私(わたし)これ。」丸子はいきなり親子丼を指さした。

「それお旨(うま)くないでせう。これは何う西洋料理。」

丸子は進まない顔をしてゐた。

「これが好いだらう。」耕吉は幕のうちを指した。

「えゝその方がいゝわ。」姉娘が言ふと、皆んなも贊成した。

食卓に就くと、丸子は遙かに顔がいき／＼して來た。そして食べものが前へ運ばれると、さも嬉しさうににこ／＼しながら箸を執つた。そして姉さんと絶えず何か話をしながら、落着きはらつて、玉子燒や野菜の煮メを食べてゐた。丸子が食ひしん坊な點も、父に似てゐた。

「お前たちゆつくりお食り。父さんあすこで煙草をすつてるからね。」耕吉はさう言つて、食卓を離れた。そして食堂の隅にある喫煙室から、子供たちを番しながら、煙草を吸つてゐた。

もう繪を描くか〳〵と、祈吉は私と見てゐたが、丸子は笑つたり巫山戲たりしながら、いつ迄たつても食べものに取りついてゐた。そして三人でぞろ〳〵祝吉の傍へやつて來たのは彼が三本目の朝日に火をつけた頃であつた。

「よく食べたね丸子ちゃん。」祈吉は笑ひながら言つた。

「丸子ちやんづゐぶん食べたわよ。」姉娘も笑つた。

「でも私殘したわよ。」まる子は答へた。

「何に殘した。」

「お握一つよ。」姉娘が笑つた。

「さうか。」祈吉も笑つた。

「でも政あちやんも隨分食べたわ。」丸子が言つた。

「僕づゐぶん殘しました。」

皆んなは揶揄ひながら外へ出た。丸子は漸と滿足したやうであつた。そしてふざけながら電車通りへ出て來た。

「まだ早いから、家まで歩きませうか。丸ちやん歩ける？」

「歩けるでせう。」姉娘が言つた。

のろ〳〵と歩きだした。

久子たちが芝居から歸つて來たのは、餘程おそかつた。あの邊へ行くと、きつと子供が母親を引張つて、銀座をぶらつくであらうことを祈吉は想像してゐた。

「どうも有難うございました。」久子は疲れた顔をして、祐吉の側へ來て坐つた。

「どうだつた、面白かつた？」

「餘り面白いとは思ひませんね。四谷怪談も私のお隣りにゐるお爺さん夫婦が、昔し見た役者の話をして、頻りに話を言つて說明してくれましたが、思つたほど面白くはありませんね。」

「人情がないからだらう。」

「でも、ちよつと面白いな。」長男がさう言つて、舞台上の技巧について何か言つてゐた。

「お祭佐七は子供時分見たことがありますが、私あんな芝居は又嫌ひ。あれよりか市村座の曾我の方がね。」

「何しろ四谷怪談は筋がこんがらかつてゐるからね。」

「お化けなんかもう興味はないだらう。」

「それに椅子は堪りきれませんね。足へ血が下つて性がなくなつてしまふんですもの。」

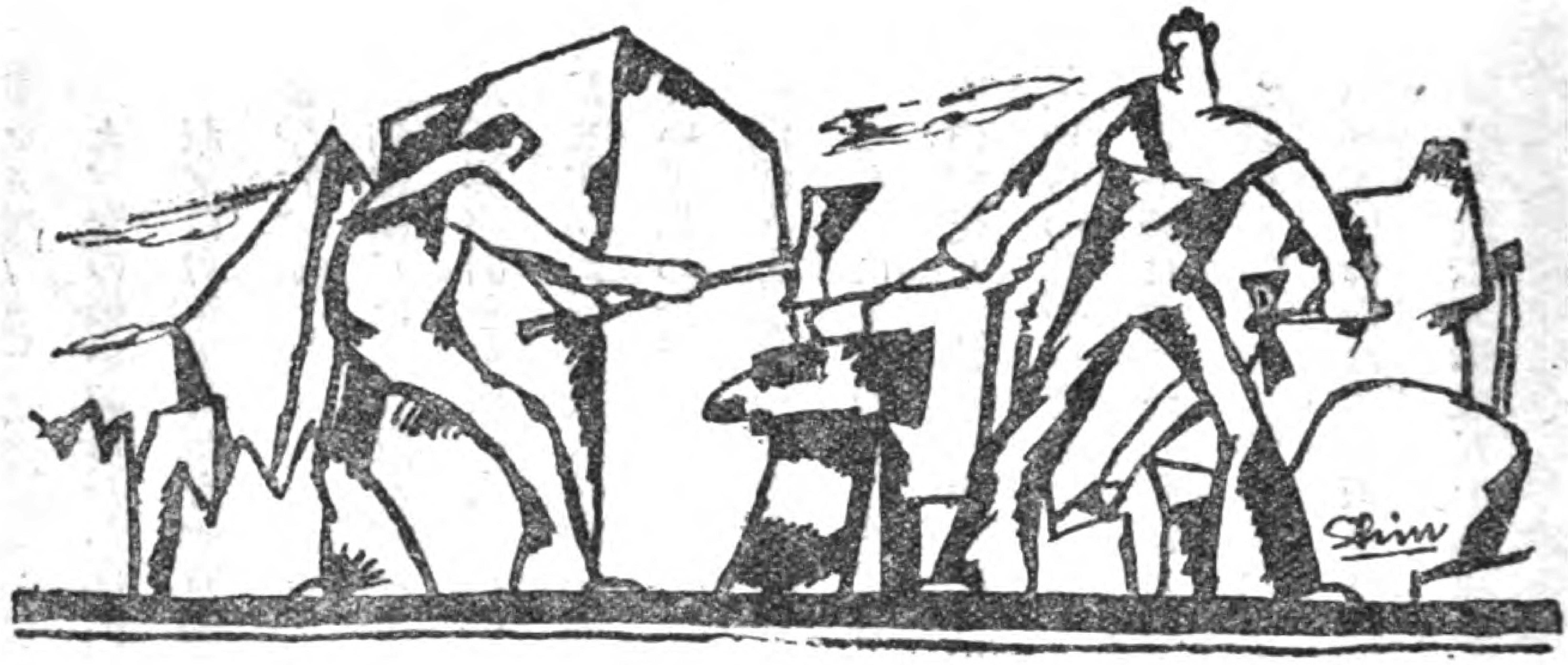
漸と彼女はそこに寢てゐる丸子の方へ目をやつた。そして嫣然した。

「動物園でしたか。」

「いや、淺草。歸りにM百貨店の食堂で森のうちを食べさせたら、嬉しさうに食べること、いつまで經つても箸をおかない。」

「まあ。歸つて私を搜しましたか。」

「いや、もうそんなおりやない。直ぐ友達のとこへ遊びに行つたやうだ。」



ゲテモノ

瀧井孝作

いね〱と人に言はれても猶喰ひあらす旅のやどり、どこやら寒き居心をわびて

住つかぬ旅のこゝろや置火燵　芭蕉

一

仙造は、田舍の父、叔母、叔父とその息子の一行を田端驛のプラットフオームに出迎へた。彼等はたたきの上に手荷物はおいて一息ついてゐた。

父は年寄つて瘠せて、かほは鳥に似てアゴが短かつた。この父を仙造の子供の頃ある子供は「アゴ無し」と云つたが……。父は古びたソフト帽をきて、やゝ曲つた脊であつた。父はこのほど洗濯人と云うてある女を內へ入れ、旅へ一しよにとのことであつたが、來るとき旅費を女は自辨せないので止めて、父は別れたのであつた。

叔母は、仙造にあふとすぐに云つた。

「長野で汽車にのるとき、蝙蝠をおといたヨ、傘は見えとつて拾ふまがなうて、大

勢こんで〳〵」

と、脊の低い叔母のかほに不平不滿はあらはれた。

叔父は、平素音信もせぬ甥の仙造へ、こだはらずにやつて來た。息子の二十才の紫二郎は臆病さうに立つて居るのであつた。

仙造は、けふ大阪の叔母より「藤田より手紙參り五名で東京へ行と申て參り一名だれやろと思候處四五日前にお父さんが莫座引きを内へ入たとやらさつぱりわかりませんが定めてあんたの内へも五人も行くようなればこまる事を祭して居ます又おかしな人を内へ入てあとてごて〳〵せぬかと思ひそれが心配です」などゝあつて、見ると四人きりで、まあよいと思つた。

「洗濯人とかゝ一しよと聞いた、こんた人は來たら僕の内は斷らうと思つた」と、仙造は云つた。

てんでに手荷物はさげ、驛の前の崖の路をのぼり、仙道は客ととも〳〵まもなく橋町のうらの自家に來た。この二月妻の病死した仙造の内では、じつは見物の客は重荷と思はれた。

「いらつしやいまし」

とお袋は云つた。仙造の國の人々とは初對面のお袋は、またこの場で、かれの父の新佛のくやみのことばをうけた。

お袋のあたまの小形の髷などを見てゐて、叔母は、こう云つた。

「森本の母樣は、私共とみればまだ若いですわ」

さう云ふ叔母は五十九歲である。叔父は六十三、父は尙五つ年上で。このほか今大阪にをる叔母は一番年下の妹で、共四人兄弟である。

指物屋の父はこの上野の平和博の出品人の一人で（仙造の居る東京なので飛驒あたりより出品する氣になつた）その博覽會見物に皆とともぐ＼の出京であつた。叔父の二男の繁二郎は大阪の叔母の養子にゆく途次で、叔父は方々見物させてと思ひ立つて來た。

父は、仙造の家の様を見た。一と目で大方くらしの分る、三室に五坪程の庭の借屋であつた。大工の叔父は云つた。

「ほう、つごうようできとるわいナ」

云はれて仙造は笑つた。

「坪五十圓で造つて三年になるさうだ、大屋はもうモトはとつてをる」

「さうかナ、安い時分できた家と見える、いまはどんな安ぶしんでも坪五十圓ぢや出來んゾ、なあ」

と、叔父は息子の繁二郎に向いた。

「柱は松の木でよくヤニを吹く、椽側の上は丸太だ」

「木は丸太の方が高うつくんですぜな」

繁二郎は云つた。大工を習ひおぼえた繁二郎は、大工の話の場合は元氣に見えた。

そして皆は、夕食に茶の間へ移つて尙、そこのたんす、長火鉢、ちやぶ台などの家具をみて、暫時、一一についてまた指物の話は出た。「けやきの丈夫向きのろうこ火鉢ぢやが之は安くは出來んゾ」などゝ曰うた。

父は酒づきをもち上げて、肴を見て云つた。

「刺身はナマシか」

國では、まぐろは生節（なまぶし）とよんだ。皿のさしみは上より醤油をかけるのであつた。それはこの父の好物なので、田舍の

家の流し元の庖丁掛にほそ長い刺身庖丁は何本も掛けてあつた……。父の酒は客のいる方でまた悠くり飲んだ。遠慮勝の叔父は、強いられるとすぐ受けた。酒の長びく父は、お袋に向いて云ふのであつた。

「俺たちはおいといて、御膳を上つとくれんさりヨ」

叔母は食事のあと煙草をすうてゐた。そこへ出た松子の寫眞を一枚とりあげて「よく寫つとること、前に何とかきいとつたけれどそんな様子は見えない品のよい人」と、厚意をもつて云うた。お袋は亡くなつた娘のそれは、人が來るときつと見て貰ふ慣ひであつた。

繁二郎は、無事東京へついた報知を、小學生のやうに雜記帳へ作文して、ハガキに寫した。また叔母の忘れ物の蝙蝠傘のこと長野驛へ問合せるハガキも書いた。

仙造へ宛、大阪の叔母より手紙に同封の新聞の切拔、——平和博開催中横濱と神戸と往復の特別客船のできたと言ふ記事、——それを仙造は見せて

「叔母さんは、皆に船で大阪へ來たら、つてさ」

と云ふと、父と叔母は云つた。

「乘物は汽車にさへ醉うんで、蒸汽はダチカスカイ」

「さうぢやあ、お壽惠はひろみにをるから船でこいと云ふんぢやけど」

仙造は、大阪の叔母より「ドヤ〳〵と來て氣の毒です大阪へ先にくれば一人は少いのになるべくお金をつかわぬよう又食物かて御馳走せんでもよいこんな折ですからお父さんに出てもらひなさい自分は勝手な事をして洗濯人とか云ふ人まで連てくるのですから私なら用參りませせん行人もあつかましい又連て行くお父さんも分らぬ用思ひ外親のする事仕方

がない」云々と思ひやりのある手紙をもらひ「大阪へ來る日ほどハガキでしらせて」とあつたので、父に尋ねた。

「いつ頃大阪へいくか」

「見物せにや行けんゾ、そんなことといま分らすかイ」

父は厭に答へた。いくらか餘裕ができて漸と來たのに、迷惑がられるので、父は腹立てた。仙造は、叔父へ話を移した。

「大阪へもらはれていくつて」

すると、叔父は答へた。

「ふうんサ、繁二郎は此頃になつてやつと錢取つて入れるやうになつたんぢやが、やりたくないのぢやけどお辭退はやかましくいつてだいさきかんのぢやあ」

お袋は、六疊と三疊とへ貸布團を分けて寢床を作つた。

次の朝は雨天であつた。みんなは庭の雨脚をかへりみ／＼、また實飯をたべた。

仙造は朝「ぼくは見物の案内はごめんだゾ、案内して歩くことは實に厭だ」とこんなに云ひ、叔母は「さうぢやあ、俺達はこゝに泊めてもらふで案内の方は、小石川の三四郎にたのむつもりなんぢやあ俺ア」と曰うた。

ぼんやりしてゐる皆を見て、客が重荷の仙造は、雨でまた一日よけい逗留されると思ふと厭で、父は用向をもつので一人こんな日に濟ませたらよいと思つた。

「雨で見物に出られぬなら、父樣は用事の方の其博覧會の岐阜縣事務所へ、けふいつてきたらどうぢや」

「うん、事務所は淺草の方の××寺つてことぢやが、俺一人ではどう行くのか分らんゾ、なあ」

父は子にたよるのであつた。父は善光寺の長野に泊つて風邪引いたと見えて面瘦せた顔より水涕を垂した。

そして仙造と父と二人は出掛けた。他は内に殘つた。二人は夕方漸く歸つた。内へ來て仙造は云つた。

「四月の半ばと云ふのに、けふの雨はミゾレだ、不順の天氣だョ」

傘の柄をもつた手は寒さで充血した。仙造は、水鼻を取り／＼從ふ父をかへり見て、もし風邪で倒れはせぬかと思つた。父子をみぢめに思つた。岐阜縣の事務所では出張上京中の役員は、なたまめきせるを持上げ「川端においでるかな、さうかな、よい息子さんですな」と仙造は云はれ、「俺のせがれですが」と曰うた父は痴笑んだ。電車を何遍も乘換へ雨傘のつゞいた、道路を掘返された街を見て、内へ來た父は云うた。

「東京へは昔三十年にもなるが一度來たが、今はどこも變つとるものなア、けふの淺草の方はまだ覺えられんけど上野の博覽會だけはもう一人でも行けるゾ」

博覽會の會場の方で受けてきた、出品人の入場パスの小形の札を、父は内の者に見せて曰つた。

「これは一圓納めて貰つてきた、俺や每日いつて見るんでなナ、あとは仙造にくれるで通用せよ」

パスは會期中有効だが年齡記入で本人限とあつた。叔父叔母は、その入場券に反感をもつた。

「さうか、この六十八才の六の字を二といふ風に胡麻かせんか」

「いやだ、第一ぼくは博覽會などは見たくないんだ、田舍者の見るものだ」と、仙造は父にタデついた。

「そんなこたあらすかイ」父は腹も立てなかつた。

夕飯のちやぶ台が出た。國の習ひで茶漬ばかりたべる客は「何もせんやうに、お茶も一ぺん／＼世話がいるし」と曰つた。各々のお菜は殘ると「またたべるで取つておいて」と曰つた。さう云はれて、内のお袋は勝手元の洗物は片付か

ぬので不服に思つた。お茶拵へはやはり爲るので。

父は三日目の朝より高い體溫で寢ついた。きのふの寒い雨に歩いて風邪を引直したと仙造は思つた。田端のこんゐの醫者は來てみて、田舍人(びと)のこの父の丈夫な心臟をばほめた。仙造は病人の手當は松子の場合で慣れてゐて、器械的に働けて、頭は勞さなかつた。

四日目は父の他はその日歸りで日光見物にいつて來たが、その次ぎの朝、繁二郎は頭痛を訴へてえう起き上らずその體溫は九度をこえた。叔父の子は日光の寒さに當り感冒の熱でこれも頭に氷嚢をあてた。叔父は旅先で息子の倒れたことから鬱ぎこんで叔父も何もたべずに寢てゐた。

仙造は内の客のそんな有樣を見て、前に書いた雨の爲一日逗留の延びることをも厭つたやうな心持はよぎなく捨てた。惡い方へ〳〵落入ると思つた。父の氷枕に碎氷を入れるをり「ぼくは病人の看病はさん〴〵仕たからもうこんな事はせんでもよいと思つてゐたら、復だ」と仙造はぐちを曰つた。

繁二郎の感冒は二日臥て直つた。父の體溫はしつゝこくて、それはパラチブスのやうだと醫者に云はれた。

「チブスなんて下等な病にとりつかれたものだ、傳染病院へやられるゾ」と仙造は意地惡を曰つた。

「内で養生できんか、先生に賴んでくりョ」

仙造は父の言を金にしわいその意味に解して、不服に思つた。茶の間にて叔母は「父樣は胴慾なんぢやゾ、ちか頃いくらか溜つて金貸せもするさうな、おり逢と旅へきてもゼニは一一算用してビタゼニ一枚もくれん」といつた。叔父も

話のついでにこんなことを「馬場の家は祖父様と俺とでこわい目にあつて建てたが、俺や家からは柱にかける八角時計一つもらつて出た限りぢや」といつた。父は前に書いた博覽會の入場劵にも表はれてをるやうな他をかまはぬ氣强い人で皆ににくまれた。

「傳染病は閉せすかいな、仕方がないさ、田端は郡部だから板橋病院へやられる」と仙造は云つた。

「病は直したいから金はいとはんが、板橋とかいふ在の病院は弱るゾ、なあ」と父は淋しい面持した。

そんなさはぎしたが、醫者は輕いからまあ宅で氣を付て養生してよいと云つた。

大阪の叔母は同情の手紙をくれた。「お手紙拜見致しました三人も床に付定めて迷惑の事と存升また森本のお母さんに御厄介を掛け申わけなくと思升あなたの事は何もかも私も主人もよく察して居升それ故内は今東京へ行くのはセツショやと申て居られました父にお金を出てもらいなさいあなたが云にくいのなら内から申しませうか之は少しなれど平藏兄さん又は繁二郎の藥代にして下さい拾圓ですもつと出したいが昨年の秋私が北陸福井地方の溫泉へお得意先のお招待で行きましたその不在中に貯金の通帳を見付けられ皆私の名前の銀行へ入てしまいその爲私の自由になりません此拾圓はそれから後のです高山より皆々上阪なされたら其折に土産とか又は他の事に使ふと思つてゐたのですお金着致たら繁二郎に大阪へ來る時言傳へきかせて下さい平藏兄さん繁二郎少し良くなれば先にこちらへ出いて下さい兄さんも定めて旅先で悪くなつて困りでせう國に居るのとちがひ升からあまり氣强くいわぬよう人のしてくれるやうにしてもらいなさいと云うて下さい」

小石川の方から三四郎が來た。この藤田の長男は砲兵工廠へ出てゐて「この頃は工廠もヒマで人べらしでネ」と云つた。田端の仙造とは二年も見ない間柄だがすぐ互の生活向きの打あけ話をした。

叔母はこの義理の子をたのみ三日市内見物に出歩いた。叔父と繁二郎も共〳〵、さうして、三人は先に大阪へ向いてゆくのであつた。

仙造はたち際の叔父叔母より「世話になつた、之は米代のたしにしとくれ」と言はれて、二人の財布の一部を合せた物を受けた。仙造はたまに來た叔父叔母に興ざめをのみ見せたが。

東京驛へゆく市内電車の中に腰掛けた叔母は、わきの仙造に

「森本の母樣とははやく別れるとよいぞ、仙造、跡おみの嫁樣も探がさにやならんし」

とさう曰つた。倘ほまた

「もつとやさしけりやな、森本の母樣は六ケしい人ぢや、おりやお勝手の手傳ひせりとしたら、てんで構はせんのぢやもの、女同士はあゝんでは弱るなかイ」

と叔母は非難したが、この頃いくらかお袋も氣がたつて居て、それは無理と思へた。

「はやく別れた方よい、おみの爲を云んぢやゾ」

「そりやさうぢやゾ」

人のよい平藏叔父も眞面目に同意した。三人は東京驛の汽車の中にはいり腰掛けてまたそれを繰返して曰つた。汽車の窓邊の仙造は肯いた。

毎日仕事のできぬ仙造は將棋盤と將棋の本とを見ては時間を消した。父は恢復期で、食物は未だ牛乳と玉子よりとれぬ物足りなさはあるが心持は滿足らしい面持であつた。父は旅行案内をひろげ、松島と成田の不動と、西は大阪より宮島と琴比羅まで見物するつもりだと、そんな風に日つて居たので、仙造は「それぢや大旅行だ、そんなよぼ〳〵で」といつて笑つた。

父は粥をたべる頃、仙造は父と博覽會へいつた。會場では仙造の父の出品は、桑の長火鉢や桐の火鉢や一位細工の類の地味な表情の品で、まはりの花やかさとは凡そ不調和に見えた。仙造はそれを見て、あとは美術館と奏樂堂の軍樂隊の演奏など自分の思ふ方へ父をつれて行つた。

仙造はその日だけであとは父一人だけで出歩いた。父は博覽會二日、市内二日、成田と佐倉と龜井戸の藤を見て來たと云ふ一日、父はそのあとで立つた。

仙造は父の見送りに東京驛へいつた。其日鎌倉江ノ島を見ると云ふ父は、午前の横須賀行のガラあきの車内に入つた。仙造はその窓に父の瘠せたアゴの短い顔を見て、淋し相で、けふは一日共々に見物せうかしらと思つた。が、早く自分一人になりたい氣持ちの方が勝ち、仙造は步廊より父の淋し相な姿を見て別れた。そして、仙造はその足で友達をたづね友と將棋でその一日を暮した。

二

仙造は大阪の叔母と共に、夜中の四時に岐阜について驛の待合室に朝を待つて居るので、十月中頃の夜寒の腰掛の上にき

ちんと坐つた。みなを壁に造り付の腰掛には六七人横臥の人も見えた。仙造は侘びしく窮屈と坐つて、此所を知人に見られると笑はれるぞと思つた。仙造は京都の留守居の妻に宛て、驛の大きいテーブルの上で端書を書いた。「四時岐阜驛着、乗合自動車は七時に出る、今朝はなか〳〵寒い、けふ夕方高山についた上でなほ寒かつたら明日電報でマント送れと云ふから、冬のマントを日向に出し襟がよごれてゐたらキハツで拭いておいてくれ、そして小包で出してもらへば三日で屆く、電報打たねば送る用なし、さつき汽車の中で赤兒の泣聲が客のつれた子供の聲がしたら、うちの敏子を見たくなつて、戻りたいやうな氣がした、敏子を大切に」

仙造はこゝ四五年の自分の境遇の移りかはりを思はねばならなかつた。父は三年前博覧會に上京したが、國ではやはり一人でくらして居て、父は年寄つて移りかはりがないのだと思はれた。

夜は明けて、停車場前の廣場に電車は音たてゝ動いた。待合室では皆起きた。松茸狩か何かの一行もあつて、人々は溜つた。高山線の初發の改札で、溜つた人々はあら方出ていつた。仙造は高山線は始て見るので途中まで出來た此汽車をよく知らなかつた。待合室に殘された仙造は「あつちの上麻生からも乗合自働車はあるやうで、歸りには高山線に乗つて見ようか」と叔母に云つた。そして漸と時間になつて自働車屋の方へいつた。

乗合は、乗る前に帶をといてシャツを二枚重ねてきこんだ高山の商人と、宿屋から送られてきたつめ襟服の男。——それは大阪にゐて南洋あたりへも行つて久々で高山へ歸ると云うて大阪の叔母と話をした。——その四人で、高山の商人は無口で仙造と似てゐた。

市外の長森村で遠山を見て

「恰も水墨畫の一とすぢだ」と仙造は思つた。仙造は水墨畫には心躍りした。

「寒い向ひ風。あちらは時雨だよ」叔母は田野を見て云つた。

山阪になると日もさしてきて漸と暖味を覺えた。美濃町で身ぎれいな伴が一人加はつた。その坊さんは「こゝの村の松茸は一番よい」と云つて道端で松茸を買つた。見たところ色つぽい此人は、街道筋の名高い勅願所の禪寺の住職であつた。

二ツ目の峠の袋坂で、何年目で戻る仙造は山又山をこわくて「これはひどい所だ」と思つた。それは故郷をひどい所だと思はれた。切通し〳〵のさきに在る「自分の故郷」を糸惜まれた。

その袋坂の辻の茶店で自働車は冷却器に水を容れた。運轉台の若者はやすんで「このあいだ何の宮様の通つた折この袋坂を寫眞にうつしたのを見たが、寫眞には袋坂の稻妻形とまた御嶽も入つてをるが、御嶽は下では見えんのに、うまく繼合せて造つたものだ」と云つた。茶店の裏に立つとその御嶽はずつと隔てた端山に白い雪のきた頂きを僅か見せた。

十一時頃この乘合自働車の一定の晝食宿へついた。朝飯をたべてない仙造は叔母と空腹で膳についた。これは甚だ味なくて心細く邊鄙の所へ來たと思はれた。坊さんはその膳に一本つけさせてすぐたべてしまつた。叔母は後襟に手巾をあてゝ居たが食事の膝には手拭をおいた。皆のしまつてからも落付いてたべる叔母を見て、仙造は又厄介に思つた。女連れだと何かと厄介なものだと思つた。

中山七里

「中山七里は昔から云はれるが、こゝの水は格別きれいたこと」叔母は川のたがれを見て、風雅の分るありさまだ。

「紅葉してないナ、未だかナ」と仙造はしきりに窓に面てを押あて、川向ひの山の斜面に疎らな海紅葉をさがした。
「もみじは未だですぜナ」高山の商人は一と口こたへた。つめえり服の男は無興味らしく、坊さんはよい色の面てだ。
乗合の住職の寺の前にきたが、色つぽい坊さんは尙ほ一里いつて萩原町に下りた。
小坂の渚の谷は、もう秋の霜の時候に見えた。岐阜から三十里も北へさか上つた。
「空氣がよいと見えて山のこうやうがきれいなこと」叔母は云つた。
「黄金に見える、輕いもんだな、この氣持く」と、山を見て仙造は思つた。藤白の西日の頂きくは輕々と澄んだ。
この谷の色は景色好きを醉はせた。
他の乗合は川筋の水力電氣工事を噂した。
風景に熱心の叔母を見ると、あらそはれぬ血筋だと仙造は思つた。……此頃叔母の所の繁二郎は方々の宮や寺々の朱印を雅帖にとりあつめてあるいたり又生花や謡曲など習ひ初めたので、大阪などにゐても其風流染た方へ心持の向く事をさすがに自分共の血筋だと思つたが……
街道を一人荷馬車の手綱ひいて來る男の面てはボヤけた紫に包まれて見えた。仙造はそれを目守るとボヤけた紫の中に覺えのある小學校時分の子供の一人の顔が見えた。仙造は荷馬車曳きに見覺えがあつてそれをつき留めようとすると記臆の中に相手の面てはボヤけたのだつた。仙造はゆきあふ高山町の者らしい人、その面ては皆ボヤけて見えた。又其顔にある記臆をつき留ると愉快であつた。
故郷の町についた。乗合自働車はとまらずに其儘粗しい車庫に入り、客は車庫に下ろされた。仙造は虐待された心持がした。出迎への者は來てゐなかつた。

仙造と叔母とは手荷物をさげ、町の目ぬきの安川通りを通つた。或る唐物屋の若い細君はとほる男を一瞥した。この髷の女は娘時代はとかくの噂の主で今は聟をとつたと思はれた。仙造は町筋を見直す目で見た。店々のかざり付は一體に黒くくすんで、中の色彩は厭に目立つた。「なんて憂欝な見世〳〵だ」と仙造は思つた。がその憂欝は特有のもので、仙造は面白かつた。心持（ムード）があつた。

子供時分の大きい坂、文右エ門坂は案外短かくてすぐ坂の上にきた。どの町も一と足に通れて道は小さく縮んで見えた。

仙造の生家は四間まロでこの通筋の大きい家で、表ての指物店のかざり窓は、そこの一位細工の寫眞掛にかけた安價な美人エハガキなどが見えた。門口は材が積まれた。内は新しい襖が見えた。薄田の叔母、平吉とお辰（繁二郎のきようだい達）は、今から迎へに出向く所であつた。

「よくきた、早かつたナ」

父は云つた。

「はあ、兄樣もまめでけつこでです、こんどはまた厄介になり升が」

叔母は云つた。仙造は改つたあいさつは仕なかつた。

二人は風呂屋へ出かけた。夕方の風呂はこんだ。仙造は前に云つたやうにボヤけた暈に包まれた數々の顏を見、イ、ロ、ハ、ニ、ホ、とめい〳〵を頭の中でつき留めた。そばの二人は、組町内のものはやよいオヤヂ株だが氏神の御輿（みこし）を何とかした噂を云つて「山信」と仙造の父の名も洩れて、仙造は頑固で組のにくまれ者の父ゆゑ碌な噂もされまいと思はれたが、前の前後は聽とれなかつた。大坊主、さう見える人が居た。仙造はこの大坊主を脇から見て、頭の中は笑ひたく

なつた。……仙造は魚問屋の店員だつた頃、いつも夜遊びに出て遅くなると表戸は締つて、奥に寝た者は呼んでもきこえぬので起きない。仙造は問屋の裏へ通れる横町の菓子屋の表てに廻り叩き起いた。小さい菓子屋の主人は起きて自分とこの路地を開けてくれたものだ。……この大坊主は、よく夜中目醒された菓子屋なのだ。仙造は十何年にもなるその頃の無法な元氣を思つて、頬笑たくなつた。そしてからだをながした。

上りたての衝立は今も手拭掛代りで古手拭は下つた。仙造と叔母とは風呂より戻りさらのぬれ手拭をならべて掛けた。さら疊で貼りかへた腰高障子、その腰板はザラ〳〵垢付いた。大阪の叔母は膳棚の汚れを見た。そこの薄田の叔母は
「さうツて、男一人で仕様もあるまいけどいつ雑巾あてたことやら」と笑つた。
爐端の徳用マッチの大箱。七厘には甲に似た底深い鍋。このおかしな鍋は深くて便利と思つて父は見付けて買つた。徳用マッチは、三年前の博覧會見物の旅の折り、大阪で買つてもち戻つた。自炊の父は。
めい〳〵膳の夕飯に向つた。かげ膳に用はれて子供の頃のとほり膳棚にある、仙造用のはかげ膳でなく出された。仙造はこの歸省には鮎、茸、栗と思つた。
「鮎は今時あらすかい」父は云つた。
「簗鮎は未だあるろ」
「ない、この蠶の煮たのはうまいぞ」と、父は杯をあげた。
「棗は芯がある」と、仙造はそれを取らなかつた。甲の鍋の牛ぺんだけでは物足らぬ心持で、久々に來たものを一向も

て成されないと思ひ、仙造は早うたべてしまつた。

薄田と平吉と來た。薄田の叔父は父に云はれ、爐端に上つて酒づきをもつた。從兄の平吉は「俺やのまんで」と、路地に立つて板塀にもたれた。父はそこの衝立の古手拭をとり、白毛頭の面ての汗を拭つた。風呂なら人のきらふ所の汚ない手拭だ。

「嫁の顏合せもしたいで一しよにくればよかつたに」父は云つて「おみ達にわざ〳〵來てもらつたが、法事は、そゝや何日につとめるかな」

ときいた。薄田の叔父は云つた。

「仙造の所でも子供が生れたさうなが、赤兒を抱いては無理なわい、今は先祖のことで來たんなら、そりや何よりさきにした方がえいぞ、なあ」

「はあ、子供は今日で九十日たつが自動車はきけんだからな、法事は僕は明日でもよい」と仙造は云つた。

「うん、そゝやあさつてときめよう」父はさう定めた。

大阪の叔母は平吉の内の病人の樣子をたづねた。親の平藏はこの二月より中風を煩つた。それを二人の叔母（妹）はこんなに云つた。

「死んでくれつて云はれへんしな」

「さうよ、なあ」

父は「秋葉樣を昨日から忘れとつたことい、仙造、欠上(カケウヘ)の秋葉樣ちや行つてくりよ」と云つた。

「僕がかい」仙造は昔の子供と見られた。

「俺ゃ行つてこずも」と、その燈明入れに行く用向は引受けた。平吉は秋葉樣の燈籠を提げて出しな「あすの晩は、おもてかナ下方かナ」と屆ける隣を尋ねた。

　仙造はそれを見て、辻の燈明は電燈とればよいに每晩の皆の努力は思はれた。仙造はこの從兄に、ブジツイタと大阪の叔父へ、京都へはマントオクレと云ふ電報打つ、用向を賴んだ。仙造はその晩配達された飛驒日報を見てゐて、疊へ手をかひ體を支へてヒドク勞れを覺えた。乘合自働車は一番よい所に腰掛けたけれどこたへた。活字と紙の惡い新聞の記事を勞れた頭はうけつけなかつた。

　山野仙造氏の歸省、と報道のあるその新聞をよんだ父は

「おみの友達にたのんで書いてもらつてくりヨと云つた短冊小切類は」と尋ねた。

　仙造は、持つてきたその短冊類と一枚の子供の寫眞をとりだいて見せた。父は色紙短冊は雜に見て

「もつと繪や小切の方がよかつた、はりまぜぢやで」

と云つた。父はそれらの好惡は分らないが、この町は貼交屛風は、八幡で大祭の折り土地の風流人より募つた短冊色紙のそれによつて、大流行で、この父もかぶれたわけであつた。父は手札がたの孫の寫眞は持上げて電氣のあかりへ出し

「子供の寫眞はよく出來てをる、えらく肥えた顏付ぢや、寫眞見たらかはりえイから、大事にそだてヨ」と云つた。薄田も叔母もかはる〴〵見た。

　寢床は、奥の八疊に父と大阪の叔母とはいり、仙造は二階の四疊半に上つた。仙造は休むと足の出る敷布團で枕を疊

の上においた。月に重たい布團は石の如く固かつた。下では、父と叔母は話しつゞけた。叔母はいくらか耳うとくなつた父に云ふ。

「年寄つてもこんな重いふとんきて笑止なんやな、お前も今はちつとは溜つたさうなが慾ばらずに、こんなふとんは賣拂つてナもつと綿のよい輕い夜具を拵へなはい、ゆうべは仙造の内で布團をのべてくれて休んだが、仙造は柔らかいふとんを拵へとるゼナ」

「それで仙造の嫁は」と未だ見ぬ父は尋ねた。

「前の松子はわてては見なかつたけど内らは東京で見て來てオボコイ所のある子やと褒めらはつた、こんどはアドケナイと云ふよりも落付いた奥ゆかしい所のある、それは奥ゆかしいえい子だすが」

「仙造は、はじめに親に相談せんのが俺や氣にくはんわい」

父は駄々子の如に不服を云つた。

「お人が見えた」と叔母に起された仙造は奥は片付けてあるか尋ねて裏梯子をおりた。面てを拭いた仙造は客の見る例の古手拭掛けたついたては氣がひけた。Iはおいへ（玄關と云ふべき座敷）の上り框に近い所に坐つて、奥へは通らなかつた。友は、今晩俳句の會に出よといふ口上で、用向だけで歸つた。仙造はさう云ふIの人柄を、いやこの町の物堅い習ひをそこに見たと思つた。

父は二階に上つて、えんのらんまの小さい障子をとり「探出しするんじや、紙の」とそれを小屋根の雨の中に出して

おいた。隣間の障子は　仙造は　父と障子紙を引張りお[illegible]

「茲は用はないで畳もあげてあるんぢや、法事は下でも出來るが、おみの客のあるときは二階の方がえいろ」

「うん、そんねして剝げるの」

「糊を强目に貼つてあるで、上よりこうすれば一枚紙でめくれる」

久々で戻り障子貼りの用などは仙造はイヤであつた。が二人の仕事は父はへんに安心を與へた。仙造は傍で心の安定を覺えた。使れる安心できる父だと思つた。さういふ心持を味うて仕事をした。

仙造はそれから四疊半の小机に坐はり、自分には心待のある歸省日誌をかこうと企てた。雨の晒いた小障子はてすりにもたせ掛けた。內庭の松は今は軒の上の高さだ。幼時仙造は祖父と山のを掘つて移し植えた松、もくれん、椿なども なか〳〵伸びた。眞向ふに寺々のある東山は雨の中ながら眉近く見えた。すり鉢形の御坊山も、御坊の棟と並んで目に迫つた。仙造は子供の時分はこんなに手の屆く所と思はなかつた。今更にそんな景色をつく〴〵眺め、ぼんやりと坐つて、甘い感傷に耽つた。仙造は手もとの紙には何もかけなかつた。やつと京都の妻にあて、一枚のハガキの便りをかいた。

「仙造、起きよ、いつまでも寢ておれんゾ」父は下で呼んだ。「コソ〳〵」と仙造の寢床の裏のゆか板を、下の父は箒の柄でつきあげた。法事の手傳ひに、別家の平吉は朝からきた。

仙造は起されたことに不服はなかつた。三日目で例の日誌は溜るので、法要のはじまるまで、筆をとりたいと思つ

た。あの小机より用ひよい未だ大きい机のドコかに片付けてあることを思ひ、仙造は父に有所をたづねた。

「机をなんにするンぢや」

「何にするつて、書き物をするからさ」

「たわけ、今日はそんなことできすかい」

父はさうしかりつけた。そして

「今二階をやははんならん、仙造は其箒とうち拂ひと持つて上つてこい、平吉は下水桶に雑巾つけてこい」と云ひ付けた。仙造は、自分の仕事を父は無理解と思はれた。が、仙造は父に逆らへなんだ、従兄と共々、天井、壁など「大掃除の様に」煤掃きした。柱、長押、床板を雑巾掛けして、畳を入れた。また雑巾をかけた。「人を雇つて、掃除しとけばいゝんだ」と仙造は不平を洩らすと、従兄は「俺や野畑の葬式の折りと之で二度目ぢやゾ、野畑の小父様は弱つてごさつたで、あすこの二階もひどかつた、俺と玆の伯父様と二人でまるで大掃除よ」と云つた。

階下は二人の叔母が片付けた。昨日、大阪の叔母は膳棚の拭き掃除して、父に「お前一人分だけ出いといて、いらん物はしまつたら、棚もこう汚なくはならんやろ、さうしなアれ」と云つた。

父は例の衝立はのけて、新しいついたてにした。それは南畫風の器用で描いた松の畫があつた。父はまた二階は、屛風、掛軸、額などで装つた。それはどれもこれもこの町をおとづれた旅畫工の落款の物で、父は道具類として買ひこんで持つてをるのであつた。そこの「含章」二字額は浦上玉堂であつた。(この玉堂は高山では不遇だつたと云ふことを、跡である友は話した)父は「おみは四疊半へ、いらんか」と云ひ、その二三本の内から仙造は、谷口藹山と云ふ、文人畫の蘭の半折を四疊半へもつていつて掛けた。

「いくつもあつて、覺えられんから紙に書きぬいておくれ」と、若い方丈は過去帳をひろげて云つた。

父はそれを繰つて其法名と年回を仙造に筆記させた。十七年と十三年の回忌の、仙造の母と祖父と兄、祖母と弟らのばた〳〵死んでいつた當時のことは想はれた。亦この七回忌のそれは、仙造は父の母の訃報をうけて東京から歸着したのであつたが、一人になつた父を措いてまた上京した……

「もつと古い年回のもあるけど、もうえい」と、父は過去帳は下においた。

「これだけ一遍にと云ふのも慾ばつてるやうだ」と、仙造は笑つた。

さう云ふ法名〳〵のよみ上げられた折、參詣に連なつた小母（父の從妹）らは「ほんとに此處(こゝ)では續け樣に葬式を出さしやつた」と云つた。

三人の坊さんと薄田、三人の小母（父の從妹）と大阪の叔母たちは、二階の廣間に坐つてお膳に向いた。

父と仙造ともてなしする役、從兄が下の物を次の間に持つて上つた。平吉は己れの出入の角正の料理なので、一品一品心得て順に出いた。（この町の特色の角正の精進料理は、甘味の多いこつてりとしたものであつた）

臺所で、「お辰を留守番に賴んできたが、やがて行かんならんで」と病人を思ふ平吉の母、「俺や下で何するから、平吉はいつて坐るとえゝ」と薄田の叔母、「俺や酒はのまんし、窮屈ぢやで」と從兄、三人は人前を厭つて廣間に出なかつた。

お供の「お小僧さん」をつれた、若い方丈は——仙造と小學校の同級生であつた——傍の桐の火鉢を見て「この一と廻り大きい瓶掛(びんかけ)を居間用にしたい」と指物屋の父に向いた。それは在郷軍人（一年志願）の將校で精力家で、この町に

佛教何とか園を造つた。仙造は、昔の山法師はこんな感じなんだ、と思つた。

となりに坐つた末寺の住職は年寄で話上手で、よく座を持つた。「山平や××寺の様に中風が出ると弱るゾ、××寺は朝勤めはされるが酒のあるつとめは一切斷つてをる」と杯をうけて友人の住職のことを云つた。年寄つてよい〳〵の様に歩く一人の大工のことをあれは○○寺の葺き換への折り過ちして今命だけ助つてをると云ふ話、この住職も小僧時代に寺の棟より落ちて不思儀に下の細い溝にうまくはまつて助つた話、そして互の達者な長命を悦び合つた。

「未だ在には達者な年寄があるゾ、この前檀徒の××とお涅槃像の奉加に出て、舊の正月で上野の或る家にゆくと屋根の上に雪却のおやぢがをつて、××は屋根を見上げ『俺や○○院の和尚様をつらつて來たが奉加についとくれ』と呼んだ。屋根の上では頬冠をとつて銀の様な白毛の爺サぢやつたが『ごくろう様、内は兄がやつとるで、内へ入つて兄にそいつてくれ』と返事した。其家の爐端に兄と云ふ矢張り眞白の白毛のヂサがゐた、が雪却の屋根の上のヂサよりは若く見えた、それで兄といふのは隱居の長男ぢやつた。そんな白毛の兄がある位ぢやから前のヂサは大層の年齢なのぢや」

○○院の和尚はつゞけた。

「それから何年かして、この雪却しとつた隱居の亡くなつた報せで葬式に行つた、聞くと其死去と云ふのが『普通でなかつた、何でも畑を擴げる爲代々の墓場を移轉して、又そこの古い桑の木を伐り倒した、その時大きい桑の木は朽ちてフイに根本から隱居の方へ傾いた、向ふへ倒さうと持つとつた隱居は、よけないで、トツサに傾いて來たやつを元氣に任せ向ふへ押倒さうと抱止めた、けれどもかなはなかつたのぢや、さうして横死せねば隱居は未だどれだけ長生したか分らぬ」

仙造は、頑固な年寄であると思つたが、自分の父もいくらか似た所をもつと思はれた。

「この倒れて來るやつを逆に押倒さうと云ふ此氣力は大層なものぢや」○○院は云つた。
その脇の薄田はニガ笑ひした。風眼の人である。
三人の小母が酒のいける方だ。今は三人共連合は亡くなつて息子（仙造の彌從兄弟）がそれ〲やつて居る。
やがて酒杯を納めた若い方丈は、「お先に」と云つて飯櫃の蓋をもち上げた。輪島塗の飯櫃は各々廻はされるのであつた。
仙造は飯になつたら味噌汁を強いるものぢやぞ」と云はれて居て、其通りにした。仙造は持つた給仕盆に汁椀を受取つては次へ立つたのであつた。下へ來てここの從兄に向ひ「僕はこう云ふ務は實に閉口だ」と云つて笑つた。
從兄の平吉は、客の歸つた跡、それ〲岡持をさげて「送り膳」を屆け、また角正よりきた器の整頓など、己れのする事にして片付けた。
父は仙造に「おみの内の嫁には法事つとめたしるしに、押型の菓子か何にこしらへて行けよ」と云ひ、仙造は「何になるでそんな物いらん」と答へた。

從兄の平吉の宅で。店の方に雜穀の箱、硝子蓋の一文菓子が見えて表ては小春日和。
おいへの爐端に、晝食に招かれた仙造と大阪の叔母と坐つた。仙造がこの甚の方よいと云うて、又仙造の子供時分の好物の强飯をせいろで蒸した。近所へ嫁入つたくり〲と丈夫相なお辰は今日も來て手傳つた。
平吉は例の在へ商ひに出て、平吉の嫁は――その支度は何もないで今年一杯糸挽きにいつてとつた物は本人の物とし

てそれで支度は造ると云ふことで嫁入つて來た——今は毎朝製糸場へ出て、留守であつた。

「あれもせいだいて商ひに出るけど、一向よう儲けんでなあ。運が惡いのか、かひ性がないのか」

おいへは高窓の明りがさして、さう云ふ平吉の母は萎んだやうに見えた。それは煙草ずきで煙管は手ばなさなんだ。

仙造は法事のあくる日、見舞に寄つてこの爐端で從兄よりいろ〳〵聽いた。今年は繭を買つて資本がうすいので持こたへられずに損をした。人のあづかり金を五十圓程つかひ込み、苦勞になつてをると云うた。云はれた仙造は實に無力で、只同情役であつた。

「おらもこんな姿で、早う死にやえゝと思つとるけど思ふやうにならんワイ」

其所の泣中風と云ふ病人は、火燵の上にぼろ〳〵涙をこぼいた。平藏叔父は博覽會見物に出たことが今は思出になつた。發病のとうさはまぢおいへの間に出て前の通る人に目を移したり、退屈しのぎの講談本など次ぎ〳〵讀む氣力があつたが、今は獨り奥の間にひきこもつてをる。食事は待遠しがる方だが、運動不足の顏などははれ、心持はボケたやうであつた。

奥の間は、裏の方の障子の硝子越しに、庭面には麓の桧苗の群が見えた。平吉の手作りの植木盆栽であつた。

大阪の叔母は食事のあと、その病人の傍にいつて曰うた。

「お前のことは心配はないで。内では、筆二郎は介抱せんかはりに葬式の入用は兄の手を借りないで筆二郎に一切何にさせやうと思うでな、これは平吉にも云つといておくれ」

俯向いた病人は合點々々で、涙聲でまた

「俺や筆二郎に逢ひたいワイ、たのむにあれを連れて來てくりよ」と曰うた。

「それはわても心得て、戻つたら内へよう云ひます」

「逢ひたうて〳〵、そればつかり思つとる」

さう二男のことを云つて泣いた。玆の母親も一日二日そばに居たらよいからと、それを賴むのであつた。

二人は薄田へ行つた。さびれた社務所であつた。

薄田は、籠二つの中に占治茸を買こんでゐた。仙造はその入れ物、この町で造るあじか籠は面白く思はれて薄田に取り寄せてもらつた。みやげ物の栗、茸の代をたづねて拂つた。庭さきの莚の上の干栗はその色になつた。

「みやげ物も調つたが、之は乘合自動車には持こめんゾ」

「おみ達は何日に立つかしらんが、前の日叔父様に荷造して運送屋へ屆けてもらへ」

そこの叔母さんは仙造に云つた。大阪の叔母は今日來た繁二郎の手紙に、留守居のお父さんは每晩外へ出て酒に醉つて歸らはる、と云ふ報せがあり良人の淋しさを思つて、それを云つて。

「わてが留守だと無駄づかひばかりするから早う戻らんならん」

と、そして仙造と二人「あさつての朝立つ」ことに定めた。

「京都でも待つて見えずで、いつまでも居れんワイ、なあ」薄田の叔母は仙造に曰つた。

薄田は社務所の大きい圍爐裡の勝手元の側に坐つて、大阪の叔母に向ひ

「ゆうべ平吉が來て云つたが」と前置して、薄田の保證人になるであれの商ひの資本に百圓かせてほしいことを申入れ

た。

それは三年前繁二郎の大阪に出た折りその親は三百圓持つて戻つて、亦去年のくれ平吉の嫁取には又出いた額もあつた。大阪の叔母は兎に角、戻つて内へ賴んで見ると云つた。

仙造は從兄の事を自分の父がと思はれたが父の氣質ではダメと思へて、仙造はこんな風に

「法事の次の日、××寺の方丈の御布施は一圓五十錢包んで持つてゆけと云はれたけど僕はそればかり恥しいと思つてえう行かなんだ」と云つた。

「さうか、俺やもつと少いかと思つて内々心配したが、お布施は一圓五十錢なら御膳も出たしこゝらあたりではそれで普通ぢや」

それから薄田は、父が近頃、抵當とつてゐてだまされて損をしたと云ふことを話して笑つた。

「そこの父樣は未だ相變らず氣强いから」

と、亦こんな話した。白山組で御輿倉を移轉して、御輿の修繕をやりそれを組内で指物をする「山信」に任せた。「山信」はその塗りは塗師屋のM、金具は向町のUにそれぞれやらせると云つた。MもUもこの町では仕事はよいが、また費用がはるので組の寄合の席では不服を云ふ者が出た。すると「山信」はそんならと云つて自分は手を退いた。「それで御輿は細工はおちるが安くて出來た、今の時世ではそれで當り前だろ、山信は一國で、そんな事でもきらはれるんぢやあ」と、薄田は云つた。

薄田はまた「おみやしんるいはどこも廻つたか、年寄一人おいといて行くんぢやで」と云つた。仙造はそれは昨日した。

それから友達の所へと仙造は腰を上げると、薄田は云つた。

「あさつて立つンなら、あすの晩に、よい芋があるでとろゝを拵へるから、他へ行かずに來てくりよ、うどんはたべるろ」

仙造は默頭いた。薄田はまだ器械打のできぬ時分向町で手打うどんを造つた。子供の仙造はその家の出格子の内によく簾のやうに掛けほされた物をみた。薄田は目の霞むようになつてそれはよく打てなかつた。

仙造は社務所の外へ出た。境内は今は公園の一部になつた。薄田は年寄つた失業者の一人であつた。こゝの神職會のなくなつてより今迄の雜小使の用はなく、また他にあてもない薄田は居のこつて、今は社務所の只の番人で、たまにある集會などの世話した。仙造はいろ〳〵の事は思はれた。

たつ前の日のひるすぎ、父は奥の座敷に居て、仙造はそこへいつた。毎日出歩いてこう悠くりする折りはなかつた。仙造はだまつて父と差向ひの猫火燵に入つた。今年初でそれは濕かつた。父は寢床でうしろの布團により掛つた風で居た。父は法事のあとまだ店の細工場に入らぬ。それは假初にしてゐた。

仙造は父に向いて、自分の聞かせる格別のことはないしまつで、目に立つやうな仕事も未だ。妻子のことは叔母も云つてくれたと思つた。當り前のことを云つた。今年火鉢一つかはうと思つた仙造は、父の造つた桐の火鉢は机邊に恰好で、さう云つて無心した。

父はうす笑で聽いて

「店の瓶掛はくれるで、一つ持つていけ」

と云つた。仙造はたやすいので、意外で、父は氣はやさしくなつたと思つた。次で仙造は云つた。

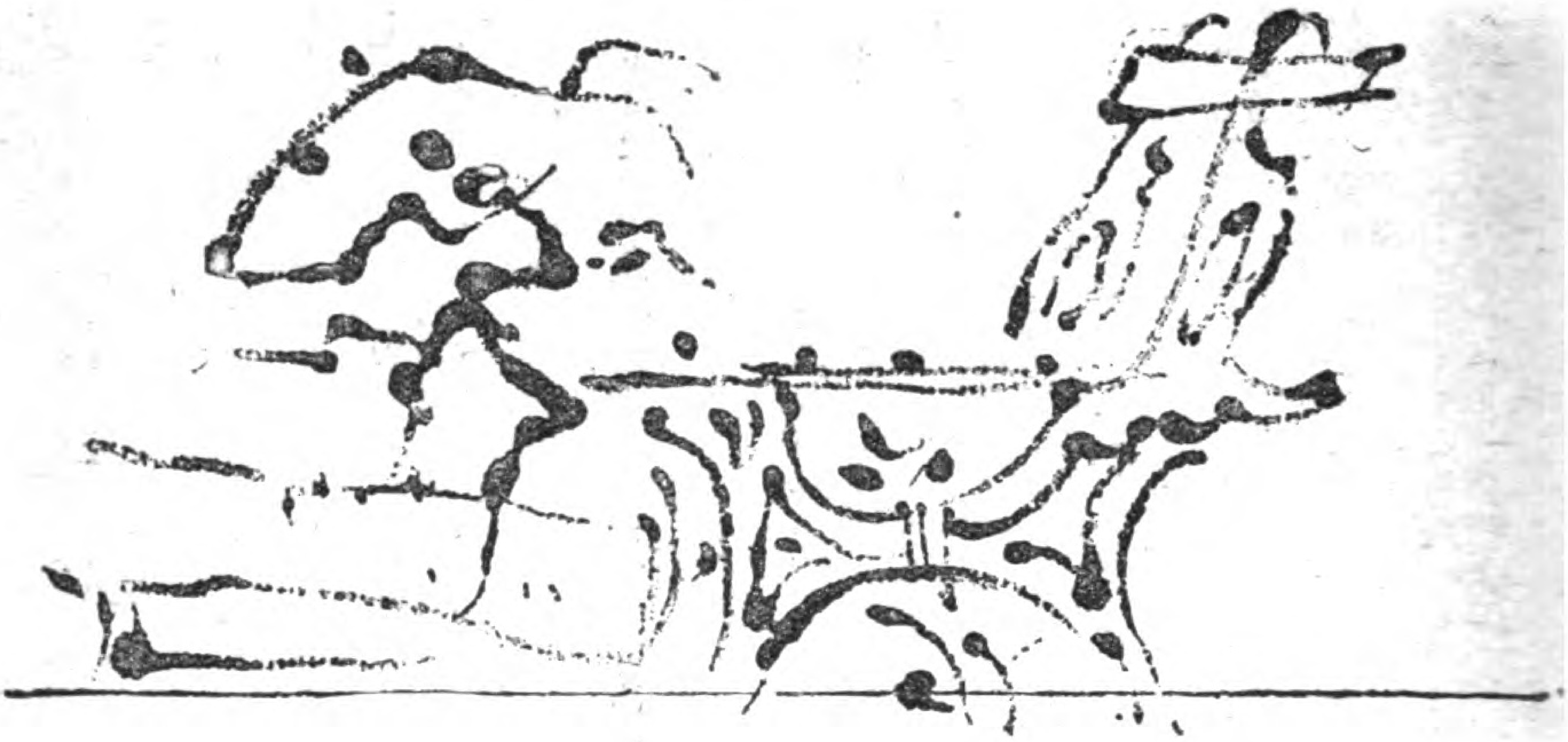
「おとつい、川原町でも守か何かと云はさつたが、よいをなご衆があれば來てもらつたらよいが、僕はよい人を世話し

てをくれと、川原町の小母様（父の從妹）にたのんでおいた」
「うん、よい人がありや賴んでもえゝ」
「その方がえゝ」
仙造は叔母と共にきてよかつた、もし一人なら男世帶のこんな忙しい内は參ると思つたので、父にをなご衆の事を云つた。之は大阪の叔母も贊成した。年寄つて一人と云ふことはあはれまれた。
町のいろ〳〵の噂に移つて、また肉親の事になつて、父は
「俺や人に厄介かけないやうに、七十のこの年齡になつても細工場へはいるが」
と云つてまた
「薄田は德を施してゐて平吉は人に同情されるで、あれで立つ」
とこんな風に云つた。仙造は、父は何とか仕樣と云ふかと思つたら、直接のことは云はなかつた。それは父らしかつた。さう思つて仙造は父を見た。
仙造は又、もう切り火燵のあつてよい時分で他の家にはある、その事を云つた。父は「おみ達が去つたら火燵開けようと思つとる」と云つた。

三

仙造は父と隔てゝ居るといろ〳〵と感傷はあつた。逢うと感傷はなかつた。上京した父は遠慮勝、國では父は威張つた。さう云ふ國の一人の年寄を見た、仙造は今は心丈夫であつた。父は今は雇ひ女をいれた。
仙造の机邊の父のくれた、手造りの桐の角火鉢は、父の氣分がよく出て、仙造はさま〳〵の事は思はれた。またこの火鉢は一見「ゲテモノ」と思はれた。

（十四年七月）



あぶらでり（三幕）

久保田万太郎

□

民治。死んだ力藏といふ大工の弟。（二十六七）
おみつ。力藏の女房。（二十七八）
おまき。おなじく母。（五十八九）
勝太郎。おなじく長男。（五つ）
茂八。力藏と民治の親方。（六十一二）
おつる。近所のもの。――藝妓。（二十三四）
おきみ。おつるの妹。（十一二）

□

東京。――淺草馬道町附近。

□

大正八年ごろ。

第一幕

民治の住居。

盆まへの、この二三日めつきり照りこんで熱くなつた日の夕方。（七時すぎ）――あたりの心もちにやうやくなじんだ燈火の下で、おみつ、盆までとうけ合つた急ぎのしごとの華奢な明石の單衣を縫つてゐる。――すこし離れて、おまき、勝太郎を寢かしつけてゐる。

布巾をかけた夜食の膳が壁によせて置かれてある。――岐阜提灯の影のほのかなあたりに近くのうちの蟲の音が、をり〳〵、手にとるやうにかよつて來る。――民治は、まだ、仕事さきからかへつて來ない。

間。

おまき。……………（勝太郎の寢入つたのをみさだめて、そつと、顏を上げる）

おみつ。寢ましたか？（縫ふ手をやめておまきのはうをみる）

おまき。……………（うなづく。――團扇をとつてあたりの蚊を拂つたりする）

おみつ。（うしろの柱の時計を見て）まだ七時半。――いつもより、さつと、一時間早ござんすわ。

おまき。熱かつたのに、今日は、晝寢もしなかつたから。

おみつ。あゝ、さうでしたね。――あつちへ連れて行きませうか？（針さしに針をさす）

おまき。いゝよ、まだ。――わたしがみてゐるから。

おみつ。さうですか？――ぢやア、すみませんけれど、もう少しで一くぎりつきますから……

おまき。（勝太郎の額の汗を拭きながら）あゝ、いゝとも……

おみつ。だけど、おつ母さん、あなたお腹がお空きになりやしませんか？

おまき。いゝえ……

おみつ。もし、何だつたら、おつ母さんだけさきへ喰つたら……？

おまき。いゝえ、わたしはまだほしくない。――わたしより、お前、もし……

おみつ。いゝえ、わたしはいゝんですの。――わたしは、あの、お隣からいたゞいた先刻の白玉で……（わらふ）

おまき。わたしだつて、お前、おんなじだよ。

おみつ。さうですか？――ぢやア、矢つ張、民次さんが返つてから一しよに……

おまき。さうしようよ。――もうかへつて來るだらうから。

おみつ。さうですね。――ぢやアもう少し待つて……

おまき。必と、何だよ、田原町さんへ廻つたんだよ。」

おみつ。さうかも知れません。

おまき。でなければ、こんなに遅くなることはない。

おみつ。さうですわね。

話、途切れる。――おみつ、また、縫ひはじめる。――おまき、また、團扇をとつて勝太郎の裾のはうの蚊を拂つたりする。

やゝ長き間。

格子のあく音。――つゞいて「今晩……」とやさしくいふのが聞える。

おみつ。どなた？

「わたしですわ」といひながら、おつる、葭戸をあけて心やすだてに入つて來る。――湯上りで、浴衣に麻の帶をしめ、うつくしく身じまひをしてゐる。

おつる。（おみつに）今晩は。

おみつ。あゝ、入らつしやい。

おまき。（しみ〴〵と）まア、綺麗……

おつる。小母さん、今晩は。

おつる。嫌ね。小母さん。――およしなさいよ。

おまき。いつだつて綺麗だけれど、今夜は、でも、とくべつに。――（おみつに）ねえ、お前……

おみつ。ほんとうですわ　おつるさん。

おつる。（何のこともなく）螢火のかげんでさうみえるんでせう。――あら、勝ちやんはもう、寝んね……？

おみつ。えゝ。

おつる。早いんですのね。――ぢやア、これ明日の朝のお眼覺。――つていふのはへんかしら？（わらつていひながら、買つて來た蟲の籠をそこへ出す）

おみつ。…………？

おつる。昨夜、勝ちやんと約束をしましたの。――うちにゐるやうなよく鳴くのをといふ御註文で…………

おみつ。まア。

おつる。松蟲ですのよ。（籠を燈火に透かしてみる）

おみつ。すみません、いつも…………

おまき。ほんたうに…………

おつる。いゝえね、いま、引つ張られて、廣小路へ行つて來ましたから。

おみつ。（ふつと思ひ出したやうに）あゝ、今夜は…………

おつる。草市。――お天氣だから人が出てゐますわ。

おみつ。どうかしてゐますわ、わたし。――今夜、草市つていふことを、すつかり忘れてゐましたわ。

おつる。忙しいとさうですわ。――わたしでもよくありますわ、さういふこと…………（わらふ）

おみつ。そんな忙しいほどのこともしてゐないんですけれど。――昨夜になつて、たゞ、玉屋さんからかういふいそぎのものが來たもんですから。（縫ひかけのものを見せる）

おつる。まア、いゝ柄…………

おみつ。あとにまだ、旦那の上布があるんですの。（わらふ）

おつる。大へんですわね。

おみつ。でも、平生いろ／＼にしていたゞいてゐますからね。

おつる。…………（うなづく）

おみつ。（おまきに）けど、おつ母さん、うちでもお精進さまのものを買ひに行かなくちやアいけませんね。

おまき。あゝ。――民次が返つたら、わたし、買ひに行つて來るよ。

おみつ。すみませんけど。

おつる。あら、民次さん、どこかへお出かけ？

おみつ。仕事からまだかへりませんの。

おつる。遲いんですのね、今日は？

おみつ。えゝ、いまもおつ母さんとさういつてたところ。――必と親方のところへでもよつたんでせう…………

（この間に、おまき、勝太郎のそばを離れて臺所のはうへ立つ）

おつる。（間。――しみ／＼と）だけど、わたし。――民次さんの眞似は出來ませんわ。…………

おみつ。…………？

おつる。（わらつて）いゝえね、こんなことをいふのは可笑しいんですけれど。――今度うちへかへつて來て、民次さんのすることをそばでみて、つく／＼わたし、自分のわがまゝなことが分りましたわ。

おみつ。（おなじく笑つて）そんなこと、あなた…………

おつる。いゝえ、ほんたうに。——昨夜も、わたし、女のくせにわたしは民次さんの半分も人情を知らない。——はつきりさう思ひましたわ。

おみつ。…………

おつる。昨夜、勝ちやんがうちにみえてゐるとき。——お湯に行くんで民次さんが窓のそとをとほりました。……

おみつ。えゝ。

おつる。と、勝ちやん、「叔父さん」といふかいはないにわたしの手を離して、持つてゐた知慧の輪も何も抛り出していきなり外のはうへ駈けて行きました。——と、民次さんも、通り越したのをわざ〳〵あとへ返つて「どうした、勝坊、今日は泣かなかつたか？」——さういつて、あの、平生でもめつたにわらつた顔をみせない民次さんが、心からうれしさうに、にこ〳〵しながら勝ちやんを抱くぢやアありませんか。

おみつ。…………

おつる。（わらつて）何でもないことなんです。——何でもないことなんですけれど、わたし。——こつちの心もちがこんがらかつてゐたせゐか、それをみたら、ふつと、眼のなかゞ熱くなりました。

おみつ。…………

おつる。お湯へ行くんだといつても、勝ちやん、どうしても一しよに行くといつて聞きません。——ぢやア、一とまはりして來るか。——さういつて、しやぼんと手拭をまるめて懐ろに入れ、さア、背中にまはんなと、あなた……

おみつ。…………

おつる。それから、わたしも、外へ出てぶら〳〵してゐると、間もなく電車通りのはうから民次さんかへつて來まし

た。――みると、勝ちやん、片つぽの手におもちやを持つたなり、民次さんの背中に顏を押つつけてもうぐつたりどしてゐます。――まア、いつのまにといふと民次さんはわらつて、罪はないよ……

おみつ。…………

おつる。うそに出來ることぢやアありませんわ。

おみつ。（しづかに）いゝえね、惡いくせがつきましてね。――ゐなければゐないで斷念めますけれど、ゐるときには、誰が何といつても、民次さんのそばでないと合點して寢てくれません。

おつる。でも、ようござんすわ。――お父さんがなくつたつて民次さんのやうな叔父さんがついてゐれば、勝ちやんはもう何にも心配はありませんわ。――こんなことをいつちア何ですけれど、力さんのゐた時分よりも、勝ちやんは、このごろのはうが顏の色艶がよくなり、み違へるやうにげんきが出て來たとうちのおつ母さんでもかげでさういつてゐます。

おみつ。死んだ人のことをいふこともありませんけれど。――うちの人は、どつちかといふと、子供の面倒なんかあんまりみないはうでしたから……

この間に、おまき、麥湯の冷やしたのをコップに入れて臺所から持つて來る。――茶簞笥のまへで砂糖を入れたりする。

間。

おまき。あんまり冷めたくないんですよ。（おつるのまへに置く）

おつる。あら、小母さん。――構はないで下さいよ。

おまき。（それにはこたへないで、二人の、その、それまでの話のなかに自分から入る）勝坊ばかりぢやアありません。――おみつでも、わたしでも。――民次がよくしてくれるんで、ほんたうにわたしたちは、おつうちやんのまへですけど仕合です……

おつる。それは、小母さん……

おまき。おつ母さんに聞いたでせうが、おつうちやん。――全く、一ところは、親子三人でどうなることだらうと思ひましたよ。

おつる。力さんは、また、急だつたんですつてね。

おまき。急にも何にも煩つたのはたつた二日。――三日目にはもういけなかつたんですから……

おつる。…………（痛ましさうにうなづく）

おまき、死にめにあへたのはおみつとわたしだけ。――前の晩おそくまでゐて、朝、出直して來た親方も間に合ひませんでした。――電報をみて直ぐにかへつて來た民次も間に合ひませんでした。

おつる。民次さんはそのとき？

おまき。三月ほどまへから上方へ行つてゐました。

おつる。上方へ？

おまき。えゝ、親方のはうの仕事の都合で……

おつる。あゝ……（うなづく）

おまき。で、まア、初七日。――二七日までは何のかの夢のやうに暮しました。――二七日たつと、いろ〳〵、あがき

のつかないことが後から〳〵と出て來ました……

おつる。それアね。

おまき。どうして行けばいゝのか。――誰をたよりにすればいゝのか。――勝坊を抱へてもう途方にくれました。――俺がついてゐる。――心配することはない。――と親方はさういつて下すつても、いつてみれば、力藏あつての親方ですもの。――さう〳〵親方の御厄介になれるものぢやアありません。

おつる。…………（うなづく）

おまき。さうでなくつても當人。――それまでに、その、親方のやさしいのにつけこむやうな義理のわるいこともしてゐます。――本來なら、あとに殘つたものが、その始末もしなければならないんです……

おつる。………

おまき。（しみ〳〵と）悪いお酒でしたからね。

おつる。でも、小母さん……

おまき。わたしは奉公に出てもすみます。――でも、おみつはさう行きません。――勝坊をみなければなりません……

おつる。…………

おまき。どんなことをしても。――どんな無理をしても勝坊だけはまんぞくに育てたい。――二十年もゐたところを離れるのは辛いけれど仕方がない。――田舍へでもどこへでも行つて時節の來るのを待たう。――なアに、わたしにだつて、まだ、使ひあるきぐらゐは出來る。――何をしてゞもお前の手助はする。――ほんたうに、おつうちやん、わたしはさういひました……

おつる。まア……(わらふ)

おまき。さう決めて、親方のところへそれをいつて行かうと思つてゐると、逆に、話があるから一寸來てくれ。――親方のところから急にさういつて來ました。

おつる。………………

おまき。何かと思つて行くと、親方が、「おつ母さん、まア、安心していゝよ。――力のあとは民がお前たちの面倒をみるといつてゐるから」……

おつる。………………

おまき。わたしには、すぐに、返事が出來ませんでした。

おつる。………………

おまき。民次にさうして貰へるくらゐなら心配はありません。――それが出來ないから。――出來ない義理があるから、おつうちやん、おみつもわたしも苦勞をするんです。……

おつる。………………

おまき。同胞といへば同胞。――子供の時分、たゞ一しよに育つたといふだけで、早くに親方の所へ引取られた民次です。――力藏は、民次に、何ごともしてゐません。あべこべに、あとで、迷惑をかけたことはあつても、兄らしいことを何一つしてゐるんぢやアありません。

おつる。力さんと民次さんでは。――氣立がまるで違ひますから……

おまき。さア、さうは思つても、わたしとしては民次にどうしてくれといふことは出來ません。――幾らなんでも、あ

んまりそれぢやア身勝手で……

おつる。…………

おまき。親方に、だから、いひました。——民次のさういつてくれるのは嬉しいと思ひますけれど、それではあんまり冥利に缺けすぎます。——「では、さういふことに」とはわたくしどもには申せません……

おつる。…………

おまき。と、親方のいふのに……

おつる。…………

おまき。それは、まア、固いことといへばさうだけれど、民次の料簡はもつと深いところまで入つてゐる。——兄きの仕打が惡かつたからといつて、あとに殘つた老母や小さいこどもを打捨つては置けない。——兄きの仕打が惡かつたといつてもそれは兄きの性分だ。——さういふ性分に出來てゐるんだから仕方がない。——人のいふほどに自分は思はない。——民次は、お前、かういつてゐる……

おつる。分つたお話ですわ。

おまき。で、まア。——とにかく當人に逢ふこつた。——當人に逢つて、よく……

眠つてゐた勝太郎、このとき、急に泣き出す。——おまきとおつる話を止める。——おみつ、起つて、そばへ行く。

おみつ。おゝよし〳〵。——よし〳〵……(抱きあげる)

間。勝太郎泣きやむ。——しづかにまた眠る。

おまき。夢でもみたんぢやアないか？

おみつ。さうかも知れません。（勝太郎の顔をのぞきこむ）

おまき。あつちへ寝かさうか？

おみつ。え丶さうしませう。

おまき。ぢやア床を……（立ちかゝる）

おみつ。いゝえ、わたしがしますから、その間、すみませんが坊やを……

おまき。あゝ、いゝよ。

　おまき、勝太郎をおみつから取る。――おみつ、そのまゝ奥の部屋へ入る。

おつる。（勝太郎の寝顔をしげ／＼みて）勝つちやんは眞實（ほんとう）におつ母さん似ですわね。

おまき。まへにはさうでもなかつたんですけれど。――このごろになつてだん／＼さうなりました。

おつる。………（うなづく）

おまき。顔ばかりでなくお腹（なか）もおみつに似てもらひたいと思ひます。

おつる。（さぐるやうに眼をふせて、ふと）あれは、え丶と……？

おまき。……………？

おつる。力さんの亡（なくな）つたのは、あれは、十月でしたかしら？

おまき。え丶、十月の二十三日……

おつる。さうでしたわ。――その十日ばかりまへに、わたし、柳橋から下谷へ行くことになつて二三日、やつぱり、今

度のやうにうちへ歸つて來てゐたんでした。

おまき。さうでしたかしら?

おつる。えゝ――わたし、それで、どこが面白くつて藝者なんぞしてゐるんだ。――おもてゞ逢つて力さんに叱られました。……

おまき。すぐさういふことをいふんですから……

おつる。で。――えゝ、さうでしたわ。――それから少し經つて、おつ母さんが下谷のうちへ來たとき、「お前、力さんが亡つたよ。」――さういふぢやアありませんか……

おまき。………………

おつる。驚ましたわ。

おまき。………………

おつる。そのときに民次さんのことを聞きました。――「でね、お前、出來ないことぢやアないか、力さんのないあとは民次さんが萬事引きうけてやるんだとさ」――分らずやのおつ母さんでもしみ〴〵さういつてゐましたわ。

おまき。古いおなじみだけにね、御近所でもいろ〳〵心配して下すつて……

おつる。………………

おまき。(ふと)でも、おつうちやん、思ふと嘘のやうな氣がしますよ。

おつる。何が……?

おまき。去年の草市の晩には、まだ力蔵が何のことなくつてゐたんですものね。

おつる。さういつたら小母さん。——世の中のことはみんなさうですわ。

　おみつ、奥の部屋から出て來る。——あけた唐紙のかげに蚊帳を釣つたさまがみえる。

おみつ。（おまきに）あつちへ連れて行きませう。

おまき。このまんまわたしが連れて行くよ。

おみつ。さうですか。

おまき。うごかして、また、起きるといけない。（そつと勝太郎を抱き直して立つ。——奥の部屋へ入る）

間。

　おみつ。もとのところにかへる。——一くぎりついたところであたりを片づけはじめる。

おつる。（蟲の籠を取上げてのぞく）鳴きませんわね。

おみつ。（わらつて）あかるいところぢやア無理ですわ。

おつる。（同じくわらつて）さうかしら？（籠を下に置いて）ですけどねえ、おみつさん……

　おつる。おみつに何かいひかけるときに「今晩は」と格子をあける音。——つゞいて「うちの姉さんあがつて居りますか？」といふのが聞える。

おつる。（わざと）ゐないよ。

おみつ。（そのはうを向いて）うそですよ、おきみちやん。——姉さん、ゐますからお上んなさい。

　おきみ、葭戸をあける。

おつる。（素つ氣なく）何か用？

おきみ。え〻、おつ母さんが……

おつる。「早くおかへり」かい？

おきみ。え〻。――お稽古を、あの……

おつる。（それにはこたへないで、おみつに）このごろは、毎晩、摑つて、お稽古ですの。（嘲るやうに）

おみつ。あ〻、さうのやうですね。――おつ母さんも久しぶりにおつるさんの清元が聞けるといつてよろこんでゐます。

おつる。（おきみに）さきへ行つて三味線を出してお置き。――いまかへるから……

おきみ。え〻。――（おみつに）小母さん、さよなら。

おみつ。明日、また、遊びにいらつしやいね。

おきみ。え〻。（葭戸をしめてかへつて行く）

おつる。（嘆息するやうに）藥をさしちやアくれません。

おみつ。でも、反つて氣が紛れていゝでせう。

おつる。厭ですわ。――うちに返つてゐるにはかへつてゐるだけの理由があります。……

おみつ。…………

おつる。わたし、もう、藝者をよさうかと思つて……

おみつ。まア、なぜです？

おつる。いつまでしてゐる稼業ぢやアありませんわ。

おみつ。…………

おつる。（氣をかへて）さア、行かう。――また來ますわ。（猪牙がゝりに立つ）

　おまき、奥の部屋から勝太郎を寢かして出て來る。

おつる。小母さん、ごめんなさい。

おまき。あら、おかへり？

おつる。えゝ。――お使者が立ちましたから……

　おつる。――土間に下りる――そのとき格子をあけて、民次、かへつて來る。

おつる。あら、おかへんなさい。

民次。（無愛想に）今晩は。

おつる。大へんに、今日は、ごゆつくりでしたのね。

民次。えゝ、一寸………

　その間に、民次、上にあがる。

おつる。お邪魔さま……

おみつ。どうも有難うございました。

おつる。いゝえ……（かへつて行く）

　間。

おみつ。おかへんなさい……

おまき。おかへり……

民次。たゞいま。（さして目には立たないが少し醉つてゐる）

おまき。遲かつたね、今日は？

民次。えゝ。──かへりに田原町へまはつたものですから……

おまき。（おみつに）そらね。──（民次に）必つとさうだらうといつてゐたんだよ。

民次。そこに土産があります。

おまき。おみやげ。

民次。今夜は、親方に前川を御馳走になりました。

おまき。前川を？──それは好かつたね。

おみつ、この間に浴衣を持つて來る。──民次、股引、はらがけをとる。

おみつ。すぐお湯に行くでせう？

民次。いゝえ、よします。

おみつ。でも。汗になつて氣味が惡かアありませんか？

民次。何だかもう臆劫だから……

おみつ。さうですか。

民次、おみつから浴衣をうけとつて着る。

民次。（そばにゐるおみつにいはないで、おまきに）おつ母さん勝はどうしました。

民次。…………（何かいはうとして時計のはうをみる。——そのまゝ默る）

おみつ。今日は晝寢をしなかつたもんですから、いつもより早くやすみました。

民次。さうですか。（三尺を結ぶ）

おみつ。折角おつるさんがこの蟲を持つて來て下すつたのに、寢てしまつて……

民次。…………

間。

おまき。（おみつに）ぢやア、わたしは、御飯を一ぜん喰べて草市へ行つて來るよ。

おみつ。さうですか？——ぢやア、お膳を出しませう。

間。

おみつ、夜食の膳をよきところに持ちだす。——臺所のはうから簀蓋をかけた飯櫃を運んで來たりする。

民次。（おまきに）その、持つて來た鰻をあけて喰べて下さい。

おまき。えゝ、御馳走さま……

おまきとおみつ、食事をはじめる。（うなぎの折には手をつけない）——民次、二人から離れたところに新聞をもつて來て讀む。

（舞臺にどこかつまづきのある心もちがながれる）

おつるの彈きはじめた三味線の音が隣から聞えて來る

間。

民文、新聞を捨てゝ、そのまゝ、仰向にころがる。――おまきとおみつ寂しく食事をつゞける。　（幕）

第二幕

舞臺、第一幕に同じ。――たゞ魂棚の清げにつくられたゞけがこと變つてゐる。――眞菰だの、ませがきだの、蓮の花の燈籠だの……

前まくより二日あと。――あぶらでりの午後。

おみつ、前まくの明石のつれの、上布の男ものに衿をつけてゐる。側に、おつる、どこかへの出かけとみえる拵へですわつてゐる。――おまきは、少しまへ、勝太郎をつれて買物に出てゐない。……

おつる。（前まくの鈴蟲の籠を手にとつて覗きながら）どうしてゞせう？――どうして鳴かないでせう？

おみつ。で、いくら、餌を入れてやつても食べませんの。

おつる。どうしてゞせうね？

おみつ。鳴かない／＼と坊やよりおつ母さんのはうが心配して……（わらふ）

おつる。そのくせよく鳴いてゐたんですのよ。貰つたときは……

おみつ。…………………

おつる。あとでうちへ持つて行つてみませうか。ためしに？――うちの、鳴くのそばへつれて行つたら、ことによつと誘はれて、鳴くやうになるかも知れませんわ。（籠を下に置く）

おみつ。さうですわね。――さうしたらいゝかも知れません……

おつる。うちのは、また、嫌になるほどよく鳴くんですもの。

おみつ。（わらつて）嫌になるほど……

おつる。いゝえ、ほんたうに。――宵のうちはさうでもありませんけど、夜が更けて、あたり近所がしづかになると、それは嫌になるほどよく鳴きます。――ほんたうに、もう、大ていにしてくれゝばいゝと思ふほど……

おみつ。…………………

おつる。うと／＼として眼をさまします。――と、暗いなかで、何にも知らず根かぎり、ありつたけの聲を出してないてゐます。――それを聞くと、もう、可哀さうのやうな、いぢらしいやうな。――身につまされてわけもなくわたしは悲しくなります。……

おみつ。(うなづいて) わたしのやうな田舍もの。――田舍で生れた、ものゝ何にも分らないものでも、夜、遲く、世間のしんとしたなかで蟲のいゝ聲にないてゐるのを聞くと、何といふこともなく子供の時分のことが思ひ出されて、われ知らず涙のこぼれるやうな氣になりますわ。(淋しくわらふ。――艶をつける)
おつる。けど。――どうしても、わたし、ほんたうと思へませんわ。
おみつ。(顏を伏せたまゝ) 何をです?
おつる。あなたが、いゝえ、田舍で……
おみつ。(笑つて) また、そんな。――噓をついたつて、おつるさん、仕樣がないぢやありませんか。
おつる。でも、どうみてもさう思へないんですもの。――どうしたつて東京の、それも生へぬきの……
おみつ。さういつて下さるのはおつるさんばかり……
おつる。あら、誰だつてさういつてゐますわ。
おみつ。(それにはこたへず。――しみ〴〵と) とき〴〵さう思ひますわ、わたし……
おつる。…………?
おみつ。こんな、わたしのやうなものでも、これでも東京で生れてゐたら、少しはものゝ道理も分り、人さまの被仰る ことでも、一と通りはさういふものか。――さうしたものかと理解も行くだらう。――思ふと自分がうらめしい。……
…………
おつる。…………
おみつ。といつたところで、いゝえ、さういふ不仕合にはじめから生れついたものが、いまさらどうなろものでもあり

ませんけれど。……

おつる。（わらつて）そんなことを、あなた……

おみつ。（まがほで）いゝえ、ほんたう。——ほんたうですわ。

おつる。………

おみつ。わたし、おつるさんに、わたしの小さい時分のことお話したことがありましたかしら。

おつる。いゝえ。

おみつ。田舎にゐた時分の……？

おつる。いゝえ。

おみつ。産んでくれたおつ母さんの顔をわたしは知りませんのよ。

おつる。ぢやァ早くおつ母さんに………？

おみつ。わかれた……といつても亡つたんぢやァありませんの。——わたしの三つのとき、わたしを置いて、うちを出てしまひました。

おつる。うちを出て……？

おみつ。うちの人たちの折合がよくなくつて自分から出たともいひますし、氣に入らなくなつてお父さんが無理から出したともいひますし、いろ／＼でそこはよく分らないんですけれど、西も東も知らないものをみす／＼あとに殘して出るといふのは、よく／＼のこつたらうと思ひます。

おつる。それはもう。——何かそれには理由があつたに違ひありませんわ。

おみつ。ですから、育てられたのはあとから來たおつ母さんに……

おつる。つまり繼おつ母さん……

おみつ。えゝ、まア、さうですけど。……（淋しくわらふ）――でも、わたし、ずつとあとまでさうと知りませんでしたの。――ほんたうのおつ母さんとばかり思つてゐましたの。……

おつる。…………

おみつ。ですからもう、わがまゝ一杯に、平氣でわたし世話ばかり燒かせましたの。――おつ母さんにしても生さぬ仲……といはれたくなかつたんでせう、我慢して、どんなやんちやでも、あいよ〳〵と聞いてくれました。

おつる。…………

おみつ。お父さんにすると義理があります。――ですから、そばで、眼にあまるとお父さんが默つてゐません。――どうしてお前はさうだ、どうしてさうお母さんのいふことが聞かれないんだ。――さういつては、わたしを掴へて、裏の物置へ入れて外から鍵をかけてしまひました。

おつる。まア。

おみつ。しますとね。――（わらつて）莫迦ですわね、わたし。――泣きくたびれて、そのまゝ、何にも知らず寢てしまひましたの、とき〳〵……

おつる。…………

おみつ。で、氣がついて眼をさますと、いつのまにかもう日が暮れてゐます。――戸の透きから、ぼんやり、月がさしてゐます……

おつる。誰もそれまで開けてくれないんですか？

おみつ。滅多なことをすればお父さんに呶鳴られます。――ですから、怖がつて、誰も手を出しません。――それは、お父さんと來たら、疳癪もちでしたから。……

おつる。…………

おみつ。そのうち、一人、おとうとが出來ました。――尤も、そのまへにも、女の子が一人うまれたんですけれど、この子は育たず、十日ほどで亡りました。――その時分から、いろんなことを聞いたりみたりして、だん〴〵、自分のほんたうのお母さんは別にある。――分らなくつてもいゝことがわかつて來ました。……

おつる。(しみ〴〵と)やつぱりねえ。……

おみつ。わたし、さう思ひます。――いまいつた生さぬ仲の、繼しい間のと、世間では親のはうばかりを目の敵にしていろ〳〵いひますけれど、決してそれは親ばかりが惡いんぢやアありません。――子供のはうにだつてつみはあります。

おつる。…………

おみつ。ほんたうのおつ母さんは別にある。――自分を生んでくれたおつ母さんは外にある。――さう思ひ出すと、育てられた義理も恩もそつち退けにして、顏も知らないおつ母さんのことばかりわたしは思ふやうになりました。――それこそ明けても暮れても。――たゞもうわけもなく……

おつる。…………

おみつ。思へば思はるゝ。思はなければさきだつて思つちやアくれません。――だん〳〵そのあひだの情愛がうす

くなります。――ほんたうに強情つたらない。……どうしてかう可哀げがないんだらう、この子は。――始終はさういふことになります。

おつる。それアね。……

おみつ。いま思つても、わたし、自分に顔の赤くなるやうな氣がしまた。――それは、ひねくれた、いぢ〳〵した、にくらしい……

おつる。…………

おみつ。うちのそばに、大きな、淋しい沼のやうなものがありますの。――赤ん坊をおぶはせられると、わたし、毎日その草の一ぱい生へた水の縁(みぎは)へ行つちやア泣いてゐました。――何がそんなに悲しかつたのか、考へてもそれは、まるで自分に分りません。……(わらふ)

おつる。それは、しかし、幾つぐらゐの……?

おみつ。十一二のときでした。

おつる。十一二?

おみつ。えゝ。……(思ひ出したやうに筵をにつける)

おつる。と、それから東京へ……?

おみつ。えゝ、それからぢき、十三の春でした、東京へ行つて奉公するんだ、急にさういはれて、その日すぐこつちへつれられて來ました。

おみつ。で、ずつとこつちに……?

おみつ。え、、はじめに行つた奉公さきが思はしくなくつて暇をとると、そのまんま、そのころ亀戸にゐた伯母のところに引取られて、今度はその伯母の手から外へ行くことになりました。――ですから、あとはもう伯母の厄介……

おつる。…………

おみつ。子供がなかつたもんですから、ほんたうの娘のやうに伯母は可愛がつてくれました。――奉公してゐたらさぞ不自由だらう、さういつちやア、着るものから頭のもの、身のまはりのいろ〳〵のものを、始終氣をつけて運んでくれました。――そんなにされるんで、こつちもついさういふ氣になつて……(わらふ)

おつる。無理はありませんわ、それは。――十三や十四で、あなた……

おみつ。…………(笹をつける)

おつる。田舍へは、ちやア、それつきり……?

おみつ。え、、二十になるまで、とう〳〵一度もかへりませんでした。――二十の春、奉公から下つて、そのとき七年ぶりではじめてかへりました。

おつる。七年ぶり……?

おみつ。自分でも、何だか、わがうちへかへつたやうな氣がしませんでね。――まるつきり勝手がつきません。――と晩泊ると、あくる日すぐにまた東京へ返つて來てしまひました。

おつる。ちやア、まるで……

おみつ。何しに行つたんだかわかりません。(わらふ)

おつる。…………

おみつ。（ふと嘆息するやうに）でも、いまになつてみれば、何もかもみんな夢のやうな氣がします。――伯母も死ねば、川合のおつ母さんもそれからぢき亡り……

おつる。あら、おつ母さんは……？

おみつ。亡りましたの。――一昨年、急に煩ひついて……

おつる。まア、それは。――でも、お父さんは……？

おみつ。えゝ、お父さんのはうはおかげと丈夫ですけれど。――でも、このごろは、やつぱり年で、すつかり氣が弱くなりました。――去年、うちのまだゐる時分、團體……つていふんですか、村の人たち大ぜいと大山へお詣りに來たとき、すこしの暇をみてたづねてくれましたけれど、いまぢやアもう、むかしの癇癪の角も折れたよ。――つく〴〵自分でさういつてゐました。……

おつる。…………

おみつ。おとうとに書かせてとき〴〵手紙をよこしますけれど、そのたんびに、勝をつれて早くこつちへ來たはうがいい、一人になつていつまで東京にゐることはない。――顔にかけて、始終、さういつて來ます。

おつる。淋しくつてやつぱり……？

おみつ。さうなんです。――それは、まア、年の行かないおとうと一人がたよりなんですから無理はありません。……

おつる。…………

おみつ。どうせいつか一度はかへらなけれアならないんですから、早くかへつて安心させたいとも思ひますけれど。――

――でも、[illegible]……

おつる。(わらつて)それア、でも。――それは駄目ですわ。
おみつ。駄目?
おつる。……ぢやアありませんか。――あなたと勝ちやんと田舎へ行つて、あと、おつ母さん一人を、あなた……?
おみつ。でも、いつまでさう民次さんの厄介ものでもゐられませんものね。(淋しくわらふ)
おつる。…………
おみつ。それはおつ母さんは好ござんす。――おつ母さんは好ござんすけれど、わたしだの、勝太郎だのはさうは行きません。――すこしは末のことも考へなければ。……
おつる。民次さんだつて、あなた、いつまで一人でゐられるものぢやアありませんし。――いゝ人をめつけて早く……身を固めなければ……
おつる。民次さんは、でも、心願があつてお内儀さんは持たない。――さういつて、話があつても　みんなそばから断つておしまひだといふぢやアありませんの。――うちのおつ母さんがさういつてましたけれど。……
おみつ。うそですわ。――わたしたちを兼ねてわざとさういふことをいつてゐるんですわ。――そのくらゐはわたしたちでも分ります。……
おつる。…………
おみつ。分るだけ、おつるさんのまへですけれど、わたしたちにすると辛ござんす。――それだけでも、わたし、早くいゝ人をめつけたいと思ひます。
おつる。…………

おみつ。ほんたうにおつるさん、ありませんかしら、いゝ人？
おつる。（言下に）ありますわ。
おみつ。御存じの方、あなたの？
おつる。えゝ。
おみつ。それは、どこの？——御近所の方ですか？
おつる。えゝ、御近所……（すこしわらふ）
おみつ。來て下さる方でせうか、その方？
おつる。さア、それは分りませんけれど。——わたしは、もう、その人にかぎると思ひますわ。
おみつ。………………（自分に心あたりをさがす）
おつる。分りません？
おみつ。えゝ。
おつる。いひませうか？
おみつ。えゝ。
おつる。……あなた。
おみつ。（さつと顔を染める。——が、それをまぎらす以上の冷靜さで）いゝえ、戯談でなく……
おつる。戯談ぢやアありませんわ。——ほんたうに、わたし……
格子あく。——「御免下さいまし」といふのが聞える。……

おみつ、返事をして立つ。――葭戸をあける。

おみつ。あゝ、玉屋さんの……

玉屋の使。(叮嚀に)昨晩御無理をおねがひいたして置きましたが、いかゞでございませうか?

おみつ。出來ましてございます。――もう少し經ちましたらお屆けいたします。

玉屋の使。お出來でございましたら、手前、頂戴してまゐりましても……

おみつ。いゝえ、こちらから持つてあがります。――旦那さまのはうの御寸法のことでうかゞひたいこともございますから。

玉屋の使。さやうでございますか。――では、かへりましてさう申します。

おみつ。どうぞ、――もう三十分もいたしたら伺ひますから……

玉屋の使。お邪魔いたしました。

おみつ。御苦勞さまでございます。

玉屋の使、かへつて行く。――おみつ、葭戸を閉めて、また、もとの座にもどる。

おつる。また、わたし、お饒舌してしまつて……

おみつ。かまひませんのよ。

おつる。でも、それ……(仕立の出來て置かれてある前掛の明石のはうへこなし)

おみつ。おつ母さんが歸つて來てくれなければどのみち出られません。――いゝえね、昨夜、また、お使で、上布のはうは遲れてもいゝから明石だけ早く。――無理をいつてすまないけれど明日の二時ごろまでにたのむ。――さういつ

こみえましたの。――どうかと思つて、それで心配してまたお使をよこしたんでせう。

おつる。あゝ、さう……

おみつ。お盆にかけてどこか凉しいところへでもお出掛なんでせう、お孃さん……

おつる。(蓮葉に。――といふことはふと嘆息するやうに)うらやましいねえ。

おみつ。(わらつて)でも、あなたどつて行からと思へば……

おつる。稼業してゐてどこへ行つたつてはじまりませんわ。――嫉ぢやアありませんか、人の機嫌氣褄をとつて……

おみつ。でも、わたしなんぞにすると、稼業してゐる方をまた、うらやましいと、ときぐ〵思ひますわ。

おつる。………?

おみつ。いゝぢやアありませんの、好き自由なことが出來て……

おつる。それは好き自由なことは出來ますわ。――何をしたつて、少々間違つたことをしたつて、藝妓だから仕方かない。――さういつてすましてくれます。――そこは堅氣にない有難いところです。――でも、そんなこと、有難くつたつて何の足しにもなりませんわ。

おみつ。いゝえ、おつるさん……

格子あく。――「へえ、たゞいま……」とおまきのいふのか聞える。

おつる。おつ母さんでせう?

おみつ。あゝかへつて來ましたっ(立つ)

おまき、勝太郎を背中にのせたまゝ入つて來る。

おみつ。おかへんなさいまし。――まア勝ちゃん、何ですね、おんぶなんかして……

おまき。往きには、でも、すつかりあるいたよ。(いひながら勝太郎をおろす。――勝太郎、手に買つて來た玩具をもつてゐる)

おみつ。熱かつたでせうに、そんな重いものを。――すみませんでした。……

おまき。でも、曇つてゐるだけ、あるいちやア今日は樂だよ。――(おつるをみて)おや、おつうちやん……

おつる。小母さん、いゝ氣になつてまたお邪魔してゐますわ。

おまき。えゝ〱、幾らでも。――今日はどこのおかへり……?

おつる。おかへりぢやありませんの、これからお出掛ですの。

おまき。どこへ?

おつる。えゝ、今日はね、下谷のうちともう一軒。――二三日まへからもう行かなくつちやアならないのを、臆劫だもんだからつい……

おまき。昨日や一昨日のやうな熱さぢやア誰しも臆劫になりますよ。

おみつ。(おまきに)おつるさん、蟲をお宅へもつて行つて、鳴くのゝそばへ置いてみようといつておくんなさいますの。

おまき。あゝ、さうかい。……

おつる。さうでもしたら、さそはれて、鳴くやうになるかも知れません。

おまき。折角ね、いたゞいたのに、鳴かないぢやアあなたにも惡いと思つて……

おつる。あらッ、わたしに悪いことはありませんわ。（わらふ）――わたしこそ、こんなのをもつて來ちやつて……

おまき。いゝえ、おつうちやん……

おみつ。（仕立もの〻鋏を取つて、このとき風呂敷につゝむ）わたし、おつ母さん、玉屋さんへちよつと行つて來ます。

おまき。あゝ、お屆けしに？

おみつ。えゝ。

おまき。何ならわたしが行つて來てもいゝよ。

おみつ。いゝえ、どうせ上布のはうの寸法のことがありますから……

おまき。上布のはうの？

おみつ。えゝ、褄下をいつも旦那のは七寸五分にしてゐるんですけれど、今度の寸法書には八寸としてあります。――間違ひか、それとも今度からさうなるのか……？

おまき。間違ひだよ、それは。……

おみつ。念のために、一遍、お内儀さんにうかゞつて來ますわ。

おまき。そのはうがいゝ。

おつる。そこまで、ちやア、一しよに……（立ちかける）

おまき。いゝちやアありませんか、まア……

おつる。いゝえ、もう行きますわ。――いゝ加減にお喋舌して置かないと行くのがまた嫌になります。

勝太郎、玩具で遊んでゐたのを止しておみつの側へ來る。――肩につかまる。

おみつ。(ふり返つて)どうするの?——一しよに行きたいの?
勝太郎。…………(うなづく)
おみつ。いま外からかへつて來たばかりぢやアないか?
勝太郎。…………
おみつ。すぐかへつて來るんだよ。——玉屋さんのお宅まで行くんだから。——いゝ子だから待つておいで。……
勝太郎。…………(かぶりをふつて離れない。)
おつる。連れてつてお上げなさいよ、行きたいんだから
おみつ。仕様のない人だね。——その代りおんぶは出來ませんよ、大切なものをもつてゐるんだから。
勝太郎。うん。(うなづく)
おみつ。(立ちながら)おつ母さん、かへりに買物は……?
おまき。さうね、八百屋へよつて來てくれると……
おみつ。何を買つて來ませう?
おまき。力蔵が好きだつたから、明日は、竿菼和をお精靈さまに拵へたいと思ふんだけれど……
おみつ。ぢやア　芋茎と、枝豆と……
おまき。それからお茄子がもうなかつたよ。
おみつ。……お茄子と。
おまき。それだけでよかつたと思ふけれど……

おみつ。ちやア、かへりに、横町へまはつて來ます。

おまき。すまないけど……

おつる。(蟲の籠を取上げて)ちやア、これ、持つて行きますわ。

おみつ。でも、これからどこかへいらつしやるのに？

おつる。うちへ一度よりますわ。わたし。――どうせハンケチをとつて行きますから。

おみつ。さうですか？

おつる。(時計をみて)ちよつと門までと思つたのが一時間。――もう一時半まはりましたわ。

おつるをさきに、おみつ。勝太郎を連れて土間に下りる。――格子をあけて外へ出る。――捨臺詞いろ〳〵…」

……

間。

おまき、一わたりそこらを片附けたあと魂棚のまへに立つ。――線香を上げる。

間。

臺所のはうで「今日はア。――毎度有難うございます」と、頓狂な、剽輕な感じにさういふのが聞える。――

返事をして、おまき、臺所へ魂棚のまへを離れる。

聲。……氷屋でございます。――コップをいたゞいてまゐります。

おまき。(間。――臺所で)……お代は？

聲。……お代はもう、民さんに、昨夜御一緒にいたゞきました。

おまき。……あゝ、さう。
聲。(間) 有難ウござい。
おまき。……御苦勞さま。
　間。―おまき、かへつて來る。――火鉢のまへにすわつて鐵瓶の下をみる。
聲。(窓のそとで) ゐるかね、おつ母さん……?
おまき。どなた? (立つて窓のそばへ行く) ――まア、親方。――さア――さア、どうぞ……(上り口のはうへいそいで窓の側を離れる)
　茂八、格子をあけて入つて來る。
茂八。毎日熱いこつちやアないか。――でも、みんな、かはりはないかい? (いひながら座敷にとほる)
おまき。有難う存じます。――おかげさまで、まア、今年はみんな……
茂八。それは結構だ。うちの内儀さんも、おみつさんでも、勝坊でも、平生みんな丈夫なはうぢやアないんだから、この暑氣を食つちやアたまるまい。――さういつて心配してゐたよ。
おまき、有難うございます。
茂八。(改めて) いや、この間はまた、はや〳〵と有難う……(盆the禮をいふ)
おまき。いえ、わたくしこそ先日は、お忙しいところへ上りましていろ〳〵御厄介になりました。――また、そのせつは、頂戴ものまでいたしまして……
茂八。たまに來たんぢやアないか。なぜもつと緩りするやうにいはなかつたんだ。――あとで内儀さんに小言をいつた

のよ。

おまき。とんだことを、あなた……

茂八。平生(ふだん)は、晝間、俺もゐなければ若い奴らもゐねえんだ。家中(うちぢう)もうガンガランだ。――馬道と田原町と、さしわたしにしたらもの丶十町と離れてゐねえんだから、勝坊をつれて、とき〲は遠慮なく出て來たらい丶んだ。

おまき。いえ、いつももう御無沙汰にばかりなつてをりまして、お詫のいたしやうがございません。――相濟まない、申譯がないと存じながら、つひ……

茂八。それだからいけねえ、――さうぎごツちなく考へるからいけねえんだ。……

おまき。へえ。

茂八。もつとざつくに來ねえ、ざつくに。――さうすれア何のこともねえんだ。(いひながら風呂敷を解いて水菓子の籠を出す)つまらないもんだが新盆だ。――佛さまへ、まア、みせるだけでも……(おまきのまへに置く)

おまき。(間。――しみ〲と)……おそれ入ります。――お心におかけ下さいまして……(叮嚀に頭を下げる)

茂八。それほどのもんぢやアない。――ほんのたゞ……

おまき。い丶え、何よりのものを。――有難う存じます。――御遠慮なく、では、頂戴いたします。

おまき、立つてすぐそれを魂棚のまへにそなへる。――鈴(りん)をならして手を合せる。……

おまき。(ゐどころにしづかに返りながら)ほんたうにいろ〲お世話さまになりまして。――力藏も、さぞ喜んでゐることでございませう。……(このあたりにて茶を汲んで出す)

茂八。(風呂敷を疊みながらあたりをみまはして)今日は、しかし、おみつさんは?

おまき。へえ、いま、表通りまで一寸つかひにまゐります。――すぐもう戻つてまゐります。
茂八。勝坊も一しよに？
おまき。へえ、一しよに喰ッついてまゐりました。――すぐだから待つておいでと申しましたんですが聞きませんで。
――もうおまやかし方題にして置きましたんでちつともいふことをきゝません。
茂八。それァ無理はないよ。――片親ないんだ。……
おまき。（さびしく）さう思ひますのでつい不憫がまさります。
茂八。（急に）だが　おみつさんのゐないのはちやうど幸ひだ。――實は、おつ母さん、この間の話だがね。……（すわり直すやうにする）
おまき。（さそはれて）へえ。
茂八。ぶつかつてみたよ、民次に。
おまき。（なかば不安げに）何と申しましたでせう。あれは？
茂八。いや、まア、そのまへにまだ話がある。……
おまき。へえ。
茂八。この間もいつた通り、この話は、おつ母さん、お前に聞くまへに俺のはうでも内々はもんしてゐた話だ。――出來たらこんないゝことはねえ、と、げんのうちの奴らにはさういつたこともある。――だから、お前が、もう半月いはずにゐたら俺のはうから、どうだ、おつ母さん、俺はかう思ふんだが。――必とさう切出したに違えねえんだ。

おまき。へえ。

茂八。しかし念には念を入れだ。――どこからまたどんな故障が出ねえとも限らねえ。――さう思つたから、あれから、それとなく、二三人、仲間のものにあたつてみた。――と、それアいゝ、結構だ、實は、俺も、さうすればと思つてゐたんだ。――みんなもう大贊成よ。――其奴は、と、首を傾げる奴は一人もねえ。

おまき。いえ、御近所の方でも、わたくしに、なぜ、おつ母さん、二人を一しよにしないのだ、民さんとなら打つてつけの緣ぢやァないか。――いろ〳〵さう被仰つて下さる方があるんでございます。――たゞおみつのはうの一つでも年の上なことが……

茂八。そんなことは何でもないぢやァないか。――年上の女房は世間にいくらだつてある。……

おまき。へえ。

茂八。一つや二つのことが、お前。――それにはおみつさんはあの姿色だ。――逆に三つや四つは若くみえる。――民とならんだつてちつとも可笑しかァねえ。

おまき。この間も申上げましたやうに、どうにもいたしてわたくし、このことだけは纏めたいと存じます。――外に、わたくし、何のもう望みもございません。――この話さへ出來ますれば、明日が日眼をつぶらうと、わたくし、安心でございます。……

茂八。それァ俺だつて安心だ。――民だつてさう〳〵、堅いからいゝわで、いつまで一人で置くわけには行かねえ。今年か、遲くも來年は、どのみち何か下職をめつけなければならねえ。――おみつさんにしたつて、いまのまんま、二十六や七の生若い身空で、いつまで後家を立てさせて置けるわけのものぢやァねえ。――何とかしなけれァならねえ。

と、こゝに、勝坊といふものがある。……

おまき。それでございます。

茂八。みず知らずのところへ連れつ子させてやるほど惨めなことはねえ。――先方は女房がほしいんで子供がほしいんぢやァねえ。……

おまき。へえ。……

茂八。民と一しよになれば、それが、おみつさんも勝坊も、よけいなそんな泣きをみなくつてすむ。――いまのまんま、母子が、苦勢の苦の字も知らずにわらつて暮せる。――こんな工合のいゝ話があるもんぢやアねえ。

おまき。親方さんのまへでございますけれど、全く、このごろのさまは極楽でございます。――ほんたうに、みんな、家中が毎日わらつてばかり暮してをります。――力藏のをります時分のことを思ふと夢のやうでございます。

茂八。うつかりしたことを佛さまのなかで聞いてゐるで。（わらつて魂棚のはうをみる）

おまき。よく、いゝえ、聞かせてやります。――力藏が今年、かうやつて、わがうちへかへつて來られるのも。――ほんたうならどこにも今年かへるところがないわけなんでございます。

茂八。手前が手鹽にかけたものを褒めるんぢやアないが、民は全く感心だ。洒落や戯談にとても出來る眞似ぢやアねえ。――ほんたうだぜ。……

おまき。（話をあとにもどす）……で、お話し下すつて。――何と申しましてせう、民次……？

茂八。さ、それだ、肝心は……

おまき。へえ。

茂八。一昨日だ、仕事のかへりに急ぐかときくといそがないといふから、ちやアといふんで前川へ引つ張つて行つた。——で、一杯のみながら、……といつたところで飲むのは俺だけだ。——民は喰氣だ。……

おまき。へえ。

茂八。ときに、民、女房をもらつたらどうだ。——俺はぶつけてかういつた。——どんな面をするかと思ふとぐつともしねえ。——貰つたつて仕方がありません。——ぶツきらぼうにいふんだ。……

おまき。へえ。

茂八。だつて、お前、お前だけになつていつまで一人でゐられるもんぢやアねえ、お前の年ならもう子供の一人や半分あるのがあたりまへだ。——お前はそれでいゝだらうが、側からみて、俺はいかにも氣がつかねえやうにみえる。——かういつたもんだ。……

おまき。へえ。

茂八。とね、そんなことをしたら兄貴のあとをみるのがおろそかになります。——といつたから、しめた。——さう思つて、どうだ、おみつをいつそ内儀さんにしねえか……？

おまき。へえ。

茂八。（わらつて）……いつたら、お前、民、顔のいろをかへたぢやアねえか。——技倆は癪に障るほどしつかりしてゐるが、人間は、まだ、からきし初心だぜ。……

おまき。…………

茂八。戯談いつちやアいけません。——それつきり何をいつてもうけつけねえぢやアねえか。

おまき。……………

茂八。假にも嫂だ。いまゝで姉さん〳〵といつてたやつを女房にしろといふんだから、民でなくつたつて、此奴は、氣がさしてすぐにはうんといへねえだらう。——だから幾らしやツちよこ張つたつてそれは安心だ。

おまき。へえ。

茂八。それにはたとへ內輪同士としたつて、民にすれば、人間一生一度のことだ。——初手からさう手つとり早くとんとんと運ぶわけがねえ。——この間は、たゞ、ほんのあらごなしをやつたばかりだ。

おまき。へえ。

茂八。ところでだ。——民のはうはいゝとして、さて、おみつさんはどうなんだ?——話がもう出來てゐるのかい、おみつさんのはうは?

おまき。いゝえ、まだ、おみつには話してございません。

茂八。ない?

おまき。へえ。——でも、これは、おみつにいなやのあるはずがございません。——それはもうわたくしが保證いたします。(淋しくわらふ)

茂八。さうは俺も思ふが……

おまき。義理といたしても、また、わがまゝの申せるわけがございません。

茂八。さ、その、義理つてことになるとそこに可笑しくねえものが出來る。——だから其奴はいひたくねえんだ。

おまき。へえ。

茂八。そんなものを持ち出さなくつたつて民ほどの人間だ。――素直で、正直で、無口でよ、それに人のいたはりがある。――これだけいつたつて力なんぞのくらべものにならねえ。――とんだ、此奴、仲人口だが、亭主にして決して不足はねえ。

おまき。いえ、おみつでも、心からよろこんで、たゞいまでも、民次の世話をいたしてをります。――力藏にそれこそいたしたとほりをいたしてをります。――それをみましても……

茂八。(うなづく)さう聞けば安心だ。――そのつもりで此方も話をすゝめる。――その代り、おつ母さん、おみつさんのはうはお前にたのむよ。

おまき。さういふことでございましたら、今日にでも、何と申しますか下話しを……

茂八。で、いよ〳〵となつたら、改めてまた俺から話す。――さういふことにしようぢやアないか?

おまき。さう願へますれば……

茂八。では、まア、それでよし、と……

おまき。この話がしかしほんたうになりましたら、勝坊が、まア、どんなによろこぶことでございませう。

茂八。あの男、それほど子供お好きとも思はなかつたが。――そんなに可哀がるかねえ、あの子を?

おまき。それこそ義理や、なさけでは出來ないことでございます。――わが子といつてもございません。……

茂八。分らねえもんだな。

おまき。へえ。

茂八。(急に)ちやア、今日は、これで俺はお暇だ。……(いそがしく立ちあがる)

おまき。まア、親方。――いまもうおみつもかへつてまゐります。

茂八。逢つて行きてえが、さうしてゐると遲くなる。――今日(けふ)は、この塞つた幾らか凌ぎいゝところで、これから二三げん、義理さばきをしてかへらうと思つてゐるんだ。

おまき。さうでございますか？

茂八。また來るよ。――どのみち來なくつちやアならねえんだ。

おまき。へえ。

茂八。かへつたら、まア、よろしくいつてくれ。(さつさと土間に下りる)

おまき。折角おいで下すつたのに何にもお構ひ申しませんで‥‥

茂八。なによ、お前(めえ)‥‥

間。

茂八、かへつて行く。

おまき、火鉢のそばにかへる。――茶道具をまとめて盆のうへにのせ、それを持つて臺所のはうへ行かうとする。――障子をあけると、そこに、いつかへつて來たのかおみつが茫乎(ぼんやり)立つてゐる。‥‥

おまき。まア、お前。――いつかへつて來たの？

おみつ。えゝ、いま。‥‥‥

おまき。ちつとも知らなかつた。――田原町の親分にお逢ひだつたらう？

おみつ。いゝえ‥‥‥

おまき。路次のところ位でお逢ひちやアなかつたかい?――お前が出るとしばらくしておみえになり、いましがた、ほんたうのいましがたおかへりになつたんだよ。

おみつ。(どこか力なく)あら、さうですか?――わたし、こつちの裏を拔けて來ましたから………

おまき。あゝ、それでだ。――勝坊は?

おみつ。きみちやんと遊ぶといつて聞きませんから、おつるさんのところへお願ひして來ました。

おまき。好きだね、あの子は、きみちやんが………

おみつ。ほんたうに。………

おまき、臺所へ行く。――おみつ、まへのゐどころにまたすわつて仕立ものを摸げる。

おまき。(間。――臺所で)いゝお茄子だね、お前………

おみつ。えゝ………

間。――ふと空虛な感じ………

「あまアい。――あまい、あまさけ……」と甘酒屋の外をとほつて行く。………

(幕)

第三幕

舞臺、前まくに同じ。たゞ、魂棚のかげはすでにない。——前まくより二日あと。曇つて陰氣な夕方。

おまきとおつる。いへば緊張した、安穏でない感じに二人だけでむかひ合つてすわつてゐる。

間。

「お迎へ〳〵おむかへ………」の聲遠く聞ゆ。

おつる。……けど、小母さん。——わたしにはどうしてもほんたうと思へませんわ。

おまき。………………(心弱く眼を拭く)

おつる。おみつさんがそんな。——おみつさんがそんなことをいふのさへわたくしにはうけとれませんわ。……

おまき。……(眼を拭く)

おつる。そんな筈はないんですもの。——わたし、——知つてゐますわ。……

おまき。それは、おつうちやん、わたしにしたところで。——夢にもそんなことをいはれやうとは……

おつる。…………

おまき。そんな返事を聞かうと思へば始めからいひ出しやアしませんでした。(眼を拭く)

おつる。けど、本心でほんたうにさういつたんでせうか？――そのときの場合で、つい。――よくありますわね、思つてもしないことを工合でつい言つてしまつたり、思つてゐることゝはまるで逆なことをいはなきやならなかつたり……

……

おまき。さう思ひましたから幾度もわたしも念を押しました。――外のことぢやアないんだから、お前、ほんとうのお前のお肚の中を聞かしてくれ。――そんなことはないだらうが、もし世間へキマリが悪いのか、力蔵にすまないのといふやうなことでさういふのだつたら、それはお前ごくの狭い考へといふものだよ。――お前のためばかりぢやアない、勝坊のため、わたしのためといふこともよく考へておくれよ。――さうまで、おつうちやん、わたしはいひました。……

おつる。…………

おまき。……聞いてくれません。――後生ですから、おつ母さん。――たゞもうさういふばかり……

おつる。…………

おまき。では、お前、民次が嫌ひなのかい？――とても民次ではつれ添つて行けないとでもお思ひなのかい？――さういふと、勿體ない、おつ母さん、民さんのやうな方と一しよになれゝば、女としてこれほどの仕合はありません。――

――はつきりさういひます。

おつる。…………

おまき。それなら、お前、何もいふところはないぢやアないか。——親方さんだつて心配してゐて下さる。——お前がそんなことをいつたらその心づくしがみんな水の泡になる。——お願ひだからうんといつておくれでないか。——ことを分けてかうもわたしはいひました。

おつる。…………………

おまき。……うんといつてくれません。

おつる。それでも？

おまき。しまひにはもう默つたきり、何といつても返事もしてくれません。（眼を拭く）

おつる。（間）小母さん、これには何かわけがありますわ。

おまき。さうだらうとは思ひます。——でなければ、あの平生の、素直な、優しいおみつに泪一つこぼさない所作の出來るはずがありません。

おつる。（半ば一人言のやうに）ありますわ。——必とあります。……

おまき。こんなことになると思へば、おつうちやんのまへですけど、何もそんなよけいなさりやくをすることはありませんでした。——構はずそつとさへして置けば、いつまでども、このまんま、わらつて何ごともなく暮して行けたんです。——それを思ふと……（いそいで、また、眼をふく）

おつる。さういつたつて、小母さん……（さそはれて同じく眼をふく）

おまき。かうなれば、いゝえ、おみつはもううちにゐないに決つてゐます。——必と、もう勝坊をつれて田舍へかへるといふにきまつてゐます。

おつる。…………

おまき。さうしたら、わたしだつて、このうへ民次の世話にはなれません。――一生奉公でも何でもして一人で暮します。

おつる。そんなことをいつて、小母さん、民次さんをどうします？

おまき。でも、おつうちやん、民次にわたしは合せる顏がありません。

おつる。民治さんは、でも、今度の經緯（ゆくたて）をよく……？

おまき。知りません。――それだけ、おつうちやん、いまゝで一年近いもの面倒みてもらつた手前……

おまき、泣く。――おつる、こたふるすべを失つてさしうつむく。

間。

格子あく。――おみつ、眠つた勝太郎を背中にのせて外からかへつて來る。――うちの中の、暗い、停滯した感じの空氣に觸れてさびしく無言。……

おまき。（……淚をかくして顏を上げる）おや、寢たのかい？

おみつ。えゝ。

おまき。…………（立つて押入から小さい蒲團と枕を出す。）

おみつ。すみません。……

おまき。どこにしよう？

おみつ。そこで結構です。

おまき、蒲團を敷く。――おみつ、勝太郎を下ろす。

おまき。(ふと)この子、お前、どうかしたんぢやアないか?

おみつ。えゝ、熱がすこしあるかと思ひますけど……

おまき。(勝太郎の額に手をあてゝみて)すこしどころぢやアないよ、お前、大分あるやうだよ。

おみつ。……………

おまき。先刻のじぶくり方がどうもいつもぢやアないと思つた。――昨日炎天干しになつたのが悪かつたんぢやアないかね?

おみつ。いゝえ、寝冷でもして……

おまき。寝冷をするわけはないよ、あんなによくお腹をくるんで寝かすんだもの……

おみつ。……………

おつる。(側へよつてとも〳〵額に手をあてゝみる)あゝ、隨分ありますわ。

勝太郎、うなされるやうに泣く。

おまき。よし〳〵。――おゝ、よし〳〵。……(抱くやうにする)

おみつ。
おつる。……………

おまき。(おみつ)これは、お前、氷で冷してやらうよ。

おみつ。それほどのことは、おつ母さん……

おまき。そんなことをいつて、いつかのやうに、また、引付けでもされたら……

おみつ。…………………

おまき。この子は、お前、腦があるんだものうつかり出來ない

おつる。今朝まで、あんなに、元氣よくしてゐたのに……？

おまき。えゝ、先刻まで機嫌よくいつものやうに遊んでゐたんです。——二時間ばかりまへから急にそれがじぶくり出して……

おつる。昨日はどこかへ……？

おまき。えゝ、昨日は、民次が連れて大森のはうまで遊びに……

おつる。あゝ、ぢやア、それで熱さに……

おまき。さうだと思ひます。——平生あんまり外へ出つけない子だから……

おつる。………………

おまき。わたし、買つて來るよ、氷を……（立つて臺所のはうへ行きかける）

おみつ。あゝ、おつ母さん、わたし買つて來ますよ。……

おまき。いいえ、いいよ。——お前がゐなくつて眼をさはすといけないから。——かへりに、それから、柳澤さんへまはつて來ますから……

おまき。臺所口から出て行く。

闇。

おみつ、おつる、ともに無言。――勝太郎、すや〳〵眠る。………

おつみ。………………(勝太郎の寝顔をしば〳〵みまもる)

おつる。おつみさん………

おみつ。…………………

おつる。いま………

おみつ。…………………?

おみつ。すつかり聞きましたわ、小母さんに……

おみつ。…………

おつる。聞かして下さいな、理由を?――どうして、あなた……?

おみつ。…………

おつる。必とあるんですわ、理由が。――さうに違ひありませんわ。――ねえ、どういふ理由か私にだけ……

おみつ。理由といつて、わたし………

おつる。いゝえ、駄目。――わたくしにさういつたつて、あなた……

おみつ。…………

おつる。知つてゐますわ、わたし。――あなたは民次さんが好きなんですわ。

おみつ。おつるさん……

おつる。いゝえ、駄目。――隠したつて駄目ですわ。――一昨日で、わたし、ちやアんと分りましたわ。

おみつ。…………………
おつる。稼業したものはね。そんなよけいなことばかり眼について……（さびしく愧ぢるやうに）
おみつ。…………
おつる。聞かして下さいな。――ねえ、聞かして下さいな。――あなたからいへないこと、わたしからいひますわ、小母さんに。――分るやうによくいゝますわ………
おみつ。…………
おつる。それア小母さんの心もちといつたら…
おみつ。すみません、おつるさん。――あなただからさう云つて下さるんです……
おつる。……………
おみつ。民次さんと一つしよになる。――それは、もう、願つたつてないことですわ。――このごろになつてなつて母さんの、うすうすさういふのを聞いて、どんなにわたし……
おつる。…………
おみつ。でも、これは勝手だと思ひました。勝手すぎると思ひました。――わたしにすれば、この上ないことでも、民次さんにすれば。――民次さんにずればどんな人が好きなんだか分りません。――始終、わたし、さう思つてゐました……
おつる。…………
おみつ。と、一昨日……

おつる。一昨日？

おみつ。えゝ。あなたと一しよに玉屋さんへ行くので外へ出ました。――あのあとです……

おつる。…………

おみつ。かへると田原町の親方がみえてゐました。――貰ひものを持つてゐましたから、臺所から上つて、障子をあけようとすると、ちやうど。――わたしの名前をいつてゐるのが耳に入りました。……

おつる。…………

おみつ。入りそびれて、聞くつもりもなく、その、親方とおつ母さんの話を聞きました。……

おつる。それは？

おみつ。いゝえ。民次さんとわたしを一しよにしようといふその相談です。――それを聞いて自分の始終思つてゐることがはつきりまた分りました。

おつる。…………？

おみつ。民次さんとわたしが一しよになれば、わたしも仕合、勝坊も仕合、おつ母さんも仕合。――だからと親方はさういひます。おつ母さんもさういひます。――けど、民次さんのことは、民次さんの仕合のことは何にもいひません。――わたしや勝坊は仕合になつても、さうなれば民次さんは……

おつる。けど……

おみつ。いゝえ、わたしのやうなものと、一生、あなた。――こんなわがまゝの出來ることつちやアありませんわ。

おつる。…………

おみつ。義理はいけない。義理なんかの絡むのはいけない。——親方は、また、さういひました。——でも、民次さんがこの話をもしうんといへば、それは義理で、ほんたうの義理づくでさういふんです。——外に何にもやりやアしません。

おつる。…………

おみつ。母子の路頭に迷ひかけたのを助けてくれた民次さんです。言葉に盡せないほどの恩義のある民次さんです。——その恩義のある人に、いくらわたしがものゝ分らない女でも、そんな仇で恩を返すやうなことは出來ません。……

おつる。けど、それアあなた……

おみつ。…………

おつる。それアあなたの思ひすぎですわ。

おみつ。…………

おつる。あなたは御自分のことからばかり割出して、民次さんのお腹の中を……

おみつ。（遮ぎるやうに）えゝ、思ひすぎですわ。——わたしの、えゝ。——わたしの思ひすぎですわ。……（半ば自分にいふやうに）

おつる。…………

おみつ。育てられたおつ母さんが、わたし……（ふと滲んで來た泪を押へる）

このとき格子のそとに、おきみ、おつるを呼びに來る。

おきみ。（聲だけ）姉さん、送り火をもう焚くんですからおかへんなさいつて……

おつる。あいよ、すぐかへるよ。

おきみ。（聲だけ）すぐですつて。……

おつる。あいよ、分つたよ。――（おみつに）わたし、また、晩に來ますわ。――晩に來て、また、よく……

おみつ。すみません。とんだ御心配をかけて……

おつる。それより、わたしのいつたことに、もし何か氣に障ることがあつたら勘忍して下さいね。

おみつ。そんなこと、あなた……

おつる、かへつて行く。

間。

おみつ、幌蚊帳をもつて來て勝太郎のうへにかぶせる。――あたりもう目にみえて暗くなつてゐる。――そのなかで、おみつ、激しく塞きあげて來る泪をとゞめ兼ねる。……

間。

格子あく。――民次、外からいそいでかへつて來る。

民次。嫂さん、勝がどうかしたつていふぢやないか？

おみつ。あゝ、おかへんなさい……

民次。どんな工合だね？――いま、氷屋で、おふくろに聞いたから、すぐかへつて來た……

おみつ。いゝえ、そんな、たいしたことは……

民次。でも熱が高いつていふぢやないか？――暗いのになぜ電燈をつけないんだよ。

民次、手を伸ばして電燈をひねる。――急によみ返つたやうに、あたり、明るくなる。――おみつ　泣いた顔をみせまいとする。

民次。寝てゐるんだね？（蚊帳のそばによる）

おみつ。えゝ。……

臺所におまきのかへつて來た氣配する。

「お迎へ／＼おむかへ……」の聲。――あかるくなつた燈火のなかにともらない岐阜提灯のかげが淋しい。…

………………

民次のうちの格子の前面。――前の場より二十分ほどあと。

おまき、おみつ、民次、三人で送り火を焚いてゐる。

間。

送り火、消える。――おまき　おみつ　うちのなかに入る。――民次、そのまゝ往來のはうへ行く。

間。

おつる　蟲の籠を持つて出て來る。

おつる（窓のそばによつて）おみつさん……

おみつ。…………（窓のところに來る）

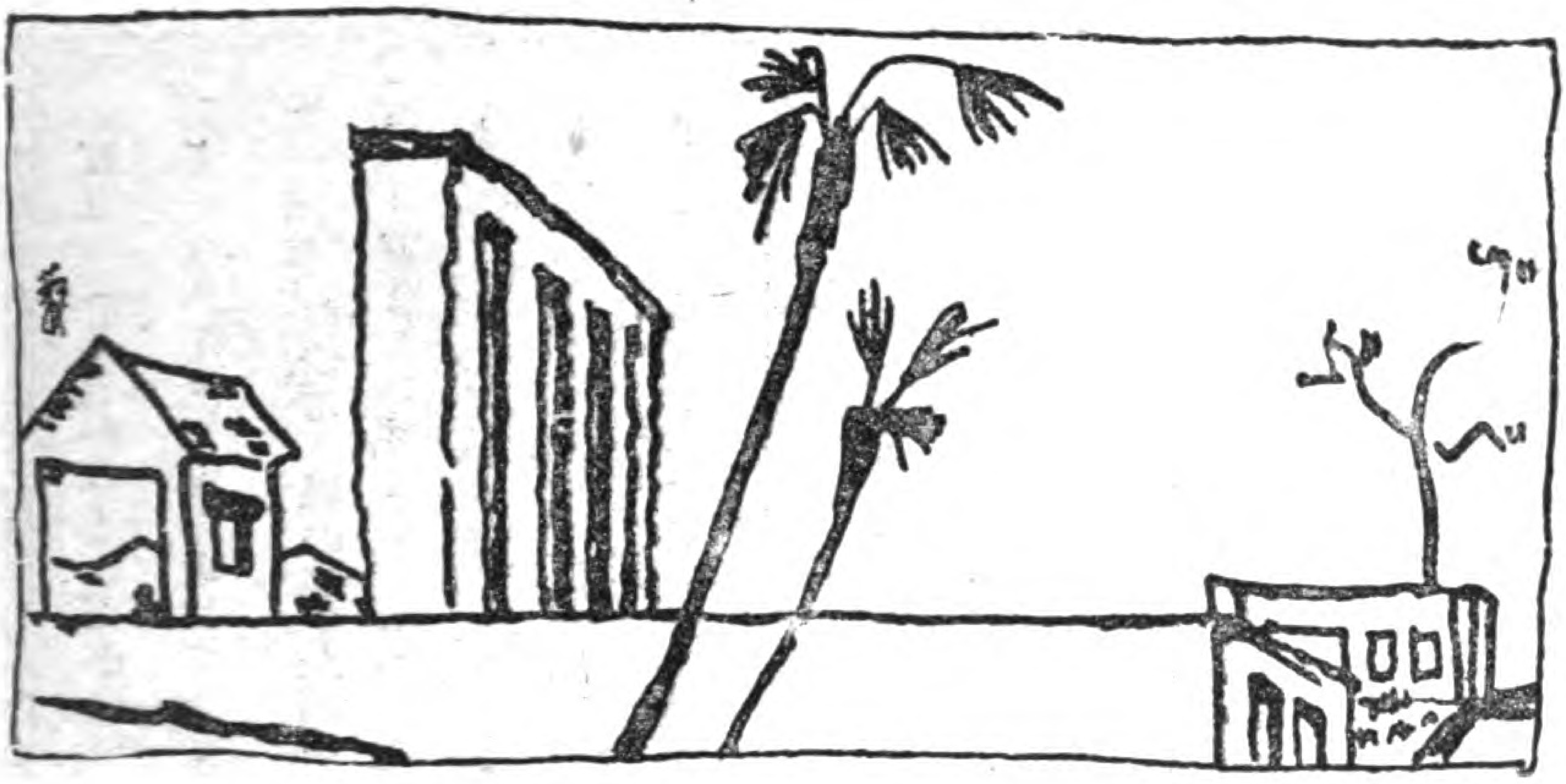
おつる。（蟲の籠をみせて）どうして鳴かないと思つたら、そのはずですわ　いつのまにか死んでゐんですもの。……

……………

（幕）

（大正十二年の九月、「鼠尾草（みそはぎ）」と云ふ表題でこの戯曲のはじめの幕だけをわたしは發表した。つゞいて十月に二幕以下を執筆すべき豫定であつたところ地震騒ぎのためにすべてがすつかり駄目になつた。今度あとをつゞけることになつたにつき改めてまたはじめの幕から書直した。さうしてこゝに纏めて發表した。新規蒔直しに改めてはじめから讀んで下されば有難い。　作者）

（十四年八月）



瑣事

志賀直哉

京都まで金を取りに行く、――――さう家には云つてある。が、それは嘘だ。奈良の銀行に金は來てゐる。然しさう云つて京都へ行く口實を彼は作らねばならなかつた。――――京都には妻に隱れて會ひたい人間がゐた。

俥に乘つて上高畑の友の家に行く。奈良の銀行は預金がなければとるのに保證人が要るかも知れぬといふ話で、その保證人に賴むつもりだつた。

「直ぐ行くから先へ行つてたまへ。却々手間どるから」

友のKはあとからオートバイで行くと云ひ、彼は一ト足先へ出る。公園をぬけて行く。鹿が澤山遊んでゐた。もう見物の人々でそこらは賑はつて居た。下りで俥は氣持よく三條通りを走つた。

「裏書きをして下さい。然し銀行渡しになつてゐますから、今直ぐと云ふわけには行きませんよ」

さう云はれた。

十時の汽車までに僅かしかなかつた。Kが來た。

「實は今日T君が來るんだが……」彼は苦笑した。四十越した彼は女のためにこんなにして友を煩はし、京都からわざ／＼出て來る友を承知で尙出かけずにゐられない自身を恥ぢる氣持で弱つた。皮肉を云ふ事の好きなKではあるが、Kはその時それを少しも出さないのを彼はありがたく思つた。彼はその日女と約束をしてゐたわけではなかつた。女は二十日までは來るなと云つてゐた。彼はそれを女の一種のヴァニティーだと解してゐた。彼が來ない事を他人に云はれた時、女は二十日まで來るなと自分が云つてある故に來ないのだと云ひたい爲めに、そんな事を云つたのだらうと解してゐた。實際彼は二十日までは出られさうもないと自身も思ひ、むかうも思つてゐた爲めに、むかうはさう云ひ、彼もそれを承知したのである。然し、彼は二三日前からその人間に甚く會ひたくなつた。夜不圖眼を覺ます。直ぐその人間の事が頭に飛びついて來る。そして離れない。彼は夜幾度か眼をさまし、その度、暫くはねつかれずにゐた。彼は二三日その寢不足から頭を疲らしてゐた。

兎に角、行かう。Tは十六七日に來ると云つてゐたのだが、彼は十六日とだけ聞き、昨日一日そのつもりで待つてゐた。そして來ないと分つてから十六七日と云つてゐたと云ふ事を聞き、今日でなければ十七日だと云ふ事を知つたが、心に決めた京都行きを一日延ばす事は氣持ちの上で容易でなかつた。

「どうしようかな」

「……」

「止めよう」

「……」

Kは默つて居る。Kはすゝめもせず、止めしもない。しかも少しも冷淡でない事を彼は嬉しく思つた。

「金はあるかい？」彼は自分の財布が汽車賃だけもあやしく、むかうから借りて來るのも厭な氣持から、さうKに訊いた。

「ないな…………いや、あるかな」

Kはポケットから財布を出して調べた。十圓札が四枚あつた。彼はその三枚を取つて、小切手をKに渡し、あとを頼んで俥に乘つた。

木津で牛乳を一トびん取つて三分の一程飲んだ。彼は手帳を出し、その日明け方に見た夢をそれに書いた。子供らしい樣な夢で、仕舞に赤い一團の炎が自分の懷に飛込む所で驚いて身を反らし、（實際床の中で烈しく身を反らして）眼を覺ました。その夢を初めから書いた。一時間程かゝつた。

外國人が四人――その一人は女――が乘つてゐて、よく喋り續けた。函根宮の下の多分寫眞屋だらうと思ふ男が、それらの外國人に話しかけ、色々な事を説明して居た。

京都で降りると彼は直ぐ東山の宿へ行つた。宿の女將は驚いたやうな顏をして、今朝彼が此長火鉢の傍に坐つてゐる夢を見た。朝の夢は當たると云ふが不思議なものだと云ひながら、起つてその人の家に電話をかけた。

「嵯峨の？　ふん、嵯峨の何どす？　ツキキ亭？　ふーん。――電話の番號お知りしまへんか？――……――さうどつか…………」

居ないといふ事が分つたが、彼は別に落膽もしなかつた。電話を斷つて、女將は火鉢の向ふに坐り、煙管を取上げ、「嵯峨のツキキ亭いふたら何所やろ。あまり聞かん名やな。」と云つた。

「そりやあ、奈良の月日亭だらう」

「そやろか。――あゝ左うかも知れまへんえ」

女將は又起つて電話をかけ直した。矢張り奈良の月日亭だつた。彼は笑つた。無理算段をして來て見れば、行き違ひに奈良にいつて居る事が腹から可笑しかつた。

「〇〇さんとお客さんと九時十何分たらいふので行つた、いふてどしたえ。てれこやな」女將もそれ程氣の毒がる風はなかつた。

「それは九時五十分發だ。僕は十時に奈良を出たのだ。君が夢を見て呉れても肝心のお清さんが見なければ何んにもならない」

「ほんまに。お門違ひや」女將は甲高い聲で笑つた。彼も一緒に笑つた。

「そんなら歸る」

「ほんまに、つまらん事どしたな。ほしたら何日おいでやす」

「あした來よう」

「あした。屹度來ておくれやしや。矢張り今頃どすか」

「今頃。――若しかしたら一寸寄る所があるから三十分位遲れるかも知れない」

「…………然し歸りは何時になるやろな」

「今直ぐ電話をかけても五時でなくちや歸れないね」

「ふーん」

「奈良へ歸つて電話をかけてやらうかな」

「男はんの聲やつたら、お淸どんの事どすさかい、困らはるかもわかりきへんえ。誰れぞ女御はんの聲でかけてお貰ひたらえゝ」

「そんな事、賴む奴はないよ」

彼は直ぐ奈良へかへる事にした。左うすれば久しぶりで什ふTともゆつくり會へるし、若し又道で一寸でもあの人間に會へれば自分は滿足出來る氣持になつてゐた。彼は自身が案外その女を愛してゐる事を感じ、愉快に思つた。

その家を出て、町で一寸買物をして、直ぐ京都驛から一時半の汽車にのつた。汽車の中で讀むつもりで買つて來た飜譯本を讀む。直ぐ眠むくなつて彼は眠つた。長池あたりで眼を覺ます。同じ客車に六十近かい半白の老人とその細君らしい二十三四の眉毛を剃落した女とがゐた。その二人と彼と、他に、片眼にすつかり繃帶をした若い男とが居た。

細君は大柄な體格からいつて、彼のお淸に似てゐた。然し印象的に來るその性質は全く異つて見えた。お淸には男のやうな所があつた。彼との關係で自身が冷淡であるといふ事を他に見せたい氣があつた。自身は何とも思つて居ない。が、彼が自分を好いて居るのだ。かう云ひたい氣があつた。「えらさうな顏して、すかんたらしい人やと思ふた」こんな事を云つた。「思ふて、それでどうしたんだ」と彼が云ふと、その女は返事をしなかつた。

彼は女の自分に對する言葉や動作を女の自分に對する氣持と見るよりは女の性格として見る傾きがあつた。これは彼が既に年寄らしい心境に入りかけた事を語るものだつた。彼には或る子供らしさも殘つてゐたが、或る事には自分でも思ひがけなく年寄染みた余裕を持てる事がよくあつた。彼は今年四十三才だつた。その女は今年二十才だつた。然し外

見は二十五六才に見える女だつた。

客車の中で見た女がお清とはかなり異つた態度でその年寄つた男に對してゐるのを彼は興味を持つて眺めて居た。女の氣持は絶えず老人の氣持を追つて居た。恰も忠實な飼犬がその主人から眼を離さないやうに絶えず何らかの注意を拂つて居た。

彼の想像によれば老人は近かく年寄つた妻に亡くなられた。そして老人は家にゐた善良な若い女中と關係した。それが今の若い細君である。こんな事が考へられた。七分通り此想像は當つてゐさうな氣がした。

若い細君が頻りに何か話しかけるのに老人は言葉少なに應じながら、その眼で女をいたわつてゐた。細君は良人としてよりも父として甘えるやうな氣持を見せながら絶えず老人に注意してゐた。見て、いぢらしい氣がした。

奈良でその夫婦は降りた。彼は二人より先に改札口を出た。

停車場前の茶店から月日亭に電話をかけて見ようか、どうしようか、一寸彼は迷つて居た。が、不圖若しかしたらTが此汽車で來はしまいかといふ氣がしたので、其所に立つて出て來る人々を少時ながめてゐた。

向ふからTがいつもの癖で幾らか身體を左右に揺する加減にして人々の間を縫つて來るのを見ると、彼は矢張りその豫感があつたと思つた。

二人は込合ふ三條通りを話しながら歩いた。彼は今日の京都行きを正直にTに云ふのが面倒な氣がした。それで「一寸用があつて……」とか、「銀行まで用があつて……」など曖昧に云つた。

彼は歩きながら又、若しかしたらお清にも會ふかも知れないと云ふ氣がして居た。

「近いのは此方から行くのが近いんだが、眞直ぐにいつて見ようか。――それが一番分かり易い道なんだ」彼が此

地に引移つてTは初めて來たのだ。

猿澤の池から石子詰めの舊蹟と云ふ所を通り、一の鳥居の近くまで來ると、果して、彼はむからから〇〇とお淸とその客らしい男の姿を認めた。第一にお淸がいつも見るとは遙かに醜い顏をしてゐる事に一寸驚いた。變に角張つた、ゆがんだやうな不愉快な顏をして居た。傘なしに西日を受けてゐた爲めかも知れないが、兎に角それは醜い顏だつた。道傍の鹿の角きりの玩具を賣る大道店のその玩具を見ながら歩いてゐる。

客は〇〇の關係者であらうと彼は思つた。夏外套を着た若い男で、〇〇と何所か似た所のある顏をしてゐた。その客だけが見てゐる彼の力を一寸見たが、お淸も〇〇も全く彼には氣づかずにゐた。彼と並んで歩いてゐるTも何事も氣づかぬ風だつた。

彼は女が奈良に來た事に何かしら自分のゐる土地故といふ氣でもありさうな氣がしてゐたが、お淸のその顏を見ると、それが自分の馬鹿々々しいイリユージョンだといふ事を想はされた。お淸に多少でも彼のゐる土地といふ氣があれば彼との僅か二三間のへだたりの此擦違ひを見逃す筈はないと思はれた。お淸にはさういふ氣はなかつたのだと彼は思ひ、腹で苦笑した。が、それはお淸の冷淡からか、それとも彼女の氣持にデリカシーがない爲めか何方かと思つた。兩方だらう。少なくも冷淡ばかりではないだらうと考へ、彼は腹に苦笑した。

然し如何に醜い顏にしろ、さゝやかなるイリユージョンを破られたにしろ、彼は彼女に會つたといふ事だけで至極滿足してゐた。

「此所から曲つて行からか………」彼は現金に擦違ふと直ぐ云つた。そして一の鳥居から曲り、四季亭の下から、樂土の辭について行く時には我ながら可笑しい程快活な氣分になつて、此間共所の鷺池で活動のロケーションがあり、強い若侍に投込まれた惡者の一人が本氣に溺れかけた事をさも面白可笑しく話しながら歩いてゐた。



死後

芥川龍之介

……僕は床へはひつても、何か本を讀まないと、寢つかれない習慣を持つてゐる。のみならずいくら本を讀んでも、寢つかれないことさへ稀ではない。かう言ふ僕の枕もとにはいつも讀書用の電燈だのアダリン錠の罎だのが並んでゐる。その晩も僕はふだんのやうに本を二三冊蚊帳の中へ持ちこみ、枕もとの電燈を明るくした。

「何時？」

これはとうに一寢入りした、隣の床にゐる妻の聲だつた。妻は赤兒に腕枕をさせ、横にこちらを眺めてゐた。

「三時だ。」

「もう三時。あたし、まだ一時頃かと思つてゐた。」

僕は好い加減な返事をしたきり、何ともその言葉に取り合はなかつた。

「うるさい。うるさい。默つて寢ろ。」

妻は僕の口眞似をしながら、小聲にくすくす笑つてゐた。が、暫くたつたと思ふと、赤子の頭に鼻を押しつけ、いつかもう靜かに寢入つてゐた。

僕はそちらを向いたまま、說教因緣除睡鈔と言ふ本を讀んでゐた。これは和漢天竺の話を享保頃の坊さんの集めた八卷ものの隨筆である。しかし面白い話は勿論、珍らしい話も滅多にない。僕は君臣、父母、夫婦と五倫部の話を讀んでゐるうちにそろそろ睡氣を感じ出した。それから枕もとの電燈を消し、ぢきに眠りに落ちてしまつた。

夢の中の僕は暑苦しい町をSと一しよに歩いてゐた。砂利を敷いた步道の幅はやつと一間か九尺しかなかつた。それへ又どの家も同じやうにカアキイ色の日除けを張り出してゐた。

「君が死ぬとは思はなかつた。」

Sは扇を使ひながら、かう僕は話しかけた。一應は氣の毒に思つてゐても、その氣もちを露骨に表はすことは嫌つてゐるらしい話しぶりだつた。

「君は長生きをしさうだつたがね。」

「さうかしら?」

「僕等はみんなさう言つてゐたよ。ええと、僕よりも五つ下だね」とSは指を折つて見て、「三十四か? 三十四ぐらゐで死んだんぢや、——」それきり急に默つてしまつた。

僕は格別死んだことを殘念に思つてはゐなかつた。しかし何かSの手前へも羞かしいやうには感じてゐた。

「仕事もやりかけてゐたんだらう?」

Sはもう一度遠慮勝ちに言つた。

「うん、長いものを少し書きかけてゐた。」
「細君は？」
「達者だ。子供もこの頃は病氣をしない。」
「そりやまあ何よりだね。僕なんぞもいつ死ぬかわからないが、……」
僕はちよつとSの顔を眺めた。Sはやはり S自身は死なずに僕の死んだことを喜んでゐる、――それをはつきり感じたのだつた。するとSもその瞬間に僕の氣もちを感じたと見え、厭な顔をして默つてしまつた。
暫く口を利かずに歩いた後、Sは扇に日を除けたまま、大きい罐づめ屋の前に立ち止つた。
「ぢや僕は失敬する。」
罐づめ屋の店には薄暗い中に白菊が幾鉢も置いてあつた。僕はその店をちらりと見た時、なぜか「ああ、Sの家は青木堂の支店だつた」と思つた。
「君は今お父さんと一しよにゐるの？」
「ああ、この間から。」
「ぢや又。」
僕はSに別れてから、すぐにその次の横町を曲つた。横町の角の飾り窓にはオルガンが一台据ゑてあつた。オルガンは内部の見えるやうに側面の板だけはづしてあり、その又内部には青竹の筒が何本も竪に並んでゐた。僕はこれを見た時にも、「成程、竹筒でも好い筈だ」と思つた。それから――いつか僕の家の門の前に佇んでゐた。
古いくぐり門や黒塀は少しもふだんに變らなかつた。いや、門の上の葉櫻の枝さへきのふ見た時の通りだつた。が、

新らしい標札には「櫛部寓」と書いてあつた。僕はこの標札を眺めた時、ほんたうに僕の死んだことを感じた。けれども門をはひることは勿論、玄關から奥へはひることも全然不德義とは感じなかつた。

妻は茶の間の緣側に坐り、竹の皮の鎧を拵へてゐた。妻のゐまはりはその爲に乾反つた竹の皮だらけだつた。しかし膝の上にのせた鎧はまだ草摺りが一枚と胴としか出來上つてゐなかつた。

「子供は？」と僕は坐るなり尋ねた。

「きのふ伯母さんやおばあさんとみんな鵠沼へやりました。」

「おぢいさんは？」

「おぢいさんは銀行へいらしつたんでせう。」

「ぢや誰もゐないのかい？」

「ええ。あたしと靜やだけ。」

妻は下を向いたまま、竹の皮に針を透してゐた。しかし僕はその聲に忽ち妻の譃を感じ、少し聲を荒らげて言つた。

「だつて櫛部寓つて標札が出てゐるぢやないか？」

妻は驚いたやうに僕の顏を見上げた。その目はいつも叱られる時にする、途方に暮れた表情をしてゐた。

「出てゐるだらう？」

「ええ。」

「ぢやその人はゐるんだね？」

「ええ。」

妻はすつかり悄氣てしまひ、竹の皮の鎧ばかりいぢつてゐた。

「そりやゐてもかまはないさ。俺はもう死んでゐるんだし、――」

僕は半ば僕自身を說得するやうに言ひつづけた。

「お前だつてまだ若いんだしするから、そんなことは兎や角言ひはしない。唯その人さへちやんとしてゐれば、……
……」

妻はもう一度僕の顏を見上げた。僕はその顏を眺めた時、とり返しのつかぬことの出來たのを感じた。同時に又僕自身の顏色も見る見る血の氣を失つたのを感じた。

「ちやんとした人ぢやないんだね？」

「あたしは惡い人とは思ひませんけれど、……」

しかし妻自身も櫛部某に尊敬を持つてゐないことははつきり僕にわかつてゐた。ではなぜさう言ふものと結婚したか？それはまだ許せるとしても、妻は櫛部某の卑しい所に反つて氣安さを見出してゐる、――僕はそこに肚の底から不快に思はずにはゐられぬものを感じた。

「子供に父と言はせられる人か？」

「そんなことを言つたつて、……」

「駄目だ、いくら辨解しても。」

妻は僕の怒鳴るよりも前にもう袂に顏を隱し、ぶるぶる肩を震はせてゐた。

「何と言ふ莫迦だ！　それぢや死んだつて死に切れるものか。」

僕はぢつとしてはゐられない氣になり、あとも見ずに書齋へはひつて行つた。すると書齋の鴨居の上に鳶口が一梃かかつてゐた。鳶口は柄を黒と朱との漆に卷き立ててあるものだつた。誰かこれを持つてゐたことがある、——僕はそんなことを思ひ出しながら、いつか書齋でも何でもない、枳殼垣に沿つた道を歩いてゐた。

道はもう暮れかかつてゐた。のみならず道に敷いた石炭殼も霧雨か露かに濡れ透つてゐた。僕はまだ余憤を感じたまま、出來るだけ足早に歩いて行つた。が、いくら歩いて行つても、枳殼垣はやはり僕の行手に長ながとつづいてゐるばかりだつた。

僕はおのづから目を覺ました。妻や赤子は不相變靜かに寢入つてゐるらしかつた。けれども夜はもう白みかけたと見え、妙にしんみりした蟬の聲がどこか遠い木に澄み渡つてゐた。僕はその聲を聞きながら、あした（實はけふ）頭の疲れるのを惧れ、もう一度早く眠らうとした。が、容易に眠られないばかりか、はつきり今の夢を思ひ出した。夢の中の妻は氣の毒にもつまらない役まはりを勤めてゐる。Sは實際でもああかも知れない。僕も、——僕は妻に對しては恐しい利己主義者になつてゐる。殊に僕自身を夢の中の僕と同一人格と考へれば、一層恐しい利己主義者になつてゐる。しかも僕自身は夢の中の僕と必しも同じでないことはない。フロイドは——僕は一つには睡眠を得る爲に、又一つには病的良心の昂進するのを避ける爲に〇・五瓦のアダリン錠を嚥み、昏々とした眠りに沈んでしまつた。……



戯曲　父親

山本有三

一、

山の手の閑雅な隱宅の居間と茶の間。茶の間から一方は玄關へ、一方は台所と女中部屋へ通じてゐる。

縁側の硝子戸越しに庭が見える。

外は雨がしと〳〵と降つてゐる。初春の眞晝。

主の老人は片手に「棋道」か何かを持ちながら、居間でひとり石を列べてゐる。

老人。　え、黑廿三……黑廿三と。……あ、これか。そこで白がこつちへ延びると。なるほどな。（ふと、聽き耳立して）どなたです。——何でもなかつたのか。馬鹿に遲いな。どうしたのかしら。（煙草を一ぷくする）……それからと、黑廿五と押す。廿六とつぐ。黑廿七と。……はゝあ、こつちへ行くのか。なるほど、かうこすむところが手なのだな。廿五と押して、つがして、こすむ。さう

か。

婆やがはいつて來る。

婆や。　たゞ今。

老人。　あ、婆やか。ご苦勞だつた。外は路がひどいだらう。

婆や。　はい。この邊はそんなでもございませんが、與瀬の前あたりは自動車が通るものでございますから。

老人。　おまへあつちの方まで行つたのかい。

婆や。　はい。橋本からはそんなでもございませんから、ちよつと廻つてまゐりました。あすこの小倉草紙はお孃樣がお好きでいらつしやいますから。

老人。　さうか。それは大變だつたな。

婆や。　もうお見えになりさうなものでございますね。

老人。　さうだな。もう來なくつてはならない時分なんだが。

婆や。　何か急にご用でもお出來になつたのでせうか。

老人。　それなら何とかいつて來るだらう。

婆や。　さやうでございますね。ですが旦那樣、もう十二時過ぎでございますよ。

老人。　(時計を見ながら)うム、廿分過ぎだな。ほんたうにどうしたのかな。

婆や。　わたくし橋本には「大急ぎで」つて申してまゐりましたが、では、ちよつとお向ふの電話を拜借して、少し待つて貰ふやうに申しませうか。

老人。　いや、鰻は手間が取れるから、その位にいつておいて丁度いゝよ。その内にはやつて來るだらう。
婆や。　さやうでございますか。
老人。　何しろ雨が降ると女は出入りが厄介だから、どうしたつて遲れがちだよ。
婆や。　それはさうでございますね。ほんたうにあいにくのお天氣でございます。ですがこの頃お孃様は少しお足が遠のきがちでございますね。
老人。　はゝゝ。婆やまでがやいてゐるのか。
婆や。　いゝえ、さういふわけではございませんが………
老人。　嫁にやればさうこつちの自由にはならないさ。まあ、里を忘れるくらいの方が安泰でいゝ。
婆や。　ほんとうにご夫婦仲がおよろしうございますから………
老人。　だがな、婆や。たまには娘が泣き込んで來るやうなことがあつてもいゝな。いろ〳〵なざんぞを聞いた上で、なだめて歸してやるといふやうな一場も時々は欲しいと思ふよ。
婆や。　さうでございますとも。たまにはそのくらいの事がございませんと、あんまりお寂し過ぎます。
老人。　夫婦仲がよくつて親父がすつかり忘れられてしまう。親父としちやそれが何よりの安心ともいへるが、少しもの足らない氣持がするよ。
婆や。　ごもつともでございます。
老人。　しかし忘れられるといふことも惡くないな。するだけのことをしてしまつて、世間からも子供たちからもぼうと煙のやうに忘れられて行くのもいゝ氣持かもしれない。わしはさういふのも嫌ひぢやないよ。

婆や。　あの、ちよつと電話をおかけして見ませうか。

老人。　淑子のところへかい。いや、そんなことはしない方がいゝだらう。催促するやうに聞えてもいけないから。

婆や。　あ、さやうでございますね。

老人。　年をとるとこんな愚痴をいつてゐるのがまた一つの樂しみさ。毎日同じことを繰返してゐるのだが、いはゞ子供がキヤラメルをしやぶつてゐるやうなもので、かうしてゐれば口寂しくないのだな。はゝゝゝ。こんなことをいつてる間に、今に淑子がくしやみをしながらひよつこりやつて來るよ。

婆や。　本當に早くおいでになるとよろしうございますね。しかし旦那さま。おなかゞおすきになりはいたしませんか。

老人。　うむ、實は少し空いたが、もう大したこともあるまいから待つてゐよう。

婆や。　では、これをちよつと召し上りましては。(今買つて來たものを出す)

老人。　ちや、わしが毒見をしようか。——うむ、これはなか〱いゝね。

婆や。　お孃樣がそれはお好きなのでございます。

老人。　婆やも一つどうだ。

婆や。　有難う存じます。

　　婆やちよつと立ちたらうとする。

老人。　何だい。

婆や。　いゝえ、何でもございませんでした。

老人。待つてゐるつて氣がゝりなものさな。
婆や。あちらでもお急ぎになつてはいらつしやるんでせうが………
老人。だが、何だな。娘を嫁にやるぐらゐつまらないことはないな。はゝゝ。また年寄のキャラメルになつてしまつたが………
婆や。いゝえ、ほんたうでございますとも。折角お綺麗に〱とお育てになつて、やつとお綺麗になつたと思ふと、もう人樣のところにおやりになつてしまうのですから。
老人。わしは家内に早く先立たれたから、あの子ぢや人一倍苦勞したよ。いつか音樂會に連れて行つたら、淑子の着物が流行遲れでな「やつぱり女親がないと。」と陰口をきかれて、わしはたまらないおもひをしたことがある。それからつてものはわしは淑子の身なりぢやどのくらゐ氣を配つたかしれない。恐くわしぐらゐ呉服屋の陳列窓を覗き込んで歩いた男はさうはあるまいな。
婆や。でも、お片づきになつた先が結構なお宅で、ご安心でございます。
老人。まあ、この分なら安心だが、嫁にやつた當座はわしは心配で眠れなかつたよ。今だからいふがな、婆や。わしは婚禮の晩には泣いてしまつたよ。式を濟ませて歸つて來ると、今まで簞笥や長持がいつぱい置いてあつた部屋にはもう何にもないんだらう。さうして疊の目にくつきり簞笥の跡だけが殘つてゐるのを見たら、急に胸がいつぱいになつてしまつて……わしはしばらくそのがらあんとした部屋に坐つてゐたが、涙が無性に出て仕方がなかつたよ。何だかひとり取り殘されたやうな氣がしてな。でもこの頃はもうよくなつたが……
婆や。………

老人。　人間つて勝手なものさ。長男に嫁を取つたときは別に何とも思はなかつたくせに、自分の娘を片づけると每日こんなことばかりいつてゐるのだからな。

臺所の方で「お待遠さま。」といふ聲がする。

婆や。　おや、おうなが來たのかしら。(立つて臺所の方に行く)今日は大へん早いのね。

出前持の聲。　へえ、お急きで持つて參りました。

婆や。　そんなに急がなくつてもよかつたのに。

出前持の聲。　さやうでございましたか。――どうも每度有難う存じます。左樣なら。

婆や。　(出て來る)旦那さま。どういたしませう。おうなが參つたのでございますけれど……

老人。　さうだね。

婆や。　冷めるといけませんが、困りましたね。

老人。　ひとりで食べてもうまくないしな。

婆や。　ほんたうにどうなすつたんでございませう。まさかお忘れになつたわけではございませんでせうね。

老人。　そんなことはないとも。たしかに今日來るといつて來たのだから。――ちよつとその亂箱にはいつてゐる手紙を取つてご覽。

婆や。　これでございますか。

老人。　さう〳〵。(手紙を廣げて讀んで見る)十二日といふんだから今日に違ひないだらう。

婆や。　はい。今日は十二日でございます。

老人。『……十二日には晝少し前に上ります。久々にて父上樣とお碁をご一しよにいたゞけることが、何より樂しみでございます。……』かう書いてあるんだからな。

婆や。それならもうたしかでございますね。

老人。途中に間違ひがあつたわけではあるまいな。

婆や。そんなことがおありになるとは思ひませんが、わたくしちよつとそこらまで見に行つてまゐりませう。

老人。さうだね。停留所のあたりまでちよつと行つて見て貰はうか。

婆や。はい。畏りました。

婆や臺所口から出掛けて行く。老人は碁盤を片づける。それから殊更氣を落ちつけやうとつとめるが落ちつかないでもぞ〳〵してゐる。」

間。

玄關で「ご免下さい」といふ女の聲がする。

老人。どなたですか。（さういひながら玄關に出て行く）

女中。あの、小山から上りましたのですが。

老人。あ、今電話をかけやうかと思つてゐたのだ。

女中。それはどうも。あの若奥樣が少しお加減がお惡いので。實はあがるつもりでお支度まで遊したのでございますが……

老人。淑子が病氣。

女中。　はい。多分お風邪なんだらうと存じますが、少しお熱がございますので、大事をおとりになりまして。併しほんのお風邪でございますから、どうかご心配遊ばしませんやうにと、若奥様からくれ〴〵もおことずけでございます。

老人。　あ、さうですか。

女中。　こちら様でさぞお待ち遊ばしていらつしやるだらうから、早速電報をなんて申しましたのですが、電報では却てご心配をおかけすると存じましたので、わたくしが上りましたやうなわけでございます。

老人。　それはどうもご苦勞さま。雨の降るところを。

女中。　いゝえ、どういたしまして。

老人。　ちよつと待つて下さい。

女中。　はい。

老人。　（茶の間で散財袋に小金を入れてからまた玄關に行き）それぢやわたしはすぐ後から見舞に行くとさういつて下さい。これはほんの心ばかりだが。

女中。　どうも恐れ入ります。——あの、お路の悪いところをご隠居様にお運びをいただきませんでも、ご容態はまた知らせに上りますし、それに別段お氣遣のことはございませんと存じますから……

老人。　いや、わしは用のない體だし、病氣とあればまさかうつちやつてもおけないから。

女中。　さやうでございますか。

老人。　兎に角あとからすぐ出掛けるとさういつて下さい。

女中。　畏りました。では、ご免下さい。

　　　女中去る。
　　老人が茶の間へ戻つて來ると、婆やが間もなく臺所口から歸つて來る。

婆や。　あの、どうもお見えになりませんが。
老人。　いや、今使が來たよ。病氣なのだとさ。
婆や。　まあ。
老人。　わしはこれからすぐに行つて來るからな。
婆や。　でも旦那さま。お晝を。おいなが參つてをりますから。
老人。　あゝさうだつたな。ぢやそれをやつてからにしよう。一つは婆やがお上り。
婆や。　有難う存じます。

二、

數日後の夜中。
前と同じ場面。老人は居間に寢てゐる。
婆やは向ふの女中部屋に寢てゐるところ。
老人の枕もとにぼんぼりがおいてある。併し仕込んである電球の燭光が弱いから部屋の中は至つて薄暗い。
突然、表で

「電報、電報。」

と、いふ聲がする。つゞいて

「——さん、電報」

といふ聲と共に烈しく門を叩く音がする。それに交つて番犬の吠える聲。

老人。（目を覺まして）うちかしら。

「電報、電報」

老人。うちらしい。——婆やく。

婆や。はい

老人。電報らしいよ。

婆や。はい？

老人。電報だよ。

婆や。あ、叩いてをりますね。——はいはい。今明けますよ。

婆やはもそく起き出して電燈をひねる。向ふの部屋が明るくなる。それから玄關の方に行つて戸を明けたが、すぐまたぴしやりと締めて返る。（但し婆やの行動はすべて向ふの部屋だけで、こちらには姿を見せない）

老人。どこから來たのだい。

婆や。　いゝえ、うちぢやございません。

老人。　さうかい。

婆や。　お隣りでございます。

老人。　さうだつたのか。そりや氣の毒したな。折角寢ついたところを。

婆や。　いゝえ、こゝはお隣りが近うございますから、よく間違ひます。

老人。　まだ叩いてゐるね。お隣りぢや起きないと見えるね。

婆や。　お若い人たちばかりですから。あ、やつと起きたやうです。

老人。　お年寄たちはお留守なのかい。

婆や。　はい。何でもご病氣で先月から葉山へ行つておいでのやうです。

老人。　さうかい。——今夜は大分風が強いね。

婆や。　さやうでございます。どうも春先は……

老人。　婆や、はやくおやすみ。風邪でもひくといけないよ。

婆や。　はい。おやすみなさいまし。(明りを消して寢る)

長い間。

風の音。をり／＼犬の遠吠が聞える。

老人は床の中に起きつ返つて大きなあくびを一つする。それから枕もとの煙草盆を引き寄せてぷかり／＼煙草を吸ふ。やがてまた枕をつけて寢る。

長い間。

老人は寝返りを打つたりして床の中でもごくくしてゐたが、たうとう起き出す。そして茶の間の戸棚を明けて何かごとくく探し物をする。

婆や。(そのもの音に目を覚まして)旦那さまでございますか。

老人。あ、わしだよ。カルモチンは何處へしまつてあつたかな。

婆や。あ、あれはたしかもうございません。

老人。さうかい。なくなつたかい。

婆や。ついあとを買つておきませんで。あれはなるたけ差上げないやうにつて、お嬢様から仰しやられてをりますものですから。

老人。淑子がそんなことをいつたのかい。なあに、あの薬は少しも害はありやしないんだよ

婆や。おやすみになれないのでございますか。

老人。うム、さつきの電報ですつかり目を覺まされてしまつた。――葡萄酒があつた筈だね。

婆や。はい。そこのお戸棚にはいつてをります。

老人。こゝかい。

婆や。左の方でございます。

老人。さうか。――いゝよ、起きなくつても。あ、あつたくく。

婆や。もういくらもございませんかもしれません。口をつけない方なら向ふにございますが。

老人。いや、これでいゝ。——婆や、起ることはないよ。眠藥の代りに二三杯飲んだら、わしもすぐに寢るから。
婆や。さやうでございますか。ぢやご免を被りまして。
老人。お隣ぢや旦那さまが惡いのかい。
婆や。はい。そのやうでございます。
老人。夜中電報をよこすやうぢや急に容態でも變つたんぢやないかね。
婆や。さうかもしれません。
老人。わしはまた淑子のところからかと思つてびつくりしたよ。
婆や。わたくしもさうかと思ひました。まあさうでなくつて何よりでございます。
老人。昨日行つた工合ぢや急變はないと思ふが、何しろ寢ついてからもう一週間にもなるからね。
婆や。さやうでございますね
老人。醫者も風邪だといふから、さうかとは思ふが、どうも風邪にしちや少し長過ぎるね。
婆や。わたくしもさう思つてをるんでございます
老人。第一、あゝ熱が下らないのはをかしい。七度五分ぐらゐの熱だからさう高熱といふわけぢやないが、幾日たつても下らないのはどうも變だ。それどうしてあゝ食慾がないのかな。あゝ何も食べないでゐると體が衰弱してしまう。わしはそれが心配だよ。
婆や。さやうでございますね。
老人。一體あのうちが風邪だぐらゐに思つてゐるのがよくない。どうも手當が行き屆いてゐないのでいら〳〵する位

だよ。本來からいふとこつちへ引き取つて療養をさせるのがいゝのだが、今動かすのもどうかと思ふからな。少しよくなつたら是非さうしなくつてはいけない。さうしなかつたらあの衰弱はなか〳〵恢復しやしない。

婆や。…………

老人。何のかのいつても、他家へ出てはどうしたつて氣がねがあるからな。それに淑子はまだ行つて一年にもならないんだから、さう思ふやうにはいかないし、向ふのお姑さんの手前もあるからな。——さうだよ、あのお姑さんがもう少し氣がついてくれるといゝんだが、どうも舊弊でな。殊に圭介と來た日には、お坊ちやんでさつぱりおもひやりがないんだから（くしやみをする）

婆や。旦那さま、お風邪を召すといけませんよ。

老人。なあに、どてらを着てゐるから大丈夫だ。わしまで風邪をひいてしまつちや大變だ。

婆や。春になりましても、夜分はまだ寒さが强うございますから。

老人。うム、いま寢るよ。——もう少しでこれがおしまひになるから、明けてしまはうと思つてな。あゝ、大分いゝ氣持になつて來た。ときに、婆や。

婆や。はい。

老人。大井先生に行つて貰つちやどうだらう。

婆や。大井先生でございますか。

老人。うム。どうも向ふの醫者だけぢや賴りないのだ。病氣ばかりは今まで見つけてゐた醫者でないと分らないところがあるからな。そこへ行くと大井先生なら子供の時から見てゐるんだから確かなものだ。

婆や。　さやうでございますね。

老人。　併しこちらから醫者をやつちや出過ぎてゐるかな。醫者が呼べない家ぢやないのに、こちらから醫者を差向けたとあつては面あてのやうに聞えるかな。淑子がそのために居にくいやうだと困るがどうしたものだらう。實はこの間淑子にこの話をしたんだが、淑子はどうかそんなことはしないでくれといふのだ。若し惡いやうならこちらでどうにでもして貰ふから、お父さんからは何にもしないでくれ。里からといふと當りさはりがあつていけない。と、かういふのだ。あの子のいふのが尤だと思ふし、たゞ何事もあの子のいふなりにするのが一番いゝと思つたから、わしはそのまゝ歸つて來たが、併しどうもこのまゝでは心配でならないんだ。手遲れになつてからでは間に合はないからな。あれの母なんかも、風邪だ／＼といつてゐるうちに、たうたう肺炎になつてしまつて、ついあんなことになつてしまつたんだが、そんなことになつては大變だからな。

婆や。　さやうでございますとも。

老人。　わしはな、昨日見舞ひに行つた歸りに、よつぽど觀音樣へ行つておみくじを取つて見ようかとそんな考さへ起したよ。併しそんなことをして凶でも出た時は却て心配を増すやうなもんだと思つたから止めてしまつたが、實をいふとわしはどうしていゝか心配でたまらないんだ。

婆や。　そりやもうわたくしもお案じ申してをりますんですが……

老人。　なあ、婆や。

婆や。　はい。

老人。　醫者をやつちや惡いかな。

婆や。　さやうでございますね。

老人。　見舞にカステラの折を持つて行くくらゐなら、醫者を見舞に出したつて何も悪いことはないぢやないか。大げさといへば大げさかもしれないが、理屈からいや、これが本當のお見舞だ。なあ、さうぢやないか。淑子に相談なんかしてゐると、氣がねばかりしてゐて手遲れになつてしまうから、いつそわしの獨斷でやつてしまつた方がよくないかな。若し何處からか文句が出たら「わたくしが悪いのでございます、わたくしが年を取つてをりますものですから、つい娘が可哀いゝ餘り餘計なことをいたしました。はい、申譯がございません。どうか御勘辨を。」と、さういひさへすりや濟むんぢやないか。さうだ。さうしよう。それが一番だ。たゞうつつらく考へてゐたつて何にもなりやしない。明日は早速さういふことにしよう。いゝかい、婆や。明日は大井先生のところへ行つて、往診をお願ひして來るんだよ。

婆や。　はい。

老人。　あゝ、これで肩の凝りが解けたやうな氣がした。これでいゝ。これでいゝ。丁度薄荷酒の瓶も明いた。さ、いよく寢るとしよう。婆や、今夜はとんだお相伴をしてしまつたね。

婆や。　いゝえ。

老人。　あゝ、いゝ氣持に廻つた。これならぐつすり寢られるだらう。では、婆やもおやすみ。

婆や。　はい。おやすみなさいまし。

老人。　おやすみ。

茶の間の明りを消して床にはいる。

しばらくして時計が眠むさうにチーンと一つ鳴る。

三

その翌日。

前と同じ場面。うららかな光が、庭口から硝子戸越しに緣側にいつぱい差し込んでゐる。

主と婆やが茶の間で話をしてゐる。

老人。さうかい。それはご苦勞だつた。それぢや午前の診察が濟んだら、すぐに行つて下さるのだね。

婆や。はい、眞つ先に往診して下さるさうでございます。

老人。おや、もう二時間もしたら自動車をいつておくれ。わしがお迎ひに上ることはお話してあるのだらうな。

婆や。はい。よく申上げてございます。

老人。ではこつちの用意はそれでよしと。あとは先生に診ていたゞくばかりだ。大井先生に見ていたゞけば實際安心だからな。

玄關に「速達」といふ聲が聞える。婆やが急いで取りに行く。

老人。速達？何處から來たんだい。

婆や。お嬢さまからのやうでございます

老人。なに、淑子から。どれ〳〵

急いで封を切つて讀む。併しすぐに卷きおさめる。

老人。何をいつてゐるんだか。

婆や。お悪いんでございますか。

老人。いゝや、直つたといつて來たのだ。

婆や。それは結構でございましたこと。

老人。婆やまでそんなことをいつてゐるのかい。馬鹿〳〵しい。あんなに衰弱してゐるものが、そんなに急にけろつとする筈はないぢやないか。嬉しがらせなんだよ。わしを心配させまいとしてこんなことをいつて來るんだよ。心配させまいとするのはいゝが、こんな餘計なことをいつて來られると、こつちは却て氣がもめてかなはない。

婆や。……

老人。どうも女なんて氣がねなんかばかりしてゐて仕方がないものだ。幾日寢てゐようと病氣なら止むを得ないぢやないか。それをもう一週間も寢てゐちや義理が悪いなんて、下らない考へを起して、起つ返つたりなんかするから、餘計重くしてしまうのだ。しかし他家へ行くとさう〳〵寢てはゐられないからな。――兎に角大井先生に早く見ていたゞいて、場合によつてはこつちへ引き取らなくては……

婆や。併し旦那さま。そんなにお悪いんならこんなお手紙はおよこしにならないと思ひますが。

老人。ことによつたら何かな。わしが大井先生〳〵といつてゐたから、先生でもよこされると困ると思つて、先廻りをしてこんな手紙を書いたのかな。併し昨夜きめたことをいくら淑子だつて知る筈はあるまいし……

婆や。このお手紙もお嬢さまのお手でございますから、わたくしはきつとおよろしいんだと存じますが。

老人。　さうかな。それなら何よりだが。

婆や。　およろしいんだとすると、大井先生に行つていたゞくことは如何でございませう。

老人。　いや、病氣にも中やすみといふことがある。中途で少し位よくなつたと思つて安心すると、とんだ目に逢ふよ。ぶり返しが來た日にや大變だからな。よしいくらかよくなつてゐるにしても見ていたゞいておく方が安心だ。それにお願ひした以上は見ていたゞくのが法だからな。

婆や。　それはさうでございますね

老人。　あゝいふ經驗の深い老先生の診斷には間違ひがないからな。内科にかけてはとても駈け出しの博士などの及ぶところではない。わしはあの先生の診察を聽かぬうちはどうも安心が出來ないのだ。

婆や。　でも、旦那さま、ちよつと電話をおかけしてご様子をお聞きになりましては。

老人。　うム、様子だけは聞いてもいゝね。おや婆や、お向ふに行つて電話を借りて聞いてくれないか。

婆や。　畏りました。

老人。　いや、待つてくれ。わしがかけよう。その方がいゝ。

婆や。　さやうでございますか。

老人。　ちよつと下駄を出して呉れないか。

婆や。　はい。

　　老人玄關から出て行く。

間。

しばらくして老人が歸つて來る。

婆や。　如何でございました。

老人。　やつぱりさうだつたよ。

婆や。　お直りになつたのでございますか。それはまあ、およろしうございました。おめでたう存じます。

老人。　電話をかけるとな。この間使に來た女中が出たのさ。容體を聞くと、もう起きてゐるといふのだ。それなら電話口に出られるかと訊いたら「はい、お出になれるでせう。たゞ今申上げますから少々お待ち下さい。」さういつて女中が引つ込んだと思ふと、いきなり「お父さま」といふ言葉が耳もとでりいんと響いたので、わしは思はず居ずまひを直したよ。何のとはない。戀人の前に出た青年といふ恰好さ。はゝゝゝ。それから「直つたといふが、本當か。」と訊ねると「本當です。この通りぴんぴんしてゐる」といふんだ。實際聲だけでもこの間とは打つて變つてゐるのだ。

婆や。　まあ、そんなにおよろしくおなりになつたのですか。

老人。　「熱は下つたのかい。」と訊くと「え、もうありません。」「しかし無理をするといけないよ。」「いゝえ、もう大丈夫です。」かういふ返事なのだ。しかし、わしは「大非先生をお願ひしたから診察していたゞき。」と話したところ、いやもうひどく怒られてしまつたよ。

婆や。　ほゝゝゝ。

老人。　でも、わしにはそんなに早く直つたわけが、どうしても呑み込めないから、それを訊ねると、笑つてゐて答へないのさ。人が眞面目に訊いてゐるのに、笑つてゐるつて法はないから、わしは少しいらいらして「一體何處が惡かつたのだ。」と訊き返すとな。「何處つて大抵お分りでせう。」つていふのさ。分らないから訊いてゐるのに、お分りで

せうといはれたつて分る筈はありやしない。もう一度訊き返したら「だつて電話ぢやいへませんよ」といふんだ。わしにはなほ分らなくなつた。いへない病氣、何病だらう。そんな病氣はどうしたつて見當がつきはしない「おい、小さい聲でいつてくれ。お父さんには分らない。お父さんは心配なんだ。」さういつたら、何か答へたらしいんだが、話が遠くつて聞えないのだ。「もつと大きな聲でいつてくれ。」わしはもう一遍催促するとな「まあ、いやなお父さま。」とやられてしまつたよ。

婆や。　さやうでございますか。わたくしもどうもさうだと思つて居りました。

老人。　婆やには前から分つてゐたのかい。

婆や。　いゝえ、分つてゐたわけぢやございませんが。

老人。　それなら早くさういへばいゝのに。

婆や。　でもこれはお醫者樣でも、ご本人でもなかなかはつきりしたことは分りませんものなんですから。旦那さま。ほんとうにおめでたうございます。

老人。　さういはれると、そんな氣もするが、何だかわしはぼんやりしてしまつたよ。

婆や。　それはさうでございませうとも。あんまりご心配をなさいましたから。

老人。　何だか狐につままれたやうな氣持ちだよ。あたり前といやあ、あたりまへだが、こつちぢや子供子供と思つてゐるうちに、もうさうなんだからね。

婆や、　さうしますと、あの、大井先生の方は。

老人。　さうさう。その方を早く斷らなくつちや。

婆や。　それぢやすぐに行つて参りませう。

老人。　さうして貰はう。何のこつた。頼みに行つたり、斷りにいつたり、老人のやることはいつもこんなことばかりだ。

婆や。　でも、お醫者様ばかりはお斷はりするやうなら結構でございます。

老人。　何れわしがお伺ひいたします。とんだお騒せをいたしまして、と、よくいつておくれよ。

婆や。　畏りました。

老人。　ぢや、急いでな。

婆や。　はい。

婆や急いで出掛ける。

老人。　何だか急にぽか〱して來たな。

縁側の硝子戸を一二枚ガラ〱と開けて風を入れる。

老人。　あゝ、咽喉が乾いた。一つお茶でも入れよう。

長火鉢のわきに坐つて茶を入れる。

梅の花が一ひら二ひら風に送られて坐敷の中に飛んで來る。

幕

編輯だより

◇地震の惨を思はせる三周忌に當る九月だ。バラックは私達に深刻な夏を味はせた。しかし私は例年通り毎日十七時間勞働で推通した。そして別に疲勞もなかつた。だが土用晴れ前後の雨は私達には禁物であつた。書齋は實れず、家に歸れば家鷄は卵は生さず。

◇普選は議會を通過したのである。本來ならは即時解散を斷行して民衆の意のある所を問ふのが政治の要諦ではないか、立憲の本義、本筋ではないか、それを護憲共同の正敵であつた研究會と桁合し、遂に政本の陣營に向つて媚態を送るに至つては沙汰の限りだ。

◇今度の秋季號は久方振りにいい出來榮えであつた。高田、長谷川、森戸、土方、鈴木氏等一粒選りの權威者の勞作が肩を並べたのは偉觀であつた。それに創作欄も異常の充實振りである。

◇「木曾谷は行くべかりけり、ふかぶかと山肌くろくなりにけるかも」の名歌は茂吉が近詠だ。氏が三ケ月の苦心を物語る一百四十首の名歌が本誌に登載されたことを感謝す。

◇それから藤森君一ケ年に亘る勞働の果實である「狼へ」の二百枚が屆いた。その人を見るが如く、敬虔でなつかしくこの種の文獻はわが社會人を引きしめて行く。

◇歸朝してから一度も筆をとらなかつた阿部次郎氏が長篇「遊歐雜記」が本號より登載されたのは旱天に沛然たる雨を得たやうに深い喜ひを文壇に與へた。さすがにこの人のものだと云ふ親みと實力とがある。

◇ただ一つ、もう一つの大きな誇らしい收獲は露伴先生の七年以上の懸案であつた『蒲生氏郷』百五十枚の雄篇が載かれたことだ。

「限りあれば吹かねど花は散るものを、心みじかき春のやま風」でお馴染の文武の達人、蓋世の英雄兒氏鄕は戰國時代の生める最大級の人物であり、そして尤も趣味ある人物であつた。「太閤よ我は朝鮮を統べん」の雄志は空しく、彼は血を吐いて大業永へに水泡に歸した。彼と政宗との對陣を叙するあたり、毒を平氣でのんだあたりの英風は露伴の豪宕な運筆がピタリと合致するの感をいだかせる。

◇來る十一月號は『短篇創作集』とする、若く躍き出づる人々の作品のみを登載したい。

◇雜誌『自然科學』は十一月一日創刊號を發行する。その準備は全部整つた。

◇『失業痛苦の體驗記錄』の應募は八月卅一日締切。委細は八月號の本誌編輯だよりを參照

改造定價

冊數	定價	郵税
壹冊	八拾錢	貳錢
半ケ年	五圓六拾錢	郵税不要(増大號共)
壹ケ年	拾壹圓廿錢	郵税不要(増大號共)

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す

▲増大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す

▲外國よりの御註文は郵税實費を申受く

▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割増の事

▲御拂込は振替によるゝを最も便利とす

大正拾四年八月廿日印刷納本
大正拾四年九月一日發行

(價壹圓八十錢)

編輯兼發行兼印刷人　東京市芝區愛宕下町一ノ一　平田貫一郎

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二　秀英舍

發行所　東京芝區愛宕下一ノ一　改造社
振替東京八四〇二
電話高輪四九九三

現代代表自選歌集

現代日本の歌壇代表作六冊を本社より出版することになりました。此の六氏の歌壇に於ける地位は改めて茲に申すまでもない。大正歌壇を永久に記念すべき金字塔として各家の一讀をおすゝめします。古泉氏は處女歌集であり、木下氏は唯一の遺稿です。

齋藤茂吉著　朝の螢　定價壹圓五十錢　送料十八錢

島木赤彦著　十年　定價壹圓五十錢　送料十八錢

古泉千樫著　川のほとり　定價壹圓八十錢　送料十八錢

中村憲吉著　松の芽　定價壹圓八十錢　送料十八錢

釋　迢空著　海やまのあひだ　定價壹圓八十錢　送料十八錢

木下利玄著　立春　定價壹圓八十錢　送料十八錢

改造社

貴郎は

緊張を御感じになりませんか
若しお疲れでしたら
是非サナトーゲンを召上りなさい
すぐと心身がシャンとなさいます



眞正の强壯食料品
サナトーゲン

貴郎は青年の元氣と精力とを消磨することを防ぐことは出來ぬと御考へになりますか、決して否らず、いくらでも之を豫防することが出來ます。青年時の奮闘的生活に於て最も大切なるものは神經と頭腦とです。若しも貴郎がサナトーゲンを御常用になるならば、事業の成功を期すべき力と元氣とは絶えず貴郎の身邊に湧き出るでせう。
サナトーゲンは心身の氣力を確實に增進する唯一の强壯食料品です。世界中幾百萬の人々が此を常用してをるといふの事實、及びその人々の中には最も著名なる人士を含んでをるといふことは、サナトーゲンの强壯食料品としての效果が眞に卓越してをるといふことを雄辯に物語る一つの確かなる事實であります。
又、二萬四千人以上の醫家がサナトーゲンの效力を證明してをるといふの事實を御考へ下さい。毎日規則正しくサナトーゲンを召上りになる御方は驚く可きほど精神の力と肉體の健康とを增進します。つまり、サナトーゲンを御召上りになれば直ぐと無精な、疲れた心持を回復して活動的能力に無限の價値を賦與する元氣と忍耐力との源泉を創建いたします。
サア、今サナトーゲンを召上つて、活動場裡に御出懸けなさい。
サナトーゲンは眞に强壯食料品として稀有の逸品です。
サナトーゲンが貴郎の心身を健やかにすることは云ふまでもありませんが、又貴郎の御兒様や御家族の方々の御爲めにもなります。
サナトーゲンは健康且幸福なる家庭生活を建設するものであります。

●全國到る處の藥店に販賣してゐます

興味津々たる
小册子御要求
次第無代贈呈

サナトーゲン日本一手輸入元
神戸市海岸通一丁目英三番
ゼー、エル、タムソン株式會社
（神戸三宮郵便局私書函二十二號）

東京美術學校教授 矢代幸雄著

太陽を慕ふ者

（寫眞入十九葉）定價金壹圓五拾錢 送料十八錢

新刊

美術史の研究家として高名ある著者が、藝術のあくがれの國へ五年あまりを放浪し、そしておのが思ふまゝにレオナルドを訪ひ、悲しいガレリーの繪の前に淋しき旅の心を遣り、ショパンの彈き出す夏の夕のマヅルカには戀よりも凉しき美しき世界あるに驚喜した著者が、その五年間に亘るこれに似たる思出での數々美しき生活を故國の美術の友へかき送りし斷草の集積だ、何人も一讀して貰ひたい、趣味の文獻。優秀の一新人の藝術感覺は新綠よりも鮮麗だ。

板垣鷹穗著 美術史論

表現と背景

（菊判）定價參圓八拾錢 送料十八錢

發行所 東京市芝區愛宕下町 振替東京八四〇二番 改造社


生活の快樂化
榮養知識に眼覺めたる
御家庭では菓子を唯一の
保健榮養料とし常に活動
力の補給を行ひ生活を快
樂化してゐます。
森永の菓子
ミルクキャラメル
チョコレート各種
ドロップス
ウエーファース
ビスケット各種
森永製菓株式會社

賀川豊彦著

死線を越えて 下卷
壁の聲きく時

我家庭になくてはならぬ一夫一婦聖愛の小說

愛の感激であり、靈の生活であり、人格主義を體驗づけた本書が、此の不景氣の空に唯だ一書、飛ぶやうな賣行きを示すはそれは當然の事である。凡百の讀みものの總てが淫蕩を對象として書かれたるに拘らず、本書は實に一夫一婦家庭道德の純愛を基調とし、三角戀愛を排し、陰慘なる修羅場―貧民窟―誘惑多きゴロツキの群―にも感激の生活を徹底せしめた大男子の凱歌である。殊に彼が死を誓つて勞働爭議の陣頭に立ち、震災劈頭救護の最前線に立つた勇氣ある涙ぐましい血の記録を讀むものは、唯一人として首を上げ得ない。特に彼が唯物主義の爲に捧げた熱烈な唯神主義は讀者の心臟を强く鼓動させではおかない。眞に人格主義の勝利に共鳴する人々、純聖愛の一生に强く生きんとする若き人々の爲に本書を捧ぐる。

四六判上製　定價貳圓八拾錢　送料貳拾四錢

（上卷）死線を越えて　二百八十四版　定價參圓　送料貳拾貳錢

（中卷）太陽を射るもの　百七十六版　定價貳圓八拾錢　送料貳拾貳錢

發行所　東京市芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二番

改造社出版圖書

著者	書名	定價	送料
芥川龍之介著	沙羅の花	二・八〇	・二〇
菊池寛著	戀愛病患者	一・五〇	・一八
武者小路實篤著	第三の隱者の運命	一・九〇	・二〇
吉田絃二郎著	運命の秋	二・〇〇	・二〇
吉田絃二郎著	ダビデと子たち	一・八〇	・二〇
吉田絃二郎著	芭蕉	一・六〇	・一八
正宗白鳥著	戯曲 ある心の影	一・六〇	・一八
泉鏡花著	番町夜講	二・〇〇	・二〇
谷崎潤一郎著	戯曲 愛なき人々	二・〇〇	・二〇
谷崎潤一郎著	戯曲 愛すればこそ	一・六〇	・一八
谷崎潤一郎著	新選 谷崎潤一郎集	五・五〇	・三〇

著者	書名	定價	送料
植田壽藏著	藝術哲學	二・七〇	・二四
厨川白村著	苦悶の象徴	一・八〇	・二〇
倉田百三著	超克	二・二〇	・二〇
吉江喬松著	近代文明と藝術	二・〇〇	・二〇
柳澤健著	ジャン・ジョレス	一・五〇	・一八
阿部次郎著	學藝論鈔	二・二〇	・二〇
勝部謙造著	ディルタイの哲學	一・八〇	・二〇
朝永三十郎著	カントの平和論	一・五〇	・一八
松本亦太郎著	心理學講話	四・二〇	・二四
桑木嚴翼著	物理學と認識	一・五〇	・一八
河田嗣郎著	家族制度と婦人問題	二・〇〇	・二〇
宮本英雄著	婚姻の基調	一・五〇	・一八
佛人カイヨー著 龜井貫一郎譯	民衆の苦悶	一・三〇	・一六

厨川白村著

◇◇出版界の寵兒

苦悶の象徴

四六版天金
表紙羽二重
震災後唯
一の美本

定價壹圓八拾錢
送料二十錢

白村の眞の魂を求めんと欲する者、苦悶の藝術に人生の生命力を見出さんと欲するものは共に本書に就け。藝術の聖地に一日を陶醉せんと欲する者は本書に就け。不世出の名文、稀世の情熱、我之を本書に見る。人本書を讀んで人間にかゝる淸境あるかを始めて發見せん。藝術は人生の聖地、人我に聖地あるを知らざれば恥之より大なるはなし。恥を覺ゆる文化人は必ず本書に就く

近代の戀愛觀

百十九版

定價貳圓五拾錢
送料貳拾錢

人間の燃ゆるが如き情熱、感激、憤慨、欲望の白熱化した結晶とも見るべき戀愛には悠久永遠の生命力が輝くと論じ更に戀愛は人間の最高峯であり、人生の最高理想だと高く併置して因襲的結婚、非戀愛的生活に一大痛棒を喫はす。本書を味到し得る者のみが新戀愛の勝利者たり得る。

發行所 東京芝區愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二

THE KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF
POLITICS, LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS, ETC.
PRICE: EIGHTY SEN A COPY, TWELVE YEN A YEAR
OFFICE: KAIZOSHA, 1 ATAGOSHITAMACHI SHIBA, TOKIO.

大正八年三月廿一日第三種郵便物認可 大正十四年八月廿八日印刷納本 第七卷第九號 九月特大號 定價金壹圓八拾錢



株式會社秀英舍印刷